平成 27 年度 ESD 環境教育プログラム実証等事業に係る
ESD 環境教育プログラムの作成・展開業務

報　告　書

特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ

平成 28 年 3 月 4 日

目　次

1．平成 27 年度 ESD 環境教育プログラム実証等事業に係る
ESD 環境教育プログラムの作成・展開業務について 3
（1）本業務の目的
（2）実施体制
（3）期間
（4）実施スケジュール及び構成委員一覧表

2．中部 ESD 環境教育プログラム形成推進委員会の設置・開催 5
（1）設置の目的
（2）開催状況　①第１回形成推進委員会　②第２回形成推進委員会　③第３回形成推進委員会

3．プログラム作成のためのワーキンググループ設置・開催、地域プログラムの実証.....29
（1）富山県（2）石川県（3）福井県（4）長野県（5）岐阜県（6）愛知県（7）三重県

4．検証委員会の設置・開催..... 108
（1）検証委員会について
（2）検証のための調査について
（3）映像教材の検証について
（4）検証委員貴会議内容
（5）教員を対象にしたヒアリング
（6）地域の団体を対象にしたヒアリング
（7）インデプススタディ１．名張市立薦原小学校
（8）インデプススタディ２．金沢市立三馬小学校
（9）インデプススタディ３．富山市立古沢小学校
（10）インデプススタディ４．東浦町立緒川小学校
（11）「映像教材の効果と汎用性について
（12）「ESD アーカイブ映像教材」の再編集による汎用化

5．周知啓発のためのワークショップ等の実施..... 176
（1）周知啓発ワークショップの実施
（2）周知啓発冊子の作成

6．ESD に関する調査結果、全国事務局との連携..... 224
（1）ESD に関する調査結果　①各県ワーキングメンバー対象　②教員対象
（2）全国事務局との連携

7．業務の報告 242
（1）今年度事業の成果と課題
（2）３年間の本事業の成果と課題

[資料編]
資料１．周知啓発のためのワークショップ報告書「子どもが輝く授業をみんなで作るワークショップ」

1. 平成 27 年度 ESD 環境教育プログラム実証等事業に係る ESD 環境教育プログラムの作成・展開業務について

(1)本業務の目的

本業務の目的は、持続可能な地域づくりを担う人材育成の拡充であり、そのために、

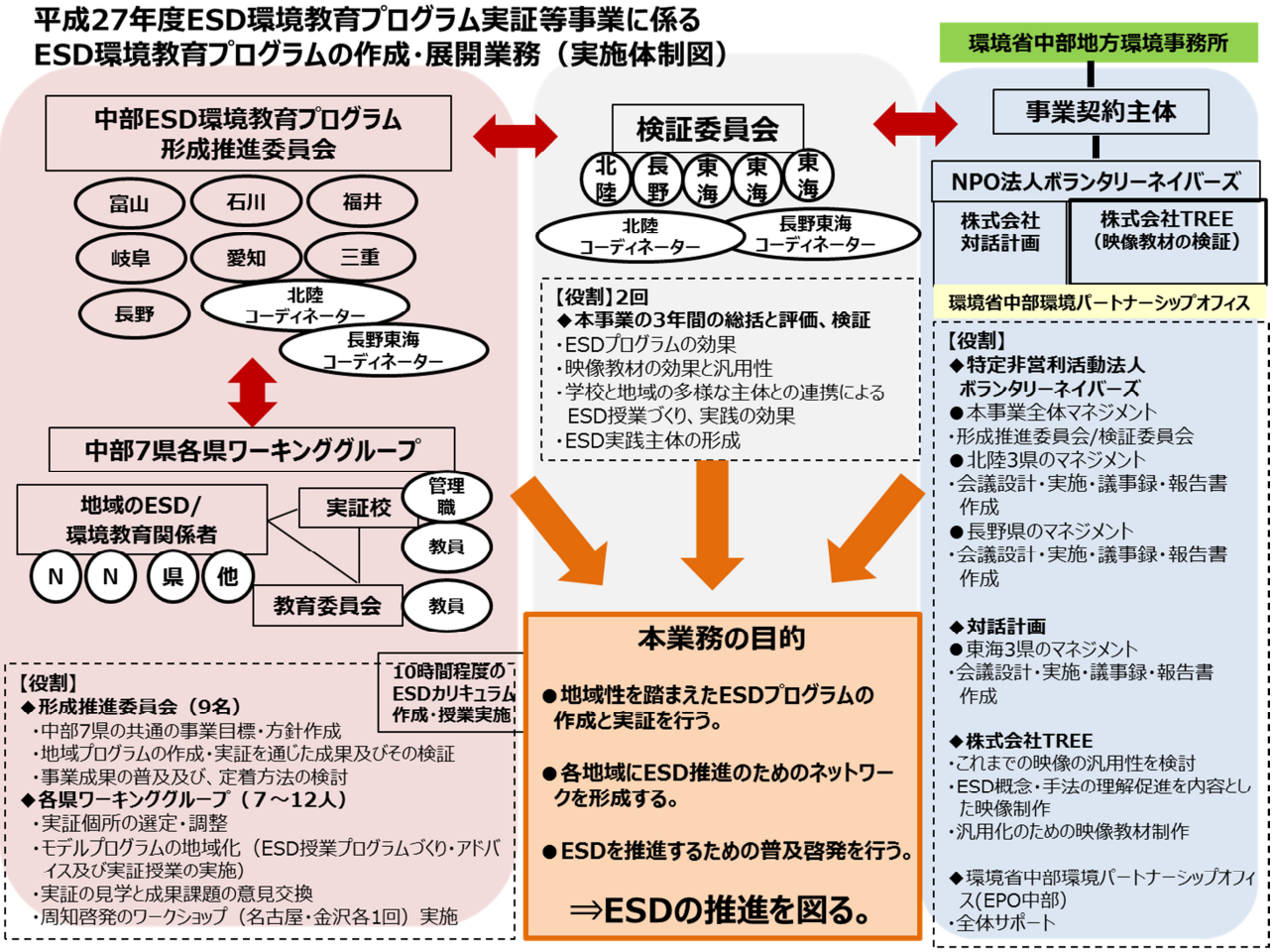
①昨年度及び一昨年度の事業結果も踏まえながら、環境省がとりまとめたモデル的な ESD プログラムを基に、管内各県において地域性を踏まえた小中学生向けの ESD プログラムを作成・実証する

②これらを通して各地域内で ESD 推進基盤たるネットワークを形成する

③ESD について広く国民に周知するために普及啓発イベント等を実施する

ことにより、ESD の推進を図った。

(2)実施体制



(3)期間

平成 27 年 5 月 28 日（木）～3 月 4 日(金)

平成27年度 ESD環境教育プログラム実証等事業に係るESD環境教育プログラムの作成・展開業務実施スケジュール

コーディネート	富山県	石川県	福井県	長野県	岐阜県	愛知県	三重県
形成推進委員	松本謙一氏	池端弘久氏	松田淑子氏	中澤朋代氏	巽徹氏	千頭聡氏	松岡守氏
	鈴木克徳氏（北陸コーディネーター）			新海洋子氏（長野東海コーディネーター）			
実施校	富山市立神通碧小学校	金沢市立十一屋小学校	福井大学教育地域科学部附属中学校	信州大学教育学部附属長野小学校	岐阜市立青山中学校	半田市立板山小学校	四日市市立中部中学校
事務局	富山コーディネーター	石川コーディネーター	福井コーディネーター	NPO法人ボランタリーネイバーズ	㈱対話計画	㈱対話計画	㈱対話計画
	谷村	森山	鈴木	高橋	葛山	葛山	葛山
ワーキンググループ メンバー（敬称略）	松本謙一（富山大学人間発達科学部） 舟杉克巳（富山市立神通碧小学校校長） 福田有児（神通碧小学校教頭） 堀泰洋（富山市立神通碧小学校教諭） 山本裕美子（富山市立神通碧小学校教諭） 髙木要志男（株式会社富山教弘） 本田恭子（環境教育ネットワークとやま エコひろば） 水上庄子（富山ユネスコ協会） 塚本賢（富山市生活環境文化部環境政策課） 富山市教育委員会 鈴木克徳（北陸コーディネーター）	池端弘久（金沢市教育委員会生涯学習部キゴ山少年自然の家） 鈴木克徳（中部ESD環境教育プログラム形成推進委員/金沢大学） 松本亮（十一屋小学校校長） 杉本倫代（金沢市立十一屋小学校教諭） 坂口信幸（金沢市立十一屋小学校教諭） 加藤隆弘（金沢大学教育実践支援センター） 奥泉元（石川県環境部） 今井和愛（いしかわ地球市民の会/いーち） 青海万里子（金沢エコライフくらぶ）	松田淑子（福井大学教育地域科学部） 細田和雄（福井大学教育地域科学部付属中学校副校長） 森田史生（福井大学教育地域科学部付属中学校研究主任） 奥村栄司郎（福井大学教育地域科学部付属中学校教諭） 杉山晋平（福井大学教育地域科学部） 吉川守秋（NPO法人エコプランふくい） 小竹三恵子（ふくいユネスコ協会） 前　知代（ESD推進コーディネーター） 齋藤洋（福井県安全環境部環境政策課環境政策課） 鈴木克徳（北陸ESDコーディネーター）	中澤朋代（松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科） 渡辺隆一（NPO法人みどりの市民） 畔上一康（信州大学教育学部附属長野小学校副校長） 河手正彦（信州大学教育学部附属長野小学校教頭） 宮島新（信州大学教育学部附属長野小学校2年2組教諭兼研究主任） 小川浩貴（信州大学教育学部附属長野小学校　3年2組教諭） 宮島和雄（(一社)長野県環境保全協会） 大場政哉（長野県環境部環境政策課） 村松浩幸（信州大学教育学部） 丸山寛典（㈱ミールケア） 新海洋子（長野東海コーディネーター）	巽徹（岐阜大学教育学部） 宮部寿（岐阜市立青山中学校教頭） 小川佳広（岐阜市立青山中学校教諭） 小林由紀子（NPO法人e-plus生涯学習研究所） 神谷由紀子（岐阜県環境生活部環境生活政策課） 平井花画（岐阜県ユネスコ協会） 新海洋子（長野東海コーディネーター）	千頭聡（日本福祉大学国際福祉開発学部） 榊原孝彦（半田市立板山小学校校長） 小嶌正嗣（半田市立板山小学校教頭） 岩見和貴（半田市立板山小学校ESDリーダー） 岩崎祐樹（半田市立板山小学校教諭） 鈴木優（半田市立板山小学校教諭） 大鹿聖公（愛知教育大学） 福永泰生（愛知県環境部） 寺西慶徳（名古屋市環境局環境企画課） 山崎喜一（愛知県教育委員会生涯学習課） 安達勝（名古屋ユネスコ協会） 新海洋子（(長野東海コーディネーター）	松岡守（三重大学教育学部） 今村新次（四日市市立中部中学校校長） 豊田一浩（四日市市立中部中学校教頭） 森直也（四日市市立中部中学校教諭） 矢口芳枝（四日市大学エネルギー環境教育研究会） 寺田卓二（環境教育ネクストステップ研究会） 内田郁夫（三重県環境生活部地球温暖化対策課） 伊藤知毅（四日市市教育委員会事務局指導課） 新海洋子（長野東海コーディネーター）
第1回 形成推進委員会	平成27年7月1日 15:00～18:00 環境省中部環境パートナーシップオフィス（以下EPO中部）						
第1回 検証委員会	平成27年7月10日 14:00～17:00 EPO中部						
55のプログラム	21：動物になって考えよう！せかい・動物かんきょう会議ワールドカフェ	10：公園、探検・発見・ほっとけん！・・・誰が？	13:みどりなライフ！ 33.森林プログラム 54.産業と環境の共生を考える	35：地球の仲間たちの声を聞こう！	17:環境ウォッチングで提案づくり 25：学校周辺ごみ調査隊～地域の未来のためにどんな大人になりたいか～	11：里山ビオトープから"いのちの輝き"伝えよう	54：産業と環境の共生を考える
第1回WG	8月3日(月)10:00～12:00	9月10日(木)16:00～18:00	10月29日(木)　14:00～16:00	9月2日(水)11:40～16：00	8月11日(火) 14:00～16：00	7月23日(木) 9:30～11:30	8月24(月)9：30～11：30
公開実証事業 時期	10月2日(金)14:00～14:45 45分×1コマ	11月2日(月)14:45～15:30 45分×1コマ	12月10日(木)13：55～14:45 50分×1コマ	12月11日（金） 2年10:50～11:35 45分×1コマ 3年11:40～12:25 45分×1コマ	12月21日(月)13:55～15:45 50分×2コマ	10月13日(火) 13:55～15:35 45分×2コマ	10月20日(火) 13:10～14:50 50分×2コマ
内容	対象：小学6年生　12名 （連携　中学1年生　12名） プログラム：「つながる　広がる　私と世界」	対象：5年1組 児童32名 プログラム：平栗を調べよう～十一屋校区「平栗」の未来はどうなっていくのか～	対象：1年生1クラス　40名 プログラム：「発信！附中グリーンプロジェクト」	対象：小学2年2組 児童39名 プログラム：動物とのくらしの中で、思いを込めて対象にかかわり、その命に、生きることの意味を探りながらひとり立ちしていくわたし 3年2組　児童37名 プログラム：こころと優希とのくらしの中で、もの・ひと・ことに出合い、友と共に生きる幸せや喜びを感じながら、自らの足で立っていくわたし	対象：中学1年生4クラス プログラム：「環境」	対象：5年生2クラス プログラム：「守ろう！つなごう！板山の命」	対象：中学3年生3組　生徒35名 プログラム：「美しく生きる」～ESD環境教育～
周知啓発事業 時期	【金沢開催】 平成27年12月26日（土） 11:00～16:30　場所：石川県女性センター　大会議室						
周知啓発事業 時期	【名古屋開催】 平成28年2月18日（木） 11:00～16:30　場所：愛知県産業労働センターウインクあいち						
第2回WG	10月2日（金）16:30～18:30	11月2日(月)16:00～17:30	12月10日(木) 15：00～17：00	12月11日(金) 13:45～16:00	12月21日(月)16:00～17：30	10月13日(火) 15:50～17:50	10月20日(火) 15:00～17:00
第2回 形成推進委員会	平成27年12月 3日(木) 15:00～18:00 EPO中部						
第2回 検証委員会	平成27年12月17日(木) 14:00～17:00 EPO中部						
第3回 形成推進委員会	平成28年 2月 9日(木) 14:00～17:00 EPO中部						

２．中部 ESD 環境教育プログラム形成推進委員会

（1）設置の目的

各県の ESD 及び環境教育の専門家（有識者）で構成する「中部 ESD 環境教育プログラム形成推進委員会」(以下、形成推進委員会という)を設置し、

①中部 7 県の共通の事業目標・方針の作成

②各県の事業進捗と課題の共有

③ESD 環境教育プログラムの作成・実証を通じた成果及びその検証

④検証委員会での協議の成果の共有

⑤年間の事業成果の普及及び ESD 取組が地域に定着するための方策の検討と提案

を行い、本事業における中部７県の共通の方針や目標、評価指標を検討し、各県でのESD授業づくり、本事業の進捗状況を共有しつつ、本事業のより良い成果を生み出すための議論を交わした。また、以下の８つの検討（検証）項目に基づき、ESD 授業づくり及び実践の質と枠組みづくりの検討及び検証を行った。

【８つの検討(検証)項目】

●本事業を実施したことで児童・生徒はどう変わったか

●本事業を実施したことで教員はどう変わったか

●本事業を実施したことで学校はどう変わったか

●本事業を実施したことで地域はどう変わったか

●1 年目、2 年目に実施した実証校のその後の実践

●制作した映像教材の活用方法

●本事業の成果と課題、及び総括

●地域で継続するための条件と環境づくり

[形成推進委員会委員リスト]計９名　※敬称略

地域	形成推進委員
富山県	松本　謙一（富山大学人間発達科学部教授）
石川県	池端　弘久（金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家館長）
福井県	松田　淑子（福井大学教育地域科学部教授）
長野県	中澤　朋代（松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科准教授）
岐阜県	巽　徹（岐阜大学教育学部教授）
愛知県	千頭　聡（日本福祉大学国際福祉開発学部教授）
三重県	松岡　守（三重大学教育学部教授）
北陸	鈴木　克徳（金沢大学環境保全センター長・教授）
長野/東海	新海　洋子（環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー）

(２)開催状況

３回にわたり開催し、委員の多岐にわたる専門性を十分に活かした協議、及び多角的な視点での ESD 環境教育プログラム及び地域の実施体制の検証を行った。開催概要は以下のとおり。

①第１回形成推進委員会

日　時：平成 27 年７月１日　15:00～18:00

場　所：環境省中部環境パートナーシップオフィス

出席者：形成推進委員７名　、地方環境事務所２名、受託団体３名

主な議題：１.本事業の説明

２.各県の実証について

３.協議事項　・本事業における共通コンセプト、方針、目標

・本事業３年間の検証について

【議事内容】

１.本事業の説明

形成推進委員会の役割について、①本事業実証の共通コンセプト、方針、目標について、②本事業３年間の検証方法について、③今年度の各県での ESD 環境教育プログラムづくりや実証に向けて、④３年間の成果・効果、その活用について意見を交わす会議体であることを共有した。

事務局体制について、今年度は、NPO 法人ボランタリーネイバーズが受託し、東海３県の事務局を株式会社対話計画、北陸３県については北陸各県の ESD コーディネーターとの連携によって行う。映像については、株式会社 TREE が担当することを説明した。

事業内容について、各県での ESD 環境教育プログラムの作成・実証を実施する。今年度は変更点が下記３点あることを説明した。

①映像教材を新たに作成しない（過去製作したもので活用できるものは使う）

②各県での報告会/発表会は行わない

③マスコミの取材は必須ではない

また、新たに ３ 年間の成果等をまとめる冊子の作成や、本事業の周知啓発のための事業、さらには過去製作した映像に汎用性をもたらすための再編集作業が、追加されていること、今年度は、最終年度のため、本事業の検証を重視していることを報告した。

映像の活用については、本事業を３年間実施し、ESD 環境教育を実証するプロモーション映像、映像教材の活用方法を伝えるための映像を製作することとした。これまで制作した映像教材を汎用性のある映像教材へと再編集する。これまで関わってこられた方のフィードバックや、形成推進委員、検証委員会の委員の意見に基づき制作する。検証委員会では映像の評価、本当に ESD の授業を進めるために有効な映像なのか、意見をいただきながら、映像の構成・編集などを進める。

今年度は３年間の成果効果を伝えあう「周知啓発ワークショップ」を名古屋市と金沢市の２か所で主に学校関係者対象、地域関係者対象の２回開催する。また、３年間の成果をまとめ、本事業の成果を伝えるための冊子を作成する。

２.各県の実証について

各県の現状を下記のとおり共有した。

富山県：1 年目から本事業のワーキンググループに委員として関わってきた富山市の神通碧小学校で実施。

石川県：金沢市の十一屋小学校で実施。育みたい力を意識するとともに、教員が地域の課題を話し合いながら進める。

福井県：福井大学附属中学校での実証を調整している。今動いているプログラムをブラッシュアップする形で進める。

長野県：信州大学教育学部附属長野小学校で実施する。

岐阜県：実証校については調整中である。

愛知県：ユネスコスクールとして学校全体で取り組んでいる半田市の板山小学校での実証を検討している。

三重県：四日市市立中部中学校で実施する。

３.協議事項

今年度の本事業の中部 7 県の共通コンセプト、方針、目標について意見交換をし、下記とした。

①教員が地域（課題/SD）を意識した授業をつくる。

②学びのプロセスを可視化する。

③教員の成長、変化を捉える（地域の大人の変化も捉える）。

④継続性を担保するためのしくみやありかたを見いだす。

3 年間事業の検証については、過去 2 年実施した事業の成果、効果を検証することを目的にフォロー調査を行うこととし、本事業が、①地域の ESD の取組促進、②地域の ESD 取組促進のための取組（支援）基盤の形成の 2 点を目的としていることを鑑み、調査においてその目的が達成されたかどうかを検証する。仮説をたてて、児童・生徒の変化、教員の変化、地域の変化など本事業を実施しての変容と成果(効果)について、教員、地域の人々にヒアリング、またいくつかの実証校を取り上げ、インデプススタディを行うこととした。

②第 2 回形成推進委員会

日　時：平成 27 年 12 月 3 日(木)　15:00～18:00

場　所：環境省中部環境パートナーシップオフィス

出席者：形成推進委員 8 名(代理 1 名)、地方環境事務所 3 名、受託団体 2 名

主な議題：１.各県の 3 年間の事業について

２.周知啓発事業について

３.プレゼンテーション「地域に学び、地域に育つ～ESD が大切にしていること」

【議事内容】

1. 各県の 3 年間の事業について

各県の 3 年間行われた事業内容を下記のとおり報告をし、共有した。その際に、「地域」との関わりが論点となり、地域住民がどの程度授業づくりに参加することができたのか、通常の授業ではどの程度参加しているの

かについて意見を交わした。学校と地域の連携といった際に、そこに住む地域の人々の授業づくりへの参加が課題となった。

【富山県】

1 年目は地域に働きかけることを中核にした学びを作るために映像をどう持ち込むかを中心に議論した。子ども達が地域に出かけ「いい地域だ」と思った場所の過去の映像を見せ、自分達がいいと思っていたところがどんどん悪くなっている、何か働きかけないといけないという気持ちを促すために映像を活用した。子ども達が地域に働きかける活動をするが上手くいかず、1 か月くらいやっても成果が出ずしんどいと分かった後に、地域のおじさんたちが頑張って作業をしている映像を見せる。子ども達に頑張ろうという気持ちを促すために地域に根差した映像を活用した。

2 年目は、ESD を持続可能なことを考える人材をつくることと捉え、環境に働きかける人を教材にした映像にしようと考えた。別の学校で同じような授業のパターンで生活科の授業を行い、その友達の姿を教材にした。授業は最初に「地域のステキをたくさん見つけよう」、次に「一番のステキを深めよう」、「ステキを発信しよう」という流れで行った。実証校で「ステキをたくさん見つけよう」がだいたい終わった段階で、映像でステキを深めている別の学校の友達の姿を見せた。働きかける対象や地域は全く違うが、追究している自分と映像に出てくる友達の追究を重ねて見られるように映像を活用した。自分よりも一皮むけた事をしている同学年の友達の姿を見せることで、自分たちが満足していた追究をもっと深めよう、自分達もこれだけできたのだから発表したい、と友達の姿が追究の質を変えていく、そのきっかけに映像を取り入れた。

3 年目は追究する人を教材として、映像は用いないが実際の授業で取り組んでいる子ども一人をまるごと授業の教材として出し、そこにいる仲間が頑張っていることをきっかけに自分の追究を見直す授業を実施した。3 年目の特徴は、小学 6 年生と中学 1 年生が合同で行ったことである。また、国際交流をテーマに、県の国際交流員をうまく活用する授業を考えた。交流員と直接交流する機会が 2 回だったため追究が十分になるかを心配したが、メールを上手く活用することで追究を深めた。人を教材にして、取り組んだ。

【石川県】

1 年目が中学 1 年生、2 年目が小学 5 年生、3 年目も小学 5 年生を対象に実証した。1 年目は子ども達の学びのスイッチ、意欲を湧き立たせるような授業をどのようにしてつくるのか、どうしたら子ども達が積極的に学習してくれるのか、を中心に話しながら行った。結果として、子ども達は、家庭を対象にした食に関するアンケート調査から保護者など様々な人の考え方に出会い、食文化について積極的に学ぶことができた。1 年目の映像は自然ではなく、校区で働いている人を中心に、子ども達が日頃出会えない人たちと出会うために活用した。

2 年目は三馬小学校の 5 年生を対象に、伏見川を題材にした授業を行った。子ども達は自然豊かな川で会ってほしいと考えつつも、過去の歴史から洪水がよく起こる川だったことを知り、二律背反の中でどんな川であってほしいか、葛藤する場面をつくった。子ども達は一生懸命勉強したことを発表し、いろいろな方からよく頑張ったと誉めてもらった。自己肯定感をキーワードにしてやってきた気がする。上流中流下流で活動する人を描いた映像に基づいて子ども達は勉強して、川を縦で見たり、横で見たり、時間軸で歴史をふりかえったりと、よく勉強した。実証した先生は今年も 5 年生を担当し、授業をブラッシュアップし、昨年度の映像を活用する計画で行っている。

3 年目は十一屋小学校の 5 年生を対象に実証している。昨年と今年の学校は地域的にいろいろな意味で難しさがある学校で、校長を中心にして先生方が奮闘している。総合的な学習で ESD を入れていくと学校がどのよう

になっていくかを先生方と話をしながら実施している。子どもの実態に応じて、どんな力をこの授業でつけたらいいのか、が大きな課題である。その学習の対象として校長が提案したのが、校区にある中山間地の「平栗」である。子ども達はそこが自分たちの校区だと初めて知り、そこに住んでいる人と話をしたり、行政担当者と話をし、中山間地の難しさを感じながらも未来について考えている。１月に保護者向けの発表会をして、授業を終了する予定である。事前のアンケート、同じ内容で事後アンケートをして、どんな力がついたか、どんな変化があるか調べてみることと子ども達が書いたレポートについての評価を行うこととしている。

本事業３年間を通じて、先生が地域の SD の課題と本当の意味で出会っていく姿を寄り添って見ている。子ども達も成長するが、先生方も赴任した校区を知るという教員の根本を見直され、教員の本来の姿を考えられていることを実感している。総合的な学習は評価基準が定まっているわけではないので、子どもにあわせて設計できる。子ども達がのびのびとして、心を開く感じがある。子ども達が心を開いて学んでいけるような感じが強く印象に残った。

【福井県】

１年目は坂井市の小学校で実証を行った。ビオトープの再生活動を題材に、子ども達にビオトープや里山の風景を見せながら、自分達の身の回りの自然、里山をもう一度見つめ直し、どう受けとめるのか、その良さを認識しているのかを最終目標に設定した。最後は地区の公民館で地域の人に対して発表をした。

２年目は敦賀市の私立の敦賀気比高校付属中学校で、「100 年後の敦賀の世界遺産を考える」という問題設定をし、その中で子どもたちが考え議論するような場を持った。敦賀にある原子力発電所が 100 年後遺産となっているか、ラムサール条約に登録されている中池見湿地が遺産となるのか、生徒たちは情報収集をしながら意見を交わした。明確な結論は出せないが、生徒同士が違ったアプローチで議論し、何を見つけ出していくのかという授業だった。

３年目は、福井大学附属中学校技術科で行った。学校は 20 年前から「探究するコミュニティ」をテーマに研究教育に尽力し、総合的な学習や、各教科でも教科の本質を見つめながら、自分たちで探究して協働して学んでいくことを大事にしている。技術科では「栽培」という領域の中で、ESD を根っこにおいて生徒と共通の部位を発信する「附中グリーンプロジェクト、緑は地球を救うのか？」というテーマで生徒それぞれのアプローチで探究活動をしている。地域とのつながりをどう取り上げるかという課題はあったが、福井という単位での地元・地域というのは考えられるのではないかとなった。また、普通の単元計画よりも長い時間をかけており、栽培を通して自分たちの地域や世界とのつながりをみていくまでの展望を考えられている。

【長野県】

１年目は源池小学校の３年生を対象に里山保全の授業を実施した。映像を活用して、夏に体験したことを冬にふりかえることができたという点が非常によかった。天候や移動などの様々な不確定要素を越えて、カリキュラムが運営されていく面では先生も扱いやすく考えられた。

２年目は松本市の市街地から少し離れた会田中学校の２年生を対象に実施した。長野県で伝統的に行われている学校登山が課題であり、実際の登山では、天候の悪化のため先生が想像されていた教育効果が得られないような体験学習になった。どのように以後の学習につなげていくかという時に、この ESD 事業がその旗を振り、

行先を指南した。生徒達自身が学んで見てきたものから、課題を抽出して自分達の暮らしに根付いた形で、その課題解決を図るという授業に変わった。本年度は担任の先生が 3 年生に持ち上がり、自然エネルギーをベースに自然資源をどのように使うか、といった学習を引き続き行っている。
3 年目は長野市の信州大学附属小学校の 2 年生 3 年生の総合的な学習の時間で、動物飼育を通して「ともにある」を大切にしたカリキュラムを進めている。

長野県の南の中信・南信には学校に地域の講師を派遣する NGO 的なネットワークがある。地域の講師を学校に派遣する時に、講師が学校の事情をよく理解して行くように調整している。そこに ESD の視点を入れて、単発の講師派遣ではなくて、継続的に先生と単元に合わせた関わりをしていくような形でネットワークの活動が定着しつつある。また、長野県には信州型コミュニティスクールという学校が地域の自治体と組んで地域課題を解決するような動きを積極的に推進していることもある。方向性としては地域の課題を解決するという点で汎用性を持った評価を模索できればいい。

【岐阜県】

1 年目は長森南中学校の 1 年生を対象に温暖化とエネルギーに関する事業を行った。省エネ調査や省エネ製品を問うゲーム等を体験し、学校に設置されている太陽光発電の発電状況や、小水力発電事業に取り組む人のインタビュー映像から再生可能エネルギーの特徴や可能性について学習をした。

2 年目は正木小学校の 5 年生を対象に、地球温暖化防止をテーマに自分にできることを見つける授業を行った。学校のエコチェックをしたり、給食の食材から地産地消について学んだり、身近なエコ活動に触れ、自分にできることを見いだし発表する授業であった。

3 年目は岐阜市の青山中学校の 1 年生を対象に実施している。多様な視点から「環境」を捉え、生徒自身の興味関心から課題を設定し、自分にできることを仲間と模索している。ごみ拾い体験から、地域になぜごみが捨てられるのかといった点での議論を進めている。この授業は道徳と総合的な学習の時間を連携させて実施される。

【愛知県】

1 年目は東浦町立緒川小学校の小学 4 年生を対象に実践した。「学校のエコチャレンジ」をテーマに学校の残念エコとエコ自慢を見つけながら、学校の残念エコをどうやって解決していくかをグループで話し合いながら決めて活動をしていった。公開授業では、子ども達のエコ活動の発表にコメントする役割で外部講師を活用した。外部講師が子ども達の活動についてコメントし、褒めることで子ども達のやる気を高めた。自分達が環境を守っていくという意識を育むという授業をした。

2 年目は名古屋市の八熊小学校小学 4 年生を対象に実施した。八熊小学校は 6 年間の総合的な学習の時間で、学校の近くを流れる堀川をテーマに、堀川をきれいにしていきたいという意欲を育む授業に取り組んでいる。4 年生では堀川と藤前干潟、生き物たちの棲みかをテーマにし、環境の違いや生き物がどんな場所に住んでいるか違いを見ながら考える授業を行った。理科と関連づけ総合的な学習の時間で実施した。

3 年目は半田市立板山小学校の 5 年生を対象とし、学校ビオトープを教材に実施している。荒廃してしまった学校ビオトープをどうするかを児童が話し合いながら、再生活動を進める授業である。ビオトープのどこを改善したら

いいか、その改善にはどんな方法があるか、外部講師のアドバイスを得ながら話し合った。次の 5 年生にどうつなげていくかを考えている。

【三重県】

1 年目、名張市の薦原小学校の小学 4 年生を対象に実施した。地域の財産であるギフチョウを題材に、地域と学校が連携して、子ども達がギフチョウを通して地域に愛着を持てるようなプロセスを踏まえた授業づくりをした。人間の開発行為によってギフチョウの棲みかは失われつつある中、人とギフチョウがどう一緒に暮らすことができるのかを子ども達から問題提起される授業となった。実証事業後、学校全体で ESD カレンダーを作ったり、教員全員が ESD 研修に参加する等学校全体の取組として動いている。教員は子どもたちが授業に食いつくようになったことを実感し、授業づくりが変わっていったと言う。

2 年目は桑名市にある津田学園という私立の津田小学校の小学 4 年生を対象に、学校の近くを流れる嘉例川を題材に授業を実施した。映像と ICT 教育を取り入れ、上流中流下流の川の映像を見せながら、それぞれの川の様子を見ながら子どもたちが自分たちの川はどうなっているんだろう、そこにはどんな生き物が棲んでいるんだろうと気づきながらの学習をした。教員になって 1 年目の先生が授業の手法をかなり悩みながら授業展開を考え、学習者中心となる授業づくりへと変わっていった。

3 年目は四日市市の中部中学校の 3 年生を対象に、リサイクルを題材にした授業を行った。企業連携による授業を実施しているため、その学習を深めることを大切にし、先生とワーキンググループで議論をして、「リサイクルは持続可能な社会に有効か」をテーマに、中学生が自分で情報を得てその有効性について議論するという授業を行った。生徒自身が意見を持ち、他者と交わしながら学習を深める授業を実施したことで、担当教員は発問や生徒をいかに揺さぶるかの手法の大切さを実感した。

2．周知啓発事業について

北信越地域では金沢市で 12 月 26 日(土)、東海地域では名古屋市で 2 月 18 日(木)に開催する旨を報告した。また、周知啓発の冊子については、「ESD 授業のつくりかた」「3 年間中部 7 県で実証したプログラムの紹介」「実施した授業の成果効果を見せる検証内容」を主に掲載することを報告、共有した。映像については、アーカイブ化することとし、ESD を推進するような映像をパターン①、これまで制作してきた映像の活用についてパターン②として、映像を再編集することを検討していることを報告、意見交換した。

3．プレゼンテーション「地域に学び、地域に育つ～ESD が大切にしていること～」

形成推進委員の意見や考えを共有するために、以下 3 つをテーマにプレゼンテーションを行った。

(1)本事業での役割と感想・意見、本事業の価値（成果・変化・効果）

(2)ESD を今後普及するための提案・意見

(3)あなたにとっての ESD は

【富山県】松本　謙一氏（富山大学人間発達科学部教授）

(1) ○○教育でない ESD。人を育てること。地域で子どもの捉え方。ESD は自分の利益のためではなく、みんなの利益を考えるという教育である。地球のためとは言うが、それが先ではなく、そういうことを考える人をつくる。これが今までの○○教育とは考え方がひっくり返るくらい大きな違いである。子どもの中にはたくさん ESD の視点がある。大人がそれを消してしまっていたり、見逃したりしている。地域でしている私の仕事は一番の役割はそういう子ども・人を育てることである。授業で「実はあなたの教室の子どもはこんなことを考えている子ども」ときちんと捉えることをしている。

実感できる先生を増やす子どもの笑顔。本事業の価値は 22 の授業だったかもしれないが、それに関わった先生達が一生懸命に子どものために授業を考え、力を入れてやると子どもが育つ、素敵なあったかい子どもが育つ。それを実感できる先生が 1 人でも 2 人でも増えていくと良い。先生を応援する地域になっていく。そのカギは実際に授業をして、子どもが笑顔になって育つことが実感できることである。本事業でしていることをみんなで考えて、周りの先生方にその価値を感じてもらって、実際にやってみると良い。学校は、子どもが育つことを実感することを求めている。

(2)文科省　総論-ズレ　生きる力　きちんと子ども達を評価する。子どもと授業を作る！（カリキュラムマネジメント）

文科省が変わらないといけない。総論では「持続可能な」と書いてあるのに、世の中では国語と算数の点数だけで順位を付けている。きちんと本当に「持続可能」に耐え得るような生きる力がついた子どもを評価していない。これさえ変われば先生たちは 100%変わる。もう一つは、教員はカリキュラムマネジメントが苦手である。決まったことを教えることができるが、どう教えるか、新しい単元を創るという発想ができる先生は少ない。

(3)あったかい子どもを育てる、楽しい学校の特効薬、生きる力の漢方薬

ESD を実践できる先生は子どもの個性がばらばらでもそれぞれのよさを認められる。子どもみんなが育つ。それが遠くには生きる力につながる。

【石川県】池端　弘久氏（金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家館長）

(1)石川県の形成推進委員会委員、ワーキンググループ会議委員、検証委員会委員として関わった。実証することで授業研究が前進する。 教師も子ども達も共に前に進む。事業の評価計画が初年度に必要である。教育界そのものが実証に慣れ親しんでこなかった。実証することは授業研究を前進させ重要である。先生方、特に若い先生方と何十回も会って話をすると、先生方の言っている言葉、内容がどんどん具体的で深まってくる。地域のことを知るだけでなく理解して考えていこうとする。会うたびに話の質が深まり、子ども達と学び合いながら授業の質が高まるのを感じた。事業としては 3 年間の評価計画が見えていた方がやりやすかった。

本当の意味で地域を知ることは、SD の課題と出会うことから始まる。子ども達は「これで良く分かった」と知識で終わらず、もっと深いものがあることに気づく。子どもも教員も地域の SD の課題と出会い葛藤することにつながる。本当の地域の核心の部分に触れていくことは、ESD という考え方で地域における学校を見直すことにもつながる。

(2)実証・事実の積み重ねと評価　子どもと教師が共に時間をかけて取り組む地域や日本の環境、学習指導要領を創るための新しいスタンダードづくり。今後普及するためには、地道に事実の積み重ねと評価が極めて重要

である。今の学校や教育に携わっている者の一番の弱点である。点数や数値の評価は、子どもの生の姿をきちんと認めるようにつけていきたい。それがないと中身の深い物は評価にかからない。もう一つは、子どもと教師が共に時間をかけてじっくり取り組む環境が学校にはない。それをどう作るかが非常に重要である。３つ目は、学校や省庁、様々な分野から今後の日本の教育を作っていく新たなスタンダード、学校ごとのスタンダードを提案していくことである。

(3)ESD は目的であり手段

ESD は提案する力を身につけた子どもたちが成長してイキイキと暮らし続けて欲しいというのが目的。ツールとして使うことで日本の教育改革が進む。

【福井県】松田　淑子氏（福井大学教育地域科学部教授）

(1)つなぐ。役割はつなげる、ことである。1,2 年してきたことを、今年度に、また来年度以降につなげる。ESD に関わる人と出会え、つなげられたことである。本事業に関わり、ESD を自分では大事にしてきたが、こんなに大事にしている熱い方とたくさんつながったことに、すごく価値があった。福井大学の附属中の奥村先生のしていることを形成推進委員会で中部７県の方とつなげられたことが良かった。

(2)先生方の実践に寄り添うことからのスタート（はじめに「ESD」と言わない方がよいかも!?）。先生方の実践に寄り添いながら、最後に「持続可能性が大事ですよね」と言った方がよい。「ESD の説明をして大事にして実践しなければいけない」と最初に言われるとマニュアル通りの授業、もしくは先生が敬遠されるか、になってしまう。先生の大事にされていることそのものがそのまま ESD の授業になっていくことがよい。

(3)未来へつなぐこと

初孫が生まれ、赤ちゃんを見ると未来を強く感じる。どうつなげていくかを考えると、ESD は一番大事ではないか、と実感している。そこを大事にしていきたい。

【長野県】中澤　朋代氏（松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科准教授）

(1)根っこから変わる。学校教育での実践は、学校という毎日子どもたちが行く場所のことなので、日常の中にあり、そういう機会が習慣的にあることもすごく大事である。そこに実践授業があったことが大きなきっかけだったと思う。先生にとっても教育手法を根っこから見直す、そして関わっていた地域の大学の講師やワーキングメンバーの人間も、こうだろうと思っていたところが現場の事情を聴くとそうともいかないのだな、などいろいろなことが分かってきて、相互理解も進んだ。そこから考え方を根っこから変えることができてきたと思う。

　実感⇒言語化⇒共有。今回はモデル事業として１つの場となって進んだが、もっと他にも広がるようなことを進めていきたい。本事業の価値は、教員はもちろん関わった人は実感をしている。何よりも大事なのは、子ども達に学びたいと思う気持ちが能動的に醸成されることである。教育はそれをどう助けるか、である。子どもの成長に合わせて、必要な所をサポートしていくところを実践できた時の感覚を多少なりともみんなで実感できた。教員と地域の人々とのつながり方が変わっていった。そのことを言葉に直して、共有していくことが広げることにつながる。

(2)出会い　対話の場

学校と地域、地域の中で学校づくりにおいて、出会いと対話の場があるとよい。お互いが課題を見て、みんなでどうやって解決しようかと歩んでいく。大上段に構えないで、身近に ESD が普及していくとよい。

(3)ESD は 21 世紀スキルを高める。

もっと実感して今はこうだけど未来はこうしたいとイキイキと語れる人が増えなくてはいけない。IT 社会で情報は入るが、断片的であり、疑似体験の中で何が起こっているかを学び、議論している。だからこそ、実感することが重要である。変化に対応できる人は ESD 的な学びから育まれる。

【岐阜県】代理出席　小林由紀子氏（NPO 法人 e-plus 生涯学習研究所代表理事）

※巽　徹氏（岐阜大学教育学部教授）欠席のため

(1)学校に多様な働きかけが出来た。（EPO、環境省、県、市など）人も教材も。先生が「やった」感があった。

子どもの変化。

学校の中に地域の人が積極的に入ることで、すごく学校が変わった。先生が助けてもらえる人がこんなにたくさんいることに気づき、いろいろな関わり方があるというのを知ったことがすごく良かった。先生のやった感があり、子どもが変わった。地域のことを積極的に知る。先生が積極的に地域や外部の人の意見を取り入れて、いろいろなことを知りたいと思うようになった。違う角度で授業の切り口をつくり実施したことが、子どもにも教員にも感動を呼んだ。先生が給食センターに出かけて給食がどう作られているのかを取材したり、全く発言のなかった生徒がこの授業で初めて発言したりした。

(2)「人材」があれば、できることに気がついた（ちょっと心と知識）。

教員と地域、専門家が出会えば変化が起きる。

(3)「尽きない興味」→楽しい、の源

ESD は環境学習の多様な分野をつなぐツールであり、「どう未来につなぐのか」を集約できる。経済も社会も学習に入ってくる。環境から見た価値観だけでなく社会のいろいろな価値も認めて、再度「環境」を見つめ直すことができる考え方であり、楽しく学べる。興味が尽きない。

【三重県】松岡　守氏（三重大学教育学部教授）

(1)量的、多面的に捉える。三重県担当で、大学では中学校の技術の教員を養成している。中学校の技術では４つのうちの一つの分野「エネルギー変換」の担当をしている。技術的な観点で言えば、定量的なことを言わない。それから、一つの面からだけでなく、多面的にとらえることが必要である。そういう意味で、チョウの育つ環境を守らないといけないという議論をしている中で、子どもから「でも工場の人たちの生活も考えなければいけない」という発言が出てきたことに感動した。それこそ ESD だと思った。

関わった学校　ベテラン～初任者　刺激の機会　先生が伸びる機会。関わった学校は環境についての学習を進められていた。ベテラン、初任者の先生までおられたが、いずれも先生に刺激を供給できる場を提供できた。刺激を受けて本当に勉強されて素晴しい授業を展開された。先生が伸びる機会を提供できた。

(2)具体的な資料

学校の先生方はとにかく忙しいため、具体的な指示や指導案が要望される。一方でおもしろい、役に立つと思ったことは時間を度外視して実施される。具体的な資料を提供することが必要である。

(3)ESD について私自身勉強していかないといけない。分かったつもりになってはいけない。いつもこれでいいのかと考えていく姿勢が必要である。いつも学校に行って、先生や子ども達から学ばせてもらっている。

【北陸】鈴木　克徳氏（金沢大学環境保全センター長・教授）
(1)勉強になった　どのような効果があったか一緒に考える。実際に小学校や中学校の現場でどんな発想でどんなことをして、先生がカリキュラムや単元計画をつくるのかを、一緒に考えていくことができた。学校の先生にとって違った専門分野の人たちが入ることによっていろいろ見えてくるものがあるのではないか。学校の先生の発想法やどう考えてものを作るのか、自分たちの目から見たら欠けているところ、あったらよいものを、一緒に議論できたことが大きな勉強になった。教員の変化、新たな知見。先生が議論をしていろいろ実践していく中で随分変わった。これまで学校で教員が単元計画を作る作業は、狭い世界の中で行われてきたと感じていた。いろいろな人たちが入って議論することでいろいろな視点が入ることが重要である。
(2)幅広い人を巻き込んでのカリキュラムづくり。
　学校に限定して言うと、より幅広い人を巻き込んだカリキュラムづくりを進めていくことがすごく重要である。極めてスキルフルな単元計画づくりに熟達した先生もたくさんいるが、地域の人など手伝いたいという人がたくさんいる。うまく人を巻き込んでみんなで授業実践できる形になっていくとすごくいい。
(3)ESD 推進の原動力は怒り？
　本来自分は ESD をやるために金沢大学に来たわけではないのに、なぜこんなにやるのか。最後に出てくるのは「怒り」ではないか。世の中は不公平、不公正である。世代間の不公正、日本の中にも格差はたくさんある。この社会がよりよい、もう少し住みやすくなっていってくれないかと思う。自分の場合には、今の社会の不条理に対しての怒りが ESD 推進の原動力になっているのではないかと思う。

【愛知県】千頭　聡氏（日本福祉大学国際福祉開発学部教授）※欠席のため後日ヒアリング
(1)子どもたちと先生方に気づきの幅と深さをもたらすもの
　先生方は今までもいろいろなことを実践してきたと思うが、こういうプログラムを通じて先生方自身の気づきの幅の広がりや、深みを与えた。それを通じて子ども達も普段と違う気づきの深まりを感じることができたのではないかと思う。ウチ（学校）とソト（地域）が相互に刺激しあえる機会と場を創りだした。当事者の先生方の評価が一番大事だと思う。学校では先生方が苦労しながら授業をしている。いろいろな方が ESD のプログラムに関わることによって、学校にとっても刺激になるはずであり、このプログラムに参加した私を含めたワーキンググループの皆さんも学校の現場から刺激をもらった、という意味でお互いに刺激しあえるような場なり機会ができたと感じている。
(2)今まで取り組んできたことの見つめ直し、地域にとっての ESD の見える化
　今まで取り組んできたことは学校の取組もあるし、地域の人が自分達の地域のためにいろいろなことをしてきている。その取組を ESD という刺激を受けて自分たちがやってきたことは何だろうという見つめ直しを地域レベルで出来たらよい。ESD は降って湧いた概念ではなく、地域にとっては今まで取り組んできたことを捉え直したらESD である。見直す場合、見つめ直しはスタートであり、そこで終わらずに取り組んできたことをESD という視点で見える化すると、次に何が必要で何が抜けているか、この活動とこの活動は組合せられる等、「もやいなおし」である。
(3)社会のあり方　社会との関わり方　を考えるための軸

社会のあり方や社会との関わり方をいつも考えないといけないと思っている。ESD という軸で社会はどうあるべきか、自分は社会とどう関わるべきかと、考えることが必要である。

【長野/東海】新海　洋子氏（環境省中部環境パートナーシップオフィス チーフプロデューサー）
※後日ヒアリング
(1)確かな事実。
先生や地域の人との授業づくりからはっきり見えた「確かな事実」。ESD は変化を生み出す。何をどう学ぶか、公正な社会を作るための価値観と力を育むための学習の実践が大切である。教育によって人は変わる。地域や社会は変わる。
(2)どの地域のすべての子どもが ESD 授業を受けるスキームをつくる。
すべての地域のすべての子どもが ESD 授業を受けるスキームが必要である。どの教員にも ESD の視点や手法を実践できるスキルが必要である。ESD が必須であることに気づいた人は、あらゆる場面でひと工夫して伝えつづける。その価値を実感し実践する教員や学校が増幅していく。ESD が日本の教育のベーシックスキームになるよう提案し続ける。
(3)真実を問い続け、行動し貫く力を育む

③第３回形成推進委員会

日　時：平成 28 年 2 月 9 日(火)　14:00～17:00
場　所：環境省中部環境パートナーシップオフィス
出席者：形成推進委員　9 名、地方環境事務所 2 名、受託団体 2 名
主な議題：１.平成 27 年度各県の実証事業の成果について
２.周知啓発事業について
(1)周知啓発ワークショップについて(金沢市/名古屋市)
(2)周知啓発のための冊子、映像の作成について
３.検証委員会について
４.3 年間の成果及び課題をどう活かすか～地域における ESD プログラムの定着のために～

【議事内容】
１.各県の実証事業の成果について
以下の「中部７県の共通のコンセプト（目標）」4 点を念頭に各県の今年度の取組を報告した。
●教員が地域課題を意識した授業をつくる。
●学びのプロセスを可視化する(見せていく)。
●教員の成長、変化を捉える（地域の大人の変化も含む）。
●継続性を担保するための仕組みやあり方を見いだす。

【富山県】松本　謙一氏（富山大学人間発達科学部教授）

神通碧小学校は同じ建物に中学校もあり、中学生と一緒に「国際理解」をテーマに取り組んだ。地域にいる外国人の協力を得ることが難しく、富山県が配置する国際交流員に協力してもらうことになった。その方が県内各所への展開するモデルになりやすいと考えた。ただ、国際交流員は２回しか学校に派遣できない制約があった。そこでメールを活用して、２回目の来校までにメールで質問や回答のやり取りをして学習の深まりを作れるよう工夫した。子ども達の質問をクラスで整理してメールで送り、回答をプリントして配って共有した。どうしても気になったことだけを２回目の訪問時に質問するようにして、限られた回数を有効に活用して学びを深めるプロセスを実現できた。

教員の成長という点ではワーキンググループに様々な立場の人がいて、様々なアイデアを出せたことが良かった。メールを活用し、自分が疑問に感じていることをみんなの前で話す場を設けたことで、他人が持つ問題意識を理解できる機会となり、良い学びにつながった。外国人そのものの理解だけでなく、同じクラスの仲間が外国人をどう見ているかという視点を学ぶこと、共に学ぶ仲間を教材にした学びに大きな価値があると感じた。継続性という点では、地域の外国人にこだわらず、県の国際交流員を活用できたことがよかった。次の展開にも役立つと感じている。

【石川県】池端　弘久氏（金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家館長）

今年は十一屋小学校で実証授業を実施した。昨年度の三馬小の実証授業に校長がオブザーバーとして参加するなど非常に熱心であった。学校のニーズに合わせて ESD 授業の目標を設定して構わないと伝え、コミュニケーション力を高めることを第１目標とし、未来を予測して計画する力を第２目標に設定した。具体的な題材を、少子高齢化により十一屋小学校に通う子どもがいなくなった平栗という地域にし、平栗地域を子ども達が知り、地域の課題に気づき、その地域の将来を考えるという授業を行うこととした。コミュニケーション力を高めるためにグループワークを多く取り入れ、子ども達の話し合いが単なる意見のぶつけ合いになると話し合いの深まりがないので、根拠を明確にした話し合いをするように指導した。冬場は平野部に降りてしまうほど山奥にある数軒の集落の町会長の方の話を聞くことができた。また平栗にはリサイクル企業があり、また自然保護区になっている場所があることなど子ども達が調べて地域を理解した。最終的に、根拠に基づく話し合いができ、これまで話さなかった子どもが意見を言うようになった。

国立教育政策研究所の「ESD で育む能力態度に関する評価枠組み」という研究のため、十一屋小学校で 55 項目に及ぶ事前と事後のアンケートを実施した。その結果によると、育みたい全ての項目において、子ども達の伸びが認められた。子ども達の変化は、子どもの成果物、アンケートの数量的な結果からも得られた。先生の成長も大きい。ESD カリキュラムの開発には、社会や自然に対する問題意識が必要になる。しかし、一般的に教員はそのことを感じられず、いかに教育指導要領をこなしていくかという狭い視点になりがちである。教員が ESD に取り組むことで、地域の課題に気づき、違った目で地域を理解できるようになれば、根本的な教員の力が支えられ、社会人としての意識が持ち上げられていく。子ども達への発問を「平栗はどうなっていくだろうか」にするか、「平栗はどうなってほしいか」にするかで担任は悩んでいた。その理由は、先生が引いて子ども達にいろんな意見を出させるか、先生の意図したところへ少し引っ張りたいか、という点である。それは先生の大きな成長である。先生達が地域の SD の課題に出会うことが、いかに教員力を下支えするか分かってきた。昨年の三馬小は今年も伏見川をテーマに取り組んでいるが、やり方が変わってきている。子どものレポートを次の授業の導入に使うなど、昨年の経験が活かされている。この事業に関わって、ESD は人間の根源的なところを掘り起こすという可能性を感じている。これから

の教育に対する次のスタンダードを提案できるところまで来ている。地域の人からはこんな授業がしたかった、と言われ、平栗地域の人は子ども達に来て、勉強してくれることを大変喜んでくれた。

【福井県】松田淑子氏（福井大学教育地域科学部教授）

福井大学附属中学校の１年生が技術科の授業で取り組んだ。第１回ワーキンググループの開催が遅くなり、プログラムへの関わり方が十分でなかったかもしれない。技術科の授業は様々な要素を３年間のカリキュラムで組み立てられていて、私たちはそれの流れを把握しづらく、先生もプログラムづくりに苦労されていた。グループ毎に自由に課題設定をしており、環境だけでなく心の問題を取り上げるグループもあった。附属中学校は校区という地域を持たないため、特定の地域とのつながりが弱いことが課題であった。

●鈴木　克徳氏（金沢大学環境保全センター長・教授）

福井大学附属中学校というやや特殊な学校の技術科の中で、どうESDに取り組むかを担任は考えていた。１年の前半で植物の育成を学び、後半は学んだ技術を活かして校内での実践を考えていた。しかし、担任はもっと広い世界、グローバルとつながる視点を子ども達に持ってもらいたい、と考えていた。附属中学は地域コミュニティとは全くつながりがないため、福井県全体を地域と捉えて、グローバルとのつながりを見ようとした。これまで担任が学校の中で独自に取り組んできたことをワーキンググループの場でブラッシュアップができ、とてもよかった。またICTの積極的な使用も大きな特徴である。子ども達の意見をデータベース化し、相互参照できるシステムを導入した。より多くの意見に触れることで、自分と類似の考えの意見を聞くことができた。一方で、反省点として子ども達がシステムを十分に使いこなせていなかった。試行錯誤の第一歩としてはとても有意義だった。

福井県全体を１つの地域と捉えたことは１つの進展だった。自分達が得た技術を地域の中でどう活かせるか、世界とどうつながっているのか、という視点を持つことができた。ICTを使った手法は、より幅広いコミュニケーションを経験でき、その面白さの一端を感じられた。先生にとって、自分の取り組みを今回ワーキンググループに支えてもらえたことは大きく、校長や副校長にも理解してもらう機会になった。本人の自信になったようだ。技術科というESDにとって新しい分野を開拓した意味は大きい。

【長野県】中澤　朋代氏（松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科准教授）

今回、ヤギとヒツジを学校で飼うという非常に特殊な教育方法であった。「いのち」は圧倒的な教育力を持っていると感じた。２年生はヤギを飼い、休みでも交代で学校に来て世話をした。他のクラスも何らかの生き物を飼っていて、校庭には子ども達が手づくりしたユニークな飼育小屋が建っていた。子ども達は、自分達で動物を飼うことができるのか話し合い、近所の牧場と相談する。飼うことを決めたら、自分達で飼育小屋など準備を整えて、牧場から借りてくる。学校にヤギがやってきて10日も経たないうちに、首を囲いに挟んで死んでしまった。教師が落胆し、今後の授業内容について悩んだ。地域とのつながりの点では、動物を借りた牧場との関係、校内での学年間の教えあい、動物飼育について近隣への配慮、冬場の餌の調達など、家庭を巻き込んだ取組みになっていた。

授業スタイルもユニークで、座席はコの字型に配置され、授業進行の一部を子ども達が担っていた。３年生は、先生が10分ほど課題の説明をしただけで、子ども達は教室を出て行き、一人も漏れることなくグループに分かれて、それぞれ役割を持ち取り組んでいた。子ども達のコミュニケーションのとり方もバランスが取れた自然な感じであった。また２年生のクラスでは、ヤギのエサが無くなってどれだけ準備するかを考えるために、ヤギの体重を量って増えた分

から計算してみるなど飼育が算数の勉強にもつながっていた。３年生のクラスでは、飼っているヒツジがジンギスカンの肉になることを理解していたので、ヒツジが長生きするのがいいのか悪いのか、少しでも長く一緒にいたいので繁殖させることを自分達で考えて、繁殖計画を立て実行している。教員にこの授業の最後をどう考えているのかと質問したが、「深くは考えているけれど自分にも分からない。子ども達と一緒に何らかの結論を出していく」と担任も覚悟を語っていた。副校長はこうした授業は形式知になりにくく教員の力量に頼る部分が大きい、と強く言っていたが、その意義をいろいろな形で整理をしていた。継続性については、要素をきちんと言葉で説明できるようにし、教育現場に還元していく取組みを地道に続けることが大切である。

【岐阜県】巽　徹氏（岐阜大学教育学部教授）

今年度は岐阜市立青山中学校で行った。教育実習をたくさん受け入れてくれる研修校であり、全県から優秀な先生が集まっている。昨年ユネスコスクールに登録されたが、普段の取組みが評価された。今回の取組みは、例年行う清掃活動など学区内のごみの問題や環境活動を行い、今年は子ども達が環境をもう一歩意識して考える機会をつくろうと取り組んだ。実際の授業では、子ども達はごみの分布データからその要因をグループで分析して考えた。今回のねらいは、生徒達の考え方や価値観に揺さぶりをかけることだった。実際にごみ箱をおいてみる、花壇を作ってみるといった実践をする際に、教員が教えたい価値観や正解に向かって誘導したくなるのが教員の性であるが、そうでなく生徒が自らの体験から価値観を揺さぶられる状況をつくることが大切であることに気づいてもらえた。今後は、これまで年中行事として取り組んできた地域清掃を、次年度はもう一歩ステップアップした取組みに変えていけるかが課題である。

【愛知県】千頭　聡氏（日本福祉大学国際福祉開発学部教授）

実証校の半田市の板山小学校は知多半島の真ん中に位置して、市街地というよりは丘陵地で農地も多く、都市と農村の接点の地域にある。地域の方は割と積極的に自然再生に取り組んでいて、竹を伐採して炭にして河川の浄化にも使っている。ユネスコスクールに登録して２年目になる。今回は５年生のクラスでビオトープの再生をテーマに取り組んだ。十数年前に作られたビオトープが放置され、今は見向きもされなくなり、泥が溜まってしまった状態にある。先生のビオトープを再生したいという話から始まった。ワークショップ形式でグループに分かれて話し合った。少人数で話すことで様々な意見が活発に出た。低学年の子ども達のために再生したい、など他者への視点なども子ども達から出てきた。様々な意見が出たけれど、グループとしてまとめる過程でせっかくの多様な意見が吸い上げられずに集約化されてしまった感じもした。難しいところだが、そういった少数意見も吸い上げることを意識したプログラムにできたらよかった。先生の変化はよく見えなかったが、教頭先生が積極的に二人の担任を引っ張ってくれた。

【三重県】松岡　守氏（三重大学教育学部教授）

四日市市立中部中学校で実施した。昔は公害の影響も大きかったせいか、環境への取り組みが積極的で環境教育の年間プログラムが作られている。今回は、産業と環境の共生を考えるというプログラムを実施し、プラスチックのリサイクルについて工場を見学したり、企業の方の話を聞いたりして、リサイクルが持続可能な社会づくりに有効かどうかを生徒たちは議論した。子ども達の意見を引き出す授業を積極的に展開されていた。終わってから先生に

聞くと大変刺激になってよかったと言っていた。ESD の視点を入れることでより深みのある授業になった。

【北陸】鈴木　克徳氏（金沢大学環境保全センター長・教授）

北陸のコーディネーターとして共通コンセプトをどう見たかについてだが、それぞれがそれぞれ良かった。全体としてはこの一連のプロジェクトによってプラス面はそれぞれが発言された。北陸のワーキンググループへのアンケートに、ネットワークが形成されたと思わないという意見があった。特に北陸では、今までネットワークを形成している人たちが集まってワーキンググループをつくっており、今回に新しい特別なネットワークを作ってはいない。この間実践している人が集まって学校に対してのアドバイスをした。授業を 1 回実施するために、半年間何回も集まりネットワークが形成されることもあるが、ある程度続けて実践している地域にはすでにネットワークが出来ていて、いかに活用するかが重要となる。新しい意見はないかもしれないが、何年もかけて実施してきたことが次に生かされるための形をつくることが北陸の場合は顕著に目立った。

全体としては、地域との関わり合いが色濃く出てきた発表とそうでなかった発表があったような気がする。継続性を考えたときに、地域とどれだけつながることができたかという話はすごく大きな意味を持つ。学校の先生が異動することを前提として学びを継続していくためには、地域とのつながりがどこまで作れるのかが重要であり、これからのフォローが鍵となる。学校の先生は全員が良かったと答えるであろう。先生たちの学びのプロセスはすごくあった。3 年間実施して思ったのは、学校の先生は狭い世界の中で授業計画や単元計画を作っていることである。もう少し幅広くいろんな人の意見が聞けると、彼ら自身にとってもとてもためになる。いろんな人から支えてもらうプロセスはもっと頑張ろうという気持ちを先生に生み出す。すべてのケースにおいてやってよかったという気持ちをもつことができたと思う。これが大きな特徴だと思う。すごく良かった部分と、もっとできたかもしれないと思う部分が混在している。

【長野・東海】新海　洋子氏（環境省中部環境パートナーシップオフィス　チーフプロデューサー）

授業の中でのゲストティーチャーの役割が子どもの学びに活かされるかどうかが重要である。使い方については数名の先生が気づかれた。地域の人も学校教育者もそれぞれに気づきがあった。確実に次の段階に行けると思うが、継続するために学校と地域がどう支え合うプロセスを維持していくかということが問われる。今回のようなネットワークを教員に活用していただくためにどうしたらいいのかを検討しないといけない。

２.周知啓発事業について

（1）周知啓発ワークショップについて（金沢市／名古屋市）

以下のとおり報告し、共有した。

金沢での開催については、第１回では学校の先生の授業報告に焦点を絞った。4 地域(北陸 3 地域と長野)で各実証校の先生から発表いただいた。授業の報告を受けて、東海の教員からコメントを得るという構成であった。その後、グループに分かれてのディスカッションを行った。第 2 回は、学校と地域とがどうつながっていくかに焦点に当てた。東海 3 地域の教員が ESD 授業づくりの報告をし、その後フリップレポートという形で中部 7 県の地域のステークホルダーがフリップを使ってのレポートを行った。その後、グループに分かれてディスカッションをした。北陸のメンバーで振り返りをした際の意見として、報告の時間が短かったこと、全体の議論ができるような構成が必要だったこと、発表だけで終わったのは問題ではないか、という意見が出された。

また、参加者に関係者が多かったことや、金沢市のユネスコスクールの関係者の参加がないことを指摘された。内容について、いろんな意見が聞けて良かった、本気になって考えている地域のステークホルダーがいっぱいいると感じた、という意見を得た。子ども達の交流が必要だったのではないかという意見もあった。他、いろいろなテーマの授業を聞けてよかった、いろいろな人と出会えてよかった、参考になる話がたくさんあったという評価を得た。

名古屋での開催については、北陸での反省や改善点を踏まえ、ほぼ同じ形式で実施はするが、本事業で授業実践をした教員の報告を第１回ですべて行うこと、第２回は地域に絞った内容でのセッション、ワークショップにし協議の時間を取ることを確認した。

(2)周知啓発のための冊子・映像の作成について

作成中の３年間事業の周知啓発のための冊子原稿を回覧し、以下の事項を報告・共有した。この 3 年間でどんな授業ができたか、ESD 授業のつくり方のポイントを入れている。3 年間の授業の紹介として、22 のプログラムの紹介を各 1 ページずつ掲載している。映像に関するまとめ、地域の方の意見、検証作業の報告も掲載する。

映像については、2 つのパターンを作成している。パターン 1 は、「指導者向け動機づけの映像」としている。パターン 2 は、3 つのテーマで構成されている。本映像は今後 ESD を実践したいと考えている教員を主な対象として作成している。

３.検証委員会について

以下のとおり報告し、共有した。

検証委員会としては、検証作業として 6 つの仮説に基づき、5 名の教員と 2 名の地域の団体の方へのヒアリング、4 つの学校を対象にしたインデプススタディから、その成果効果をひも解くこととしている。本事業においては、事業実施時に目標設定と内容を決めなかったために、あいまいな評価となっている。本来は 1 年目から検証委員会を設置し、3 年間の成果効果を図る仕組みを検討すべきであった、という意見が出された。一方で、インデプススタディを行い、いくつかの学校の事例や、教員地域の人々のヒアリングから教育の実践内容について質的な部分に手を入れようと頑張った一年だったという意見もあった。

４.3 年間の成果及び課題をどう活かすか～地域における ESD プログラムの定着のために

形成推進委員から事前に 6 つの仮説に対する意見の提出を依頼した上で、3 年間の成果及び課題の活かし方、地域での ESD プログラムの定着方法についての意見を伺った。

※ 6 つの仮説に対するコメントは 26～27 ページ参照

【富山県】松本　謙一氏（富山大学人間発達科学部教授）

一度苦労してやって、成果を感じた先生はできる。ところが、黙っていれば忙しいのでやらない。いろいろなところからお金を得てチャンスを得てやってみればできることもある。一生懸命やる先生にお金を出すのは 1 つの解である。また富山でしたシンポジウムのように、している人が集まるのではなく、子どもの姿が大事である。やったという紹介でなく、こんなに元気な子どもが多く育っているということを、地域の人や親に見てもらうことが大切である。子どもが育っていることを軸に交流する企画を行う。この 2 つが繰り返されれば、価値ある活動は広げられる。

実施するためには資金が必要である。底辺を広げるには指定校のように、最初は乗り気でなくてもやってもらい、みなで支える環境をつくる。そのことによって子どもの姿がよくなればよい。シンポジウムには校長先生や教頭先生が来てくれた。それも来年行うための鍵となる。今までは教育委員会が主催して講演会をしていた。各学校の校長、教頭はみな来ていたが、教育委員会からの依頼があったからである。しかし、1 年前くらいから来年度はこういった形で実施したいと依頼をしたら承諾してくれるようになった。1 年間計画にこの活動を取り入れてくれた。最初何年も子どもの参加のない形のシンポジウムであったが、子ども達が主体のシンポジウムができるようになった。ようやくここまで来た。

【石川県】池端　弘久氏（金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家館長）

富山の手法で学ぶべきところは、子どもである。行政が子どもの交流会を行わなくても、私たちが作ってそこで活き活きと子どもが交流できたら影響力は大きい。次のステップは ESD を子どもが語れるようになることである。大人が語って、子どもが何となく ESD をしているのではいけない。子どもが自学していく。自分が関わっている学校では、子どもなりに ESD を語ることができる。当然先生も育っていく。それを促すためには、先に子どもたちが集まって、まずは交流し合って、その中から自分たちがしている ESD を自分の言葉で表現する。そのような子どもが育っていく姿を次の 3 年間でつくりあげていく。金沢でも行政主導によるユネスコスクールの交流会をしている。しかし、担当教員が集まっている大人向けの交流会である。それを突破するためには、子どもの姿をつくりあげていくことを先行させたらよい。そこに親も地域もついてくる。そして影響力をもつ。

もう 1 つは、若手の教員と付き合ってみてこれから期待ができると思う。若手の教員にこういった世界を知らせることは、これからの教員の生き方として大きな影響を受ける。教員に限らず、地域の青年団などユース世代に ESD に気づいてもらい、自分の地域の SD の課題を解決している 1 つの力になることを伝えていく。その機会をどうつくっていくか。ようやく金沢市の生涯学習推進計画の中に、ESD が入ってきた。公民館の研修も始める。社会教育、生涯学習に関する影響力を環境省として行使していく必要がある。今は、地域のことを学校が ESD で抱え込んでいる。地域の子ども会が子どもを集めて、地域の ESD の活動を地域でしてくれれば、こんなに嬉しいことはない。学校教育と地域の教育の両輪で事業計画ができたらよい。

【福井県】代理出席　吉川　守秋氏（NPO 法人エコプランふくい　事務局長）
※松田　淑子氏（福井大学教育地域科学部教授）欠席のため
　3 年間関わってきて、NPO として学校を支えることの重要性に気づいた。学校の ESD ネットワークの一員としての NPO という位置づけを大切にしないといけない。エコプランふくいは地球温暖化防止活動推進センターの指定を請けており、温暖化問題の普及啓発の事業を担っている。来年度福井県のある市と教育委員会で、ストップ温暖化の家庭と連携をした事業をモデル的に行う。市と計画をつくっている。当然、福祉や防災のことを持ち込むことがある。NPO 団体自体が ESD の視点を持つべきである。NPO に能力的なことを含めて ESD を進めていくスタッフが必要である。これまで温暖化防止の教育に関して、必ずしも ESD の視点を入れていなかったが、来年度市とのモデル事業をしたい。

【長野県】中澤　朋代氏（松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科准教授）
　社会教育、学校教育を連携させていかなくては、仕組み的にうまく回らない。地域にいろいろな仕組みがある。中南信地域というのは公民館活動が盛んである。それを利用したコミュニティスクールなどの動きがある。ユネスコスクールの仕組みもある。地域の課題を地域住民が何となくぼんやりと持っている。地域住民が集まって、課題出しをしなくてはいけない。その地域の動きに学校教育がきちんと噛んでいく仕組みがなくては難しい。点と点でつながるのがスタートである。転任する先生がその地域に行った時に、どのような地域課題があるか見つける窓口として、地域の組織や公民館、協議会などがあることを学校が意識する。教員はそこに行く。環境教育をしている、地元で環境活動をしている団体は学校がどのように運営されているか知らない。環境教育を支援しているネットワークでは単元の研究を始め、一覧化し、この時期にこのような支援がほしいというアタリをつけている。先生が外部講師をピンポイントで呼ぶのではなく、児童生徒とともに外部講師を選び、招くことができるかもしれない。コーディネートを含め、社会教育を担っている人が学校のカリキュラムとの連携をしようとしている。地域に ESD という 1 つの視点で学校の教育に関わる人たちが現れていくとよい。学校が何かしなくてはいけないという環境がなくては進まないことを今回で理解できた。

【岐阜県】巽　徹氏（岐阜大学教育学部教授）
　岐阜は始まったばかりである。ここで終わると、元に戻ってしまうのが目に見える。継続して取り組むことが大事である。指定校のような事業をつくり、支援していくことを繰り返すしかない。今年の反省は、先生と学校と地域のワーキンググループで授業をつくったが、実施した授業を見たのは学校の先生とワーキンググループメンバーだけであった。これは少しもったいない。岐阜市内、中部地方環境事務所管内、せめて校長先生の名前で出せば、他の学校関係者が参加してくれたように思う。学校の授業づくりを支援するだけで精一杯であった。もう少し広げていけたらよかった。今後は啓発の意識を持たなくてはいけない。

【愛知県】千頭　聡氏（日本福祉大学国際福祉開発学部教授）
　昨日の午前中に愛知県の環境教育の会議があり、午後からは名古屋市の環境教育に関する会議があった。午前中の会議では、児童館が環境教育の担い手になっていないということ、午後の会議は、子ども会が環境教育の担い手になっていないということであった。この事業はフォーマルエデュケーションが中心であったが、ノンフォーマルエ

デュケーションの領域も考えないといけない。児童館のプログラム、子ども会などいろいろな仕組みがあるが、そのようなところでできることも実たくさんある。児童館や子ども会の活動は本来の ESD、SD につながるネタが多くある。そこでのプログラムの発展を誰が考えるのかが気になっている。市レベルでは、今年半田市が生涯学習計画の中に ESD を入れようとしている。担い手を学校だけにせず、今後は地域の多様な主体を考えていくべきである。

【三重県】松岡　守氏（三重大学教育学部教授）

　ESD を広める観点から言うと、繰り返しになるが、CST はリードする授業を実践して、それを広める使命を持っている人である。そういう教員を見つけて ESD を実施してほしいと言えば、自動的に広めることが期待できる。大学の付属学校で取り組んだ学校があるが、付属学校もテーマを定めて研究して公開する、広めるという使命がある。三重大学でも、付属学校の公開授業となると、何百人と来る。使命を持った学校に取り組みを依頼して取り上げてもらえれば大きくすることができる。市町村にも研究指定校はある。その研究テーマとして 2 年程度実施していただく。その市町村のすべての学校の先生が集まり広めることができる。支援内容を提示して公募すれば、手を上げる市町村があるかもしれない。継続という観点からすると、人のつながりが継続につながると感じている。

【北陸】鈴木　克徳氏（金沢大学環境保全センター長・教授）

　人と人とのつながりとして、懇親会が重要だという声があった。ヒューマンネットワークが大事である。この 3 年間を見た時に、福井県は 3 校で実施した。鳴鹿小学校、敦賀気比高校付属中学校、福井大学附属中学校の 3 者の連携、協働といったネットワークは作られていない。石川県の場合は、池端先生の力によって三馬小の先生と十一屋小をつなぐことができた。もっとやってきたことを大切にしたほうがよい。関わってきた人のつながりがつくれている。北陸のネットワークは今まで関係性のあった人のネットワークだが、違ったところの人たちが集まることで力を分かち合うこともできる。いろいろな地域の ESD をリードしていけるような形になる仕組みができたらよい。最近言っているのは、地域の話を NGO や地域の人だけでするのはもったいない。地域には学校という立派な組織がある。学校とのつながりを考えたほうがよい。地域から学校を見るか、学校から地域を見るかは別として、地域課題を考えていく時には両者が繋がっていく仕組みをつくったほうがよい。今までは学校中心でやってきたが、問題は地域課題にどう取り組むかである。どうお互いのつながりをつくっていくか、である。学校から見れば、地域にどう出て行くか。地域から見れば、学校にどうつながりを求めていくか。そういった話はこれから必要になってくる。その動きは現に出始めているが、まだそれほど広がってはいない。社会教育は社会教育だけで動いている世界が多い。

■中澤　朋代氏（松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科准教授）

　学校はお金がないので、外部講師を呼ぶことができない。連携したくても、時間がない。地域が持ち出しで、いろいろな寄付を募って可能にする、行政の予算を使うという工夫が必要である。学校と地域がずれるのは、両者の言葉の使い方が違うからである。そこを整えると意外とうまくいく気もする。

評価の話で気になったが、学校の評価もそうだが、子どもたちの自己評価や、参加者が参加型で評価するようなことが入らないかと思った。身につけたい能力を事前に設定し、それに合わせて計画を立てて、中間で直しながら、最後評価をする。あくまで他者評価である。参加した児童や生徒の変化や、課題に対してどこまで自分の力で関われたかなどの自己評価は重要である。NGO などでも、自己評価は研究されている。課題に対する達成評価も含めて、今後見ていけたらよい。

【長野・東海】新海　洋子氏（環境省中部環境パートナーシップオフィス　チーフプロデューサー）

今後について 3 点考えたいことがある。1 点目は、各県や市町村で ESD 活動モデルの公募をし、多少の資金を得て実施する。多様な事例をつくっていく。自治体の少ない予算の中でだが、工夫すれば、学校と地域が連携した ESD 活動づくりを実施したいという地域があるはずだ。発掘する必要がある。本事業の成果を継続してアプローチすることにもつながる。そういった提案を環境省にもしていきたい。大学にも各県、市町村にもしていきたい。

2 点目は、学校の教員や地域の人々による ESD の研究会を実施したい。本事業の成果をよりブラッシュアップし実践するための研究を行う。10 年間 ESD 事業を実践する中で、つながりをもった校長先生や自治体職員が退職されたりしている。その方々の経験やネットワークを活用し、若手の先生や活動実践者との具体的実践につながる研究を行う。EPO でそういうことができないのか、というお問合せもいただいている。

3 点目は、公民館など地域の拠点や学びの場を活用したアプローチをしたい。EPO スタッフだけでなく、この間培ったネットワークに連なる人々と一緒に進めていく。本事業の経験や成果を活用した地域での発展を目指したい。

指標	項目	富山	石川	福井	長野	岐阜	愛知	三重	北陸	東海	検証委員	
		松本氏	池端氏	吉川氏	中澤氏	巽氏	千頭氏	松岡氏	鈴木氏	新海	宮島氏	谷戸氏
1	**子どもに「育みたい力」を明確にし、「育みたい力」が育まれた**	短い単元の中で「育みたい力」をつけるには、**ねらいを明確にした単元構想（手だて）をすることで、ねらいに迫る**ことができる。	学校における授業研究をベースとし、その目標に「育みたい力」を重ねることで、単元計画及び本時における育むための授業の工夫が進み、子ども達の成果物や授業の様子及びアンケート調査からも、**育まれたことが推察**された。	**具体性のあるテーマを自分に引き寄せることができ**、自らが「育みたい」という意識を持たせることが**できた**と思います。	能力評価ができていたかについては**確認が取れていません**。仮に育みたい力が指導者（教員）の中にあっても、どこかに**文言化されていなければ共有が難しい**と思われます。**ルーブリック評価など授業前に整理**されていれば、と思います。	**おおむね達成できた**のではないかと考えます。３年間の授業作りを通して、どの様な「目」を生徒たちに持ってほしいか？という議論が指導する側で多く行われた。ただし、教育全般に言えることですが、すぐに「力」となって目に見える形で現れるとは限りませんので、**「育みたい力」が育まれたと断言することは難しい**と思います。	**解決すべき課題が明確に示されたため、子どもたちが、何を目的に、何を議論すればいいかが明確であり、子どもたちがその課題解決に向けて議論を積み重ねることができた**結果、当初のねらい通りの**「育みたい力」が育まれた**。	指標いずれも5段階評価で言えば「そう思う」（「とてもそう思う」の一歩手前）になると思います。理由は**基本特定の学校の特定のクラスに限られ、その展開は先生方の今後の活躍に委ねるしかない**からです。**この事業は意義あるもの**と思いますが、**同時に限界も感じ**ています。	**部分的にはイエスと言える**のではないかと思います。	**子どもの育みたい力を明確にし、地域の課題を教材にすることで、子どもが自分ごととして課題を認識し学習に取り組む力や、課題への関心、課題解決のための行動力の育み**を促した。また、**教員が子どもに寄り添い、子どもの思考を揺さぶることで、主体的な学習意欲の高まり**が見られた。	源池小の例では初めてのこともあって、外部講師が授業を進める形になってしまい、**育みたい力が不明確になったきらい**がある。しかし、映像教材を引き合いに**子どもたちは自然を守るために何をすれば よいかを自分の言葉で 発言**していた。	ESDの視点を取り入れた学習を通して、伝え合って学ぶ力の育成といった点で進めてきたが、**体験したり調べたり考えたりしたことを伝えようとする意欲の向上**が大いにみられた。**子どもたちにかがついてきたように感じる**。ただ、**思考力判断力の向上といった面では客観的な評価が難しい**と感じた。
2	**子どもたちの当事者意識、自己肯定感の育みにつながった**	映像に出てくる追究者や、学級で追究している仲間を教材にすることで、**一人一人の追究力、そして自己肯定感の育みにつながる**。	ただ**評価計画が事業計画段階で 明確になっていないと、教師サイドから出力されないので改善**が必要である。	グループで話し合うこと、結果を発表することによって、**自信を持つことができたと子どもたちの腹度から感じた**。	**当事者意識には確実に繋がっている**と思われます。自己肯定感については、子どもの発育に関わる他の要素も複雑に絡み合うため、**授業のあり方のみでは単純に計れない**と考えます。	本年度の中学校での実践を見ていても、生徒たちの中で、**自分の身近な地域に目を向け、そこにどの様に働きかけていくべきかを考え始めた様子**が見て取れた。そうした意味で、**当事者意識は確実に高まった**。	問題設定が、かつて学校でみんなが取り組んだピオトープの再生であったため、**自分たちの問題としての意識があり、どうすれば再生できるかについて、自分事としての議論**ができた。	－	教員が育みたい力について**意識して授業を行おうとする姿勢は見られました**が、必ずしもその**意図が充分に児童生徒に伝わっていたかは疑問**です。		会田中学では意外なことに、当初は地域の自然にあまり関心が無いように見受けられた。地元の自然に関係するテーマの中で、**当事者意識が芽生え、自分なりに足元の環境を真剣に考え始め、郷土への誇りが芽生えるのが感じられた**。	体験を通して地域を見つめ、**自分にできることはないかを考えることができるようになってきた**。そのことが**地域の一員としての自覚が芽生え、自己肯定感にもつながっていく**ものと考える。
3	**子どもたちの地域への関心、課題解決のための行動（力）が育まれた**	**地域への行動を中核に据えた（時間をたっぷりとる）単元展開をする上で映像教材は効果的**である。	地域（校区）のSDの課題と出会い、調べ、話し合い、行動（表現）することを通して、**地域に生きる自分を自覚し当事者意識の涵養につながった**。また、**地域のSDの課題解決に向かって体験的に学習したプロセスを、地域の方や保護者、専門家のみなさんから褒められることで、学習した意義と共に、自己肯定感を高めること**になった。	自分で調べたり、結果を出すために動くという行動は、**体験やグループ活動で育まれることであり、そのことが実感できる取組**であった。	山岳体験から学校林へ中学生の意識が移るなど、**地域への関心が生徒に育まれていきました**。課題解決の行動については、地域のどの窓口に相談・提案するかなど、**子どもたちが得にくい情報もあるため、指導者等の支援もある程度必要**だと考えます。	前項で述べたように**子どもたちの地域への関心は高まった**。課題解決のための行動力については、**公開授業後の様子を学校の先生方にお伺いしたい**ところです。	授業の形式に関わっては、ワークショップ形式で、子どもたちが自由に意見を出し合うことができたため、**主体的に問題解決への提案を出し合うことができた**。内容（テーマ）としても、**学校内の課題を取り上げられたことで、自分たちで 解決するのだという意識の醸成を図ることができた**。	－	北陸3県の**すべてのケースにおいてある程度の達成感が児童生徒に得られた**ように思います。それが結果的に自己肯定感につながっているように思います。		公開授業だけでは、**行動力の検証は難しい**。会田中で水源地を実際に見に行った話を聞いたり、信大付属長野小でヤギの飼育の**役割分担を自分達の話合いで決めたりするのを見て、行動力が育まれている**のではないかと思える場面もあった。	**地域に関心を持ち、意欲的に学習に取り組んでいこうという姿がたくさん見られる**ようになってきた。また、**課題解決に向け、みんなで考え合って、行動していこうとする姿勢**が見られた。より**楽敵な地域にということで自分たちにできることとして「あいさつ」がしっかりできるようになってきた**ことにもそのことがうかがえた。

4	**教員の授業力が高められ、教員のSDへの関心が強くなった**	委員と教員が単元構想段階から意見交換を続けることが、関心の高まりにつながる。	現地学習から出発し、文献調査、ゲストティーチャーからの講義、現地再調査、関係者へのインタビューなど、**地域の関心を深めSDの解決のために次々と考えること、話し合うこと、調べること、日常生活を見直すこと、自分にできることなどに進展する行動につながった。**また、そのプロセスでは、**考えること調べることが増えることに楽しみや充実感を持つ子ども達が出現してきていることは頼もしい**。	**モデル授業としてステークホルダーがフォローし、評価したことで教員の関心が高められた**と思う。	**ワークショップの手法の習得、生徒への関わり方など、教員にも変化があったよう**に感じています。教員のSDやESDへの理解はそれぞれであり、特に**地域のSDにまで掘り下げて教材活用をすることは、異動の多い教師一存では限界がある**と感じています。	教員の役割は通常「教えること」ととらえられるが、ESDの授業においては、**異なる役割を教員が担うという意識に変わってきたと思われます**。つまり、**生徒と共に課題を探し、解決を目指すという立場であるべきだとの認識**が広がった。ESD**への関心は以前よりは強くなったと思われるが、教員の仕事の量や幅は広く、また、多忙を極めていることから、ESDのみに時間を割くことができない現状は依然としてあるのではないか**と思う。	ワークショップ形式の授業によって、**子どもたちが多様な意見を率直に出し合う雰囲気が育まれ**た。その結果、**当初教員側が想定したシナリオ通りではなかった部分もあるかもしれないが、ESDの観点から考えれば、それがかえって、教員の授業力の向上につながったと言える**のではないか。	−	富山、石川では児童生徒の地域への関心が高まったと言えると思います。それが課題解決のための行動力につながったかどうかは**この単元だけでは評価できない**ように思います。	教員のインタビューから「教員の授業に対する向き合い方の変化」を把握することができた。「子どもへの発問や授業の仕方によって、子どもに培われる能力が変わってくる」「授業づくりの際に、どこに向かっていけばよいのかを考えるようになった「教員が意図をもって授業づくりをすると生徒が変わる」といったコメントがあった。**ESD授業を実施することによって、教員の地域のSDの課題に対する関心が強くなり、そのことによって教員自身の授業づくりへの向き合い方が変化し、地域の人々とESD授業をつくることでより授業力が高まっている**ようだ。**子どもが食いつく授業へと変わり、さらに教員はやる気をもち、子ども、教員の相互の学びあいが豊かにしている。教員の授業力は、子ども、地域の人々、校長先生など授業づくりに関わる人々との関係性の中で高められている**ようだ。	環境教育では一つの課題に一つの答えが対応する訳でなく複数の回答がある。したがって生徒の意見の背景にある論理性に注目する必要がある。**教員も柔軟な応対が要求されるが、その過程で関心度も真剣度も間違いなく高まってきていた。**	知識伝達型から子どもたちに考えさせようとする姿勢が多く見られるようになった。また、**地域資源に目を向け、それをどのように子どもたちの学習活動に結びつけていくかを絶えず考える**ようになった。また、**教師がSDとは何かを自分なりにつかみ、語れる**ようになってきた。
5	**地域の人々とESD授業をつくることで、教員の授業力が高まった**	**授業力の向上につながる**。	ESDの授業を実践するプロセスで、**教員が地域の人々とつながりを深めながら、地域のＳＤの課題に気づき理解を深めることで、教師自身の社会人としての問題意識や当事者意識が強化され、その時代の地域の学校としてのスタンダードを考え授業を創ろうとする根源的なカを高めた**。また、**地域の方々から見てわかる授業になれることが求められることからも教員の授業改善に寄与した**。	**地域やいろいろな分野の情報を整理して授業につなげる手法は教員の授業力を高める**ことに大切なことだと思います。**ESDのプロセスを大切にすることが浸透している**と感じた。	モデル校周辺では**外部講師の協力を経て、体験的な学習**を行い、それを**教員が授業の中で概念化していく（課題の抽出やまとめ等）パターン**が、ある程度構築できてきたように感じています。ただし、そのためには**学校と地域をつなぐコーディネーターが不可欠**。	**各分野の専門的な知識や指導経験を持った方々の協働、さらには、映像教材などの製作スペシャリストと協働して映像教材を作成するなどの面で授業力は高まった**と思われる。	−	−	ワーキング・グループの討議を通じ、**教員の授業力は高まった**と思います。それが**どこまでSDにつながっているかはケースバイケース**のように思います。		ESD授業の内容については、**教員の守備範囲に収まらないものも多いと思慮**されますが、地域の専門家・実践活動家の知見を授業に組み込むことにより、**教員が自信をもった**。子どもたちだけでなく**自分達も学べたという教員の感想も何件か聞いた。**	教員が**地域の人たちの力を気軽に借りたり、相談をなげかけたりできる**ようになり、**地域とのつながりが深く**なった。そのことで**授業の幅が広がり、授業力が高まった**。また、そのことが**地域の教育力の高まりにもつながっている**と感じる。
6	**持続可能な社会の担い手を育むためには、学校と地域の連携が必須であった**	**必須とははっきり言えないかもしれないが、一つの方策としては効果的**。	ESDの授業では、**地域の当事者、地域で生きていることの自覚が迫られる**。それは、**地域の多様な知性や文化の担い手、あるいは利害関係者として地域の人々と出会い直す中で、子ども達の中に醸成されており、学校と地域の連携は必然**である。	**ESDは地域の持続可能性が問題であって、地域の問題として取り上げること**ができたと思う。	**地域と学校が分離していては、地域課題に向き合う人材が育たない**。地域の持続可能性を考える上でも、**学校との連携は自然なものであり、必須**と考えます。	**学校と地域、外部の人材とが協働で教育を進める一つのモデル**となったと思う。	−	−	特に、**地域のSD、グローバルなSDといった観点からどこまで深められたかは、教員によって違っていた**ように思われました。	「地域の人が地域のことを教えると先生とは違う視点、新しい風が入る」「実際のフィールドで活動している人が体験や思いを話すとインパクトが強く、教材になる」「外部から評価をされることで、教員や子どものモチベーションが上がる」といったコメントを得た。**学校と地域が一緒になって授業づくりを担い、地域の人々のESD授業に対するアドバイスによって授業内容が豊かになった**ようだ。また**外部の人の評価を得ることで 子どもや教員の自信につながった。地域の人は学校に必要とされているという実感を持つ**ことできた。**学校と地域がつながることで、子どもも教員も地域の人も、それぞれが深く豊かになる授業が実践**された。	地域の環境を学習テーマに選んだとしても、座学のみで全てを学べる訳ではない。**地域の人々がどのように対応しているかを知ることが大切**である。そのためには**学校と地域の連携は必須であり、連携があったからこそ成果が上がった**と感じている。	まずは**持続可能な地域にといった視点で、地域学習をしていくことが柱になり、郷土愛を育てるためにも学校と地域の連**携が欠かせない。学校と地域と連携することにより、**地域の思いや願いが学校に反映し、教育活動が活性**する。また、それが**カリキュラムづくりにつながり、教職員が転勤しても学習活動が持続していく仕組み**となる。

	富山	石川	福井	長野	岐阜	愛知	三重	北陸	東海	検証委員	
	松本氏	池端氏	吉川氏	中澤氏	巽氏	千頭氏	松岡氏	鈴木氏	新海氏	宮島氏	谷戸氏
ご意見	1.**今回の指定校のように、実践をする（指定校：やらざるを得ない場）**⇔2.**実践者による発表や、ユネスコスクール交流会で発表する**（教員、子どものいきいきした姿） **1.2を繰り返す**しかないのではないか。	・ESDによって**骨太な若手教員が育成されていることを実証するためにも、実証授業等に関わった教員をネットワーク化すること**が必要である。 ・ESDの実践を、**学校の言葉で教師の言葉で子ども達の言葉でも説明できることが重要**である。富山や大牟田などで行われている、ESD**実践を子ども達同士が交流し合うことは極めて重要**である。（子ども達の交流は次代のキーワードである。） ・**教員も含め若手：ユースを対称としたESDに関する基本的な理解のための研修や実践交流、異業種間交流などを進める**必要がある。 ・**公民館や子ども会、社会教育施設、NPOなどの社会教育、生涯学習におけるESDの流れをつくることが重要**である。	当NPOとしては、**温暖化問題の出前授業をESDの視点ですすめることを強化する**予定でいます。**実践・成果を広めることが重要であると考え、実践をすすめる体制をどう作っていくのか**でしょうが、少なくとも、**実践を評価する場や実践を報告する場を作っていくことがNPOが関われること**です。	長野県松本市では、中信地区環境教育ネットワークという支援団体により、学校と地域講師のマッチングを行っています。こうした**横串の組織的な学校支援が重要**と考えます。しかし、近年、学校がコミュニティスクールへの動きの中で、校区での人材活用に目が向き、専門テーマに関する人材派遣の重要性が一時的に見えにくくなっています。公民館活動など地域にある有効なしくみを利用し、調整と連携を図ろうとしています。学校授業にまちづくりのワークショップなども報告され始めています。 また、付属小学校の動物を飼う中で信頼関係と創意工夫、発展的な教育を促進する事例では、こうした指導経験をした教師が他校に赴任することにより、県内に影響が広がっています。 こうした答えのない学習も今後、学校教育の中に受け入れられる素地が醸成されつつあるように感じています。	これまでの取り組みが、ESD**を推進させるための一つのモデルとして有効に働く**のではないかと思う。しかし、学校教育の中で占める割合としては、**未だにわずかな部分であるという認識に大きな変化は出ていない**ように思われる。ESDの取り組みが、実は、**他の教育活動も大きく変革させていく可能性を持っていることを認識していただくために、今後も外部との繋がりを持った今回のような取り組みを継続していくことが必要**である。	**個々の毎年の講義（取り組み）の成果と課題を、ある程度一般化して伝えることが必要**である。その際、**学校と外部の資源との協働の意味や効果を適切に評価していくことが重要**である。 また、この事業の中で**ESDに取り組んだ学校や先生方に対するフォローアップも必要**である。	–	・3年間の成果というが、**地域の中で3年間の成果の共有が進んでいません**。それぞれの年の成果を、それぞれの年の関係者が共有しているに過ぎないと思います。**地域（各県）の中で3年間の成果全体を共有する機会が必要**でしょう。 ・地域のESD活動は本事業だけではありません。**地域のESD活動全体の中で本事業をどう位置付けるのかをきちんと議論**することが必要でしょう。例えば、北陸では本事業によりESDネットワークが構築されたわけではなく、既存のESDネットワークを活用して本事業が行われています。**本事業の評価は、そのような観点から行わる必要があり、本事業単独の評価を行おうとしても、あまり意味を持たな**いように思います。 ・北陸3県では、本当の意味での地域の関係者は、**3年間を通じてワーキンググループには入ったことがありません**。これは、本来再検討されるべき課題でしょう。他方、比較的狭い関係者の間だけで検討されていた単元計画作りが、**様々な専門性を有する識者と議論することにより、深みを増したと言える**と思います。そのような**プラスマイナスの経験をどう地域で活かしていくのか、そのための仕組みづくり**が必要かと思います。	3年間の成果は**アプローチ次第で学校と地域でESD授業を実施することができ**ることが明らかになったことである。教員が変わり、子どもが変わる、学校が変わる可能性があることを事実として把握した。この成果をどう活かすか、**多様なスタイルのモデル事業を展開し続けるしかない。協働による教員研修や授業づくりをし続ける**しかない。**教育委員会に成果を伝える**しかない。 また、学校だけではなく、社会教育施設、様々な学習の場でESDの展開を説明しにいくことである。**動物園、水族館、博物館、企業の環境学習施設においてESDプログラムづくりを推奨していく**ことである。**他地域の様々な事例から学び、相互参照をして中部7県、各市町村独自の進め方でなにがしら展開できるシナリ**オもできるであろう。この事業だけでなく、**地域には様々なSDを目指した取り組み**がある。いかに協働できる環境をつくるかも考えていくことができる。**あとは人材**である。まだまだ地域内、地域間でコーディネートを担う人材が少ない。行政や企業、大学と連携し、**ESDコミュニティの拡大ができると考える。そういう思考やその可能性へと本事業は導いた。可能性はいくつもある。もう一つの課題は、いかにオープンでありつづけるかである。ボーダレスにつながっていくこと、多様なゆるやかなネットワーク、しなやかさのある関係性をESD実践者同士が持ち続けることである。**	松本市立源池小学校でのESD授業では、地域の人たちの果たす役割が大きかった。適材適所の人たちをその都度探すのはなかなか難しいので、**学校と地域の間を取り持つ環境人材のネットワーク化**が必要であると感じています。松本市の中信地区環境教育ネットワークはその好事例と思いますが、長野市でも松本を参考に、ネットワークづくりに取り組んでいます。県及び市の教育委員会から後援をうけ、NPOを中心に意見交換会を開催するところまで準備が進んでいます。**個々の先生が直接、気軽にアクセスできるネットワークが出来るかどうか**がカギになると思います。	三重県下において**ESDの認知はまだまだ**である。初年度に実証させていただいたが、その後２年間で県下で実証した学校がどうであったかもわからない状態です。**実証校だけでも交流することで、それらの学校がつながりを持ちながら、県下の核となっていけるのではないか**と思う。 また、各市でユネスコスクールの拡大の動きがあるようだが、その流れを利用してESDを普及させることができる。しかし本校も当初はユネスコスクールに加盟してもESDって何？といった段階であった。まずは教育委員会が主導して**ユネスコスクールでプログラムを普及し、そして、学校間で実践の交流や情報交換などを行い学校間のネットワーク化ができれば良い**。そうした際に**ESDコーディネーター的な人の存在**があるとありがたい。当市でもそうであるが、少子化のため人口減少による課題がある。流失人口を防ぐためにも郷土愛を育む「ふるさと学習」の実施が市の新たな一つの大きなテーマになっている。ESDを基にした学習が広がるチャンスであるともいえる。**「ふるさと学習」にESDの要素をいれていくことによっても広めていける**。 また、新学習指導要領において、**アクティブラーニングなどESDの考え方が多く取り入れられる**ようである。**実証校・実践校がその先駆けとなる**ことになる。より実践を深めながらそれを交流する場が多くあればと思う。 そして何よりも、**新たな教育活動でなく、各教科を関連づけながら今ある教育活動をESDの視点で見直し整理していく**ことによって、子どもたちにこれからの未来に必要な力をつけていくことだということを強調し広めていく必要がある。

3. プログラム作成のためのワーキンググループ設置・開催、地域プログラムの実証及び ESD に関する調査

中部７県での ESD 環境教育プログラム作成・展開を行うために、各県に、大学有識者、実証授業学校教員、地域の ESD 環境教育実践者、行政職員が加わるワーキンググループを設置した。

ワーキンググループでは、実証授業前 1 回、実証授業後 1 回の計２回会議を行い、第１回会議においては、今年度の実証校における授業案についての意見交換、第２回会議においては実施した実証授業についての評価を行った。

【平成 27 年度各県ワーキンググループメンバー一覧表】※敬称略

	名前	所属	備考
富山県 10 名	松本　謙一	富山大学人間発達科学部教授	形成推進委員
	舟杉　克巳	富山市立神通碧小学校校長	
	福田　有児	富山市立神通碧小学校教頭	
	堀　泰洋	富山市立神通碧小学校教諭	
	山本　裕美子	富山市立神通碧小学校教諭	
	髙木　要志男	株式会社富山教弘取締役	
	本田　恭子	環境教育ネットワークとやまエコひろばコーディネーター	
	水上　庄子	富山ユネスコ協会副会長	
	塚本　賢	富山県生活環境文化部環境政策課	
	富山市教育委員会		協力
	鈴木　克徳	中部 ESD 環境教育プログラム形成推進委員会委員・北陸コーディネーター	
石川県 9 名	鈴木　克徳	中部 ESD 環境教育プログラム形成推進委員会委員・北陸コーディネーター/金沢大学環境保全センター長・教授	形成推進委員
	池端　弘久	金沢市教育委員会生涯学習課キゴ山少年自然の家館長	形成推進委員
	松本　亮	金沢市立十一屋小学校校長	
	杉本　倫代	金沢市立十一屋小学校教諭	
	坂口　信幸	金沢市立十一屋小学校教諭	
	加藤　隆弘	金沢大学教育実践支援センター准教授	
	青海　万里子	金沢エコライフくらぶ代表	
	今井　和愛	いしかわ地球市民の会/いーち代表	
	奥泉　元	石川県環境部	
福井県 10 名	松田　淑子	福井大学教育地域科学部教授	形成推進委員
	細田　和雄	福井大学教育地域科学部附属中学校副校長	
	森田　史生	福井大学教育地域科学部附属中学校研究主任	
	奥村　栄司郎	福井大学教育地域科学部附属中学校教諭	
	杉山　晋平	福井大学教育地域科学部特命助教	

	吉川　守秋	NPO 法人エコプランふくい事務局長	
	小竹　三恵子	ふくいユネスコ協会副会長	
	前　知代	北陸 ESD 推進コンソーシアム福井県 ESD 推進コーディネーター	
	齋藤　洋	福井県安全環境部環境政策課環境計画推進グループ主任	
	鈴木　克徳	中部 ESD 環境教育プログラム形成推進委員会委員・北陸コーディネーター	
長野県 11 名	中澤　朋代	松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科准教授	形成推進委員
	畔上　一康	信州大学教育学部附属長野小学校　副校長	
	河手　正彦	信州大学教育学部附属長野小学校　教頭	
	宮島　新	信州大学教育学部附属長野小学校　2 年 2 組教諭兼研究主任	
	小川　浩貴	信州大学教育学部附属長野小学校　3 年 2 組教諭	
	村松　浩幸	信州大学教育学部教授	
	渡辺　隆一	NPO 法人みどりの市民理事	
	宮島　和雄	一般社団法人長野県環境保全協会専務理事	
	丸山　寛典	株式会社ミールケア常務取締役	
	大場　政哉	長野県環境部環境政策課企画経理係主任	
	新海　洋子	環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー/中部 ESD 環境教育プログラム形成推進委員・長野東海コーディネーター	
岐阜県 7 名	巽　徹	岐阜大学教育学部教授	形成推進委員
	宮部　寿	岐阜市立青山中学校教頭	
	小川　佳広	岐阜市立青山中学校 1 学年主任	
	小林　由紀子	NPO 法人 e-plus 生涯学習研究所代表理事	
	神谷　由紀子	岐阜県環境生活部環境生活政策課政策企画係課長補佐兼係長	
	平井　花画	岐阜県ユネスコ協会会長	
	新海　洋子	環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー/中部 ESD 環境教育プログラム形成推進委員・長野東海コーディネーター	
愛知県 12 名	千頭　聡	日本福祉大学国際福祉開発学部教授	形成推進委員
	榊原　孝彦	半田市立板山小学校校長	
	小嶌　正嗣	半田市立板山小学校教頭	
	岩見　和貴	半田市立板山小学校 ESD リーダー	
	岩崎　祐樹	半田市立板山小学校 5 年生 1 組担任	
	鈴木　優	半田市立板山小学校 5 年生 2 組担任	
	大鹿　聖公	愛知教育大学自然科学系理科教育講座教授	
	安達　勝	名古屋ユネスコ協会理事	
	山﨑　喜一	愛知県教育委員会生涯学習課社会教育主事	
	福永　泰生	愛知県環境部環境政策課主幹	
	寺西　慶徳	名古屋市環境局環境企画課施策推進係	

	新海　洋子	環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー/中部ESD 環境教育プログラム形成推進委員・長野東海コーディネーター	
三重県 ９名	松岡　守	三重大学教育学部技術・ものづくり教育講座教授	形成推進委員
	今村　新次	四日市市立中部中学校校長	
	豊田　一浩	四日市市立中部中学校教頭	
	森　直也	四日市市立中部中学校３年生担任	
	伊藤　知毅	四日市市教育委員会事務局指導課主事	
	寺田　卓二	環境教育ネクストステップ研究会代表	
	矢口　芳枝	社団法人四日市大学エネルギー環境教育研究会副会長兼事務局長	
	内田　郁夫	三重県環境生活部地球温暖化対策課 環境評価・活動班	
	新海　洋子	環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー/中部ESD 環境教育プログラム形成推進委員・長野東海コーディネーター	

各県の実施状況について以下の点を報告する。

①ワーキンググループ会議

②実証授業

③授業実践アンケート

(1)富山県

①ワーキンググループ会議（ワーキンググループメンバーについては、29 ～31 ページ一覧表を参照）

【第 1 回会議】

日 時：平成 27 年 8 月 3 日（月） 9:30～12:00

場 所：富山市立神通碧小学校

出席者：13 名(ワーキンググループメンバー９名 EPO 中部 1 名 地方事務所 1 名 事務局 2 名)

主な議題：ア 本事業の説明

イ 本事業における神通碧小学校の授業案について

〈議事内容〉

ア 本事業の説明

本事業の全体概要及び形成推進委員会において協議した以下の中部 7 県の共通目標・これまでとの相違点などについて報告し共有した。

●教員が地域（課題/SD）を意識した授業をつくる。

●学びのプロセスを可視化する。

●教員の成長、変化を捉える（地域の大人の変化も捉える）。

●継続性を担保するためのしくみやありかたを見いだす。

また、過去２年間の事業との相違点として、

●映像教材を新たに作成しない（過去製作したもので活用できるものは使う）であることを説明した。

●各県での報告会/発表会は行わない

●マスコミの取材は必須ではない

このほか、今年度富山県の実証校である神通碧小学校への依頼事項を確認した。

イ 本事業における神通碧小学校の授業案について

今年度の実証校から実証授業内容について説明を受けた後、意見交換をした。事務局から、神通碧小学校はワーキングメンバーとして 1 年目から参加していること、昨年の実証校である堀川小学校は、神通碧小学校での活動を映像教材にして活用し授業を行ったことについて説明した。

今年度は神通碧小学校に隣接する楡原中学校と小中連携による授業展開を行うこととなった。分野は「国際交流」であり、富山県内の国際交流員との交流を通して世界を理解する授業を進めることとしてなった。８月に第１回の交流、10 月 2 日に実証授業を行うこととなった。

[意見交換]

子どもの姿と課題の持たせ方についての意見が出された。担当教員から、「子どもたちにはこれまでの単元を通して、国際交流員の方とコミュニケーションをとりたい気持ち、もっと話したい・知りたいという意欲が出てきている」と子どもの様子を報告いただき、「身近なつながりの中から自分と外国とのつながりを発見することが必要である」「単に外国を知るのではなく、外国を知ることにより自分の地域について深く認識し直すことが不可欠である」「課題意識をもたせるときに、次のステップへどうつながっていくか、つなぎ方が重要である」といった意見が交わされた。

次に、単元を通して培いたい力、コミュニケーション力についての質問が出され、「コミュニケーション力をどの程度高めることを目標としているのか、育むためにどのような手法を組み入れるかを考える必要がある」といった指摘があった。

本授業の重要なプログラムとなる国際交流員との交流については、「2 回しか交流する機会がないので、1 回目は、各グループがそれぞれ興味のあることを質問し国についての理解を深め、2 回目は国を教材にするのではなく、国際交流員と直接触れ合うことに価値がある授業にすることが望ましいのではないか」「多少問題意識を児童生徒に与え、国際交流員の生き方から何を学ぶかという視点を重視した授業にしてはどうか」といった意見があった。その際に、違いから多様性があることを感じるだけでなく、その人と自分との共通性も必ずおさえる必要があるという意見があった。2 回の交流でなにをどこまでするのか、どういったテーマで学習を深めるのか、培いたい力を育むために、国際交流員を教材にどのような仕掛けの授業を展開するか、メンバーで意見を交わした。最後に、2 回の交流会を効果的な学びの機会にするために、1 回目以降 2 回目の交流会まで、国際交流員とメールでのやりとりをして交流を深めていくことができないか、という授業の仕掛けの提案がされた。以後の事業及び授業のスケジュールを確認し、以後、第 2 回の公開実証授業までの間、ワーキングメンバー内で情報共有をし、授業づくりを進めることとした。

実証授業について、以下の内容が決定した。

担当教員：堀　泰洋先生(教務主任)山本裕美子先生（6 年生担任）他 4 名

授業単元名：「つながる　広がる　私と世界（仮）」 想定：15 時限

対象：小学 6 年生児童 12 名、中学 1 年生生徒 11 名　合計 23 名（合同授業）

授業内容：児童生徒が、世界を見つめていくことで、世界についての考えを深めるだけではなく、自分の生きている世界、地域を見直していく力を養う。また国際交流員との交流から、それぞれの国やその人たちの生き方に触れ、コミュニケーション力を高めるとともに、世界と自分たちとのつながりや広がりを感じる気持ちを育む。

実施教科：総合的な学習の時間における国際理解の分野

【第 2 回会議】

日　時：平成 27 年 10 月 2 日（金）　16:30～18:00

※14:00~14:45　公開実証授業後に実施。

場　所：富山市立神通碧小学校会議室

出席者：14 名(ワーキンググループ 9 名　EPO 中部 1 名　地方事務所 2 名　事務局 2 名)

主な議題：ア　公開実証授業について

イ　実証事業について

〈議事内容〉

ア　公開実証授業（小 6・中 1 合同公開校内研修会）について

［実施した教員のふりかえり］

■堀　泰洋先生（教務主任）

一人の子どもが持っている教材性を拠り所として、子どもたちが自分の追究やこれからの交流計画を見直すきっかけをもたせた。小学生の段階では、他国の文化や社会を詳しく調べたい、でよいが、中学生も一緒に活動しているという側面から深い理解まで導くこととした。ある児童は、異文化だけではなく、交流でもった疑問を基に自分の立場に置き換えて考えて、さらに 2 回目の交流に向けて探っていきたいという願いを持っていたため、材とした。発問に関しては、あえて広く投げかけた。

■山本裕美子先生(６年生担任)

小学生は調べ学習や自分の疑問をつかむために時間をかけており、材となった児童自身も自分の追究を悩み、自分のやってきたことを整理し自分の課題を見つけ、交際交流員とのメールを読み、矛盾に気づいた。一人ひとりの歩みに寄り添えた授業となった。

[意見交換]

一人の児童、友達を学習の材にしたことで、児童のもつ疑問や矛盾が他の児童の学びを引き出し、まだ追究が深まっていない児童が、他の児童の持つ疑問や矛盾に刺激を受けて、これからどう考えるかを認識するプロセスがこの授業の魅力であった。

また、小中連携によるグループが構成されており、児童生徒の学びあい、特に中学生がリーダーシップをとって小学生を導く姿に新たな授業の仕掛けを見いだした。いつもとは違う集団の中での経験は、特に中学生の成長を促すことができた。一方、各グループに教員が入ったが、教員が入ることで児童生徒の意見や疑問を引き出すことができた。

児童生徒間のコミュニケーションがうまくいった。教員がいなくてもできるようになるといい。反省点としては、グループで協議する論点があいまいだったため、話し合う内容に温度差や認識の違いがあった。課題を明確に示すことが重要で国際交流員とのメールのやりとりもこの授業の特色だが、２回の交流と２回のメールでのやり取りを実施した（する予定である）。メールの回数も２回と決まっているため、学習計画に１回目、２回目を予定はするが、児童生徒の学びの状況によって特に２回目のメールをいつどうやってどのタイミングで出すかが重要となり、そのことによって児童生徒の質問したい内容や知りたい情報が違うので、授業展開をする際の重要ポイントになる。今後については、本時を学習発表会に向けてのプロセスとして位置づけ、活かしていくことを共有した。

イ　実証事業に対する意見について

ワーキンググループ会議について、「ESD は客観性を大事にしなくてはいけないことを学べたことが一番新鮮なことで、そういった意味で教育関係者以外の方の意見を聞きながら授業をつくり上げていくのは刺激的だった」「ワーキンググループは２回以上ある方が望ましいが、資料作成や時間調整の面で学校側の負担とならないように実施するとよい」「色々な見方を勉強できた」という意見が出された。

一方で本事業のスケジュールに合わせていくこと、特に小中連携による授業実施のための調整や、国際交流員とのやりとり、その関係性のプロセスを重要とする授業だったため、日程の調整や児童生徒の学習状況を把握しながらのスケジュール管理が大変だったという教員からの意見があった。

また、実証したプログラムを今後教材として活用していくために、今回の授業でどのような結果が生まれたのか、メリット、デメリット、改善点を明確にする作業ができるとよい、子どもの変化、１回目の国際交流員との交流、メール、他学級内でのやりとりなど、子どもたち自身が自分の思いや考えの変化、プロセスを捉えられるようなしかけをすることが重要だという指摘もあった。

②実証授業

実証授業校：富山県富山市立神通碧小学校・楡原中学校
授業名：「つながる　広がる　私と世界」
対　象：中学校　小学校高学年
目　標：
●広く世界に目を向け、外国や外国の人々に関心をもち、進んでコミュニケーションを図っていこうとする態度を養

う。

- ●国際交流員との交流活動を通して、自国と他国の違いやよさに気づき、その違いや良さについてさらに調べたいことを見つけ、課題追究することができる。
- ●体験を通して感じたことや考えたことを話合い、外国や外国に住む人との関わり方を見つめ直していこうとする態度を育てる。

概　要：小学６年生と中学１年生が連携して実施する。５か国から富山県に来ている国際交流員との交流を通して、世界や外国の人の生き方を学ぶ授業である。日本での暮らしや仕事について、それぞれの国との違いは何なのか、児童生徒は質問を重ね、世界への関心を深める。どんどん知りたい気持ちが高まり、メールでの交流も行う。児童生徒は学習を通して調べたこと、感じたこと、考えたことを伝え合ったり、分かり合ったりする。その中で、多様な価値観や生き方に触れることが、自分自身や住んでいる地域を見つめ直すきっかけとなる。世界と自分達とのつながりや広がりを感じ、共に生きていく仲間として一人ひとりの違いを認め、尊重する気持ちを育む。

[該当する４つの環境分野とサブテーマ]

４つの分野	ともに生きる	社会参画	
		国際理解（異文化理解）	○
		健康	
	自然・生命	生命	
		自然への愛着	
		生態系・生物多様性	
		水	
		大気	
		土	
	ごみ・資源	3R	
		公害	
	エネルギー・地球温暖化	地球温暖化の起こる仕組みと影響	
		資源・エネルギー	
		産業	
		消費生活・衣食住	

[主な持続可能な社会づくりの構成概念]

持続可能な社会づくりの構成概念	関連するものに○	理由
多様性	○	自国及び他国に目を向け、共に生きる仲間として違いを認めることができる。
相互性	○	外国の人との交流を通して、外国の文化や歴史を調べたり、外国の人々の考え方を知り、世界の国々が関わりながら、暮らしや社会をつくっていることに気づき、理解する。
有限性		
公平性		
連携性	○	小学6年生・中学1年生が合同で学習、外国人との交流を通して、自分と異なる意見を受け止めながら、互いに協力して問題を解決していく。

責任性		
その他（）		

［主な ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度］

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度	関連するものに○	理由
批判的に考える力（批判）		
未来像を予測して計画を立てる力（未来）		
多面的、総合的に考える力（多面）	○	自国や外国との違いや共通点に目を向け、それらについて聞きたいことを尋ねたり、交流する中で感じたことを伝え合ったりする中に、様々な考え方・見方があることに気づく力を育てる。
コミュニケーションを行う力（伝達）	○	調べたこと、感じたことを積極的に伝え合ったり、分かり合ったりする。
他者と協力する態度（協力）	○	小学6年生・中学1年生が連携し、活動を行うことで、様々な意見を出し合い、役割を分担し合いながら個の追究を高める。
つながりを尊重する態度（関連）		
進んで参加する態度（参加）		

［学習指導要領との関連］

学年	教科/領域	学習内容
中学校	社会科 (地理的分野)	2（1）イ 世界各地の人々の生活と環境 世界各地における人々の生活の様子とその変容について、自然及び社会的条件と関連付けて考察させ、世界の人々の生活や環境の多様性を理解させる。
中学校	社会科 (公民的分野)	2（4）イ よりよい社会を目指して 持続可能な社会を形成するという観点から、私達がよりよい社会を気付いていくために解決すべき課題を探求させ、自分の考えをまとめる。
小学校 6 年	社会科	2（3）ア 我が国と経済や文化などの面でつながりが深い国の人々の生活の様子

［プログラム（単元・題材）の展開（総時数 15 時間扱い）］

時	学習課題	活動・学習内容	指導・支援の方法、ポイント等〔教材・必要物〕 【育まれる「ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度」】
1 ・ 2 時間目	自分と世界とのつながりを見つめよう	「世界が 100 人の村だったら」ワークショップを行う。	実際に身体を使うことで、世界の多様性を体感する。 世界を自分に引き寄せて感じさせ、学習の関心を高める。 〔PC、プロジェクタ〕 【参加】【多面】

3 時間目	外国の暮らしを調べよう	日本と外国の暮らしの共通点と相違点をまとめる。	共通点と相違点をまとめていく中で、自分の文化を見つめる。〔PC、プロジェクタ〕 【多面】【関連】
4 時間目	交流相手を知り、インタビュー内容を考えよう	外国人との交流をする前に、一人ひとりが尋ねてみたいことを考える。	これまでの学習で分かったこと、調べたことを踏まえて質問を考える。 〔PC、プロジェクタ、交流相手の情報資料〕
5･6 時間目	第 1 回目の交流の計画を立てよう	グループごとに自己紹介や尋ねる内容の計画を立てる。	交流相手に伝わるように、内容や自己紹介を考える。 〔ワークシート〕 【未来】【伝達】【協力】
7 時間目	第 1 回交流会	交流相手の国や社会や文化について学ぶ。 自分達の学校や住んでいる区域を紹介する。	小学 6 年生、中学 1 年生の良さを活かしながら交流を進め、積極的なコミュニケーションを図る。 〔ワークシート〕 【伝達】【協力】【参加】
8・9・10 時間目	よりよい交流にするために課題を決めて取り組もう	一人ひとりの課題に基づいて調べ学習を行い、考えをまとめる。	深く知りたいと感じたことや、より良い交流のために取り組みたい課題を設定する。 〔ワークシート〕 【未来】【多面】【参加】
11･12 時間目	見つめ直そう「つながる　広がる　私と世界」	課題についての追究を聞き合い、よりよい交流になるよう話合う。	友達の交流を教材とすることで、自分の交流内容を見直し、次の交流会での活動をより良くしようとする意識を育む。 自分の立場に引き寄せて見つめようとする。 〔ワークシート〕 【多面】【伝達】【参加】
13 時間目	第 2 回交流会	交流相手の国や生き方について聞き、自分の意見や考えを伝える。	1 回目の交流会、メールでの交流を踏まえて、相手の国、文化や生き方について学びを深める。 自分自身や自国についても見つめる機会をつくる。 【伝達】【協力】【参加】
14･15 時間目	伝えよう「つながる　広がる　私と世界」	学習発表会で保護者や地域の方に伝える。	伝わるように、伝え方構成を考える。 【未来】【伝達】【協力】

※時間外でメールでのやり取りをする。

［基となったモデルプログラム］

平成 26 年度プログラム 21：動物になって考えよう！せかい･動物かんきょう会議ワールドカフェ（株式会社ヌールエデザイン総合研究所「動物かんきょう会議プロジェクト」）

［地域化するにあたって配慮したこと、モデルプログラムから変更、追記したポイント、地域の協力者･場所･資源など］

多様な人々の生き方や考えに触れるため、国際交流員（アメリカ、ロシア、ブラジル、韓国、中国）との直接交流、メールでのやりとりを通して交流する。また、小学校と中学校が廊下で繋がっているという学校の特色を活かして、小学 6 年生、中学 1 年生が合同でグループワークや話合いを行うといった体験活動を活かした授業を行うことで、相互に刺激し合い、追究を深める。また、文化や自分を見つめる機会とした。

［プログラムの実証の概要］

日　時：平成 27 年 10 月 2 日（金）14:00~14:45

場　所：富山市立神通碧小学校

参加者：小学 6 年生児童　12 名　中学 1 年生生徒　11 名　計 23 名

概　要：国際交流員への思いの変化を、これからの活動に活かそうとしている友達の考えを聞き、自分の交流内容やこれからの活動をよりよいものにしようとする。

分	学習課題	活動・学習内容	指導・支援の方法、ポイントなど〔教材・必要物〕
45	友達の交流を聞き、これからの交流活動を見つめ直す契機とする	友達の課題についての追究を聞く。	最初に取り上げる子どもの交流内容や願いについての変化を、事前に掘り起こしておく。 子どもの想いや価値の変化を板書に位置付け、他の子どもに伝える。 友達の価値に寄り添おうとしたり、追究について自己の変化や深まりを感じている友達の姿から、新たな価値を見出そうとする心の動きを促す。
		各自、話合いを通して思ったこと、考えたことをカードにまとめる。	カードにまとめることで、自分の追究をふりかえらせる。 友達の追究を自分の立場に引き寄せて見つめようとするよう促す。
	これまでの国際交流員との交流を振り返り、今後の調べ活動や交流計画に活かそうとする	各自が次の交流会で聞きたいことを考える。 交流相手に聞きたいことを班で話し合う。 活動や交流計画を話合い、見直す。	一人ひとりを話合いに位置付けるように支援する。

［実証授業の様子］

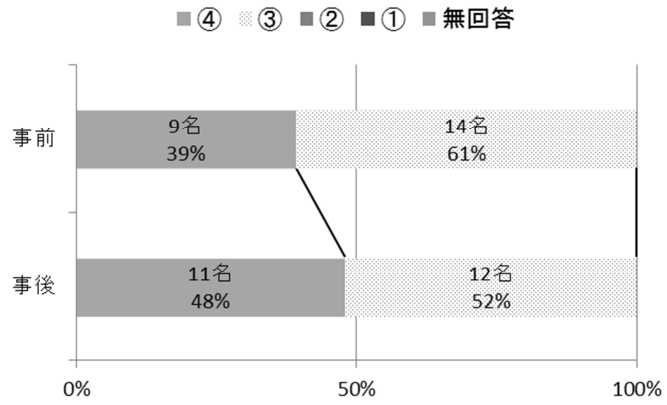
③授業実践アンケート

子どもを対象にしたアンケートを行った。

（回答者：実施前・実施後　小学 6 年生 12 名　中学 1 年生 11 名　合計 23 名）

問 1 .日本と外国の違いや共通点、よさに気づくことができる。

（できた←4　1→できなかった）



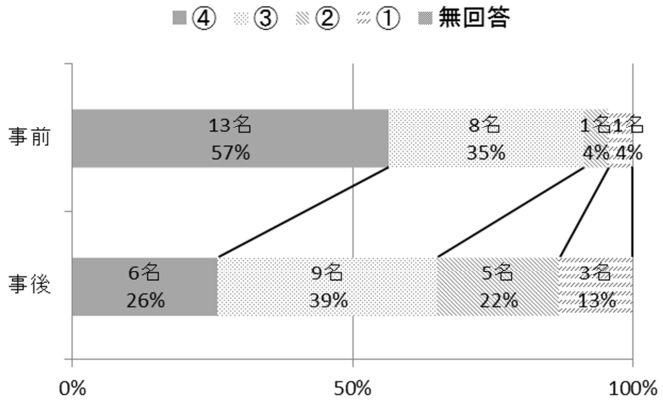
授業実施前と授業実施後を比較し、「できた（とてもできた含）」という子どもが、事前事後とも 100%だった。しかし、事後は、「とてもできた」という子どもが増えた。

■子どものコメント

・班のみんなが、そのようなことをとても大切にしていて、発表しあったりして、自分が興味をもつことができ、周りの人にもそれを伝えることができたから。

問 2 .日本と外国の違いや共通点、よさを調べたいと思っている。

（思う←4　1→思わない）



授業実施前と授業実施後を比較し、「思う（とても思う含）」という子どもが、事前は 92%だったが、事後は 78%と減っている。

■子どものコメント

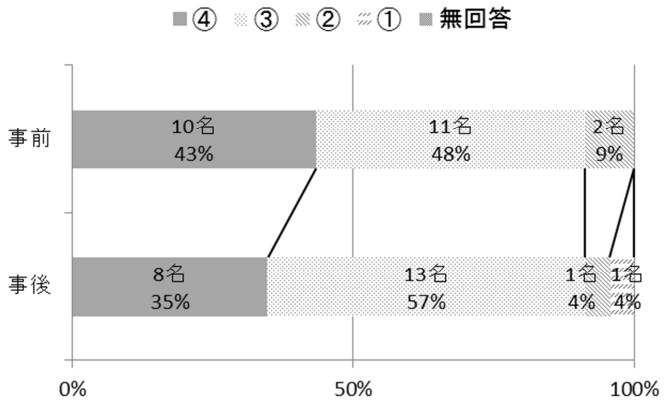
・とっても知らないことがでてきてわくわくするから。

・日本のことについて知りたい。そこからもう少し広く考えたい。

・2 回交流をして良さを十分に知ることができました。

・充分にできたから。もういいです。

問３.外国の人と交流することで様々な考え方や見方があることに気づくことができる。
（気づいた←4　1→気づかなかった）



授業実施前と授業実施後を比較し、「気づいた（とても気づいた含）」という子どもが、事前事後とも 91%であった。「とても気づいた」という子どもが減った。

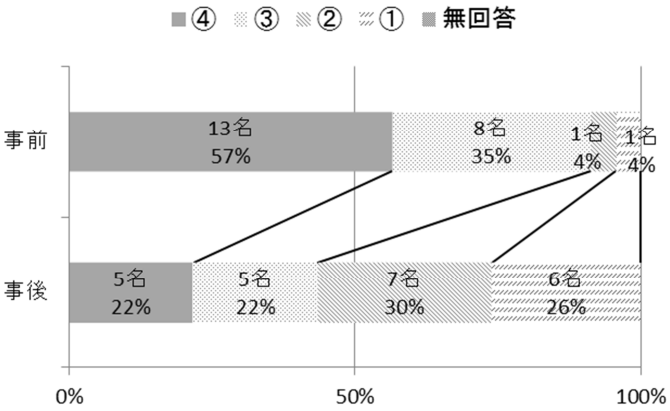
■子どものコメント

・いろいろ調べると私の考えていなかったこともあるから。

・外国の人と関わるという経験から国際交流に興味を持つことが増えました。

・違いを見つけることはできると思う。

問４.外国の人との交流（直接会う、メールなどを含む）を図る学習を続けたいですか。
（続けたい←4　1→続けたくない）



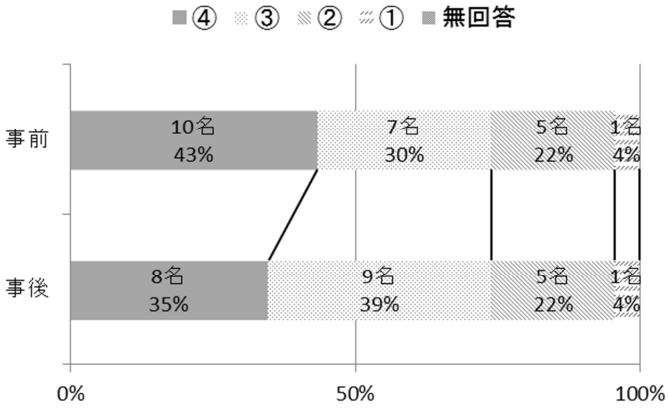
授業実施前と授業実施後を比較し、「続けたい（とても続けたいを含）」という子どもが、事前は 92%だったが、事後は 44%に減った。

■子どものコメント

・自分の知識の幅が広がったし、楽しく活動することができたので、よかったと思えたから。

・聞きたいことはたくさん聞けたのでいいです。会うのだったらまた違う国の人とかがいいです。

問５.私は、外国や外国の人に対して興味・関心がある。
（ある←4　1→ない）

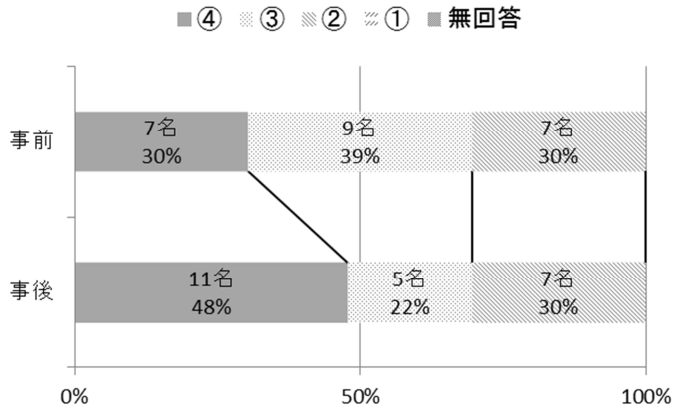


授業実施前と授業実施後を比較し、「ある（とてもある含）」という子どもが、事前事後とも 73%と同数であり、大きな変化はなかった。

■子どものコメント

・外国の文化や教育などをたくさん知れて、これからも調べたらたくさん新しい発見がありそうだから。

問６.私は、他の学年の人とコミュニケーション（話すこと・話を聞くこと）を図ることができると思う。
（思う←4　1→思わない）

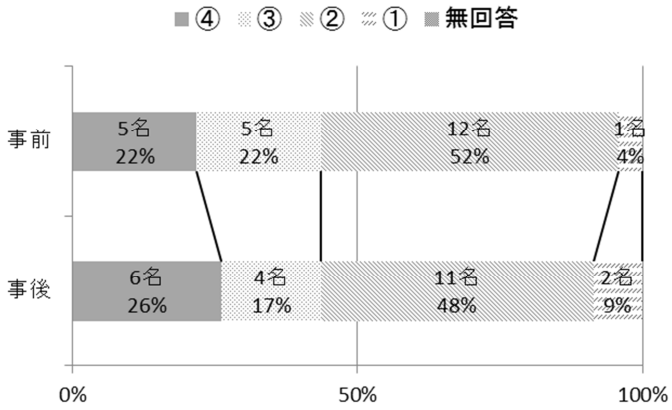


授業実施前と授業実施後を比較し、「思う」（とても思う）という子どもが、事前事後とも 69%と同数であった。しかし、「とても思う」という子どもが増えている。

■子どものコメント

・グループ内で話すことはできるけれど、グループではない人に自分の考えを話すことができない。→グループ内で話す、聞くということをたくさんやってきたのでできると思う。

問７.私は、外国の人とコミュニケーション（話すこと・話を聞くこと）を図ることができると思う。
（思う←4　1→思わない）



授業実施前と授業実施後を比較し、「思う（とても思う含）」と答えた子どもは、事前事後ともに 43%であった。しかし、「とても思う」という子どもが増えた。

■子どものコメント

・今回の経験を通し、会話が続く方法も知ることができたから。

・交流会で外国の人に質問をしっかりすることができたから。

(2)石川県

①ワーキンググループ会議（ワーキンググループメンバーについては、29 ～31 ページ一覧表を参照）

【第 1 回会議】

日 時：平成 27 年 9 月 10 日（木） 16:00～18:00

場 所：金沢市立十一屋小学校

出席者：13 名（ワーキンググループメンバー9 名 EPO 中部 1 名 地方事務所 1 名 事務局 2 名）

主な議題：ア 本事業の説明

イ 本事業における金沢市立十一屋小学校の授業案について

＜議事内容＞

ア 本事業の説明

本事業の全体概要及び形成推進員委員会において協議した本事業における中部 7 県の共通目標・これまでとの共通点等について報告し、共有した。（32 ページの富山県ワーキンググループの記載参照）また、今年度石川県の実証校である十一屋小学校への依頼事項を確認した。

イ 本事業における十一屋小学校の授業案について

今年度の実証校から実証授業内容について説明を受けた後、意見交換をした。事務局から、十一屋小学校はワーキンググループメンバーとして昨年度から実証準備校として参加していることを説明した。今年度は、十一屋小学校で校区にある里山「平栗」を題材とした授業を進めることとなった。

[意見交換]

授業案について、平栗を題材として選んだ理由についての意見が出された。校長先生から、「平栗には以前、十一屋小学校の分校があり、交流があった。この授業を通して本校と平栗との直接的なつながりが生まれ、子どもたちの地域の問題に対する関心が高まることを期待する。」と話された。子どもの実態と本単元で育みたい力に関しての意見が出され、担当教員より「児童は自ら課題を設定し、追究する経験が少なく、苦手である。本単元を通じて課題を見出し、追究する経験を得て、根拠を持って予測できる力、総合的に考える力、コミュニケーションを身に付けることを授業のねらいとする」と話された。

次に、授業の進め方について、「子どもたちが平栗について持っている様々な興味、子どもなりの視点・発想を大切にし、子ども自身が課題を見出すことが大切である。」、「児童をゆさぶるような発問やプロセスを通して、児童が平栗を自分ごととするような仕掛けを入れる」、「様々な視点から平栗を捉え、考えるプロセスを入れるとよい」などの意見が交わされた。また、「子ども自身の平栗に対する想いの深まりなど、質的な変化を拾っていくこと、そういった変化を褒めることが大切である」、「子どもたちの自己評価、他人から認められることにより自己肯定感につながる」などの評価に関する意見がだされた。授業においては「大人の意図に沿うようなきれいにまとめて終わらせずに、子どもの本音を引き出し、子どもの考えた平栗の未来に対して、「では、あなたは何をする？」と返していくようなオープンエンドで終わりとする」との意見も出された。今後の事業及び授業のスケジュールを確認し、今後、第 2 回の公開実証授業までの間、ワーキングメンバー内で情報共有をし、授業づくりを進めることとした。

実証授業について、以下の内容が決定した。

担当教員：杉本倫代先生(5 年生担任)

授業単元名：「平栗を調べよう～十一屋校区「平栗」の未来はどうなっていくのか～」 想定：38 時限

対象：小学 5 年生児童

授業内容：校区にある里山「平栗」を題材に、調べたい課題をもって平栗に行き、関わる人にインタビューするなど調査し、学ぶ。さらに、課題意識をもち、調べる。平栗の未来について、グループや学級で意見を伝え合い、課題を追究していくことで平栗を自分ごととして捉え、大切にしようとする気持ちを育む授業を行う。

【第 2 回会議】

日　時：平成 27 年 11 月 2 日（月）　16:00～17:30

※14:45~15:30　公開実証授業後に実施。

場　所：金沢市立十一屋小学校会議室

出席者：13 名(ワーキンググループ 6 名　EPO 中部 1 名地方事務所 1 名　事務局 2 名、オブザーバー3 名)

主な議題：ア　公開実証授業について

〈議事内容〉

ア 公開実証授業について

平栗の未来について、友達と考えを交流したり、関連づけたりしながら、考える授業を実施した。

［実施した教員のふりかえり］

■杉本倫代先生（5 年生担任）

本時では、「平栗の自然がどうなっていくか」に焦点を絞って、平栗の未来について、話し合いの時間を持った。前時で「～だからこういう未来になる」と根拠をもって考えを書いているので、自分の意見を伝えること、友達の意見を聞いてさらに思考することをねらいに実施した。子どもたちにとっては高度なテーマでの話し合いだったため活発な意見交換ができなかった、子ども全員が意見を発表できる工夫や、ふりかえりで友達の意見を関連付けて感想を発表する時間が持てたらよかった、という反省点がある。

［意見交換］

本時のねらいである、「根拠をもって意見を発言する」は、ほぼ達成できていた。先生が児童が話しやすい環境づくりをされていたため、活気がありよかった。授業の導入部で、平栗に関わる方の平栗への思いを共有したことが授業の展開として生かされていた。平栗の未来を「森」と「里山」のどちらになるか、と絞ってテーマを提示したことが分かりやすくてよかったが、地図を用意すれば、「集落の部分は」や「奥山の部分は」という話し合いができるようになり、さらに議論が深まったのではないか。グループワークでの話し合いが全体での話し合いに活かされて、先生の想定していないような意見も出てきたが、一方でグループによって上手く進められたところと、苦労しているグループがあったため、何回か同じようにワークを行い慣れることが必要である。

時間を考えると授業のねらいが多かった。授業の中で児童の意見をあらかじめまとめたカードがあったが、その他の子どもたちのよい意見を拾えなくなっていたかもしれない、板書されなかった良い意見があったので、それについても褒めてあげてほしい、という指摘もあった。

また、授業開始時と本時で「平栗の未来がどうなってほしいか」の理想図を絵や文で表現しておき、そのギャップに気づかせたり、自分の元々の理想を問い直したりする、など、より議論や学習を深める工夫ができる。

子どもは自分の思いが入った意見を伝えていて面白かった。子どもから出た意見で自分ごととして考えられるキーワードを逃してしまったと感じたが、授業の展開として最終的に「どうしていくか」「みんなでできることは何か」と考えていくためのステップとしては良い流れとなった。本時を 3 学期の保護者への発表会へのプロセスとして活かしていくことを共有した。

②実証授業

実証授業校：石川県金沢市立十一屋小学校

授業名：平栗を調べよう～十一屋校区「平栗」の未来はどうなっていくのか～

対　象：小学校高学年

目　標：

●平栗の未来を考えるために、自分なりの課題を設定し、平栗の過去や現在の人々の暮らしや願い、自然の様子などを調べることができる。

●平栗の自然の様子を調べたり、そこに住む人々の営みや思い・願い、平栗地区に関わっている人々とのつながりをインタビューしたり、企業や行政、住民などの社会とのつながりを調べるなど、多面的・総合的に捉え、課題を解決している。

●課題を解決するために、調べたことを根拠にしたり、友達の意見を尊重したりして、自分の考えを伝えることができる。

概　要：十一屋校区の「平栗」は、多様な生物が生息する自然豊かな里山である。しかし、現在、平栗から通う児童はおらず、校区だと知っている児童もいない。住民の高齢化が進み、30 年後には住民がいなくなるという地域の持続可能性の危機が迫っている現状もある。平栗がどんなところか、児童は調べたい課題を設定し、調査する。平栗の自然や地域をどのように守っていくか、どのような人々が平栗に関わり、どのような願いを持っているのか、インタビューをしながら学ぶ。さらに調べ活動をし、平栗の未来についてグループや学級で自分の意見や考えを伝え合う。友達と協力して課題を追究していくことで平栗が近しくなり、大切にしようとする気持ちを育む。

[該当する４つの環境分野とサブテーマ]

４つの分野	ともに生きる	社会参画	○
		国際理解（異文化理解）	
		健康	
	自然・生命	生命	○
		自然への愛着	○
		生態系・生物多様性	○
		水	
		大気	
		土	
	ごみ・資源	3R	
		公害	
	エネルギー・地球温暖化	地球温暖化の起こる仕組みと影響	
		資源・エネルギー	
		産業	
		消費生活・衣食住	

[主な持続可能な社会づくりの構成概念]

持続可能な社会づくりの構成概念	関連するものに○	理由
多様性	○	過去、現在の平栗について調べ、未来の平栗について多様な意見や利用の仕方があることを学ぶ。平栗には多様な生き物がいることを知る。

相互性	○	平栗と自分たちの生活とのつながりについて学ぶ。
有限性		
公平性		
連携性	○	平栗の学習を通して、友達の意見を聞き、自分の意見を伝え、お互いのつながりについて学ぶ。平栗と町の人（行政、事業者、住民）の平栗への思いを聞き、平栗の自然を守るためのつながりを学ぶ。
責任性	○	平栗や地域の未来のために自分たちにできることは何かについて学ぶ。
その他（）		

[主な ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度]

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度	関連するものに○	理由
批判的に考える力（批判）		
未来像を予測して計画を立てる力（未来）	○	平栗の未来を考えるために、自分なりの課題を設定し、平栗の過去や現在の人々の暮らしや願い、自然の様子などを調べることができる。
多面的、総合的に考える力（多面）	○	平栗の自然の様子を調べたり、そこに住む人々の営みや思い・願い、平栗地区に関わっている人々とのつながりをインタビューしたり、企業や行政、住民などの社会とのつながりを調べるなど多面的・総合的に捉え、課題を解決している。
コミュニケーションを行う力（伝達）	○	課題を解決するために、調べたことを根拠にしたり友達の意見を尊重したりして、自分の考えを伝えることができる。
他者と協力する態度（協力）		
つながりを尊重する態度（関連）		
進んで参加する態度（参加）		

[学習指導要領との関連]

学年	教科/領域	学習内容
小学校５年	社会	（１）エ　国土の保全などのための森林資源の働き及び自然災害の防止
小学校５年	国語	（１）　話すこと・聞くこと　オ 互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合うこと。
小学校５年	国語	（２）　書くこと　ア 考えたことなどから書くことを決め、目的や意図に応じて、書く事柄を収集し、全体を見通して事柄を整理すること。

[プログラム（単元・題材）の展開（総時数　38 時間扱い）]

時	学習課題	活動・学習内容	指導・支援の方法、ポイント等 〔教材・必要物〕 【育まれる「ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度」】
12 時間	平栗を知ろう	校区に平栗という場所があることを知る。	校区について、問うことで平栗に関心を持たせる。 校長先生に平栗の説明をしてもらい、意欲を持たせる。 【関連】
		平栗の調査にでかけよう。 ・インタビューをする。	グループごとに課題を設定して、調査にでかける。 平栗に住む人にインタビューをする等、課題解決のために必要な情報を集めるなど調査を行う。 〔カメラ、ワークシート〕 【多面、伝達、協力、参加】
		調査結果を新聞にまとめよう。	自分の課題にあった情報を整理する。 書いた新聞を読み合い、アドバイスや意見をもらう。 〔新聞の用紙、ペン〕 【多面、伝達、協力、参加】
8 時間	平栗の未来を考えよう	平栗の未来はどうなっているか予想する。	未来を考えていくために、現在のことや過去のことを調べるように促す。 ワークシートに予想とその理由を書かせる。 同じ予想同士でグループをつくり、課題を持ち調べ活動をする。 〔ワークシート〕 【関連、未来、伝達、協力、参加】
		平栗の未来を考えるたえに必要な情報を集めよう ・自然 ・町の人の思い	グループで自由に調べ活動を行う。 ゲストティーチャーにインタビューをして調べ活動を行う。 【未来、伝達、協力、参加】
		平栗の未来はどうなっているのだろう	未来を考えていくには、現在や過去のことを知らないといけないことに気づかせ、もっと詳しく調べたいという気持ちにする。 ワークシートに平栗の未来の予想とその理由を書く。根拠を元に話し合う活動を行う。 〔ワークシート〕 【未来、多面】
8 時間	平栗の魅力を伝えよう	平栗の未来のために自分達にできることは何か、考えよう 学習をふりかえろう	伝える場所や方法は児童の思いを大切にして、行う。 校区ということを大切にし、地域の人やゲストティーチャーに伝え、達成感を味わわせる。 【伝達、協力、参加】
		これまでの学習をふりかえろう	ふりかえることで、がんばってきたことや成長したことを褒めることで、自分の成長を感じさせる。 【関連、未来、伝達】

[基となったモデルプログラム]
　平成 25 年度プログラム　10：公園、探検・発見・ほっとけん！・・・誰が？（幕張ベイタウンにエコパークをつくる会）

[地域化するにあたって配慮したこと、モデルプログラムから変更、追記したポイント、地域の協力者・場所・資源など]
　学区にある「平栗」という自然豊かな場所を児童は身近に感じておらず、その場所の現状や自然の豊かさを知らないため、本事業では、「平栗」という場所に焦点をあて、平栗に生息する生き物に触れたり、平栗に暮らす人々や専門家の人や市の職員にインタビューをすることで、「平栗」という場所の尊さに気づくよう授業を実施した。さらに、平栗の現状を踏まえた上で、「平栗の未来」について児童自身が考え、意見を交わす時間を設け、児童と平栗が近しくなり、地域への愛着を持てるように工夫した。
地域の協力者：平栗に暮らす住民、自然史センターの方、キゴ山少年自然の家、金沢市環境政策課、NPO 法人石川植物の会、北陸環境サービス、森林再生課　いこいの森の運営

[プログラムの実証の概要]
日　時：平成 27 年 11 月 2 日（月）14:45~15:30
場　所：金沢市立十一屋小学校
参加者：小学 5 年生児童　33 名
概　要：平栗の未来について、友達と考えを交流したり、関連づけたりしながら、考える。

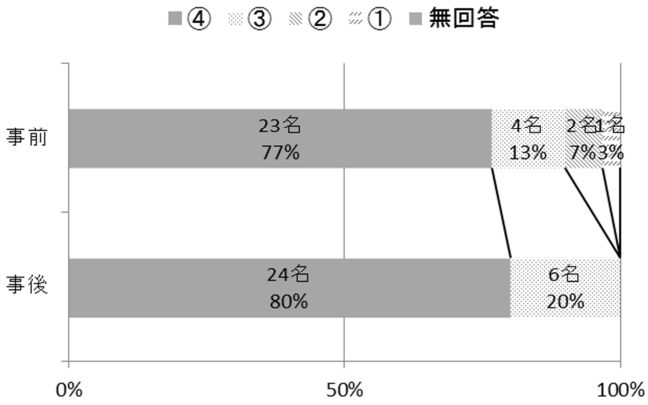
分	学習課題	活動・学習内容	指導・支援の方法、ポイントなど〔教材・必要物〕
5	課題をつかむ。	平栗の未来についての自分の考えをふりかえる 話を聞いたゲストティーチャーが考える未来像を提示する。	様々な未来像があることに気づき、友達の考えに関心を持てるようにする。
20	平栗の未来はどうなっているのだろう	調べたことや考えたことを基に、グループで話し合う。	付箋紙に根拠を書いておくことにより、考えを整理し、自分の考えを発言することを促す。まなボードを使って自分の未来像と根拠を結び付けて話せるようにする。 グループでの話し合いの後、全体では「森に戻る」と「里山のまま残る」という未来像に焦点を絞り 全体で話し合いを進めていく。
10	自分の思いを話し合う	平栗の未来に対する自分の思いを話し合う。	根拠に基づいた話し合いではなく、自分の平栗への思いを話す。
10	学習を振り返る	話し合いをふりかえる。 話し合いを通して、課題についての自分の考え。	話し合いで自分の考えが伝えられたか、友達の考えを聞き、感想が伝えられたかなどをワークシートで振り返る。 友達との話し合いを通した学びをワークシートによって気づかせ、あたたかいコミュニケーションを図れたことに価値づけすることで、今後の意欲につなげる。

[実証授業の様子]

③授業実践アンケート

子どもを対象にしたアンケートを行った。（回答者：小学５年生　実施前 33 名　実施後 30 名）
※実施前・実施後の比較をするため両方に回答した 30 名を対象にした。

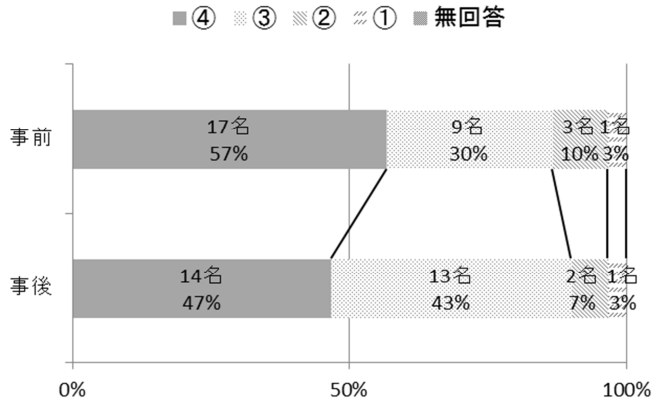
問 1.平栗を大切だと思いますか
（大切　←4　1→　大切ではない）



授業実施前と授業実施後を比較し、「大切」（とても大切含）という子どもが、事前は 90%だったが、事後は 100%であった。かつ、とても必要だという子どもが増えた。

■子どものコメント
・平栗は大切だから大切です。
・十一屋校区だから
・やさしい人たちがいっぱいいて豊かな町で自然ゆたかだからのこしたい。

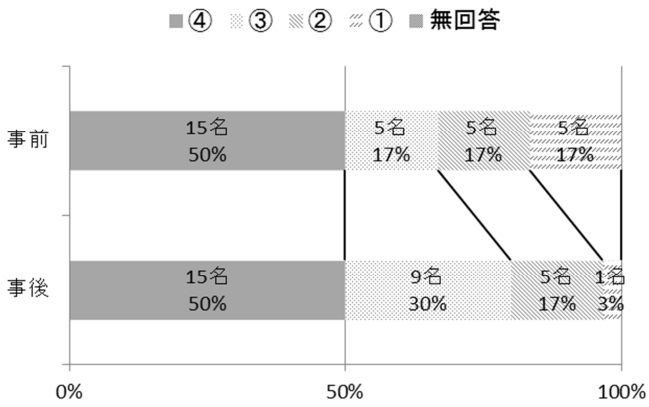
問 2.平栗の未来について調べたい、学びたいと思いますか。
（思う　←4　1→　思わない）



授業実施前と授業実施実施後を比較し、「思う」（とても思う含）という子どもが、事前は 87%だったが、事後は 90%に増えた。

■子どものコメント
・これから森はどうなるのか。人々はいなくなるのか。どんな建物ができるのか。
・もっと平栗の歴史などを調べてみたい。
・未来が気になるから。

問 3.平栗について調べたことを伝えたいと思っていますか。
（思っている ←4 1→ 思っていない）



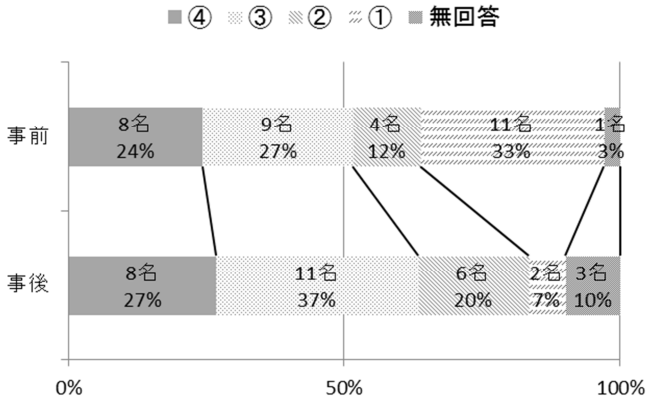
授業実施前と授業実施後を比較し、「思っている（とても思っている含）という子どもが、事前は 67%だったが、事後は 80%に増えた。

■子どものコメント

・平栗にいく人が増える。もしかしたら平栗にすむ人がでてくるかも!

・めずらしい動物がいることを伝えたい。

問 4.話し合いにおいて、調べたことから自分の意見や考えを伝えることができましたか。
（できた← 4 1→できなかった）



授業実施前と授業実施実施後を比較し、「できた」（とてもできた含）という子どもが、事前は 51%だったが、事後は 64%に増えた。かつ、「できなかった」という子どもが減った。

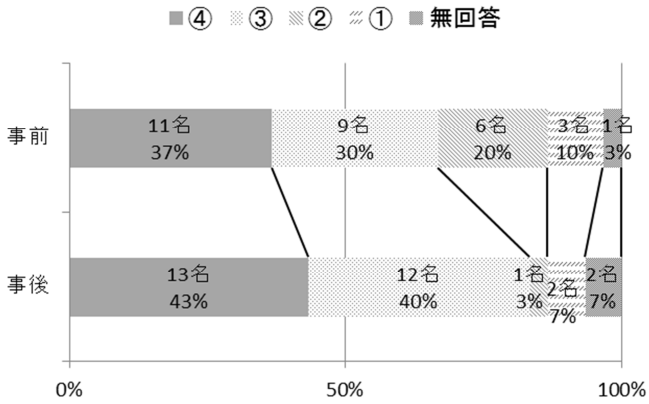
■子どものコメント

・平栗はにぎわうこと!大切な場所だってこと!

・自分で調べたことや友達の意見につなげて似ている事やちがうことを伝えました。

・カモシカというめずらしいどうぶつがいるよ。

問 5.話し合いにおいて、他の人の意見を聞くことができましたか。
（できた← 4 1→できなかった）



授業実施前と授業実施後を比較し、できた（とてもできた含）という児童が、事前は 67%だったが、事後は 83%に増え、「できなかった」という子どもが減った。

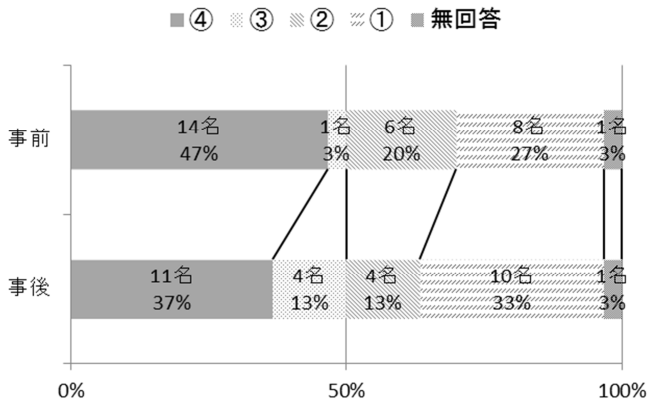
■子どものコメント

・地域が発展するということなど。

・みらいを話し合った。

・平栗の生き物。平栗はどんな所か。平栗の未来はどうなるのか。

問 6.他の人の意見を聞くことで、自分の意見は変わりましたか。
（変わった←4　1→変わらなかった）



授業実施前と授業実施後を比較し、「変わった（とても変わった含）という子どもが、事前事後とも 50%であった。

■子どものコメント

・平栗がきえるといういけんが多いところにきえないいけんがでたとき。

・みらいがみんなちがうから。みらいのよそうができた。

(3)福井県

①ワーキンググループ会議（ワーキンググループメンバーについては、29 ～31 ページ一覧表を参照）
【第１回会議】
日　時：平成 27 年 10 月 29 日（木）　14:00～16:00
場　所：福井大学教育地域科学部附属中学校会議室
出席者：12 名（ワーキンググループメンバー９名　EPO 中部　１名　地方事務所１名　事務局１名）
主な議題：ア　本事業の説明
　　イ　本事業における福井大学教育地域科学部附属中学校の授業案について
〈議事内容〉
ア　本事業の説明
　本事業の全体概要及び形成推進委員会において協議した本事業における中部 7 県の共通目標・これまでとの相違点等について報告し、共有した。（32 ページの富山県ワーキンググループの記載参照）また、今年度福井県の実証校である福井大学教育地域科学部附属中学校への依頼事項を確認した。
イ　本事業における福井大学教育地域科学部附属中学校の授業案について
　今年度の実証校から実証授業内容について説明を受けた後、意見交換をした。
[意見交換]
　授業案については、本単元の最終の着地点についての意見が出された。担当教員から、「体験を重視し、様々な立場からものごとを捉えることにより今までにない視点が見えてくることを期待している。最終的にはグローバルな持続可能な社会づくりへの視点とつながってほしい。現在の子どもの様子からは、先輩の実践や他の生徒のコメントを聞いたりしながら課題発見能力を身に付けつつあると手応えを感じている。本学年で完結するのではなく、3 年間全体を通じて着地してもよいと考える」と話された。次に、附属中学校であるため地域とのつながりが弱いことについて指摘され、「身近な問題として考えていくためには地域とどうつながるかが課題である」、「地域を福井県、北陸地方というスケールで捉えると、自分たちの生活と結び付けやすい」、「農業や林業を考えると、世界的課題と身近な生活のつながりを結び付けやすい」などの意見が出され、以後の検討課題としていくこととした。
　また、授業の仕掛けとして、各自の取組をグループ及び学級全体の取組とつなげ、うまく整理できるように工夫することが重要である、蓄積してきた先輩たちのポートフォリオの活用、生徒の提案や意見などに対して「本当にそうか？」と揺さぶりをかけて生徒の思慮を深める、などの提案があった。今後の事業及び授業のスケジュールを確認し、今後、第２回の公開実証授業までの間、ワーキングメンバー内で情報共有をし、授業づくりを進めることとした。

　実証について、以下の内容が決定した。
　担当教員：奥村栄司郎先生
　授業単元名：発信！附中グリーンプロジェクト　想定：25 時限
　対　象：中学１年生生徒　40 名
　授業内容：植物育成の経験を積み、学校生活をより快適に過ごす方法を考え、実践し、技術と社会・環境の関わりについて学ぶ。次に、世の中を持続可能にしていくために自分たちに何ができるかを考えるため「緑は地球を救う?」のテーマの下で、社会問題を解決するための技術や課題を設定し調べ活動を行う。各自が調べたことをレポートにまとめ、独自のサーバーを用いた情報共有・交流システムを通じて意見交換する。仲間のレポートを読み解きながら、複合的に物事を捉え、様々な条件の中で最適解

を導きだしていく技術の考え方に向き合う。

実施教科：技術科

【第２回会議】

日　時：平成 27 年 12 月 10 日（木）　15:00～16:30

※13:55~14:45　公開実証授業後に実施。

場　所：福井大学教育地域科学部附属中学校会議室

出席者：21 名(ワーキンググループ９名　EPO 中部１名　地方事務所１名　事務局１名　オブザーバー9 名)

主な議題：ア　公開実証授業について

〈議事内容〉

ア　公開実証授業について

「緑は地球を救う？」という主題のもとに、各自がテーマを持った調べ活動を行ってきた。調査内容を交流し、お互いの調査内容の関連性を考える授業を実施した。

[実施した教員のふりかえり]

■奥村栄司郎先生

技術科の中で、栽培に端を発して社会との関わり、世界との関わりを考えて行けるような授業を構想した。技術科の限られた単元の時間だけでなく、3 年間全体を通じてどのような力を身に付けるかを考えて授業をしている。１学期の植物の栽培から、次のステップとして学校生活をより快適にするためにそれをどう活用できるかを考える。そして、より広い社会に役立てられるかを考えていくプロセスを進めた。本時の授業では、技術科の特性である ICT を活用した。これまで 7 年間蓄積してきた過去の生徒の成果をいれたデータベースを活用して生徒が発表内容を深めることができるように工夫するとともに、４人１組のグループで報告し合い、討議をすることにより報告内容を深めることを狙った。ICT を活用する利点は、データベースを通して他の生徒の報告内容を見ることができる点である。他方、ESD で培おうとする力を十分に身に付けられなかったかもしれないため、来週以降、さらに深めるようにしたい。

[意見交換]

生徒自身が学校や社会に役立つことを、自分たちが社会の担い手であるという認識をもち、主体的に取り組んでいる姿が見られた。ICT を活用した技術教育の今後の在り方を示唆する授業だった。

一方で、ICT の活用については、機器やシステムを全員が十分に使いなれていないことや、４人１組でのグループでの活動の持ち方については議論がうまくいかなかった場面も見られたため、長所、短所があり、それらの仕掛けのよさを活かしながらより改善していくとよいとの指摘があった。議論を深めるためにはもう少し先生がリードする、板書にそれぞれの課題を位置づけ、各テーマとのつながりを把握するなどの仕掛けが提案された。また、技術科の特徴を確認し、汗をかいて実際に物を作ること、その感性を忘れないことが重要であり、実体験をベースにしてものづくりの視野を、学校の中から社会、世界全体へとつなげるようになることが期待されるとの意見が交わされた。他方、より身近な題材を扱い自分ごととして取り組むためには学校周辺の地域社会との関係性の構築が必要であり、今後模索することが期待されるとの課題が挙げられた。本授業を３年間の技術科のプロセスとして活かして生徒の培いたい力を育んでいくことを共有した。

②実証授業

実証授業校：福井県福井市福井大学教育地域科学部附属中学校

授業名：「発信！附中グリーンプロジェクト」

対　象：中学校

目　標：

- ●生物の育成に適する条件と生物の育成環境を管理する方法を知り、自然を守り育てる活動が実践できる。
- ●生物育成に関する技術が社会や環境に果たしている役割と影響について理解を深める。
- ●各自の調査内容を交流する中で、様々な事象がお互いに関連していることに気づき、多面的なものの見方や、制約条件の中で、最適解を求めようとする姿勢を高める。

概　要：生徒にとって身近な生物育成に関する技術に着目し、植物の育成を通し、学校生活をより快適に過ごしやすくする方法を協働で考え、実践していく。主題にせまるために、グループごとに作物を選び、栽培計画を立て、実際に植物の育成を行い、自ら技術を活用し環境を改善していくことの意義や難しさを体感する。この題材のまとめとして「緑は地球を救う?」というテーマのもと、植物の力を活用し、社会問題を解決する方法を調査し、校内サーバーに構築した Wiki サイトにまとめる。仲間のページを読み解いていきながら、複合的に物事を捉え、解決したい事象を取り巻く様々な制約条件のもと、その中で最適解を導き出していくという技術の考え方に向かわせていく。

[該当する４つの環境分野とサブテーマ]

４つの分野	ともに生きる	社会参画	○
		国際理解（異文化理解）	
		健康	
	自然・生命	生命	○
		自然への愛着	
		生態系・生物多様性	○
		水	○
		大気	○
		土	○
	ごみ・資源	3R	
		公害	
	エネルギー・地球温暖化	地球温暖化の起こる仕組みと影響	○
		資源・エネルギー	○
		産業	○
		消費生活・衣食住	

[主な持続可能な社会づくりの構成概念]

持続可能な社会づくりの構成概念	関連するものに○	理由
多様性	○	現代の快適な生活の裏には、食物の生産量の増加や様々な生活を改善する「もの」の開発、エネルギー利用による行動範囲の増大など、先人の知恵の蓄積としての技術が存在していることを知る。
相互性	○	社会問題に技術を活用するという視点での調査内容を交流する中で、様々な事象がお互いに関連していることに気づき、多面的なものの見方や、制約条件の中で、最適解を求めようとする姿勢を高める。

有限性	○	限りある資源を共有する中で現在の生活が成り立っていることを知り、持続可能な社会を構築するために省資源を心がけた行動を促す。
公平性		
連携性		
責任性		
その他（）		

[主な ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度]

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度	関連するものに○	理由
批判的に考える力（批判）	○	日頃日常として捉えてきたことをもう一度見直し、仲間と検討する中で、本質を見抜く力をつける。
未来像を予測して計画を立てる力（未来）	○	資源の消費に立脚した現在の社会の現状と、資源の有限性をもとに、未来を予測した資源の利用や、新しい技術の開発を考える。
多面的、総合的に考える力（多面）	○	現在の社会が人・こと・ものの関わりの中で複雑に関わり合いながら成り立っていることを理解し、持続可能な社会の構築に向けてどのように行動すべきか考える。
コミュニケーションを行う力（伝達）		
他者と協力する態度（協力）		
つながりを尊重する態度（関連）		
進んで参加する態度（参加）		

[学習指導要領との関連]

学年	教科/領域	学習内容
中学校	技術・家庭科 技術分野 生物育成に関する技術	C（1）ア 生物の育成に適する条件と生物の育成環境を管理する方法を知る C（1）イ 生物育成に関する技術の適切な評価・活用について考える C（2）ア 目的とする生物の育成計画を立て、生物の栽培または飼育ができる
中学校	理科	第 2 分野（1）ア 生物の観察（1 年） 第 2 分野（1）イ 植物の体のつくりと働き（1 年） 第 2 分野（1）ウ 植物の仲間（1 年） 第 2 分野（7）ア 生物と環境（3 年）
小学校	生活	（7） 動植物の飼育・栽培
小学校	理科	B（1）昆虫と植物（3 年） B（2）季節と生物（4 年）

		B（1）植物の発芽、成長、結実（5 年） B（3）生物と環境（6 年）

[プログラム（単元・題材）の展開（総時数　25 時間扱い）]

時	学習課題	活動・学習内容	指導・支援の方法、ポイント等 〔教材・必要物〕 【育まれる ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度」】
1 時間目	作物の栽培とは	グリーンプロジェクトの中心となる作物の栽培について、様々な視点から捉える。	・ウェビングマップ等を用い、認識を広げる。 ・クラスで発表し合いながら、作物の栽培が私たちの衣食住と密接に関わっていることを理解させる。 【関連】
2・3 時間目	プロジェクト立ち上げ	学校生活を見つめ、植物の育成を通して改善していく方法を、生活班や学級全体で話し合う。 どのような品種を育てるか、生育の季節や日射量等の栽培条件を調べながら決定する。 クラス全体として活動が進めやすいように、育成場所を考える。	・園芸書を用意し、どのような作物を育てることができるか調査できるようにする。 ・屋上緑化や花壇等の映像を用意し、植物の有効利用について考えさせる。 ・実際に育てたい植物をもとに、グループを作る。 【多面】【協力】
4・5 時間目	作物の決定と育苗	今までの経験を元に、植物の育成に必要な要因を考え、実際に必要な管理をあげ、育成計画を立てる。種の発芽条件について調べ、実際に種を蒔き、育苗管理を行う。	・生活を改善するという視点で、資料をもとに実際の育成計画を立てる。 ・地域の在来種に注目させ、生態系の保全を意識させる。 【未来】【多面】
6 ～ 9 時間目	栽培環境の整備と管理	実際に耕地の土壌要因を整え、育成場所を確保する。 自分たちで用意した場所に、作物にあった土や養液を準備し、実際に定植する。 適切な管理の方法を調べ、生育環境を整える。	・育成場所を検討する中で、身の周りの自然に目を向けさせる。 ・水やり、堆肥、除草、摘芽、摘芯、支柱立て、誘引、土寄せ、病害虫防除などの作業を適宜行う。 ・仲間とどのように協力すると栽培を進めやすいか、話し合って作業に取り組ませる。 【未来】【協力】
10 ～ 18 時間目	管理と栽培の意義	作物の観察を通し、必要な管理を続ける。 次の取組に向けて間	・植物の観察を通し、施肥や病害虫防除など必要な管理作業を考えさせる。 ・グリーンカーテンの効果を温度で計測するなど、取組を

		伐材を使ったプランターを作成する。 自分たちの取組を振り返り、どのような効果があったか検証する中で、生物育成の技術の意味を再確認する。	具体的に評価させる。 ・間伐材の紹介から、森林の多面的機能について知らせると共に、再生可能な資源としてのバイオマスやカーボンニュートラルに注目させる。 【多面】【協力】
19 ～ 25 時間目	生物育成に関する技術を捉える	生物育成の技術に関する現状を調査し、社会問題を解決するために技術とどのようにつきあっていくべきかを考える。 レポートをお互いに読み合う中で、各自の視野を広げる。	・現在私たちの暮らす社会で起こっている問題に関し、生物育成に関する技術を活用して解決できないか調査する。 ・調査した内容を交流しながら、自分に足りない視点はないか、視野を広げさせる。 ・仲間のページを読み解いていきながら、関連しているものはないか考えていく中で、複合的にものごとを考えさせる。 【多面】【関連】【未来】

[基となったモデルプログラム

●平成 25 年度プログラム　13：みどりなライフ！～みどりのカーテンで始めよう身近なエコ活動～（シンプル＆スローライフの会）

●平成 26 年度プログラム　33：森林プログラム（いなぎの森 100 年プロジェクト）（東京都稲城市立稲城第一小学校）

●平成 27 年度プログラム　54：産業と環境の共生を考える～大気汚染公害の歴史から、問題解決にむけた人間の行動を学ぶ～（水島地域環境再生財団）

[地域化するにあたって配慮したこと、モデルプログラムから変更、追記したポイント、地域の協力者・場所・資源など]

●「みどりなライフ！」のみどりのカーテンの育成から、種から育てる 1 年草に広げ、技術・家庭科の生物育成の技術に関した授業の一環として取り組むことで、教科の目標に迫る。

●「森林プログラム」にある木について知る活動に触れることで、地球温暖化の解決に向けた具体的な取組について、科学的理解を深めさせる。

●「産業と環境の共生を考える」の地域で発生した大気汚染公害を切り口にした実践を、現在の社会問題に視点を拡張し、地球規模で起こっている問題に目を向けさせる。

●これらのプログラムの内容を活かし、技術家庭科の授業として、実際に栽培する体験を通し、生物育成に関する技術を活用し、社会問題に切り込んでいく方法を考える中で、持続可能な社会を形成していくために、自分たちが取るべき行動について考えさせる。

[プログラムの実証の概要]

日　時：平成 27 年 12 月 10 日（木）14:00~16:00

場　所：福井大学教育地域科学部附属中学校

参加者：中学 1 年生生徒　40 名

概　要：「緑は地球を救う？」という主題のもとに、各自がテーマを持った調べ活動を行ってきた。調査内容を交流し、お互いの調査内容の関連性を考える。

分	学習課題	活動・学習内容	指導・支援の方法、ポイントなど〔教材・必要物〕
30	グループで調査内容を報告し合おう	・附中版 Wiki を使い、各自が調査したことを発表する。 ・お互いの調査内容をもとに、関連性を考える。	各グループがどのようにプロジェクトに関わろうと考えたかを振り返らせる。
20	仲間のページを読んで、つながりを考えよう	・同じようなテーマを調査している人のページを探し、自分のページにリンクを貼る。 ・興味のある内容を調べている仲間のページを読み、リンクを貼る ・自分のページにそれらのつながりを明記する。	一覧ページから調査内容を考えるように指示する。 プロジェクターで画面を写し、リンクの貼り方を説明する。 自分の考えたことがたどれるようにページを作るようにアドバイスする。

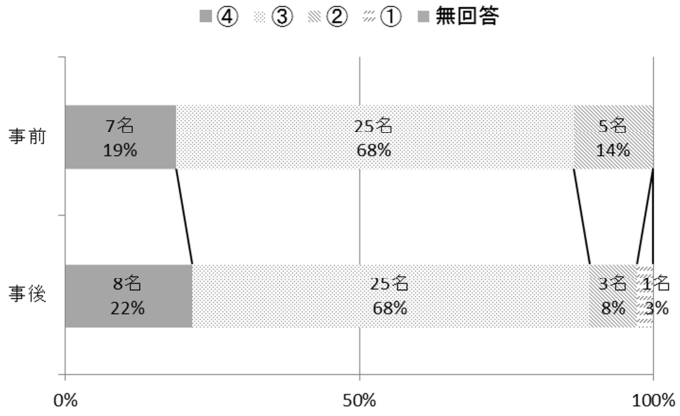
[授業の様子]

③授業実践アンケート

子どもを対象にアンケートを実施した（回答者：中学 1 年生　実施前 37 名　実施後 38 名

※実施前・実施後の比較をするため、両方に回答した 37 名を対象とした。

問 1 .学校生活をより快適に過ごすために、植物の力を活用する方法についてグループで話し合うことができましたか。（できた←4　1→できなかった）

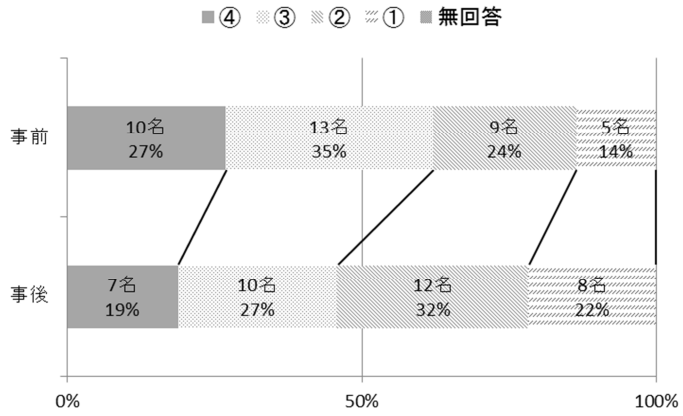


授業実施前と授業実施後を比較し、「できた（とてもできた含）」という子どもが、事前は 86%だったが、事後は 90%に増えた。かつ、「とてもできた」という生徒が増えた。

■子どものコメント

・植物を使って学校をよりよくするにはどんな植物を植えたら良いか、学校をよくするにはどうすれば良いかなどを話し合いました。植物を窓の所においてグリーンカーテンにしたり、花を植えて、学校を華やかにしたり、季節にあった植物を植えて、季節らしさを感じたりできると思いました。

問 2 .学校生活をより快適に過ごすために、植物の力を活用する活動ができましたか。（できた←4　1→できなかった）

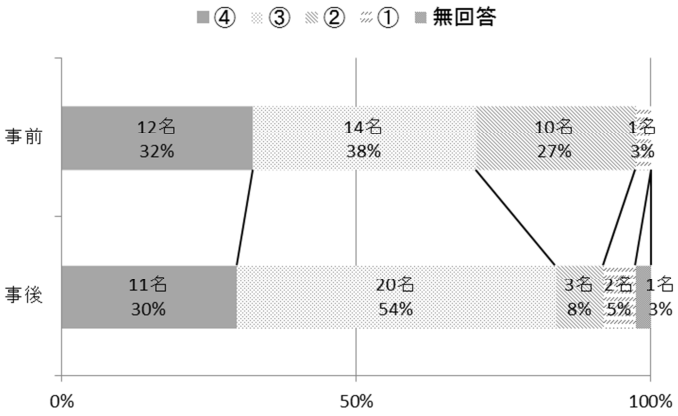


授業実施前と授業実施後を比較し、「できた（とてもできた含）」という子どもが、事前は 62%だったが、事後は 46%に減った。「できなかった（あまりできなかった含）という子どもが過半数を超えた。

■子どものコメント

・ヒマワリを植え、夏休みに花を咲かせてくれたので、夏らしさを感じることができ、とても明るい気分になった。

問３.植物の力を活用する技術を調べることができましたか。
（できた←4　1→できなかった）



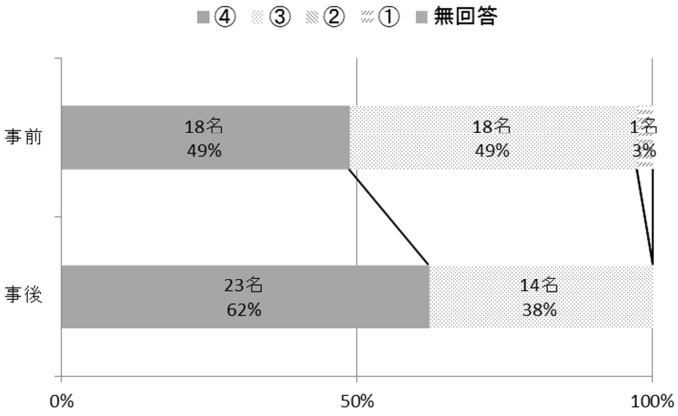
授業実施前と授業実施後を比較し、「できた（とてもできた含）」という子どもが、事前は 70%だったが、事後は 84%に増えた。かつ、「あまりできなかった」という子どもが減った。

■子どものコメント

・植物の力でリラックスでき、快適な生活を送ることができる技術。

・育てる技術。緑で環境が救えること。

問４．自分達の生活、学校、住んでいる地域、社会をより良くするために、植物の力や、その力を活用した技術は必要だと思いますか。
（思う←4　1→思わない）



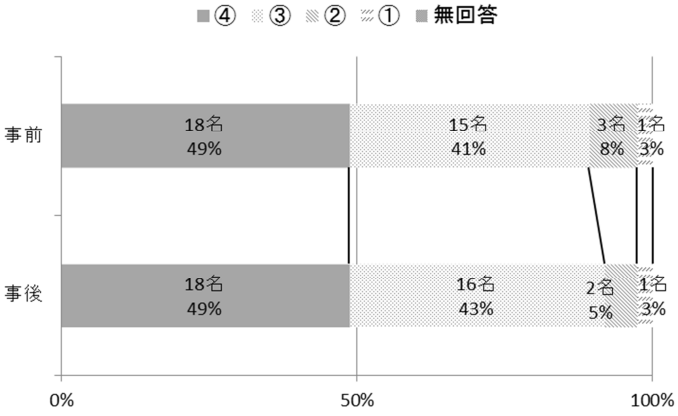
授業実施前と授業実施後を比較し、「思う（とても思う含）」という子どもが、事前は 98%であったが、事後は 100%になった。かつ、「とても思う」という子どもが増え、「思わない」という子どもがいなくなった。

■子どものコメント

・二酸化炭素を吸えるのは植物だけだから。

・今、日本がかかえている環境問題の対策として、小・中学校の芝生の増加、グリーンカーテンを引く、などといった技術が必要だと思う。

問５．持続可能な社会をつくるために（地球を救うために）、植物の力を活用する技術を身に付けたいですか。
（身に付けたい←4　1→身に付けたくない）



授業実施前と授業実施後を比較し、「身に付けたい（とても身に付けたい含）」という子どもは、事前は 90%だったが、事後は 92%に増えた。

■子どものコメント

・自分たちで簡単にできる技術、家に花を植える、家にグリーンカーテンをひくなどといった技術を身に付けたい。

・森林をなるべく破壊せずに土地開発ができる技術。自然界の生命のサイクルをとめないようにする技術。

(4)長野県

①ワーキンググループ会議（ワーキンググループメンバーについては、29 ～31 ページ一覧表を参照）

【第１回会議】

日 時：平成 27 年 9 月 2 日（木）14:45～16:00(※公開実証授業後に実施)

場 所：信州大学教育学部附属長野小学校副校長室

出席者：12 名（ワーキンググループ 9 名 EPO 中部 1 名 地方事務所 1 名 事務局 1 名）

主な議題：ア 本事業の説明

イ 本事業における２年２組の取組、３年２組の取組について

〈議事内容〉

ア 本事業の説明

本事業の全体概要及び形成推進員会において協議した本事業における中部 7 県の共通目標・これまでとの相違点等について報告し、共有した。（32 ページの富山県ワーキンググループの記載参照）また、今年度長野県の実証校である信州大学教育学部付属長野小学校への依頼事項を確認した。

イ 本事業における信州大学教育学部付属長野小学校の取組について

今年度の実証校から実証授業内容について説明を受けた後、意見交換をした。信州大学教育学部附属長野小学校の授業では、ESD の視点と手法から授業を捉え直した実証にすることとした。

［意見交換］

授業を参観して子どもたちが主体的に活動、話し合う姿、先生との関係性の育みを見て、教員の在り方の重要性を確認し、それぞれの先生方が大切にしていることについて意見が交わされた。副校長先生からは「先生は教える側、子どもは教えられる人」という関係性ではなく、子どもたちにイニシアティブを譲渡し、「共に味わう者、共に感じ合う者、共に探究する者」というスタンスで先生が立っている」、担当教員から「教師の都合に合わせ、子どもたち自身が何でそれをしているか分からないようではなく、自分もこんなに楽しいと外に出て遊ぶ。そういうことを手がかりにしながら、子どもたちと一時間、一時間を一緒につくっていく」、「「子どもと共にある」ということを大事に、子どもの内から湧いてくるものに耳を傾ける」、「子どもたちがやりたいと思ったことに思う存分取り組めることに、自分自身を発揮していく、本当の自分でいられることを大事にしている。生き物との関わり、友達と一緒に活動をしていく中で、不都合なことにどれだけ自分が身を寄せていけるのか、子どもたちの内側の中に、そういうものが育ってくるのではないかと思っている。一緒に味わっていきたい。」と話された。次に、ESDと今回の授業についての意見が交わされ、先生方が授業を「暮らしづくり」だと捉えているとの発言を受け、「ESD の言葉としての構成概念や能力・態度が、この学校の暮らしをつくる授業に合致している。ヤギを飼って育てる教育ではなく、ヤギを一体としてのフィールドを使って、しかも主体的に使って、暮らしをつくるとまとめられていることが素晴らしい」、「子どもたちも先生も、同じ場所にいた全ての人がそこに存在していることを自分達でつくっていた。元々人間が持っている力を先生方が上手く、教材を使って引き出していると感じた。ここに在ること、それをつくるために必要な力を自然から培っていくのを見た。」との意見が出された。一方で、ESD プログラムにどう反映させるかを考えると、この取組を他校にどう広げられるかを言葉にする難しさ。指標のようなものに落とし込めない部分がかなり大きくあるとの意見が出された。また、児童の一人が疑問に思ったことをクラスに問題提起をし、「いいとか悪いとかではなく、みんながどういう気持ちでやっていたのかが知りたい」という流れになった時に、それを強制的に教員が終わらせたら次の展開はなく終わりだった。今後みんなが納得していく環境をつくっていくのか、子どもたちが自分達で関係性を学ぶことができ、先生はそこをサポートしていくという ESD のポイントが見られた」「再現性だとか普遍

性とか、先生誰もが実践できるようになるのは非常に難しい。題材が何であってもその問題は教師と子どもとの関係性や、教師がどう生きてきたか、教師の学びの問題そのものであり、感じる体の問題である。」と意見が交わされた。また、附属小学校で行っている授業の省察、リフレクションについて話された。以後の事業及び授業のスケジュールを確認し、以後、第２回の公開実証授業までの間、ワーキングメンバー内で情報共有をし、事務局として取組のまとめ方を工夫することを課題とした。

実証授業について、以下の内容が決定した。

[2 年 2 組の取組について]

担当教員：宮島　新先生

授業単元名：「動物とのくらしの中で、思いを込めて対象に関わり、その命に、生きることの意味を探りながらひとり立ちしていくわたし」

対象：小学２年生児童　39 名

授業内容：4 月からヤギ一頭と子どもたちとの暮らしを始めたが、飼い始めて数日のうちに事故で子ヤギが亡くなってしまった。新しいいのちを迎えるか、死んでしまったヤギを大事に思い続けるか、子どもと悩み話し合いながら、新たなヤギを迎えた。子ヤギと一緒に過ごすお散歩とお世話の時間を持った。活動の中で通して感じた疑問を友達に問うて話しあっていくことを繰り返しながら自分たちの生きていく暮らしそのものをつくっていく。

実施教科：生活科

[3 年 2 組の取組について]

担当教員：小川浩貴先生

授業単元名：「こころと優希とのくらしの中で、もの・ひと・ことに出合い、友とともに生きる幸せや喜びを感じながら、自分の足で立っていくわたし」

対象：小学３年生児童 37 名

授業内容：１年生の５月から「ヒツジと共にある暮らし」を目指していきたいと、「共にある暮らしになること」がどういうことなのかをずっと考え続けてきた。生き物と日々暮らしていると、自分の思い通りにならないこともたくさんある。そういう出会いの連続だと思う中で、だからこそ仲間達が一緒にいて、どうしていけばいいかを本当に本気になって考えていく。こころと優希というヒツジと野に出て散歩をし、その傍らで子どもたちが思い思いに活動に入っていく、季節の移ろいの中で日々の暮らしを味わう。

実施教科：総合的な学習の時間

【第２回会議】

日　時：平成 27 年 12 月 11 日（木）13:45～16:00

※公開実証授業後に実施

場　所：信州大学教育学部附属長野小学校副校長室

出席者：10 名(ワーキンググループ７名　EPO 中部１名　地方事務所１名　事務局１名)

主な議題：ア　公開実証授業について

〈議事内容〉

ア 公開実証授業について

[実施した教員のふりかえり]

■宮島 新先生（2 年 2 組担任）

昨日と今日と、明日という連続の中の一端である。今日の授業では、子どもたちの体重測定の時期でもあり、ロコ（子ヤギ）の体重は今どのくらいかな、と体重を測りたい子どもたちの思いがあった。そのことと、ロコの冬のエサが乏しくなってきたため、子どもたちが一生懸命エサを集めて、つくっているところである。子どもたちはエサに関心が出てきており、食べるエサの量と冬のエサが足りるのかという疑問が子どもたちにあったため、課題として位置づけた。エサを気にしている子どもたちの思いを感じながら、体重測定から入った。雨でもとにかくエサを集めたいという思いを持つ子ども、干場でエサづくりをしている子どもや、ゆっくり散歩ができていない子どものロコを散歩に出したいという子どももいた。４月に来たヤギを数日で亡くしている子どもたちなので、「ヤギと」一緒に過ごした時間は半年近いが、「実際の目の前のヤギ」とは３ヶ月程である。子どもたちはヤギの世話に慣れてきたが、改めてどんなふうにヤギに向きあうかを考え始めている時期だと感じている。

[質問・意見交換]

「９月の授業から３ヶ月の期間に子ども同士が向き合って議論した論点、ポイント、ロコを通して、子どもの関係性の変化などを先生の印象に残っていること」についての質問が出て、担当教員は、「この３ヶ月には生きているヤギがいて、ヤギとの本当の暮らしに本当の自分を見つめていく、という歩みがある。今までは亡くしてしまった命から、こうしなくてはいけない、などいろいろな思いがあり、頭ベースで考えていた子どもが昨日初めてロコのうんちを手で触った、そういうふうに自分の体を通して感じたことをもとに語っている。大事にお世話しなければいけない、ではなく、うんち一つを拾っていくことに意味を感じ始めている子どもたちの姿がある。ヤギを大事にするのは当たり前だが、本当にこのヤギを大事にすることがどういうことかを子どもたちと一緒に考えている気持ちでいる」と話された。また、授業の中で体重やエサのキログラムからグラムの変換など、2 年生の算数としては、高次の内容をされていることについて意見が出され、「ヤギのうんち、エサの関係もあって、ハカリに触れる機会はある。自分たちに必要な範囲で子どもとは学んでいる。今、子どもたちが何を学ぼうとしているのか、何を見ているのか、生活科の時間として先へ進む時に、数のしくみや何だろうという疑問にはねらいをもって算数としてみていくことは教師として考えていきたい」、「なぜ覚えるかという論点が、必要だから覚えるという、それが本来の学びである」などの意見が交わされた。

題材について、「目の前の子どもたちと一緒にそこにあるものの魅力に迫っていける教材がよい。いろいろな可能性がある。長野小では動物飼育で子どもたちと向き合っているが、いろいろな事例の中でその可能性や魅力は、その担任の先生と子どもたちにこそある。自分が材の価値、魅力を感じることが必要である」、子どもの取り組む様子から、「みんながヤギのところではなく、エサ作り、小屋のそうじとそれぞれが自分の役割を持ち、みんながその他にならない形の授業だった」との意見も出された。

■小川浩貴先生（3 年 2 組担任）

前回の授業と今日と明日とで、つながっていく中の 1 時間だった。子どもたちは 3 年生が終わるとクラス替えがあり、クラスの仲間との別れが意識に大きくある。一緒に過ごしてきたヒツジともお別れになることを、子どもたちは日に日に感じながら過ごしていると思う。寒くなってきたので、子どもたちは冬に向けて小屋に風があまり吹き込まないように冬囲いをしたり、板をはったりしたいという意識を持ち始めて取り組んでいる。クラスでは「みんなで、ということが何か」を 1 年生の時から考えてきた。子どもたちとのやりとりを積み重ねてきた中で、最近は子どもたち一人ひとりがこころと優希のためにどうしたいのか、自分はどういうふうにそこにいたいのか、を考えていると感じる。こころと優希が喜んでいる様子、嬉しそうにエサを食べている様子を見て、そのことに甲斐を感じたり、きれいに掃除ができて気持ちよく過ごせるという手応え

を感じたり、今まで以上に一つ一つ丁寧に自分に何ができるのか、に寄り添いながらやっている子どもたちがいる。みんなで、というところから個、一人ひとりが自分と向き合うところに少しずつ向かっていると感じる。

[質問・意見交換]

「教室に自分達の願いと峯村さんの仕事、と今までの話を模造紙にまとめてあり、中高生が議論するよりも深い議論を子どもたちはしていると感じた。とりわけ、峯村さん（牧場の人）の仕事としてのこころの位置づけや自分達の願いにどうやって自分達で気持ちを整理して、折り合いをつけるのかが ESD の多面的思考力にもつながる」と意見が出された。取組を通しての子どもたちの姿の変容、印象に残っていることについて質問が出され、担当教員は、「自分の気持ちと向き合いながら自分のできることをしようとする子どもの姿。最初ヒツジに近づけなかった子どもが友達と一緒だったら小屋の中に入って世話をして、みんなと活動する。こころと優希の傍にいて、触ったりできる、だけど一人ではなかなかできない。そういう姿から、友達の存在は大きく、近づくのが苦手だった子どもたちが徐々に距離を縮めている。ヒツジが来た日には興味がないと言っていた子どものエサの準備の仕方が丁寧だったり、最初は自分の手でエサをあげることできなかったが、みんなと一緒ならできたり、そのことに喜びを感じたりする。そんなささやかな姿を感じる」と答えられた。

「一人の子どもが屋根から落ちる水を流していた。樋を持って、何十分か試していた。最後は高低差がしっかりできていた姿が印象に残った」、「雨が降っていなくても、どこかから水をもってきて試行錯誤していく。どうしても難しい部分は子どもたちと一緒に作業したり、クラスの子どもたちに広げていったり、みんなでアイデアを出し合ったりしていきながら、自分達でやってきたという足跡が残るようにしたい」と意見が交わされた。

「教室の中で、子どもたちが自主的に発言したり、積極性が見えたりしていたことと、協調性も見られた。内容も子どもたちが主導でいろいろ意見を出し合って、今日やることの取捨選択をしていた。子どもたちは潜在力を持っており、仕掛けがあればすごい能力を発揮すると感じている。この学校のような新しい教育の仕方を見て、理に適っていると感じた。自分の頭で考えて、その時々の解決方法は、まず自分達で自発的に考えたことを積み上げていくと、自分のものになって、後でいろいろな果実になって、花が咲いたり実がなったりする。ESD には、経験していないことが起きたときにどうするか、そのための積み上げが大切である。答えがないことについてもいろいろ考えて、進む方向を決めていく、そういう能力が必要である。この学校のような授業を ESD に活かしていく方法はないかと考えている」、「子どもたち自身が自分達の問題としてとても良く捉えて取り組んでいる。話し合いの時から、それぞれの役割が自分のことに落ちてきていると強く感じた。ESD はいろいろな取組、教材などがあるが、どうしてもこうあらねばならぬ、という表面的なところで終わるような気がしている。そこから、この学校のようにどう自分のこととして落とし込んでいくのかが難しいが、ESD を考える上での一つの大きなテーマであり、課題である」との意見が出された。

また、最後の授業の展開について教員より「子どもたちと迷いながら、自分達なりの納得をつくっていくことが大事と考える。これでよし、という感じにはならないだろう。これから先の子どもたちの成長などを考えた時に、自分の思い通りにならないことを、自分が選択をして前に進んでいかなくてはならない時に、大事な経験になってくる部分もある。最後まで自分がどう感じるかを子どもたちと話しながら、感じながら進めたい。初めがあって、ここにゴールがあってということとは違うが、そこまでの過程の中で大事にしたいものがたくさんある」、「この間 3 年間築いてきた子どもと先生の関係が重要である。教員が迷いながら、子どもたちと議論し子どもたちと共に培ってきた中で、状況を受入れようとする。表面的に終わらせないためには、教員の覚悟が必要である」、「「子どもと教員が共に在る授業」に全てがある、と気づきがあった。題材が何であっても日々過ごす教員と子どもとその対象物との関係が重要である。子どもたちがこれから社会に出て、どうしようもないことにつき当たった時に、寄り添う、味わうというプロセスを教員と仲間達がしていく。その関係性で日々迷いの中で自分が選択判断していく力が育まれる。そこまで先生とどういう議論をして、どういう話をし

て、何を判断するのか、納得いかなくてもその状況をつくったみんなってどうだったのだろう、と感じられる授業であり、そういった実感のあるESDが求められている。材を大切にして子どもたちと学びをつくっていく。そのことに向かい合える仲間と、自分がつくっていく授業である」と意見が交わされた。

最後に「本校の飼育などの活動を軸にして環境を構成しているという見方をすれば、一様な一つのパッケージの中に入っている。しかし、同じように飼育をしても全く違う学び、思うに任せない状況もでてくる。先生達に重要なのは、技術や方法、何かを持つということではなく、本当の意味で自分がどこにどうあるのか、子どもと共にどうあるのか、その子どもをどういう眼差しで見て、この材をどう感じて、この授業を何のために自分はやろうとしているのか、という問いを絶えずすることである」、「教員養成にとって何が必要か、どんな材を持ってきても環境の中に成立したところで材の意味が成立してくる。そこが教師のそこにいる問題である」、「環境の循環について知ったという問題が自分の生きることにどう機能して、社会の中で社会の一人として生きていくのか、という問題と重ねあわせて問われていかないと、本当の意味での ESD のフレームの問題が実現することは難しい。これだけ情報が容易に手に入る中で重要な問題は、専門職である教員の問題である。フレームが前提にあって、それを既に義と前提として授業をするというスタンスそのものに問いがなくてはいけない。そこの中で教師自身がどうやって更新しながら、子どもたちと解決を一緒にしていけるか、子どもが発見をしていくのか、材の新たな可能性を見出していくのかなどといったスタンスに立たない限りは、パッケージで何年生になったらこういう環境教育、こういう専門的な学習、学校の取組として空き缶拾いをします、とどんなにやられても、学校の無人格のパフォーマンスとしての現象はそこに実現できるかもしれないが、実際個々の子どもにとっての学びとは異なる話である。やらせればやる、でも逆に言うと、やらせればやらせるほど、真逆のやりたくないからだを育てているかもしれない。そこは考えていかなければいけない問題である」という課題が提起された。

②実証授業

実証授業校：信州大学教育学部附属長野小学校 2 年 2 組

授業名：動物とのくらしの中で、思いを込めて対象に関わり、その命に、生きることの意味を探りながらひとり立ちしていくわたし

対象：小学校低学年

目標：子ヤギとの暮らしづくり、友との関係づくり、子ヤギの命の育み等を通して、四季のうつりかわりと自らが生きる大地を感じながら、自分が生きる暮らしを自分の意志や思いで、友と話をしながらつくる力を育む。

概要：動物飼育が各学級の軸になっており、1 年生で体験したカイコの実践等を通して野で遊んできた子どもたちが「自分達も動物を飼いたい」という思いをもってのスタートである。4 月末から子ヤギ一頭と子どもたちの暮らしを始めた。飼育 4 日目で、教室の隅に作った仮の住まいで子ヤギが首をひっかけて亡くなった。子どもたちはヤギに名前をつけたり、お墓をつくったり、月の命日に墓参りをしたり、死そのものに向き合い、いのちについて咀嚼した。死んでしまったヤギを大事にすることは、もう一度新しいヤギを迎えてお世話できなかった分大事にすることを考え、もう一度新たなヤギを迎えた。念願の子ヤギと一緒に過ごす暮らし、共にある授業をつくる。

[該当する 4 つの環境分野とサブテーマ]

4つの分野	ともに生きる	社会参画	○
		国際理解（異文化理解）	
		健康	○
	自然・生命	生命	○
		自然への愛着	○
		生態系・生物多様性	○

		水	
		大気	
		土	
	ごみ・資源	3R	
		公害	
	エネルギー・地球温暖化	地球温暖化の起こる仕組みと影響	
		資源・エネルギー	
		産業	
		消費生活・衣食住	

[主な持続可能な社会づくりの構成概念]

持続可能な社会づくりの構成概念	関連するものに○	理由
多様性	○	子ヤギのお世話を通して、いろいろな命があることを知る。
相互性	○	子ヤギの命を育むことを通して、子ヤギを取り巻く自然環境のつながりを知る。
有限性	○	子ヤギの命には限りがあることを知る。
公平性	○	子ヤギのお世話を通して友達一人ひとりを大切にする。子ヤギも大切にする。
連携性	○	子ヤギのお世話やお散歩などを友達と力を合わせて行う。
責任性	○	子ヤギのお世話やお散歩などを、責任を持って行う。
その他（）		

[主な ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度]

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度	関連するものに○	理由
批判的に考える力（批判）		
未来像を予測して計画を立てる力（未来）	○	四季の移り変わりとともに子ヤギの成長を見つめ、どのようにお世話したらよいかを考える。
多面的、総合的に考える力（多面）		
コミュニケーションを行う力（伝達）	○	活動後に振り返りを行い、子どもたちがもった疑問や意見について学級で話合う時間を持つ。
他者と協力する態度（協力）	○	子ヤギと一緒に過ごすことや、エサづくりや小屋作り、整備など、友達と相談しながら一緒に行う。
つながりを尊重する態度（関連）	○	子ヤギのお世話やお散歩を通して、子ヤギと私のつながり、子ヤギを通しての友達とのつながりを大切にする。
進んで参加する態度（参加）	○	野に出て子ヤギと一緒に過ごし、エサづくりや小屋作り、小屋の整備を行うことで自分の役割を理解し、担う。

[学習指導要領との関連]

学年	教科/領域	学習内容
小学２年生	算数（28）	小屋の大きさどのくらい？⑩願う小屋の大きさから見つける長さの測り方やcmやmm。 どのくらい重さ？⑧子ヤギの成長から感じる重さ 大きくなったよ⑩メートルで表すことの利便性
小学２年生	国語（８）	岩本さんへ「コロ」への手紙⑧ありのままの思いを綴ることで伝わる本当の思い
小学２年生	図画工作（30）	・一人じゃないよ「コロ」⑧紙粘土で作る子ヤギとわたし ・ずっと一緒だよ　絵に表す子ヤギとの暮らし⑩クレパスや絵の具を使った表現 の面白さと、そこに表れる子ヤギとの思い出のかけがえのなさ ・子ヤギの色は白だから⑫紙をちぎって造形し、紙版画にして楽しむ子ヤギとの日々

[プログラム（単元・題材）の展開（総時数　105 時間扱い）]

時	学習課題	活動・学習内容	指導・支援の方法、ポイント等 〔教材・必要物〕 【育まれる「ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度」】
6 時間目	鮮やかでおいしい春	タンポポやノビル、フキノトウの色合いやほろ苦い味から感じる春の訪れ	春という季節を感じる植物に触れる。 【関連】
8 時間目	待っていたよ　子ヤギ	動物との暮らしへの憧れ これからの暮らしへの期待感	子ヤギとの暮らしの期待を膨らませる 【関連】【伝達】
6 時間目	名前をつけてあげたいな	名前に込められた願い	子ヤギに愛情を込める 【関連】【伝達】
12 時間目	もう一度迎えたい子ヤギ	命を迎えるために必要な準備の大切さ	命を大切にするために自分たちにできることを考える 【関連】
6 時間目	忘れないよ　子ヤギのコロ	二度と戻らぬ子ヤギの命から感じる死と命の尊さ	亡くした子ヤギの命の尊さに触れる 【関連】【伝達】
8 時間目	もう二度と失いたくない命	命あるものとともに暮らすという覚悟	子ヤギの命から命の尊さに触れる 【関連】【伝達】
12 時間目	本当に大丈夫かな　小屋作り	子ヤギを外的からも環境面からも守れる小屋を設営	子ヤギの命を守る気持ちを育む 【関連】【多面】【協力】
4 時間目	ずっといっしょにいようね　子ヤギ	二度目の子ヤギとの出会いで感じる「コロ」の存在とこれからの暮らしへの願いの高まり	子ヤギとの出会いや共に暮らしをつくる喜びを味わう 【関連】【多面】【伝達】
6 時間目	子ヤギが好きな野菜を作ろう	エサを集める工夫と収穫の喜び	子ヤギの命の育みを感じる 【関連】【参加】【協力】

6 時間目	今日も元気でよかったな	一緒にいてくれるだけで愛おしい子ヤギの存在と、同時に感じる目の前にはいない「コロ」	死んでしまった子ヤギを思い、今ある命に触れる 【関連】【多面】【伝達】
6 時間目	毎日がとっても楽しいね　子ヤギ	日々の世話の継続の大切さと甲斐	子ヤギの命に触れる 【伝達】【協力】【関連】【参加】
6 時間目	子ヤギと過ごす　秋の暮らし	色づく木々の葉や、ドングリ、吹く風の冷たさから感じる秋の訪れ	秋を感じ子ヤギの暮らしを想像する 【関連】【参加】
8 時間目	お腹がすいているのかな　子ヤギ	冬に向けて栄養をとろうとする子ヤギの食事の変化	子ヤギの命のたくましさにふれる 【関連】
8 時間目	子ヤギとの暮らしをメロディに乗せて	心を込めて歌う仲間と、その中にいるわたし	友と子ヤギと一緒に暮らす日々を楽しむ【協力】【参加】
10 時間目	雪がふっても大丈夫　冬の暮らし	降り積もる雪に耐える小屋の頑丈さと、寒さに耐える子ヤギの強さ	冬を感じ子ヤギの暮らしを想像する【多面】
8 時間目	3 年生でも一緒だよ　子ヤギ	3 年生進級への喜びと、これからの暮らしへの見通し	新しい学年での子ヤギとの暮らしに期待を膨らませる 【多面】【伝達】

[基となったモデルプログラム]
平成 26 年度プログラム　35：地球の仲間たちの声を聞こう！（アイシン精機株式会社（アイシングループ））

[地域化するにあたって配慮したこと、モデルプログラムから変更、追記したポイント、地域の協力者・場所・資源など]
「動物を飼いたい」という子どもの思いからスタートし、4 月末から子ヤギとの暮らしを始めたが、飼育 4 日目に子ヤギが事故で死んでしまい、その子ヤギに想いを馳せることから授業を展開した。ヤギのお墓をみんなでつくり、月の命日に墓参りをするなど、子ヤギの死と向き合って日々をすごし、子ヤギの飼育をやめてしまうか、新しいヤギを迎えることにするか、子どもと教師が共に考え、死んでしまったヤギを大事にすることは、新しいヤギを迎えて大切にする暮らしをつくることだと、子ヤギと一緒に過ごす学校生活を始める。四季の移り変わりの中で、子ヤギの成長を感じ、日々の変化や喜びを味わいながら、子どもと教師、そしてヤギと共に在ることを感じ、気づき、学びあった。
地域の協力者・資源：子ヤギのコロとロコ、ヤギの小屋、エサ、自然体験園など

[プログラムの実証の概要]
日　時：平成 27 年 9 月 2 日（水）
場　所：信州大学教育学部附属長野小学校自然体験園一帯
授業者：桂本憲一氏（教育実習生）
実施協力者：穂苅玲奈氏　渡邊祐菜氏　平林優美氏　宮川咲紀氏（いずれも教育実習生）
指導教員：宮島　新　先生
参加者：小学 2 年 2 組児童 39 名
概　要：念願の子ヤギを迎え、その命を今日も大切にしていきたいと願う子どもたちが、子ヤギと共に野に出て、自分のつくったエサを嬉しそうに食べる様子や、自分達と共に元気よく駆け回るヤギの様子を見ることを通して、自分の子ヤギとのつながりや、来たばかりの子ヤギの命そのものを感じ、今日も共に過ごせることへの喜びを味わう

ことができる。

分	学習課題	活動・学習内容	指導・支援の方法、ポイントなど〔教材・必要物〕
5	・子ヤギと一緒に過ごす。 ・自然体験園に出て子ヤギとお散歩する。	１．学習課題を確かめ、子ヤギとの時間の準備をする。	・その日の天気などを話題にしながらこの１時間でどんなことをしたいのか、楽しみにしているのかを聞くなどしながら、野に出る。 ・子どもたちの早く子ヤギとかかわりたいという思いの高まりを大切にし、そのような思いが出てくるような場を保障する。
30	・もっと子ヤギさんが暮らしやすくなるにはどうしたらいいかな。 ・今日も子ヤギさんと自然体験園で一緒に過ごそう。	2．友と共に、子ヤギと過ごす ◎子ヤギさんと一緒に過ごす ◎屋根づくり ◎エサづくり ◎お墓参り ◎小屋の中の整備	学習材 野でうれしそうに過ごすヤギ ・小屋での子ヤギの様子など共に見つける中で今までの自らの小屋づくり様子を振り返り、達成感を味わい、共有できるようにする。
10	振り返り	３．本時を振り返り、次時への見通しをもつ。 今日も子ヤギさんと一緒に楽しく過ごすことはできたね。次はもっと子ヤギさんに楽しく過ごしてほしいな	◎子どもたちの活動に合わせて今日の活動を振り返る場を設け、次の時間への活動の見通しを持てるようにする。

日　時：平成 27 年 12 月 2 日（金）
場　所：信州大学教育学部附属長野小学校自然体験園一帯
授業者：宮島　新　先生
参加者：小学２年２組　児童 39 名
概　要：「動物を飼いたい」という子どもの思いでスタートした。４月末から子ヤギ一頭と子どもたちの暮らしを始めたが、飼育４日目に事故で子ヤギが亡くなってしまった。そこから、子どもたちはヤギに名前をつけたり、お墓をつくったり、子ヤギの死そのものに向き合い、いのちについて咀嚼した。死んでしまったヤギを大事にすることは、もう一度新しいヤギを迎えてお世話できなかった分大事にすることを考え、もう一度新たなヤギを迎えた。念願の子ヤギと一緒に過ごす暮らしを、教師と子どもが共につくる授業である。

分	学習課題	活動・学習内容	指導・支援の方法、ポイントなど〔教材・必要物〕
5	子ヤギの体重測定、 子ヤギのエサを題材子どもがヤギに向かう準備をする。	1．学習課題を確かめ、子ヤギとの時間の準備をする。	◎子ヤギの成長を、体重を図ることで実感する。 ◎冬の間の子ヤギのエサの量や調達方法、寒さをしのぐ小屋づくりなど子どもの疑問を課題とする。
40	ヤギとの冬の暮らしを思い描き、自分たちにできることをする。	2．友と共にヤギとの時間を過ごす。 ・ヤギのお散歩 ・エサづくり ・小屋のそうじ	学習材 ◎雨の中、校庭を一緒にお散歩する ◎エサを集め干場でエサづくりをする。 ◎ヤギが散歩している間に小屋を掃除する。

5	振り返り	３．本時を振り返り、次時への見通しをもつ。	◎子どもたちの活動に合わせて今日の活動を振り返る場を設け、次の時間への活動の見通しを持てるようにする。

[授業の様子]

実証授業校：信州大学教育学部附属長野小学校３年２組

授業名：こころと優希とのくらしの中で、もの・ひと・ことに出合い、友と共に生きる喜びを感じながら、自分の足で立っていくわたし

対象：小学校中学年

目標：「対象に浸り込みながら、ひとり立ちしていく子ども」

子どもたちが３年間の羊との暮らしの中で、羊に浸りながら、羊とのつながり、羊を通しての仲間との関係性を育む。羊との活動に対しての思いや、課題にぶつかったときの自分の思いや考えを仲間に伝え、活動の創造や課題解決を本気で捉え考える力を育む。

概要：今の３年生が１年生だった時に羊（こころ）を飼い始め、昨年はこころの子どもの優希が生まれ「羊と共に在る暮らし」をつくっている子どもたち。暮らしの中で、羊を思い、羊を通しての仲間との関係性を育む。羊が暮らす小屋の修理や改善、雨除けや水たまりにならないように水路をつくるなど、仲間と相談して、羊が暮しやすい環境をつくりだす。方法が違って意見がぶつかったり、自分たちの思い通りにならない時に、仲間と本気になって話し合います。こころと優希を想い、仲間と一緒にできること、自分にできることを考え実行する。

[該当する４つの環境分野とサブテーマ]

４つの分野	ともに生きる	社会参画	○
		国際理解（異文化理解）	
		健康	○
	自然・生命	生命	○
		自然への愛着	○
		生態系・生物多様性	○
		水	○
		大気	

		土	○
	ごみ・資源	3R	
		公害	
	エネルギー・地球温暖化	地球温暖化の起こる仕組みと影響	
		資源・エネルギー	
		産業	
		消費生活・衣食住	

[主な持続可能な社会づくりの構成概念]

持続可能な社会づくりの構成概念	関連するものに○	理由
多様性	○	羊と共に暮らすことで、いろいろな命、ひと、もの、ことがあることを知る。
相互性	○	羊の毛や肉、羊が育ったふるさとの様子から人と羊のつながりを知る。
有限性	○	羊の命には限りがあることを知る。
公平性	○	羊の家づくりやお世話を通して、羊、そして友一人ひとりを大切にする。
連携性	○	羊との暮らしを友と力を合わせてつくる。
責任性	○	羊との暮らし、羊のお世話など責任をもって行う。
その他（）		

[主な ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度]

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度	関連するものに○	理由
批判的に考える力（批判）		
未来像を予測して計画を立てる力（未来）		
多面的、総合的に考える力（多面）	○	羊の運命と自分の思いを重ねて生き物と共に暮らすことの意味を、共に過ごした 3 年間を振り返り、考える。 羊の暮らす環境を通して、羊が暮らしやすい小屋の整備を考える。
コミュニケーションを行う力（伝達）	○	家畜として羊を出荷している人の思いを聞き、羊の運命や羊とすごした3年間の日々を振り返り、自分の考えや意見を共に伝える。
他者と協力する態度（協力）	○	羊と共に暮らす日々の中で、お世話やお家づくりなど、友と一緒に相談をしながら行う。
つながりを尊重する態度（関連）	○	羊と人間、こころと私のつながりを学ぶ。羊との暮らしを通しての友とのつながりを大切にする。
進んで参加する態度（参加）	○	羊のお世話や3年間共に暮らした日々を振り返るなど、自分の役割を理解し担う。

[学習指導要領との関連]

学年	教科/領域	学習内容
小学 3 年生	道徳（21）	・優希の成長の様子から感じる幼い頃のこころ③小屋の横板にひっかかるよ

		うになった優希の姿から感じる子羊の成長と、こころとのつながり ・言葉では語られない　母として生きるこころの気持ち④優希の鳴き声や行動に反応して動いていくこころへの共感の気持ち ・食肉として羊を生産することを生業として生きる峯村さん⑩羊を家畜として大切に育てる峯村さんの情熱と生き様 ・人の暮らしの中で生きる家畜④人間の世話なくしては生きられない家畜としての在り方
小学３年生	国語（30）	・こころや優希の心の声を感じながら読む「もうすぐ雨に」⑩登場人物の行動や気持ちを、こころや優希に重ねて読むおもしろさ ・こころとの 3 年間からあふれ出すわたしのこころ物語⑳こころとの日々を物語にして改めて感じる甲斐や感動
小学３年生	算数（15）	こころと優希の体重の変化を表す表とグラフ⑮こころと優希の体重の変化を考えたり、比較したりしやすくするためのグラフの便利さと読みやすさ
小学３年生	図工（30）	・ちくちく刺して形づくる　こころマスコット⑮刺すほどに硬くなる羊毛フェルトの特性 ・白と黒の世界で表そう　こころと優希とわたしの暮らし⑮こころと優希との暮らしの中に生きる「わたし」を版にして、白と黒の世界で表す美しさ

[プログラム（単元・題材）の展開（総時数　74 時間扱い）]

時	学習課題	活動・学習内容	指導・支援の方法、ポイント等 〔教材・必要物〕 【育まれる「ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度」】
8 時間目	うれしいな　はるがいっぱい	こころとともに感じる春の訪れと喜び	羊とともにある野の様子から季節と命を感じる【関連】【多面】
5 時間目	こころの気持ちを感じてする毛刈り	こころにとっての毛刈りの必要性と羊毛の特性	羊の気持ちを考えて、毛を刈る 【関連】【参加】【協力】
8 時間目	涼しく過ごせるようにしたい　こころと優希の新しいお家	大きくなったこころと優希の姿から感じる暑さ対策や広い小屋の必要性	羊のことを考えて、羊が快適に過ごせる家をつくる 【関連】【参加】【協力】
5 時間目	ふわふわ環境を大切にする　こころの毛洗い	湿度と力加減から考える羊毛の洗い方	羊の毛に触れ、生きものの温かさを感じる 【関連】【参加】
8 時間目	こころのふるさと　信州新町の伝統や食文化	こころが生まれ育ったふるさとの様子から考える信州新町の人の歩み	羊のふるさとから自分の故郷に関心をもつ 【関連】【多面】
5 時間目	撚りをかけよう 手作り毛糸	羊毛がからみ合う仕組み	羊の毛の特徴に触れる 【関連】【参加】【伝達】
10 時間目	峯村さんの牧場の羊たちから見つめる家畜として生きるということ	食肉として羊を育てて出荷することを生業として生きる峯村さんの思いから感じる家畜の意味	羊の別の役割を知る。 【関連】【多面】【伝達】
5 時間目	こころの毛糸をつかった	毛糸の柔らかさと強さ	羊の毛の温かさを知る

	毛織物		【関連】【参加】
10時間目	こころと優希のこれから	生まれ持ったこころの運命とわたしの思いを重ねて考える、生き物と共に暮らすことの意味	羊の運命と生きものの命の尊さを重ねる 【関連】【多面】【伝達】
10時間目	離れても心はつながっている こころの命名から振り返る 3 年間の日々	こころと優希の暮らしの中で培ってきた自分自身の成長と進級して新たな暮らしをつくっていく期待をもつ潔さ	羊との別れを通して、自分にはどうすることもできないことに対しての納得をつくる【関連】【多面】【伝達】

[基となったモデルプログラム]

平成 26 年度プログラム 35：地球の仲間たちの声を聞こう！（アイシン精機株式会社（アイシングループ））

[地域化するにあたって配慮したこと、モデルプログラムから変更、追記したポイント、地域の協力者・場所・資源など]

「子どもと教師が共に在る」ことを大事にし、子どもと教師が対等の立場で、「羊と共にある暮らし」を目指し、羊とともに暮らす中で、自分たちの思い通りにならないことに出合い、その中で仲間とどうしていけばいいかを本気になって考えていくことを大切にする授業を行う。

地域の協力者・場所・資源：羊のこころと優希、自然体験園、羊の小屋、羊毛、羊牧場の峯村氏

[プログラムの実証の概要]

日 時：平成 27 年 9 月 2 日（水）第 5 校次

場 所：信州大学教育学部附属長野小学校

授業者：小川浩貴先生

参加者：小学 3 年 2 組児童 37 名

概 要：熱い夏をこころと優希と共に楽しく過ごしたいと願い、おいしい草を集めてのお弁当づくり、干し草を置くための部屋づくり、運動場の砂場や草場作りなどを楽しみながら取り組んでいる子どもたちが、雨が降った後の小屋の写真を見て話し合いをし、天候によって小屋の環境が常に変化していることに気づき、秋の長雨に向けた対策を考える。

分	学習課題	活動・学習内容	指導・支援の方法、ポイントなど〔教材・必要物〕
10	こころと優希の暮らしの環境づくり（雨の日の小屋やふかふかの砂場等）	１．学習課題を確かめ、こころと優希との時間の準備をする。 ・今日も外に行きたいな。 ・こころと優希にふりかけを作ってあげたいな。 ・砂場の土にさらさら砂を混ぜて、ふかふかにしたいな。 ・昨日の夜雨が降っていたから、今日はどうなっているだろう。雨が吹き込んでいたら、きっと土が固くなっているだろうな。やっぱり固くなっている。さらさら土をもっとまぜよう。雨対策もしてきたいな。	・こころと優希の暮らしをつくるためにどのようなことをしているのか、それぞれの思いを聞き、活動への意識を高める。 ・学習材（雨の日の小屋の写真）を提示し、雨降り後の小屋の様子が見て、日頃の小屋との違いを感じながら、この状況をどうしたらいいのかを考え合う。

30	こころと優希の小屋の雨除けづくりとふかふかの砂場づくり	２．友と共に、自然体験園に出て活動する。 ・干し草を置く場所に、かなり雨が吹き込んでしまう。もっと壁に葦を付けていこう。 ・今日は、草が濡れているから、濡れていない場所の草を採って、こころにあげたいな。 ・昨日の雨で、砂場の砂が固まってしまった。もっとふかふかにしたいな。 ◎遊び場作り 子どもたちの考えに共感しながら、一緒に活動をし、砂場作りの楽しさを一緒に味わう。 ◎草屋さん 草を採る時に、今日の自然体験園の草の様子を考えながら、子どもと共に草を集めていく。 ◎草置き場 一緒に葦を並べながら、雨がふきこまないために必要な本数や屋根の構造について一緒に考える。 ◎水路の修理 教師も子どもたちと一緒に活動をし、水がたまる原因やその対策について一緒に考えていく。	学習材 ●雨が降った後の小屋の写真 ・友だちの活動している様子について考え、野で草を集める準備や、小屋の修理をする準備をした子どもたちが、自然体験園に移動し学習活動を進める。 ・個々の子どもの表情やつぶやきに注目して、子どもの思いを感じながら、一緒に活動する。 ・様々な活動をしている子どもがいるため、個々を見ながら全体を把握する。
5	振り返り	３．本時の活動を振り返り、次時への見通しを持つ。 ・雨除けが途中まで完成し、もっと葦の茎で強化したり、色をつけたり、おもしろく小屋づくりをする。 ・いつでもこころと優希がふかふかの砂場で遊べるようにする。	・こころと優希の小屋の環境は天候によって常に変化していることに気づき、秋の長雨に向けた対策を考えていくことができたか、活動の様子や、発言から捉える。 ・子どもの活動の様子に合わせて今日の活動を振り返る場を設け、次時への活動への見通しが持てるように促す。

日　時：平成 27 年 12 月 11 日（金）
場　所：信州大学教育学部附属長野小学校
授業者：小川浩貴　先生
参加者：小学 3 年 2 組児童 37 名
概　要：冬に向けてこころと優希（羊）が寒くないように子どもたちが工夫して寒さから小屋を守る修繕をする。また、雨の日にエサ置場に雨が吹き込まないように、小屋の外にたまった水をどう流すかなど子どもたちが工夫して改善に取り組むことをうながす。

	過程	学習活動	指導と評価
10	こころと優希の暮らしの環境づくり	1．学習課題を確かめ、こころと優希との時間の準備をする。	・日ごろの活動で、こころと優希のために、どんなことをしているのか、それぞれの思いを聞き、活動への意識を高めていく
30	雨の日、冬の寒さに	2．友と共に、自然体験園に出て活動	学習材

	対応できる小屋づくりとエサの調達	する。 自然体験園での活動 ・雨樋をつける ・水路をつくる ・冬にむけて小屋の整備 ・エサづくり	・雨が降った後の小屋 ・個々の子どもの表情やつぶやきに注目して、子どもの思いを感じながら、一緒に活動していく。 ・様々な活動をしている子どもがいるため、個々を見ながら全体を把握する。
5	振り返り	３．本時の活動を振り返り、次時への見通しを持つ。	評価 ・こころと優希の小屋の環境は天候によって常に変化していることに気づき、冬に向けた対策を考えていくことができたか、活動の様子や、発言から捉える。 ・子どもの活動の様子に合わせて今日の活動を振り返る場を設け、次時への活動への見通しが持てるように促す。

[授業の様子]

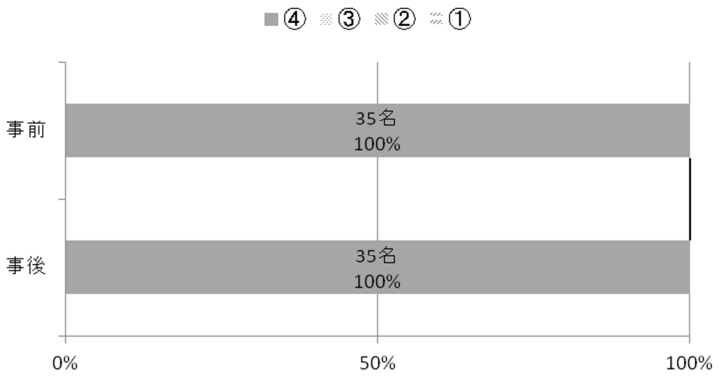
③授業実践アンケート

子どもを対象にしたアンケートを実施した（回答者：2 年生　実施前 37 名 実施後 37 名）

※実施前・実施後の比較をするため、実施前・実施後の両方に回答した 35 名を対象とした。

問 1 .ヤギさんといっしょにいて、うれしいですか。

(うれしい←4　1→うれしくない)



授業実施前と授業実施後を比較し、「うれしい（とてもうれしい含）」という子どもが、事前事後とも 100%であった。

■子どものコメント

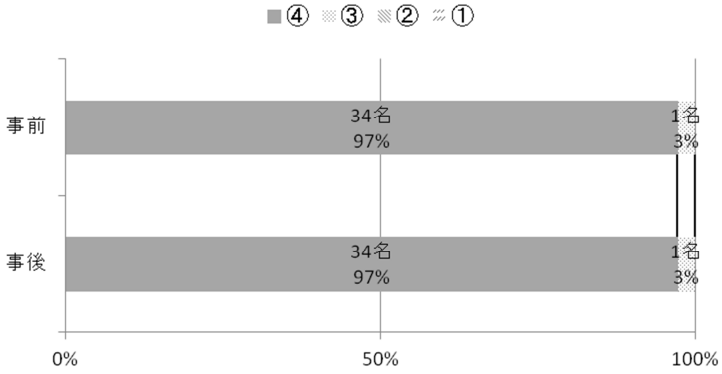
・ヤギさんがいるからこそ 2 年 2 組のみんなとたくさん学べてうれしい。

・だってヤギさんはいのちだから。いのちといっしょに生きられることがうれしいです。

・ヤギさんがきてからはみんなのえがおがふえたようなきがするからです。

問 2 . ヤギさんを大切だと思いますか。

(思う←4　1→思わない)



授業実施前と授業実施後を比較し、「大切（とても大切含）」という子どもが、事前事後とも 100%であった。

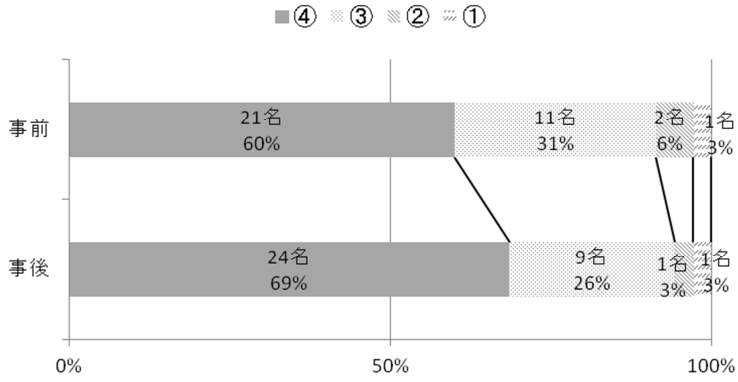
■子どものコメント

・生きることのよろこび、一日を大切に思い、かんじる。

・ヤギさんは、コロのぶんまでやさしくするってかったヤギさんだし、1 つのいのちだから。

問 3 .ともだちとヤギさんについて話していますか。

(話している←4　1→話していない)



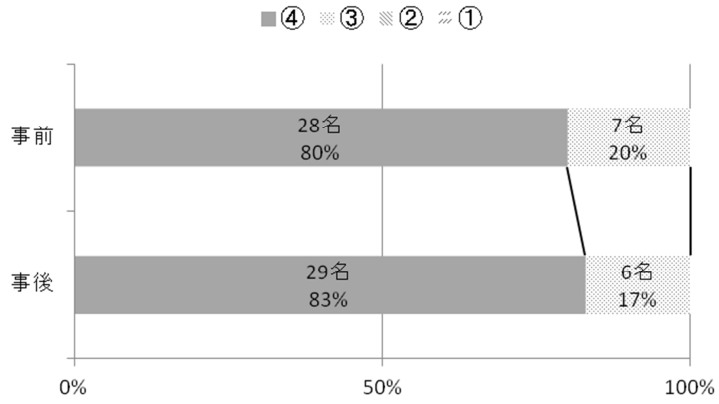
授業実施前と授業実施後を比較し、「話している（とても話している含）」という子どもが、事前は 91%だったが、事後は 95%に増えた。「あまりしていない」という子どもも減った。

■子どものコメント

・ぼくはロコがしんぱいだから話しています。

・ロコのためにかんがえているこやをどうやったらあたたかくなるのかはなしている。

問４.ヤギさんのお世話やお散歩をともだちと、力をあわせて行っていますか。
(行っている←4　1→行っていない)



授業実施前と授業実施後を比較し、「行っている（とても行っている含）」という子どもが、事前事後とも 100%であった。しかし、「とても行っている」という子どもが増えた。

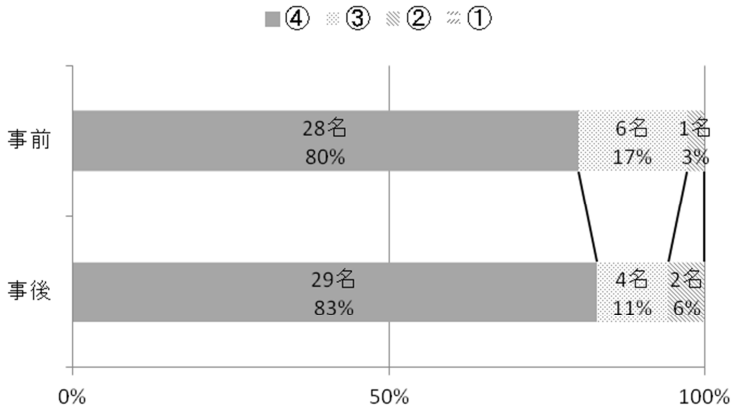
■子どものコメント

・子ヤギさんのとうばんのことやせいちょうのことを考えている。

・えさづくり、水かえ、お世話、うんちそうじ、気持ちをしる。

・しっかりと力をあわせて行っていないとヤギさんの命を守れないからです。

問５.ヤギさんがくらしやすくするために、したいことはありますか。
(ある←4　1→ない)



授業実施前と授業実施後を比較し、「ある（とてもある含）」という子どもが、事前は 97%だったが、事後は 94%に減った。しかし、「とてもある」という子どもが増えた。

■子どものコメント

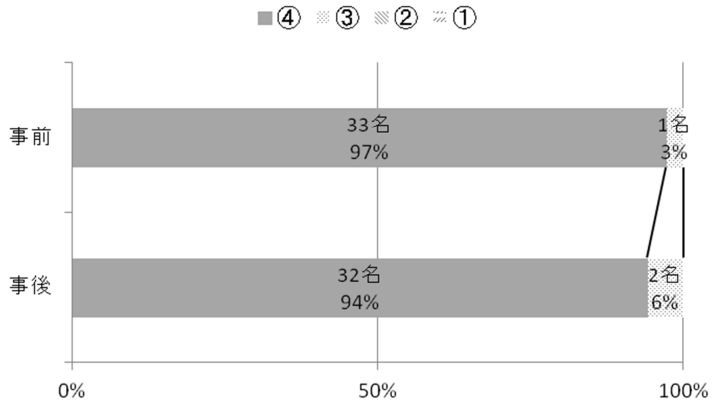
・ねるときに、ねどこがあたたかいほうがいいと思って、そういうことをしたいです。

・くぎをおとさない。ヤギはぜったいにたいせつでしょ。

・もっとりっぱなこやにしたいし、いっぱいおさんぽもしたいです。みんなでいっぱいやりたいです！

子どもを対象にしたアンケートを実施した（回答者：3 年生　実施前 35 名 実施後 35 名）
※実施前・実施後の比較をするため、実施前・実施後両方に回答した 34 名を対象とした。

問 1 .優希とこころといっしょにいて、うれしいですか。
(うれしい←4　1→うれしくない)



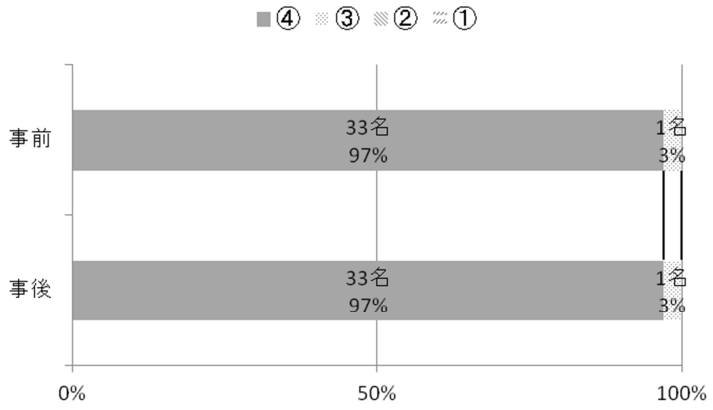
授業実施前と授業実施後を比較し、「うれしい（とてもうれしい含）」という子どもは、事前事後とも 100%であった。

■子どものコメント

・こころと優希といままでもいっしょにいて、言葉はわからないけど、気持ちはわかるきがして、毎日が楽しいから。

・こころがいるからこそできることもあるし、こころのおかげで動物の命や生活のことを学べるしこころがいてうれしくないんだったらせわもやんなくていいし、みねむらさんからあずかった大切な命だからさいごまでかいたい。

問 2. 優希とこころを大切だと思いますか。
(思う←4　1→思わない)



授業実施前と授業実施後を比較し、「思う（とても思う含）という子どもは、事前事後とも 100%だった。

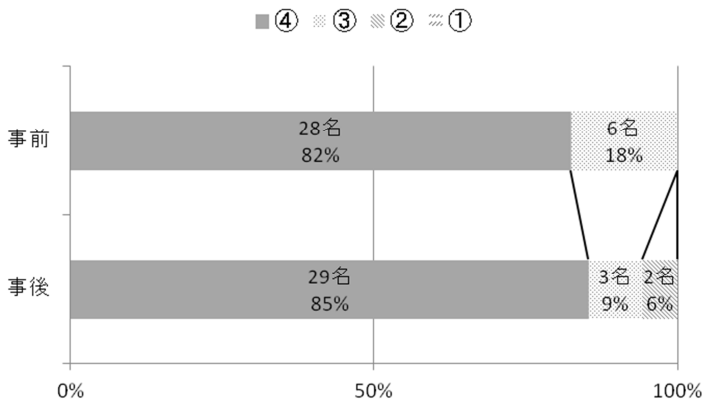
■子どものコメント

・こころは 3 年間、優希は 1 年間(やく)いて、いろいろなことがあった。それは、こころと優希がいるからできたことだから。

・かりている羊だけど、それでも本気になれたから、動物の大切さがわかった。

・みんなでかう、といったから。

問 3. 優希とこころとの暮らしについて、ともだちと思いや考えを伝え合ったり、考えたりしていますか。
(している←4　1→していない)



授業実施前と授業実施後を比較し、「している（とてもしている含）という子どもが事前は100%だったが、事後は 94%に減った。しかし、「とてもしている」という子どもが増え、「あまりしていない」という子どもが増えた。

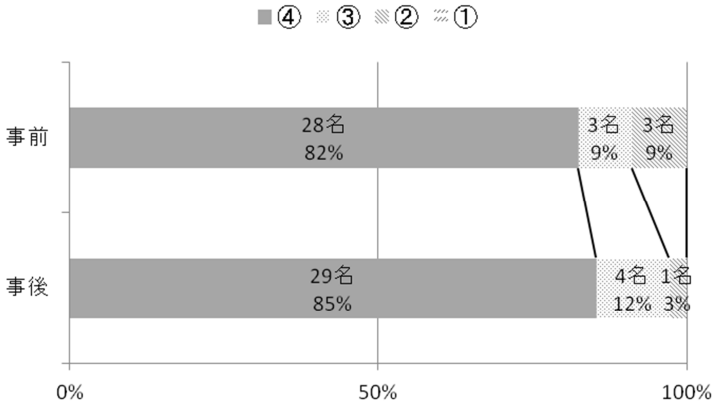
■子どものコメント

・みんなで思いとかをつたえ合わないとみんなの考えとかがまとまらないから。

・わたしが話し合いにさんかしないとなにも始まらないと思うから。

・はなしあうことでこころとゆうきのこれからをきめるとおもうから。

問 4. 優希とこころに関する活動をともだちと協力して行っていますか。
(行っている←4　1→行っていない)



授業実施前と授業実施後を比較し、「行っている（とても行っている含）」という子どもが、事前 91%だったが、事後は 97%に増えた。

■子どものコメント

・ぼくが思うに一人より二人、二人より三人です。みんなできょう力して、36 人より 37 人とだんだんふえていくその思いでこころのこやとかを安心できる。何人より何人というのが大切だと思いました。

・ともだちがこまっていたら、てつだう。こころとゆうきにとってうれしい事をしてあげたい。

(5)岐阜県

①ワーキンググループ会議（ワーキンググループメンバーについては、29 ～31 ページ一覧表を参照）
【第 1 回会議】
日 時：平成 27 年 8 月 11 日（火） 14:00～16:00
場 所：岐阜市立青山中学校
出席者：10 名（ワーキンググループメンバー 5 名 EPO 中部 1 名 地方事務所 2 名 事務局 2 名)
主な議題：ア 本事業の説明
イ 本事業における青山中学校の授業案について
〈議事内容〉
ア 本事業の説明
本事業の全体概要及び形成推進委員会において協議した本事業における中部 7 県の共通目標・これまでとの相違点等を報告し、共有した。（32 ページの富山県ワーキンググループの記載参照）また、今年度岐阜県の実証校である青山中学校への依頼事項を確認した。
イ 本事業における青山中学校の授業案について
今年度の実証校から実証授業内容について説明を受けた後、意見交換をした。
[意見交換]
本授業で生徒に付けたい力についての意見が出された。担当教員から、「「環境に配慮した生活について自分なりに考えて工夫している」、「自分の気持ちや考えを相手に伝えることが出来る」を第一段階として行っているため、今の流れでさらに強化していくこと、「友達の発表の中で、自分の見方・考え方と違う点に気づくことができる」、「友達の考えや意見を受入れ、話合いを進めることが出来る」、「人と自然は多くのことにつながっている」の力はまだ弱いため、付けていくように進めたいと授業を通しての子どもの実態から話をされた。そして、中学の 3 年間の間に継続して実践力をつけて、卒業後につなげたい。」と話された。次に、授業の展開について、1 学期の学習と今後の環境の展開とのつながりや、委員会活動「レッツクリーンデー」とのつながりについて、授業における掘り下げ方や題材、手法などについて意見が交わされた。「様々な考え方をぶつけあう場面を入れると、多様な意見が出て発信力に大きな変化が現れることにもなり、また話し合いの中で自分の考えが整理されていくため入れるとよい」との提案がされた。生徒達の興味や思考が深まる授業展開をするために効果的な人材や資料情報の提供については、本ワーキンググループのネットワークを活用して、プログラムに手法や情報を組み立てる授業案を検討することを共有した。公開実証授業について、どの授業が良いかの質問が出され、育みたい力を育むためのプロセスに基づき授業をされているところを見せていただくことを確認した。担当教員からは、新聞記事や映像で富士山でのごみ拾い活動を行う人を題材にした道徳の授業との連携についての時間が検討されているとの考えが出された。また、生徒達の興味や思考が深まる授業展開にあたっての人材や資料情報の提供については、公開実証授業までに本ワーキンググループ内で情報を共有し、ネットワークを活用した情報提供などを行い、授業づくりを進めることとし、以後の作業スケジュールを確認した。

実証授業について、以下の内容が決定した。
担当教員：小川佳広先生（1 学年主任）他 4 名
授業単元名：「環境」
対象：中学 1 年生生徒 148 名

授業内容：「環境」をテーマに実施している総合的な学習の時間で、「自分たちが身近な環境をよくするためにできることを」考え、課題を設定し、実践する。

実施教科：総合的な学習の時間・道徳

[第２回会議]

日　時：平成 27 年 12 月 21 日（月）16:00～17:30(※公開実証授業後に実施)

場　所：岐阜市立青山中学校会議室

出席者：13 名(ワーキンググループ６名　EPO 中部１名　地方事務所２名　事務局３名　ｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ１名)

主な議題：ア　公開実証授業について

イ　実証事業について

〈議事内容〉

ア.公開実証授業について

[実施した教員のふりかえり]

■小川佳広先生（1 学年主任）

環境省や岐阜市の方に来ていただき、講演をしていただいたことは非常によかった。私たちの知識のない部分を補うことができ、生徒たちが知識をつけることができた。

実証授業において、最初の道徳では ESD の視点に沿って、「自分の見方、考え方が違う点に気づくことができる」を生徒が感じ、そして次の総合では「友達の考えや意見を受け入れ、話し合いを進めることができる」をつなぎにして、最終的に「環境に配慮した生活について自分なりに考えて工夫する」というこの３点をねらいにし、生徒達の意識を高めたいと考えた。なかなか意見が出ない生徒もいたが、意見を発言する生徒の価値観に触れ、生徒の多くが自分に今までなかった価値観を知り、自分だったらどうすればいいかなとか、自分がこういう場面に直面したらこうしていきたいというような願いを持てる授業であった。総合では、生徒たちがグループで自由に意見を話し合っていた。今後３学期の授業の中で、自分たちの理想と現実の中で問題に差し迫った時に、葛藤しながら最善の方法を考え、自分たちにできることは何かを見つめていけるように今後つなげていけるとよい。

授業が活動ありきになっていたところが反省点であった。ﾚｯﾂｸﾘｰﾝﾃﾞｰの活動等に対して ESD の視点から掘り下げなければいけないところを担任の方との共通理解ができていなかった。新しい事を生み出すことに怖い部分もあった。活動だけではなく、議論するなどの時間を増やしていく方がよかったが、そういうところに踏み込めなかった。

[意見交換]

子どもたちの学ぶ姿勢、思考力、特に共に学ぶ、みんなで学ぶ習慣がベースにあり、日頃の子どもたちの思考を把握した上で授業の仕掛が上手く活かされていた。道徳の授業では富士山で清掃活動に取り組む人の映像が、自分たちの体験に基づきインパクトを与えていた。２コマの中での話し合いの持ち方がよく、面白い意見もたくさん出て来た。自分達の「ﾚｯﾂｸﾘｰﾝﾃﾞｰ」の活動とつなげて考え、またそこに一歩踏み出して気づきが出ていた。

一方で、ごみに限られてしまったため、拡がりが少なかったことが残念だった。ごみ箱を置くという意見からももっと深められる。持続可能性の点からいえば、活動の価値観プラス「自分たちが今ここにいない人たちのために拾う」、自身の将来、大人になった時のために拾うという考え方まで深まりつつあった。生徒のごみ拾い活動を社会、世界とのつながりが出てくるストーリーがあるとよい。話し合い活動では、ごみ箱を増やす、ポスターを貼る、ﾚｯﾂｸﾘｰﾝﾃﾞｰの活動範囲を広げるなどの一般的な答えは出ていたが、色々な意見が出せるような先生たちの誘導や「それって本当にいいの？」という揺さぶり、ピンポイントで掘り下げていくようなアプローチがあれば、生徒の考えの幅が広がり、もっと広い意見が出せるのではないか、との意見が出た。「子どもたちの意見を聞き取りながら組み立てていくと

もう少し広がりも深みも出てくる」、「生徒の「自分が出したゴミでもないのに、どうして僕が拾うの？」という良い気づきが出ていた、そういった発言を拾っていくこともできる」との意見が交わされた。

最後に第 3 タームに入っていく授業の在り方についての意見が出され、「子どもたちはもっと考えることができる。「自分が出したゴミじゃないのにどうして拾わなきゃいけないのか？」と大人に投げかけ、子どもたちの頑張りを通じて大人にも考えてもらうようなメッセージ性のある活動にするとよい」、「子どもの疑問や学びの気づきをぶつけ合ってその結果が出なくても環境の授業はそれでいい。考え方を学ぶ授業をするとよりESDの授業になる」、本日の授業を全体のプログラムと位置付け、結び付けていくことの重要性を共有した。

[実証事業に対する意見について]

ワーキンググループ会議は２回のみの開催であり、授業実施前と授業実施当日の終了後に行った。「授業を参観し、ワーキングを実施することは、現実を見ながらどうやって行くとよいかを検討できる点ではよかった。先生方に時間を取っていただくのは難しいため、時期の設定には検討が必要である。」、「ESDや環境教育のプログラムに知見を持つ人がおり、役に立った。そういう人が入ると、取組の全く違った景色が見えてきてよい」、「ESD をよく分かっていなかったが、学校教育の中で生で見せていただき私自身勉強になったし、いい経験ができた」、「どういうふうに自分の授業を進めたらいいか参考になった」、「先生方にこの事業を知ってもらえたということが一番よかった。先生方にこれを知ってもらい、少しでも「こんな形で自分たちができるんだ」ということに利用してもらえればありがたい」。担当教員からは、「新しい視点をいただけたことが良かった。可能ならば実際に先進校のディスカッションが組み込まれているような授業、実際の姿を見せていただくような場を今後環境省の方で進めていただけると勉強になると思った。ESD の視点は、担当の体育の授業でも考える視点となる。これからはこういうことを考えながら学校教育をすることが大切だと勉強になった。少しでも広めていきたい。」と意見が出された。一方で、「学校としては 4 月が始まると授業も進むため、前年度にアポイントをとるなどをするとよい」との指摘があった。

②実証授業

実証授業校：岐阜市立青山中学校

授業名：環境

対象：中学校

目標：自分たちの身の回りの環境を見つめ、自分たちの手で住みやすい環境を創ろうと願い、自分たちにできる活動を考え、行動することができる。

概要：「環境を守る」とはどういうことなのか、という問いに、生徒は身の回りの環境を見つめる。自分達で課題を見つけ、地域の環境をより良くするために、中学生の自分達にこそできることを追究し、考える。友達や地域の方などと意見や考えを交流し、様々な情報を得る中で、多様な視点から「環境」を捉える。週１回、登校時にごみ拾い活動「レッツクリーンデー」を行い、校区のどこに、どのようなごみが多いかを調査し、どうしてごみが多いのかを話し合う。学習を通じて、また富士山でのごみ拾い活動をしている人の映像から、自分達のごみ拾い活動の価値に気づく。よりよい社会の実現のために主体性をもち積極的に行動することの価値を感じ、地域、社会の一員としてより良く生きていこうとする責任感を育む。

[該当する４つの環境分野とサブテーマ]

４つの分野	ともに生きる	社会参画	○
		国際理解（異文化理解）	
		健康	
	自然・生命	生命	
		自然への愛着	

		生態系・生物多様性	
		水	
		大気	
		土	
	ごみ・資源	3R	○
		公害	
	エネルギー・地球温暖化	地球温暖化の起こる仕組みと影響	
		資源・エネルギー	
		産業	
		消費生活・衣食住	○

[主な持続可能な社会づくりの構成概念]

持続可能な社会づくりの構成概念	関連するものに○	理由
多様性		
相互性	○	ごみ拾い活動・調査や、外部講師などに話を聞くことで、地域や日本、海外の環境と人間の生活が関わり合っていることに気づく。
有限性		
公平性		
連携性	○	地域の環境を良くするためには、友達や学校、地域など、多様な人と連携、協力して問題解決を図ることが大事であると気づき、行動したいという意欲を持つ。
責任性	○	地域の環境に、一人ひとりが責任を自覚し、自ら進んで行動する。そのために、情報収集や様々な人と話をするなど、ビジョンを持つ。
その他（）		

[主な ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度]

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度	関連するものに○	理由
批判的に考える力（批判）		
未来像を予測して計画を立てる力（未来）	○	地域や社会がどうなってほしいかを想像し、地域や社会の環境を良くするためにできることを考え、行動することができる。
多面的、総合的に考える力（多面）	○	友達の発表、意見交流を通して、多様な価値観、考え方があることに気づき、受け入れることができる。
コミュニケーションを行う力（伝達）	○	自分の気持ちや考えを伝えたり、発表したりすることができる。
他者と協力する態度（協力）		
つながりを尊重する態度（関連）		
進んで参加する態度（参加）		

[学習指導要領との関連]

学年	教科/領域	学習内容
中学 1 年生	社会 地理分野	(1) ウ（オ）単元：南アメリカ州 アマゾンの森林伐採の現状を知り、自然との共生や、開発の進展とその影響について考える。
中学 2 年生	美術 表現	(2)単元：デザイン～思いを伝える～ ポスターは作者の主張が強く伝わることが大切であると気付き、環境について自分が主張したいことを具体的にして表現する。
中学 3 年生	社会 公民分野	(4)ア 単元：地球社会と私たち 地球環境やエネルギー資源問題を知り、有限な資源を生かしていく視点で考える。
中学 3 年生	理科 第 2 分野	(4)ア 単元：自然と人間 自然の中で生物について知り、人間と自然環境とのつながりや、環境保全を考える

[プログラム（単元・題材）の展開（総時数 7 時間扱い）]

時	学習課題	活動・学習内容	指導・支援の方法、ポイント等 〔教材・必要物〕 【育まれる「ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度」】
1 時間目	地域のごみを減らすには	見の回りの環境に関する自分達の意識調査の結果をもとに、地域のごみを減らす活動を考える。 「ごみを減らす」とは、どういうことか意見交流する。	意識調査の結果をみながら、どのような意識を仲間が持っているのか、多様な考えがあることを知り、多様な考えに気付く。 家庭でできること、レッツクリーンデーの活動でできることを考える事で、身近に引き寄せ、自分ごととして捉える。 【未来、多面、伝達、関連】
2 時間目	活動計画を立てる	環境委員からのレッツクリーンデーに関する活動の提案を受け、活動の見通しややり方を理解する。	レッツクリーンデーにおいて、ごみの量、種類、落ちていた場所などを調査すること、調査用紙の書き方を理解する。 【未来、参加】
3 時間目	活動を工夫する	調査結果を班・学級で交流する。活動の工夫や、調査の視点を考える	交流することで、活動の工夫や視点を考える。 【多面、伝達、関連】
4 時間目	岐阜市のごみの現状について知ろう！	講師からごみの現状について学び、知る。 岐阜市のごみに関わる政策や、抱える問題について知る	これまでの取組や日常生活とつなげ、市ではごみについてどのような政策があるかを知る。 日常生活を振り返る。 〔外部講師 岐阜市役所〕 【多面、伝達、参加、関連】

5 時間目	「ごみ」はどうして社会問題になっているのか？	講師に話を聞く。 ごみの現状、ごみが環境に与えている現状を知る。	ごみを通して、地域と世界とのつながりを知り、自分たちの活動の価値に気づく。 主体的に取り組む意欲を高める。 〔外部講師　環境省中部地方環境事務所廃棄物・リサイクル課〕 【多面、伝達、関連、参加】
6 時間	道徳	富士山清掃に取り組む人、活動を知る。 感想を交流する。	富士山清掃に取り組む人の新聞記事を読み、仲間と意見を交流したり、現在の自分たちの取組の価値を考えたりする。 自分達の取組をふりかえり、富士清掃の活動と重ね、取組の価値に気づく。 〔富士山のゴミの写真・映像、新聞記事、調査集計結果〕 【批判、多面、伝達、関連、参加】
7 時間目	環境をよくするためにわたしたちができること	レッツクリーンデーの調査活動から分かったことを、班や学級で交流する。 今後の活動について意見を交流する。 学級の意見をまとめる。	自分達ができること、地域と協力すること、市役所などに依頼することなど、自分たちの考えで広めたいことを交流する。 価値観を広げていく。 〔調査集計結果〕 【多面、伝達、関連、参加、協力】

[基となったモデルプログラム]

- 平成 25 年度プログラム 17:環境ウォッチングで提案づくり(公益財団法人公害地域再生センター(あおぞら財団)
- 平成 26 年度プログラム 25:学校周辺ごみ調査隊から～地域の未来のためにどんな大人になりたいか～
  (特定非営利活動法人くすの木自然館)

[地域化するにあたって配慮したこと、モデルプログラムから変更、追記したポイント、地域の協力者・場所・資源など]

地域環境の多様な課題の中より、生徒の関心の高い地域のごみを題材に、活動及び調べ学習などを行った。地域のごみの現状や政策を知るために市役所職員、地域のごみと世界とのつながりに気づくために環境省職員より協力を得て、様々な情報を得ながら自分達が地域でできることと地域の人と協力してできることを考え、提案するというプログラムを実施した。

[プログラムの実証の概要]

日　時：平成 27 年 12 月 21 日（月）　13:55～14:50、15:00～15:50 50 分×2 コマ
場　所：岐阜市立青山中学校
参加者：中学 1 年生生徒 148 名
概　要：富士山清掃に取り組む人の新聞記事を題材に、自分達の活動と重ねあわせ、よりよい社会の実現に向けて、一人ひとりが積極的に行動することの価値を感じ、自分も社会のためによりよく生きていこうとする気持

ちを高める。レッツクリーンデーでの調査結果をもとに、分かったことをまとめ、学校や地域のごみを減らしたり、美しくしたりするための活動を考える。

分	活動・学習	指導・支援の方法・ポイント等（教材必要物）
50	富士山に捨てられたごみの写真を見る。	初めはどことは言わずに写真を提示する。 レッツクリーンデーのごみの量と比較する 〔写真、調査集計結果〕
	富士山で清掃活動に取り組む人の新聞記事や紹介映像で知る。	富士山で清掃活動に取り組む人の資料から、日本の山のゴミの現状、清掃活動について知る。 〔新聞記事・紹介映像〕
	感想を交流する	クラスで感想を交流しながら、自分たちの活動に引き寄せてふりかえるように促す。
	「ラジオを通じて、富士山清掃活動に参加した人はどんな気持ちから行動したのだろうか」を考える	清掃に参加した人はどんな人か、どんな気持ちで参加したのか、をさらに問い、考える。
	ふりかえり	自分たちの活動や経験を富士山清掃をしている人の活動を重ねて考えることで、自分たちの活動の価値を感じる。また、活動を見つめ直す。
50	班で意見交流「4 回の調査活動から感じたことや、調査結果を見てわかったこと」	班で役割を分担する。 全員が意見を発言できるように工夫する。 〔調査集計結果、班のまとめプリント〕
	班の話合いを発表する	班で交流した内容を発表し合うことで、多様な意見があることに気づき、考えを深める。
	意見交流「さらに学校や地域のごみを減らしたり、美しくしたりするためにはどうしたらよいだろう」	これまでの学習や活動だけでなく、様々な視点考えられるように支援する。 どのように活動していくと自分たちの手で実現可能な活動になるかを、問い返しながら意見を具体的にしていく。
	「今後の活動の提案」	次の展開では本時で話し合った内容をより具体的にし、地域の環境をよりよくするために自分たちがすること、地域と協力してすることや、その提案を考えることを伝える。

[授業の様子]

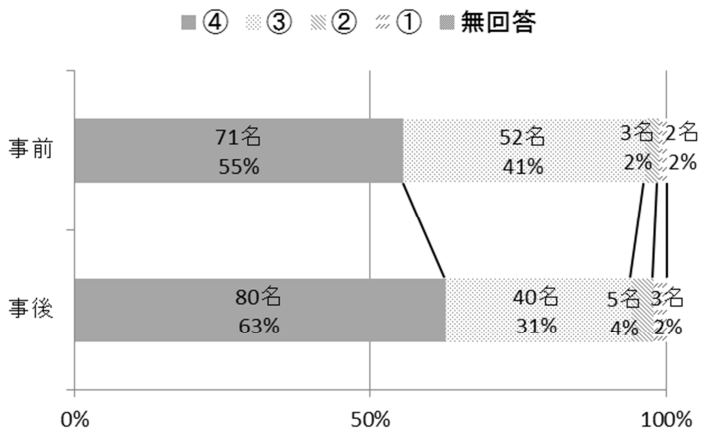
③授業実践アンケート

子どもを対象にアンケートを実施した。（回答者　：中学１年生 128 名）

※実施前・実施後の比較をするため、実施前・実施後の両方に回答した 128 名を対象とした。

問 1. レッツクリーンデーの活動をして、分かったことはありますか。

(ある←4　1→ない)



授業実施前と授業実施後を比較し、「ある」（とてもある含）という子どもが事前は 96%だったが、事後は　94%に減った。しかし、「とてもある」という子どもが増えた。

■子どものコメント

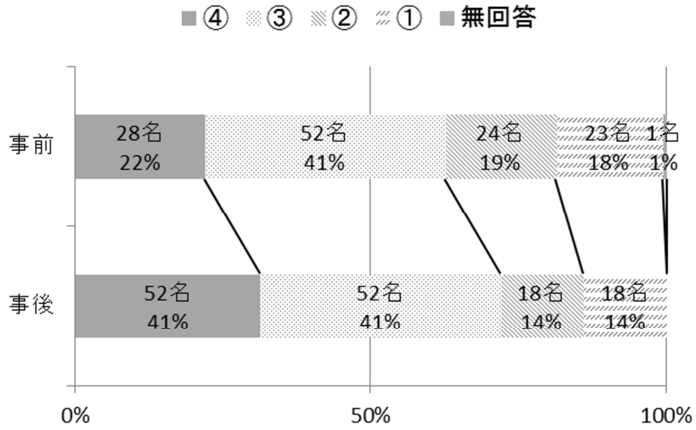
・家や店が多い所ほどごみが多い。

・同じ場所に同じ種類のごみが多く落ちていた。

・どのような場所にどのようなゴミが多いのかわかった。

問 2.地域のゴミについて、興味・関心がありますか。

(ある←4　1→ない)



授業実施前と授業実施後を比較し、「ある」（とてもある含）」という子どもが、事前は 63%だったが、事後は 82%に増えた。かつ、「とてもある」という子どもが増えた。

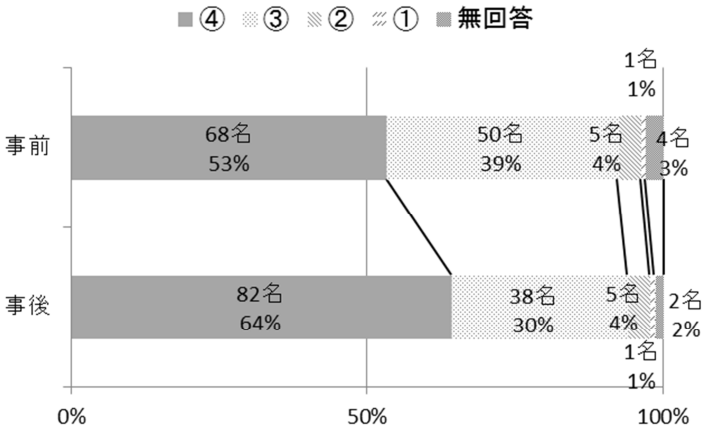
■子どものコメント

・地域のどこにごみが多いか。

・地域をきれいにすれば、それが日本や世界につながるから。

・ごみをなぜ捨てるのか。

問 3.調査した結果から気づいたことはありますか。
(ある←4　1→ない)



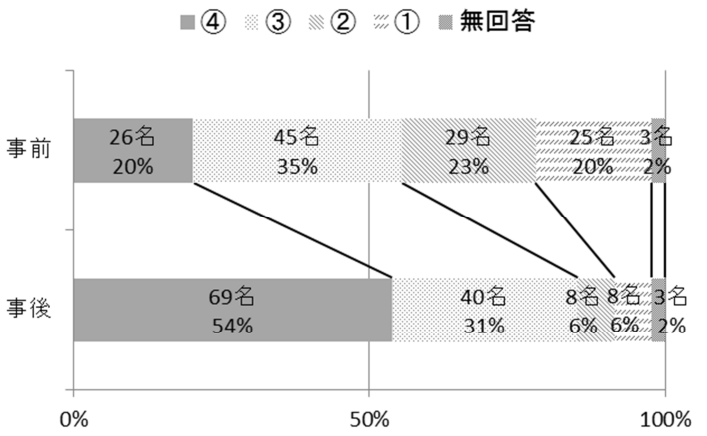
授業実施前と授業実施後を比較し、「ある」（とてもある含）という子どもが事前は 92%だったが、事後は94%に増えた。かつ、「とてもある」という子どもが増えた。

■子どものコメント

・学校の周りにごみが多い、道によく落ちている。

・たくさんの場所にごみが落ちているのではなく、決まった場所にたくさんある。

問４.各グループで調査内容や意見を交流する中で、気づきや、自分たちの調査、活動をよくするためのアイデアやヒントがありましたか。
(ある←4　1→ない)



授業実施前と授業実施後を比較し、「ある」（とてもある含）という子どもが、事前は 55%だったが、事後は 85%に増えた。かつ、「とてもある」という子どもが増えた。

■子どものコメント

・レッツクリーンデーを行う。

・ごみ箱を設置する。

・地域清掃を行ってごみを減らす。

・地域の空いている掲示板にポスターを貼る。

・レッツクリーンデー以外の日もゴミを拾う。

(6)愛知県

①ワーキンググループ会議（ワーキンググループメンバーについては、29 ～31 ページ一覧表を参照）
【第 1 回会議】
日 時：平成 27 年 7 月 23 日(木) 9:30～11:30
場 所：半田市立板山小学校
出席者：15 名(ワーキンググループメンバー11 名 EPO 中部 1 名 地方事務所 1 名 事務局 2 名)
主な議題：ア 本事業の説明
イ 本事業における板山小学校の授業案について
〈議事内容〉
ア 本事業の説明
本事業の全体概要及び形成推進員会において協議した本事業における中部 7 県の共通目標・これまでとの相違点を報告し、共有した。（32 ページの富山県ワーキンググループの記載参照）また、今年度愛知県の実証校である板山小学校への依頼事項を確認した。
イ 本事業における板山小学校の授業案について
今年度の実証校から実証授業内容について説明を受けた後、意見交換をした。
[意見交換]
授業内容について、ビオトープを題材にすることについて、「校庭の片隅にある池だけがビオトープではなく、神戸川も学校の森も、生き物が棲んでいる環境が本来のビオトープである」、「ビオトープを作ること、維持することが目的ではなく、「私たちのビオトープは私たちが大事にしたい」という気持ち、主体性、当事者意識を育むプロセスが大事であり、そのプロセスによって学級、学校、地域で盛り上げることが重要である」、「ビオトープはあくまでも教材である。専門家が 1 から 10 まで教えるのではなく、子どもたちの思いや意思を大事にし、学びを重ねて当事者意識をもって取り組むことをメインにすることが重要である」、との意見が交わされた。
次に、ESD 授業づくりにおいての重要な点については、子どもたちの自由な発想を大事にし、引き出すことが必要である」、子どもたちに何を学ばせるか、気づかせるかが重要であり、教員も活動をしていくなかで起きることを活かした授業づくりの発想を持つことが重要である」、「ビオトープが生物がたくさんいるからいい、というだけではなく衛生上の問題等を含めて、「え？」「本当？」と気づきを深めていくプロセスを大切にするとよい」、「ESD 授業を実施すると、予定通りにはいかない、子どもたちの発想によって教員の目指すべき方向と違う部分が出たりする。そこに対応できるかが教員のスキルになってしまうが、あくまでも学習者主体であるから、柔軟に児童の発言や発想、話し合いの内容に対応することが重要である。」との意見が交わされた。
関連する教科との連携の可能性や、教科をつなげることによる児童の思考のつながりについて、子どもに育みたい力を育むための素材、プロセスの立て方、情報についても提案がされた。以後の事業及び授業のスケジュールを確認し、第 2 回の授業までの間にワーキンググループメンバー内で情報共有し、授業づくりを進めることとした。

実証授業について、以下の内容が決定した。
担当教員：岩崎祐樹先生 鈴木優先生
授業単元名：メダカがいっぱいの板山を取り戻そう
対象：小学 5 年生児童 47 名
授業内容：15 年ほど前に地域の人によりつくられた学校ビオトープを題材にした授業を行う。子どもたちはビオ

トープの水質環境に向き合い、ビオトープがどうなったらよいのか、生き物が棲みやすい環境を取り戻すためにはどうしたらよいか、そのために自分たちに何ができるのかを考える。学習を通して学んだことを他学年の児童や地域に発信し、地域と学校が一緒になってビオトープの活動へとつなげていく。地域に誇りを持ち、地域の自然環境を守る主体的な児童を育む。

実施教科：総合的な学習の時間

【第２回会議]
日　時：平成 27 年 10 月 13 日（火）　17:00～18:30(※公開実証授業後に実施)
場　所：半田市立板山小学校
出席者：12 名（ワーキンググループ７名　EPO 中部１名　地方事務所１名　事務局３名）
主な議題：ア　公開実証授業について
　　イ　実証事業について
〈議事内容〉
ア　公開実証授業について
[実施した教員のふりかえり]
■岩崎祐樹先生（半田市立板山小学校教諭）
前時で「ビオトープをどうしたい？」と聞いた時に、９割９分の子どもが「ビオトープを復活させて、地域の水質環境を良くするきっかけをつくりたい」、という考えを持っていた。本時では子どもたちが個々にもった意見を基に、今後のビオトープのあり方について意見交換を行い、活動の方向性を考えた。80 分間の授業が自分自身も子どもたちも初めてで、集中力の持続や時間配分が難しかったが、授業では子どもたちからたくさんの考えや意見が出て、今までの授業の積み重ねが活きていた。話し合いが机上の空論のようになってしまったことが反省点である。子どもたちが実際に活動をして、失敗した経験を踏まえて次にどうしたら良いかを考えていくことが大切であり、今後の課題である。
[意見交換]
先生方の子どもたちの意見の引き出し方が良く、たくさんの意見が出ていた。ゲストティーチャーとの関係性もできており、授業が上手く進められていた。グループの話し合いでもみんなが発言できていた。
一方で、２ コマの授業で扱うテーマが広い、発問の仕方や、子どもの意見の活かし方について、「ビオトープづくりという視点だけに着目して話が進んでいったことが残念であり、持続可能なものにしていくという観点からは若干物足りなかった。どうしたら次の世代につなげていけるか、傍観者ではない世代を作っていくかが大事である」との意見が交わされた。また、ビオトープの材としての捉え方について、「ビオトープを通して学び、自分のこととしてどう関わっていくかが大事である」といった意見が出された。また、学びをもう一歩深めようとするときには、「再生」と「改善」という言葉の使い方など認識をそろえた中で、授業内容を絞ってしていただく必要があると感じた。
ゲストティーチャーの活用については、「授業をしている先生の授業のゴールが少し違っていた。子どもの発想、創造性を活かせるようなゲストティーチャーの活用が大事である」、「正解をもらうのではなく、知らないことを伝えてもらうというスタンスで関わってもらう」との意見が出た。最後に今後の展開として、「ビオトープを継続していくにも、将来的な目標を立て、今年は今年できることをやろう。残りは来年の下級生にお願いする、など来年度以降にうまくつながっていくような仕掛けの必要性」、「今後学校で脈々とつながっていくための学校全体のカリキュラムデザイン」が提案された。

イ　実証事業に対する意見について

ワーキンググループ会議は授業実施前と授業実施当日の終了後にふりかえりをする２回実施した。「関わった先生方の成長と他の先生方の変化も把握できると事業を実施する意義がある」、「単発ではなく、シリーズものとしてねらいをきちんと設定し、積み上げる形で力量向上につなげていくことが必要である。総体的に「よかった」という繰り返しでは他の先生に与える影響も含めあまり効果は得られない」、「内容を覚えることよりも、子どもたちが何を考え、何ができるかという授業はとても有効で、大事になってくる。先生方がそういった視点で参加して、学ぶことが役に立つ。こういった教員対象の研修にプログラムが有効に働く」、「本を読んだだけで全てが身につくわけではないので、こういう事業の価値がある」、「様々な職種の方が集まって研究し、専門的にやるのは意義があり、そういった視点で授業を進めていくことも大きな意味がある。今後、学校は様々な関係団体と協力しながら学校の経営や運営の場でつながりをもって関係を広げていくことの重要性が高まる。学校にとっても非常にプラスであり、学校をいい意味で変えていく」、「他の先生方にも良い影響を与える」、「こういう事業を引き受けるのは大変ではあるが、取り組むことで学校側もサポートをもらい、いろいろな授業を組み立てられる。先生の頑張りが子どもたちにつながるものもあるため、取り組んだ方がよく、やった効果は必ずあると思う」との意見がだされた。学校側からは、「学校という現場においても県の教育委員会の方やいろいろな職種の方に現場に来ていただく手続き等は難しいが、本事業のコーディネートがあり、壁を越えられ、有難かった。違う職種の方々との交流は、時代的にも大変求められており、必要だと痛切に思っている。ユネスコスクールになったメリットも確認できた」との意見をいただいた。

②実証授業内容

実証授業校：愛知県半田市立板山小学校
授業名：メダカがいっぱいの板山を取り戻そう
対象：小学校高学年
目標：

- ●ビオトープの水質環境の改善や再生活動に対して関心をもって取り組もうとする。
- ●板山小の過去から現在の歩みの中で、地域の人の思いを知り、ビオトープの未来（再生）に向けた計画を立てることができる。
- ●ビオトープの改善方法についての話し合い活動を通して、ビオトープの再生に向けた課題を追究することができる。
- ●自分たちがしてきた再生活動や水質環境の改善のための取組をまとめ、地域の人に伝えることができる。
- ●よい環境を持続するために、日常生活を見直し、自分でできることを考え、生活に活かすことができる。

概要：板山小には、15 年程前に地域の人によりつくられたビオトープがある。しかし、今は生き物が棲みにくい環境になっている。子どもたちは現状に向き合い、学校のビオトープがどうなったらよいのか、生き物が棲みやすい環境を取り戻すにはどうしたらよいのか、自分たちには何ができるのかを考える。さらに、つくられた当時の地域の人の思いを知り、地域とのつながり、生き物と人間、環境とのよい関係性を見つめる。ビオトープづくりの専門家、生き物に詳しい地域の人の話を聞き、学習を深め、「こうしたい」という思いを他学年の児童や地域に発信し、地域と学校が一緒になってビオトープの取組を未来へつなげる。地域に誇りを持ち、地域の自然環境を守る主体的な児童を育む。

[該当する４つの環境分野とサブテーマ]

４つの分野	ともに生きる	社会参画	○
		国際理解（異文化理解）	
		健康	
	自然・生命	生命	
		自然への愛着	○
		生態系・生物多様性	○
		水	○
		大気	
		土	
	ごみ・資源	3R	
		公害	
	エネルギー・地球温暖化	地球温暖化の起こる仕組みと影響	
		資源・エネルギー	
		産業	
		消費生活・衣食住	

[主な持続可能な社会づくりの構成概念]

持続可能な社会づくりの構成概念	関連するものに○	理由
多様性	○	ビオトープの再生、改善活動を通じて、生き物が棲息する環境について学び、生き物と人間、その棲息環境の多様性について学ぶ。
相互性	○	ビオトープに棲息する生き物同士、生き物と水循環、生き物と人間などとの相互性について、ビオトープの再生、改善活動を通して気づき、学ぶ。
有限性		
公平性		
連携性	○	ビオトープの再生計画づくり、再生活動、改善のための取組・管理などを地域の人や学校全体で取り組む。
責任性	○	ビオトープの再生計画づくり、再生活動、改善のための取組・管理などに責任を持って行う。
その他（）		

[主な ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度]

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度	関連するものに○	理由
批判的に考える力（批判）	○	ビオトープの改善方法について話し合い、課題を追究することができる。
未来像を予測して計画を立てる力（未来）	○	ビオトープの未来に向けた計画を立て、行動することができる
多面的、総合的に考える力（多面）		
コミュニケーションを行う力（伝達）		

他者と協力する態度 （協力）		
つながりを尊重する態度 （関連）		
進んで参加する態度 （参加）	○	ビオトープに関心を持って取り組み、自分でできることを考え、生活に活かすことができる。

[学習指導要領との関連]

学年	教科/領域	学習内容
小学５年生	理科	メダカのたんじょう メダカの生態について学ぶ。

[プログラム（単元・題材）の展開（総時数　25 時間扱い）]

時	学習課題	活動・学習内容	指導・支援の方法、ポイント等 〔教材・必要物〕 【育まれる「ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度」】
1 時間目	ビオトープの環境を知ろう	水質環境の現状を捉え、問題点について考える。	ビオトープの水質の現状を知ることで、生き物にとって住みやすい環境ではないことに気づかせる。 〔ワークシート〕 【批判、関連】
2 時間目	板山小の過去、地域の人々の思いを知ろう	板山小の環境の変化を知る。 自然豊かな板山小の環境がつくられた背景を考える。	移転当時と現在の板山小の写真を見比べ、環境が変化していることに気づかせる。 なぜ、地域の人は移転時にたくさんの木々を植えたり、ビオトープを造ったりしたのか、地域の人々の思いについて考えさせる。 〔ワークシート〕 【関連】
3 時間目	ビオトープの今後について考えよう	ビオトープをどうしたいか考え、話し合う。	ビオトープの現状と地域の人々の思いをふりかえり、今後どのようにしていきたいか、自分達は何をしていく必要があるのかを考え、話し合う。 〔ワークシート〕 【関連、未来、参加】
4 時間目	ビオトープの再生方法について話し合おう	今後について全員で意見交換を行う。 ビオトープの専門家のアドバイスを受けながら、再生方法について考える。	どんなビオトープにしたいのか、イメージを持つ。 現在のビオトープの課題とその課題を解決する方法を考えることによって具体的に課題に向き合う。 専門家のアドバイスを受け、より具体的に考えられるようにする。 〔ビオトープの専門家、ワークシート、ビオトープの写真、付箋〕 【批判、未来、対話、参加】
5 時間目	ビオトープの再生計画	学習を踏まえ、自分の考えをもとに再生計画	自分の考えと、グループ、学級での話し合いを踏まえて、具体的に計画を立てて、実践しようとする意欲を育む。

	を立てる	についてグループや学級で話し合い、計画を立てる。	【批判、未来、関連、参加、対話】
6~11 時間	ビオトープを再生しよう	計画をもとに、再生活動に取り組む。	再生活動に取り組み、その取組をふりかえり、次時の活動の課題を見つける。 【参加、協力、伝達】
12 時間	水質環境の向上のための取組について考えよう	板山の水質環境を向上するためにできることは何か考える。	自分達にできることは何かを考えることにより、自分が取り組んでいく、という意欲を持つ。 【批判、参加】
13・14 時間	考えた取組を実践しよう	前時で出た意見から、いくつか選択して、実践する。	考えたことを実践することにより、水質環境の改善に対する意欲を高め、自分ができること、協力してできることなど、今後の取組についてより深く考え、課題に取り組む。 【批判、未来、参加、協力】
15 時間	発表会の計画を立てよう	これまでの活動を発表するための計画を立てる。	伝えたいことは何かを考え、それをどんな方法で発表するか計画を立て、計画性を持って取り組むように意識づける。 【未来、参加、協力】
16~21 時間	発表の準備をしよう	立てた計画をもとに準備を進める。	分かりやすく伝えるように、発表内容や展示、資料などを工夫する。 【未来、伝達、参加、協力】
22・23 時間	発表会	地域の人、他学年にこれまでの取組を紹介したり、環境問題をどうしていきたいか提案を行う。	地域の人や他学年に発表、提案し、意見を交換することにより、より広い視点で環境問題を捉え、学校と地域が連携して地域の環境をよくしていこうとする気持ちを高める。 【関連、未来、伝達、参加、協力】
24・25 時間	まとめをしよう	これまでの取組について振り返る。 今後活動を継続していくためにどうすればよいかを考える。	取組を振り返ることで、達成感を持ち、次に継続していくための意欲を育む。 次の学年や地域の人との連携についても促す。 【関連、未来、伝達、参加、協力】

[基となったモデルプログラム]
平成 25 年度プログラム 11:里山ビオトープから“いのちの輝き”伝えよう（豊田市立西広瀬小学校）

[地域化するにあたって配慮したこと、モデルプログラムから変更、追記したポイント、地域の協力者・場所・資源など]
子どもたちの主体的な活動や意欲にを促すために、15 年ほど前に地域の人がつくった学校ビオトープを題材にして行う。

[プログラムの実証の概要]
日　時：平成 27 年 10 月 13 日（火）　13:55～15:35　45 分×2 コマ
場　所：半田市立板山小学校
参加者：小学 5 年生　児童 47 名
概　要：ビオトープを再生するために、自分の考えをまとめ、グループ、学年で話し合いを行う。友達の意見やゲストティーチャーの話を踏まえて、よりよい方法を考える。

分	活動・学習	指導・支援の方法・ポイント等（教材必要物）
5	意見交換「ビオトープの今後について」	代表児童が基調提案として、ビオトープの今後に対する考えを発表し、その考えを題材に意見交換を行い、活動の方向性を示す。
2	本時のめあてを確認する。 「ビオトープを再生するためには、何が必要で、何をしたら良いか考えよう」	校地内のビオトープという児童にとって身近な題材を扱うことで、児童の興味・関心を引き出す。 ビオトープの再生には数多くの課題がある。その課題をどう解決していくか児童自身に考えさせる。
5	ビオトープ再生のための見通しをもつ。 グループで意見を出し合う。	ビオトープの拡大写真を見ながら、司会者を中心に意見を出させる。 児童から挙がった意見を黒板に示し、改善方法について考える際に考えを振り返られるようにする。
5	グループで話し合った意見を発表する	
3	見通しの考えに対して、ゲストティーチャーのアドバイスを聞く。	意見に対するアドバイスを聞くだけでなく、他のビオトープの写真をみせてもらい、新たな視点を持たせる。
12	明らかになった改善点に対して、どのような方法でビオトープを再生させるか、考えを付箋紙にまとめる	ビオトープを再生させるための自分の考えをまとめる。
8	付箋紙を写真に貼り、グループで互いの考えを確認し合う。	自分の考えが該当する場所に付箋紙を貼らせ、その後、お互いの考えを見合う時間を設けることで、どのような点に考えが集中しているか知らせる。
20	グループで話し合い、改善方法に対するグループの考えをまとめ、発表する。	グループの司会者が中心となって、何に対する改善方法について話し合うか決定させてから話し合わせる。
5	考えた改善方法に対するゲストティーチャーのアドバイスを聞く。 他のグループの考えやゲストティーチャーのアドバイスをふまえて、グループで自分たちの考えを再考する。	自分たちの考えのよかった点、修正すべき点、考え直す必要がある点について話し合わせることで、考えを深めさせる。
5	本時の活動を振り返る。	振り返りシートに本時の学習を通して自分の考えがどう変わったか書かせることで、学習を振り返らせる。
10	次時の活動内容について知る。	次時は本時の内容をふまえて、実際に今の児童の考えをどう行動に移したらよいか投げかけ、オープンエンドとする。

[授業の様子]

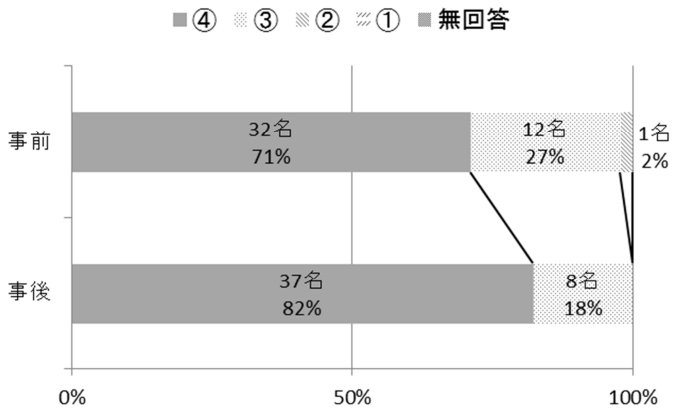
③授業実践アンケート

子どもを対象にアンケートを実施した。（回答者：小学５年生　実施前 47 名　実施後 45 名　）

※実施前・実施後の比較をするため、実施前・実施後の両方に回答した 45 名を対象とした。

問 1.学校のビオトープは大切ですか。

（大切である←4　1→大切ではない）



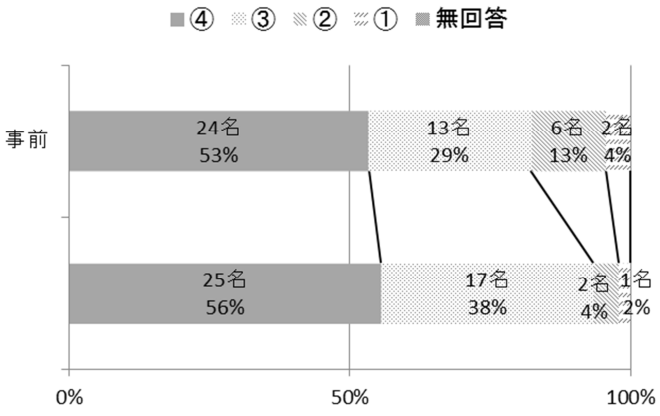
授業実施前と授業実施後を比較し、「大切である(とても大切である含)」という子どもが、事前は98%だったが、事後は100%に増えた。かつ、とても大切だという子どもが増えた。

■子どものコメント

・昔からあって、なじみがあって、もっときれいにすれば低学年もこれから大切にしてくれると思うから。

・生き物や自然がいっぱいの学校を目指したいから。

問２.学校内にあるビオトープに興味・関心はありますか。
（ある←4　1→ない）



授業実施前と授業実施後を比較し、「ある(とてもある含)」という子どもが、事前は 82%だったが、事後は 94%に増えた。かつ、とてもあるという子どもが増えた。

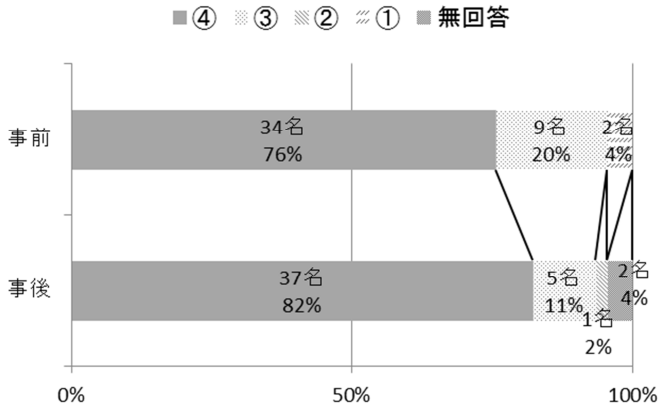
■子どものコメント

・最初はいやいややらされていたけど、やると楽しくなる。

・ビオトープの歴史に興味がある。

・ビオトープの昔のきれいさとか、住んでいた生き物とか、なぜザリガニだけ住むようになったのか気になります。

問３.学校内のビオトープの未来について気になりますか。
（気になる←4　1→気にならない）



授業実施前と授業実施後を比較し、「気になる(とても気になる含)」という子どもが、事前は 96%だったが、事後は 93%に減った。しかし、とても気になるという子どもが増えた。

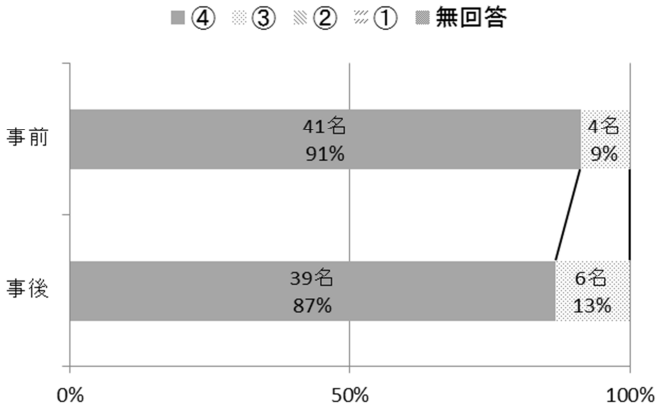
■子どものコメント

・きれいになるのか、つぶされてしまうかが気になります。

・ビオトープに色々な生き物が住んでいるか気になる。たくさんの生き物が住んでいてにぎやかなビオトープであってほしい

・これから板山小学校に通う人にもビオトープをきれいにしていってほしい。

問 4.学校内のビオトープを良くしたいと思いますか。
（思う←4　1→思わない）



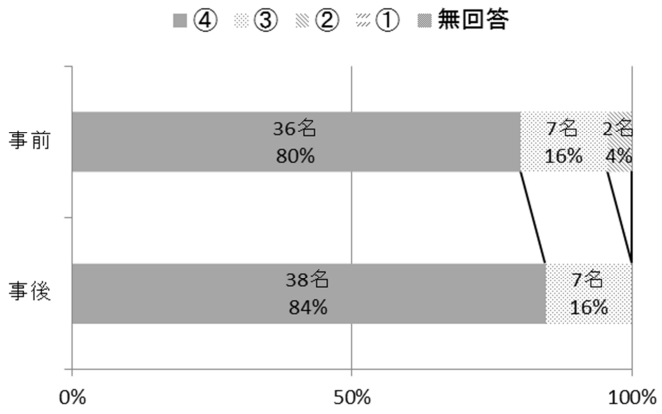
授業実施前と授業実施後を比較し、「思う(とても思う含)」という生徒が、事前事後とも 100%であった。しかし、とても思うという子どもが減った。

■子どものコメント

・ザリガニを取ったり、水草を植えたり、水をきれいにしたりしてよくしたいです。

・泥を全部かき出して、小石や竹炭を入れて浄化し、生き物が住みやすい環境にしたい。

問 5.学校のビオトープや、ビオトープについて話し合ったことなどを地域の人や他の学年の人に伝えたいですか。
（伝えたい←4　1→伝えたくない）



授業実施前と授業実施後を比較し、「伝えたい(とても伝えたい含)」という子どもが、事前は 96%だったが、事後は 100%に増えた。かつ、とても伝えたいという子どもが増えた。

■子どものコメント

・再生活動を手伝ってくれるかもしれないし、ビオトープのことを知ったら関心をもってくれるかもしれないから

・地域の人で自分たちの活動を知らない人がいるので、伝えたい。

・環境をよくするために「板山小学校のビオトープだけでなく、他の場所、世界の環境が汚れている」と伝える。

(7)三重県

①ワーキンググループ会議（ワーキンググループメンバーについては、29 ～31 ページ一覧表を参照）

【第 1 回会議】

日 時：平成 27 年 8 月 24 日（月） 9:30～11:30

場 所：四日市市立中部中学校

出席者：15 名(ワーキンググループメンバー7 名 EPO 中部 1 名 地方事務所 2 名 事務局 3 名 オブザーバー 2 名)

主な議題：ア 本事業の説明

イ 本事業における四日市市立中部中学校の授業案について

〈議事内容〉

ア 本事業の説明

本事業の全体概要及び形成推進員会において協議した本事業における中部 7 県の共通目標・これまでとの相違点等を報告し、共有した。（32 ページの富山県ワーキンググループの記載参照）また、今年度三重県の実証校である四日市市立中部中学校の依頼事項を確認した。

イ 本事業における四日市市立中部中学校の授業案について

今年度の実証内容について、担当教員より、「 3 年生の理科及び総合学習で企業連携授業を活用して実施を検討している。地球温暖化などの環境問題に注目し、理科でのエネルギーの仕組みの学習とつなげ、企業連携授業を行う予定である。企業連携授業では、四日市の企業から環境の専門知識を得るため、大洋塩ビ株式会社とプラスチック循環利用協会の協力で、専門性の高いリサイクルについての学習を計画している。そして、三菱化学株式会社と木炭電池を作り、エネルギーについての学習を検討している」と説明を受けた後、意見交換をした。

[意見交換]

カリキュラムが盛りだくさんであるため、どこをピークとしてもってくるのか、生徒に何をどう学ばせたいのかについて質問が出された。担当教員からは「ESD カレンダーを作成しており、他教科と連携した学習を行い、企業連携授業をピークにし、文化祭への取組発表につなぐことを考えている」と話された。「生徒の学びを積み重ねていくために、カリキュラムの全体像を示し、生徒に培いたい力、扱うテーマ・課題を明確にし、学習を拡げ深める部分について教科担当教員と協議し共通の理解を図る必要がある。また、連携する企業とも協議し、どの部分を担ってもらうのか、全体の学習プロセスに沿った講座内容の作成が必要である」との指摘がされた。また、「生徒が持続可能性の視点を持って、題材について関心を高めて、学びを深めていく仕掛けが必要である」、「生徒が当事意識を持つ事が重要となるため、課題を自分ごととして捉える作業が必要である」、「扱う幅を拡げるのではなく、ある程度教員が論点を絞って導いて、プロセスの中で子どもたちにどういう知識を与えて、どういう力を育み引き出していくのかを検討する必要がある」、「ESD の重要な点は、学びを自分の生き方につないでいくことである。答えが何かを明確にするのではなく、議論などを通して多様な意見を知り、自分の考えや意見の幅を拡げる思考をもつこと、またそのための十分なプロセスが必要である」、との指摘がされた。座学だけでなく、参加型や話合いの手法を取り入れることが提案された。担当教員は授業案を再度検討することとし、今後の事業及び授業のスケジュールを確認した。第 2 回の公開実証授業までの間、ワーキンググループメンバー内で情報共有し、必要に応じて授業検討を行い、授業づくりを進めることとした。

実証授業について、以下の内容が決定した。
担当教員：森　直也先生
授業単元名：「つなげよう　わたしたちの環境とエネルギー　～リサイクルについて考えてみよう～」
対象：中学 3 年生生徒 34 名
授業内容：企業の連携の授業を受け、プラスチックリサイクルの現状、今後のありかたについて考える。
実施教科：総合的な学習の時間、理科

【第 2 回会議】
日　時：平成 27 年 10 月 20 日（火）15:00～16:30(※公開実証授業後に実施)
場　所：四日市市立中部中学校
出席者：12 名(ワーキンググループメンバー8 名　EPO 中部 1 名　地方事務所 1 名　事務局 2 名)
主な議題：ア　公開実証授業について
イ　実証事業について
〈議事内容〉
ア　公開実証授業について
[実施した教員のふりかえり]
■森　直也先生
　他にも公開授業をしているが、このような感じになったのは初めてで楽しかった。特に、後半は子どもたちの変容をもとにいろいろな討議ができた。自分の中では進化させて、より高めていかないといけないという反省はある。生徒の一人の発言に次の子がキャッチボールのように意見交換をし、これまでの学習の経験が少しずつ深まってきたと感じた。
授業では、相互討論の時間が一番大事だと感じており、変容していくことが ESD にとっても大切なことであり、資料活用や友達の意見を基に変容していくことが大事である。それぞれの立場で席を分け発言をさせると、イメージがしやすかったのか、一番面白いシーンとなった。ただ、それを面白いとか、興味・関心を高めるためにだけで終わらせるのではなく、最後の締めの言葉では、抑えておくべきこととして、これからの世代である自分たちが引き続き続いていく学習であり、継続して考えていくべきこと、これが持続可能な社会に向けての ESD だということ、を話して、オープンエンドで終えることができた。
　自分自身の教育活動を多角的に ESD の視点にたって見直すきっかけなった。揺さぶりをかけることによって子どもたちの考えが変容することを実感し、このような手法が子どもたちの教育活動に必要だと認識した。実証授業をどう進めていくかを相談でき、意見をもらいながら自分自身で深めることができた。自分自身の教材研究とか教育活動全般をふりかえることができた。今後の自分の持続可能な教育活動に向けてテーマを見つけることができ、今回の実証授業で大変貴重な勉強ができた。
[意見交換]
　全体として「講義的な授業ではなく、自分の意見を発表して、それについて他の意見を聞いて、自分で考えて、それをまた表現できるというアクティブラーニングに近い授業ができ、非常に良かった」、子どもたちの様子については、「その必要性を感じて『前のめり』で聞いていた、前向きな学習が展開されていた」、「子どもたちか『必要以上のものは買わない』という彼等自身の考えを発表していた」との意見が出された。また、手法としてはディベートを社会に必要なスキルであり、手法として取り入れ、子どもたちがたくさん発言できたことで学びがさらに深められた。自分たちの行動まで踏み込んでいけば、有効でないと答えた子どもたちも考えが変わり、もっと深められるとの意見が出た。子どもの

言葉を大切にするようなワークシートや板書の使い方などの工夫も提案された。

題材については、プラスチックのリサイクルを題材としたからこそ意見が分かれて議論ができた。持続可能性という視点で考えられるテーマであり、「リサイクルを続けていけば技術が上がり、今あるデメリットがなくなっていくからもっとリサイクルした方がいい」と言った生徒の発言は ESD の学習の中でのもう一つのスタート地点である」との意見が交わされた。リサイクル品の質がものすごく悪いという発言もあり、どんなリサイクル品があってそれは安全なのか、それは私にとって使いやすいものなのかといった疑問や、買うときに考える、深められる学びの可能性が見られた。一方で、エコマーク商品やリサイクル品の品質が悪いというイメージだけは払しょくさせてほしいとの指摘もあった。

リサイクルと自分との関わっていることがつながればよくて、発表までにその整理ができる授業ができたらいい。どういう技術革新を考えるかわからないが、必要だということは気づいている。そこを大事にしてもらいたい。

今後の展開については、「リサイクルについては今後もいい面も悪い面もあるけれど私たちが何とかしていかなければいけないと考え行動できる形に導いていくことが必要である」、「この学校のキャッチフレーズ「美しく生きる」とはどういうことか？をみんなで議論し、みんなの意見を聞き、自分も美しくなる、みんなと一緒に美しくなっていくというところが、最後どこかで落ちたらいいと授業のアドバイスをしてきた。そこにどうつながっていくかというのがここの一番の大事なことである」と意見が交わされた。

イ　実証事業に対する意見について

「本事業に関わり、共通なことは、ESD をやって学校の先生が変わったことである。教育委員会の負担にならない程度でチャンスがあれば色々な先生方に持続可能につながる授業づくりをしたい。その役割を NPO としてもやっていきたい」、「去年と一昨年薦原小学校で取り組んでいた先生が転勤されていると思うので、転勤先でどういうことをされているかの追跡調査、2 年目の津田小学校のように広がっている学校もあるし、本事業を実施した事業成果がどのように広がっているかを追跡して、そのノウハウをやって広げていくことをしていくとよい」との意見が交わされた。

②実証授業内容

実証授業校：四日市市立中部中学校

授業名：リサイクルのジレンマ～リサイクルは持続可能な社会を実現するのに必要か～

対象：中学校

目標：

- ●これまでの環境教育、特にリサイクルの学習から、持続可能な社会を実現するために、リサイクルが有効であるかどうか、メリット、デメリットについて話合いを行い、「リサイクル」に関する理解を深める。
- ●持続可能な社会の実現に向けて、多様な考えによる意見交換、判断、改善といったプロセスを通して、答えが 1 つではないことを知る。
- ●明快な答えがない学習（ESD）の重要性を知る。

概要：これまで学んだ環境に関する内容を捉えなおし、環境教育の重要性を理解するための「中学生版 ESD カレンダー」を作成する。さらに、地元企業が取り組む環境活動や環境技術を学び、多様な主体が持続可能な社会に向けて事業を展開していることを知る。一方で、企業が取り組む資源循環利用の仕組みや技術が持続可能な社会、循環型社会形成のために有効なのかを問う参加型討論を行う。多様な意見や価値観を交わすことで、1 つの解が出せない課題をもつ社会の現状に気づき、社会の一員として、当事者としてこの問題にどう関わるかを考える授業とする。そのために、必要な資料を検討し、行政や企業への聞き取りを行い、それらを根拠に意見をまとめ、文化祭で発表する。

[該当する 4 つの環境分野とサブテーマ]

4つの分野	ともに生きる	社会参画	○
		国際理解（異文化理解）	
		健康	
	自然・生命	生命	
		自然への愛着	
		生態系・生物多様性	
		水	
		大気	
		土	
	ごみ・資源	3R	○
		公害	
	エネルギー・地球温暖化	地球温暖化の起こる仕組みと影響	○
		資源・エネルギー	○
		産業	○
		消費生活・衣食住	○

[主な持続可能な社会づくりの構成概念]

持続可能な社会づくりの構成概念	関連するものに○	理由
多様性		
相互性	○	プラスチックのリサイクルの現状を学び、資源の利用による産業（経済）と社会の相互性を学ぶ
有限性	○	プラスチックの現状から、資源の有限性を理解する。
公平性		
連携性		
責任性	○	有限な資源を永続的に利用するために、企業、行政、学校、市民等が担うべき役割について学ぶ。
その他（）		

[主な ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度]

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度	関連するものに○	理由
批判的に考える力（批判）	○	リサイクルが持続可能な社会を実現するための有効な方策かどうかについて調べ学習、企業連携授業や参加型討論を通して考える。
未来像を予測して計画を立てる力（未来）	○	リサイクルが持続可能な未来、社会づくりに、どのように実践されることがよいかについて考える。
多面的、総合的に考える力（多面）	○	リサイクルが持続可能な未来、社会づくりに有効な手段であるかどうか、多様な視点、広い視野で考える
コミュニケーションを行う力（伝達）	○	リサイクルが持続可能な社会を実現するための有効な手段であるかについての自分の考えを伝え、他者の考えを聞き、深め、さらに他者に伝える。
他者と協力する態度（協力）		

つながりを尊重する態度（関連）		
進んで参加する態度（参加）		

[学習指導要領との関連]

学年	教科/領域	学習内容
中学 3 年生	社会	環境権、公害問題、環境への取組を調べよう
中学 3 年生	理科	植物の体のつくりと動き、植物の仲間、動物の体のつくりと働き、動物の仲間、 生物と細胞、生物の成長とふえ方、生物の観察、生物と環境、生物の変遷と進化、遺伝の規則性と遺伝子、状態変化、化学変化、火山と地震、天気の変化、天体の動きと地球の自転・公転　電流、化学変化とイオン、酸・アルカリ・中和、エネルギー、エネルギー資源とその利用、自然と人間
中学 3 年生	家庭	３R（リユース、リデュース、リサイクル）、循環型社会

[プログラム（単元・題材）の展開（総時数　10 時間扱い）]

時	学習課題	活動・学習内容	指導・支援の方法、ポイント等 〔教材・必要物〕 【育まれる「ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度」】
1 時間目	ESD ガイダンス	ESD の重要さを学ぶ。 ESD 事前アンケート ・環境教育について ・関心のある環境に関するテーマ ・環境保全に対して、普段から意識していること	ESD の重要さを学び、誰もが環境問題の当事者であることを理解する。 これまで小学校・中学校での学習を振り返り、環境について様々な学習をしてきたことに気づく。関心のある環境のテーマや、普段から意識している環境保全活動を自覚し、当事者意識を育む。 〔ESD 解説プリント、事前アンケート〕 【関連】【多面】
2・3 時間目	【ESD 環境教育・単元さがし】ESD カレンダー中学生版をつくろう	小・中学校で学習した環境についての学習を、自分たちで探し、まとめる	自分たちが環境についてのこれまでどの程度学習をしてきたのかを確認し、環境を学ぶことの大切さを理解する。 企業連携授業に向けて、企業が取り組む環境活動についての情報を得るなど事前準備を行う。 〔プリント、画用紙、教科書〕 【多面、伝達、協力、参加】
4 時間目	企業連携授業①（総合的な学習）	企業の取り組む環境活動を知る プラスチック・リサイクルの概要(現状・課題)	外部講師から、地域の企業が取り組む環境活動、プラスチックのリサイクルに関する知識を得て、現状を学ぶ。 〔外部講師による出前授業〕 【多面、関連】
5 時間目	企業連携授業 ②　（ 理科）	「プラスチック循環利用」を学ぶ 実験を通して、プラスチ	企業の持つ技術を活かした実験を行い、日々の暮らしで利用しているプラスチック製品の循環のしくみについて学ぶ。企業のプラスチックのリサイクルの技術的側面を学

		ック・リサイクルの工程、その課題と問題点を学ぶ リサイクルするための技術を知る	び、そのメリットやデメリットを知り、リサイクルの課題、問題点を多面的に捉える。 〔外部講師による出前授業、実験に係る器具・材料〕 【批判、多面、関連、参加】
6・7 時間目	討論「持続可能な社会を実現するためにリサイクルは有効か？」 調べ学習「身近なリサイクル」	リサイクルの有効性について議論する 四日市市や日本、海外のリサイクル、リサイクルの現状、必要性や課題について調べ、まとめ、リサイクルを肯定、否定するそれぞれの要因を調べる さらに、リサイクルの有効性を生徒に問う	これまでの知識や情報から生徒の持つリサイクルに対する有効性について議論を行う。根拠を持つ意見から、それぞれの考え方や意見を交わす。 【批判、多面、伝達、関連、参加】 リサイクルについて調べ、リサイクルのメリット、デメリットを整理し、リサイクルの有効性について、生徒の考えを揺さぶる。さらに、「持続可能性」というキーワード照らしあわせ、未来に向けて現状のリサイクルの在り方に対する考え、意見を持たせる。さらに、身近な暮らしに引き寄せて、調べ学習を行い、自分たちもリサイクルの当事者であることに気づく。 【批判、多面、関連、参加】
8・9 時間目	【リサイクルについて学ぶ】 「リサイクルのジレンマ～リサイクルは持続可能な社会を実現するのに必要か」	生徒一人ひとりが「有効」「有効でない」「どちらともいえない」、それぞれの立場にたって、根拠を示し、発表しあい、討論をする	参加型討論手法を用い、生徒一人ひとりが「リサイクルの有効性」について自分の意見を考え述べ、違う意見、多様な考えをもつ生徒の根拠を自分の考えに重ね、学びを深める。 【批判、多面、伝達、関連、参加】
10時間目	環境のジレンマ ～私たちが学ぶこと～	学習したことを自分の言葉で伝え、模造紙や展示物にまとめる	学習したこと、感じたことを他者に伝える。リサイクルの学習を通して、１つの正解がない課題に対して、何をどう学ぶかについて生徒自身が考える時間をもつ。 〔模造紙など〕 【伝達、参加、協力】

[基となったモデルプログラム]
平成 27 年度プログラム　54：産業と環境の共生を考える～大気汚染公害の歴史から、問題解決にむけた人間の行動を学ぶ～（水島地域環境再生財団）

[地域化するにあたって配慮したこと、モデルプログラムから変更、追記したポイント、地域の協力者・場所・資源など]
　四日市市の地元企業による企業連携授業の学びから、持続可能な社会を形成するための産業の在りかた、持続可能な社会における産業の在りかたを模索する授業を行う。特に、「プラスチック・リサイクル」をテーマに、その最新技術を学ぶと同時に、リサイクルが抱える課題や矛盾に触れ、今後のリサイクルのありよう、資源循環利用のありようについて、１つの答えが出せない課題を題材に授業を進める。生徒自身の学習内容や価値観を意見にし、参加型討論手法を導入し、多様な意見を交わすと同時に、自分の価値観や意見を揺さぶりながら、自分ごととして捉え、

考え続けることの重要性に気づく授業とした。
【協力者】地元企業：東ソー株式会社、大洋塩ビ・プラスチック循環利用協会
NPO：環境教育ネクストステップ研究会

[プログラムの実証の概要]
日　時：平成 27 年 10 月 20 日（火）　13:10～14:50　45 分×2 コマ
場　所：四日市市立中部中学校
参加者：中学 3 年 3 組　生徒 34 名
概　要：「持続可能な社会づくりにリサイクルは有効か」という問いを投げかけ、一つの正解がない問いに向き合い、よりよい方法を考え、生徒一人ひとりが自分ごととして社会課題を捉える力を育むための「参加型討論」を行う。

分	活動・学習	指導・支援の方法・ポイント等（教材必要物）
5	【前回のふりかえり】 ・ESD についてふりかえる。 【本時の説明】 参加型討論「持続可能な社会を実現するためにリサイクルは有効かどうか」	ESD とはなにか、なぜ今 ESD が必要なのか、なぜ今環境を学んでいるのかについて生徒に問う。 環境問題が身近な問題であり、自分が当事者であることを意識して授業に参加する態度を促す。 これまでの学習を踏まえ、生徒一人ひとりが持つ意見を述べ、他者と意見を交わす参加型の討論を行う。意見を述べる際には、必ずその根拠となる理由を説明し、違った意見を否定するのではなく、違った意見の根拠を踏まえ、自分の意見を発言することとする。
10	【意見記述】 テーマについての自分の意見、立場をプリントに記述する。	「持続可能な社会を実現するためにリサイクルは有効か」という課題に対して、生徒一人ひとりが、「有効」「有効ではない」「どちらでもない」のいずれかの意見を明確に持つことを促す。またその理由を明確に記すことを促す。 〔プリント、これまで使用した資料〕
35	【意見発表】 自分の考え、意見を説明する。	一人一分で自分の立場を表明する。 根拠となる資料の提示、理由を述べながら発表する。
10	【自分の意見の変化を数値化する】 現在の自分自身の立場を数値化する。 感じたことを記入する。	自分自身の立場を数値化することで、自分の考え、意見の変化を示す。 〔プリント〕
10	休憩	
15	【参加型討論】 「これからどうしたらいいか。リサイクルについてどう感じたか。」	「有効」「有効でない」「どちらでもない」、それぞれの考え、意見を持つ生徒が意見を交わし、違った意見とその根拠を伝え合う場面をつくる。 自分の意見と他者の意見を重ね、新たな自分の意見を発表する。 授業開始前と発表後の数値を発表し、その中でどう感じたかを発表する。
10	【まとめ】 授業を通して、感じたことをまとめる。	ワークシートに、本授業の気づいたこと、感じたことを書く。生徒自身の考え方、意見の変化、他者の意見の理解や、意見に対する反論など自分の思考の深まりに気づかせる。

5	【ふりかえり】	持続可能な社会づくりに向けて、考え続けることが大切だと伝え、オープンエンドで終える。

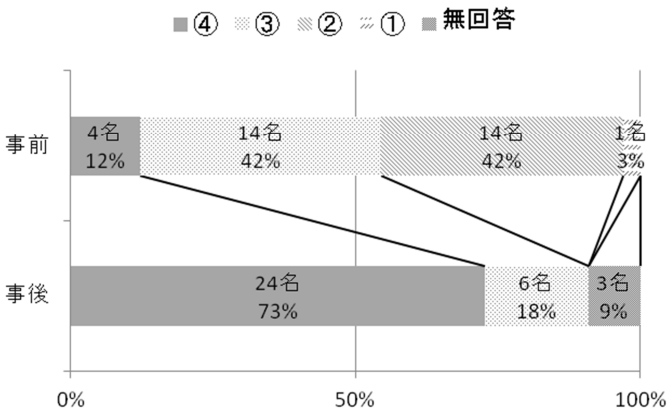
[授業の様子]

③授業実践アンケート

子どもを対象にアンケートした。（回答者：実施前 33 名　実施後 33 名）

問１．環境教育/ESD が必要だと思いますか。

（必要←4　1→必要ではない）



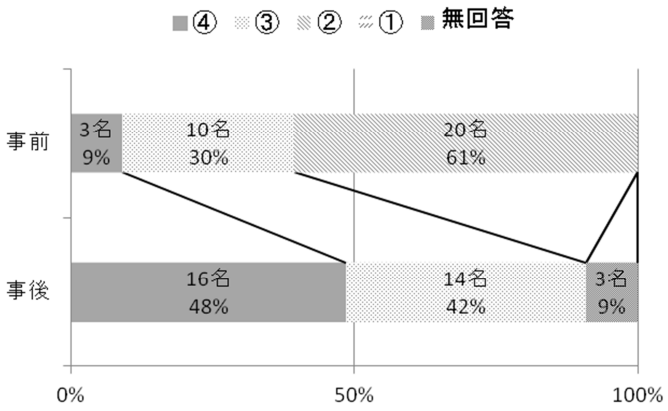
授業実施前と授業実施後を比較し、「必要だ」（とても必要だ含）という子どもが事前は 54%だったが、事後は 91%に増えた。かつ、とても必要だという子どもが増えた。

■子どものコメント

・環境の教育をして、将来必ずその教育が役に立つと思ったから。

・環境のことに興味がなかったけど、今回の勉強で環境のことについていろいろ知れたので必要だと思いました。

問２．環境についてもっと学びたくなりましたか。
（学びたい←4　1→学びたくない）



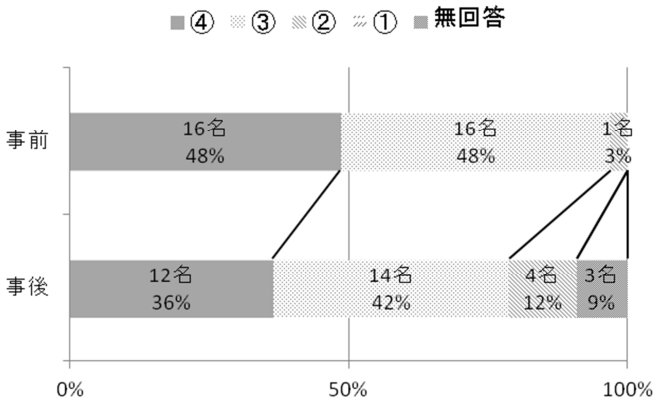
授業実施前と授業実施後を比較し、「学びたい」（とても学びたい含）という子どもが、事前は 39%だったが、事後は 90%に増えた。かつ、とても学びたいという子どもが増えた。

■子どものコメント

・環境について調べてみたことで、今まで自分が考えていたことと違うことがあったり、新しい疑問ができたりしたので詳しく勉強したい。

・リサイクル以外のごみを減らす手段も学びたい。それについて詳しく学びたい。

問３．持続可能な社会をつくるために、リサイクルは必要（重要）だと思いますか。
（思う←4　1→思わない）

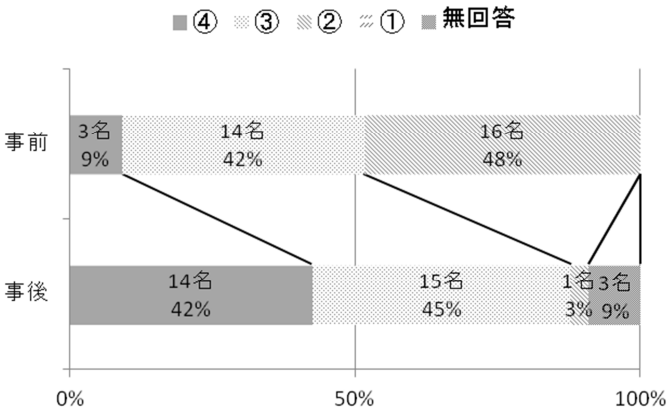


授業実施前と授業実施後を比較し、「必要（重要）だと思う」（とても思う含）という子どもが、事前は 96%だったが、事後は 78%に減った。授業での参加型討論や、発問により子どもに揺さぶりをかけたことによる影響だと考えられる。

■子どものコメント

・たしかに重要ですが今のリサイクルではあまりエコになっていない。今よりもっといいリサイクル方法が出来たらいい。

問４．リサイクルについてもっと知りたくなりましたか。
（知りたい←4　1→知りたくない）



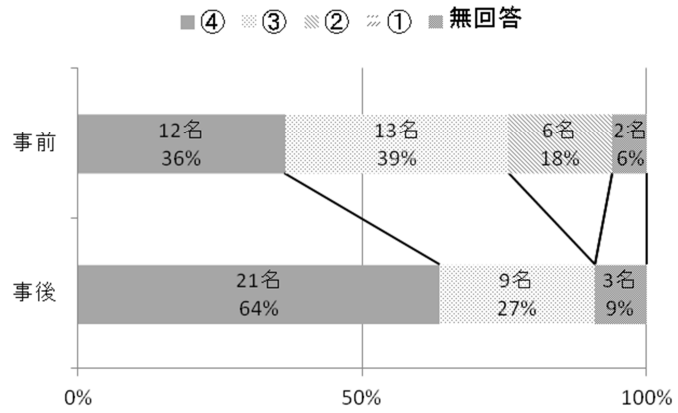
授業実施前と授業実施後を比較し、「知りたい」（とても知りたい含）という子どもが、事前は 51%だったが、事後は 87%に増えた。かつとても知りたいという子どもが増えた。

■子どものコメント

・一言でリサイクルと言っても実際にどんな風になるのか、どんな風にリサイクルされていくのかなどが知りたい。

・リサイクルすることによってリサイクルしない時とどれだけ資源が使われているのかをもっと知りたい。

問５．今日の授業のような学習方法は必要（重要）だと思いますか。
（思う←4　1→思わない）

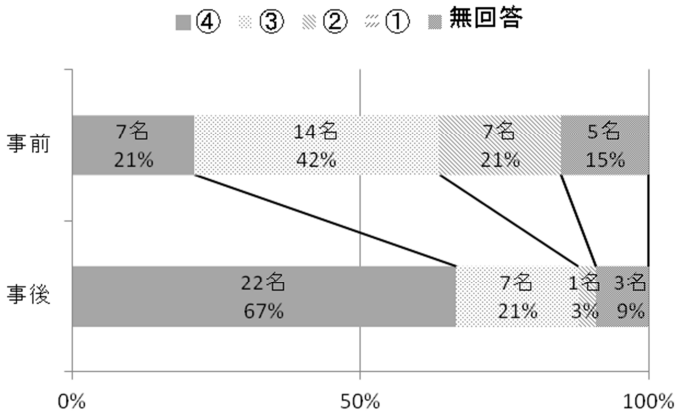


授業実施前と授業実施後を比較し、「必要/重要」（とても必要/重要含）という子どもが、事前は 75%だったが、事後は 91%に増えた。かつ、とても必要/重要という子どもが増えた。

■子どものコメント

・最後に行った討論は一番重要だと思います。討論をすると相手の考え、自分の考え、中立の考えを偏った見方をせずにさまざまな方向から言えるからです。

問 6．学校で環境教育、ESD に取り組んだ方がよいですか。
(よい←4　1→よくない)



授業実施前と授業実施後を比較し、「取り組んだ方がよい」（とても取り組んだ方がよい（含）」という生徒が、事前は 63%だったが、事後は 88%に増えた。かつ、とても取り組んだ方がよいという子どもが増えた。

■子どものコメント

・ESD に取り組んだことで、1 つの問題を自ら調べることができ、クラスのみんなと意見を交わすことができ良かった。取り組んだ方がいいと思った。

4. ESD プログラムの検証

(1)検証委員会について

平成 25 年度、26 年度における本事業の検証を、検証委員会を設置し実施した。形成推進委員会で協議し決定した 6 つの仮説に基づき、教員及び地域の人々へのヒアリングやインデプススタディを行った。

併せて、中部地域が独自で実施した ESD 環境教育プログラムを実施する際に活用する映像教材づくりの成果・効果を検証し、作成した映像教材の効果的な活用方法について協議し、映像教材の汎用化を図ることとした。

【検証委員会】計６名　※敬称略

地域	検証委員
北陸	鈴木　克徳（金沢大学環境保全センター長・教授）
	池端　弘久（金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家館長）
長野	宮島　和雄（一般社団法人長野県環境保全協会専務理事）
東海	谷戸　実氏（名張市立薦原小学校校長/平成 25 年度三重県実証校）
	大鹿　聖公（愛知教育大学理科教育講座教授）
	新海　洋子（中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー）

第 1 回検証委員会では、検証するための素材として、①本事業の実証授業を受けた子どもの事前事後の変化、②実証授業を実施した教員の変化、③実証授業づくりに関わった地域団体の変化、が必要であることを共有し、教員と地域団体を対象にしたヒアリング、子どもや教員、地域のステークホルダーの変化を包括的に捉えるインデプススタディを行うこととした。また、形成推進委員会で協議した、検証のための仮説 6 項目についての確認をし、6 項目をベースに検証作業を進めることとした。

【6 つの検証項目】

仮説 1　子どもたちに「育みたい力」を明確にし、「育みたい力」が育まれた。

仮説 2　子どもたちの当事者意識、自己肯定感の育みにつながった。

仮説 3　子どもたちの地域への関心、課題解決のための行動（力）が育まれた。

仮説 4　教員の授業力が高められ、教員の SD への関心が強くなった。

仮説 5　地域の人々と ESD 授業をつくることで、教員の授業力が高まった。

仮説 6　持続可能な社会の担い手を育むためには、学校と地域の連携が必須であった。

(2)検証のための調査について

第 1 回検証委員会での議論を踏まえ、下記の仮説を検証するためのヒアリング等を行った。

①教員を対象にしたヒアリングについて

[目的]

平成 25 年度、26 年度の実施校の教員を対象にヒアリングを行い、本事業を通じて実施した ESD 授業づくりを経験による仮説４、５、６について検証を行った。自信の変化や授業改善について、ESD 授業づくりを継続、発展させているかどうか、その理由などについて把握した。

[対象]教員５名

地域	教員名	学校名	実施年度
富山県	高多利明先生	富山市立堀川小学校	平成 26 年度
岐阜県	大野由里子先生	岐阜市立正木小学校	平成 26 年度
三重県	窪田裕志先生	津田学園小学校	平成 26 年度
石川県	浜中真希先生	金沢市立泉中学校	平成 25 年度
岐阜県	長屋亮司先生	岐阜市立長森南中学校	平成 25 年度

[手法]インタビューによるヒアリング実施

[主な内容]

- 本事業の実証授業を通じて、自身の気づき、変化をどう捉えているか。
- 本事業の実証授業を通じて、授業づくりにおける変化(発問、板書、教材など)はあったか。その要因はなんであるか。
- 本事業の実証授業を通じて、児童生徒の変化はあったか。その要因はなんであるか。
- 本事業の実証授業での変化、改善を持続、継続できているか。その要因はなんであるか。
- 地域との連携による成果・効果についてどのように捉えているか。地域との連携、地域との関係性は変化しているか。維持できているか、途切れているか。その要因はなんであるか。
- 実施した授業をどう受け止め、評価しているか。
- 地域の SD の課題についての関心、認識が高まっているか。授業に取り入れているか。

②地域を対象にしたヒアリングについて

地域のワーキンググループに 3 年間参加したステークホルダーを対象に、主に仮説５と仮説６を中心にヒアリングをし、検証を行った。学校と地域の連携の可能性、連携による体制づくりに対する意見や、可能にするための要因などを把握した。

[対象] 2 団体（3 年間本事業ワーキンググループに 3 年間参画した地域の団体）

地域	対象者/ワーキングメンバー	学校名	実施年度
長野県	長野県環境保全協会 専務理事　宮島和雄氏	松本市立源池小学校 松本市立会田中学校 信州大学附属長野小学校	平成 25 年度 平成 26 年度 平成 27 年度
三重県	環境教育ネクストステップ研究会 代表　寺田卓二氏	名張市立薦原小学校 津田学園小学校 四日市市立中部中学校	平成 25 年度 平成 26 年度 平成 27 年度

[手法]インタビューによるヒアリング実施

[主な内容]

- 継続して学校に関わっているか。連携しているか。
- 学校と連携して ESD 授業づくりをすすめる仕組みができたか。

③インデプススタディ

本事業を通じて、ESD 授業づくりや実施に取り組む教員や学校の変化、地域の変化、授業を受けた児童生徒の変化を包括的に捉え、6 つの仮説の検証を行った。

[対象]4 件

	学校名	ヒアリング対象
1	名張市立薦原小学校 （三重県/平成 25 年度）	児童：小学 6 年生　21 名（平成 27 年度 4 年生） 校長：谷戸　実先生 教員：松田淑子先生(平成 25 年度 4 年生) 瀬川和之先生（平成 27 年度 6 年生） 教育委員会：布本肇氏（名張市教育委員会指導主事） 地域：伊賀ふるさとギフチョウネットワーク　加納　康嗣氏
2	金沢市立三馬小学校 （石川県/平成 26 年度）	児童：小学 6 年生（1 組）30 名（平成 26 年度 5 年生） 校長：橋本有可先生 教員：田中哲也先生（平成 26 年度 5 年生） 地域：三馬公民館
3	富山市立古沢小学校 （富山県/平成 25 年度）	児童：小学 6 年生　14 名(当時 4 年生) 校長：武島浩先生(平成 25 年度) ：坪坂　亮先生 教員：酒井祥子先生(平成 25 年度 4 年生担任) 澤橋　直文先生(6 年生担任) 田中美里先生（4 年生担任） 地域：NPO 法人きんたろう倶楽部　松田秀明氏
4	東浦町立緒川小学校 (愛知県/平成 25 年度)	児童：小学 4 年生（2 組）39 名（現 6 年生） 校長：伴　浩人先生(平成 25 年度) 竹内正樹先生 教員：原　伊津子先生（平成 25 年度 4 年生担任） 岩本和也先生（平成 27 年度 6 年生担任）

[手法]主にヒアリング実施（児童生徒はアンケート）

[主な内容]

●教員はどのように変化し、授業づくり、児童生徒に変化をもたらしたか。

●学校全体として、教員間の連携、学びあいの仕組みができたか。

●学校と地域の連携による授業づくり、学校での ESD 実践の継続のための仕組みができたか。

(3)映像教材の検証について

過去２年間制作した映像教材（48 本）の効果について検証した。ESD 環境教育プログラムを実施するにあたり、

●映像教材はどの程度活用できたか

●映像教材による学習の効果はあったか

●映像教材制作のプロセスにおける課題について

●作成した映像教材の汎用性について

の 4 点の評価軸を設け、映像教材を活用して実施した ESD 環境教育プログラム実証後のアンケート結果や実施した教員へのフォローアンケート、ワーキンググループメンバーへのヒアリングから成果・効果を把握した。

検証委員会において、ESD 環境教育プログラムを実施する際にどのように映像教材を活用できるかを協議し、ESD

授業を実施する際の映像教材の活用方法や作成した映像教材の汎用性を高めるために映像を再編集した。

(4)検証委員会会議内容

①第１回検証委員会

日　時：平成 27 年 7 月 10 日（金）　14:00～17:00

場　所：環境省中部環境パートナーシップオフィス

出席者：検証委員 6 名　地方事務所 2 名　事務局 5 名（映像担当者 3 名）

主な議事：１.これまでに実施した ESD 環境教育授業の検証方法について

２.検証のための調査について

３.映像教材について　他

【議事内容】

１.これまでに実施した ESD 環境教育授業の検証方法について

名張市薦原小学校での実践と、3 年間の長野県における実践の成果を共有した。2 つの事例から、ESD 授業にとって地域資源が大事な教材となること、しかし教員は地域の資源を十分に把握していないため、地域の人とつながる必要があること、また単に地域課題を取り上げたことや地域の人とつながったことだけでなく、地域の SD の課題を浮かび上がらせ、学習課題にして取り組むことが重要であることをひも解いた。今年度の実践においては、ESD の「付けたい力」を明確にすること、取り上げた地域課題が地域の SD にどれだけ近づけたのか、を意識して ESD 授業づくりを行うことを確認した。

また、検証に関しては、総合的な学習の時間が学校の評価計画に基づく目標設定がされているところに、ESD の育みたい力に関する目標を加えているため、どのように整合させるのかはっきりしていないことを課題としてあげた。かつ、本事業のスタート時点で 3 年間の評価計画を作らなかったことや、過去 2 年のアンケート調査結果による抽象的な評価のみしかないことの指摘を受け、今年度の検証作業をどのように進めるか意見を交わした。授業に設定した育みたい力がついたかどうかを一貫して評価することが授業改善につながるため、検証委員会からは、子ども、教員、学校、地域がどう変わったのかをより客観的な評価視点を持てるような検証作業をすべきであるという意見があった。

参考として、国立教育政策研究所の ESD で付けたい力に特化した評価を指標とした事前事後のアンケートを実施したり、ポートフォリオを使って子ども達自身がどのような力がついたかを自ら認識する方法等を共有した。重要となるのは、教員が評価の視点を意識して授業づくりを行うことや、子どもにどんな力が身についたかを教科を超えて把握できる指標の必要性であり、具体的な指標を示すことが重要であること、授業計画を立てると同時に評価計画を作る作業が必要であることを指摘しあった。

２.検証のための調査について

今年度は、本事業の成果効果を検証するために、実証事業を実施した教員や、関わった地域の人を対象にしたヒアリングや、学校全体の変化を把握するためにいくつかの学校を対象にしたインデプススタディを行うこととした。誰を調査の対象とするのか、対象の絞り込みがないと的確な評価が得られないと指摘された。対象者の人選については、本事業を俯瞰しながらその成果や課題を的確に対応可能な人に依頼することとした。

教員への主なヒアリングの内容は、①ESD 授業が教員自身のスキルアップにつながったか、②児童の学習意欲

や地域課題への関心が高まったか、③映像教材の活用の価値について、の３点である。地域に対しては、①学校と地域の関係性は高まったか、②日常的にコミュニケーションが図れる関係になったか、③ESD に取り組むことで地域のステークホルダーとの関係性に変化はあったか、④日常的に地域の情報等が学校に入ってくるようになったか、ESD を展開していくための地域の仕組みや組織化がなされたか、の４点である。また、可能であれば、地域の人が子どもの成長を感じることができたか、保護者は学校の授業に参加してどうだったのか。家庭で子どもと授業の話をしたか、といった内容を行うこととした。

３.映像教材について

今年度行う過去２年間で制作した映像の再編集について協議をした。どのような映像に再編集をして汎用性を持たせるかを論点に、ESD 授業に取り組んだ子どもや教員、学校、地域が輝いた様子を映像化することや、誰がこの映像教材を活用するのかを明確にし、効果的な映像教材に編集すること、とした。委員からは、ESD で育みたい力をつけるために映像を補教材を使うことで従来のフィールド観察や座学でのティーチングではできなかったことが検証できると良い、課題解決のための直接的な効果をもたらす映像や、映像を活用することで児童生徒の学習意欲が高まるといった間接的な効果を生み出すような映像の必要性についての意見が出された。

また、２年間の記録映像ではなく、地域課題の解決に対してメソッドを体系化して映像化し、教員が ESD に取り組みたくなる映像にすること、教員を対象にした内容で ESD の動機付けを促す映像、どういう風に授業をつくるのかテンプレートで事例を見せる映像、映像を活用するとこんな効果があることが見える映像を作成することとした。検証委員からは、教員が選択できるような映像教材、短い時間の映像、最初に関心を呼び起こす引き金になるような映像、学びを深めていく映像、ESD の視点や手法をわかりやすく伝える映像、にするため再編集作業が提案がされた。このほか、映像に対する意見は以下のとおりである。

- ●SD につながっていく、引き出していくツールとして映像にする
- ●ESD をやってみようと教師の動機付けとなる映像にする
- ●地域の SD の課題に関わる人々の音源や映像にする
- ●授業がコンパクトに設計しやすくなる映像にする
- ●自分の地域と関わり合いのある映像にする
- ●問題提起となる映像教材にする

また本事業１、２年目の報告書から映像教材のメリット・デメリットを抽出し共有した。メリットは、①視覚に提供することで、印象に残り、学習の深まりにつながること、②たくさんの情報を短い時間で提供できること、③事前の情報提供に使えること、④事後の振り返りに使えること、⑤話し合いの授業において端的に視覚を通して課題提供ができること、⑥反転授業など家庭や地域など多様な人々を巻き込んで映像を使った学習を展開できること、⑦過去の状況を知ることができること、である。デメリットは、教員が上手く使わないと単なるテレビ画面でしかなく思考力を育むことにつながらなく、見て終わりやって終わりになってしまうこと、であった。

映像教材に関しては、教員や ESD 実践者に映像教材の活用法を伝授して、地域で広げていく仕組みをつくることの重要性を共有した。作成にあたり、池端氏と谷戸氏に映像編集の監修担当になっていただくこととした。

②第２回検証委員会

日　時：平成 27 年 12 月 17 日（木）　14:00～17:00

場　所：環境省中部環境パートナーシップオフィス

出席者：検証委員６名　地方事務所３名　事務局４名（内映像担当者２名）　オブザーバー２名　計 15 名

主な議事：ESD に関する近況報告

1.アーカイブ映像制作について

２.検証のための調査について

3.プレゼンテーション「ESD の取り組みを地域に普及させるために」

【議事内容】

１.アーカイブ映像制作について

映像担当者から、「２年間の映像ストックを今後活かしていくという目的に沿って方向性のもと、池端氏、谷戸氏、EPO 中部の助言や、形成推進委員会での意見を踏まえて方向性を絞り込んだ」と報告を受けた。これから ESD に取り組もうという教員を対象者とし ESD 研修ワークショップなどの場で活用できる映像にすることとした。パターン１は、教員が ESD をやってみたいと思えるような動機づけをねらいとし、パターン２は、ESD に映像を導入した本事業の成果を踏まえて、ESD へ映像教材を効果的に活用する方法について、2 年間の映像ストックを紐付けながら解説する構成とした。パターン２は、この間の ESD 授業で活用しての評価コメントから、３つに分類整理し、１つ目は「時間や空間を越えたつながりや違いの理解ができる内容」、２つ目は「対話型の授業に活用でき、授業時間の短縮、授業にリズムを生む効果を生み出す内容にし、子どもの学習意欲の高まり、探求意欲や共感性の高まりを生み出す内容」、３つ目は「地域を知ることでの気づき・愛着・誇りという効果を生み出す内容」とした。DVD 等に全て入れて配布するか、現在のようにインターネットの YouTube 上でいつでも閲覧できる状態で公開することを検討した。また下記出された意見を踏まえて、再度内容を検討しなるべく意見を反映できるようにする。

●試作映像を上映

[出された意見]

●「誰に」見ていただくかは ESD 授業に取り組もうとする先生や地域の人であり、「誰が」見せるかは、学校や地域で ESD に取り組んでほしいと思っている人である。

●多くの学校の ESD は、持続可能な世界を維持していくためには私達自身が変わる必要があるという視点が決定的に弱いので補っていけるとよい。

●学校教育方針とすり合わせながら ESD を取り入れていくことを伝える内容にする。

●子どもの様子や成果物、子どもの声などを残す必要があり、成果物を表現したい。

●参加・対話・協働の３観点で子ども達は成長し、先生自身の授業のやり方が変わるということを伝えれば、先生のやる気を引き出せる。自分の校区の身近なテーマで十分できるということを伝える。

●やってきたことの事実を見せるという観点で、子どもや先生がどう変わったかを見せる映像

●教員が戸惑うような言葉を使ったナレーションは修正する。

●映像を紹介するので映像ありきだが、映像がなくても ESD 授業はできることを伝える。

●できるだけ映像に子どもたちの声や先生のコメントなどを入れる。子どもの様子を伝える。

2．検証のための調査について

本事業検証のための 6 つの仮説を立て、教員、地域の方へのヒアリング(計 7 名)、インデプススタディ(4 校)を進めている。インデプススタディについて現状まとめができつつある薦原小学校の内容を紹介する。実証時の児童にアンケート調査を行い、小学 4 年生の時と今との学習課題に対する思いや行動意欲について把握した。ほとんどが前向きな回答をしており、学習効果が残っていると把握できる。また、6 年生になって学習テーマが変わっても地域を軸とした ESD 授業が展開されている。教員 2 名、校長先生、地域の活動団体の方、当時教育委員会の職員の方にヒアリングを行い、まとめてある。またヒアリング内容から 6 つの仮説をひも解き掲載し、まとめを記述した。教員、地域の方へのヒアリング内容は別紙を参照いただきたい。

今後、検証のまとめ作業の際にコメントの依頼をお願いするかもしれない。また現在、普及啓発冊子の作成をすすめているが、わかりやくするために柔らかい表現やデザインを入れて本調査内容を掲載することとしている。

[出された意見]

● 6 つの仮説がクリアになっているかをみるのは、調査対象数が少なすぎる。

● 6 つの仮説を提起するために分析し、検証までは至らないが、大事な指標として提起するところまでを示したい。

●プラスの意見ばかりのようだが、マイナス意見もあったのか。もしあったら、難しかった部分は壁として正直に出 した方がいい。インタビューが主なので質的な内容になっている。量的に測られていないので文面で読み取るしかない。次の人が活かすためにもマイナス面も整理されるべきだと思う。

●検証報告書は、提言書のようなものを出すことが多い。やってよかった点、よくなかった点を次への提言のような形でまとめることができないか。

●最初から検証の評価指標を示して授業づくりしたわけではないから、結果論として評価するしかない。

●プロセスで感じたことがにじみ出ている。始めるにあたりすごく悩んでいた先生も多く、悩みが大きかった分それを乗り越えた充実感も大きかった。総括的なところで、悩んだときにどんなアドバイスや考えでそれを乗り越えたのか、ワーキング会議や相談で何かキッカケがあったと思う。それを伺い知れるような整理ができないか。

●質的なまとめは、読むのは大変だが、読むと得るものは大きい。自分で現地に足を運び調べ、環境の専門家と話して自分の知識のなさに愕然とする経験がESDとして必要なステップである。それがわかるいい資料になっている。できれば量的な分析も掲載したい。また、子どものアンケート結果だけでなく、あわせて子どもたちがつくった成果物も掲載してほしい。教育に携わるものにとっては重要な側面になる。

●本事業が最初から最後まで授業づくりに関わるスキームではなく、また 1 年間誰かが年間付いていれば、もう少し深い価値が生まれたかもしれない。実施校を絞ってでも、一年間関わるスキームにする必要があることも記入していきたい。

●文科省がすすめるポートフォリオ方式のような評価方式が大変重要である。それは報告書に書いておきたい。成果物を全部載せられるかは難しいけれど、子ども達が作るものが変化していったというプロセスをみることは、とても重要なことである。

●ワーキンググループ会議をやって良かった。教員同士の狭い視野だけで評価しあうのではなく、違った観点の人たちが入ってくることで先生だけではできないブラッシュアップが可能になった。

3.プレゼンテーション「ESD の取り組みを地域に普及させるために」

今後地域の ESD 取組を普及させるために本事業での成果をどう使うかなどのご意見を伺った。テーマは、以下とした。

テーマ①本事業 3 年間の ESD 環境教育授業づくりの成果と今後の提案

テーマ②本事業 3 年間の ESD を推進する地域の仕組みづくりの成果と今後の提案

■大鹿聖公氏（愛知教育大学理科教育講座教授）

①②「テーマ設定と、子どもに育みたい力」

子どもに育みたい力、つまりゴールがあり、そのゴールのためにどんなテーマを選ぶか。テーマによって地域の誰を巻き込むかが決まってくる。

■鈴木　克徳氏（金沢大学環境保全センター長・教授）

①欲張りすぎである。この授業ではこの力を付けたいという目標を絞り込んで明確にする。学校の中で単元計画を議論するが、学校の外の人と相談するべきである。そのことが地域の伝統や文化なのだと思う。

②地域の仕組みづくりは、このプロセスの中だけでは限界があった。

■池端　弘久氏（金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家館長）

①三年間で実感したのは、先生自身が授業案を考える中で地域への理解を深めていることである。校区に配置された教員として地域の本当の姿を知るというプロセスが重要である。知った上で取り組むのでなく、子どもと一緒に本当の SD の課題に先生が気づいていくというプロセスが重要である。それはこの事業の中で実現している。担当の先生はしんどかったというけれど、それが ESD の一番大事なステップだと思う。課題は、「評価」と「協働学習の質」である。グループ学習の質、コミュニケーション力やプレゼンの能力については、どう友達と話し合うのかという基礎的な能力を身につけないと高学年や中学校の総合の授業の下支えができない。一つの能力形成として低中学年のうちに身につけておかないと無理である。もう一つは、「教科へのアプローチ」が今後の課題になる。総合は教科に近づくし、教科は総合に近づく。その両方がないと両方がダメになる。もう 1 点、「根拠で話す」という力をつける必要がある。

②地域の方とも随分連携が進み、地域にカリキュラムが残る可能性が出てきた。学校や教師にカリキュラムを編成する力がついてきている。環境省がやる ESD の面白さは、文科省が前提とする学習指導要領をスタンダードとして固定化しないで、外から現在をみて新しい次のスタンダードはどんなことか考えていくことである。すごく大切なことで、それがカリキュラムづくりの本当の面白さでもある。今の枠組みの中でどう転がすかということを研究しているのではなく、次のスタンダードづくりということにこの 3 年間の効果があった。ただそれを実証できるかどうかはわからない。課題としては、この学校でやっている ESD 授業の半分は社会教育に移管しないと学校がもたない。公民館や子ども会、地域の子どもの学習をどう担っていくかにかかってくる。学校で環境もエネルギーも何でもやるようにと言われても入りきらない。社会教育の分野で何を分担していくのかを作っていく必要がある。

■宮島和雄氏（一般社団法人長野県環境保全協会専務理事）

①ESD の知識を勉強するというよりも、それをテーマにした取組み姿勢に進歩が見えた。具体的にいうと児童の自

発性や積極性が見えてきたし、教師の指導力が進歩した。授業の中に地域の人が実際に参加してやることのインパクト、効果は大きかった。それらが、知識を吸収するというだけでなく、自分の意見をまとめて発言することができる能力を伸ばすという印象を持った。
②地域の仕組みづくりについては、実際地元で取り組んでいるがなかなか難しい。3 年間でどのような形の関わり方があったのかをまとめると、今後の地域の仕組みづくりに役に立つ。

■谷戸実氏（名張市立薦原小学校校長）平成 25 年度三重県実証校
①授業づくりについては、地域とともに授業を作っていこうというスタンスができてきた。本校に 2 ～ 3 年以上いる先生がいろんな地域の人を引っ張りこんで授業づくりをしている。地域とともに新しい授業を作りだすという成功体験が自信になって、新しい学年になっても自信を失わずにやってくれている。大きな成果である。学校の教育研究テーマが「伝えあい、学びあう授業の創造」であり、その切り口として ESD を導入しましょうと呼びかけ、少しずつ教師自身が意識し工夫するようになってきた。地域を見つめるとともに、知識伝達型の授業から皆で考えあって答えを出していく授業を組み立てていくことを意識してきている。
②地域については、公民館と連携することにより地域が学校を支える仕組みができつつある。

(5)教員を対象にしたヒアリング

高多　利明先生（富山県　富山市立堀川小学校）
単元名：生活科「市電通りのたからを見つけよう」（12 時間）
対象：小学 2 年生

■子どもの願いを聴く

最初本事業で ESD 授業を実施すると聞いたときは驚いた。教員経験 2 年目で授業力が不足している自分にできるかどうか不安であった。教員 1 年目から堀川小学校で研修を積む中で、「子どもの話を聞く構え」が難しかった。いろいろな先生に授業を見ていただき、「子どもの捉え」についてよく指導された。子どもへの発問やコメントについて指摘をされていた。その理由は、授業を行う際に教員が持っていきたい方向、各教科の学習のねらいや教員の持っていきたい強い思いが子ども達に出てしまっているからであり、授業力のなさである。子ども達には子ども達の願いや思いがある。子どもならではの「ぼくたちはこうしていきたい」という思いを教員がつぶしてしまっている。このことがわかるようになってきた。

本事業の授業のテーマを「町たんけん」にすることに決めた。しかし 2 学期の 10 時間で「町たんけん」の授業を実施するには、十分な時間がとれない。富山大学の松本先生に相談をし、他の学校が取り組んでいる同じ学年の子どもの「町たんけん」をして歩む姿を映像で見せる授業ができないかと検討した。堀川小学校は「最初の子を聞く」という、最初の子どもの取り組み方を大切にしている。映像の子ども達の歩みを見て、他の学校の子どもも頑張っているならぼくもこの地区で頑張っていきたい、と思えるような映像教材をつくり、活用することにした。出来上がった映像教材は素晴らしい内容である。

今回の「町たんけん」では、子ども達の地域に対する愛着心を育みたいと考えた。学びの系統から行くと、1 年生は学校の用務員さんや給食を作る方、周りの先生に支えられていること、2 年生は地域を支えている警察や市電に出会い、地域でお世話になっている人に目を向けていくこと、が子どもの発達として大切である。何より自分の住んでいるところなので、将来生まれ育った場所に感謝を感じてほしいという思いがあった。3 年生になった子どもたちは今も地域の関心が高まっている。市電に魅力を感じていた子ども、お味噌屋さんに出かけた子どもも、交番に行った子どもも、今も月に 1 回行っている。地域に対しての根強い関心がいまだに残っている。子ども達の様子から授業が活かされていると感じている。

この授業では、子どもに育みたい力を、コミュニケーション能力と情報収集能力に設定した。地域の人からは「挨拶が良いね」と褒められるようになった。授業で地域の人に触れあったことが影響していると思う。内気で引っ込み思案の子どもが手紙をしっかり渡すことができた、しっかり市電のことを聞くことができた、勇気をもって言うことができた、そのことが自信につながっている。また、3 年生のスーパーマーケットの授業でキーマンとなって自分から進んでインターネットの買い物について調べている。情報収集能力につながっている。

本事業で ESD 授業を実施して、子ども一人ひとりの学びたい活動への手立てが変わった。現在 3 年生の担任をしているが、その経験は活きている。一人ひとりのいろいろな視点を持ち込んで授業を行い、一人ひとりの子どもに話しかけ、一人ひとりがどういう学びをしているか、どう思っているか、次はどうするかなどと一緒に考えながら、意識して授業をつくっている。子ども達一人ひとりの学びや思いを大切にする手立てを意識している。大学では子どもの捉えや子どもがどうやって学んでいくのかという手立ての仕方については学んでこなかった。こういった授業方法の効果を実感として持てていなかった。

学級づくりや授業づくりをしていく中で、一人ひとりに合った、特に生活科で一人ひとりの子どもの願いに沿って、授業をすすめていくことの大切さと難しさを感じている。子どもへの発問や授業の仕方によって、子どもに培われる能力が変わってくる。子どもの人生、大事な子どもの育ちの時期を担っている。授業の準備は緊張するが、子どもの反応に手応えを感じているからこそ続いている。自分がこれをやっていて大丈夫だと、子どもの自信にもつながっていることを感じるからこそ、自分の教えたことが次にもつながっているからこそ、安心して授業をつくることができている。

本事業を実施していなかったら、教科書どおりの「町たんけん」、近くの公園や図書館に行くだけだったかもしれない。ここまで人やまちとつながりをつくることはできなかったと思う。エネルギーと時間はかかるが、やった方がいい。

大野　由里子先生（羽島市立正木小学校）
単元名：総合的な学習の時間「人にやさしく　自然にやさしく～環境といのち～」（12 時間）
対象：小学 5 年生

■子どもの意識を大事にした授業づくり

ESDという言葉は、本事業を受けて初めて聞いた。そこから、ESD がどういう手法なのかを勉強でき良かった。昨年一緒に授業づくりをしていく中で、子どもたちの意識について深く考える必要があると思うようになった。今年もどんな授業をしていても、子どもが今、どう感じていて、この資料を出したらどう考えるか、子どもの意識が連続するように授業の流れを仕組んでいくにはどうしたらよいか、など子どもの意識をさらに強く考えるようになった。本事業が終わっても、それが自然な形で無意識のうちに継続している。その点で変化を感じている。ESD を実践して、子どもが授業をおもしろそうに聞いたり、たくさん発言したりなど、子どもの姿から子どもの意識に沿った授業を仕組むことが大事だ、と実感し、大切にするようになった。

日々の授業を大切にし、翌日の授業をどのように行うかは、毎日考えている。子どもたちが問題意識を持つことを意識した授業づくりをするように気をつけている。子どもたちは、問題意識を持てば自然に自分から考えるようにもなるし、調べるようになる。そこに何を持ってこようか、どんな資料を出そうか、どんな発問をしようかと考える時に、子どもが、「え？なんで？」「え？どうしてそうなるの？」と思うにはどうしたら良いかを考える。以前も気をつけて授業を考えてはいたが、教え込んでしまう授業もあった。昨年の授業の打合せの中で、「子どもがこの質問でどう思うか」「どうしたら子どもが『え？』って考えるのか」と言われて、子どもが食いついてくるには授業をどうつくったらよいかを考えていくうちに、それが必要だと感じた。特に、社会科、国語、理科などの 1 時間の授業の最初に、子どもが驚きをもつような資料の提示や、話をしたりして課題をもって授業を進めていく授業が増えた。そういう授業づくりができている。子どもの反応が見えると楽しい。大変という思いはない。

映像の活用による子どもたちの変化は大きい。今年は 6 年生を持ち上がりで担当している。子どもたちは 6 年生になっても至る所で地球温暖化の話を出す。子どもはすごく覚えている。今年の授業でも昨年流れた映像のことを発言する子どもがいる。映像は子どもの心に残る。目で見たこと、音、感性を働かせることがいかに子どもたちの心に残るかが改めて分かった。授業のどこのタイミングで映像を入れるのか、子どもの反応によって、いかに上手く使うかは考えなくてはいけない。

5 年生の総合「環境」のカリキュラムは、事業の以前から岐阜県の環境学習のコーディネーターに入っていただき、授業づくりをしている。今年の 5 年生も同じカリキュラムを引き続いて実施している。昨年の映像はまだ使っておらず、全部使うかどうかは分からないが、マイ弁当の映像は使う。今の 5 年担任の先生達には昨年の実践を伝えているが、ESD の要素を取り入れるには、ESD の良さを十分伝えることが大切である。私達が伝えていけば継続できるだろうと思う。

大学では、子どもの意識に沿った授業づくり、という思考は習っていない。教員になってから、様々な他校の授業を見たり、研究会に出席していろいろな人の意見を聞いたりする中で、ESD という言葉は知らなかったが、子どもの意識を大事にした授業をすることが大事だと学んできている。

これまで、地域を取り入れた授業づくりをしようと特別に意識をしていなかった。しかし、地域の方や保護者の方との関わりの面では以前から地域と密着して実施していることに気づいた。今後は、さらに地域講師を活用し、環境について、教員では分からない面や詳しいことについて、子どもたちに教えてもらうことに取り組みたい。地域に目を向けようという発想には、昨年度の実践で給食センターの人の話を聞こう、などの意見がワーキンググループで出て、それを取り入れながら実施できたことにより気づいた。地域を大事にすることは、大切である。総合学習の当校のねらいとして、地域の環境、地域の福祉といった地域を大事にした活動にすることを教員が持っていると良い。教員がその思考になれば、どのような題材でも地域に近づいた学習はできる。

窪田　裕志先生（学校法人津田学園津田学園小学校）
単元名：総合的な学習の時間、理科「水辺の環境調査」（12 時間）
対象：小学 4 年生

■子ども達を待つ

8 月の下旬に本事業について聞いた時は、ESD がどういう意味で、何をするものなのか全く分からなかった。当校では毎年 4 年生で「水辺の環境調査」を実施しているが、当時は教員 1 年目で、その授業についてどうやって進めていけばよいのか、構想も曖昧であった。

ワーキンググループ会議では多くのアイデアをいただいたが、どうまとめていくかは難しかった。隣のクラスの担任の助言や、副担任で同期の先生にも手伝ってもらう等の教員間の助けがあったから何とかできた。授業づくりは大変だったが、終わった後は面白いと思った。この事業に主体的に関わらせてもらった経験は、今後もずっと活かせると思う。

授業の内容に関しては、専門家に川の生き物や水質調査の仕方について講義をしていただいたりアドバイスをいただいたことが特に効果的であったと感じた。地域の方々は地域のことをよく知る専門家であり、地域への親密感もある。教師が言うのとは違う説得力をもち、子どもの頭に入りやすかった。授業のエッセンスとして、地域の方の話を取り入れることは本当に良かった。ただ、地域の方に任せきりにならないように、こちらも気をつけていかなくてはいけない。

児童は、普段の生活で川に入る経験や川の生き物を捕まえて飼育する経験は少なかった。授業で生き物と環境について学んだことで、普段あまり深くまで考えていないところまで考えることができ、川の見方も変わったと思う。事後課題では住んでいる近くの川を調べさせた。よく知っていると思っている近所の川も、宿題として改めて見ると、新しい発見をした児童が多かった。その意味でも、地域の川に興味を持つきっかけになった。生き物が好きになった、という変化が全員に起きたかどうかは難しいが、嫌々でも生き物に触れた経験は、今後環境を考えるにあたって大きな経験になっていくと考える。

本事業を進めていくのは、当時は辛かった。しかし、辛い経験をして一皮剥けて、視野が広がった。実施した当時は発想を振り絞ってやっていたつもりであったが、配慮すべきことが上手く定まらず、経験のなさがどうしても出てしまったという反省がある。もし「水辺の環境調査」をやり直すことができるならば、クラス全員で生き物に関わりを持たせるような時間をもっと増やしていくように計画していく。また、学んだことを保護者に伝える「学習発表会」では、全てを子どもたちだけで考えて準備を進めていくのが理想ではあるが、時間が足りないので子どもから集めた意見をまとめて教師が劇の台本にした。子どもが自分達で決めた、という感覚が少なく、先生が決めたことをしているという、やらされている感を一部の子どもは持っていただろう。これもやり直すことができるならば、子ども達自身でつくったということを自分達が感じられるような持っていき方を構想し実行していく。

ESD 事業での学びは、普段の授業設計においても役立っている。授業づくりでは、知識と経験を積め込んで、テストでいかに発揮できるかという視点になりがちである。自ら「なぜ？どうして？」という疑問を持たせて、児童に導き方や正解のないことについて考えさせる力をつける、というねらいをもって行う授業は、知識をただ入れるよりも難しく、学力として測りにくい面もあり、うまく進めにくいところである。全ての授業に「なぜ？どうして？」を考えさせる必要はないが、このようなやり方をバランス良く入れることが大事なのだろう。また「教師はファシリテーターだ」と言われたことで教師がどのような立ち位置でいるべきかを考える機会にもなった。子ども達のことを待てるようになったのが、特に大きな成果の一つである。

今年度の「水辺の環境調査」の授業は、私は別の学年となったので受け持っておらず、新しく 4 年生の担任となったベテランの先生のもとで継続されている。私では考えつかなかった面白いアイディアを盛り込んだ授業をされており、昨年の事業を踏まえた効果や変化も確かに引き継がれている。ESD を取り入れた「水辺の環境調査」がさらに発展していくのだと感じる。

浜中　真希先生（金沢市立泉中学校）
単元名：総合的な学習の時間「金沢の環境が育んだ食」（6 時間）
対象：中学 1 年生

■やる気スイッチが入った

ESD の事業の実施は大変だったが、とても勉強になった。中でも授業づくりの構想で各教科や領域の単元の目標を複合的に捉え、ねらいを設定するようになった。そして、そのねらいを達成するため、調べ学習、フィールドワーク、グループ学習等効果的な学習方法や多様な学習形態を取り入れ、学習内容をより深めることができるようになった。その考え方や指導法は大きな財産になった。

中でも総合的な学習の時間は、3 年間の系統的な学習指導計画を立て、課題解決や探究とともに学び方を学ぶ場と捉えた。特にフィールドワークなどの学習活動を積極的に取り入れ、座学中心にならないようにした。その基本は、まず生徒に探究に耐え得る課題設定に向け、学習の見通しを持たせ、課題解決の方法を考えさせた。状況によってはコンサルティングも行った。次に、発表と振り返りの充実を図り、その成果をらせん的に次の学習に活かせるようにした。

フィールドワークなどを実施した学習成果を踏まえ、ワーキンググループ会議で「もっと足元を見た方がよい」と言われ、校区内の、学校周辺にいろいろな良いものがあることに気づいた。併せて、食は文化につながるという話から、「伝統食」をテーマに授業づくりを行った。

ESD は価値観の変革で、ものの判断基準などが以前とは違う。総合的な学習の時間の実践とともに本事業に関わり、自分の考え方や行動の変革を行うようにしたため、そこからやる気のスイッチが入った。環境学習で、行動の変革を目指すだけではなく、諸課題の本質を見極め、柔軟に考えることにより、いろいろなアプローチの仕方があることを実感した。以前は自分がこうしたいと言わなかったが、今はこうやりたい、こういうやり方もあると主張している。

総合的な学習の時間や事業の実施で出会いがあり、さらなる出会いがあった。これによりつながりができ、それが発展していく。例えば、金沢市の事業で気仙沼市の中学校との交流に市内の生徒を引率した。気仙沼市の先生といろいろな話をして、多くのことに触発され、視野を広めて帰ってきた。こういう出会いやつながりによって新たなスイッチが入り、交流も含めいろいろなことにチャレンジしている。

このような取組により、自分の担当教科である家庭科でもこれまでと違った視点や実践を取り入れている。家庭科の目標及び学習内容は ESD そのものであり、社会の形成者としての資質や能力の育成にある。この学習において、人との関わりや社会的体験などを通して、生徒の価値観とともに行動の変革を目指すことは、総合的な学習の時間や本事業での実践と本質的に同じであると考えている。

中学校では、ESD の実践は学年単位で百数十人の生徒を対象に、学年の全教員の共通理解を図り、指導計画にしたがって行う。例えば、フィールドワークを実施する場合、事前の計画や外部との折衝などにかなりの労力を要する。そのため、実施を躊躇する教員が多い。しかし、学習のねらいは何なのか、生徒にどのような力を付けたいのかといった議論をしないと、教員の考え方や行動の変革が期待できない。併せて、ESD に取り組むには、教科学習で身に付けた知識と社会的な体験などを通して獲得した知識や情報を融合させ、新たな価値観の構築を図っていく教員の指導力の向上が必要である。

本校の総合的な学習の時間は外部の人の協力も得ながら行っている。本事業では、更に地元に目を向けることができ、学習成果が予想以上に上がった。中学校は学年を動かす必要があり、学校全体を動かすには、ESD の理解者を増やさないといけない。今も同じ学校にいるが、この辺がなかなか難しいし、苦労しているところである。

生徒の変化については、アンケートの結果以外に、授業や特別活動など日々の全教育活動を通して総合的に見ていく必要がある。学校として生徒にどんな力を付け、どう育てていくかといった目標のもと、多様な学習内容・方法や評価は、生徒をより成長させるために不可欠である。基本は教員の考え方や行動の変革だと考えている。

長屋　亮司先生（岐阜市立長森南中学校）
単元名：総合的な学習の時間「温暖化・エネルギーについて学び、何ができるか考えよう」
（27 時間）
対象：中学 1 年生

■やっていることの意味付けをする

本校では、もともとあった環境学習に、ESD という概念を導入することで、教師が何のためにこの活動をするのか、めざす姿を意識しながら活動に取り組めるようになってきた。特に、1 年生で環境教育、2 年生でキャリア教育、3 年生で国際理解と点であった活動が、ESD という概念で線や面となる活動として意味付けできた。ESD を総合的な学習のゴールにすると、今までテーマありきでバラバラに実施していた 3 年間の総合学習が、持続可能な社会に向けての営みとして位置付いていく。学校として全体像を明確にし、その学習の出口を持つことにつながった。

今回の事業で、ゲストティーチャーと授業を行う際、どのような役割分担をするとよいか考えることができた。生徒との信頼関係からいうと、授業実施は担当教員が担い、より専門的で学習効果が上がる部分をゲストティーチャーに依頼するなど役割分担をすることが一般である。今回は、ゲストティーチャーが主体で授業を行った。担任教員もこれなら自分でもできると感じ、授業が進むにつれてチームとして授業していく姿に変わっていった。他のクラスでは、ゲストティーチャーなしで実施した。その違いを明確にし、効果的に出前講師を活用する方法を考えることができた。また映像については、小水力発電を広げている方の映像など実際に行けない場所で事業展開している人の話や情報が聞け、生徒の興味関心を高めることができた。

一般に学校では、ESD 等の特色ある活動は、リーダーシップを発揮する先生がいないと衰退することがある。誰が異動しても、誰が来ても、ESD が継続し発展することが大切である。急速に変えていくのではなく、少しずつ前進していくようにした。その結果、少しずつ姿を変えながら 10 年以上続いている。そのことが学校の力になっている。外部講師の方が、継続して来てくださっているのも本校の強みになっている。現在、ユネスコスクールに申請中である。ESD を学校全体でしっかり捉えて取り入れていく営みになっていくことを期待している。ユネスコスクールになることで、教員も生徒も意識が高まり、未来を見据え、取り組んでいってほしい。

今回の取組では、自然環境保全とエネルギーの 2 つを題材にしている。生徒たちに揺さぶりをかけ、経済、社会、未来について考えさせる場面をつくるよう工夫した。ESD でいう多面的思考力を育むことにつながっている。教科の授業では、何を教えるかのゴールが明確であるのに対して、総合的な学習（ESD）では、明確なゴールがなく、答えは一つではない。つまり何を教えるかは、学校に任されている。教える内容や範囲が広く、授業づくりに困難さを感じている教員も多い。ESD の学びを深めるための今後の課題は、本校独自のプログラムを創造していくことである。

(6)地域の団体を対象にしたヒアリング

一般社団法人長野県環境保全協会　専務理事　宮島和雄氏

長野県実証校：平成 25 年度　松本市立源池小学校
平成 26 年度　松本市立会田中学校
平成 27 年度　信州大学教育学部附属長野小学校

■工夫とインパクトのある情報発信、しくみづくり

松本市では、環境教育を進めるネットワークがあり、学校に講師を派遣する等の事業を実施していた。学校は、日頃から地域の活動との接点があり、有意義なものだと評価をしているから、新たにこの事業に取り組むことに対する違和感がなかったと感じた。素地のない地域で同じように本事業が展開できるかは疑問である。学校側が自主的に地域活動をしている人をゲストに招いた授業づくりや実施はまだまだ難しい。

1 年目、2 年目に ESD 環境教育プログラムの実証授業を行った松本市は山や里山が比較的身近にあるが、子ども達は自分たちの生活と山がどうつながっているのかという視点をあまり持っていない。今回実施した授業において、里山、奥山があって、それが相互関連して生き物と人間もそういう絆の中で生きている、というメッセージが伝わり、新しい視点が子ども達に育まれていると感じた。実際のフィールドを見て、活動している人達が自分たちの目の前で体験や思いを話してくれることはインパクトが強く、教材になる。教員の授業とは違った次元での経験ができたことが有意義であった。子ども達は直接話を聞くことで大きな印象を胸に刻むことができる。子どもにこれから伸びる能力や発想を育むことにつながる。また、映像を使うことで現場の状況を見ることができたことが良かった。今後そういった手法を活かしながら ESD 授業を実施できるとよい。

教員も地域の人から学ぶことができる。実際の社会で生きる、地球と共生していくには、多様な価値観や経験値が必要であり、環境教育を通じて先生も子ども達と一緒に認識出来ることがある。本事業のスタート時点と、まとめの段階での先生の話を聞くと、先生自身が積極的に自信をもって子ども達と対話していることがうかがえる。教員もテーマについて意見を発信している密度、度合が高くなり、掘り下げが深くなったという印象がある。子ども達も思ったことを発信している。教員と子ども達の関係性が変わっていた。

環境教育は通常の学校のカリキュラムに加え、地域で活動している人を活用することで現場をリアルに伝え、現場でのリアリティのある体験学習を実施できる。子ども達も教室のデスクワークだけでは習得できない学びを積むことができる。重要となるのは授業の実施方法である。一過性のイベントではなく、学校としての ESD カリキュラムを定着するには、全体の教育の中での位置づけの確認、教育の体系の中の位置づけを先生が把握して取り入れていくことが必要である。全体の授業構成を作成している教員と一部の専門的な部分を担うゲストティーチャーの役割を明確にして学びを深めることが重要である。先生が中心になって実施した授業は、進化して、次に広がる、可能性が広がるという印象を受けた。全体授業の中でどう外部の人を活かすかという、先生のバランス感覚が必要である。

本事業を体験した地域ではどうやって広げていこうかという共通の認識がある。環境教育プログラムを実践するためには、地域で環境問題に取組む団体をネットワーク化して学校の要望に応えられる講師をいつでも派遣できる体制とそのネットワークを運営し情報発信をする組織が必要であることを痛感する。こういった組織には、資金調達の手段も必要であり、物心両面での行政の支援も必要であろう。

本事業で実施した授業は非常に魅力的であり、教員は授業づくりに対する意欲、児童生徒は学習意欲を高めることができた。単なる知識の詰め込みではなく、積極性、自発性を育む授業であることを認識できた。このような授業を継続的に実践することができる ESD 環境教育プログラムを、次世代を担う子どもたちに是非普及させたい。

環境教育ネクストステップ研究会　代表　寺田卓二氏
三重県実証校：平成 25 年度　名張市立薦原小学校
平成 26 年度　津田学園小学校
平成 27 年度　四日市市立中部中学校

■双方の構えとつなぎ役

1 年目の薦原小の事例は、小規模の学校で、校長とベテラン教員が組めたのが強く、大成功だった。先生がより自信をもち、地域の方との関わりも深くなった。地域の方も自分たちが貢献しているという意識はあがったと思う。この事業は薦原小にとってものすごく大きいものだった。全くのゼロからではなく、校長、教員が熱心で、地域とのつながりがある程度あるところにこの事業が入ったことで、取組をさらに広げ、ESD の視点を加えて、展開できた。ESD の授業はこれでいいんだと、自信になった。外部から評価をされることで、教員や子どものモチベーションが上がる。教員も学校も自信を持ったことが、成果でもあり、定着にもつながった。薦原小学校全体で取り組んでいた。名張市の教育委員会全体にも相当影響が出ていると思う。

薦原小の子どもは、先生により、おそらく視点を揺さぶられたことで、意見が引き出されていた。また、本事業実証の翌年に 1 年生から 6 年生までの ESD カレンダーをつくりあげていた。教員全員で、総合学習を中心にしながら、学年間の学習の情報共有ができる ESD カレンダーができた。ESD カレンダーを作ることによって、6 年間を先生たちが見渡す（中学校なら教科担当制であるが、他の教科で何をやっているかがわかる）。そういったきっかけとして ESD カレンダーは意味があると思う。実施した教員には、その後四日市市の教員研修や四日市大学で ESD の話をしてもらっている。

2 年目の津田小学校では、実証した教員 1 年目の窪田先生が乗りきった。あの取組を津田学園として活かしてほしい。1、2 年後に何らかの形で本事業が活きていれば、成功と言える。私立なので校長や理事長がその取組をいかに認めていくかによって成果は変わる。子どもの発言や発想の力から、子どもがあれだけの力をもっていることに感心した。ESD の授業によって普段より子ども達は活発になっていて、前向きな学びはできている。教員はそれだけの事前準備と授業をしている。教員が事前学習や事後のふりかえり、自分で仕組んで仕掛けて、子どもが喜ぶ授業を年間で数回できたら立派である。

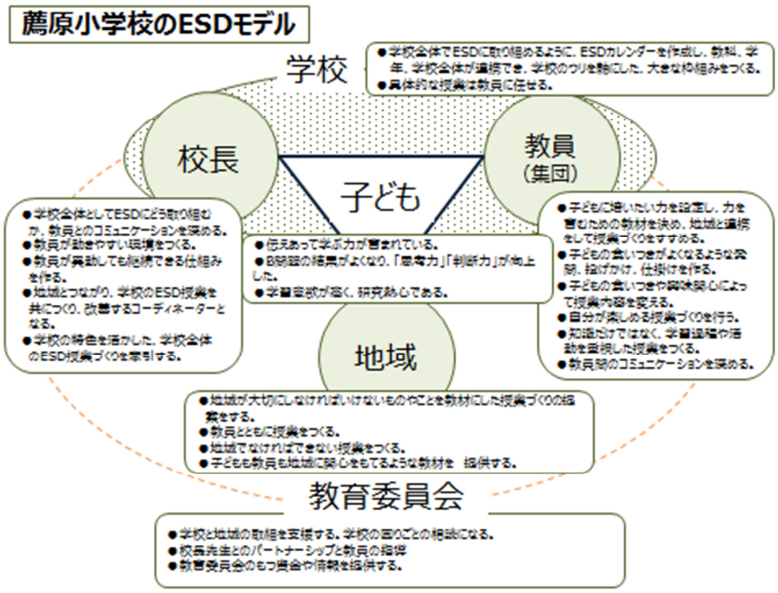
ワーキンググループについては、地域のいろいろな人が授業づくりに関わることで、教員の視野が広がる。その授業で達成感を感じると、ある意味快感になる。次もまたやろうという成功意識が生まれる。地域の人が地域のことを教えると、先生とは違う視点、新しい風が入ってくる。授業に複数の視点が入ることは、子ども達にとってもすごくいい。外部の人だからこそ伝わることもある。そうやって先生が外部の人を意識して活用すればよい。ただ、あくまで学校教員が主体性を持っていないとだめである。学校や先生の構想があって、そこに地域の方や外部の人が入ってきて、先生では伝えきれない部分でうまく活用することが重要である。地域の人にお任せで授業を実施してもらうと、教員の授業のねらいと地域の人の考えの齟齬が出る可能性がある。地域の人の授業内容は、先生が考えている流れの中に位置づいていないかもしれない。外部の人を活用する際には、地域の人と、ESD の考え方や子ども達にこんな体験をさせたい、この地域の価値に気づいてほしいといったことを共有し、「ここまでいいです」と言えるような関係性を育むことが大切である。外部の人が入ることによって、何をねらうかをしっかり持っていないといけない。地域の人は学校に入っていく時には、学習の流れの中で、期待されているところは何かを確認していかないといけない。双方の構えが必要である。そのために話し合いの場をもつことが必要である。

本事業では、環境教育ネクストステップ研究会として関わっている四日市や四日市市教育委員会と上手くつながることができた。四日市市は環境教育促進法に基づいた環境計画を見直す時期であり、ESD の視点を入れるように働きかけた。ESD について囲み記事で説明が入っており、やらなければいけないという意識は出来上がっている。中部中で実証することで他の学校への説得力は上がる。環境教育ネクストステップ研究会の役割を地域の人に伝えながら、そういう視点を持ってもらうためのつなぎ役をしようと思っている。四日市市の強みは市の教育委員会が全体として動くと言っている事である。

(7)インデプススタディ１．名張市立薦原小学校（平成 25 年度 /三重県）

①名張市立薦原小学校の ESD 取組

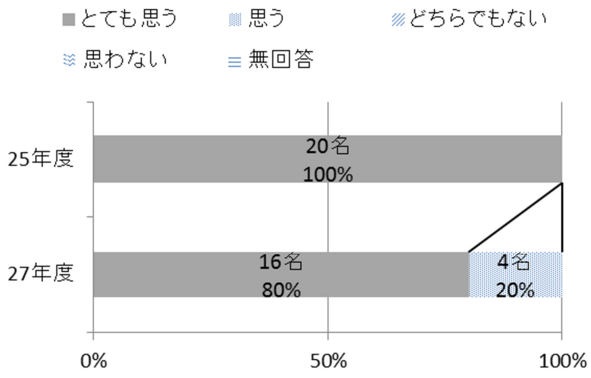
名張市では教育委員会による ESD 取組推進が図られ、薦原小学校では平成 25 年の実践がきっかけとなり、学校全体で ESD に取り組むようになった。平成 25 年当時から校長、授業実施者、教務主任が意欲的であり、平成 26 年、平成 27 年も校長、授業実施者が中心となり、取組を進めている。ESD をテーマに校内研修を実施し、1～6 年生の取組を ESD カレンダーとして実践するなど、教員が連携し、授業改善している。薦原小学校は希少種のギフチョウが生息する地域であるため、地域課題のテーマとしても恵まれた環境にある。ギフチョウの保護活動に取り組む地域団体が学校に働きかけて始まり、10 年来継続して毎年春にギフチョウの観察会を実施している。また、公民館や幼稚園が隣接するなど、地域との連携がしやすい立地である。薦原小学校での ESD 実践は継続、更なる展開、進化をしている。



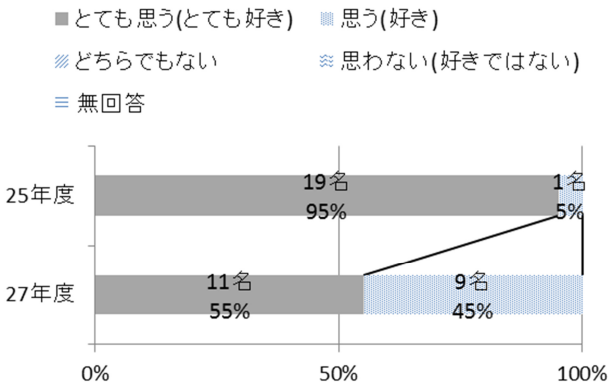
②子どものアンケート

対象：平成 25 年度小学 4 年生（20 名）
　　平成 27 年度小学 6 年生（20 名）

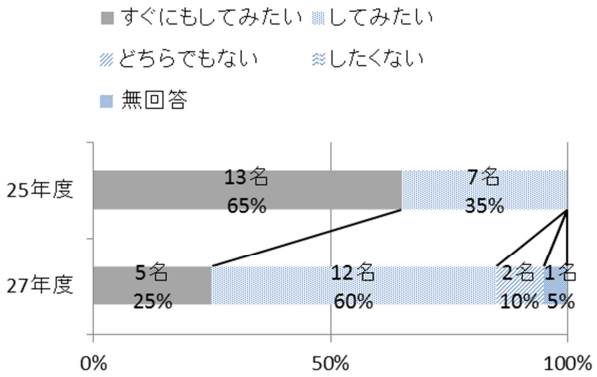
【質問 1】ギフチョウは大切だと思いますか



【質問 2】（平成 25 年度）ギフチョウのいる地域の自然を大切だと思いますか。（平成 27 年度）ギフチョウのいる地域（自然）は好きですか



【質問 3】地域の未来のために自分に何かできる、何かしたいと思いますか



【アンケートより】

平成 25 年度 4 年生と平成 27 年度 6 年生にアンケートを実施した。「ギフチョウは大切だと思いますか」という質問には、6 年生になっても、80%の子どもが「とても思う」と答えた。「ギフチョウのいる地域を好きですか」という質問には、55%の子どもがとても思う（好きと答えた。質問 1 、2 については、100%の子どもが「思う」であった。「将来の未来のために自分に何ができる、何かしたいと思いますか」という質問には、「してみたい」と 85%の子ども が答えた。ほとんどの子どもたちには 4 年生の学習がある程度残っていることが把握できる。

新海洋子氏　環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー/検証委員会委員

■瀬川先生（平成 27 年度 6 年生担任）のヒアリングより

薦原小の総合学習にはしっかりとした芯がある。ギフチョウそのものについての学びや記憶は低下するが、手法や考えて発表するというサイクルは継続する。最終的には自然環境だけでなく、自然環境も含めた地域をどうとらえるかである。地域を基軸にスパイラルで回りながら学習が継続しているとイメージしている。」とあり、ギフチョウの授業を通して「地域」を意識する子どもの育みが展開されている。

③６つの仮説の検証　※敬称略

指標	項　目	内　容
1	子どもに「育みたい力」を明確にし、「育みたい力」が育まれた	【校長】薦原小の児童に培いたい力は、「伝えあって学ぶ力」であった。児童に培いたい力が設定され、ESD の手法による授業づくりを行なった。 【瀬川】どの学校でも子どもに求めているものは「思考力」と「伝える力」の育みである。 【布本】B 問題の結果がとてもよくなった、本当の意味での学力向上につながっていく。「思考力」と「判断力」が向上した。
2	子どもたちの当事者意識、自己肯定感の育みにつながった	【松田】子どもは意欲を持つと自分で探し、調べ、自分で学び広げ深める。意欲が高まると伝える力、思考力が深まる。子どもにつけたい力をつけるために教材を使う。
3	子どもたちの地域への関心、課題解決のための行動（力）が育まれた	【松田】子どもは意欲を持つと、自分で探し、調べ、自分で学び広げ深める。意欲が高まると伝える力、思考力が深まる。子どもにつけたい力をつけるために教材を使う。 【加納】4 年生の子どもは学期の初めに目標を立てるが、その中にギフチョウのことを調べたい、と書く子どももいる。薦原小の子どもたちは話を聞いてくれるし、関心を持ってくれる。研究熱心である。
4	教員の授業力が高められ、教員の SD への関心が強くなった	【校長】教員が授業に自身を持ち、中核となる教員が ESD に関心をもち、みんなでやっていこうという雰囲気になった。 【松田】子ども達にどんな力をつけたいか、そのために、どの教材を使ってどうカリキュラムをつくるか、子どもの授業への食いつきや関心によって授業内容を変えていくこと、少ない時間数の中で他の教科とどう連携させるかを考えること、色々な方法を考えることが大切である。子ども達にはグループで討議して、人の話を聞いて考え直して、また発言をして、という思考力と発言力を鍛える。子ども達の引き出しをたくさんつくり、中学生になったときにたくさんの引き出しを開けられるようにしよう、と思えるようになった。 【瀬川】自分のしたいことをすると総合の授業は楽しくなる。教員が実施する授業が面白いがどうか、面白くしているかどうかである。教員のアイデアで授業は変わる。教師のほうが、できない、時間がない、わからないとネガティブになってしまう傾向がある。自分に知的好奇心がなくては、子どもと分かり合えない。 【加納】谷戸先生が来られてから、ギフチョウの授業を実施する回数が増えた。
5	地域の人々と ESD 授業をつくることで、教員の授業力が高まった	【校長】教員だけが授業を考えるのではなく、加納氏と一緒に考えた。役割を明確にし、加納氏には自然体験やギフチョウに関する知識の提供、教員は体験を通しての学びや気づきのまとめや発表、児童の思考の揺さぶりを工夫した。 【松田】地域に目を向けた授業をつくるようになった 【加納】校長先生の指導がよい。教える側、受け入れる側の両方がうまくいっている。

6	持続可能な社会の担い手を育むためには、学校と地域の連携が必須であった	【校長】ギフチョウネットワークの加納氏に相談をして、校区内の自然観察をするなどギフチョウから薦原地区を見直す「薦原ならでは」の授業づくりを行った。 【松田】地域のゲストティーチャーとの連携もできており、授業内容やノウハウを蓄積し、継続実施を可能にしている。 【瀬川】手法や考えて発表するというサイクルは継続する。最終的には自然環境だけでなく、自然環境も含めた地域をどうとらえるかである。地域を基軸にスパイラルで回りながら学習が継続している。 【加納】子どもも関われるし、親も地域の人も協力的になる。公民館もバックアップしている。ギフチョウを通して薦原の環境のよさを伝えたい。今後も薦原小学校で出来る限りギフチョウの活動をやっていきたい。ギフチョウが毎年生き続くようにという願いのもとでの授業である。学校と地域で継続させていく。

【インデプススタディの検証】

■子どもの学ぶ意欲の連鎖を起こした ESD

薦原小学校は、子どもたちが、もっと学びたい、もっと知りたいと学習課題を自分事として捉える授業づくりに転換した。それは教員が、子どもたちに育みたい力を明確に設定し、その力を育むための教材、授業手法を取り入れたからである。従来から実施していたギフチョウを題材にした総合的な学習に「ひと工夫」を加え、子どもたちの心と頭を揺さぶる授業を行うようになった。さらに地域の外部講師が、教科書にはない学び、本物を教材にした授業を実施し、子どもたちのワクワクドキドキをさらに膨らませた。子どもが食いつく授業は、教員をやる気にし、子ども、教員の相互による学びあいが豊かになっていく。校長先生は温かく見守り、様子を見ながらタイミングよくアドバイスをする。教育委員会は「子どもを揺さぶる」ことの大切さをアドバイスする。他の教員は、その授業手法に関心が高まる。全校で ESD に取り組むようになる。学級で、学年で、学校で、学校と地域で、子どもと大人が一緒になって「もっと学びたくなる、なにかをしたくなる」授業をつくっている。子どもたちのアンケートからは、2 年たっても子どもたちのギフチョウや薦原への思い、何かしたいと思う気持ちがほぼ変わっていないことがその効果を可視化している。

大鹿聖公氏　愛知教育大学教授/検証委員会委員

新海洋子氏　環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー/検証委員会委員

④教員、地域の人のヒアリング

谷戸　実先生（学校長）

教員が ESD をすぐに理解するのは難しいと考え、ESD という言葉はあまり言わずに進め、まずは薦原小の地域の特色を研究主題にして授業づくりをしようと教員に話した。薦原小学校の特色はギフチョウが生息するすばらしい自然環境だ。ギフチョウを教材にした学習は、4 年生で行うが、どの教員が受け持ってもある程度の授業を実施できるようにしたい、年間を通してギフチョウの学習をしたいと考えていた。また、薦原小の児童に培いたい力は、「伝えあって学ぶ力」である。 ギフチョウネットワークの加納氏に相談をして、校区内の自然観察をするなどギフチョウから薦原地区を見直す「薦原ならでは」の授業づくりを行った。教員だけが授業を考えるのではなく、加納氏と一緒に考えた。役割を明確にし、加納氏には自然体験やギフチョウに関する知識の提供、教員は体験を通しての学びや気づきのまとめや発表、児童の思考の揺さぶりを工夫した。児童は、体験をすると「自分ごと」となり、自主的に考え動く。さらに、教員の発問や揺さぶりによって多面的に思考が広がり、深まり、児童の発表内容も膨らんだ。

この授業によって教員が自信を持ち、中核となる教員が ESD に関心をもち、どの学年でもやっていこうという雰囲気になった。教員一人ひとりの能力を活かしながら ESD 授業づくりをしている。教員が、それぞれの学年で ESD を意識した学習を展開し、膨らませることやつなげることに視点を置いた授業づくりについての話をするようになった。

本校では ESD カレンダーを作成しており、1～6 年生までの ESD の授業テーマ、カリキュラムがある程度できている。カリキュラムや単元に児童に培いたい力が設定され、ESD の手法による授業づくりがされている。ESD カレンダーをベースに教員と児童がしたい授業をつくればよい。大切なことは、教科と総合的学習の連携、学年の連携を意識し、地域との関係性の中で ESD カレンダーを作成することである。教科や学年のつながりをどう考えるか、学びが相互に展開されるためにどうつなぐか、という教員の思考が重要であり、自分のクラスで実施した学習を学年、学校全体でどう継続させていくか、を教員集団で議論することである。教科、学年での学びを連携させ学校全体で取り組むことで、子どもの学びを深める。教員が意識し、いかにアレンジし、プロデュースするかである。多くの教員はそのスキルを習得していないので、校長や ESD リーダーがリーダーシップを発揮して現場をサポートする。

薦原小では、地域のゲストティーチャーとの連携もできており、授業内容やノウハウを蓄積し、継続実施を可能にしている。薦原小の ESD 授業はシステム的にある程度の型ができてきている。このシステムを「薦原モデル」とし、形骸化させないようにしないといけない。

松田淑子先生（平成 25 年度 4 年生担任）

薦原小の活動が継続しているのは、学校の大枠にギフチョウを教材にした学習がはめ込まれている。授業は担任が決め、変えることができる。教員は地域を知らないと教材が見つからず授業づくりに取り掛かりにくい。しかし、この枠組みがあると、各学年の大枠の学習内容を基盤に自分なりの授業に作り替えることができる。管理職や教員が異動しても継続する理由である、本校の強みである。

ESD を知るまでは、総合的学習には総合的な学習のゴールがあり、今まではギフチョウの学習ではギフチョウを理解するというゴールを設定していた。しかし、総合的な学習のゴールはもっと奥にあることを知った。児童が興味関心をも

つことで、次の発展が生まれることがわかった。ギフチョウという教材を使うが、ギフチョウを理解することだけがゴールではない。

重要なのは、子どもの食いつきである。子どもがもっと知りたい、調べたい、伝えたいという意欲を持つことである。いかにそれを引き出すことができるかである。子どもは意欲を持つと、自分で探し、調べ、自分で学び広げ深める。意欲が高まると伝える力、思考力が深まる。子どもにつけたい力をつけるために教材を使う。

ギフチョウの学習から薦原の地域を考える授業に作りかえた。ギフチョウと人間がどうしたら共生できるかを考える思考力を高めることが重要である。教材を深く捉えることで、子どもの思考力が深まった。教師がどう仕掛けていくかである。子どもたちにどんな力をつけたいか、そのために、どの教材を使ってどうカリキュラムをつくるか、子どもの授業への食いつきや関心によって授業内容を変えていくこと、少ない時間数の中で他の教科とどう連携させるかを考えること、色々な方法を考えることが大切である。子どもたちにはグループで討議して、人の話を聞いて考え直して、また発言をして、という思考力と発言力を鍛える。子どもたちの引き出しをたくさんつくり、中学生になったときにたくさんの引き出しを開けられるようにしよう、と思えるようになった。追求することや地域に目を向けた授業をつくるようになった。

瀬川和之先生（平成 27 年度 6 年生担任）

薦原小に来て 4 年目である。ESD について知らなかった。ESD カレンダーを作ってからは、何をするかを見て判断できる。流れ、仕組み、システムができているので、何をするべきかすぐわかる。ESD に変換するのは教師 1 人のエネルギーとしてはしんどい。自然、里山、人との共存などいろいろな角度で、色々な教材を使って授業づくりができる職場の環境も大切である。

薦原小は自然環境が豊かで、自然環境や人とのつながりを実施している。地域によって素材が違う。面白くもあり、臨機応変さも求められる。重要なのは、素材を活かしてどう考えるか、どう伝えるのか、どういう思考をするのか、という力を育むことである。子どもに求めているものは思考力と伝える力の育みである。

先生たちの意識を変えることが重要である。先生はマニュアル化が好きだが、発展させることに臆病である。自分なりに加工しようという力が育たない。自分のしたいことをすると総合の授業は楽しくなる。教員が実施する授業が面白いがどうか、面白くしているかどうかである。教員のアイデアで授業は変わる。教師のほうが、できない、時間がない、わからないとネガティブになってしまう傾向がある。自分に知的好奇心がなくては、子どもが楽しい授業にはならない。自分が面白い楽しい授業でなければ、児童生徒は楽しく学ぶことができない。もちろん、子どもの実態を見て方向転換をすることがあるかもしれない。子どもに何が必要か、教師も子どもも面白いなと思うことは転がっていく。

知識でなく、学習過程や活動が大事だとわかるために、教員が体験することが大事である。そういった研修に参加すれば教員の意識は変わる。子どもに必要な学習方法だと実感する。子どもに必要な力はこれだと言って、それが ESD だと説明するとよい。自分の思ったことを一生懸命調べて表現していくことが ESD だと説明してもよい。

薦原小の総合的な学習にはしっかりとした芯がある。ギフチョウそのものについての学びや記憶は低下するが、手法や考えて発表するというサイクルは継続する。最終的には自然環境だけでなく、自然環境も含めた地域をどうとらえるかである。地域を基軸にスパイラルで回りながら学習が継続しているとイメージしている。

加納　康嗣氏（伊賀ふるさとギフチョウネットワーク）

　薦原小でギフチョウの授業を始めたのは平成 18 年である。薦原小の子ども達は話を聞いてくれるし、関心を持ってくれる。研究熱心である。もともと子どもが持っている好奇心、関心事はどの時点でも変わらない。教育はそこを大事にしないといけない。

３年生の３月にギフチョウとは何かを室内でペーパークラフトをして知る。それを引継ぐ形で、４年生の１学期に実際のギフチョウを見る。以前はギフチョウの授業を年２回、３月と４月にして終わりだったが、谷戸先生が来られてから、回数が増えた。４ 年生の子どもは学期の初めに目標を立てるが、その中にギフチョウのことを調べたい、と書く子どももいる。今年はギフチョウをやりません、となると、子ども達は「えー！」となるのではないか。

　薦原小は校長先生の指導がよい。教える側、受け入れる側の両方がうまくいっている。もう１つは地域である。薦原の地域を歩くと、声を掛けて応援してくれる。子どもが地域に帰って話しをするので、おじいちゃんがこんなことを言っていたという話にもなる。子どもも関われるし、親も地域の人も協力的になる。公民館もバックアップしている。

　ギフチョウを通して薦原の環境のよさを伝えたい。ギフチョウがいるということは薦原の人が無意識に自然を守っているということである。ギフチョウは、地域の人が無意識に守り育ててきた虫である。今後も薦原小学校で出来る限りギフチョウの活動をやっていきたい。ギフチョウが毎年生き続くようにという願いのもとでの授業である。学校と地域で継続させていく。

　ギフチョウの減少は、採集者の欲望と人間の開発が原因である。急激にギフチョウが減り、なんとか保護したい、と活動を始めた。里山は人間がつくり上げた世界であり、ギフチョウは繁栄できた。ギフチョウの特性が、里山の生活を作り上げた私達日本人の故郷、日本人の生き方とマッチしている。だからこそ、ギフチョウが失われていくことを悲しく思い、「何とかしないといけない」というのがエネルギーとなっている。

布本　肇氏（平成 25 年度名張市教育委員会指導主事）

名張市では教育長主導のもと、ESD を進めている。学校の多忙感を考慮に入れると、新たなことを立ち上げることを提案していくことには抵抗があった。ただ、学校では環境教育でいろいろなことに取り組んでいるので、そこに ESD の視点は入れていけるのではないかと考えた。ESD の視点で物事を考えることは大事だと思い、学校で実践している取組に ESD の視点を入れようと名張市内のいろいろな学校を回った。ESD を紹介するために勉強をしていく中で、ESD が学習指導要領に位置付いており、普段していることでできると分かった。

　薦原小のギフチョウなどの取組を知っていたので、そこに ESD の視点を入れていけると良いと思った。何か１つ成果を出して発信していくことで ESD という視点が名張市に広がっていくと考えた。薦原小はスタッフも充実していた。規模があまり大きくなく、校長先生を筆頭としてまとまった学校である。

　本当によい素材、生のものと出会っていく中で、子どもの心に響き、子どもたちの心を揺さぶる場面が、特に総合的な学習には必要である。もう少し子どもを揺さぶって、子どもからよいものを引き出せないかというようなことを、教員とよく話し合った。総合的な学習の時間において、学び合い、子どもたちが話し合う時間は、正解ありきで、「なぜか」を問うようなものではなく、子どもが思っていることを出し合う中で、友達のいろいろな話を聞いていろいろな価値観に触れていく中で、高まっていくことが大切だと思っている。そして、最終的に自分の中で、いろいろな考えの中で何を選

択して生きていくかといったことも見つけられることが ESD のよいところである。そのような視点で常にどこかでこだわって何かしてほしいと話してきた。

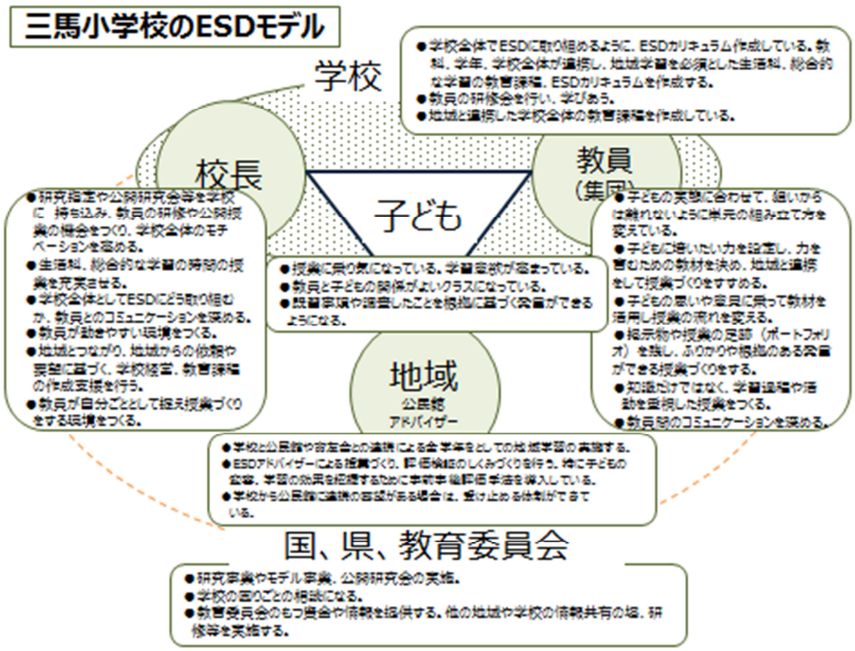
名張市では ESD が少しずつ根を下ろしてきている。他校も ESD の取組を進めてきているので、教育委員会としてはかなり評価をしている。

薦原小は、ESD 実践をして、学力・学習状況調査における B 問題の結果がとてもよくなった。このことから、ESD を含む総合的な学習の時間を充実させることが、本当の意味での学力向上につながっていく。思考力と判断力が向上させるのではないかと考察している。ESD、総合的な学習の充実は不可欠だと思っている。学校の研究そのものを、ESD の視点を入れてまとめていくこともよいのでないだろうか。そのためには、校長先生のリーダーシップが果たす役割は大きい。

(8)インデプススタディ２．金沢市立三馬小学校（平成 26 年度/石川県）

①金沢市立三馬小学校の ESD 取組

三馬小学校では、ESD の柱を三馬小の生活科総合的な学習の柱にしている。県の指定校や学校 140 周年事業、環境省の本事業、生活科総合的な学習の県の研究会事業をうまく活用し、その成果や課題、反省を踏まえて、学校経営や教員間の学びあい、子どもの思いに寄り添った授業づくり、地域と連携した教育過程づくりに取り組んでいる。ESD に関するアドバイザーが学校に入り、授業評価の検証も行っている。掲示物を活用した学習のふりかえりと根拠に基づく発表方法や、ポートフォリオによる子どもの変容を教員も子どもも認識しながら進める授業手法を導入しているのが三馬小学校の特色である。

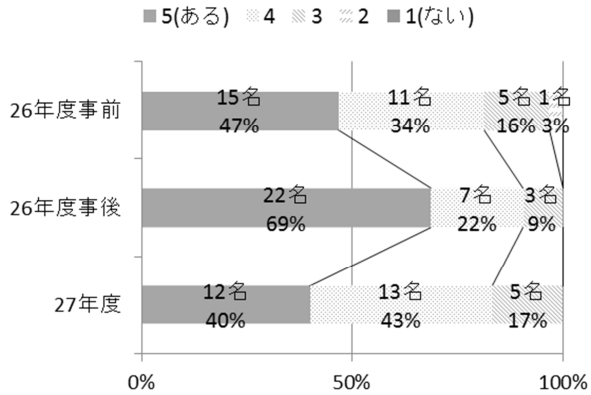


②**子どものアンケート**

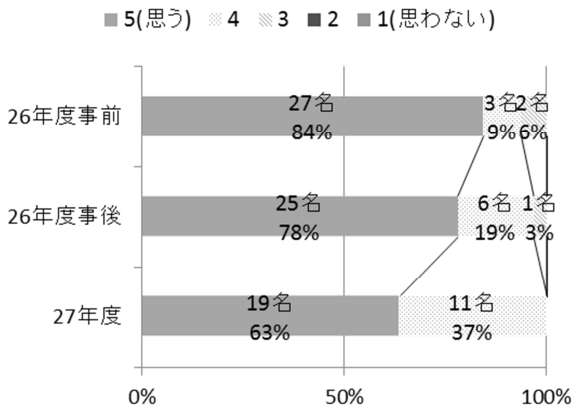
対象：平成 26 年度小学 5 年生（32 名）

平成 27 年度小学 6 年生（30 名）

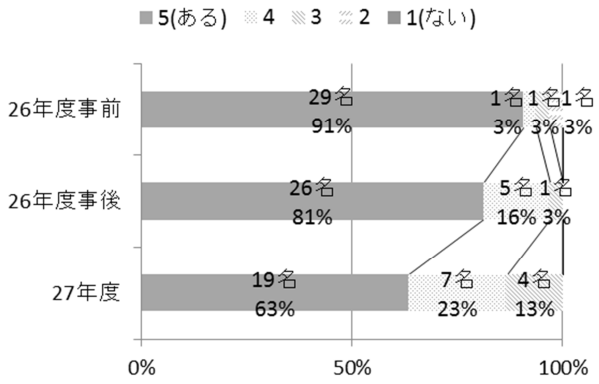
【質問 1】伏見川について興味がありますか



【質問 2】伏見川を大切だと思いますか。



【質問 3】伏見川を石川県 No.1 の川にするために自分達にできることはありますか。



【アンケートより】

三馬小学校のアンケート調査の特徴は、「伏見川を県 No.1 の川にしよう」と取り組んだ総合的な学習の事前、事後、一年後と実施されていることである。結果からは、「伏見川への興味」の項目では事前 81%、事後 91%、1 年後 83%、「伏見川は大切」の項目では事前 93%、事後 97%、1 年後 100%、「伏見川にできること」の項目では事前 94%、事後 97%、1 年後 86%といずれも肯定的な回答が多いことがわかる。また、事前に比べ事後の肯定的な回答（選択肢の 5 及び 4 を選択した割合）が増加していることや、1 年後においても肯定的な回答が高い割合で維持されていることも特筆される。これらの結果から、この ESD の授業が、自己肯定感と共に児童の中に良質な経験として蓄積していることが推察される。

アンケートの対象が 1 クラスだけではあるが、学習後伏見川に対して「興味がない」「大切とは思わない」「できることはない」と否定的な回答をする児童がいなくなっていることも興味深い。加えて、「伏見川を石川県 No.1 の川にするために自分たちにできることはありますか」の項目における 1 年後の回答において消極的な回答が 4 名（13%）増加していることも興味深い。児童が学習を重ねていく中で、伏見川の整備や美化などの「できること」を当事者として「（自分は）継続できるのか」「効果はあるのか」「みんなでできるのか」などリアルな葛藤が背景にあるとも推察され、4 名の内心を聞いてみたくなる結果である。

池端　弘久（金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家館長/検証委員会委員）

③６つの仮説の検証　※敬称略

仮説	項目	内容
1	子どもたちに「育みたい力」を明確にし、「育みたい力」が育まれた	【校長】大切なのは、子どもにどのような力を付けるのかであり、地域から学ぶことである。地域から学ぶ活動を通して、人・もの・ことに触れ合い、地域への愛着が育まれる。 【田中】未来はどんな伏見川になってほしいかと子どもに発問をすると、「生きものにとって大事な川にするためには水草がいる、それはタニシが身を隠すためだ」と言った。根拠を示して必要なものを考え発言していた。総合的な学習は子どもたちの本音が飛びかう。そのことが生きる力につながっていく。
2	子どもたちの当事者意識、自己肯定感の育みにつながった	【校長】子どもの実態に合わせて、単元の組み立て方を変えていることである。その授業は子どもにぴったり来る。子どもたちは授業に乗り気だった。授業の足跡をきれいに残し、次の授業の時に子どもが必ず足跡を振り返り、「こうなっていたからこう思います」と根拠のある意見を発し次に進もうとする姿があった。 【田中】全てのワークシートに「伏見川好き度」と「こんなことをしてほしい」という項目を設けた。「伏見川好き度」が最初 9 点だった子どもが、川へ調査に行ったり、地域の過去について調べたりするにつれて、今は 100 点をつけ地域の川をどうにかしたいという思いを抱いている。
3	子どもたちの地域への関心、課題解決のための行動（力）が育まれた	【校長】子どもが普段何気なく見ていた地域の川を見直したことで課題をもち、皆で解決に向けて考えていくことで絶えず河川の様子に関心を持つ活動になった。自分の地域だけでなく上流や下流地域での河川の様子にも関心をもち、自分達で他地域に聞きとりをしたいという意欲が生まれた。 【田中】子どもに、未来はどんな伏見川になってほしいと発問をすると、「生きものにとって大事な川にするためには水草がいる、それはタニシが身を隠すためだ」と言った。伏見川の探検に出かけ調査をしたことで伏見川への愛着がとても湧き、何かしたいと言う子どもがでてきた。 【野村】町を歩いていると、時々子どもが声をかけてくれる。地域のお年寄りに声を掛けてくれる。子どもの心に開放感があり、地域の大人と交流する。歩きながらも、これは何なの、とざっくばらんに話かけてくる。川にごみがたくさんあり心が痛い、川にごみを絶対捨てない、とノートに書いてあった。
4	教員の授業力が高められ、教員のSDへの関心が強くなった	【校長】自分たちで地域や子どもの実態を見て、子どもにどんな力を付けたいのかを考えないといけない。初めて子どもとあるいは地域と向き合って教材づくりをした。三馬小の教員全員が、自分ごととして授業づくりに取り組んだ。 【田中】地域の SD の課題を教員がしっかりと把握することである。子どもたちに考えさせたい課題だからだ。
5	地域の人々と ESD 授業をつくることで、教員の授業力が高	【校長】地域と育友会と学校が三者連携して、教育課程をつくることが地域を大切にしようとする心が育まれることを話し、協力をお願いした。お手本がない教育課程を創造することが授業力の育成につながった。

	まった	【田中】教師は地域に出かけ地域の課題、SDの課題を把握することが求められている。子どもも教員も、地域のSDの課題を知った時、自分たちだけでは解決できない難しさを知る。授業の流れのなかで体験することを大切にした。実際見て、聞くことを大切にした。自主的な調べ活動、自分で課題を見つけて、調べてその発表をすることを指導案に取り入れた。地域とつながりながら授業や教材を作った。
6	持続可能な社会の担い手を育むためには、学校と地域の連携が必須であった	【校長】地域と育友会と学校が三者連携して、学習に関わることで地域も学校への関心が高まり、それと同様に子ども達も地域の人・もの・ことへの関心も高まり相互によい方向へと意識が高まった。 【田中】教師は地域に出かけ地域の課題、SDの課題を把握することが求められている。子どもも教員も、地域のSDの課題を知った時、自分たちだけでは解決できない難しさを知る。と同時に、他の人と協力すれば解決できそうだと感じてほしい。伏見川の探検に出かけ調査をしたことで伏見川への愛着がとても湧き、何かしたいと言う子どもがでてきた。 【野村】社会や地域の問題を扱う学習、体を鍛える取組を学校で実施してほしい。学校のカリキュラムに実習体験、社会に目を向ける特別な授業を積極的に取り入れてほしい。学校から公民館に何かしてくれないかと言われたら、受け止める体制はできている。

【インデプススタディの検証】

■地域のSDの課題で紡がれた物語

ESDによる総合的な学習の時間の実証授業の特徴は、

●「育みたい力」を明確に教育課程の目標に位置付けたこと

●「育みたい力」と「真に地域を知る」ために、地域のSDの課題を授業の核としたこと

●アンケート調査や児童が表現した成果物に基づく評価の充実に取り組んだこと

により児童生徒、教師、地域にリアルな物語が紡がれたことである。

仮説1、2については、上記の「子どものアンケート」調査とともに、国立教育政策研究所が開発したESDフレームワークで育成する能力・態度の評価枠組みと、信州高遠青少年の家での実践を活用し、別途学習の事前、事後に「育みたい力」に関するアンケート調査も実施した。別に行ったアンケート調査結果からは、目標にした「未来像を予測して計画を立てる力」「自然や防災への関心」「進んで参加する態度」を構成する項目に対する肯定的な回答が大きく伸びていることが確認された。上記「子どものアンケート」調査結果と合わせて考えてみると、児童が学習した手ごたえを感じ自己肯定感を高めるとともに、伏見川に関わる当事者意識を涵養できたと推察される。また、このことは、児童のレポートなどの成果物や授業においてフィールドワークしたことを根拠にしてコミュニケーションする授業の姿や、1年後の「次の5年生も伏見川の勉強するのかな。」「伏見川の勉強続けて欲しいな」という多くの昨年度の5年生児童の声からも裏付けられた。

仮説3については、学習対象である伏見川の中流域の調査から始まった学習が、上流域の森林の観察や、下流域の漁協の方へのインタビュー、過去の氾濫の歴史について公民館の方へのインタビューなど、学習課題解決のための積極的な体験活動を生み出していったことは、児童の地域への関心と課題解決の行動力を授業が促していたことに他ならない。また、関連内容を履修した社会科の教科書を授業中に調べ直そうとする姿も見られ、児

童の課題解決の行動力を鍛えていたことが伺えた。そして、何よりも伏見川に積極的に関わっていく行動について協議され、別途のアンケート結果として「進んで参加する態度」が身についたと自己評価している結果にも表れている。

仮説 4、5 について注目すべきは、前述したように授業を受けた 5 年生が、1 年後新 5 年生によって学習が継続されることを強く望んでいることである。この事実からも、豊かな物語が子ども達の中に紡がれていたことと共に、教師並びに教師集団の授業力の向上を端的に見て取ることができる。また、校長や授業者へのインタビューにおいて「地域と向き合う教材づくり」「自分ごととして取り組む」「地域の SD の課題を把握する 」などの内容を重視し実践したと語られ、「教員は変わった」「自分の体験をもとに話せるようになった」「私自身生きるということを総合的に見始めた」と答えていることからも、教師の授業力を支える社会人、市民としての問題意識や当事者意識を育てていることが認められ、授業力の最も骨太な部分を形成していることは確かである。また、授業案検討の過程における授業者との対話で、これまで知っていたようで知らなった地域の SD の課題と授業者が出会い認識を深めていく様子から、指導方法の改善にとどまらず、教師自身の自然や社会、人（児童）への問題意識を強化し、地域の当事者としての意識の涵養が進んでいることを実感した。

仮説 6 の「学校と地域の連携は必須」であることについては、学校と地域の双方にとって必須であることが認識できた。学校が地域と連携する必要性は、上記の仮説 1 から仮説 5 までの検証内容に記述した通りであるが、教育課程経営的に見てもその質の向上や継続性の観点から、外部講師としての協力や外部評価への参画などの面で、その重要性は増してきている。一方で地域にとっても学校と連携する重要性が見えてきた。それは、公民館の方のインタビューに「社会や地域の問題を扱う学習をしてほしい」「実習体験や社会に目を向ける特別な授業を積極的に取り入れて欲しい」と語られていることから、児童が学校で学ぶ児童であるという側面と地域に生きる子ども達（住民・市民）という側面を持っており、地域にとっては大人と共に子ども達が地域に生きる当事者としての意識を持つことを願っていることがわかる。この側面から見ても、地域から歓迎されたこの実践の価値は高い。

最後に、ESD の授業として質の高さを実現できた背景として、校長のＥＳＤの柔らかな導入と段階を踏んだ展開を述べる必要がある。校長のインタビューからもわかるように、一教師の実践に留めず教師集団の実践へ、子どもを見て地域を見て自分ごととして授業づくりへと緩やかではあるが着実にＥＳＤを学校運営の柱に育てていることは、注目に値する。

今後、この実践が地域に根差した三馬小学校のスタンダードになっていくことが期待されている。

池端　弘久氏　金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家館長/検証委員会委員

④教員、地域の人へのヒアリング

■橋本有可先生（学校長）

三馬小に赴任して３年目である。三馬小に来て、生活科や総合的な学習を研究しようと思い、少しずつ変えていくこととした。１年目は県の事業の指定校を受け公開研究会を行った。まずは学校や教員の状況や様子を把握した。ただ、言語活動と言われ始めた時だったので、研究教科であった国語の指導案に並行読書を入れることや教科の用語を使って説明したり、まとめたりする力を育むことを提案し実施した。２年目は三馬小が 140 周年であり、公民館からその記念に何か一緒にしようという依頼があった。１年目に育友会からも一緒に事業をしないかという話があったので、この２つの話が私の構想とぴったり合い、公民館と育友会と学校の三者連携による子どもの教育課程をつくることとした。生活科と総合的な学習を使って、１，２年生は地域の方に遊びを教えてもらう授業、３年生は地域の方をゲストに迎えてのまち探検、５年生は公民館の方と伏見川を中心とした環境や防災を考える授業を行った。５年生の授業を環境省の事業に位置付けた。初めて行った取組だったため教育課程まではしっかりはつくれなかった。

昨年の環境省事業で５年生が取り組んだ授業づくりは、とても頑張って教材研究をしたと評価している。伏見川を題材に、森林や海のことも複合して総合的に考える第一歩が踏み出せた。どのクラスも最後の発信までできた。三馬小では初めてである。ただ反省点は、教員全員、学校全体で取り組むことができなかったことである。他の先生にとって「自分ごと」にならなかった。子どもの実態を見て、子どもがしたいと思っていることを捉えての授業にならなかった。

３年目は、石川県の生活科・総合的な学習研究協議会の県大会の指定校になった。昨年実施した教育課程を改善する機会を得たので、全校で教育課程を見直した。今年大事にしたことは、学校、学年全体で取り組むことである。指導案をみんなで検討しようと夏休みに夏期検討会を行い、全ての職員が関わった。その際に、生活科も総合的な学習も地域や学校の実態に合わせて創り出す教科なので過去どこかの学校で作られた指導計画をそのまま使うことはできないこと、自分たちで地域や子どもの実態を見て、子どもにどんな力を付けたいのかを考えないといけないこと、総合的な学習は子どもが地域を見てどんなことを疑問に持つかを考えるためによく教材研究をして子どもの意見や思いに乗っかって単元を進めていくこと、生活科や総合的な学習のみではなく、理科でも算数でも同じであり、このやりかたは他の教科でも活かせることを話した。初めて子どもと地域と向き合って教材づくりをした。みんなで学ぶ機会をつくったことがとてもよかった。その結果、三馬小の教員全員が、自分ごととして授業づくりを行い実施した。各クラスが主体となったために多少隣のクラスとの流れは違ったが、自分のクラスではしっかり授業を実施した。秋に公開授業をしたが、教員には満足感があった。

今年公開研究を受けたことで、教員は変わった。取り組み方が違う。なので、子どもも変わる。田中先生も今年はずいぶん違う。単元を流していく時に子どもの実態に合わせ、かつねらいからは離れないように単元の組み立て方を変えている。その授業は子どもにぴったり来る。子どもは授業に乗り気だった。去年は田中先生が毎時相談に来ていたが、子どもはどう言っているのか、と聞くとガクッとして教室に戻っていった。しかし、今年は子どもに耳を傾けているのかあまり聞きに来なかった。また、去年は指示がないと掲示物を活かした授業がうまくできなかったが、今年は授業の足跡としてしっかり掲示物に残した。次の授業の時に子どもが必ず足跡を振り返り、「こうなっていたからこう思います」と根拠のある意見を発し次に進もうとする姿があった。そのような子どもを育ててくれた。子どもがどうしたら意欲的になるか、食いついてくるかを学年会でよく考えた。より子どもの思いに寄り添って展開しようとしていた。去年は余裕がなく田中先

生が引っ張ろうとしていた。子どもの思いに寄り添っても、ねらいにいく流れがあることに今年気づいた。田中先生は、昨年と同じ学年を持ってもう 1 度授業のやり直しをしたいと希望をだし、再度チャレンジした。子どもとは良い関係のクラスになっている。子どもの成長を感じられた。

私自身あまり ESD を意識していなかった。総合的な学習と生活科と根本の考え方は同じであり、ESD の柱が三馬小の生活科や総合的な学習の柱である。大切なのは、子どもにどのような力を付けるのかであり、地域から学ぶことである。また、単年度で終わらせずに、継続的に実施すること。そうしなければ学校の教育過程の中に入っていかず、先生の力も発揮できない。少なくとも 3 年は必要である。そして、指定校や公開研究会を受けることが、教員が教材研究など授業改善に取り組み気づきを得るチャンスになる。その機会を管理職がいかに学校に持ち込むかである。教育委員会と連携をして実施することが鍵となる。生活科や総合的な学習の研究事業はあまりないが、しっかりした生活科や総合的な学習によって学力は高くなるため進めていきたい。

■田中哲也先生（平成 26 年度 5 年生担任）

昨年 ESD 授業づくりを実施したことでいくつかの気づきがあった。一つは、ESD の付けたい力は生きるために必要な能力、態度であり、年間を通して育んでいかなくてはいけないということだ。前の時間や実施した学習の振り返りが重要となる。子ども全員がポートフォリオのファイルを 1 冊持ち、毎時の学びや気づきをワークシートに書きためている。授業の時、毎回ファイルを使って学びの復習をしている。昨年はポートフォリオでの振り返りができなかったので、今年はすべて蓄積し子どもたちの変化、なぜ変化したのかを把握し授業に生かすようにした。

もう一つは、地域の SD の課題をしっかりと把握することである。子どもたちに考えさせたい課題である。教師は指導要領だけでなく、地域に出かけ地域の課題、SD の課題を把握することが求められている。子どもも教員も、地域の SD の課題を知った時、自分たちだけでは解決できない難しさを知る。と同時に、解決に向け試行錯誤する中で他の人と協力すれば解決できるのではないかと感じてほしい。そのような学習の中で、他者と協力して問題解決することの大切さを実感してほしい。人間には 1 人で解決できないことがある。だからこそ、他とつながっていきたいという思いがある。学習する中で、そのことを実感してほしい。その実感できる状況を自然にどのように生み出していくかが難しい。

また、昨年実施した授業は他教科とのつながりをあまり意識できなかった。環境省の事業を受けて、総合的な学習から国語、社会、理科がつながり、と同時に理科と社会につながり合うことに気付いた。学ぶことを総合的に捉えられるようになった。また総合的な人間の評価、見方、学び方を意識して授業づくりができるようになった。他の教科の教科書や教科の学習と社会とのつながりが意識できる教材などを使いながら考えを深め、広げていくことを進めている。総合的な学習だけでなく、他の教科でもできるようになった。私自身が自分で動き、考え出し、「これはこうだった」と自分の体験をもとにして話せるようになる。自分の見方が変わったので、「こうしていこう」という子どもの思いを広げられているように思う。私自身、生きるということを総合的に見始めた気がする。

今年は最初の授業で何も勉強しないまま、伏見川が未来にどのようになってほしいかをマップにした。サメを書く子どももおり、子どもたちの川を描いた。全てのワークシートに「伏見川好き度」と「こんなことをしてほしい」という項目を設けた。好き度については 100 点にする子どもも 9 点の子どももいた。伏見川の探検に出かけ調査をしたことで伏見川への愛着がとても湧き、何かしたいと言う子どもがでてきた。授業を重ねるなかで点数が上がったり、下がったりする。「伏見川好き度」が最初 9 点だった子どもが、川へ調査に行ったり、地域の過去について調べたりするにつれて、今は

100 点をつけ地域の川をどうにかしたいという思いを抱いている。アバウトな自己評価の方法だが、その変化は何だったかの把握ができる。そのことから体験が大事であることがわかった。最初の授業と最後の授業で、子どもたちが自分の考えや意見の違いがあることを実感し、なぜ違いがでてきたかを教員が考えることが大切である。昨年の子どもたちより下流、上流に自然に目を向けている。子どもから下流はきれいなのかという質問があった。また、家で伏見川の話をしたら、他の学校に聞いてみたら、下流の学校に聞いてみたら、など言われ、やってみたいという子どももいた。子どもに、未来はどんな伏見川になってほしいと発問をすると、「生きものにとって大事な川にするためには水草がいる、それはタニシが身を隠すためだ」と言った。根拠を示して必要なものを考え発言していた。総合的な学習は子どもたちの本音が飛びかう。そのことが生きる力につながっていく。

今年は、授業の流れのなかで体験に行くことを大切にした。実際見て、聞くことを大切にした。自主的な調べ活動、自分で課題を見つけて、調べてその発表をすることを指導案に取り入れた。地域とつながりながら授業や教材を作った。できるだけ自分が引っ張らないように、子どもの自主的な活動が尊重できるように取り入れたつもりである。しかし、自分が作成したカリキュラムの流れがあり、その方向に引っ張りがちにもなる。子どもたちが自然に思えるしかけかた、手立てを考えたい。学校での学習が実際のアクションや社会につながり、学習したことが活用できるようにしたい。

■野村信行氏（三馬公民館体育部長）

平成 2 年に三馬地区に引っ越してきた。公民館と自宅は近く、毎日のように顔を出している。金沢市の地区公民館は、「金沢方式」と呼ばれる運営をしていて全国から注目されている。運営に関して地域主導であり、地元が主体性を持って行っている。運営資金も地元が約 75%負担している。三馬地域には 23 町会あるが、町費の一部を社会福祉、公民館、子ども会などに分配して財源の一部にしている。非常に自主性の強い地区公民館　である。三馬地区には「三馬っこ見守り隊」を十年前から組織され、高齢者が担当している。

私はボランティアとして関わり、できる範囲内で手伝っている。公民館が子どもたちの活動をできる範囲内で支援していきたい。学校との関連では、育友会と一緒になってお手伝いをしている。昨年、学校と公民館が協働した授業ができないかと話があり、3 年生の子どもを対象に地元の歴史を知ってもらう活動を実施した。子どもたちはとても喜んだ。学校を離れて町中を歩き開放的になるからだろう。当日は 11 時半くらいに公民館に戻り、市役所からもらった防災用の食料を使って婦人会が炊き込みご飯をつくり、子どもたち約 120 人と一緒に食べた。時々町を歩いていると、子ども達が声をかけてくれる。また、地域のお年寄りにも声を掛けてくれる。放課後は、子どもたちの心に開放感が生まれ、地域の大人と交流することを楽しみにしている。学校の帰りなど歩きながらも、これは何なの、とざっくばらんに話かけてくる。

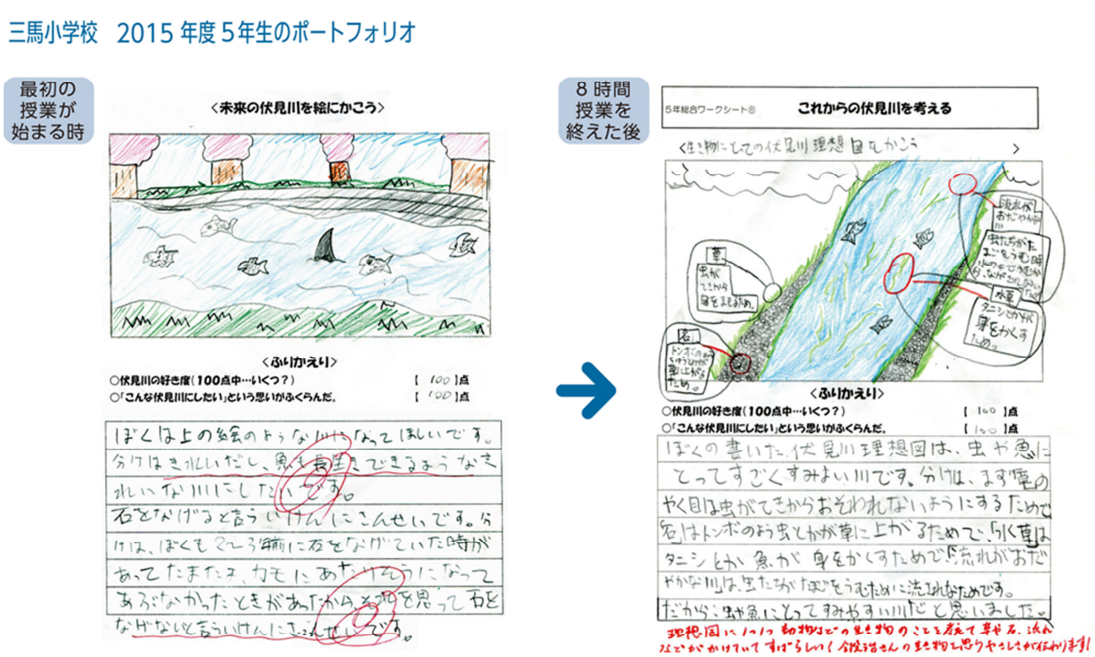
昨年実施した田中先生の授業はとてもよかった。発表会も聞きに行った。川を散策、調べる授業の後の子どもたちが作成したレポートも見せてもらったが、ごみが捨ててある状況に対して子どもたちが心を痛めていることを知った。昨年度の授業が終わった際も 5 年生全員が書いたレポートを読んだが素晴らしかった。やはり、川にごみを絶対捨てないといったことが書いてあった。また、河原に下りて生きものの観察をしたがいろいろな魚がいた、変な虫がいた、など鋭い観察がされていた。子どもたちの観察力や洞察力はすごいと思った。子どもたちには大人になっても、川にごみを捨ててはいけないという意識を持ち続けてほしい。今の子どもたちは勉強をしたので、続けられると思う。伏見川には水生の動植物、カモやシラサギなど多くの野鳥が生息しており、その保護活動もしていかなくてはいけない。

子ども時代はもっと野性的にやんちゃでいてほしい。川で遊んでほしい。川に親しみを感じてほしい。学校付近の伏見川は、泳ぐほどの深さはないが、魚の手づかみもでき、禁漁区ではないので釣っても怒られない。ウグイ、アユを釣る喜びを経験して欲しい。どこの学校でもプールがあるが、川遊びも大切であり、私はそれを奨励している。川から学ぶことはたくさんある。洪水が発生し、氾濫する川は護岸工事をする。工事をする際に生きものが暮らせるように、大きな飛び石やよどみ溝をつくる。川は年月が経つと、上流からの土砂が堆積し、川底が高くなる。そうなると、洪水防止のため、数年に一度、県が大型の重機で浚渫する。そうすると、自然にできた中洲などが消滅し、野生動植物の棲息に悪影響が生ずるのは仕方がないことなのかもしれない。

人間の暮らしと生きものの暮らす環境との関係を子どもたちが学ぶ。そのためにも、川を知り、そこに暮らす生きものに触れることが大切である。

正規の授業の妨げにならないように、社会や地域の問題を扱う学習、体を鍛える取組を学校で実施してほしい。学校のカリキュラムに実習体験、社会に目を向ける特別な授業を積極的に取り入れてほしい。学校から公民館に何かしてくれないかと言われたら、受け止める体制はできている。子どもたちを好きな公民館員もいて、学校から要請があれば、いつでも受け止める。10 年ほど前から「三馬っ子見守り隊」がある。不審者に子どもたちが連れ去られないように下校時に地区の高齢者 40 人～50 人が街角に立っている。そのことによって、子どもたちと接する機会ができる。学校から何かしてもらえないかと言われたら、公民館としては積極的に出向き、子どもたちと少しでも接する。お年寄りもそれが生きがいになり、子どもたちからもパワーをもらえる。

【三馬小学校　平成 27 年度 5 年生のポートフォリオ】

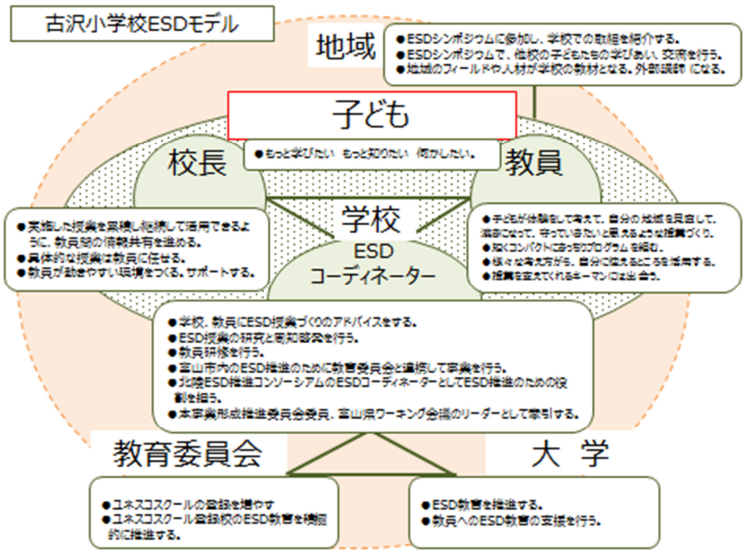


〈田中先生のコメント〉
伏見川の未来理想図が大きく変わっています。学んだことを生かして根拠を示して未来予想図をかいています

(9)インデプススタディ 3. 富山市立古沢小学校（平成 25 年度/富山県）

①富山市立古沢小学校の ESD 取組

富山市では、富山大学人間発達科学部と市の教育委員会が連携して ESD 取組を推進している。古沢小学校では、平成 25 年度に学校近くの里山「呉羽山」を題材として授業を行った。呉羽山にある富山市ファミリーパークとの元々のつながりを深め、保全活動を行う NPO 法人きんたろう倶楽部と一緒に体験活動を含めるプログラムを実施した。作成したプログラムを加除修正しながら引き継ぎ、担任が変わっても継続して実施している。校内発表会で 4 年生児童が発表することで、下級生は 4 年生になると呉羽山を学習するという意識になってきている。また、地域の人の思いや昔の呉羽山と人々の生活のつながりを気付かせることを意図として作成した映像教材も活用している。プログラム実施において、地域の方々の支えが大きな力となっており、子ども、教員、地域が共に学び合う、仕組みになりつつある。呉羽山の学習が、学校の財産となり、文化となり継承されることを現場の教員や地域の人々から望む声があがっている。

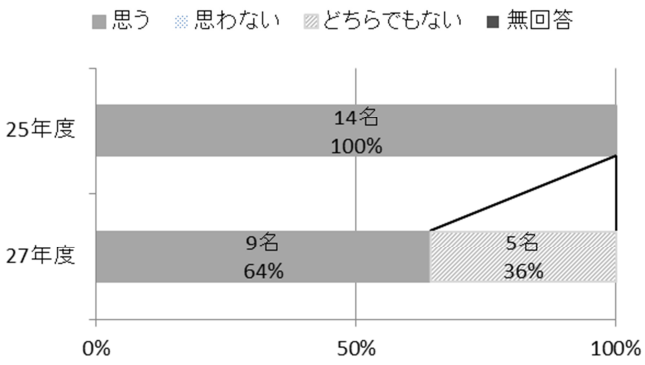


②子どものアンケート

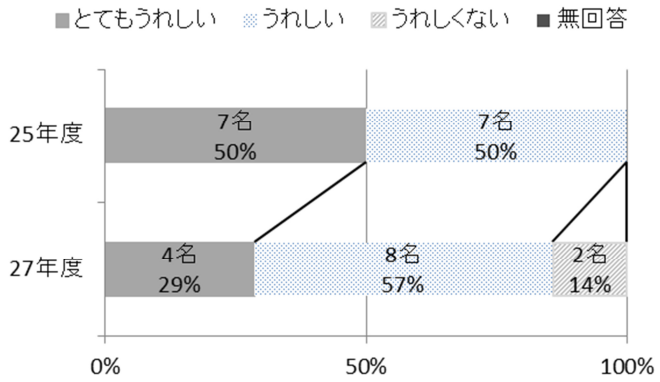
対象：平成 25 年度小学 4 年生（14 名）

平成 27 年度小学 6 年生（14 名）

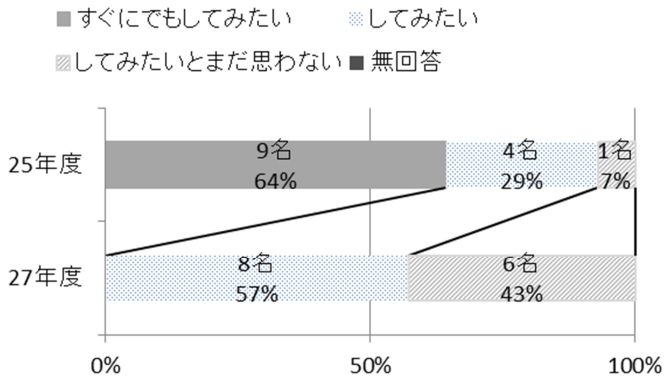
【質問 1】里山（呉羽山）は大切だと思いますか



【質問 2】 自分たちの近くに里山（呉羽山）があってうれしいですか



【質問 3】里山（呉羽山）を守る活動に参加したいですか



【アンケートより】

平成 25 年度 4 年生と平成 27 年度 6 年生にアンケートを実施した。「里山（呉羽山）は大切だと思いますか」という質問には、6 年生になっても、64%の子どもが「思う」と答えた。「近くに里山（呉羽山）があってうれしいですか」という質問には、86%の子どもがとてもうれしいを含めてうれしいと答えた。「里山（呉羽山）を守る活動に参加したいですか」という質問には、「してみたい」と 57%の子どもが答えた。呉羽山への愛着をもつ児童が多く、大切だと思う、活動をしたいという児童が半数以上いた。平成 27 年度アンケートで、学習で心に残っていることは何か、という質問には、呉羽山の自然体験、きんたろう倶楽部との竹伐りの体験について児童の多くが覚えていると答えた。2 年経っても児童には、呉羽山やきんたろう倶楽部に対する意識や思いがあり、学習効果があったと思われる。

新海洋子氏　環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー/検証委員会委員

■澤橋先生（平成 27 年度 6 年生担任）のヒアリングより

昨年、防災の学習で保育所に行って、劇をした。物怖じせず、楽しんでいた。活動に対して積極的である。4 年生の学習がつながっているかを検証することはできない。しかし、呉羽山の学習は、古沢小学校の財産になっている。その学習を絶やすのはもったいない、継続したい。

③６つの仮説の検証　※敬称略

指標	対象	項目	内容
1	子ども	子どもに「育みたい力」を明確にし、「育みたい力」が育まれた	【武島】地域の理解が深まり地域を愛する心が育まれ、結果として、地域の人との結び付きが強くなった。体験活動は、子どもたちの心の中に残る。人と出会って学んだことも多かった。子どもたちにとって机上の知識では得られないプラスになったし、それらが生きて働く学力にもつながっていくのではないか。 【坪坂】子どもたちがやらされている感がないことが印象的である。主体的に取り組んでいる。 【酒井】子どもが何か体験をしながら、考えて、自分の住む地域を見なおして、好きになって、これから守っていきたいとなればよい、そんな気持ちでつくった。自然が近くにあることが嬉しい、面白い、と子どもたちは反応し、とても楽しかったのを覚えている。
2	子ども	子どもたちの当事者意識、自己肯定感の育みにつながった	【武島】「将来、大人になったら自然を守りたい」という内容の感想まであった。 【坪坂】大きな集団になっても、自分を発揮できることにつながる。 【酒井】子どもの目の輝きが違い、予想外のものを見つけてくる。 【田中】子どもたちは、里山に行くと、知らないことが多く、川や池の色が少し違うだけでもその変化に気付いて、好奇心旺盛である。 【澤橋】元気がよく活発である。物怖じすることなく、授業でも面白いことを言っている。人を責めるようなケンカをすることもない。
3	子ども	子どもたちの地域への関心、課題解決のための行動（力）が育まれた	【武島】自然も人も含めて地域が身近に感じるようになった。里山に強い関心を持つ子どもも出てきた。「もっと学びたい」という子どもの表情が今も心に残っている。 【坪坂】この学習をしているおかげで地域を好きだ、という気持ちが強くなっている。目的意識をもって追究している。 【酒井】呉羽山について気にも留めなかった子どもたちが、山はいい、山が気になると言うようになった。自然が近くにあることが嬉しい、面白い、と子どもたちは反応し、とても楽しかったのを覚えている。 【澤橋】地域の方々に教えていただきながら稲刈りをしたときには、最初から最後まで一生懸命している。 【田中】子どもたちは今、呉羽山の栗などの食べ物に関することや、鳥の種類、動物の居場所等に関心をもっている。自分で調べることも大切な学習であるので、子どもたちが抱いた疑問は、自分で調べようと促している。校区内にある呉羽山は大切なんだ、と思ったようである。
4	教員	教員の授業力が高められ、教	【武島】休日に里山の様子を写真に撮るなど、勤務時間外も教材作りを行っている。そういうことを考えると、子どもたちのために楽しい授業を

		員の SD への関心が強くなった	つくろうという教員の意欲も必要。 【酒井】今回はファミリーパークやわくわく田んぼがある里山である「呉羽山」を扱った。最近、里山が荒れていること、きんたろう倶楽部が里山の環境を守っていると聞いてはいた。古沢小学校に長くいたので、きんたろう倶楽部のことは知っていた。その活動が面白そうだと思っていたが、具体的な活動の内容については知らなかった。最初のきんたろう倶楽部との打合せでは授業でどのような活動ができるのかわからなかったので、具体的に相談をした。 【澤橋】里山（呉羽山）の学習は、古沢小学校の財産になっている。それを絶やすのはもったいないし、継続したい。 【田中】里山の授業をすることには、少しプレッシャーもあり不安でもあったが、自分自身の勉強にもなっている。総合的な学習の時間の進め方も、こうやってやるんだということが少し分かってきた。
5	教員	地域の人々と ESD 授業をつくることで、教員の授業力が高まった	【武島】地域の人との結び付きも強くなった。地域の特性である里山学習がテーマにあっていて、授業できる大変優秀な教員がいたことにより、上手く出来た。 【酒井】きんたろう倶楽部とできたことが一番良かった。子どもたちは、呉羽山の環境について考えている人がいることを知ったことが驚きだったようだ。また、きんたろう倶楽部の方から、優しく教えていただけたことで、人を通して山を好きになった子どももいた。体験はよい。竹切り体験も山で作業をしている人たちとのふれあいも良かった。そのような人たちとの出会いを見つけることが大変である。また、授業内容を理解していただくことも必要で打ち合わせがとても大切である。そういった人や団体に出会えるかどうかが重要となる。ワーキンググループはとても参考になった。みなさんが思い思いのことを言われるで、今までの気付かなかったような考え方や、専門家の話を聞けたことがとてもよかった。授業を考えるうえで参考になった。また、わからないことはわからないと伝えると、説明してくださった。案を持っていくと、いろいろな人が意見を言ってくださるので、参考にさせてもらった。１人で考えていたことがすっきりする。その時はわからなくても後で考えてみたらわかることもある。 【田中】今年の ４ 年生は、一昨年度作成し、昨年度手直しした総合的な学習の時間の指導案や年間計画を基にしながら、里山（呉羽山）の学習に取り組んでいる。下学年の子どもは、４年生になったら里山（呉羽山）の学習をするものだと思っている。3 年生の国語科の教科書に、里山の教材文が載っている。今回の改訂で新しく入った教材文である。３年生、４年生と連続性のある学習を進めていき

			たい。
6	学校と地域	持続可能な社会の担い手を育むためには、学校と地域の連携が必須であった	【武島】生活科や総合的な学習の時間の授業で地域をとりあげる学習はどこの学校もやっている。その内容をいかに整理して、ESD 教育とうまく関連付けながら実践することが大切。様々な人の協力があって可能となるので、こういった事業を継続するには、専門的な知識をお持ちの方のサポートがあるとよい。校区のみなさんや保護者に対してより広い視野から、地域の自然や地域の人材のことなどを発信できることから、学校経営にもプラスとなるだろう。 【坪坂】地域の人が学校を支えてくれる限り、里山（呉羽山）の学習は続いていく。 【田中】累積保存された授業案は、教科や行事、富山市ファミリーパークやきんたろう倶楽部の活動等と関連付けてあり、よく考えられている。 【松田】呉羽山は近くて遠い存在である。あってあたりまえ、その状況がどうなっているのかなど関心がない。教員も親もそういった感覚なので、子どもたちは里山、呉羽山に入ることは想像もしなかった。平成 25 年度以降も継続して実施している。担当教員によって、教員の興味関心で多少授業内容も変わってくる。これからも毎年、古沢小の 4 年生に作業を通してメッセージを伝えていきたい。呉羽山を通じて子どもと大人が学び合うことは大切だと思う。何年も続いて、美しい里山に近づいたら、その環境にあったことと過去の話ができるようになる。呉羽山の学習が、古沢小の 4 年生の伝統になっていくとよい。

【インデプススタディの検証】

富山市では、富山大学と教育委員会が一体となって ESD を進めており、学校における ESD 授業やカリキュラムづくりの支援を行っている。

古沢小学校の授業づくりおいては、形成推進委員会委員、富山県ワーキンググループメンバーである富山大学の松本謙一先生にアドバイザー、コーディネーターとして参画していただいた。松本先生の指導、アドバイスをもとに、映像を活用した授業づくりであったため、映像の持つ力をフルに活かし、かつ本物に触れる、実感がもてる体験活動や地域の人々へのインタビュー、子ども同士の話合いを重視した授業を実施した。映像を使うことによってコンパクトに情報提供を可能にし、話合いの時間を十分にとることができた。また、昔の里山や地域の映像、世界の里山の映像を授業に使うことで、子どもの視野を広げることができた。

教員自身も、実際の里山にでかけ、地図を広げ、材である「呉羽山」から子どもに何を学ばせるかを模索する日々が続いた。地域で活動をしている地元の人との出会いも授業づくりを豊かにした。

古沢小学校では、実証授業後も、本事業で作成した映像や授業カリキュラムを十分に活用した授業実践をしている。子どもたちも毎年の発表会で「呉羽山」の学習の報告を聞いているので、下級生は 4 年生になったら里山（呉羽山）の学習をすると認識している。教員も、「4 年生の里山で学習したことと結び付けて子どもたちの発言か

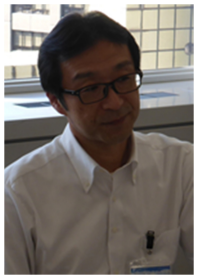
らでてくることは少ないが、学習したことは少なからずつながっていると思われる。里山（呉羽山）の学習は、古沢小学校の財産になっている。それを絶やすのはもったいないし、継続したい」と話している。子どもたちのアンケート結果からも、授業から 2 年経っても「呉羽山(里山)」に対する思いのある子どもが多いことが分かる。

校長は、「呉羽山、富山市ファミリーパーク、そしてきんたろう倶楽部等この地域の方々は大変協力的であるので、地域の人々が学校を支えてくれる限り、里山（呉羽山）の学習は続いていく」と話し、地域側も、「富山の小学生の多くがこの里山を使って学習してくれるとよい。子どもから親に、地域の人に伝わるように、継続して実施されるよう、きんたろう倶楽部も頑張りたい」と話している。学校は呉羽山（里山）を教材と、地域は公共の財産として捉え、学校と地域による共通の価値ある材を活用した学びのマッチングができている。

ESD を専門とする松本先生のアドバイスやワーキンググループでの意見交換を踏まえ、そもそも教員が「やってみたい」という材を使った、学校と地域のマッチングによる質の高い授業をつくることができた。そして、校長や教員が異動しても継続的に実施されていることを把握できた。古沢小学校の伝統的な ESD 学習として位置付いているようだ。

新海洋子　環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー/検証委員会委員

④教員、地域の人へのヒアリング



■武島　浩氏（平成 25 年度学校長）

本事業は古沢小学校がモデル事業的な形で実施し、学校としては非常に学ぶことが多かった。それは、「ESD 教育」について理解が深まったということはもちろんだが、子どもたちにとって、地域の理解が深まり地域を愛する心が育まれ、結果として、地域の人との結び付きが強くなったからである。子どもたちは、自然も人も含めて地域が身近に感じるようになった。地域への理解が深まり、きんたろう倶楽部の協力のおかげで、里山に強い関心を持つ子どもも出てきたと思う。授業　後の子どもの感想には、「将来、大人になったら自然を守りたい」という内容の感想まであった。

また、モデル事業的な実践であったが、いろいろな先生が授業を見てくれたことで、総合的な学習の時間の授業の進め方、ESD 教育についての理解も深まったのではないかと思われる。ESD 教育と大上段に掲げて授業をしたのではないが、授業を見て、その後の授業研修会の中で、他の教員も多くを学んだのではないかと思う。

今回、このモデル事業は進んでやらせてもらった。授業公開が負担になる場合もあるが、幸い古沢小学校は、地域の特性である里山が身近にあり、学習のテーマに合っていて上手く進めることができた。モデル事業の実施は、どこの学校でも可能だとも言えるが、テーマに合う環境などは必要であり、実施が難しい学校もあると思う。

生活科や総合的な学習の時間の授業で地域をとりあげる学習はどこの学校もやっている。その内容をいかに整理して、ESD 教育とうまく関連付けながら実践することが大切だと思う。そういう意味では出来ない学校はないかもしれない。富山大学の松本教授をはじめ、様々な人の協力があって可能となるので、こういった事業を継続するには、専門的な知識をお持ちの方のサポートがあるとよい。また、授業者は、休日に里山の様子を写真に撮るなど、勤務時間外も教材作りを行っている。そういうことを考えると、子どものたちのために楽しい授業をつくろうという教員の意欲も必要である。

一方、富山市教育委員会では、ユネスコスクールの登録を増やしていうという目標もある。ユネスコスクールに登録した学校については、ESD 教育についても積極的に推進していきたいと考えていると思う。ユネスコスクールになったことで、校区のみなさんや保護者に対してより広い視野から、地域の自然や地域の人材のことなどを発信できることから、学校経営にもプラスとなるだろう。

ところで、「富山の ESD シンポジウム」は、ESD 教育に取り組む子どもたちの交流が素晴らしい。昨年は、中央小の子どもたちのリハーサルを見たが、調べたことに自信をもち、自分の考えもはっきりしていた。子どもたちの中には、調べて考えることができても、表現することが苦手な子どももいる。このシンポジウムでの発表をきっかけに表現する力がついてきている。シンポジウムに出て表現すること、そのためにも子どもたちが主体の学習活動を展開しましょうということは継続していきたい。

本事業の富山市での実証の 3 事例は、よい事例である。事例を通して市全体の教員の指導力向上にもなると思う。これから続けていくためには、やはり、松本教授のようなキーマンが必要である。教育委員会からの依頼では、やらされるような感覚を学校が抱いてしまう場合がある。そうならないように、「ESD 教育をやりたいです」と言ってもらえるようにしていきたい。

最後に繰り返すようだが、ESD 教育は、今後ますます重要になっていくと思う。ESD 教育だけを取り出して行うのではなく、様々な教科の中に ESD の要素があり、それを意識しながら授業をするということも含めて大切だと思う。

それにしても、古沢小の授業の中で、「もっと学びたい」という子どもの表情が今も心に残っている。きんたろう倶楽部

と協力して雨の里山に入り、下草を刈るという体験が、とても楽しそうだった。あのような体験活動は、子どもたちの心の中に残る。人と出会って学んだことも多かったと思う。そういったことが、子どもたちにとって机上の知識では得られないプラスになったし、それらが生きて働く学力にもつながっていくのではないか。

■坪坂　亮氏(学校長)

昨年度、赴任してきた。子どもたちがやらされている感がないことが印象的である。主体的に取り組んでいる。この学習をしているおかげで地域を好きだ、という気持ちが強くなっていると思う。

富山県の ESD シンポジウムや、富山市ファミリーパークの「悠久の森」事業、校内の学習発表会等、調べ学習でしたことを発信、発表する場があるので、目的意識をもって追究している。こういうことをしよう、こういうことを調べようと課題が明確であるので、昨年の４年生は喜んで、毎週のように里山（呉羽山）へ行っていた。

一昨年度 4 年生は 14 名、昨年は 12 名、今年は 6 名と少人数である。学校では、小さな人間関係だが、いろいろな人と関われる機会に恵まれている。きんたろう倶楽部や富山市ファミリーパークの方々との関わりは、中学校に進学したときに急に大きな集団になっても、自分を発揮できることにつながるだろう。6 年生児童はとてもユニークな発想をもった子どもたちで、体を使うような活動が好きである。呉羽山、富山市ファミリーパーク、そしてきんたろう倶楽部等この地域の方々は大変協力的であるので、地域の人が学校を支えてくれる限り、里山（呉羽山）の学習は続いていくと思う。

■酒井祥子氏（平成 25 年度 4 年生担任）

地域の素敵なものや人を教材とする地域学習をずっとしてきた。今回は学校の身近にある里山「呉羽山」を教材とした。今まで、自分は里山を扱ったことはなかった。しかし、４年生の理科で動植物の四季の変化を学習するので、それとつなげて山を取り上げることはできないかと考えた。呉羽山の自然を題材とした学習を、どこかで実施してみたいと思っていた。

前年にも４年生を受け持っていた。そのとき、呉羽山へ行き、秋と冬に山の自然を観察に行った。雪の上にうさぎの足跡や糞があったり、土を掘るとカブトムシの幼虫がいたり、土を掘ると温かかったりして感動した。子どもたちはファミリーパークの方からいろいろ教えてもらうことで理解が深まり、山の魅力を感じていた。その時は自然観察だったが、山の自然はすごいなと思った。そんな時にこの話が来た。身近な呉羽山を教材として授業をしたいと思っていたときだったので、タイミングがよかった。

ファミリーパークと古沢小は結びつきがある。２年生の生活科でファミリーパークへ行ったりファミリーパークの方が動物を連れてきてくれて水生生物や蛇を見せてくださったりする授業もある。２年生は人とのふれあいをテーマとし、ファミリーパークの飼育員さんと一緒に作業をする学習をした。３年生で、「ワクワク田んぼ」という田んぼを使って、水生生物を観察したり、田んぼに入ったりする体験もした。そして、今回はファミリーパークやわくわく田んぼがある里山である「呉羽山」を扱った。最近、里山が荒れていること、きんたろう倶楽部が里山の環境を守っていると聞いてはいた。古沢小学校に長くいたので、きんたろう倶楽部のことは知っていた。その活動が面白そうだと思っていたが、具体的な活動の内容については知らなかった。最初のきんたろう倶楽部との打合せでは授業でどのような活動ができるのか分からなかったの

で、具体的に相談をした。

きんたろう倶楽部とできたことが一番良かった。子どもたちは、呉羽山の環境について考えている人がいることを知ったことが驚きだったようだ。また、きんたろう倶楽部の方から、優しく教えていただけたことで、人を通して山を好きになった子どももいた。体験はよい。竹切り体験も山で作業をしている人たちとのふれあいも良かった。子どもの目の輝きが違い、子どもたちは予想以上のものを見つけてくる。授業の前には、毎日見ているはずなのに、呉羽山について気にも留めなかった子どもたちが、山はいい、山が気になると言うようになった。自然が近くにあることが嬉しい、面白い、と子どもたちは反応し、とても楽しかったのを覚えている。

しかし、授業を支えてくれるキーマンがすぐに見つかるかと言えば、見つかるわけではない。きんたろう倶楽部とのような団体や人たちが、今回はたまたま近くにおられたが、どの学校でも近くにおられるわけではない。まず、そのような人たちとの出会いを見つけることが大変である。また、授業内容を理解していただくことも必要で打ち合わせがとても大切である。そういった人や団体に出会えるかどうかが重要となる。

ESD の授業と言われるが、ESD がどんなものか最初は分からなかったこともあり、今までの総合学習とあまり変わらない意識で授業を考えた。子どもが何か体験をしながら、考えて、自分の住む地域を見なおして、好きになって、これから守っていきたいとなればよい、そんな気持ちでつくった。

古沢小学校は、ユネスコスクールにその年に登録した。正直、それまで ESD についてあまり考えていなかったので、正直、とても迷った。ESD、ユネスコスクールという言葉から、大きな感じがした。こんな身近なテーマでもいいのかとずっと迷っていた。

これまでの総合学習は長い時間をかけて実施してきたが、今回は 10 時間程度という時間の制限もあったので、短くコンパクトにできるよう、毎時間きっちりとプログラムを組んで、実施した。

ワーキンググループはとても参考になった。みなさんが思い思いのことを言われるで、今までの気付かなかったような考え方や、専門家の話を聞けたことがとてもよかった。授業を考えるうえで参考になった。また、わからないことはわからないと伝えると、説明してくださった。案を持っていくと、いろいろな人が意見を言ってくださるので、参考にさせてもらった。1 人で考えていたことがすっきりする。その時はわからなくても後で考えてみたらわかることもある。あまり頻繁にあるとしんどいのでちょうどよかったと思う。最初は話されていることがわからないこともあったが、詳しく説明してくださったのでよかったし、やりたいことをやらせてもらった。また、学校全体で応援してくださったので授業をしやすかった。

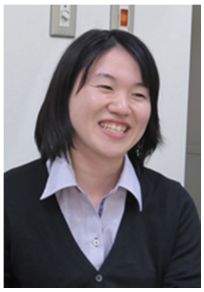
映像も、せっかくなら映像はこの授業だけでなくずっと使える、残せるものをつくりたい、と私も学校も思っていた。地域の人がご高齢なので映像にしておくことも大切だと考えた。授業が継続されて、学校の財産になるとよい。

新しい学校でも学校をテーマに総合的な学習を実施した。学校を通して地域の人の思いを考えたり、学校の歴史を見直したりした。今年は、校区の史跡巡りをして紹介できるものつくりたい。学校が異動になっても、前の資料や授業案が残っていればすぐできる。そういう意味では、学習したことを残していくことが大切である。過去の資料や情報を繋いでつくっていくことが大事である。

■澤橋　直文先生(6 年生担任)

今の６年生は、4 年生で呉羽山の学習をし、5 年生では防火・防災を学習して発信した。6 年生では学校の中心となり「学校のため、人のためになる活動をする」をテーマに学習活動を進めている。６年生は、集会活動や委員会活動の企画等、様々な場面でリーダーとして取り組んでいる。特に今年は、過ごしやすい学校にするために「相手を思いやる心を広めていこう」、「元気のよいあいさつを広めよう」などの活動を中心として行っている。

６年生の児童は、元気がよく活発である。物怖じすることなく、授業でも面白いことを言っている。だからといって、人を責めるようなケンカをすることもない。地域の方々に教えていただきながら稲刈りをしたときには、最初から最後まで一生懸命している。昨年、防災の学習で保育所に行って、創作劇をした。今年は、学習発表会の劇を創作した。物怖じせず、活動に対して積極的で、とても楽しんで行う。理科や社会科の学習で環境について学ぶことがある。４年生の里山で学習したことと結び付けて子どもたちの発言からでてくることは少ないが、学習したことは少なからずつながっていると思われる。里山（呉羽山）の学習は、古沢小学校の財産になっている。それを絶やすのはもったいないし、継続したい。



■田中　美里先生（4 年生担任）

古沢小学校に赴任したときに、４年生が総合的な学習の時間に里山（呉羽山）の学習を一年間かけて行ったことを聞いていた。

今年の４年生は、一昨年度作成し、昨年度手直しした総合的な学習の時間の指導案や年間計画を基にしながら、里山（呉羽山）の学習に取り組んでいる。とても分かりやすくつくられており、一年間このようにやっていけばよいという見通しをもつことができ、経験年数が浅い自分にとって、とても参考になった。昨年度の４年担任も、前年度の取組を基に学習しておられるのを見ていた。累積保存された授業案は、教科や行事、富山市ファミリーパークやきんたろう倶楽部の活動等と関連付けてあり、よく考えられている。里山（呉羽山）について、あまり知らなかったが、このプログラムが残っているから授業を進めやすい。

今年の里山の観察では、四季の移り変わりを感じられるように 5，7，9，11 月とファミリーパークに行くことを計画した。先ず自然に親しんでいる。子どもたちは、里山に行くと、知らないことが多く、川や池の色が少し違うだけでもその変化に気付いて、好奇心旺盛である。里山を案内してくれる担当の方にいろいろ質問をして活動を楽しんでいる。

子どもたちは今、呉羽山の栗などの食べ物に関することや、鳥の種類、動物の居場所等に関心をもっている。自分で調べることも大切な学習であるので、子どもたちが抱いた疑問は、自分で調べようと促している。

映像教材は、授業でも活用した。子どもたちは、映像の「古沢小学校のみなさん」というナレーションに、「なぜ僕たちのことを知っているの？」という声が上がった。そのようなことが嬉しかったと思う。知っている地域名等が出ると、「おお」という声があった。校区内にある呉羽山は大切なんだ、と思ったようである。

子どもたちは、里山（呉羽山）での学習について校内発表をした。下学年の子どもは、４年生になったら里山（呉羽山）の学習をするものだと思っている。３年生の国語科の教科書に、里山の教材文が載っている。今回の改訂で新しく入った教材文である。３年生、４年生と連続性のある学習を進めていきたいと思っている。

■NPO 法人きんたろう倶楽部　松田秀明　氏

きんたろう倶楽部は、呉羽山をなんとか再生したいと考え、活動をしている。地域の人にこの里山の価値を伝えたい、繁茂している竹林をなんとかきれいにして、もとの二次林に戻したい、地域の財産にしたいという気持ちで活動している。

これまでは、ファミリーパークの動物課の人と古沢小学校を訪ねて行って、こんなことしたいけれどどうだろうかとこちらから提案をしていた。古沢小の子どもたちがファミリーパークに来て、動物園にいる地元の里山の動物の展示を見たり、人の暮らしと動物の関係との話を聞いたりという学習をしていた。

しかし、今回は古沢小から、里山、呉羽山を中心に、里山と人の暮らしのつながりや、今と昔の違い、今抱えている課題、実際の木を切る体験等をしたいという話であった。学校の目の前にある里山、呉羽山でありながら、教員も子どもも、里山について、呉羽山についてほとんど何も知らないので、授業づくりを一緒にしてほしいという話をいただいた。

子どもや地域の多くの人にとって、呉羽山は近くて遠い存在である。あってあたりまえ、その状況がどうなっているのかなど関心がないと思う。教員も親もそういった感覚なので、子どもたちは里山、呉羽山に入るなんてことは想像もしなかったと思う。

小学４年生の授業の中に呉羽山での作業や映像による学習を組み入れてもらえてとてもよかった。子どもたちに呉羽山に入ってもらい一緒に作業をし、里山の状況や、私たちの思いを知ってもらうことができた。いつも見ていた山を整備している人がいることを知ってもらえた。

昨年度、今年度も継続して実施している。毎年同じプログラムだったとしても、小学 4 年生の子どもたちは変わっていくからよいと思う。また教員が変わることによって、教員の興味関心で多少授業内容も変わってくる。私たちは、毎年これからもずっと、古沢小の小学 4 年生に作業を通してメッセージを伝えていきたい。きんたろう倶楽部の会員も小学生に毎年伝えるとなると学ばないといけない。そうやって大人も学んでいく、呉羽山を通じて子どもと大人が学び合うことは大切だと思う。それこそ何年も続いて、美しい里山に近づいたら、その環境にあったことと過去の話ができるようになる。

呉羽山の学習が、古沢小の４年生の伝統になっていくとよい。子どもたちが親になったときに、自分の子どもも呉羽山にいく。映像はそういった内容だった。

毎年ファミリーパークで活動の発表会をしている。古沢小学校の発表があった。子どもたちが学習したことを伝えている。子どもたちが自分の言葉で大人に伝えている。古沢小で毎年行うこととなったら、経験した小学５、６年生が小学 4 年生に経験談を話すこともできる。そうやってつながっていくとよい。

富山の小学生の多くがこの里山を使って学習してくれるとよい。ファミリーパークには来るのだから、里山にも少し時間を延ばしてきてくれたらと思う。身近な竹林の荒れ方が全国的にひどいことを知って欲しい。遠い場所の里山が荒れているのではなく、自分の町の山である。子どもから親に、地域の人に伝わるように、継続して実施されるよう、きんたろう倶楽部も頑張りたい。

（10）インデプススタディ 4．東浦町立緒川小学校（平成 25 年度 ESD 人材育成事業実証校/愛知県）

①東浦町緒川小学校の ESD 取組

緒川小学校では、1 年生から 6 年生までの見通しを持った育ちのために一体感と持続性を持たせた ESD を行っている。全教員間で ESD を通して育てたい力や学習活動を共通理解して取り組んでいる。子ども達のポートフォリオや前年度の活動などを引き継ぎ、受け継ぎながらその年の児童を見て学習内容を改善し、学びを深めていく。子ども達に一貫した学びを展開している。教員も学びながら、新しい知識や情報を得ながら、ブラッシュアップしている。

【緒川小学校 ESD モデル】

緒川小学校の ESD ポテンシャル

- ●そもそも緒川小学校が実践していた**教育課程に合致する**ものであった。
- ●1 年生から 6 年生の**生活科と総合的な学習の時間を一体化した独自の教育課程**をもっていた。
- ●総合的な学習の時間数が減った際に、**「より研ぎ澄まされた総合学習にしよう」**と考えていた。

緒川小学校の ESD 取組キーワード

- **●足元からの ESD（今あるものから ESD）**
- ・総合的な学習をはじめとする今ある教育課程を活用
- ・地域の教育資源を活用
- **●ねらいを定めて ESD**
- ・未来を切り開く人を育てる
- ・身に付ける 3 つの力を設定し教育活動を進める。

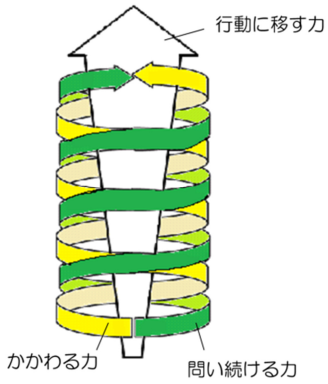
ESD が総合的な学習を見直す**「渡りに舟」**となる。

学校全体で「子どもに育みたい力」を 3 つの設定

- ●ESD カレンダーをつくり、総合学習と教科学習と道徳、特別活動に関連を持たせる。ホールスクール的に ESD を推進する。
- ●もともと地域の人材、地域で教育的な価値あるものを取り入れて取り組んでいたが、マンネリ化する傾向にあったため、ESD の視点と手法で見直し、子ども達が学びたい内容にマッチングした。
- ●担任だけが考えるのではなく、学年体制で、「チーム学年」で動く。
- ●ポートフォリオを使っての検証に取り組んでいる。

育みたい 3 つの力

- ●かかわる力
  - ・情報を収集・共有する力
  - ・他者と協力する力
  - ・つながりを尊重する態度
- ●問い続ける力
  - ・多面的、総合的に考える力
  - ・批判的に考える力
  - ・未来像を予測する力
- ●行動に移す力
  - ・計画を立てる力
  - ・提案、参加する力



■ 3 つの力がスパイラルに伸びて行動に移す力を身に付ける子どもを育てる。
■ 子ども達の育ちの区切りを、低・中・高学年別に発達段階を設定したカリキュラムをつくる。
■ 育てたい力を共有しながら学年ごとにテーマをもって扱う内容、カテゴリーを決めて授業を実施。

■緒川小学校各学年の学習テーマ

学年	テーマ
1 年生	くにの一年
2 年生	探検
3 年生	交流
4 年生	くらし
5 年生	いのち
6 年生	生き方

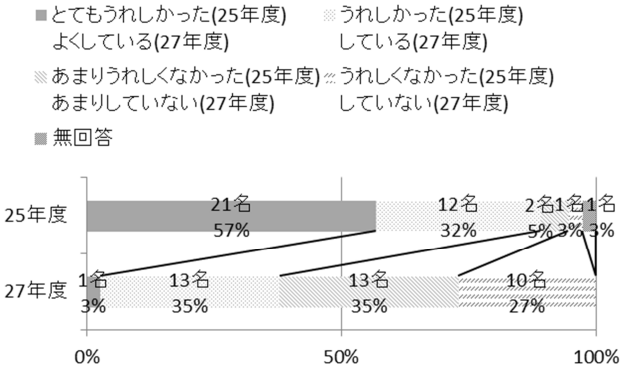
②子どものアンケート

対象：平成 25 年度小学 4 年生（39 名）　平成 27 年度小学 6 年生（37 名）

平成 25 年度、27 年度の回答者数が異なるが、25 年度、27 年度の両方に回答した 37 名を対象とした。

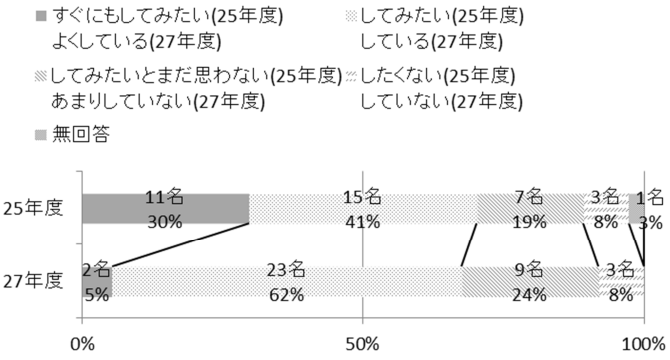
[質問 1](平成 25 年度)周りの人にエコを伝えて嬉しかったですか。

(平成 27 年度)周りの人にエコを伝えていますか。



【質問 2】(平成 25 年度)「わたしのエコ宣言」を実行してみたくなりましたか。

(平成 27 年度)学校や家庭、地域でエコ活動をしていますか。



[アンケートより]

平成 25 度 4 年生と平成 27 年度 6 年生にアンケートを実施した。授業実施より 2 年経ち、「周りの人にエコを伝えてうれしかったですか。（平成 27 年度）エコを伝えていますか」という問いに対して、平成 25 年度の 89%が肯定的な回答をしているのに対し、38%に減っている。6 年生になって学習題材が変わったことにより「伝える」頻度が落ちていることが要因ではないかと推測する。一方で、「わたしのエコ宣言を実行して見たくなりましたか。（平成 27 年度）学校や家庭、地域でエコ活動をしていますか」という問いに対しては、肯定的な回答が 71%から 67%と大きな差はなく、「人に伝える」ことよりも「自分の行動」に対してのエコ活動への意識が継続性されていることを把握した。

■岩本先生（平成 27 年度 6 年生担任）のインタビューより

他人事でなく自分事と言うのは、この 1 年間ずっと今でもキーワードとして持って、ESD で今までしてきたことをもう一度再確認できたことである。今後も「自分事にしていく」ことに取り組みたい。身近で具体的な活動を 1,2,3 学期に取り組んでいるが、自分の問題として捉えることができつつある。これはまさに ESD の考え方に沿ってくると思う。ただ課題は継続性である。

③6 つの仮説による検証※敬称略

指標	対象	項目	内 容
1	子ども	子どもに「育みたい力」を明確にし、「育みたい力」が育まれた	【伴】ESD に取り組んで何が一番変わったかといえば行動力である。授業によって子どもが実際に、「エコ調べ」など動くという行動力が太くなっていったという実感がある。 【竹内】本校の実践は ESD で育てたい「関わる力」「問い続ける力」「行動に移す力」の 3 つの力を柱として行っている。低・中・高学年それぞれの目標がある。互いの立場や考えを尊重しながら正確に理解したり適切に表現したりしながら関わる力であると考える。みんなで話し合い、意見を出し合うことで多様な気付きが生まれ、子どもたちの問題解決力や課題解決力が育っていく。主体的に関わることのできる子どもを育てたい。 【岩本】実態に合わせて今年は「自分事」とか「具体的に」といったキーワードを入れて活動してきたが、1 学期を通して子どもによい変化があった。
2	子ども	子どもたちの当事者意識、自己肯定感の育みにつながった	【竹内】教え込むのではなく、子どもに考えさせ、関わらせながら多様な意見を引き出し、子どもが主体となる授業をすることが大切である。 【原「どっちがエコかな？映像クイズ」を実施した際、教員が驚くほど、子どもの意見が出され、子どもの思考を揺さぶる発問の重要さを再認識した。 【岩本】課題を「自分事にしていく」ことは、この 1 年間ずっと今でもキーワードとして持って、身近で具体的な活動に取り組んでいるが、自分の問題として捉えることができつつある。
3	子ども	子どもたちの地域への関心、課題解決のための行動（力）が育まれた	【伴】認知面が深まったということだけでなく、行動面で子どもたちに変容があった。 【原】仕組んで、仕掛けをすれば、子どもものってきて、そうするとこちらが思っていた以上のいろいろなアイディアを出してくれたり、行動もしてくれたりした。教員の授業づくりと子どもの学習意欲がうまく回っていく。 【竹内】子どもたちが教室や体験活動で学んだことが、すぐに大きな実践力につながるとは限らない。しかし、学ぶことで子どもたちの思考は深まり、知識が増えていく。そして、何かのきっかけで学んだことは必ず生きる。体験したからこそ、その本質やよさを知り、それを自分の将来の職業につなげようとする子どももいる。
4	教員	教員の授業力が高められ、教員の SD への関心が強くなった	【伴】ESD カレンダーをつくって、教科のねらいと合わせて合同で単元をつくることは、極めて有効であると考える。合わせたり関連付けたりすることで、教科のねらいがより鮮明にできるといった効果が期待できる。このように ESD カレンダーの作成をとおして ESD の視点をもって教科学習を洗い出した。 【原】仕組んで、仕掛けをすれば、子どもものってきて、そうするとこちらが思っていた以上のいろいろなアイディアを出してくれたり、行動もしてくれたりした。そうなると、教員はどんどん仕掛けるようになり、子どもがさらにのっかり、教員

			の授業づくりと子どもの学習意欲がうまく回っていく。学校としてどういったねらいを目指すかをはっきり具体的にもっていないと結局ぼやけていて、「何かやったな」「体験させたな」で終わってしまう。ESD について教員が研修し、1年間を見通して学習計画を立てることが重要。 【竹内】研究授業後に研究協議会を開き、抽出した内容ごとに３つのグループに分かれ、少人数によるワークショップ形式で協議を進めている。ベテラン教員は経験に基づく意見を、若い教員は新鮮な発想を出し合い、それぞれの意見を受け入れ合って互いを高めようとする雰囲気がある。グループ協議後、グループ代表の教員が協議した内容を報告し、全体で共有する。そこで出された課題を更に全体で協議している。教員も協議し合うことでいろいろな気付きを発見でき、授業改善につながっている。授業が上手になりたいという気持ちはどの教員も同じである。本校の研究をどの教員も共通理解して実践を継続することが大切である。異動があっても本校の研究を引き継ぎ、子どもの実態に合わせて進化させていくことは課題の一つである。
5	教員	地域の人々とESD 授業をつくることで、教員の授業力が高まった	【伴】コメンテーター的にゲストティーチャーを活用する授業は今まで発想がなかった。ゲストティーチャーは、ティーチャーだけの活用ではない、と知った。目新しい授業のプランになった。
6	学校と地域	持続可能な社会の担い手を育むためには、学校と地域の連携が必須であった	【伴】緒川小では元々、地域の人材、地域で教育的な価値があるものを取り入れて取り組んできた。しかし、それらを活用した学習がマンネリ化する傾向にあり、学習にかかわる地域の人材や、地域に出ていく校外学習にしても同じように考えがちであった。そこで、ESD の視点をもってもう一度見直そうと、子どもたちの学びたいことややりたいことができる場所や人をマッチングできているのかをチェックした。さらには、地域の人材の掘り起こしをして人材も選択できるようにした。元々のあった取り組みに ESD を取り入れたことで、広がりがプラスされたということは実感としてある。例えば、多様な人を授業にお招きすることができ、そこには子どもたちの要求にあった一人一人の学びがあった。

【インデプススタディの検証】

■多様な状況を踏まえたアプローチを模索する

緒川小学校は個性化教育を実施し、またオープンスクールでもあり、地域に開かれた学校である。また、1 年生から 6 年生まで一体化した独自の教育課程をもっており、学年を通しての共通目標が、緒川小学校全体で設定した「子どもに育みたい力 ①関わる力 ②問い続ける力 ③行動に移す力」を育むである。学校として学びのスキーム(全校での ESD カレンダーとポートフォリオ評価の積み重ね)ができあがっていた。

さらに本事業で ESD 授業づくりを行うことで、これまでの総合的な学習の改善を行うことができた、という。教員の気づきは、「仕掛けと揺さぶり」と「地域教材の活用」である。いかに仕掛けるかによって、子どもの学習意欲や関心が高まり、教員はさらに授業づくりに力が入る。そのスパイラルによる学びの効果を教員は実感した。また、地域のゲストティーチャーにコメンテーターとして授業に参加いただき、児童の活動や学習内容に対してアドバイスをするという役割があることに気づかれた。

現在の 4 年生においても本事業で実施した「環境」の学習を継続している。6 年生の学習課題は「国際理解」であるが、「自分ごとにする」をキーワードに、学びがつながる授業を展開している。アンケートからも見られるように、自分のこととして学習課題を捉える意識は育まれている。このようなスキームをもつ緒川小だが、教員が持つ課題は「継続性」であった。継続性のある授業内容にしていくか、教員が変わっても継続性を担保するか、である。

実証時の学校長と担任は異動した。異動先の学校で、ESD 授業づくりについては、ESD 授業づくりの素材はいくつもあることを把握している。校長先生においては、学校や地域、子どもの特色や特性を踏まえてどう実施するかを検討している、という。また教員は、どう切り込むかを検討している、という。

緒川小学校のような、長い間培われた、ESD の概念や手法に近い目標を持った独自の教育課程を持つ学校でも、課題はあるという。新たな異動先で、どう ESD 授業づくりをするか、どういう体制をつくっていくか、考えている校長や教員がいる。学校の状況や特性、子どもや教員の状況を踏まえて、どう ESD に取り組むか、それぞれの状況にあう方策を見いだすことの必要性に気づかされた。

大鹿聖公氏 愛知教育大学教授/検証委員会委員

新海洋子氏 環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー/検証委員会委員

④教員へのヒアリング

■伴 浩人先生（平成 25 年度学校長）

愛知県の総合教育センターから最初に ESD というものがあると聞いた。聞いた第一印象は、ESD は緒川小学校の教育課程に合致するものだと思った。緒川小の何が ESD に合っているかというと、総合的な学習の時間（以下、総合学習）であった。緒川小では 1、2 年生の生活科と 3 年生以上の総合学習の壁をなくして、一体化して取り組むという独自の教育課程をつくっていた。学校独自の総合学習は、学習指導要領から逸脱するものでなく、1 年生から 6 年生までの見通しをもった育ちのためには一体性と継続性をもたせることが大切だと考え、行っていた。しかし、ESD に総合学習の内容が合っていると思っても、「ESD って何？」というところから始まった。

愛知県総合教育センターからの話を受けたとき、教頭であった私は前任の校長に、ESD を取り入れるか否かの意見を求められた。今、新しいものを持ってくると先生たちの多忙化がさらに進む。難しいかもしれない、と言った。そのときは、そのようなスタンスだった。

緒川小での総合学習には、「自然との関わり」、「人との関わり」などという柱があった。まずはそのような領域から始めればやっていけるかもしれないと思っていた中で、ちょうど学習指導要領が改定され、総合学習の時間数が 105 時間から 70 時間に精査された。内容についても、精選をして後退させるのではなく、より研ぎ澄まされた総合学習をつくらないといけないと考えていた。だから ESD の視点をもって、総合学習を見直すことは緒川小にとって渡りに舟となった。ESD という視点で見直したら良いものがつくれるのではないかと職員にも呼びかけ、まずは総合学習の組み立て直しから始めた。取り組むなかで、国立教育政策研究所が設定した ESD の視点に立った学習指導で重視する 7 つの能力・態度は、あまりに多岐にわたる資質、能力、あるいはこのような力を付けたいというものが広すぎ、育てたい子どもの像が絞りにくいと思った。最初はチェックリストのように、この学習は、この単元はこの力に当てはまるとしていたが、研究主任と管理職、職員と話して、「問い続ける力」、「関わる力」、「行動に移す力」の 3 つの力に絞ることとした。また、この 3 つの力に関係性ももたせた。「関わる力」、「問い続ける力」をスパイラル的に伸ばしていくと、「行動に移す力」はどんどん太くなっていくというイメージで、最終的に、「行動に移す力」を身に付けた子どもを育てたいと整理した。すると、先生たちと学校全体でイメージが共有できた。育てたい力を定めたら、総合学習に加え、教科学習にも広げて ESD を進めたので、教育課程をさらに整理することで特別活動に「行動に移す力」を落としこむことができると考え、取り組んできた。そして、子どもの育ちの区切りとして、低・中・高学年別に到達段階を設定しながら、検証にも取り組んできた。

このように、育てたい力を共有しながら、学年ごとにテーマをもって扱う内容、カテゴリーを決め行った。とりわけ学年間の積み上げを意識はしていなかったが、4 年生で取り組んだ環境が、5 年生の田んぼに影響することはあったように思う。テーマについては、毎年確認し他学年と重複だけはしないようにした。

また、ESD カレンダーを作り、総合学習と教科学習と道徳、特別活動に関連性をもたせた。この段階では、総合学習だけが ESD とは思っておらず、ホールスクール的に ESD を推進していくべきであると考えていた。例えば、平成 25 年度実証の原先生の授業だと、学校行事である学校祭で情報発信をすることがセットになっており、単元の中に特別活動を組み込んでいた。

一方、緒川小では元々、地域の人材、地域で教育的な価値があるものを取り入れて取り組んできた。しかし、それらを活用した学習がマンネリ化する傾向にあり、学習にかかわる地域の人材や、地域に出ていく校外学習にして

も同じように考えがちであった。そこで、ESD の視点をもってもう一度見直そうと、子どもたちの学びたいことややりたいことができる場所や人をマッチングできているのかをチェックした。さらには、地域の人材の掘り起こしをして人材も選択できるようにした。元々のあった取り組みに ESD を取り入れたことで、広がりがプラスされたということは実感としてある。例えば、多様な人を授業にお招きすることができ、そこには子どもたちの要求にあった一人一人の学びがあった。ESD の視点で教育課程を見直さずに、今までのような緒川小の教育をしていたら、広がりや選択肢の幅は増えていかなかった、と確実に思う。

小学校は、担任による１国１城主のような学級主体の教育が多い。しかし、ESD を推進するためには、中学校的な発想の学年体制で、チーム学年で動いたほうがよい。学年体制の中で、積み上げが得意な先生と、０から１を生み出す発想が豊かな先生が共同でプランニングをしていくことがベターだと思う。

逆に中学校の多くは、どこも学年体制で教育を行っているが、授業は教科担任制である。比較的に学年体制で動くことが可能な総合的な学習の時間を基本に ESD を推進した方がよいと思っている。そこをベースとしながら、できる範囲で教科学習に ESD を広げていくのがよいのではないか。ホールスクールの考え方はとても大事だが、中学校では難しさがあると思う。ただし、総合的な学習の時間で修学旅行の班決めや職場体験学習のお礼の手紙ばかりに時間を使っているようでは、ESD はおろか総合的な学習の時間が本当に機能しているのか心配だと言わざるを得ない。

緒川小は職員の平均年齢がとても若い。小学校の職員の平均年齢は40歳半ばで、高齢化している場合が多く、中学校に若手の先生が多いという年齢構成が全国的にあると思う。しかし、緒川小は平均年齢が 37 歳程度で、平均よりとても若い。新任から４年目で学年主任をするような場合もあり、職員の発想が柔軟であった。つまり、少ない経験が良い意味で教育活動の選択肢や可能性を広げていくという雰囲気が職員全体にあった。教員の若さも ESD を推進していくエンジンだった。職員集団が若くアグレッシブで、校長として見ていて嬉しかったし楽しくもあった。安全管理のことについては気にしながら配慮したこともあるが、だめ、こうしなさい、とか、そうじゃなくてこうだ、とは教員にあまり言った記憶はない。

ESDの実践の中で強く記憶に残っているのは、５年生の米作りである。それまでは地域の人に来てもらって、おんぶに抱っこといった形で米作りのほとんどをお世話になっていた。当時研究主任であった原先生は、バケツ稲の発想を得て、前年までの米作りを子どもたちが自分事として取り組むようにつくりかえ、実践してみて初めてESDの手ごたえを実感し、今までのマンネリ化した総合学習や教科学習を変えていけるのではないかという意識をもったのではないか。

もう一つ、6 年生のアートマイルの実践は衝撃的だった。韓国との間で竹島の問題が顕著に表面化していたとき、アートマイルプロジェクトの事務局が相手校だと紹介したのが韓国のムンベク小学校であった。「先生、韓国です。私、心配です」と当時の担任が言ってきて、「何かを言ってくる保護者もいるかもしれないが辞める理由にはならない。このような状況だからこそ、やろう」と言った。担任の先生も同意し、竹島の問題があるこのときだからあえてやる意義を深く意識しながら韓国とのアートマイルプロジェクトを始めた。また、実践の内容とは少しずれるが、緒川小の子どもたちは韓国の子どもが英語でスラスラ書いてくることに驚き、衝撃を受けていた。しかも、韓国の子どもたちは手紙の交流のときに日本語でも書いてきたことがあり、それを契機に手紙をもらった緒川小の 6 年生が必死にグーグル翻訳やヤフー翻訳で英語を調べるなどをし始めた。それまで英語に全く興味がなかった、あるいは外国の同い年の子どもたちのそのような現状の認識のなかった子どもたちが、「韓国の他の学校はどうなのか」「中国もすごいらしい」「韓国だけでなくて、中国の子どももすごい」と、認識が変わっていった。アートマイル本来の絵を完成させる共同作業に加え、そういったことも目の当たりにしながら、6 年生の子ども一人一人が変わっていくと実感を得ながら取り組んだ。

本事業は実施してよかった。ESD に取り組んで何が一番変わったかといえば行動力である。授業によって子どもが実際に、「エコ調べ」など動くという行動力が太くなっていったという実感がある。認知面が深まったということだけでなく、行動面で子どもたちに変容があった。それと、子どもの活動に対してコメンテーター的にゲストティーチャーを活用する授業は今まで発想がなかった。ゲストティーチャーは授業で専門的な話をする講師であった。新しいパターンとして、このような活用の仕方があるという発見があった。ゲストティーチャーは、ティーチャーだけの活用ではない、と知った。目新しい授業のプランになった。

教科学習には各教科の目標があり、その目標を達成することが一番大切である。他のものと組み合わせて、教科の目標が薄まるようならば本来の教科のもつ体系的な学び、系統性を踏まえた学びに落ちが出てくる心配がある。そこだけは、現場の教員は気をつけなければならないと思う。反面、教科学習の目標達成を固く考えすぎると ESD が入り込む余地がないので、ESD カレンダーをつくって、教科のねらいと合わせて合同で単元をつくることは、極めて有効であると考える。合わせたり関連付けたりすることで、教科のねらいがより鮮明にできるといった効果が期待できる。このように ESD カレンダーの作成をとおして ESD の視点をもって教科学習を洗い出すことをしたが、教科学習だけで ESD を推進しようとすれば極めて苦しいだろう。

新しく赴任した富木島小学校には、東北の釜石地方の伝統のお祭りで、虎舞という踊りを学ぶ学習がある。なぜ釜石かというと、市内に(株)新日鉄住金の工場が建設されたことで、釜石から多くの人が東海市とりわけ本校校区にやってきたと聞いている。この地域の人に故郷を尋ねると、愛知県東海市、大府市、知多市と答えるのではなく、多くの人は東北地方を答えられる。だから本校の子どものおじいさん、おばあさんは東北出身の方がとても多い。このような背景があり、本校では、総合的な学習の時間を「ふるさと学習」という名前をつけて、高学年が虎舞を教えてもらっている。子ども芸能祭という市の発表会や校区の公民館祭りでその成果を披露する。「ふるさと学習」を総合的な学習の時間で実施しているところに、ESD 的な地盤があると考えている。

しかし、緒川小での経験を現在の学校経営に直接的に反映させることはしていない。学校や地域、子どもの特色や特性を踏まえる必要がある。今はそれを見極めている状況だ。ただ、下地として何かできることはあるか、あるいはこの学校の ESD 的な要素を探したときに、「ふるさと学習」というものが要素として一つあることは事実だ。もう一つは、学校全体で取り組んでいるユニバーサルデザインの学習も要素として考えられるかもしれない。ユニバーサルデザインは、障がいのある子、ない子のどちらにもわかりやすい、より理解しやすい、入っていきやすい方法で教える考え方である。それは子どもの学ばせ方ではなく、教師側のスタイルの問題である。ユニバーサルデザインで、みんなが学びやすくなるものを提供することが、ESD の学ばせ方と少し重なるかもしれない。実際に何をもってくるかは次年度以降だと考えている。職員集団も学年で動く体制の下地がある。やっていける体制のベーシックな部分はある。

■竹内正樹先生（学校長）

●本校の実践は ESD で育てたい「関わる力」「問い続ける力」「行動に移す力」の３つの力を柱として行っている。低・中・高学年それぞれの目標がある。総合的な学習の時間は、1年生は四季の行事を踏まえた身近なことを学習する。２年生は活動範囲を広げて地域、自然や人々に触れる活動をする。３年生は老人会の方に昔の遊びを教えてもらうなど、地域の方をゲストティーチャーに招いて、交流を通して学ぶ活動をする。４年生は身の回りの社会生活などの暮らしに関わる活動をすることと、自分自身の 10 年間の成長をふりかえる 1/2 成人式や福祉をテーマにした授業を実施している。５年生は動植物、人間の生命に関わる活動をし、地域の方の協力を得て、稲作りの活動をしている。６年生は国際理解で、ニュージーランドとアートマイル・プロジェクトで交流している。

●本校は授業研究を全学年で実施している。どの教科も、指導案のねらいの中に ESD で育てたい「関わる力」「問い続ける力」「行動する力」を位置付けている。研究授業後に研究協議会を開き、抽出児ごとに３つのグループに分かれ、少人数によるワークショップ形式で協議を進めている。よかった点、改善点やその手だて、ねらいへの到達度などを協議している。ベテラン教員は経験に基づく意見を、若い教員は新鮮な発想を出し合い、それぞれの意見を受け入れ合って互いを高めようとする雰囲気がある。グループ協議後、グループ代表の教員が協議した内容を報告し、全体で共有する。そこで出された課題を更に全体で協議している。教員も協議し合うことでいろいろな気付きを発見でき、授業改善につながっている。授業が上手になりたいという気持ちはどの教員も同じである。本校の研究をどの教員も共通理解して実践を継続することが大切である。しかし、毎年異動がある。異動があっても本校の研究を引き継ぎ、子どもの実態に合わせて進化させていくことは課題の一つである。

●カリキュラムや評価規準は子どもの実態を踏まえて作成し、活動内容やアプローチを変えている。今年度も修正した箇所に関しては指導計画や評価計画も変えている。通知表の評価の観点は、認知・認識、思考・判断、実践的態度である。

●ESD はどの学校でも実践している。身近なことをいかに自分事として捉え、未来にどうつなげていくのか、自分にどう生かしていくのかという視点をもつことで ESD になっていく。どう意味づけをし、どう取り組むかという姿勢が大事である。前任の小学校も ESD に取り組んでいる。ゴールまでの道筋は異なっても、目指しているところは同じである。

●ESD については、常に育てたい３つの力を意識し、総合的な学習の時間だけでなく教科と連動しながら、探究力や問題解決力の育成を図っている。教員は教える者であるという意識から、説明し過ぎ、教え過ぎてしまうことがある。発問も一問多答ではなく、一問一答になってしまうこともある。教え込むのではなく、子どもに考えさせ、関わらせながら多様な意見を引き出し、子どもが主体となる授業をすることが大切である。

●ESD カレンダーは基本的に学年の教員が作成している。評価は、ポートフォリオや振り返りなどである。６年生は振り返りを重ね、ポートフォリオ評価のような形で経過を見るものと、子どもに今までの経緯を振り返らせ、総合的に評価するものもある。作品を完成させるにあたり、その過程を観察して評価することもある。

●子どもたちが教室や体験活動で学んだことが、すぐに大きな実践力につながるとは限らない。しかし、学ぶことで子どもたちの思考は深まり、知識が増えていく。そして、何かのきっかけで学んだことは必ず生きる。体験したからこそ、その本質やよさを知り、それを自分の将来の職業につなげようとする子どももいる。

●生涯において、人は人と関わって生きていく。「関わる力」を伸ばしていくために、コミュニケーション能力を育成する必要がある。コミュニケーション能力は、ただ聞く、ただ話すではなく、互いの立場や考えを尊重しながら正確に理解したり適切に表現したりしながら関わる力であると考える。みんなで話し合い、意見を出し合うことで多様な気付きが生

まれ、子どもたちの問題解決力や課題解決力が育っていく。主体的に関わることのできる子どもを育てたい。

● 3 学期始業式では、自分の周りの人を笑顔にしよう、自分から進んで行動しよう、目標に対してちょっと苦しいと思えるくらい頑張ろうという話をした。社会に出れば、これまでに経験したことがない試練や困難に出合うことがある。それを乗り越えていくたくましい子どもを育てていきたい。学校は子どもたちを幸せにするためにあると思っている。子どもたちには個性があり、幸せの価値観も異なる。子どもたちの将来の姿を思い浮かべ、全ての子どもたちを幸せにできる学校でありたい。

■原　伊津子先生（平成 25 年度 4 年生担任）

県の総合教育センターの研究に参加して、ESD を勉強し始めて意義も理解でき、子どもたちに必要なことも分かり、いろいろな授業を仕組んでみると面白くなってきた。いろいろな可能性があるし、機会があったらいろいろやってみたいと常々思っている。

教育センターの研究に参加した時は担任をもっていなかった。教育センターでの研究が終わって担任をもった。それが緒川小の最後の年だった。勉強してきたから実践して自分で授業したいという気持ちがあり、その 1 年可能な限りやりたいという気持ちがあった。

そこに本事業の依頼がきた。こちらから仕組んで、仕掛けをすれば、子どものってきて、そうするとこちらが思っていた以上のいろいろなアイディアを出してくれたり、行動もしてくれたりした。そうなると、教員はどんどん仕掛けるようになり、子どもがさらにのっかり、教員の授業づくりと子どもの学習意欲がうまく回っていく。映像を活用した授業で、「どっちがエコかな？映像クイズ」を実施した際、教員が驚くほど、子どもの意見が出され、子どもの思考を揺さぶる発問の重要さを再認識した。

ESD は、自分の感覚で言うと、突き詰めていくと人類が考えていくべきものだと思う。小学校は本当の入り口であり、どこまで絞り込むのか、どこを重点的にやるのかを設定しないといけない。ESD の考え方でいけば開発という意味もあるが、小学校低学年に開発を理解させるのは難しい。気付かせるくらいしかできない。学校としてどういったねらいを目指すかをはっきり具体的にもっていないと結局ぼやけていて、「何かやったな」「体験させたな」で終わってしまう。

緒川小は自主性を育むといった子ども主体を大事にしていて、その上に ESD を重ねていた。授業も子どもの思いで変わっていくし、一人の子どもの想いを実現させようというスタンスがあった。

ESD 実践のためには、日々の忙しさが多少でも緩和されることも重要である。クラスの定員が少なくなるといいと思う。3 年生以上は定員が 40 名だが、35 名を超えると学級経営が苦しいと感じることが多い。一人ひとりの思いを大事にしたいが、一人ひとりの書いたワークシートを 35 枚読んで、それにコメントを書くことに多くの時間を必要とする。全学年 30 人学級になるとよいと思う。教員が子どもに対してゆったり接することができるし、一人ひとりの意見を聞くことができる。一人一人に声をかけることもできる。

現在、5 年生の担任であり、総合学習で野鳥観察とある企業の環境学習プログラム「森の仕組みを知ろう」を実施している。今日は町内の公園へ絶滅危惧種の日本原産オニバスを見学に行ってきた。オニバス観察会は、公園が各学校に案内を送ってくれて申し込んで出かけた。子どもたちは大きなオニバスに圧倒された。画用紙にスケッチしたが、一生懸命描いていた。絶滅危惧種であることを聞き、どうして危ないのかとか、ため池が少ないとか、ヘドロの状況についてなど話を聞いてきた。学校周辺の ESD の素材としては野鳥や竹林がある。素材はあるが体験で終わってしまいがちである。野鳥観察は、野鳥に詳しい方を招き、子どもたちは双眼鏡を持ち学校の周辺を歩いて鳥を見つけ、見つけ

た鳥の名前を教えてもらっている。それを 1 学期に 2 回行って、2 学期はそこから踏み込んで授業を実施していくことにしている。1 種類の鳥を徹底的に調べるとか、鳴き声で鳥が分かるようにするとか、巣箱を作って設置するなどの活動を考えている。

今の学校は野生生物保護モデル校になっているので、「野生生物保護実践発表会」が夏休みにあり、参加した。学習のための素材はあるが、どう切り込むかを練ることができないでいる。

ESD は新しいことをやるのではないとはいうものの、やはり授業をどうしようと考えることはひと手間もふた手間もかかる。日常的に余裕があればそういったことに踏み込めるが、日々授業をしていくことで精一杯の状況がある。ESD について教員が研修し、1 年間を見通して学習計画を立てることが重要だと思う。

岩本和也先生(平成 27 年度 6 年生担任)

1 学期の国際理解に関する実践で論文を書いた。昨年の 6 年生と今年の 6 年生は子どもの質も違うため、実態に合わせて今年は「自分事」とか「具体的に」といったキーワードを入れて活動してきたが、1 学期を通して子どもによい変化があった。ただ、継続していくことがなかなか難しい。子どもたちの実態もあるが、忘れてしまうこともある。1 学期にできるようになったことが 2 学期には忘れてしまうこともある。2 学期は修学旅行もあり自国文化とのつながりを考える機会を持ったが、あまり継続していない。全体的にはよくなっていったとしても、いろいろな子どもがいる。

以前の研究主任の先生が ESD の研究を始める時に、特別なことをするとなると負担になるが、今まで積み重ねてきたこと、総合学習でしてきた実践を見直すことだと教えていただき、そこからスタートした。他人事でなく自分事と言うのは、この 1 年間ずっと今でもキーワードとして持ってきた。

今後も課題を「自分事にしていく」ことに取り組みたい。身近で具体的な活動を 1,2,3 学期に取り組んでいるが、自分の問題として捉えることができつつあるものだから、これはまさに ESD の考え方に沿ってくると思う。ただ課題は継続性である。ここが非常に難しい。教科書で教えるべき内容もある。1,2,3 学期で総合学習のテーマも変わってくるので、継続することが非常に難しい。

(11)映像教材の効果と汎用性について

平成 25 年度、平成 26 年度においては本事業の実証事業では映像教材を活用した授業プログラムづくりを実施した。今年度は作成した映像教材の効果と汎用性を検討し、作成した映像教材を活用するための汎用化の作業を行った。映像教材の有効性が確認され、児童・生徒の学習の牽引及び刺激となり、また地域の ESD 推進ネットワークの基盤形成においても、映像教材が人と人をつなぐ「ツール」となったことが把握できた。

※作成した映像教材については 174～175 ページ参照

①ESD 授業における映像教材に効果について

平成 25 年度、26 年度本事業を実施した際に、教員及びワーキングループメンバーを対象にアンケートを行い、アンケート項目に「映像教材の活用」に関しての内容を含ませた。さらに、今回、本事業 3 年間の検証を行うために、教員及び地域の人々にヒアリングを行った際に、映像教材を活用した ESD 授業づくりについての評価を得た。

【平成 25 年度実証事業】

■富山県　富山市立古沢小学校

【授業名】ぼくらの里山「呉羽山」

〈映像教材を活用した ESD 授業に対する評価〉

里山がどんな場所か、どのように地域、人との生活と関わりがあるかを事前に映像から知ることができた。地元の人のインタビューの映像から、里山の過去と現在、未来をつなげて捉え、今自分達に何ができるのかを考える授業を実施できた。必要な情報を効果的に視覚から取り入れることができ、時間短縮にもつながった。里山の大切さや、大切にして暮らしている人の思いや活動を映像から知ることによって、里山と自分の距離が近しくなり、学習の意欲が高まった。

■石川県　金沢市泉中学校

【授業名】地域と環境が育む食文化、伝統の魅力を食す

〈映像教材を活用した ESD 授業に対する評価〉

校区の老舗の見学やインタビューの様子等生徒の活動の映像によってふりかえることができ、また生徒が考えるための情報や素材を提供することができた。映像を生徒が家で家族と視聴し意見を聞くといった反転授業に活用することができた。

■福井県　坂井市立鳴鹿小学校

【授業名】学校ビオトープの再生を通して、鳴鹿の地域を考える

〈映像教材を活用した ESD 授業に対する評価〉

映像を活用することで、児童がビオトープをイメージしやすくなり、学習へのやる気が増した。大袋東小学校のビオトープの映像を見て、学校での取組と知り感動していた。映像は、学びの復習等必要に応じて何度も見せることができる。児童をつなぎとめ、幅を広げる効果がある。パーツとして捉えていた川の流れや、地域の自然の変遷が映像によって全部つながった。

■長野県　松本市立源池小学校
【授業名】奥山・里山での学習、体験を通して自然を大切にする気持ちを育む
〈映像教材を活用した ESD 授業に対する評価〉
　映像をうまく活用し、どんな里山だったらいいのか、未来の里山はどうあったらよいのかについて、子ども達の話し合いの授業をうまく進めることができた。

■岐阜県　岐阜市立長森南中学校
【授業名】地球温暖化・エネルギー問題を自分事にし、行動に移す
〈映像教材を活用した ESD 授業に対する評価〉
　エネルギーをつくる様々な方法があることを知ることができた。学校にある太陽光パネルや、生徒が行ったことのある場所が映像に出てくると生徒の食いつきがよく、関心が高まる。特に、小水力発電に取り組む方の生き方で終わるストーリーが良く、生き方や選択があることを伝えることができた。

■愛知県　東浦町緒川小学校
【授業名】校内のエコ調査活動
〈映像教材を活用した ESD 授業に対する評価〉
　身近な題材をクイズとして扱い、児童生徒の思考にゆさぶりをかけ、自分事にして考えるきっかけづくりとして映像を活用した。クイズの答えは出さず、児童が考え話しあうきっかけとして活用した。自分たちでも映像を使って授業ができる可能性も感じた。子ども達に実感させたり、興味を持たせたり、自分たちの活動をふりかえらせたりする上で大変有効だ。子どもを惹きつけ、映像から考えさせることができた。

■三重県　名張市立薦原小学校
【授業名】ギフチョウから地域の自然と未来を考える
〈映像教材を活用した ESD 授業に対する評価〉
　校区に棲息する希少種、ギフチョウから、地域の環境を知り、自然の変化や自分達との生活とのつながりに気づき、地域の自然を守ってきたのが、自分達のおじいさんおばあさんや地域の人だということに気づいた。児童が知っている風景や人々が映像に登場することで子どもたちの学習意欲が高まった。

【平成 26 年度実証授業】
■富山県　　富山市立堀川小学校
【授業名】市電通りのたから
〈映像教材を活用した ESD 授業に対する評価〉
　映像の児童の追究を台にしながら、自分を重ね、うなずきながら映像を見て、共感していた。映像を見た後、児童は自分の追究を振り返りながら考えを発言していた。映像に出てくる子どもに惹きつけられ、子どもの学習、探求意欲が高まった。暮らす町の魅力や素敵を探す児童の映像から、暮らす町を大切に思う共感性を高めることができた。

■石川県　金沢市立三馬小学校
【授業名】つながりに気づく、つながりを築く　～ふるさと伏見川を守り続けるためには～
〈映像教材を活用した ESD 授業に対する評価〉
　授業中になかなか見に行くことのできない川の上流、中流、下流の様子や、上流の森とのつながり、中流の人々の暮らしや昔と今の状況の比較、下流の海や魚とのつながりを映像から学び、伏見川の自然を守ることと防災について多様な見解があること知り、考えを深めることができた。

■福井県　学校法人嶺南学園敦賀気比高等学校付属中学校
【授業名】100 年後の世界遺産候補
〈映像教材を活用した ESD 授業に対する評価〉
　湿地で活動している NPO の方に思いを語っていただく映像を作成した。視覚に訴えることは、興味関心の高まりに繋がり、授業にリズムを作ることもできた。映像を使うことで、以前訪れた風景等忘れていたことを思い出すことができた。

■長野県　松本市立会田中学校
【授業名】四賀地域の森と水
〈映像教材を活用した ESD 授業に対する評価〉
　当たり前に使っている「水」がどこから来ているのか等森林の機能を学習するにあたり、実際水源地に訪れることが難しいため、映像でその状況を見ることでイメージすることができた。映像を活用することで、生徒の興味を向けることができた。

■岐阜県　　羽島市立正木小学校
【授業名】人にやさしく、自然にやさしく～環境といのち～
〈映像教材を活用した ESD 授業に対する評価〉
　映像での授業は子どもたちがいきいきする。映像にクイズを入れたことで児童はクイズの答えを考えようとするので、教師側のねらいがはっきりと伝わった。映像の内容はいつまでも覚えていて自分達のできる省エネ活動に積極的に生かしている。

■愛知県　名古屋市八熊小学校
【授業名】季節と堀川の生物・・・AR を使用
〈映像教材を活用した ESD 授業に対する評価〉
　映像を使うことで、時間・空間を越えて思考し、テーマへの関心を深めることに役に立った。また、地域の重要な環境学習拠点として知られる「藤前干潟」の冊子に AR 映像をリンクさせたことで、藤前干潟の魅力を感じ、訪れたい気持ちを高めるツールを得た。

■三重県　学校法人津田学園津田学園小学校

【授業名】生き物が暮らす場所

〈映像教材を活用した ESD 授業に対する評価〉

　映像による上流・中流・下流の川の様子から、それぞれの違いを知り、なぜ違いがあるのかを考え、川と川のいきもの、人間の暮らしとの共存に大切なことを学んだ。映像を活用することで、三面張りや川べりの様子など生きものが暮らす重要な場所に焦点をあてて話しあうことができた。

　児童は身近な風景を映像で見ることができて喜んだ。映像をうまく使うと、次の発問に活かすことができる。映像をそのまま使うだけでなく、切り取ったり止めたりして使うことができ、有効である。また、授業と授業の間隔が開いてしまった時などとても役に立つツールである。

(12)「ESD アーカイブ映像教材」の再編集による汎用化

映像教材は、各地域での委員会等の協議を踏まえ作成・実証授業で実際に活用されたがものであるが、この映像教材自体が「ESDとはなにか」を物語る重要なESDツールであり、かつ本事業における中部ESDの特徴となっている。作成した映像教材を活用していくために、「ESD 取組の普及啓発」及び「映像教材を活用したESD 授業づくりの方法の解説」に関する映像の作成業務を実施した。

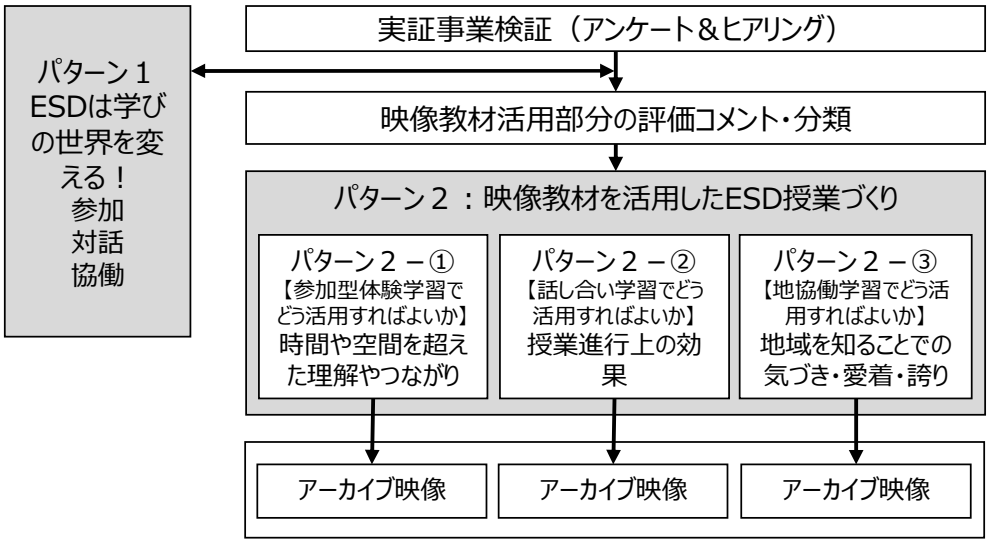
①作成物

検証委員会での議論及び検証のためのヒアリング調査等の結果を踏まえ、４本の映像を作成した。各映像の構成、目的は下表のとおりである。

[作成した映像]

パターン	1	2		
		2－1	2－2	2－3
タイトル	「ESD は学びの世界を変える！」	「映像教材を活用したESD 授業づくり ～参加体験型学習でどう活用すればよいか～」	「映像教材を活用したESD 授業づくり～話し合い学習でどう活用すればよいか～」	「映像教材を活用したESD 授業づくり～地域協働学習でどう活用すればよいか～」
目的	指導者を対象とした ESD の動機付け	指導者やESDに関心のある地域関係者向けに映像教材を活用したESD授業づくりのポイントを解説		
活用	ESD 授業を実践している、ESD 授業を実践したい教員・学校による視聴 学外関係者によるESDの紹介や講習などでの公開、事前学習のための視聴等			

＜パターン１、２の構成および考え方＞



②作成の進め方

検証委員会での協議を踏まえ、過去２年間、映像教材の作成を担務してきた（株）TREEが企画・台本構成、編集・音声編集等を行った。さらに、作成段階においては、検証委員会委員の中から教育の専門家と教員、そして

教育大学の有識者に監修を依頼し専門的な見地での映像教材の検証を、EPO 中部と協働しながら進めた。なお、台本構成においては、本年度事業の検証のための調査におけるヒアリングの結果を踏まえて、現場の先生方の声をより反映した形で作成を行った。

③作成監修

本業務にあたり、検証委員会メンバーより以下の専門家が作成の監修、サポートをした。

- ●池端弘久氏（金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ少年自然の家館長）
- ●谷戸実氏（名張市立薦原小学校校長）
- ●大鹿聖公氏（愛知教育大学理科教育講座教授）
- ●新海洋子氏（環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー）

④実施概要

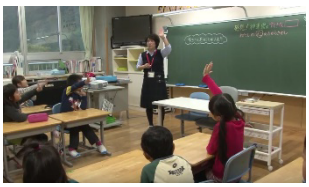
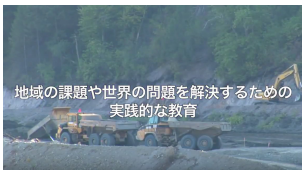
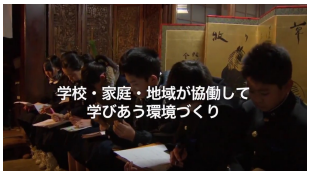
本事業の実施概要は、以下の通りである。

時期	実施	備考
7 月 10 日	第 1 回検証委員会 ・TREE より本事業の考え方およびシナリオ構成案提出 ・委員より監修 2 名選出※	※池端弘久氏（金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ少年自然の家館長）、谷戸実氏（名張市立薦原小学校校長）
9 月	構成台本専門家監修 ・第 1 回検証委員会での議論、及び方向性を踏まえ作成する映像の構成台本 01 を提出、専門家監修依頼	
10 月 11 月	構成台本再提案 ・専門家監修を踏まえ、構成台本 02 を再提出 ・映像「パターン 1 」の仮編集版編集作業	
12 月 17 日	第 2 回検証委員会 ・TREE より事業進捗報告 ・映像「パターン 1 」試写版 02 を公開、委員よりコメント収受	
12 月 26 日	追加撮影（金沢市※） ・ESD 実証事業に関与・参画した先生、及び関係者の方々にインタビュー取材	※ESD 環境教育モデルプログラム実証等事業周知啓発ワークショップ会場
1 月	専門家監修 ・第 2 回検証委員会での指摘を受けて、構成台本再々修正 ・「パターン 1 」「パターン 2 」について専門家※監修を受ける	大鹿聖公氏（愛知教育大学理科教育講座教授）
2 月 15 日	追加撮影（名張市※） ・ESD 実証事業に関与・参画した先生、及び関係者の方々にインタビュー取材	※三重県名張市薦原小学校 谷戸校長、松田先生
2 月 26 日	完成 （※3 月 4 日納品）	

⑤作成物「パターン１」（ナレーション台本）

本事業で作成した映像の構成台本（ナレーション）は、以下の通りである。

【パターン１】『ESD は学びの世界を変える！』

	本編ナレーション	映像サムネイル
①	ここ、中部地方では、「ESD」の考え方を取り入れた授業を行う学校が増えていることをご存知でしょうか。 この授業は、地域を学び、地域に誇りをもち、未来への行動力を育むことから、子どもたち、教師にもたくさんの発見や学びが生まれています。 子どもたち自身が地域の課題を考え、関心を高めていくと同時に、教師もまた、授業づくりへの意欲が大きく変わっていきます。 では、ESD を取り入れた授業とは、どのようなものでしょうか。一緒にひも解いていきましょう。	
②	ESD とは、地域の課題や世界の問題を、多面的、批判的に捉え、その問題の解決にむけた行動と、持続可能な地域社会の実現を考える、実践的な教育のことです。 通常の教科や総合的な学習、学校行事などに、ESD の視点や手法を取り入れ、実践することができます。	
③	中部地方 7 県では、平成 25 年度から 3 年か、22 の学校で ESD の実証事業を行い、様々な成果が生まれています。 子どもたちにどのような力を育むか、そのためにどのような授業を行うか、各県の実証校は、教師が学習テーマや地域の課題を設定することから始めました。地域で活動するさまざまな大人たちも参加して、地域性豊かな（実践的な）学習プログラムをつくり上げています。 さらに、実証授業では、学習の際に映像教材を活用しました。映像の持つ豊富な情報量を活かして、より話し合いに時間を使うことができるなど、教師の授業力の向上にもつながったそうです。 ※「インタビュー」挿入	
④	それでは、ESD を取り入れた授業づくりの３つの特徴を見てみましょう。 ひとつ目は、「参加」です。学級での話し合い、地域行事への参加など、子どもたちが進んで活動する体験を通じた参加型の学習を取り入れます。 ふたつ目は、「対話」です。意見を伝えあう、耳を傾ける、そのなかで、多様な価値観に触れながら、考えを深めていく話し合い学習も ESD の特徴です。 子どもたち、教師、地域の人などとの様々な対話の機会を作りながら、コミュニケーション力を育んでいきます。 みっつ目は、「協働」です。いろいろな立場で活動する人々と一緒に活動	 

	したり、学習したりする機会を増やすことで、新たな発見や気づきが生まれます。学校や家庭、地域が協働しながら学習環境を支える機会を作りあげていきます。 　では、ESD を取り入れた授業のつくり方をご紹介します。ESD を実践した教師に、そのヒントを聞いてみましょう。 　※「インタビュー」挿入	
⑤	学習の手法も様々です。 「調べる」「話し合う」「実際に見学や体験を通して学ぶ」など、多様な手法を組合せて、子どもたちの学習意欲を高めることが大切です。 　日本でも、教育振興基本計画や学習指導要領に、持続可能な社会の構築や ESD の観点が盛り込まれるようになりました。 　世界には、貧困や人権、資源の枯渇、環境破壊など多くの問題や課題が山積しています。地域でも、持続可能な地域づくりに向けてさまざまな課題の解決が求められています。 　ESD は、こうした問題を解決する力、持続可能な社会をつくる力を育むための教育です。 　皆さんの学校でも ESD を取り入れた授業を始めてみませんか。	

⑥「パターン２」作成にむけた映像教材に関するアンケート・ヒアリングの整理

A：時間や空間を超えたつながりや理解へのコメント	B：授業進行上の効果へのコメント	C：地域を知ることでの気づき・愛着・誇りにコメント
【時間】 ●過去と現在、未来をつなげて捉えることができる ●時空をつなげて、いまなにができるかを考えるきっかけ ●昔と今の状況の比較	【指導者にとって】 ●話し合いの授業の題材に有効 ●多面的、批判的思考を育むための発問や話し合いに有効 ●授業時間短縮効果 ●重要な場所に焦点を当てて授業を進められる ●何度も復習として見せることができる ●興味関心の高まりにつながり、授業にリズムを生む ●次の発問に活かすことができる ●思考にゆさぶりをかける	
【空間】 ●通常の授業では見学できない場所を知ることができる ●上流・中流・下流などの場所の違いを知る ●個別にパーツで捉えていたものを	【学習者にとって】 ●地域活動をおこなっている人々の想いや活動を知ることで、学習対象への親近感が増し、学習意欲が高まる ●知っている風景や人が登場する	【学習者にとって】 ●里山の大切さや、大切にして暮らしている人の思いや活動を映像から知ることによって、里山と自分の距離が近づく ●身近な川の様子や抱えている問

つながりとして理解できる（川の流れや地域の自然の変遷など） ●学習対象を事前に視覚的に見せることができる ●遠隔地の学校の事例を視聴して、教材とすることができる ●捉えにくい対象をイメージしやすくなる（例：ビオトープ）	ことで学習意欲が高まる ●授業と授業の間隔が空いた時の思い出し効果 ●自分ごととして考え、話し合いのきっかけに ●実感や興味を高め、活動の振り返りにも有効 ●共感性や探究意欲の高まり ●家庭での復習や家族間での学習、反転授業への活用	題の気づき ●地域の自然を守ってきたのが、自分達のおじいさんおばあさんや地域の人だということに気づき ●身近な風景や人を教材、題材に捉えていくと、自分たちの故郷が好きになり、自分たちの田舎の人を誇り ●暮らす町を大切に思う共感性を高める ●自分の町に誇りをもち、自慢する
⇒上記分類を踏まて、サンプルとして紹介する映像教材は？	⇒上記分類を踏まえて、サンプルとして紹介する映像教材は？	⇒上記分類を踏まえて、サンプルとして紹介する映像教材は？
【2-1：映像教材を活用した ESD 授業づくり～参加体験型学習でどう活用すればよいか～】 「いまとむかし」「四季」など、時空を超えた自然風景や、地域の歴史・文化の様子を捉えた映像教材の活用、効果の紹介	【2-2：映像教材を活用した ESD 授業づくり～話し合い学習でどう活用すればよいか～】 ESD 授業づくりのイメージやヒントとなる映像教材の活用、効果の紹介	【2-3：映像教材を活用した ESD 授業づくり～地域協働型学習でどう活用すればよいか～】 地域の多様な人々が、地域の自然や伝統文化を守ろうと活動する姿から、地域への愛着や誇り、気づきを育むことにつながる人物・インタビューを主とした映像教材の活用、効果の紹介

⑦作成物「パターン２」（ナレーション台本）

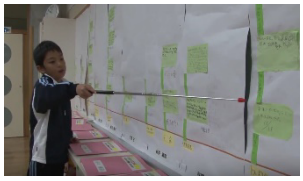
2-1：『映像教材を活用した ESD 授業づくり～参加体験型学習でどう活用すればよいか～』

	本編ナレーション	映像サムネイル
①	ESD の考え方や手法を取り入れた授業では、映像教材の活用で子ども達の学習をより深めることができます。 では、参加体験型の授業づくりには、どのように活用できるでしょうか。	
②	ESD の授業では、地域の自然、文化、暮らしなどあらゆるものが題材になります。映像は、こうした地域の特徴を捉える際に、理解の助けになります。 １つ目は、「時間の変化を捉えることができる点」です。 昔と今、春夏秋冬など、時間の変化を一連の流れで見せることができます。 ２つ目は、「通常の授業では、なかなか訪れることができない場所を見ることができる点」です。 上流から下流までの川の様子、多様な生きものの様子など、教室にいながらにして疑似体験することができます。	

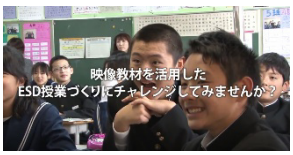
	※「インタビュー」挿入	
③	さらに、他校の取組を見て、子どもたちの活動や授業に活かすなど、学びの仕掛けにも活用できます。 手持ちのカメラなどでも、簡単に作成することができるので、年間を通じて、風景や行事などを記録しておけば、オリジナルの授業づくりにも役に立つことでしょう。 ESD を取り入れた授業づくりで、映像教材の活用にチャレンジしてみませんか？	

2-2：『映像教材を活用した ESD 授業づくり～話し合い学習でどう活用すればよいか～』

	本編ナレーション	映像サムネイル
①	ESD の考え方や手法を取り入れた授業では、映像教材の活用で子ども達の学習をより深めることができます。 では、話し合いや考えるための授業づくりに、どのように活用できるでしょうか。	
②	ESD の授業では、子どもたちの多様な意見や発想を引き出すことを重視します。 映像は、子どもたち同士で活発に話し合い、学びあう授業づくりに役立ちます。 例えば、 ・知っている風景や人が登場することによる好奇心を高まり ・そうだよね、という共感力や、もっと知りたいという探究心の高まり ・物事の仕組みなど言葉のみでは把握しにくい内容を視覚化できる など、話し合い学習での子ども達の学習意欲や、参加の意欲を高めることにつながります。 ※「インタビュー」挿入	
③	また教師は、 ・重要な場所や場面に焦点を当てて、何を学ぶのかを明示する ・多面的、批判的思考を育む発問や、話し合いに活用する ・子どもたちの興味・関心の向上、思考への揺さぶりに使う など、多面的に活用することで、子どもたちの授業への食いつきがよくなり、教師自身の授業づくりの楽しさにもつながります。 ※「インタビュー」挿入	

④	映像を活用すると、子どもたちが考える時間や話し合い、発表などに、より多くの時間を使うことができるようになります。 ESD を取り入れた授業に、映像教材を活用してみませんか？	

2-3：『映像教材を活用した ESD 授業づくり～地域協働型学習でどう活用すればよいか～』

	本編ナレーション	映像サムネイル
①	ESD の考え方や手法を取り入れた授業では、映像教材の活用で子ども達の学習をより深めることができます。 では、地域のさまざまな人から学ぶ地域協働型の授業づくりには、どのように活用できるのでしょうか。	
②	ESD の授業では、地域の多様な人々との活動や学習の機会などをつくります。地域の人々のいろいろな想いや考え方に触れることで、子どもたちは豊かに成長していきます。 しかし、実際には、子どもたちが、地域に出かけたり、地域活動に参加する時間は、十分にはありません。そういった時、地域の人の活動紹介やインタビュー映像は、授業を効果的に補うことができます。 例えば、 ・地域の人々の想いを生きた言葉で伝えることができる ・身近な風景や人物の映像化を通して、学びの対象と子どもとの距離を近づける ・体験したことを、地域の人々や活動の映像から思い返し、学びを深める など、子ども達に新たな出会いや発見、学びの深まりを促すことができます。 ※「インタビュー」挿入	
③	人々のさまざまな考えや想いによって地域社会が成り立ってきたこと、 そして、地域を大切にしている人々の姿を知ることは、子どもたちの地域への愛着や誇りを育むことにつながります。 ESD を取り入れた授業に、映像教材を活用してみませんか？	

⑧作成した映像教材リストと視聴先

作成した映像教材は、YouTube「環境省動画チャンネル」にて公開中。

年度/地域 H25 年度	素材タイトル	視聴アドレス
プログラム名「ぼくらの里山「呉羽山」」		
H25 富山①	里山ってどんなところ？	https://www.youtube.com/watch?v=9P-kw--MX8g
H25 富山②	呉羽山の今の自然	https://www.youtube.com/watch?v=N5kRMdbNvbM
H25 富山③	昔の自然と暮らし	https://www.youtube.com/watch?v=lAxWUOyOWTA
H25 富山④	きんたろう倶楽部の活動と思い	https://www.youtube.com/watch?v=ieOz26CgA7I
H25 富山⑤	地域の方の里山への思い	https://www.youtube.com/watch?v=QNiECcDjPIk
プログラム名「金沢の環境が育んだ食」		
H25 石川①	今川酢造	https://www.youtube.com/watch?v=815raTAB5IU
H25 石川②	中初商店	https://www.youtube.com/watch?v=ERAJx-fiAlM
H25 石川③	四十萬谷本舗	https://www.youtube.com/watch?v=E9mKE0bvTrU
H25 石川④	郷土の食について	https://www.youtube.com/watch?v=mrLJxTS3S60
プログラム名「ビオトープの再生を通して、地域の特性や持続可能性を考えよう」		
H25 福井①	大袋東小学校のビオトープづくり	https://www.youtube.com/watch?v=gf-rr6KXKWA
H25 福井②	鳴鹿地区の自然と校庭のビオトープの理解を深めよう	https://www.youtube.com/watch?v=Vgn2MmCKMmE
プログラム名「信州の山の中で暮らし、歴史、文化、自然を学ぶ～里山から山岳の中で～」		
H25 長野①	昔の里山～現在の里山	https://www.youtube.com/watch?v=er5JGdPHzTg
H25 長野②	今の里山について	https://www.youtube.com/watch?v=e0mH_YpjCdA
プログラム名「温暖化・エネルギーについて学び、何ができるか考えよう」		
H25 岐阜①	再生可能エネルギーとは？	https://www.youtube.com/watch?v=D5TCVEP5gTg
H25 岐阜②	長森南中学校の太陽光パネル	https://www.youtube.com/watch?v=pMs4Rxk1XjY
H25 岐阜③	石徹白の自然と小水力発電	https://www.youtube.com/watch?v=dIy6p98E9ik
プログラム名「環境問題について考え、地球にやさしい活動をしよう」		
H25 愛知①	校内エコ活動	https://www.youtube.com/watch?v=tx-lJMk25Bo
H25 愛知②	おがわっ子フェスティバル	https://www.youtube.com/watch?v=rFAXNIW0noQ
H25 愛知③	どっちがエコかな？映像クイズ	https://www.youtube.com/watch?v=skBXyFAjAyQ
プログラム名「「見つめよう　わたしたちの自然」　～ギフチョウから考える薦原の自然と未来～」		
H25 三重①	春の女神（ギフチョウ）	https://www.youtube.com/watch?v=7ww58zo8ZaU
H25 三重②	幻の女神（ギフチョウ）	https://www.youtube.com/watch?v=pm1TSF7NXoM
H25 三重③	ギフチョウの食べ物	https://www.youtube.com/watch?v=Krbjexau7Fw
H25 三重④	ギフチョウがいるぼくらのまち	https://www.youtube.com/watch?v=0GmCvuHp_tw
H25 三重⑤	ギフチョウネットワークの活動	https://www.youtube.com/watch?v=WQE2xieUU_w
H25 三重⑥	ネットワークの人たちからのメッセージ	https://www.youtube.com/watch?v=9iduNiQKehg

年度／地域 H26 年度	素材タイトル	視聴アドレス
プログラム名「市電通りのたからを見つけよう」		
H26 富山①	このまちの宝物に触れてみよう	https://www.youtube.com/watch?v=08-3V3bScjo
H26 富山②	出かけてみたよ！話を聞いてみたよ！	https://www.youtube.com/watch?v=6iGVVASoWzo

H26 富山③	まちの魅力の花を咲かそう	https://www.youtube.com/watch?v=-pinoWA76U0
H26 富山④	このまちには素敵な宝がいっぱい！	https://www.youtube.com/watch?v=1duI0LyMVss
H26 富山⑤	知りたい気持ちが育っていったよ！	https://www.youtube.com/watch?v=tJ-_pVlfwRM
H26 富山⑥	大切なまちをどうしたい？	https://www.youtube.com/watch?v=6QcyZZJUfYI
プログラム名「つながりに気付く、つながりを築く～ふるさと伏見川を守り続けるためには～」		
H26 石川①	伏見川と森のつながり	https://www.youtube.com/watch?v=3tW_JPG41Dc
H26 石川②	伏見川の魚と金沢の人たちの暮らし	https://www.youtube.com/watch?v=0Jsm2l1RjRU
H26 石川③	伏見川の昔と今	https://www.youtube.com/watch?v=lLzyh-egxkE
プログラム名「ふるさと敦賀塾『100 年後の敦賀で世界遺産候補は何か』」		
H26 福井①	中池見湿地の豊かな生物多様性	https://www.youtube.com/watch?v=XBo9vYBUtWQ
H26 福井②	中池見湿地を守るために	https://www.youtube.com/watch?v=5TQKPsraiaQ
プログラム名「地域の自然を見つめよう」		
H26 長野①	水源地をたずねる	https://www.youtube.com/watch?v=l4-HyzkTzLU
H26 長野②	森の機能を学ぶ	https://www.youtube.com/watch?v=OJMVjxP4aEk
プログラム名「人にやさしく 自然にやさしく～環境といのち～」		
H26 岐阜①	学校で使う電気	https://www.youtube.com/watch?v=zeUfNapIbo8
H26 岐阜②	太陽光パネル	https://www.youtube.com/watch?v=ZLNn8IYSyFw
H26 岐阜③	紙のリサイクル	https://www.youtube.com/watch?v=Iz_FkE7jT_s
H26 岐阜④	食	https://www.youtube.com/watch?v=dAJ8_LbAGOQ
プログラム名「季節と堀川の生物」		
H26 愛知①	生き物と季節の変化 –藤前干潟	https://www.youtube.com/watch?v=mAB-D3IW1Bc
H26 愛知②	堀川で生き物を観察しよう	https://www.youtube.com/watch?v=16u9NCCwm8U
H26 愛知③	（藤前干潟に行ってみよう）	
プログラム名「水辺の環境調査」		
H26 三重①	上流・中流・下流の川の環境や生息する生きものを知る	https://www.youtube.com/watch?v=PTDDttsVSyg
H26 三重②	人の暮らしと関わる川の機能を学ぶ	https://www.youtube.com/watch?v=dhX9zOz_buA
H26 三重③	地域で行われている川の保全活動を知る	https://www.youtube.com/watch?v=UMjW2E8tC8U

※環境省中部地方環境事務所のホームページ(https://chubu.env.go.jp/earth/mat/m_2.html)にも、動画へのリンクがあるので参照されたい。

５．周知啓発のためのワークショップ等の実施

（1）周知啓発ワークショップの実施　※詳細については別冊「周知啓発ワークショップ等の実施」参照

3年間実施した本事業の目的は、

●中部7県各県における「学校と地域の連携によるESD取組促進」のためのESD環境教育プログラムづくりと実践

●ESD環境教育プログラムづくりと実践を可能にする地域のESD推進基盤たるネットワークの形成

であり、その成果と効果を報告、共有するため、主に教育関係者、地域活動団体を対象として北信越地域（金沢市内）と東海地域（名古屋市内）で各２回ワークショップを実施した。

事業タイトルを「子どもが輝く授業をみんなでつくるワークショップ…先生も地域の人もESD…」、コンセプトを「地域の子どもは地域が育てる」として、第1回は、主に教員を対象とし、「今なぜESDが大切なのか」「本事業は何を実現することができたのか」「ESD授業はどう作られたのか」「ESD授業はどのような変化をもたらしたのか」を実証授業を実施した教員からの報告から見出し、「ESD授業のつくりかた」について学びあった。ESD実践によって、「児童・生徒がどう変わるか」「教員や学校がどう変わるか」「地域がどう変わるか」など本事業の成果・効果の報告をし、「今なぜESDが大切なのか」「本事業は何を実現することができたのか」「学校と地域が一体となってESDに取り組むと何が変わるのか」など本事業を実施することで見出した「価値」を伝え、地域の学び合いの仕組みづくりを考えた。さらに、地域の教育の在り様を見直し、ESD実践がどの地域、どの学校でも行われるための環境づくり、ネットワークのありかたについて意見交換をした。

①金沢開催 「子どもの学びを学校と地域が一緒につくる」ワークショップ

■第1回 「ESD授業のつくりかた」ワークショップ

日　時：平成27年12月26日(土)11:00～13:00（120）

場　所：石川県女性センター大会議室（石川県金沢市三社町）

参加者：50名（教員16名　自治体３名　地域団体/NPO等12名　地方字事務所1名　スタッフ他18名）

[プログラム]

●「ESD授業づくり」報告（11:00～11:40）

北信越地域の本年度事業実施校の以下の４校４名から実証授業の実施内容、子どもの変容を中心に取組について報告が行われた。

[富山]福田有児先生（富山市立神通碧小学校教頭）

[石川]杉本倫代先生（金沢市立十一屋小学校教諭）

[福井]奥村栄司郎先生（福井大学教育地域科学部附属中学校教諭）

[長野]畔上一康先生（信州大学教育学部附属長野小学校副校長）

●ESD授業づくり報告を受けて（11:40～12:10）

北信越地域からの報告を受け、東海地域の以下の３名の教員等によるコメントが行われた。学びの共有ができ、良い経験になったとの評価であった。

[岐阜]小林由紀子氏（NPO法人e-plus生涯学習研究所）

[愛知]小鳥正嗣先生（半田市立板山小学校教頭）

[三重]森　直也先生（四日市市立中部中学校教諭）

●「ESD授業づくり」学びあいワークショップ（12:10～13:00）

これまでの報告等を踏まえ、ESD の大切さを伝えあい、ESD 授業の「つくりかた」を学びあうための各６名程度の７つのスモールグループによる討議が行われた。

【総括】ワークショップの主な成果は以下のとおり

・ESD環境教育プログラム・授業づくりのノウハウを多くの人に伝えることができた。

・ESDの大切さを伝えあい、ESD授業の「つくりかた」を学び合う場がつくられた。

・ESD実践が、地域であたりまえに行われるようになるためのネットワーク形成に向けた端緒が作られた。

【第2回「子どもの学びを学校と地域が一緒につくる」ワークショップ】

日　時：平成27年12月26日(土)14:00～16:30（150）

場　所：石川県女性センター大会議室（石川県金沢市三社町）

参加者：45名（教員13名　自治体３名　地域団体/NPO等14名　地方事務所1名　スタッフ他14名）

[プログラム]

●「ESD 授業づくり」報告（14:00～14:30）

東海地域の本年度事業実施校の以下の３校３名から実証授業の内容、子どもの変容を中心に取組の報告が行われた。

[岐阜]小林由紀子氏（NPO法人e-plus生涯学習研究所　代表理事）

[愛知]小嶌正嗣先生（半田市立板山小学校教頭）

[三重]森　直也先生（四日市市立中部中学校教諭）

●フリップレポート「学校と地域が一緒につくったESD授業」（14:30～15:10）

以下の中部7県のNGO/NPOや大学関係者から、学校と地域が協働するためのキーポイントについてフリップ（表示版）を用いた意見が発表された。

[富山]本田恭子氏（環境教育ネットワークとやまエコひろば環境教育コーディネーター）

[石川]青海万里子氏（金沢エコライフくらぶ代表）

[福井]吉川守秋氏（NPO法人エコプランふくい事務局長）

[長野]渡辺隆一氏(NPO法人みどりの市民理事)

[岐阜]巽　徹氏（岐阜大学教育学部英語教育講座教授）

[愛知]千頭　聡氏（日本福祉大学国際福祉開発学部教授）

[三重]寺田卓二氏(環境教育ネクストステップ研究会代表)

●ワークショップ「学校と地域が連携した授業づくり、学校づくり、地域づくり」(15:10～16:20)

これまでの報告に基づき、学校と地域とが協働して子どもの学びを進めるための方策について、各６名程度の7つのスモールグループによる討議が行われた。その後、各グループの成果物の発表を行い、成果を共有した。

●まとめ（16:20～16:30）

ワークショップに関するまとめと、今後についての情報提供を、北陸コーディネーターの鈴木克徳氏と長野東海コーディネーターの新海洋子氏が行った。最後に、中部地方環境事務所より閉会のあいさつを得た。

【総括】ワークショップの主な成果は以下のとおり

・学校での ESD 授業づくりにおいて、地域との連携が不可欠であることを共有した。
・学校と地域が連携して授業づくりを行う際には、お互いが補完し合える関係性、信頼性を育むことが重要であることを確認した。
・地域が学校に関わる際に、学校側のニーズに応えられるように、学校側は地域側の多様性を受けいれられるように双方のコミュニケーションの充実、つなぐコーディネーターの役割が必須であることを確認した。

②名古屋開催 「子どもの学びを学校と地域が一緒につくる」ワークショップ
■第 1 回 「ESD 授業のつくりかた」ワークショップ
日 時：平成 28 年 2 月 18 日(木)11:00～13:00
場 所：愛知県産業労働センターウインクあいち 1003 号室（愛知県名古屋市）
参加者：52 名（教員 11 名　自治体職員 12 名　地域団体/NPO14 名 地方事務所 3 名 スタッフ他 12 名）
[プログラム]
●「ESD 授業づくり」報告（11:05～12:10）
以下の各県の実証校の教員等から実証授業の実施内容、子どもの変容を中心に取組について報告が行われた。
[長野]吉田正人先生（松本市立会田中学校 3 学年主任）
[岐阜]小川佳広先生（岐阜市立青山中学校 1 学年主任）
[愛知]岩崎祐樹先生（半田市立板山小学校教諭）
[三重]松田淑子先生（名張市立薦原小学校教諭）
[富山]堀 泰洋先生（富山市立神通碧小学校教務主任）
[石川]池端弘久氏（金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家館長）
[福井]今井尚子先生（学校法人嶺南学園敦賀気比高等学校教諭）
●「ESD 授業づくり」学びあいワークショップ（12:10~12:50）
7 県の報告者のブースに分かれて、実践した ESD 授業の報告を深め、「ESD 授業の作り方のポイント」「実施した授業による変化」を聞き合い、学びあいを深める時間とした。
●まとめ
富山県形成推進委員会委員/ワーキングループの富山大学教授松本謙一氏に所感をいただいた。
【総括】ワークショップの主な成果は以下のとおり
・各県の ESD 授業づくりの過程、育みたい力の設定、教材選び、授業構成などを聞き、授業による子どもや教員自身の変化について共有した。
・各県の ESD 授業報告において、参加者の ESD 授業に対しての共感、提案、意見を出しあい、共有をした。
・ESD 授業づくりのポイントやノウハウを授業実施者と参加者が共有することができた。

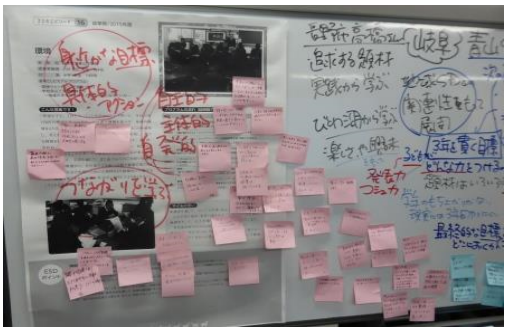
■第 2 回「子どもの学びを学校と地域が一緒につくる」ワークショップ
日 時：平成 28 年 2 月 18 日(木)14:00～16:30（150 分）

場　所：愛知県産業労働センターウインクあいち 1003 号室（愛知県名古屋市）
参加者：52 名（教員 10 名　自治体職員９名　地域団体/NPO18 名 地方事務所 3 名 スタッフ他 12 名）
[プログラム]
●インタビュー「地域の課題を教材にする」（14:00～14:20）
　北陸地域での地域の課題や資源を教材にした ESD 授業づくり、実践について、その難しさと課題、工夫の仕方などについて、以下の 3 名にインタビュー形式でヒアリングをした。
　[富山]堀　泰洋先生（富山市立神通碧小学校教務主任）
　[石川]池端弘久氏（金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家館長）
　[福井]今井尚子先生（学校法人嶺南学園敦賀気比高等学校教諭）
●プレゼンテーション「学校と地域が一緒につくった ESD 授業」（14:20～15:05）
　以下の各県のワーキンググループメンバーから、本事業におけるワーキンググループの役割と成果、地域に何を提供することができたのか等についてフリップによる発表が行われた。
　[富山]水上庄子氏（富山ユネスコ協会副会長）
　[石川]青海万里子氏（金沢エコライフくらぶ代表）
　[福井]吉川守秋氏（NPO 法人エコプランふくい事務局長）
　[長野]渡辺隆一氏(NPO 法人みどりの市民理事)
　[岐阜]小林由紀子氏（NPO 法人 e-plus 生涯学習研究所代表理事）
　[愛知]大鹿聖公氏（愛知教育大学自然科学系理科教育講座教授）
　[三重]寺田卓二氏(環境教育ネクストステップ研究会代表)
●ワークショップ「学校と地域が連携した授業づくり、学校づくり、地域づくり」（15:05～16:20）
　学校と地域が連携することでどのような ESD 授業や取組を生み出すことができるのか、学校が提供できること、地域が提供できることを持ち寄りどのようにマッチングさせるとより学習効果のある授業づくりができるのか、など 7 つのグループに分かれ、議論した。
●まとめ（16:20～16:30）
　北陸地域コーディネーター鈴木克徳氏、愛知教育大学教授大鹿聖公氏及び長野東海コーディネーター新海洋子氏から本ワークショップに対する総括、所感をいただいた。
【総括】ワークショップの主な成果は以下のとおり
・地域の課題を教材にした授業づくりの成果、効果、児童生徒の変容、難しさ、課題について共有をした。
・学校と地域がそれぞれ資源を持ち寄るとどのような ESD 授業を創りだすことができるかを協議し、共有した。
・学校と地域が連携した ESD 授業づくりを行うために必要な資源について協議をした。
・セッションから３つの持ち帰りポイントを抽出し、共有した。

■ワークショップの様子

授業報告の様子（金沢開催　第１回）

グループディスカッション（金沢開催　第２回）



実証授業に応援メッセージと提案（名古屋開催　第１回）

グループディスカッション（名古屋開催　第２回）

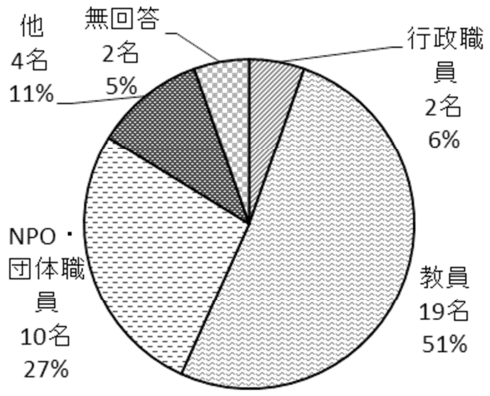
③周知啓発のためのワークショップ　参加者アンケート結果

【金沢会場】第１回 「ESD 授業のつくりかた」ワークショップ　アンケート結果

■参加者について

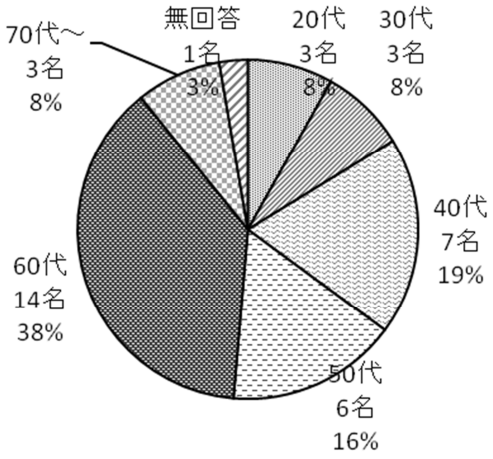
[所属]

学生	0名
会社員	0名
行政職員	2名
教員	19名
NPO・団体職員	10名
他	4名
無回答	2名
合計	37名



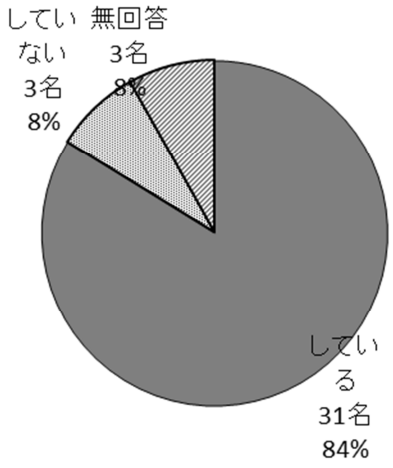
[年代]

～10代	0名
20代	3名
30代	3名
40代	7名
50代	6名
60代	14名
70代～	3名
無回答	1名
合計	37名



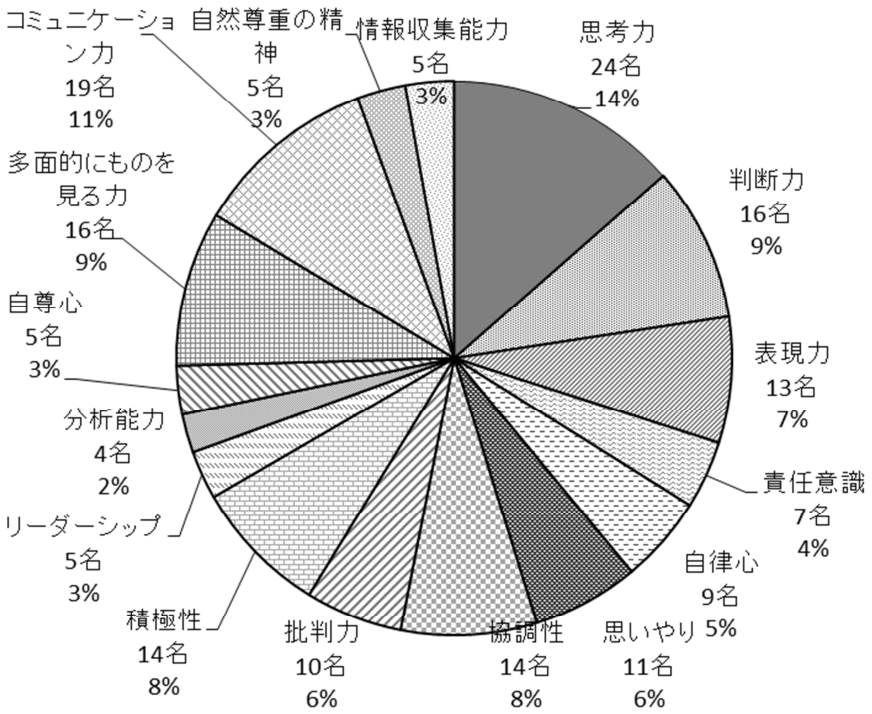
[ESD活動をしていますか]

している	31名
していない	3名
無回答	3名
合計	37名



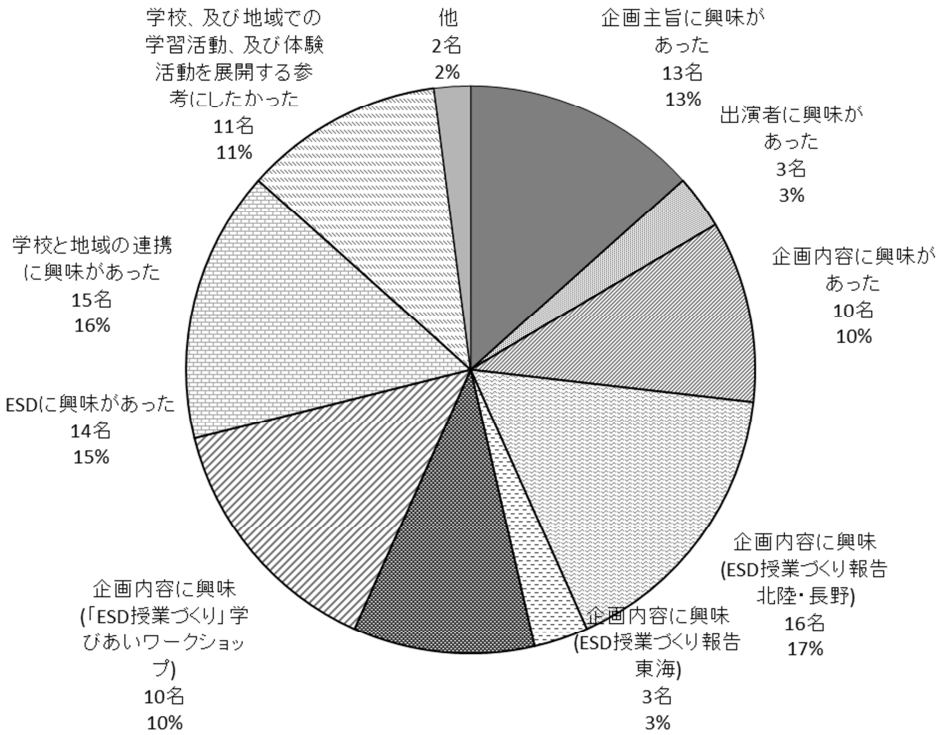
「ESD活動で特に育みたい力はなんでしょうか(複数回答可)」

思考力	24名
判断力	16名
表現力	13名
責任意識	7名
自律心	9名
思いやり	11名
協調性	14名
批判力	10名
積極性	14名
リーダーシップ	5名
分析能力	4名
自尊心	5名
多面的にものを見る力	16名
コミュニケーション力	19名
自然尊重の精神	5名
情報収集能力	5名
その他	0名



■本企画への参加動機をお聞かせください。(複数回答可)

企画主旨に興味があった	13名
出演者に興味があった	3名
企画内容に興味があった	10名
企画内容に興味(ESD授業づくり報告　北陸・長野)	16名
企画内容に興味(ESD授業づくり報告　東海)	3名
企画内容に興味(「ESD授業づくり」学びあいワークショップ)	10名
企画内容に興味(他)	0名
ESDに興味があった	14名
学校と地域の連携に興味があった	15名
学校、及び地域での学習活動、及び体験活動を展開する参考にしたかった	11名
他	2名



[具体的にお聞かせください]

・本校にて実践をさせていただき、さらに学びたい。

・どのような実践がESDとしてなされているのか、どのような実践ならESDになるのか。

・どこまでESDが学校や地域に浸透しているかを参加者の皆様からうかがい、感じとりたかった。数字面は理解しているか、実感として。

・カリキュラム作りに対する知見が得られました。

・小中高大、地域をつなげるヒントをしりたかった。（大学教員です）

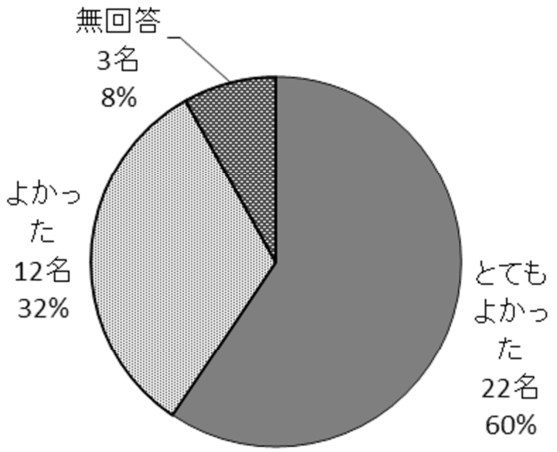
・他の学校さんの取組に興味があったから。自分の学校にいかしたい。

・どのように進めていってよいか、どのようにつながればよいか、報告をぜひ聞かせていただきたいと思っていました。
・NPO として学校と地域をむすぶ参考にしたい。
・ESD により、どう学校が活性化し、子どもが変わり、教員も変わるかを学びたい。
・今後の授業づくりに今年授業された方のお話を参考にして考えたい？
・多くの実践を受けて ESD の取り組みの質を上げたい。
・ESD の授業実践について、興味があったため。

■本企画についてのご感想についてお聞かせください。

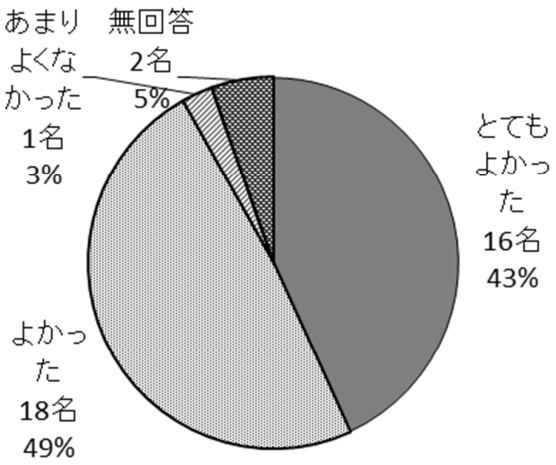
●「ESD授業づくり報告」（北陸・長野の授業報告）

とてもよかった	22名
よかった	12名
あまりよくなかった	0名
よくなかった	0名
どちらでもない	0名
無回答	3名
合計	37名



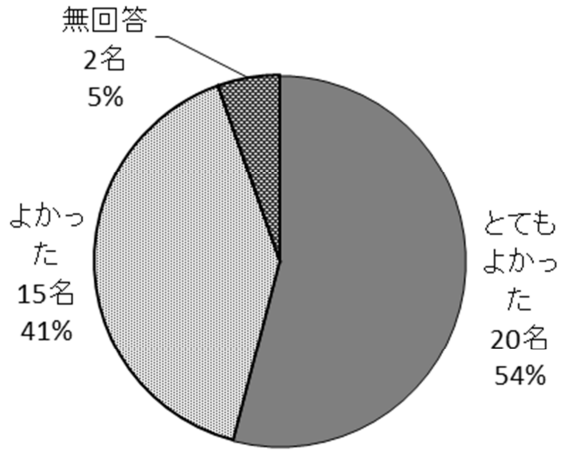
●「ESD授業づくり報告」（東海の教員からのコメント等）

とてもよかった	16名
よかった	18名
あまりよくなかった	1名
よくなかった	0名
どちらでもない	0名
無回答	2名
合計	37名



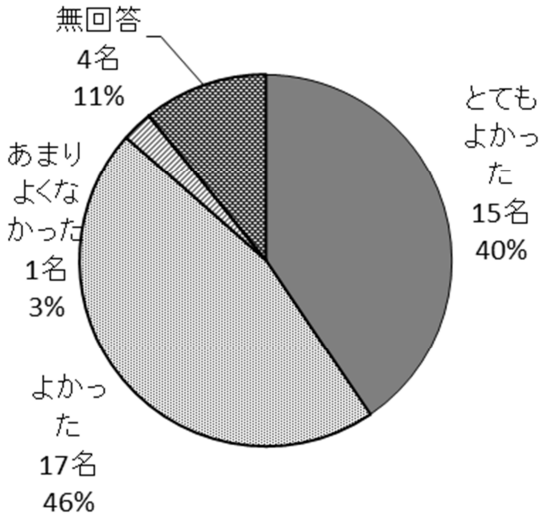
●「ESD授業づくり」学び合いワークショップ

とてもよかった	20名
よかった	15名
あまりよくなかった	0名
よくなかった	0名
どちらでもない	0名
無回答	2名
合計	37名



●企画全体

とてもよかった	15名
よかった	17名
あまりよくなかった	1名
よくなかった	0名
どちらでもない	0名
無回答	4名
合計	37名



[理由をお聞かせください]

●とてもよかった

・他県、他校、その他、企業等の方々のお話を聞くことができ、自身の在り方を考えるきっかけとなった。

・学びのあり方と ESD の関係性が少し理解できた。

・ESD を進めていくためのよい機会となった。

・学校で閉じて考えていた思考が本当に広がった。もっと時間があると面白かったと思います。

・「報告を受けて」より発表者への質疑応答の時間があるとよかった。

・参加者がとにかく ESD に熱い。

・他の体験談は、色々と参考になる点多い。

・とても中身濃くやりぬいた。多くの方の意見がすばらしすぎます。

●よかった

・いろいろな団体さんの話がきけてよかった。特に学校以外の人の話がとてもよかったです。

・様々な立場の方からのお話を伺うことができ、これからどのように進めていったらよいか参考になりました。新たなつ

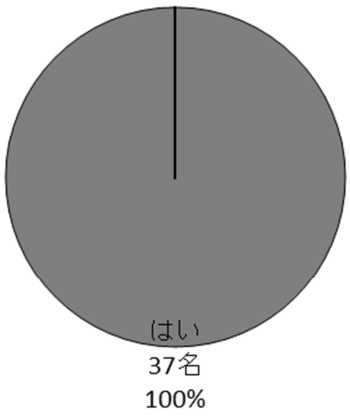
ながりもできてよかったです。
・いろいろな学校の取り組みやそれに対する様々な人のコメントはそれを聞くだけで意義深いと思う。
・実践報告をもう少しじっくり伺いたかったです。②は内容がどうより、③の前にあることがいかがかな？と思いました。この時間が実践報告等延長になってもよかったかもしれないと思いました。やってみないとわからないので。勝手言ってすみません。
・実践から学ぶだけでなく、他の方の学びも学ばせていただくことができました。
・信州大附属の実践が自分の教育観、指導観をゆさぶる刺激のある内容でした。
・各県の報告を聞くことができ、新たに心動かされた。ワークショップでは伸び伸びと意見を出すことができた。

●あまりよくなかった
・時間が不足。残念。

●無回答
・この最後の session 自体が ESD だと思うので、何よりも、学校の先生の意見交換、又は各ステークホルダーとの意見交換ができる場がこのようにあることが意義がある。
・時間があと少しずつ足りなかった。実践の具体をあと少し知りたいところ。

■本企画に参加して、ESDへの理解が深まりましたか

はい	37名
いいえ	0名
どちらでもない	0名
無回答	0名
合計	37名

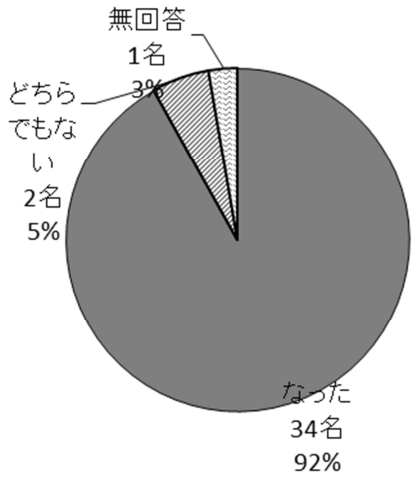


[理由をお聞かせください]

●はい
・ESD が「特別」なことをすることを目的としているのではなく、本来の学びの在り様を探っていることに共感します。
・学校の先生のスキルが向上している。子どもが気づき深めているプロセス（筋書きのないドラマ）がある。
・単元の組み方、子どもたちの課題意識の持たせ方、地域とのつながり方など参考になりました。
・地域とつながる必然性をつかむことができました。
・ESD ガイドブックでは得られない「気づき」があった。
・深まるというよりも、広がりの方かもしれませんが、視点がふえたと思います。
・他校の様子を知ることができ、今後の参考になりました。
・ESD に関してあまりわかっていなかったから、たくさんのスペシャリストの話を聞けて勉強になった。
・新しいことを知ることができた。民間の方の視点がよい。
・学校での取りくみ方の多様な事例を学べた。
・グループ討議で深まったから。
・これからを考える時に学校の現状、問題点がわかり参考になった。

■本企画は、ESD授業づくりの参考になりましたか。参考になったこと、気づかれたことなどお聞かせください。

なった	34名
ならなかった	0名
どちらでもない	2名
無回答	1名
合計	37名



[理由をお聞かせください]

●なった

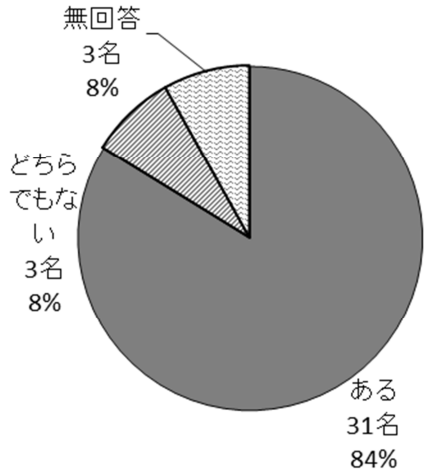
・子どもの疑問など、心の動きに寄り添う。
・視点を明確にして子どもたちが学んでいる様子。
・ワークショップの議論の中で、共通の課題を見い出すことができる。
・限られた時間の内で行う中で、子どもたちがいきいきと活動していくこと。
・授業実践が参考になった。
・教師の成長が見える。
・分野（視野）が広がっていてよい。
・学校のイベントと ESD をつなげること。
・民間で共につくる。
・教師とこどもとの相互の働きかけ、学びあい。
・ポイントをみんなで話し合ったから。
・他校の実践を知り、参考になった。
・多様性。
・地域の未来を語り合ってみたいと思った。
・できたことがない実践ばかりで、少しでも取り入れたいと思いました。
・国際的な取り組みも充分テーマになる。
・長期プランの計画なので、もっと深い資料が各校ほしいです。
・さまざまな工夫を知れたため。それぞれの大切にしたい思いが知れ、考えが広がった。

●どちらでもない

・授業の具体実践のつくり方のプロセス、ようすをみたい。
・教員ではないので・・・

■ESDを実践するにあたり、課題として感じられていることがあればお聞かせください。また、ESD実践を拡大するためには何が必要だと思いますか。

ある	31名
ない	0名
どちらでもない	3名
無回答	3名
合計	37名



[理由をお聞かせください]

●ある

・学校であれば、各教員の教育思想、子ども観によるものが多くある。”ESD”というより、そもそも思想面として考えたい。

・学校と地域の連携。学校ぐるみの取り組み。地域情報の積極的収集、活用。

・学校全体で継続して取り組む必要性..。

・学校と地域の息長いつながりをどう作るか。

・カリキュラムにどう組み入れているか。

・互いに意見を聞き合う力。

・フィールドとの係わりを長期に続けること。同じ課題をもつ複数のフィールドをつなげることで問題解決と実践拡大を同時に解決できるのでは？

・学校の全教員が ESD を理解し、それぞれが発展していくことです。

・学校の多忙化。

・お金、教師の理解。

・地域と学校との連携の取り方は様々なパターンがあるかと思うが、なんらかの制度的な枠組みづくりも大切なのでは。

・学校、教員の変化を根気づよく進めること。

・ESD の理解は深まってきている。今後に期待。

・学校の ESD 体制、管理職のリーダーシップ、カリキュラムを ESD ベースに作成できるようにする。自治体トップ、教育委員会の ESD 理解を促進する。

・ESD に対する一般の理解。

・子ども達の多様な関心の広がりを、授業という枠の中で、どう伸ばしつつ、まとめていくか。

・ESD についての理解、大切にしていることを共有、話し合い。

・子どもの関心を引き出す工夫。実践の評価（形式的な部分と結果としての部分）。

・学校と地域が同じ方向性をもって ESD に取り組むこと。

・先生方の意識改革。

・先生の学び
・子ども一人ひとりの考えに対応する教師の支援の難しさ。
・地域の人との連携のしかた。
・ESD の理解、地域教育委員会との連携。
・学年、学校全体で共有をはかり、実践を進めていくこと。ESD への思い、大切さの温度差が先生方でちがうので共有・がむずかしい。拡大のため、管理職の指導とリーダーシップが大切。
・人材。

●無回答
・教える教育の形を変える必要があり、その為にも地域に開いてゆく ESD は有効。
・教科学習との関わり、総合に徹しない。

■本企画に参加されてのご提案、気づかれたこと、改善点、今後の ESD 企画へのご要望などお聞かせください。
・ESD 推進の教員の Network 化。
・１つ１つのセッションの時間を確保してほしい。
・このような企画を様々な場所で開いていただけると学校教育全体が変わっていくと思います。面白い話を聞かせいただきました。
・県内でまとまっているとは限らない。午前、午後のいずれかで県内の他機関の方と同席できるとうれしいです。密度の濃いスケジュールです。たまには少ないメニューでたっぷり議論する企画もいい。（企画者としてはこわいが）
・どうやってこの取組を広げていくか。今はまだ少数派です。
・コメントが多く時間のロスがあったように思います。
・今後年 2～3 回つづけて行ってください。
・他校とつながる。世界とつながりたい。
・授業をうけた児童、生徒さんのご参加もあるとさらによいですね。
・参加させていただきありがとうございました。
・地元のユネスコ協会として、仲介役を果たしたい。

④金沢開催第 1 回 「ESD 授業のつくりかた」ワークショップ 参加者アンケートシート

子どもが輝く授業をみんなでつくるワークショップ アンケート①

本企画にご参加いただき、ありがとうございました。今後の事業の改善のために皆様のご意見を伺いたく思います。ご協力いただけると幸いです。

特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ

①「ESD 授業のつくりかた」ワークショップ

1．本企画への参加動機をお聞かせください。複数回答可

□企画主旨に興味があった
□出演者に興味があった
□企画内容に興味があった
→□ESD 授業づくり報告(□北陸・長野)
□「ESD 授業づくり」報告を受けて（□東海）
□「ESD 授業づくり」学びあいワークショップ
□他（ ）
□ESD に興味があった
□学校と地域の連携に興味があった
□学校、及び地域での学習活動、及び体験活動を展開する参考にしたかった
□他（ ）

●具体的にお聞かせください。

2．本企画についてのご感想等についてお聞かせください。

①「ESD 授業づくり報告」（北陸・長野の授業報告）
□とてもよかった □よかった □あまりよくなかった □よくなかった □どちらでもない

②「ESD 授業づくり報告を受けて」（東海の教員からのコメント等）
□とてもよかった □よかった □あまりよくなかった □よくなかった □どちらでもない

③「ESD 授業づくり」学び合いワークショップ
□とてもよかった □よかった □あまりよくなかった □よくなかった □どちらでもない

④企画全体
□とてもよかった □よかった □あまりよくなかった □よくなかった □どちらでもない

●理由をお聞かせください。

⇒裏へつづく

３．本企画に参加して、ESD への理解が深まりましたか。

□はい　□いいえ　□どちらでもない

●理由をお聞かせください。

４．本企画は、ESD 授業づくりに参考になりましたか。参考になったこと、気づかれたことなどお聞かせください。

□なった　□ならなかった　□どちらでもない

●理由をお聞かせください。

５．ESD を実践するに当たり、課題と感じていることがあればお聞かせください。また、ESD 実践を拡大するためには何が必要だと思いますか。

□ある　□ない　□どちらでもない

●理由をお聞かせください

６．本企画に参加されてのご提案、気づかれたこと、改善点、今後の ESD 企画へのご要望などお聞かせください。

【ご自身についてお聞かせください】

[所属]□学生（中・高・大）　□会社員　□行政職員　□教員（小・中・高・大・他）　□NPO・団体職員
□他（　　）

[年代] □～10 代　□20 代　□30 代　□40 代　□50 代　□60 代　□70 代～

[ESD 活動]

①ESD の活動をしていますか。　□している　□していない

②ESD 活動で特に育みたい力はなんでしょうか。　※複数回答可

□思考力　□判断力　□表現力　□責任意識　□自律心　□思いやり　□協調性　□批判力　□積極性　□リーダーシップ
□分析能力　□自尊心　□多面的にものを見る力　□コミュニケーション力　□自然尊重の精神　□情報収集能力
□その他（　　）

今後 ESD に関する事業のお知らせをご希望の方は、下記お名前とメールアドレスなどご連絡先をご明記ください。

お名前　　メールアドレス（ご連絡先）：

※個人情報は適切に管理いたします。いただいた個人情報は ESD 関連事業の案内のみに使用いたします。

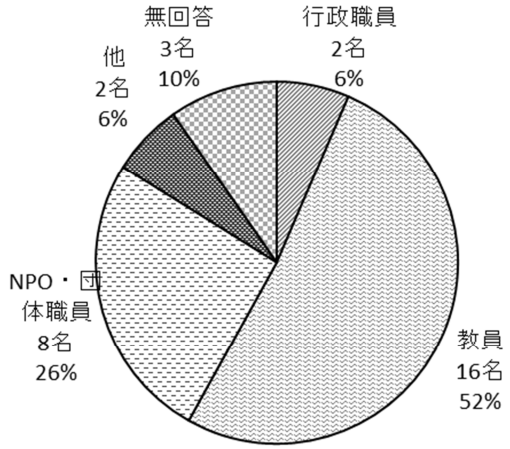
ありがとうございました。特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ
環境省中部環境パートナーシップオフィス

⑤金沢会場　第２回「子どもの学びを学校と地域が一緒につくる」ワークショップ　アンケート結果

■参加者について

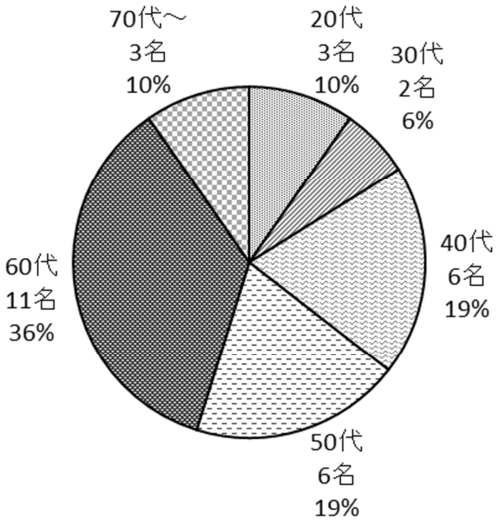
[所属]

学生	0名
会社員	0名
行政職員	2名
教員	16名
NPO・団体職員	8名
他	2名
無回答	3名
合計	31名



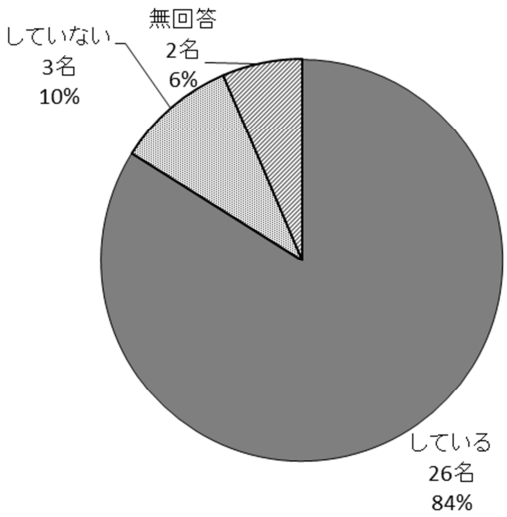
[年代]

～10代	0名
20代	3名
30代	2名
40代	6名
50代	6名
60代	11名
70代～	3名
無回答	0名
合計	31名



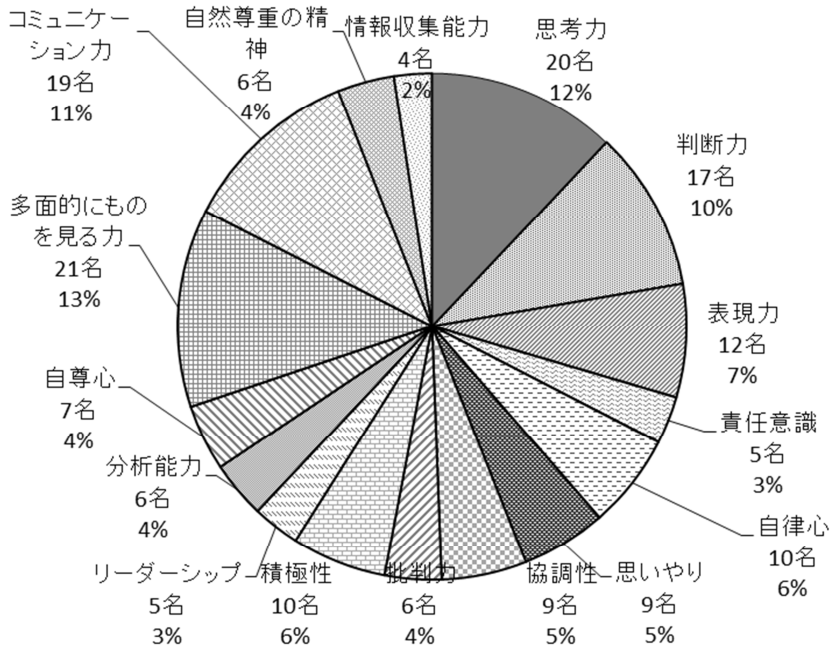
[ESD活動をしていますか]

している	26名
していない	3名
無回答	2名
合計	31名



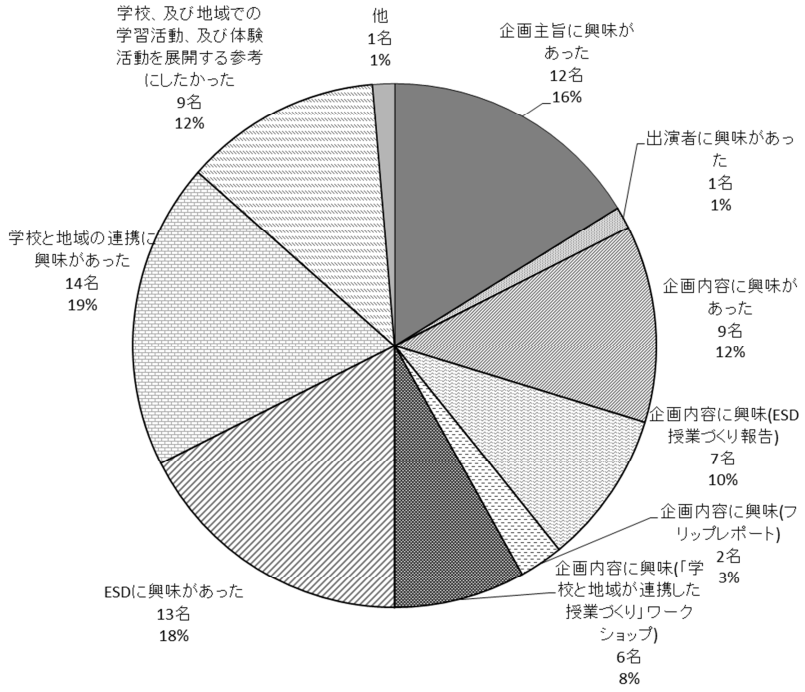
[ESD活動で特に育みたい力はなんでしょうか(複数回答可)]

思考力	20名
判断力	17名
表現力	12名
責任意識	5名
自律心	10名
思いやり	9名
協調性	9名
批判力	6名
積極性	10名
リーダーシップ	5名
分析能力	6名
自尊心	7名
多面的にものを見る力	21名
コミュニケーション力	19名
自然尊重の精神	6名
情報収集能力	4名
その他	0名



■本企画への参加動機をお聞かせください。(複数回答可)

企画主旨に興味があった	12名
出演者に興味があった	1名
企画内容に興味があった	9名
企画内容に興味(ESD授業づくり報告)	7名
企画内容に興味(フリップレポート)	2名
企画内容に興味(「学校と地域が連携した授業づくり」ワークショップ)	6名
企画内容に興味(他)	0名
ESDに興味があった	13名
学校と地域の連携に興味があった	14名
学校、及び地域での学習活動、及び体験活動を展開する参考にしたかった	9名
他	1名



[具体的にお聞かせください]

・ESD について学びたかった。

・ESD の理解を深めるため。

・自分が実践したことにかかわりがあったから。

・授業の具体、地域の方々のよい連携の型などを見たかった。

・他の学校がどんな実践されているのか知りたいと思ったから。

・地域の方が 14 年間もかかわっておられるというのはすばらしいと思いました。先生は入れ替わりますが、地域の方はずっとそこにおられるので、地域の方がかかわってくださるのはとてもよいことに思います。学校と地域の連携が本

当に大切なことが伝わってきました。

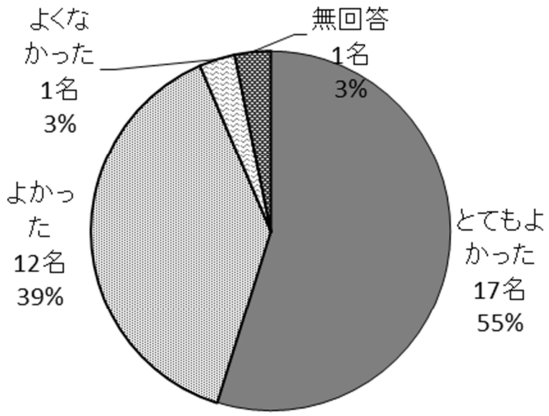
・地域ユネスコ協会の事務局として

・地区に環境関係のネットワークを作りたい。

■本企画についてのご感想についてお聞かせください。

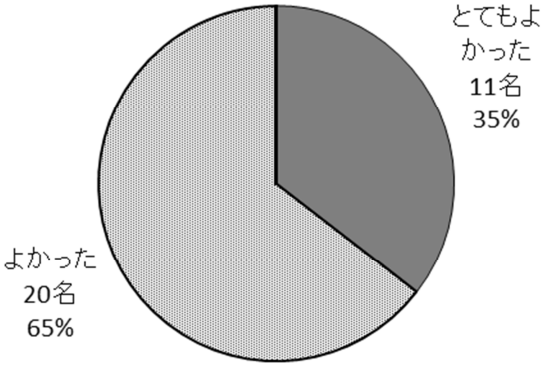
●「ESD授業づくり報告」「地域の課題を教材にする」

とてもよかった	17名
よかった	12名
あまりよくなかった	0名
よくなかった	1名
どちらでもない	0名
無回答	1名
合計	31名



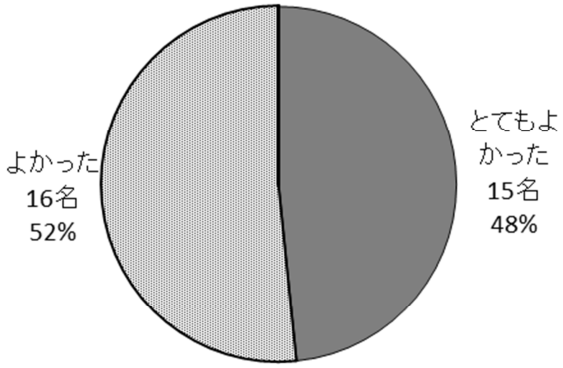
●フリップレポート「学校と地域一緒につくったESD授業」

とてもよかった	11名
よかった	20名
あまりよくなかった	0名
よくなかった	0名
どちらでもない	0名
無回答	0名
合計	31名



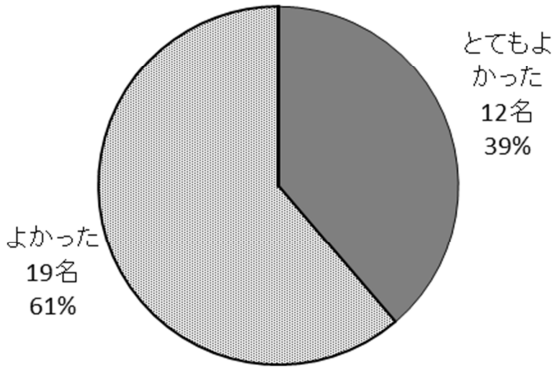
●「学校と地域が連携した授業づくり、学校づくり、地域づくり」ワークショップ

とてもよかった	15名
よかった	16名
あまりよくなかった	0名
よくなかった	0名
どちらでもない	0名
無回答	0名
合計	31名



●企画全体

とてもよかった	12名
よかった	19名
あまりよくなかった	0名
よくなかった	0名
どちらでもない	0名
無回答	0名
合計	31名



[理由をお聞かせください]

●とてもよかった

・内容よし、ただし忙しい、メニューが？

・このような企画、シンポジウムを行うと良い！

・時間配分がうまくいかず、メインの話が難しかった。

・開始の時から、5時間半・・・・どんどんどんどん熱くなり一体感ができましたね。すばらしい企画、運営力でした。ありがとうございました。

・地域の方と関わることができ、地域の方の思いを知ることができて、大変参考になりました。

・時間がもっと欲しい・・・・！！

・初参加だったから？

●よかった

・ESDという言葉がここまで広がってきたかという思いがある。みなさんのの馬力には心より敬意を表します。

・時間が守られていることは基本となるもの。フリップレポは各団体の方の努力がよく伝わってきて、よく理解できた。学校も耳をかたむける必要が今後大きくなると感じた。

・結果的にはやはり時間が短い

・これからのESDを考えれてよかった。

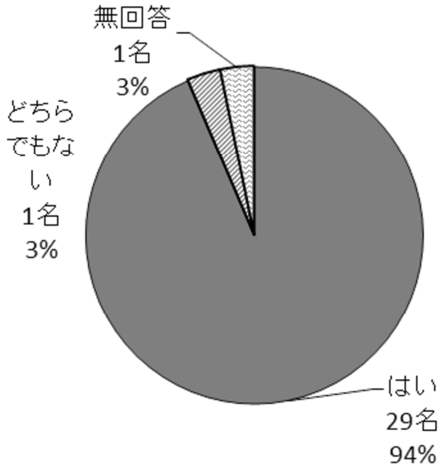
・学校と地域とのかかわり方、参考になった。

・あと一歩の情報を一人ひとりの方からお聞きしたかったです。

・もっと時間がほしい。
・深い実践報告だった。フリップ形式で簡潔にまとめられたように思う。
・ESD 教育について、やはり継続性が大切だと思った。でも、学校は忙しく、なかなか難しいので、コーディネータの存在は必要だと思う。
・新たな考えを聞かせていただいたから。
・各地域の方々と意見交換ができた。

■本企画に参加して、ESDへの理解が深まりましたか。

はい	29名
いいえ	0名
どちらでもない	1名
無回答	1名
合計	31名



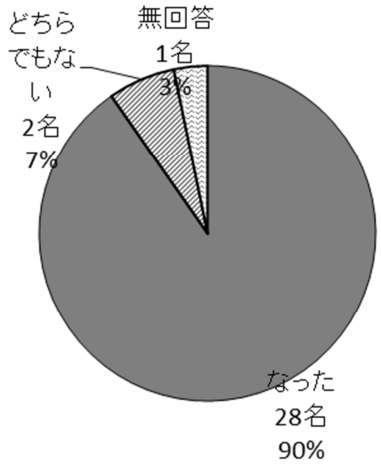
[理由をお聞かせください]

●はい
・いろいろな課題（つながり方、人、場）をどうするかのよい議論ができた。
・多様性がよくわかった。地域連携の意義。
・地域とのつながりについて考えることができました。
・具体的事例に色々とヒントがあった。
・留意すべきことについてつかめれた。
・学校の先生のとらえ方について理解が進んだ。
・知らないことがたくさんありました。

●どちらでもない
・浅い実践については、しっかりと検討する必要もある。

■本企画は、ESD授業づくりに参考になりましたか。参考になったこと、気づかれたことなどをお聞かせください。

なった	28名
ならなかった	0名
どちらでもない	2名
無回答	1名
合計	31名



[理由をお聞かせください]

●なった

・継続性。

・子ども主体のプログラムであるべき。

・多様な方々が多くて気づきを持てたと思う。

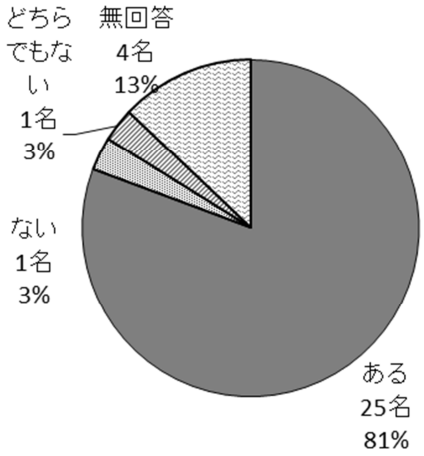
・地域の教育力の存在と、協力の可能性がひらけた。

●どちらでもない

・教師ではないので・・・

■ESDを実践するに当たり、課題と感じていることがあればお聞かせ下さい。また、ESD実践を拡大するために何が必要だと思いますか。

ある	25名
ない	1名
どちらでもない	1名
無回答	4名
合計	31名



[理由をお聞かせください]

●ある

・地域との連携。

・言うほど、越境（学校と地域？）は簡単ではないから、がんばりましょう！

・組織としての学校が全教員をまきこんで ESD を多面的に進めるためにどうすべきか。

・ESD は進んできているが、まだまだ不十分といえる。

・地域とのつながりをどうしていくか。

・学校と地域のつながりの方法、地域により多様であろう。

・文科省が ESD を全面に出して進めること。

・学校も地域の方も双方スキルを高めたい。

・地域の自主性に頼るだけでなく、学校からのアプローチも必要。地域での話し合う場の設定。

・市（町村）教委、管理職への働きかけ。教員の根本 discussion（何を教えたいのか）。

・ESD はすごく大事だけれど広まるためには、時間と費用が必要。学校にはその余裕があまりない。

・ESD を地域と連携し推進する為に地域への関心の拡大。

・ESD の理解を一般国民にもっと知らせる。ステークホルダーの交流、共有を！
・学校も地域も関係者も、互いに理解を深めること。
・他機関、場、人をどうつなげるか。
・地域の思い（スキル）と学校の思いとのギャップがおこりがちであることが認識できた。

●ない
・学校の理解、地域ベースでの各地のESD意識の広がり。

●無回答
・学校、社会全体への広報と共有。学校での人的リソース、多忙感からは広がっていかない。

■本企画に参加されてのご提案、気づかれたこと、改善点、今後のESD企画へのご要望などお聞かせ下さい。
・企業の方を交えた企画。
・午後の発表は時間オーバーが多く、ルールを守っていないのは大きな問題である。時間を守れない教師の悪い面が表にでていて恥ずかしさを感じる。地域の方が入りにくいのは学校独特の雰囲気やプライド、悪い習慣などがあるのではないかと感じた。
・話し合いで、隣グループの間がせまく、話しづらい時があった。
・参加者の ESD に関する理解度、実践度合いに応じて分科会も必要になってきているかもしれません。1 年ごとの課題を明確にしてある程度時間をかけて実践を分析することが重要です。社会教育に関する企画を。
・力のある先生とお話させていただき、大変勉強になる 1 日でした。ありがとうございました。
・1 泊 2 日の内容にしてもよいと思います。時間がもう少しあるといいですし、その後の懇談会もあるとよいですね。
・アンケート①、②を一枚にまとめていただけたらありがたいです。（内容が重複しているので）大変有意義な時間となりました。ありがとうございました。
・その他、提案者の内容、あるいは提案者を絞ってじっくり ESD を考えてみる。
・学校との仲介役を果たしたい。
・いろいろな学校、先生方、NPO、ユネスコ協会の方々の話をきくことができてとても刺激を受けました。あす or 3 学期からまたがんばろうという気持ちになりました。ありがとうございました。

⑥金沢会場　第２回 「子どもの学びを学校と地域が一緒につくる」ワークショップ　参加者アンケートシート

子どもが輝く授業をみんなでつくるワークショップ　アンケート②

本企画にご参加いただき、ありがとうございました。今後の事業の改善のために皆様のご意見を伺いたく思います。ご協力いただけると幸いです。

特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ

②「子どもの学びを学校と地域が一緒につくる」ワークショップ

１．本企画への参加動機をお聞かせください。複数回答可

□企画主旨に興味があった

□出演者に興味があった

□企画内容に興味があった

→□ESD 授業づくり報告(□東海)

□フリップレポート「学校と地域が一緒につくった ESD 授業」

□「学校と地域が連携した授業づくり」ワークショップ

□他（　　）

□ESD に興味があった

□学校と地域の連携に興味があった

□学校、及び地域での学習活動、及び体験活動を展開する参考にしたかった

□他（　　）

●具体的にお聞かせください。

２．本企画についてのご感想等についてお聞かせください。

①「ESD 授業づくり報告」（東海の授業報告）

□とてもよかった　□よかった　□あまりよくなかった　□よくなかった　□どちらでもない

②フリップレポート「学校と地域が一緒につくった ESD 授業」

□とてもよかった　□よかった　□あまりよくなかった　□よくなかった　□どちらでもない

③「学校と地域が連携した授業づくり」ワークショップ

□とてもよかった　□よかった　□あまりよくなかった　□よくなかった　□どちらでもない

④企画全体

□とてもよかった　□よかった　□あまりよくなかった　□よくなかった　□どちらでもない

●理由をお聞かせください。

⇒裏へつづく

3．本企画に参加して、ESD への理解が深まりましたか。

□はい　□いいえ　□どちらでもない

●理由をお聞かせください。

4．本企画は、ESD 授業づくりに参考になりましたか。参考になったこと、気づかれたことなどお聞かせください。

□なった　□ならなかった　□どちらでもない

●理由をお聞かせください。

5．ESD を実践するに当たり、課題と感じていることがあればお聞かせください。また、ESD 実践を拡大するためには何が必要だと思いますか。

□ある　□ない　□どちらでもない

●理由をお聞かせください

6．本企画に参加されてのご提案、気づかれたこと、改善点、今後の ESD 企画へのご要望などお聞かせください。

【ご自身についてお聞かせください】

[所属]□学生（中・高・大）　□会社員　□行政職員　□教員（小・中・高・大・他）　□NPO・団体職員
□他（　　）

[年代] □～10 代　□20 代　□30 代　□40 代　□50 代　□60 代　□70 代～

[ESD 活動]

①ESD の活動をしていますか。 □している　□していない

②ESD 活動で特に育みたい力はなんでしょうか。 ※複数回答可

□思考力　□判断力　□表現力　□責任意識　□自律心　□思いやり　□協調性　□批判力　□積極性　□リーダーシップ
□分析能力　□自尊心　□多面的にものを見る力　□コミュニケーション力　□自然尊重の精神　□情報収集能力
□その他（　　）

今後 ESD に関する事業のお知らせをご希望の方は、下記お名前とメールアドレスなどご連絡先をご明記ください。

お名前　　メールアドレス（ご連絡先）：

※個人情報は適切に管理いたします。いただい個人情報は ESD 関連事業の案内のみに使用いたします。

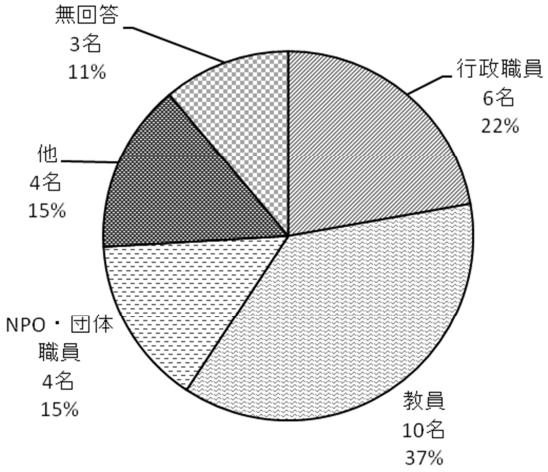
ありがとうございました。特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ
環境省中部環境パートナーシップオフィス

⑦名古屋会場　第 1 回 「ESD 授業のつくりかた」ワークショップ　参加者アンケート結果

■参加者について

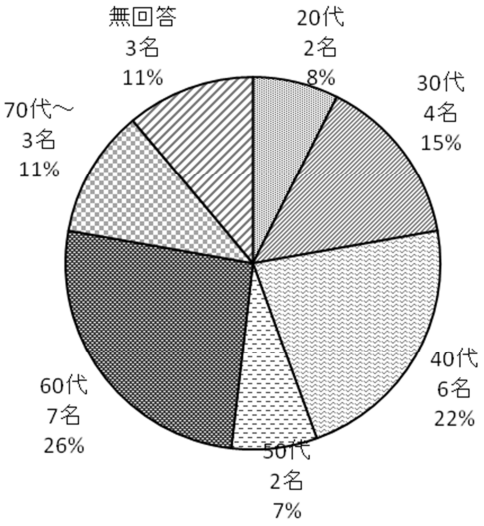
[所属]

学生	0名
会社員	0名
行政職員	6名
教員	10名
NPO・団体職員	4名
他	4名
無回答	3名
合計	27名



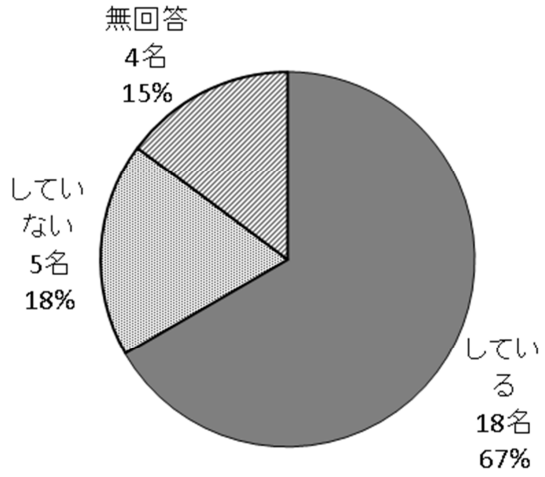
[年代]

～10代	0名
20代	2名
30代	4名
40代	6名
50代	2名
60代	7名
70代～	3名
無回答	3名
合計	27名



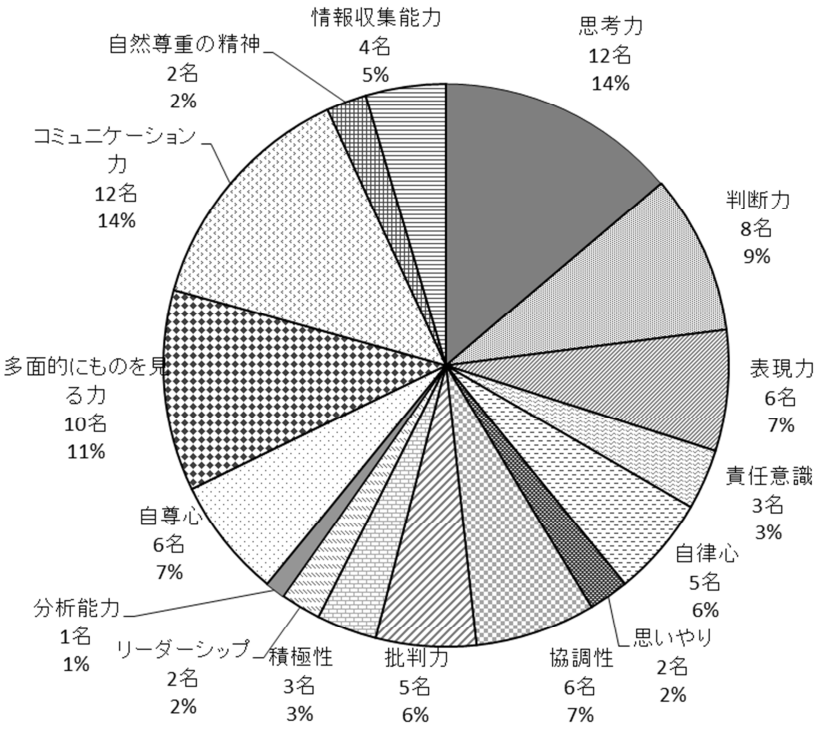
[ESD活動をしていますか]

している	18名
していない	5名
無回答	4名
合計	27名



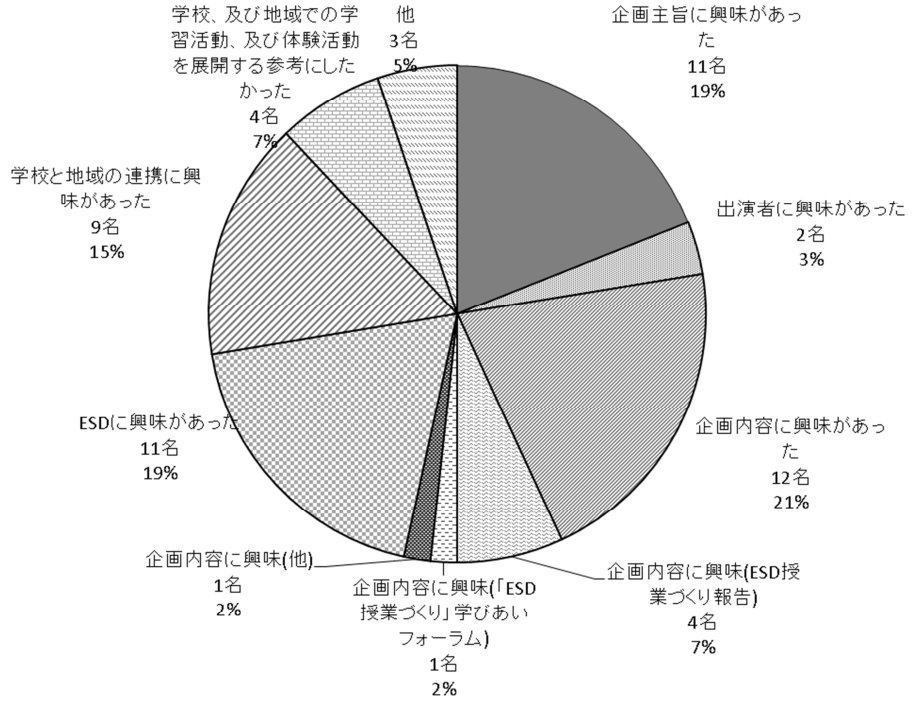
[ESD活動で特に育みたい力はなんでしょうか(複数回答可)]

思考力	12名
判断力	8名
表現力	6名
責任意識	3名
自律心	5名
思いやり	2名
協調性	6名
批判力	5名
積極性	3名
リーダーシップ	2名
分析能力	1名
自尊心	6名
多面的にものを見る力	10名
コミュニケーション力	12名
自然尊重の精神	2名
情報収集能力	4名
その他	0名



■本企画への参加動機をお聞かせください。(複数回答可)

企画主旨に興味があった	11名
出演者に興味があった	2名
企画内容に興味があった	12名
企画内容に興味(ESD授業づくり報告)	4名
企画内容に興味(「ESD授業づくり」学びあいフォーラム)	1名
企画内容に興味(他)	1名
ESDに興味があった	11名
学校と地域の連携に興味があった	9名
学校、及び地域での学習活動、及び体験活動を展開する参考にしたかった	4名
他	3名



■「他」の内容

・環境省中部事務所事業として

・参加者との交流

[具体的にお聞かせください]

・VNS からご案内いただきました。元々板山小の「ビオトープの再生」ワーキンググループで計画されていた。

・他の学校の ESD の取組を知り、自校に活かしていきたいという思いがあった。

・参加が前提になっていたように思います。

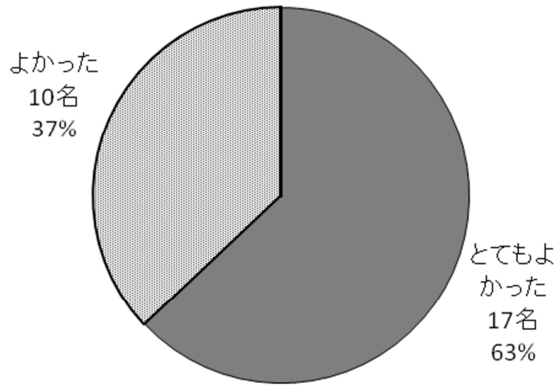
・色々のケースを聞けて参考になった。

・連携している学校の先生が報告者として出ていたため。

■本企画についてのご感想についてお聞かせください。

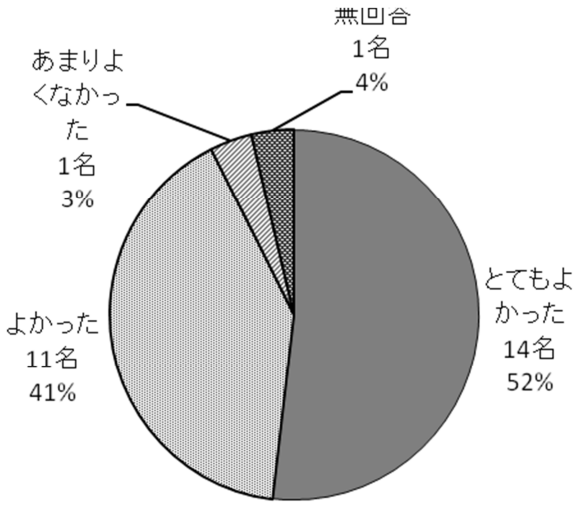
●「ESD授業づくり報告」

とてもよかった	17名
よかった	10名
あまりよくなかった	0名
よくなかった	0名
どちらでもない	0名
無回答	0名
合計	27名



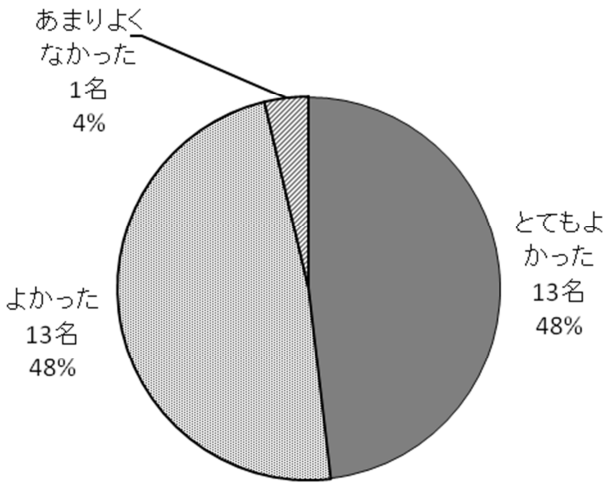
●「ESD授業づくり」学び合いワークショップ

とてもよかった	14名
よかった	11名
あまりよくなかった	1名
よくなかった	0名
どちらでもない	0名
無回答	1名
合計	27名



●企画全体

とてもよかった	13名
よかった	13名
あまりよくなかった	1名
よくなかった	0名
どちらでもない	0名
無回答	0名
合計	27名



[理由をお聞かせください]

●とてもよかった

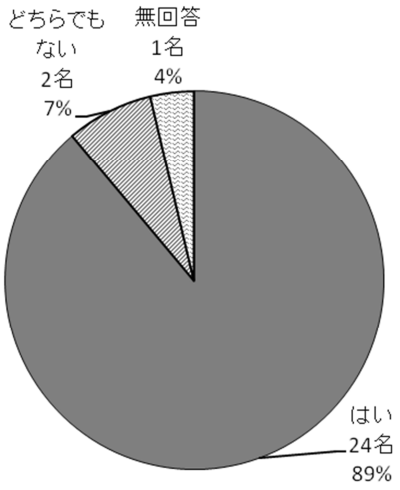
・聞きたい取り組みについて、生の声を聞けて大変勉強になりました。

・時間がもう少し欲しかった。後半、複数関われるとよかった。

・他の方々、違う立場の方々の意見は大変役立つ。
・実践例が興味深まった。
・地域とのつながりを大切にしている学校が多くほっとする。
・ディスカッションが活発に出来て良かった。
●よかった
・中部7県の小中高のESD授業の実践状況が分かりました。「学校登山」から地域の水、自然に問題点を見つけESD授業にするなど、さまざまなやりかたでESDを探っているのがよかった。
・他県の授業づくりについて学べてよかった。ワークショップは実証授業等の概要説明が不十分でうまく交流できなかった。
・細かな事にまで配慮されていてよかった。
・時間が足りない。
・エネルギッシュな方が多いので、面白く感じた。
・多くの事例を聞けたのは良かった。話し合いをもっとしたかった。
・企画趣旨・内容は良かった。もう少し（1.5倍くらい）時間があれば、より深く掘り下げて議論出来たと思う。
・あわただしく、授業実践をもう少し丁寧に聞きたい。
・授業作りと地域の交流がなければ出来ない。
●あまりよくなかった
・エネルギッシュな方が多いので、面白く感じた。

■本企画に参加して、ESDへの理解が深まりましたか

はい	24名
いいえ	0名
どちらでもない	2名
無回答	1名
合計	27名

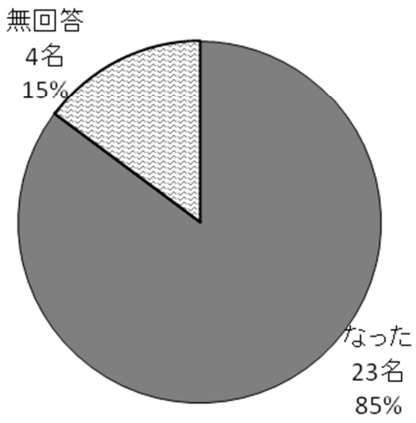


[理由をお聞かせください]
●はい
・国際交流として5カ国の5名の国際交流員と交流し、外国人の考え方、生き方を学ぶ例。これもESDの実例との理解も深まった。
・実際の例を聞いて理解が深まった。
・よかったです。勉強になりました。
・他県の様子が直接聞けたのがよかった。
・アプローチ方法が多様で勉強になりました。
・多様な事例とその成果を知ることができた。
●どちらでもない
・ESDというよりは、こういう授業がおもしろいなという授業案がたくさん知れて良かった。

・深まった面もあるが、そうでない面もある。大切なことは深まったと思う人が増えることでしょう。

■本企画は、ESD授業づくりの参考になりましたか。参考になったこと、気づかれたことなどお聞かせください。

なった	23名
ならなかった	0名
どちらでもない	0名
無回答	4名
合計	27名



[理由をお聞かせください]

●なった

・実際の現場のとりくみについて、テーブルで聞きたいポイントをきくことができた。

・既存の「地域版ESD環境教育プログラムガイドブック」を更に拡充されていくことになり、参考になりました。

・自校と似たような立地、環境の学校は特に参考にしやすい。すこしマネして自校でも取り入れたい。

・いろいろな切り口が紹介され参考になった。

・石川県の発表を聞いて、教員が育つしくみみたいなものを感じたから。

・学校の課題解決が第一。

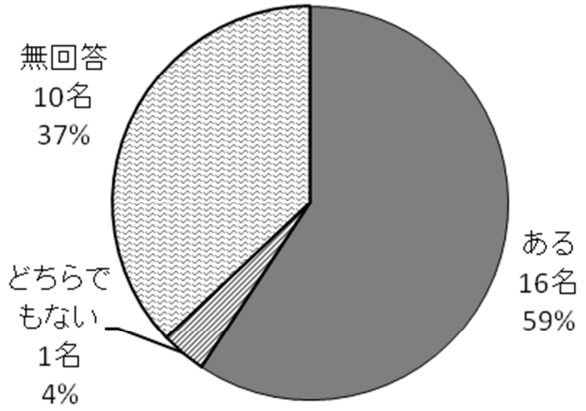
・子ども達の変容に基づく評価。

●無回答

・紙と発表との違いが参考になった。

■ESDを実践するにあたり、課題として感じられていることがあればお聞かせください。また、ESD実践を拡大するためには何が必要だと思いますか。

ある	16名
ない	0名
どちらでもない	1名
無回答	10名
合計	27名



[理由をお聞かせください]

●ある

・学校(教員)の負担感なくESDを導入すること。→自由度を残しつつ多くの教員がとりくみやすいESDのガイド書、指南書や研修。

・「ESD推進のためのコンソーシアム」の構想はすでに文科省から出ていて、北陸では既にESDコーディネーターがいらっしゃるようですが、他の地方に広める必要ある。コーディネーター群(人ではなく複数人)がよいと思います。(NPO・環境省・文科省連携の)

・街中の学校、大規模校でどのようにこういう活動を具体化していくか。

・共通理解と共通協働。

・教師のESDに対する理解。

・学校全体で力を入れること。理解者（ESD）を増やすこと。

・チャレンジする時間、組織の風土。

・ESDという言葉がまだ浸透していない。

・学校から地域への発信がなかなかできていないが…

●どちらでもない

・学年を越えた取組はESDにかぎらず、少ないし、難しい。

●無回答

・ESDは進展のプロセス。それをどう追いかけるか、そのための手法が適用されるようになると良い。

・地域との交流。

■本企画に参加されてのご提案、気づかれたこと、改善点、今後のESD企画へのご要望などお聞かせください。

・学校(学年)の課題を解決するためのESDであるべきか、ということ。

・「普及啓発の冊子」作成の構想があったと思いますが、その実現とコンソーシアムを各地につくり、コーディネーター群を設置公表したら容易と思います。学校側も要望している様です。一方、ESD教員の研修制度など、ESD教員の増強も不可欠。

・もう少し事例をしぼって深めていると良いと思います。意見の共有ができていません。今後に期待でしょう。

・啓発やPRが大切か。

⑧名古屋会場　第1回 「ESD授業のつくりかた」ワークショップ　参加者アンケートシート

第１回

子どもが輝く授業をみんなでつくるワークショップ
「ESD 授業のつくりかた」ワークショップ　アンケート

本企画にご参加いただき、ありがとうございました。今後の事業の改善のために皆様のご意見を伺いたく思います。ご協力いただけると幸いです。

特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ

１．本企画への参加動機をお聞かせください。複数回答可

□企画主旨に興味があった
□出演者に興味があった
□企画内容に興味があった
→□ESD 授業づくり報告
□「ESD 授業づくり」学びあいワークショップ
□他（　　）
□ESD に興味があった
□学校と地域の連携に興味があった
□学校、及び地域での学習活動、及び体験活動を展開する参考にしたかった
□他（　　）

●具体的にお聞かせください。

２．本企画についてのご感想等についてお聞かせください。

①「ESD 授業づくり報告」

□とてもよかった　□よかった　□あまりよくなかった　□よくなかった　□どちらでもない

②「ESD 授業づくり」学び合いワークショップ

□とてもよかった　□よかった　□あまりよくなかった　□よくなかった　□どちらでもない

③企画全体

□とてもよかった　□よかった　□あまりよくなかった　□よくなかった　□どちらでもない

●理由をお聞かせください。

３．本企画に参加して、ESD への理解が深まりましたか。

□はい　□いいえ　□どちらでもない

●理由をお聞かせください。

⇒裏へつづく

4．本企画は、ESD 授業づくりに参考になりましたか。参考になったこと、気づかれたことなどお聞かせください。

□なった　□ならなかった　□どちらでもない

●理由をお聞かせください。

5．ESD を実践するに当たり、課題と感じていることがあればお聞かせください。また、ESD 実践を拡大するためには何が必要だと思いますか。

□ある　□ない　□どちらでもない

●理由をお聞かせください

6．本企画に参加されてのご提案、気づかれたこと、改善点、今後の ESD 企画へのご要望などお聞かせください。

【ご自身についてお聞かせください】

[所属]□学生（中・高・大）　□会社員　□行政職員　□教員（小・中・高・大・他）　□NPO・団体職員
□他（　　）

[年代] □～10 代　□20 代　□30 代　□40 代　□50 代　□60 代　□70 代～

[ESD 活動]

①ESD の活動をしていますか。　□している　□していない

②ESD 活動で特に育みたい力はなんでしょうか。　※複数回答可

□思考力　□判断力　□表現力　□責任意識　□自律心　□思いやり　□協調性　□批判力　□積極性
□リーダーシップ　□分析能力　□自尊心　□多面的にものを見る力　□コミュニケーション力　□自然尊重の精神
□情報収集能力
□その他（　　）

今後 ESD に関する事業のお知らせをご希望の方は、下記お名前とメールアドレスなどご連絡先をご明記ください。

お名前　　メールアドレス（ご連絡先）：

※個人情報は適切に管理いたします。いただいた個人情報は ESD 関連事業の案内のみに使用いたします。

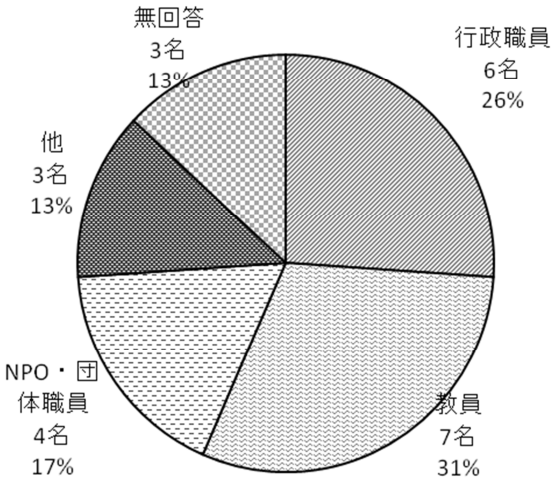
ありがとうございました。特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ
環境省中部環境パートナーシップオフィス

⑨名古屋会場　第２回「子どもの学びを学校と地域が一緒につくる」ワークショップ　参加者アンケート結果

■参加者について

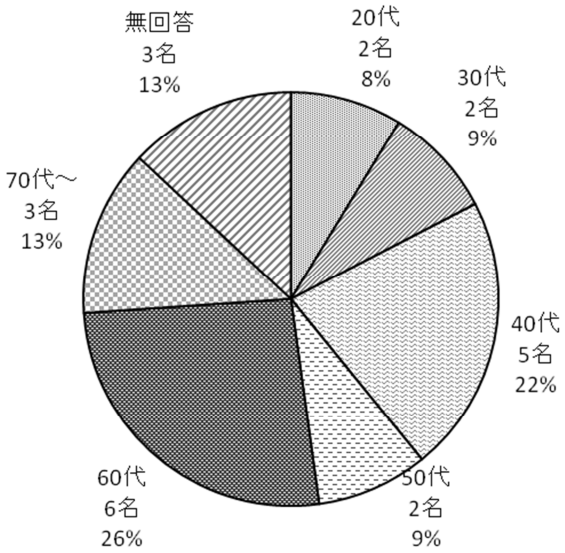
[所属]

学生	0名
会社員	0名
行政職員	6名
教員	7名
NPO・団体職員	4名
他	3名
無回答	3名
合計	23名



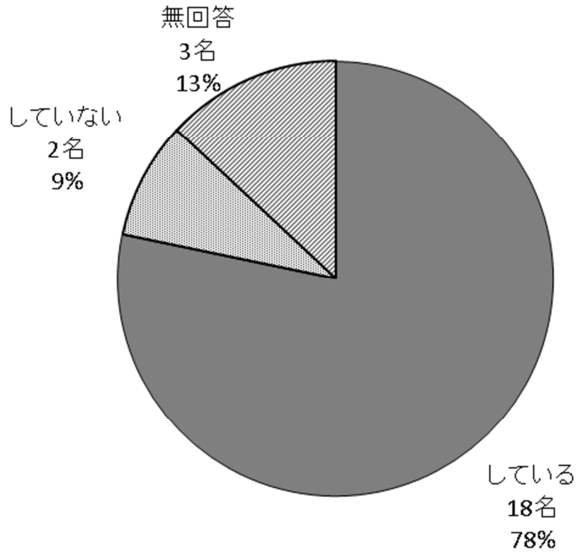
[年代]

～10代	0名
20代	2名
30代	2名
40代	5名
50代	2名
60代	6名
70代～	3名
無回答	3名
合計	23名



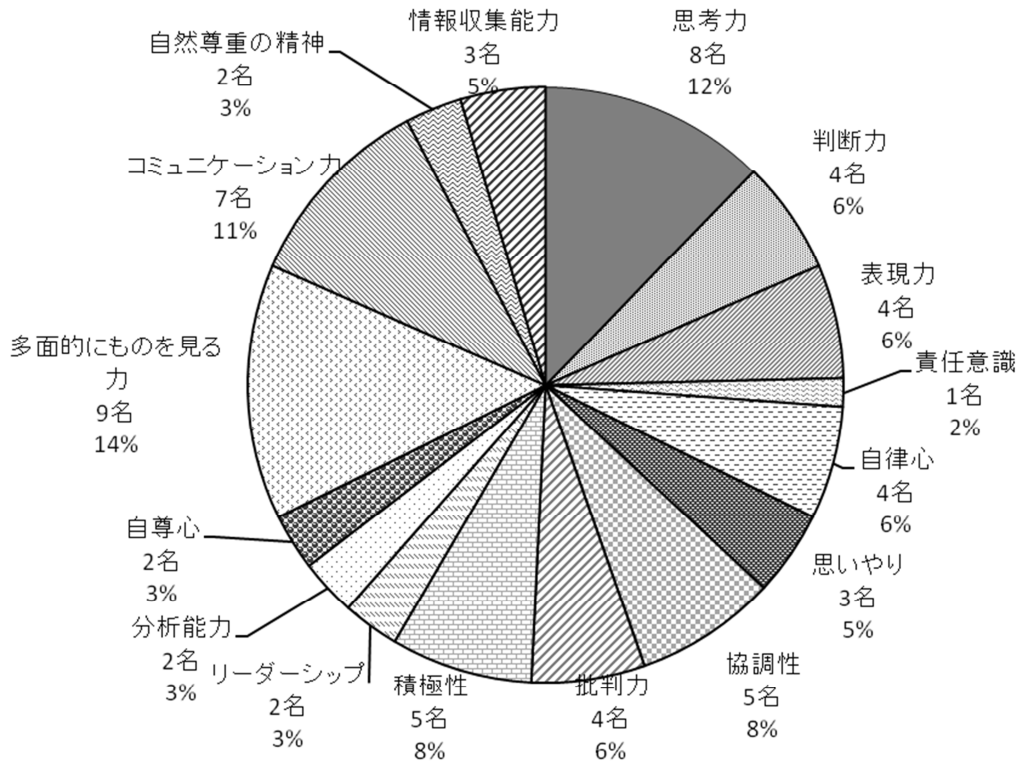
[ESD活動をしていますか]

している	18名
していない	2名
無回答	3名
合計	23名



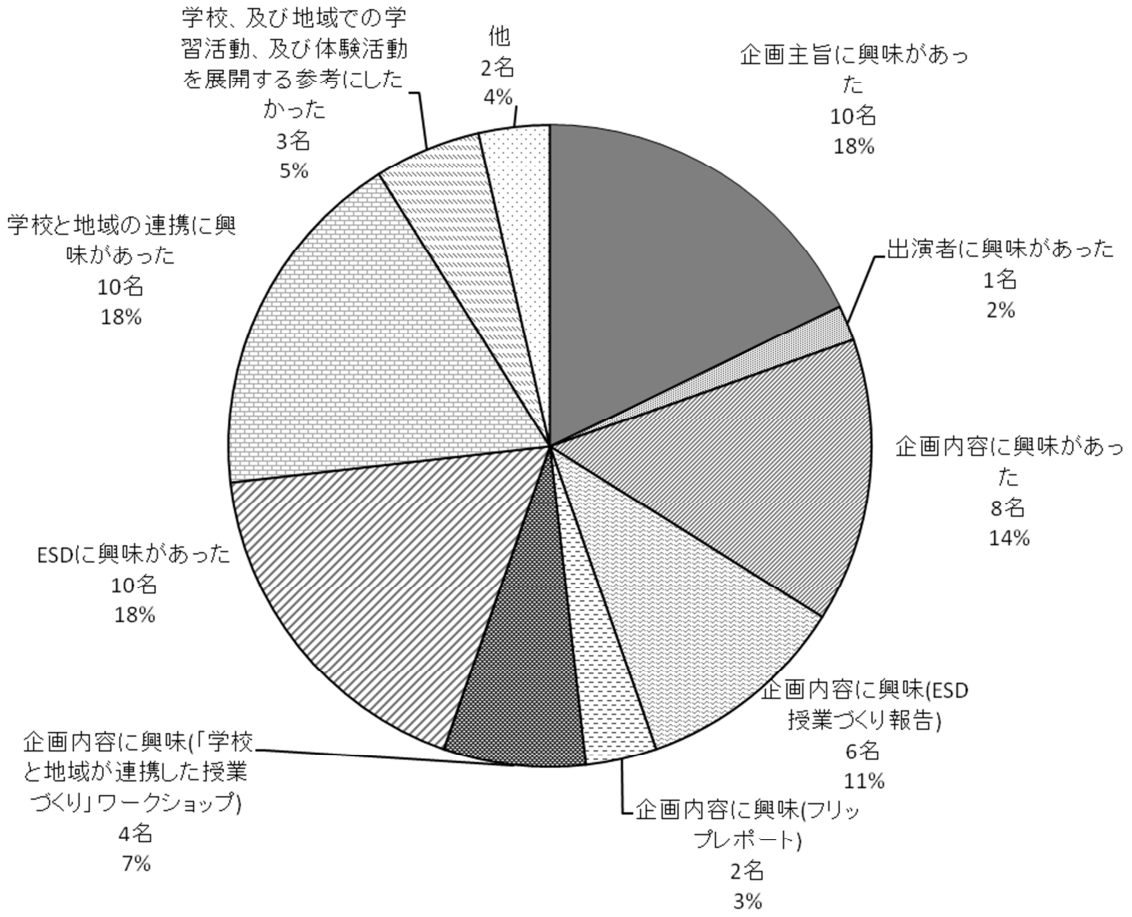
■ESD活動で特に育みたい力はなんでしょうか(複数回答可)

思考力	8名
判断力	4名
表現力	4名
責任意識	1名
自律心	4名
思いやり	3名
協調性	5名
批判力	4名
積極性	5名
リーダーシップ	2名
分析能力	2名
自尊心	2名
多面的にものを見る力	9名
コミュニケーション力	7名
自然尊重の精神	2名
情報収集能力	3名
その他	0名



■本企画への参加動機をお聞かせください。(複数回答可)

企画主旨に興味があった	10名
出演者に興味があった	1名
企画内容に興味があった	8名
企画内容に興味(ESD授業づくり報告)	6名
企画内容に興味(フリップレポート)	2名
企画内容に興味(「学校と地域が連携した授業づくり」ワークショップ)	4名
企画内容に興味(他)	0名
ESDに興味があった	10名
学校と地域の連携に興味があった	10名
学校、及び地域での学習活動、及び体験活動を展開する参考にしたかった	3名
他	2名



[具体的にお聞かせください]

・地域の専門家、実線家のネットワークをつくり、ESD教育の一助となりたい。

・実践された内容がよくわかった。

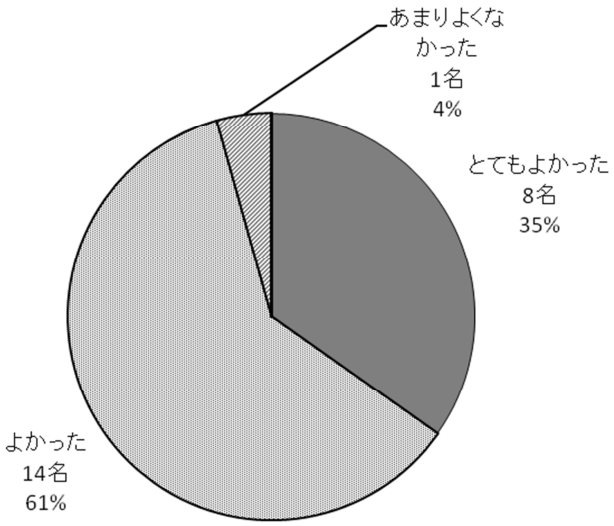
・地域人として地域の学校に関わっていきたいので。

・社会教育分野におけるESDの進展について。

■本企画についてのご感想についてお聞かせください。

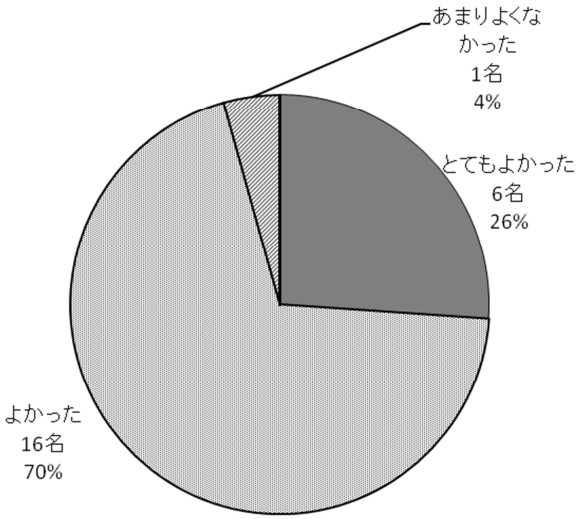
●「ESD授業づくり報告」「地域の課題を教材にする」

とてもよかった	8名
よかった	14名
あまりよくなかった	1名
よくなかった	0名
どちらでもない	0名
無回答	0名
合計	23名



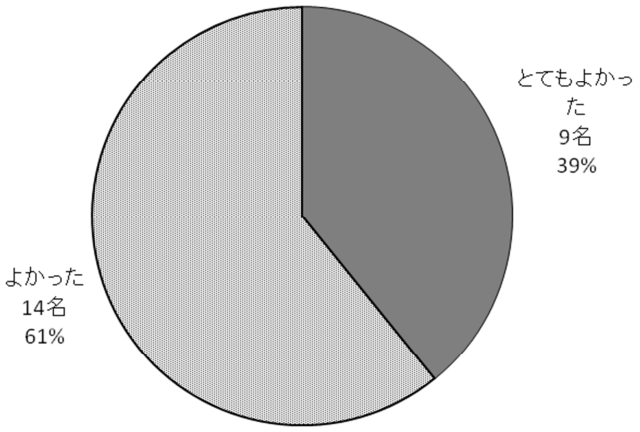
●フリップレポート「学校と地域一緒につくったESD授業」

とてもよかった	6名
よかった	16名
あまりよくなかった	1名
よくなかった	0名
どちらでもない	0名
無回答	0名
合計	23名



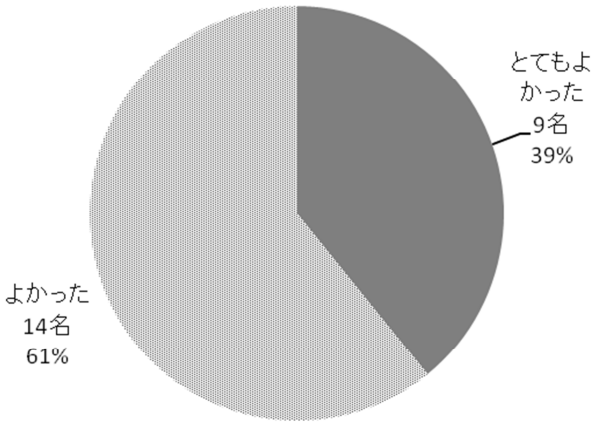
●「学校と地域が連携した授業づくり、学校づくり、地域づくり」ワークショップ

とてもよかった	9名
よかった	14名
あまりよくなかった	0名
よくなかった	0名
どちらでもない	0名
無回答	0名
合計	23名



●企画全体

とてもよかった	9名
よかった	14名
あまりよくなかった	0名
よくなかった	0名
どちらでもない	0名
無回答	0名
合計	23名



[理由をお聞かせください]

●とてもよかった

・無知が幼稚園児くらいになれたかな？

・もう少し時間があるといいです。

・実例をたくさん知ることが出来た。

●よかった

・フリップレポートで同業（？）の富山ユネスコ協会のお話しは大変参考になりました。「フェース to フェース」の交渉、書き損じハガキの集め方、ESDパスポートの運用など、富山は立派です。ESDコーディネーターもやられている由。貢献されています。

・多くの人の意見が聞けて良かった。

・地域の中心となって活動して見える方の意見が聞けて良かった。

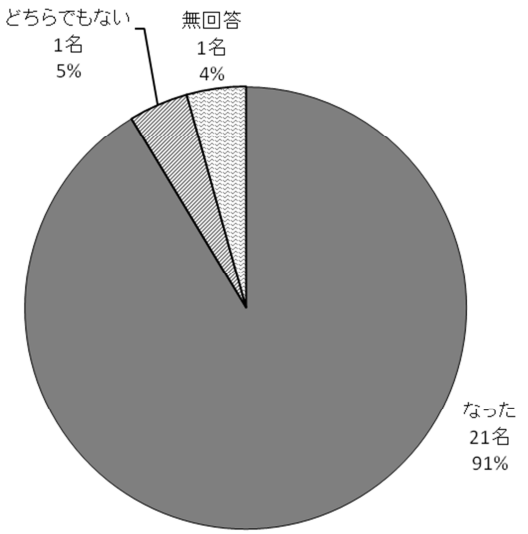
・自分よりもっと深いところまで考えている方々と話せて、自分の考えも少し深まったように感じた。

・皆さんの熱意が伝わってくる。

・現在の社会教育分野のステークホルダーの参加。

■本企画に参加して、ESDへの理解が深まりましたか。

はい	21名
いいえ	0名
どちらでもない	1名
無回答	1名
合計	23名



[理由をお聞かせください]

●はい

・教育中地域とあまり深い立ち位置ではないが、多くの方々の発表を聞いて近づけた気がする。

・ESD教育はワンパターンではなく多様な目標と多様な手段があることを改めて認識した。

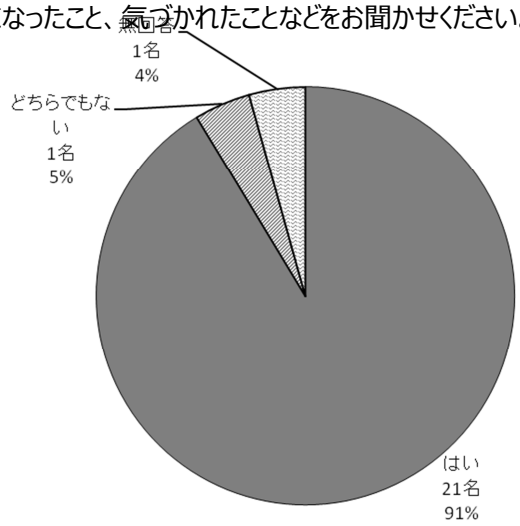
・深い話が聞けたから。

・さまざまな課題がわかった。

・他地域でのESDの実情から考える視点をもらった。

■本企画は、ESD授業づくりに参考になりましたか。参考になったこと、気づかれたことなどをお聞かせください。

なった	21名
ならなかった	0名
どちらでもない	1名
無回答	1名
合計	23名



[理由をお聞かせください]

●なった

・いろいろな意見を聞けたことがよかった。

・オープンエンドが多いパターンなので不安はあるが、うまくとりまわしている事例を聞いて力強く感じた。

・何に取り組むべきか、少なくともその候補を上げてもらったように思う。

・カリキュラムの話が参考になった。

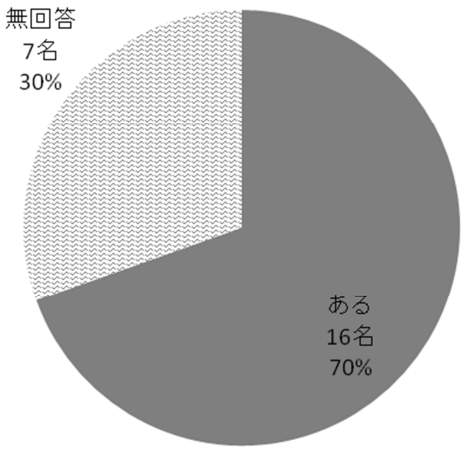
・CDの立ち位置について、より明確になりました。

・地域の人との関わり方のヒントを少し得た気がする。

・地域のあり方を強調される方多く、今後の課題方向もみえてきた。

■ESDを実践するに当たり、課題と感じていることがあればお聞かせ下さい。また、ESD実践を拡大するために何が必要だと思いますか。

ある	16名
ない	0名
どちらでもない	0名
無回答	7名
合計	23名



[理由をお聞かせください]
●ある
・個人のスキルにならぬような仕組み。
・学校の中の要望をはっきりする。地域の出来ることを提示する。あとは対話です。
・学校、地域のそれぞれと交渉する窓口作り。
・教員への周知、教育委員会の支援機能。
・学校現場では教科の時間をしっかりとって学力向上に向けたプレッシャーがあるかと思います。授業プログラム内容と目標にどういった時間のすみかえ（ベテランの先生は上手にやれますが若手先生はできないので）をしていったのか、そういった場合の理解も必要かと思います。
・地域、外部諸師の方とのつながりを学校が積極的にもつこと。何をその方から学びだしたかを明確にもつこと。
・学校職員全体の共通理解。
・小さい子どもでもまず実践。
・ESDにおける準備、準備基準について。
●無回答
・本プロジェクトのアルムニを作って欲しい。
・研究指定校から全域への普及をどうするか。

■本企画に参加されてのご提案、気づかれたこと、改善点、今後のESD企画へのご要望などお聞かせ下さい。
・全体を通じたロジックが大切。当初よりは随分と改善されたと思います。
・このようなワークショップをたくさん開催され、様々な教師が参加出来ることを望みます。
・学校と地域の情報ギャップが大きい。対話の場が大事だと感じた。
・今後の実践事例を引き続き情報発信して欲しい。
・自分の考えがまだまだ浅いなと感じた。
・地域毎にESDを進める様々なしくみや工夫がある事を知った。地元でも紹介して進めたい！
・次年度以降も継続を。

⑪名古屋会場　第２回「子どもの学びを学校と地域が一緒につくる」 参加者アンケートシート

第２回

子どもが輝く授業をみんなでつくるワークショップ
「子どもの学びを学校と地域が一緒につくる」ワークショップ　アンケート

本企画にご参加いただき、ありがとうございました。今後の事業の改善のために皆様のご意見を伺いたく思います。ご協力いただけると幸いです。

特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ

１．本企画への参加動機をお聞かせください。複数回答可

□企画主旨に興味があった
□出演者に興味があった
□企画内容に興味があった
→□ESD 授業づくり報告
□フリップレポート「学校と地域が一緒につくった ESD 授業」
□「学校と地域が連携した授業づくり」ワークショップ
□他（　　）
□ESD に興味があった
□学校と地域の連携に興味があった
□学校、及び地域での学習活動、及び体験活動を展開する参考にしたかった
□他（　　）

●具体的にお聞かせください。

２．本企画についてのご感想等についてお聞かせください。

①ESD 授業づくり報告「地域の課題を教材にする」
□とてもよかった　□よかった　□あまりよくなかった　□よくなかった　□どちらでもない

②フリップレポート「学校と地域が一緒につくった ESD 授業」
□とてもよかった　□よかった　□あまりよくなかった　□よくなかった　□どちらでもない

③「学校と地域が連携した授業づくり、学校づくり、地域づくり」ワークショップ
□とてもよかった　□よかった　□あまりよくなかった　□よくなかった　□どちらでもない

④企画全体
□とてもよかった　□よかった　□あまりよくなかった　□よくなかった　□どちらでもない

●理由をお聞かせください。

⇒裏へつづく

3．本企画に参加して、ESD への理解が深まりましたか。

□はい　□いいえ　□どちらでもない

●理由をお聞かせください。

4．本企画は、ESD 授業づくりに参考になりましたか。参考になったこと、気づかれたことなどお聞かせください。

□なった　□ならなかった　□どちらでもない

●理由をお聞かせください。

5．ESD を実践するに当たり、課題と感じていることがあればお聞かせください。また、ESD 実践を拡大するためには何が必要だと思いますか。

□ある　□ない　□どちらでもない

●理由をお聞かせください

6．本企画に参加されてのご提案、気づかれたこと、改善点、今後の ESD 企画へのご要望などお聞かせください。

【ご自身についてお聞かせください】

[所属]□学生（中・高・大）　□会社員　□行政職員　□教員（小・中・高・大・他）　□NPO・団体職員
□他（　　）

[年代] □～10 代　□20 代　□30 代　□40 代　□50 代　□60 代　□70 代～

[ESD 活動]

①ESD の活動をしていますか。 □している　□していない

②ESD 活動で特に育みたい力はなんでしょうか。 ※複数回答可

□思考力　□判断力　□表現力　□責任意識　□自律心　□思いやり　□協調性　□批判力　□積極性　□リーダーシップ
□分析能力　□自尊心　□多面的にものを見る力　□コミュニケーション力　□自然尊重の精神　□情報収集能力
□その他（　　）

今後 ESD に関する事業のお知らせをご希望の方は、下記お名前とメールアドレスなどご連絡先をご明記ください。

お名前　　メールアドレス（ご連絡先）：

※個人情報は適切に管理いたします。いただいた個人情報は ESD 関連事業の案内のみに使用いたします。

ありがとうございました。特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ
環境省中部環境パートナーシップオフィス

⑫広報用チラシ

[金沢開催]

[名古屋開催]

(2)周知啓発冊子の作成

3年間実施した本事業の成果をまとめ、地域におけるESD環境教育プログラムの実践の拡大につながる「ツール」、「ESD授業づくりをしたい」「ESDに取り組みたい」という教員、学校、地域の実践者に役立つ、活用される冊子を作成した。

①冊子企画

タイトル：ESD授業のつくりかたー22のエピソードー

仕　様：A4サイズ、49ページ、フルカラー

印刷部数：1,000部

②作成のプロセス

●形成推進委員会・検証委員会等に冊子構成案を提示し、内容について意見をいただき、必要に応じて、各委員やワーキングメンバーにヒアリングを行い、掲載内容を検討・決定。

●ヒアリングをまとめ、原稿の作成作業。写真等掲載素材を収集。

●取材、座談会等企画をつくり、実施し、内容をまとめる。

●ESD授業に取り組みたくなるようなデザインにするためにデザイナーと相談。

●わかり易い文章、読みやすいデザインにすることを重視し、原稿を作成。

●印刷

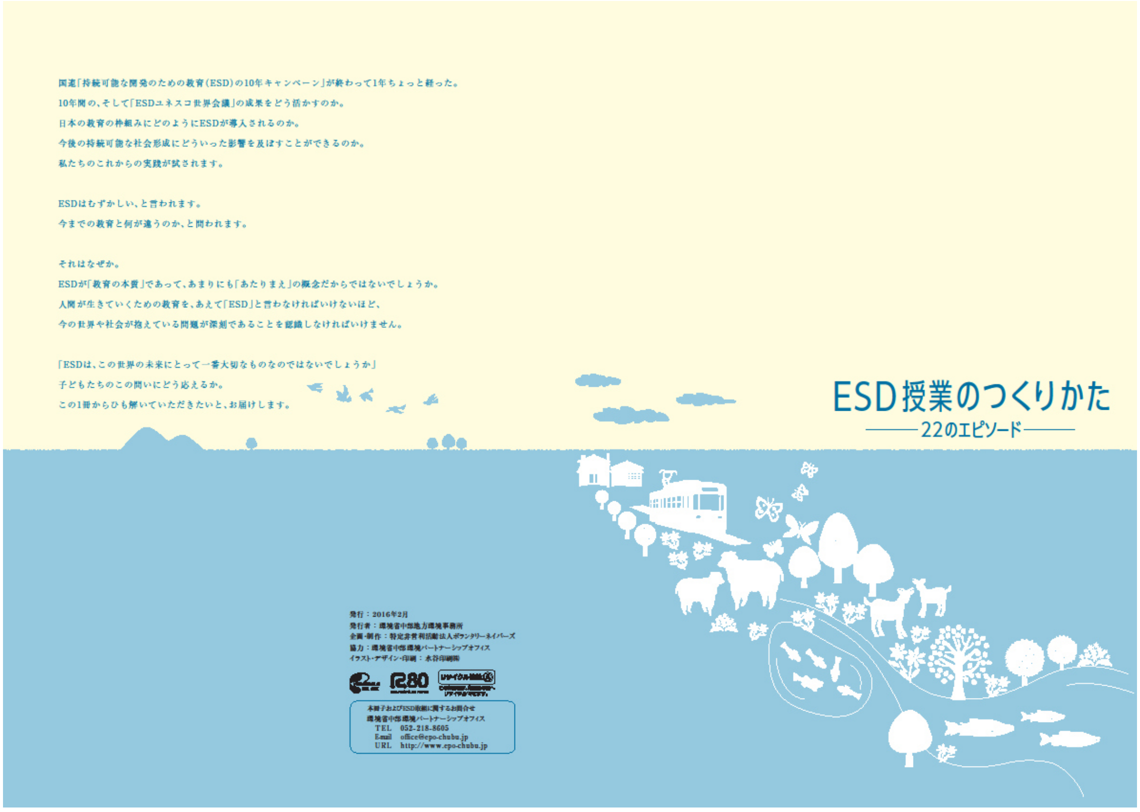
③作成スケジュール

時期	作業内容	協議・確認・取材
11～12月	●冊子構成・内容等たたき台案作成 ●形成推進委員会、検証委員会にて内容の検討 ●冊子内容決定	●12月3日第2回形成推進委員会にて冊子の方向性を協議/形成推進委員会委員ヒアリング ●12月17日検証委員会にて冊子内容の確認 ●12月26日周知啓発ワークショップ（金沢）にてヒアリング
1月	●原稿作成 ●取材・座談会企画つめ ●映像教材活用法の検討・決定	●授業紹介原稿作成、学校との原稿確認作業
2月	●最終原稿作成 ●デザイン・印刷原稿作成 ●デザイン原稿確認・修正（3週間） ●印刷（2週間）	●2月9日第3回形成推進委員会にてたたき台原稿検討 ●2月18日の周知啓発ワークショップ原稿作成 ●冊子

④冊子構成

ページ	タイトル	内容
表紙	はじめに 目次	本冊子の作成に当たってのメッセージを掲載
2～3 （2Ｐ）	ESD授業のつくりかた	本事業において実施されたESD授業の作り方を掲載
4～5 （2Ｐ）	22のエピソード 子どもが輝くESD授業をつくりだした 中部7県ESD　MAP	中部7県実施した学校の紹介マップと、形成推進委員会、各県ワーキングメンバーの紹介、3年間実施してのデータ（実施した学校数、授業数授業を受けた児童生徒数、取り組んだ教員数、参加した地域のステークホルダー数）を掲載
6～27 （22 Ｐ）	22のエピソード	3年間実施した22のESD授業を掲載。授業内容、プログラムの流れ、子どもの声、ESDポイント、写真など。
28~29 （2Ｐ）	映像教材を活用しました	平成25年度、26年度実施したESD授業づくりの際に制作した映像教材の紹介。おすすめポイントを掲載。
30～31 （2Ｐ）	地域から見たESD授業づくり	中部7県のワーキングメンバーから見た本事業の成果効果、課題を掲載。周知啓発ワークショップでのフリップディスカッションより抜粋。
32～33 （2P）	子ども、教員、学校、地域の人が変わった ESD授業づくりを実践すると…。	本事業3年間の成果効果を6つの仮説に基づき検証を試み、検証委員会委員によるまとめを掲載。
34～39 （6Ｐ）	教員に聞いてみた 地域の人に聞いてみた	5名の教員、2名の地域の人に、6つの仮説に基づきヒアリングを行い、ヒアリング内容をまとめた記事を掲載。
40～43 （4Ｐ）	インデップススタディ 名張市立薦原小学校 薦原小の教員・地域の人に聞いてみた	実証時と今の子どものアンケート結果、学校長、実施した担任、現在の担任、地域の人他のヒアリングから、6つの仮説に基づき本事業の成果効果、課題を把握し掲載。
44～47 （4Ｐ）	インデップス 富山市立古沢小学校 三馬小の教員・地域の人に聞いてみた	実証時と今の子どものアンケート結果、学校長、実施時の学校長、実施した現在の担任、実施時の担任、地域の人他のヒアリングから、6つの仮説に基づき本事業の成果効果、課題を把握し掲載。子どものポートフォリオを掲載。
48～49 （2Ｐ）	これからのESD～キーパーソンが語る	形成推進委員会委員9名に、本事業で見出したこと、今後すべきこと、ESDに対する考えを掲載。
裏表紙	おわりに	奥付

⑤冊子（一部抜粋）



国連「持続可能な開発のための教育(ESD)の10年キャンペーン」が終わって1年ちょっと経った。
10年間の、そして「ESDユネスコ世界会議」の成果をどう活かすのか。
日本の教育の枠組みにどのようにESDが導入されるのか。
今後の持続可能な社会形成にどういった影響を及ぼすことができるのか。
私たちのこれからの実践が試されます。

ESDはむずかしい、と言われます。
今までの教育と何が違うのか、と問われます。

それはなぜか。
ESDが「教育の本質」であって、あまりにも「あたりまえ」の概念だからではないでしょうか。
人間が生きていくための教育を、あえて「ESD」と言わなければいけないほど、
今の世界や社会が抱えている問題が深刻であることを認識しなければいけません。

「ESDは、この世界の未来にとって一番大切なものなのではないでしょうか」
子どもたちのこの問いにどう応えるか。
この1冊からひも解いていただきたいと、お届けします。

ESD授業のつくりかた
――22のエピソード――

発行：2016年2月
発行者：環境省中部地方環境事務所
企画・制作：特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ
協力：環境省中部環境パートナーシップオフィス
イラスト・デザイン・印刷：水谷印刷㈱

本冊子およびESD取組に関するお問合せ
環境省中部環境パートナーシップオフィス
TEL 052-218-8605
E-mail office@epo-chubu.jp
URL http://www.epo-chubu.jp

22のエピソード 子どもが輝くESD授業をつくりだした
2013年度から3年間、中部7県の小中学校と一緒にESD授業づくりと実践をすすめてきました。
地域資源を教材にし、学校、教育委員会、大学、NPO、地域の団体など学校と地域が連携し、
多様なステークホルダーの参加によるESDの実践と実践するしくみづくりに取り組みました。

富山県
1 富山市立古沢小学校「ぼくらの里山「呉羽山」」
2 富山市立堀川小学校「市電通りのたからをみつけよう」
3 富山市立神通碧小学校・楡原中学校「つながる 広がる 私と世界」

石川県
4 金沢市立泉中学校「金沢の環境が育んだ食」
5 金沢市立三馬小学校「つながりに気づく、つながりを築く～ふるさと伏見川を守り続けるためには～」
6 金沢市立十一屋小学校「平栗を調べよう～十一屋校区「平栗」の未来はどうなっていくのか～」

福井県
7 坂井市立鳴鹿小学校「ビオトープの再生を通して、地域の特性や持続可能性を考えよう」
8 学校法人嶺南学園敦賀気比高等学校付属中学校「100年後の敦賀で世界遺産候補は何か」
9 福井大学教育地域科学部附属中学校「発信！ 附中グリーンプロジェクト」

長野県
10 松本市立源池小学校「信州の山の中で暮らし、歴史、文化、自然を学ぶ～里山から山岳の中で～」
11 松本市立会田中学校「地域の自然を見つめよう」
12 信州大学教育学部附属長野小学校「動物とのくらしの中で、思いを込めて対象に関わり、その命に、生きることの意味を探りながらひとり立ちしていくわたし(2年生)」
13 信州大学教育学部附属長野小学校「こころと優希とのくらしの中で、もの・ひと・ことに出合い、友と共に生きる幸せや喜びを感じながら、自らの足で立っていくわたし(3年生)」

4

中部7県 ESD MAP
・詳しい内容は、環境省中部地方環境事務所HPにてご覧いただけます。
https://chubu.env.go.jp/earth/mat/m_2.html
・22のエピソードは、環境省ESD環境教育モデルプログラムを参考にしています。
モデルプログラムの詳細は、環境省HPにてご覧いただけます。
https://edu.env.go.jp/esd/data

岐阜県
14 岐阜市立長森南中学校「温暖化・エネルギーについて学び、何ができるか考えよう」
15 羽島市立正木小学校「人にやさしく、自然にやさしく～環境といのち～」
16 岐阜市立青山中学校「環境」

愛知県
17 東浦町立緒川小学校「環境問題について考え、地球にやさしい活動をしよう」
18 名古屋市立八熊小学校「季節と堀川の生物」
19 半田市立板山小学校「メダカがいっぱいの板山を取り戻そう」

三重県
20 名張市立薦原小学校「見つめよう わたしたちの自然 ～ギフチョウから考える薦原の自然と未来～」
21 学校法人津田学園津田学園小学校「水辺の環境調査」
22 四日市市立中部中学校「リサイクルのジレンマ～リサイクルは持続可能な社会を実現するのに必要か～」

・形成推進委員会とは…。
中部7県のESD、環境教育に関する有識者により形成した会議体。7県共通の方針や目標、評価指標を検討し、各県でのESD授業づくり、本事業の進捗状況を共有しつつ、より良い成果を生み出すための議論を交わした。ESD授業づくり及び実践の質と枠組みづくりの検討及び検証を行い、中部7県のESDを推進した。
・ワーキンググループとは…。
各県でESD授業実践を行うために組織した地域のステークホルダーの会議体。ESD授業づくりへのアドバイス、ふりかえり等を行った。各県のESDを推進した。

DATA
ESD授業を実施した学校数……22校（富山県にて小中連携授業を実施）
小学校 14校 中学校 8校
作成実施したESD授業数………22プログラム（長野県で2学年で実施）
ESD授業を受けた児童生徒数…886名▶小学生 466名 中学生 420名
ESD授業に取り組んだ教員……32名▶小学校21名 中学校11名 ※ゲストティーチャー▶9名
ESD授業づくりに参加した地域のステークホルダー…68団体（行政、大学含む）

22のエピソードをつくりだしたステークホルダー
※敬称略

地域	形成推進委員会委員	ワーキンググループメンバー
富山	松本 謙一 富山大学人間発達科学部教授	富山大学、富山市立神通碧小学校、環境教育ネットワークとやまエコひろば、富山県生活環境文化部、金沢大学環境保全センター、環境省中部環境パートナーシップオフィス、富山市立古沢小学校(2013)、富山市立堀川小学校(2014)、富山市立楡原中学校(2015)、富山ユネスコ協会(2015)、株式会社富山県弘(2015)
石川	鈴木 克徳(2013) 金沢大学環境保全センター長・教授 池端 弘久(2014/2015) 金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課 キゴ山少年自然の家館長	金沢大学環境保全センター、金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家、金沢エコライフくらぶ、石川県環境部、環境省中部環境パートナーシップオフィス、金沢市立泉中学校(2013)、金沢市立三馬小学校(2014)金沢市立十一屋小学校(2014/2015)、金沢大学教育学部(2015)、いしかわ地球市民の会(2015)
福井	福井大学教育地域科学部(2013/2014) 松田 淑子(2015) 福井大学教育地域科学部教授	福井大学、NPO法人エコプランふくい、ふくいユネスコ協会、福井県安全環境部、金沢大学環境保全センター、環境省中部環境パートナーシップオフィス、坂井市立鳴鹿小学校(2013)、学校法人嶺南学園敦賀気比高等学校付属中学校(2014)、福井大学教育地域科学部附属中学校(2015)、北陸ESD推進コンソーシアム(2015)
北陸	鈴木 克徳(2014/2015) 金沢大学環境保全センター長・教授	
長野	中澤 朋代 松本大学総合経営学部 観光ホスピタリティ学科准教授	松本大学、信州大学、一般社団法人長野県環境保全協会、長野県環境部、環境省中部環境パートナーシップオフィス、松本市立源池小学校(2013)、体験観察かけはし(2013)、松本市立会田中学校(2014)、中信地区環境教育ネットワーク(2013/2014)、松本市市民環境部(2013/2014)、NPO法人やまたみ(2013/2014)、信州大学教育学部附属長野小学校(2015)、NPO法人みどりの市民(2015)、株式会社ミールケア(2015)
岐阜	菅 [illegible] 岐阜大学教育学部教授	岐阜大学、NPO法人e-plus生涯学習研究所、岐阜県環境生活部、環境省中部環境パートナーシップオフィス、岐阜市立長森南中学校(2013)、羽島市立正木小学校(2014)、岐阜市立青山中学校(2015)、岐阜ユネスコ協会(2015)
愛知	千頭 聡 日本福祉大学国際福祉開発学部教授	日本福祉大学、愛知県環境部、名古屋市環境局、環境省中部環境パートナーシップオフィス、東浦町立緒川小学校(2013)、[illegible]
三重	松岡 守 三重大学教育学部教授	三重大学、四日市大学エネルギー環境教育研究会、三重県環境生活部、環境省中部環境パートナーシップオフィス、[illegible]
長野/東海	新海 洋子(2014/2015) 環境省中部環境パートナーシップオフィス チーフプロデューサー	

5

6. ESD に関する調査結果、全国事務局との連携

(1)ESD に関する調査結果

①各県ワーキンググループメンバーを対象としたアンケート結果

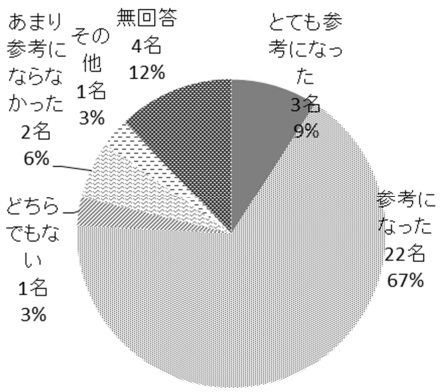
今年度の中部７県に設置したワーキンググループには、大学有識者、実証授業学校教員、地域の ESD 環境教育実践者、行政職員等総勢 68 名の ESD に関するステークホルダーが参加した。

各県における事業評価については、ワーキンググループメンバーへのアンケートから抽出した。アンケート結果から、多くのワーキングメンバーが本事業の価値と意義、成果と課題を認識しており、生み出した成果をいかに活用するか、いかに継続発展させるか、そのための仕組みを誰がどうつくっていくのか、その資金はどう確保するのか、といった次の展開への課題を明確に示唆した。以下、ワーキンググループメンバーを対象に行ったアンケート回答者 33 名のコメントの一部を抜粋した。(ネガティブな意見は▲で表示)

[アンケート結果]

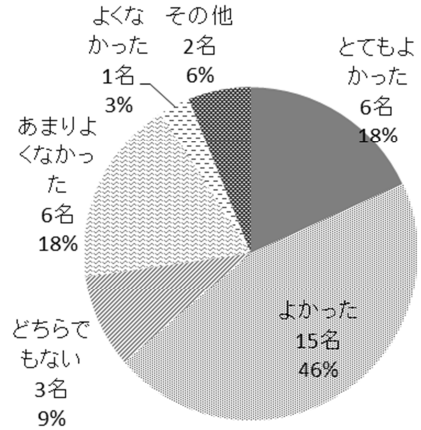
■本事業についての意見・提案・感想

環境省 55 モデルカリキュラムについて及びその地域での活用のための仕組みについての質問に対しては、モデルカリキュラムについて、「参考になった（とても参考になった含）」が約 76%あり、ESD 授業や単元計画づくり、授業展開のヒントにはなった、という意見があった。一方で、使い方が示されたり、評価の方法が掲載されているとよいという意見もあった。



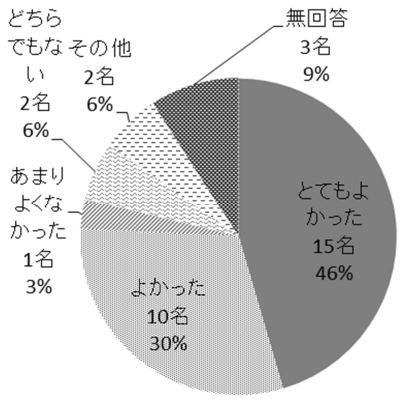
また、55 モデルカリキュラムを地域で活用するためには、学習指導要領に位置付けること、市町村や教育長への周知、冊子だけでなく研修をセットにすること、事例発表会・交流会をしながら当事者との交流・話し合いをすること、などの意見があり、冊子の発行だけでなく冊子を活用して次の取組や展開の検討を指摘された。

事前の打ち合わせ及びワーキンググループについての質問に対しては、「よかった（とてもよかった含）」が 64%であり、「単元学習に入る前に、みんなで単元構想を行うことで、多様な視点から創造的な学習を作り出すことができた。そのことが、授業者にとっても学習での子どもの育ちに期待を持たすことにつながり、子どもも教師も主体的な取り組みができたことに繋がった。また、計画をきちんとしておくことで、評価やまとめもしやすくなった」「様々な立場からのアイデア意見を交えることができ、実践内容の充実が図られた」「ステークホルダーが事前に、事業・単元計画・指導案等について様々な視点で話し合うことが、参加者にとって有益であった。様々な立場から ESD の視点について、授業案をより深く検討することができた」といったポジティブな意見を得た。一方で、「学校側の都合で既に授業が展開されており、ワーキンググループとの協働といった点では、物足りなかった」「抽象的で、あまり具体的な話し合いにまでいかなかった」「事前の打ち合わせに十分な時間をとれなかった」「機会がなかったこともあるが、言いっぱなしになった感が否めない。学校に寄り添った支援、協働体制の構築が必要」「もう少し早く内容について伝えることができないと、現場はやらされ感が強くなる」「学校によっては事業への意気込みが、校長、教頭、教員等の間で温度差があった」「教育委員会及び環境政

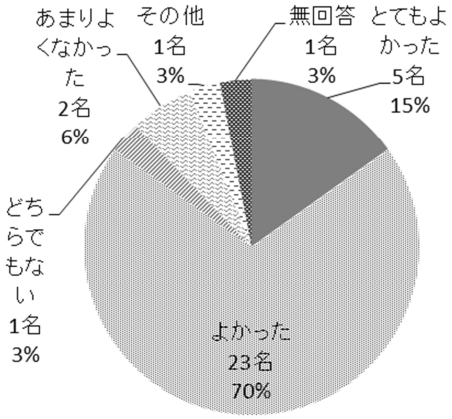


策関連行政の（特に県）の参加が消極的であった」などのネガティブな意見もあった。一番の課題は、事業実施が遅く十分な協議とステークホルダー間の関係性ができなかったことである。

児童・生徒の授業に対する反応については、「よかった（とてもよかった含）」が 76%で、「多様な思い・意見が出され、子どもたちの思いも対話や話し合いの中で変わっていった」「学習が体験的に取り組まれ、ESD の育みたい力を想定したことで、授業が工夫され、児童に根拠を明確にしたコミュニケーション力や未来を想定して計画する力がついた」「児童自らの課題を設定して追求している姿が良かった」「自分ごととして捉え、それに取り組んで次世代に示していこうという意思の表れがあった」などのポジティブな意見があり、一方で、「残念な点は、子どもたちの学習が、質問するだけ、聞くだけに終始しているように見えた」「個人の調査結果をどのようにグループで、全体でシェアし、効果的に活用できるかという点では課題があった」「教師によるゆさぶり等が必要」「授業者の意図が児童・生徒に十分に理解されていなかったため、グループによる差があった」などの意見もあった。



本事業全体については、「よかった（とてもよかった含）」が 85%となり、「単元作りから多様な視点で考え、実践を通して確認できたことが何よりよかった」「身近なところから課題を考えることにより、自らの思考を通して問題を考える姿勢が身に付く」「閉鎖的と言われる学校、教育現場には、このようなしっかりした事業なら受け入れられる」「教育機関が外部に目を向けるきっかけとなっており、ESD が地域全体で作り上げていくものとしたら、こうした動きは歓迎すべきものである」「事前（授業の計画）、授業、事後と一連の中で研究が進められていることがよかった」「このような単元全体を研究・検証していく事業・機会が少ないので、貴重な事業である」「多方面の意見を聴くことにより、単元計画作りに幅と厚みが出た。担当する教員の良い研修機会となる」「文科省でなく、環境省が多様なワーキングメンバーを揃えて展開したことは学校教育への一つのインパクトだった」と本事業に対する高い評価を得ることができた。一方では、「ESD の価値観の抽出や提案方法の検討に時間を割ければよかった」「教育のシステムの中への組み込みという観点では、もう少しがんばりが必要」「実践校の選択に、結果的に、事前の取組があるところに依頼している時点で、結果が見えているし、一般の学校への普及は厳しい」「学校側については、ESD を進めていこうという考えを持って見えたが、それを深めていくサポートが出来ていなかった」といった改善点や課題の指摘もあった。



■ESD の価値観、視点、方法、アプローチが取り入れられていたか

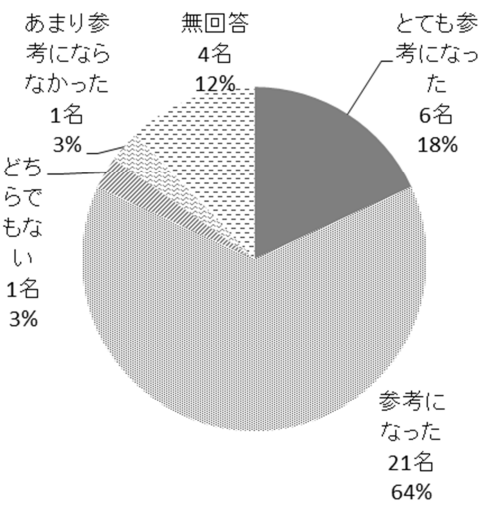
どういった点でという観点においては、「モデルを一例として、地域性や児童・生徒の実態に基づく ESD 単元、学習活動が考えられた点」「子どもの多様性を前提に、一人ひとりの主体的な学習展開ができた」「地域をどのように作るか、自分たちがそこにどう関わるか、等について学習の中で考えることができていた」「主張の根拠を大切にしていた」「現場を大事にすると言うスタイル」「児童・生徒に一定の価値観を押し付けるという教育ではなく、考えや行動に「揺さぶりをかける」場面が多くあった」「子どもたちが、自らが関与する課題として捉え、その取組を次の世代に示していこうと考えている点」などが挙げられた。一方で、「学校の今までの学習に ESD の視点をプラスするのが学校にとってわか

りやすかったのではないか」「先生方には自分の見方・考え方と違う点に気付いたり、それを受け入れて話し合いを進めようとする考えは持たれてみえたと思う。ただし、それを生徒には伝えられていたとは言い切れない」といった点が指摘された。

どのように、という観点においては、「3 年間の 3 つの単元構想が結果として表している」「メールのやりとりを含めた国際交流員との対話の中で自分なりの理解と疑問を深めていくプロセスを導入している」「教材・人とのつながりをもとに、過去・現在・未来の時間軸の中で、合理的に考えを作ろうとしていた」「現地学習、関係者インタビューの連続」「児童の成果物による評価やアンケート調査に基づく評価」「児童・生徒同士が議論することにより、学び、ものづくりと社会をつなごうとする思考プロセスにより、価値観、視点が指導者の意図が生徒に伝わっていた」「世界の社会問題の解決に向けて多面的な視点から生物育成技術を関連させて「最適解」を導くよう、三か年を見越した年間計画を立案したり、最適な情報共有を構築したりしている」といった授業手法があげられた。

■ESD の授業づくり、ESD 人材育成の参考になったか

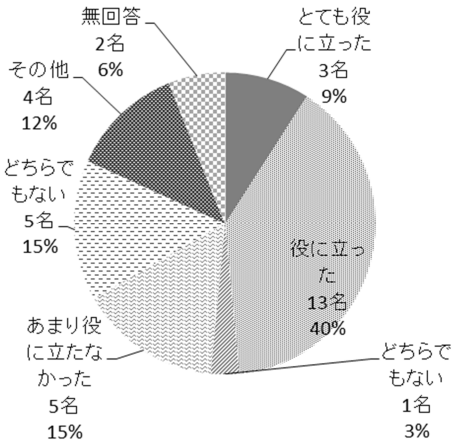
回答者のうち 82%が「参考になった（とても参考になった）」と答えており、その理由として「教師の成長、学習指導への楽しむ様子が見いだせた」「児童や教師が地域に生きる当事者としての意識を高めていくプロセスとして非常に参考になった」「地域または社会教育との連携は相互理解から始まるものであり、すれ違いがどこから始まっているのか、どこに共感や共通点があるのか、大変多くのヒントをいただきました」「いい事例となった。やはり、多様な人が関わって協働していくことが、ESD の授業づくり、人材育成につながると今更のように思った」「教員の変容が一番興味深かった」「取り組んだ学校では、担当教諭だけでなく、管理職や別教科の教員も巻き込み、学校としての ESD の理解が深まった」「更にここに ESD の観点を入れ込むことを確認しながら指導したので参考になった」等が挙げられた。



一方で、「教科中心の考え方からは、ESD のねらいが十分理解されず事後の話し合いでも大きなずれがみられた」「ESD の観点にたった授業にはなっておらず、生徒たちの考えを深めることができたとは言い難い」といった指摘や、「素晴らしい実践であるだけに一般化して普及させていくのは難しい」「それなりにしっかりした組織のサポートが必要ではないかと感じた。まず、やってみなければ、どこに弱点があるのかも分からないのも確か。人材育成ともなると難しい」と言った現状の課題を的確に捉えた意見があった。

■ESD を実践するにあたっての課題について。今回の事業及びプログラムはその課題を解決する上で役立ったか

アンケート回答者の 49%が、本事業が「役に立った(とても役に立った)」と答えている。今後の課題として、「予算の確保」「学校の発掘」「情報やつてを得る」「当事者意識の育み」「忙しさの克服」「教育委員会の後押し」「歩み寄り」「ESD の有効性の理解」「教員の知識やスキルの向上」「実践する人材の確保」「実証の成果の広報」「ESD 授業をつくりだす仕組みとフォロー体制」「学校以外の拡がり」等が課題として挙げられた。解決策としては、「行政による研修」「大学での教員養成」「ESD 実践の見える化」「義務教育と生涯学習のジョイント」が挙げられた。アンケート回答の一部抜粋を掲載する。

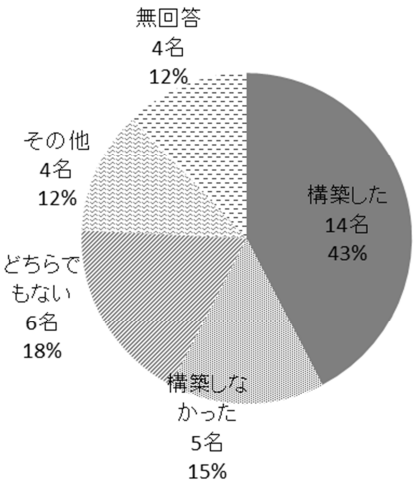


●こういった取組には予算と、取り組んでくれる学校の発掘が不可欠。それらが持続可能に続けることができるかどうか。
●地域との関係をつくれない。
●したいことを具体的にどうしていけばよいか、情報・つてがない。
●させられてやっている感があり、自分のものにならず、継続的にやれない。
●学校現場が忙しい。
●教員のユース層に、授業力の根源的な社会や自然や人間に関する問題意識や当事者意識の形成を急ぐ必要がある。
●教員が ESD に対して「これは大事で、学校教育に有効だ」と思うことが最大の課題です。これまでの教育には当たり前にあった暗黙知としての ESD が、価値化されずに過ぎてきてしまいました。ESD を言葉で表現する形式知とし、実際に教員が外部の人々と共有体験をすることで、その価値化が進むと考えます。また、ESD の最終ゴールは利己的な人格形成に留まるものでなく、自然との調和であり未来社会の構築といった利他への貢献であることについて、学校教育では折々に意識する機会が重要と考えます。ワーキングメンバーとして 3 年間の関わりも、ESD の価値をさらに深く理解させてくれました。
●行政には ESD の重要性を認識し、研修等で理解を高めてもらうことが必要。教育機関には、ESD で何を可能にできたかを発信していくことが大事である。将来を見通し、大学は率先してカリキュラムに組み入れ、積極的に学生も巻き込み ESD の実践を見える化が有効。
●ESD の概念自体がまだ一般化されておらず、従来の環境教育との関連と相違が明確にされていない。そのため、こうした ESD をつけた事業や実践自体が行われることに意味があると考える。
●学校への働きかけには教育委員会の後押しが必要だがなかなか協働が進まない。
●よく分かっている人、組織、団体が、高所からではなく歩み寄って、実際に行動して、示していった方が良いのではと、思っている。
●義務教育との連携は必須と考えているので、そのサンプルとしての具体的な授業は参考になった。しかし、その取り回しを行う教師側にかなり知識やスキルが必要とされることが分かった。授業の類型紹介に加え、教師が必要とする知識やスキルの紹介も必要となる気がした。
●将来的には、義務教育と生涯学習のジョイントも見込めると感じており、課題解決のよいヒントとなった。
●先生方が、ESD が何者かを理解するのに一定の時間を要すること。教科、学年を超えて広い視野から授業を見てみる機会が少ないこと。
●先生や外部講師が児童・生徒にいかに働きかける（刺激を与える）か、先生の技術、力量が問われます。
●ESD を実践する人間をどのように増やしていくかが課題。今回の授業は、授業実施者の向上には役だったが学校全体の向上にはつながらなかった。
●実際に実践した学校では、確かに大きな役割を果たしたと思います。しかし、広く普及させるという観点からは、その他の学校にどれほど伝わっているかが見えない。全県下で 3 校のみと言う数を考えれば、同時進行でその他の学校への広報活動をもっと大々的にやるべきであったと思います。
●やる気のある先生と管理職を探すのが条件になる。
●地域の課題を自分ごととして考えるようなアプローチのしかた。教師が地域のことをよく知る必要がある。地域のことに詳しい人材とのネットワークづくりが大切。

●各学校で使えるプログラムの作成が不可欠であると考える。まず、それを構築していく仕組みづくりが必要である。そしてそれを普及して、各学校フォローしていく仕組みが必要である。
●授業構想や授業の具体的な活動を協議する場合、最終的に ESD の評価を考えておく必要がある。
●学校と地域の連携や学校以外での広がり（学校、公民館、NGO 等の地域の多様な団体が連携して課題に取り組むには、核となる人が必要）
●現場はあれもこれもと疲弊している。そこへ新しいものを取り入れるとなると必ず反発される。その意義の大切さと、今の実践の視点を少し変えることと、教科横断的に取り組むことに理解してもらうことの大変さがある。（やれば効果があるものである）。

■本事業を通じ、新たにどのようなネットワークが構築されたか。その理由は何か。

ワーキンググループを設置したことで、新たにネットワークが構築されたかという質問に対して、「構築した」と回答した人が 43%だった。教育関係者、教員、地域で活動をしている人、行政職員等が出会い、ESD、授業づくりという共通の作業を協働でできたことによって生じたつながりが評価されつつも、各県地域の状況によって、既にあったネットワークがワーキンググループを形成し、新たなものにはならなかった、教員が参加したことで少し変わった、また 2 回の会議だけではネットワークなどできない、出会っただけではできない、といったコメントもあった。各地域のメンバー構成や協議内容、プロセスによってネットワークの深みの違いがあることがわかる。また、ユネスコ協会の取組やユネスコスクールの取組、学校における教育課程のありようなど、それぞれの立場での新たな情報や課題を共有することができた。以下、ワーキンググループメンバーのアンケートより抜粋した内容である。



●教員と地域の人、市の環境担当の人などとの関係が出来たと感じている。
●他地域の教員との情報交換ができた。機会があれば、実際に実践の場に伺いたいと考えている。
●他大学や NPO の方等新たなつながりができた。ワーキンググループ自体が多様に構成されていた事による。
●新たに構築されたネットワークは、①地域講師間に新たに加わった人のつながり、②地域に既存であった学校支援ネットワークと EPO 中部を含む外部ネットワークの関係、③モデル学校区の地域連携、の 3 つです。ネットワークが構築された理由は、共に事業により顔を合わせ、各自の課題や現場を共有できたことと、ESD という共通言語により多様なワーキングメンバーが対話できたことです。この結果、具体的に松本市には ESD をキーワードとする環境教育学校支援プログラムが、民間をベースに学校・行政と連携したモデル支援事業が小さいながらも始まっています。
●ユネスコスクールは教育委員会が加盟申請推進を行ない、小学校が実践しユネスコ協会は支援する形があり、ESD 環境教育の実践に当たっては環境省関連部門が主導でまとめられたプログラムをベースに学校が実践展開するというネットワークがあると認識しました。
●義務教育側へのアプローチがなかなか進まない環境施策側の人間として、学校教育の実例を見ることで、学校側の課題を知ることもできた。授業を行って頂いた学校はもちろん、議論に参加された方々との新たなネットワーク

に可能性が見いだせた。

●教育主事の方や校長先生が、学校以外の様々な関係機関とつながりを持つことに意義を感じてみえることが伺え、こうしたことに教育機関の管理職レベルの方々が気づかれたことは今後の ESD 活動の継続・発展につながる。

●発展に向け、いろいろな、専門分野からの人材が集まり支援していると感じた。コーディネーターとしての役割には幅があるが、提案を受け官公民協力し合って活動していけたらと考える。

●福井大学・金沢大学をはじめとした教員、NPO 団体、ユネスコ協会などの多様な立場からの貴重なご意見をいただける機会となり、事務局であるEPO中部を仲介に、鈴木先生を中心とする組織（ネットワーク）が構築されている。実証事業の様子が広く教員間に周知され、情報の共有が期待される。

▲ネットワークの構築まで出来たかどうか分からない。ただ、続けていければ、構築されて来ると思った。

▲出会っただけではネットワークには成らない。

▲基本的に既存のネットワークを活用しているので、新たなネットワークは構築されていない。

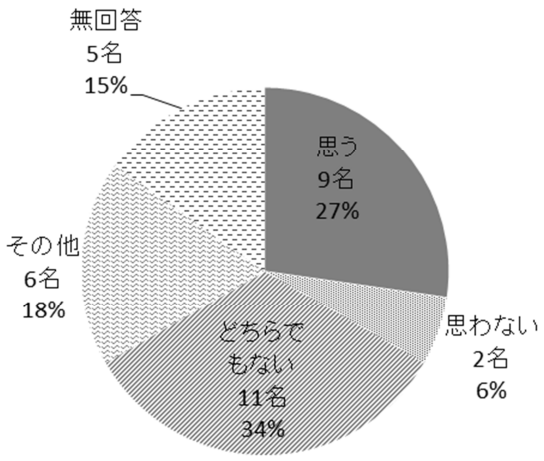
▲基本的に既存のネットワークを活用しているので、授業者がそのネットワークに加わった点が進展と言えば言える。

▲2 回のワーキンググループの参加で、授業をどう進めていくかという現場での作業はなく、講評のみであったため、ネットワークの構築は図られていない。

■構築されたネットワークは、今後、地域に根ざしていくと思うか。難しいと考える場合、どのような仕掛けやサポートがあればネットワークが継続できると思うか。

ワーキングメンバーのアンケートから、本業務で形成されたネットワークは地域に根ざす可能性がある、期待できるという人が回答者の 27%であった。根ざすためには「予算、資金面の仕組み」「世話をする組織と人」「どの教科にも実践可能である例を提示、周知する」「横展開を検討する」「研究会や学会の受け皿」「核となる団体」「繰り返し触れる機会」「地域での交流会(年 2 回程度)」が課題であるとのコメントがあった。

以下、ワーキンググループメンバーのアンケートより抜粋した内容である。



●予算と世話をしてくれる組織、人がいないと続かない。

●今回の実証事業で提案されたように、ESD の視点はどの教科教育に関しても活用することができるため、今後の教育活動において重要な考え方である。但し、学校教育現場においては、教科教育内容の飽和状態や事務作業の増加に伴う多忙化や、「総合的な学習の時間」も学校独自のプログラムが定着されつつあり、ESD を年間計画に組み込むのは難しい。どの教科においても実践が可能である例を提示・周知することで、徐々に浸透していくと考えられる。

●ESD の考えは少しずつ浸透しており、協働の方向が様々な組織で芽生えてきており今後が期待できる。

●今回の実証成果を従来の55モデルから地域版への拡充、周知啓発冊子の発行常備、ESD環境教育教師の研修、推進部門（環境省管轄の部門）の常備などにより、上記のネットワークは継続できると思います。文科省には ESD 教育をより具体的に実施すべきことを学習指導要領に述べてもらうように働きかけ環境整備すれば

ネットワークは生きてくると思います。

- ●教育機関の管理職層が意義を感じていることが伺えるので、教育機関の中で横展開されるにはどうしたらいいかを考える必要がある。
- ●関心と熱意のある大人を育て、学校と子どもたちのモチベーションを高めていく必要がある。先ず、大人（授業者、地域の協力者）が興味を持って参加し指導できる形を模索したい。
- ●どんな関係、ネットワークも時々関わって一緒に協働することがなければ、続かないし、発展しないと思う。今後、地域に根ざすか否かは、関係者・当事者の必要性の努力によるので分からない。
- ●授業者等の研究会なり学会なりの受け皿や、彼らが所属している研究団体との関係構築など進めることが必要である。
- ●ネットワークを継続していくには、核となる団体が必要である。大学は一定その役目を果たせるかもしれない。
- ●引き続き何らかのサポート、仕掛けが、必要。１年間では、時間が足りない。形だけのネットワークの構築は、たとえ、出来ても、消滅する可能性も高い。
- ●きっかけづくりとなったESD授業であるが、できれば「異動」という学校や自治体の限界を取り払うためにも、繰り返し触れる機会があるとなおよい。
- ●一同に会する機会だけではなく、２ないし３地域で交流する機会があってもよいのではないだろうか。
- ●スタートは出来ると思いますが、予算的には心もとないので、行政による助成金の可能性があれば長期安定的な取組が可能です。
- ●社会教育は、常に良い内容であればリピーターとして依頼を受けることができる。学校教育では、環境省および文科省が連携して、ESD 教育の必然性を地域単位の学校で構築していただき、学校教育へ携われるような資金面も含めて仕組みを創っていただきたい。

■本事業により、どのような効果がありましたか。

アンケートからは、「授業者、学校がESDの価値を感じたこと」「若い教員が骨太になったこと」「地域がこの学習を歓迎したこと」「子どもたちの自ら考える方法の学習」「ESDの学校への導入」「環境教育ESDの再評価」「ESDが実施可能であることの意識化」「教師の教育姿勢が大きく変わった」「義務教育側の課題や希望を聞くよい機会」といったコメントがあった。一方で、本事業では「義務教育との連携にまで至らず直接的な効果が見いだせていない」「実際に現場で児童・生徒の指導に当たる教員に、ESDの考え方が十分に浸透されていない」「ワーキンググループ会議としてのESDの視点が十分に共有されていなかった」「より多くの教員に実証事業に参加してもらえる体制作りが必要」といった指摘もあった。以下、ワーキンググループメンバーのアンケートより抜粋した内容である。

- ●一番の効果は、授業者。その次は学校。価値を感じていただけたこと。地域に対しては、ESDシンポジウムを通して、自信をもって発表する子どもの姿を通して、成果を発表できたこと。
- ●若い教員がESDに取り組むことで骨太に成長していくことを、学校としても喜んでくれていることはとても嬉しいことでした。地域の方々が、これらの実践のように、地域について学習したり、地域のSDの課題について出会ったりする学校の取組を、歓迎し支援してくれることも嬉しいことでした。
- ●学校にとっては、授業者の授業実践能力の改善。地域（平栗地区）にとっては、子どもたちの関心による元気づけ、自分たちは忘れられていないという喜び。子どもたちにとっては、自ら考える方法の学習。
- ●学習した生徒たちに直接ESDの学び方を引き出せた。また、学校の中にESDの考え方が導入できた。

●ESD という用語自体が認知されたと共に、従来から取り組んできた環境教育やユネスコスクール事業の再評価、再認識にもなった。
● 1 年目の実施校には、ESD に関する他校からの視察がありました。2 年目の実施校では、翌年も同じ学年で ESD 教育が進められ、より地域課題に踏み込んだ授業が展開されたと聞いています。3 年目の実施校では大変深みのある ESD 授業が展開されており、実施可能だということを意識できました。これらのことを地域ネットワークや各報告会の機会に共有され、関係者の中にも ESD に直接ふれたという実感が残ったことは最大の成果だと思っています。環境教育と ESD の関係は言葉で説明されることが多いですが、本当は実際にこうして ESD というキーワードを使って事業を進めることが一番腑に落ちる方法なのだと気が付きました。
●今年 1 月に作った映像資料を使って、ESD の授業を行った。
●対象の学校が環境教育、ESD に関心を持てたのは一つの成果である。ESD の観点を深めたプログラムの作成、普及を進めていくことが重要。
●教師の教育姿勢が大きく変わったと思う。教師は、児童・生徒に何かを教える立場であるが、ESD の取組においては、教師が生徒と共に課題を見つけ、共に考えるという姿勢になってきた。
●CST（コアサイエンスティーチャー）が ESD を正面からとらえ実践いただいたこと。CST として広げていただけるものと期待されます。
▲義務教育側の課題や希望を聞くよい機会があったが、外部と義務教育の連携に絡んでいくところには至らず、直接的な効果は見出せていない。
▲実際に現場で児童・生徒の指導に当たる教員に、ESD の考え方が十分に浸透されていないこと、ワーキンググループ会議としての ESD の視点が十分に共有されていなかったことは課題であったと思う。より多くの教員に実証事業に参加してもらえる体制作りが必要だと感じた。

■これから地域で ESD を実施していくために、どのような仕組み（人的資源、教材、研修制度等）があるとよいか。
「テーマを明確にして取り組む」「窓口になる組織をつくる」「公民館や自治会での ESD 研修」「コーディネーターの発掘」「必要な情報が共有される仕組み」「校長の姿勢」「教員に助言できる支援の仕組み」「仲間が集まるネットワーク」「教育情報誌への掲載」「小中研の研究部会における ESD（環境教育）部会の設置」「ハブ的な団体」「市町村（町村などは広域連携の単位）で、学校区と連携した地域講師マッチングシステム」ESD 推進アドバイザー派遣事業」「今回同様の仕組みで十分である」「教育委員会や環境課を巻き込んだ、教員を母体とした研究組織・教育組織」「管理職に向けた研修の実施」「公開授業の実施」「丁寧に ESD 実践を進めて行く」といった意見があった。

●テーマ（例えば学校教育目標と研究主題、ESDの指導と評価）を明確にするよう取り組む。学校・地域を越えた意見交流できる仕組み、柔軟な対応ができるよう取組があってもいい。市町村や県教委、大学での研修講座などがよい機会になる。これまでも取り組んできておられますが、富山であれば「富山 ESD 委員会」のメンバーが改めてそうした仕組みづくりに取り組むとよいと思います。それが市教委や県教委の講座に発展したり、相談窓口となったりするとよいと思います。
●ESD を地域で実施していくためには、学校が発信地となること。公民館や自治会などにおける研修会を実施すること、学校と地域の協働による実践が大切。そのために、学校と地域をつなぐコーディネーターの発掘が大切と考える。

●もっと気軽に支援できるコーディネーターを増やす。支援するコーディネーターやステークホルダーの協議会を開催する。
●教員にも、コーディネーターにも、地域のステークホルダーにも ESD の研修をしてもらい、その中で、ESD 推進のために立場の違う人の協議・話し合いをしてもらう。そのような場の設定の必要と場の作り方・場でのワーク・アクティビティの運営の仕方が肝要だと思う。
●地域における多様な主体間の連携が促進されるように必要な情報が共有される仕組み。
●実践者による定期的な学習会、情報交換会の開催、学習会、研究会へのコーディネーターの参加確保。
●学校全体として取り組むような校長の姿勢。教員が悩むときにきめ細かい助言ができるような支援の仕組み。ESD に関心のある仲間が集まれるようなネットワーク。
●教育情報誌（例「総合教育技術（小学館）」）や新聞に実践例を掲載する等マスコミ等も有効活用しながら継続していく。また、地域の情報を広く収集し、地域で息づいている活動をバックアップすることも有効。
●現場で指導に当たる教員に、ESD の視点を取り入れた教育活動に取り組んでもらうためには、学校教育体制の中に ESD の視点を位置づけする必要がある。「学校の教育方針を固める管理職の研修と理解がすすめば、小中研の研究部会における ESD（環境教育）部会の設置も期待できる。新たに ESD（環境教育）を年間指導計画に組み入れるのではなく、理科・社会科などの教科教育の中で ESD の視点を取り入れた指導をしていくことが、現状もっとも効果的であると考える。そのためには、ESD 環境教育モデルプログラムも、教科指導の中で実践できるプログラムも紹介できるとよいと思われる。その上で、このモデルプログラムが広く教員に周知できる体制を整えなければならない。
●周辺市町村を対象とする程度の規模で、ESD 環境教育に関わる又は関われる人のネットワークを組成し、その運営のできる既存又は新規の団体を立ち上げる必要があると思います。とりあえず、既存の団体に運営を任せ、本事業で使用した教材を参考にし、走りながら方向性を定めていくことが良いと思います。
●NPO や関連団体と学校現場をつなげるハブ的な団体が必要である。また、教員研修や教員免許更新講習等で ESD 関連の研修講座を設定するなど、先生方への認知度を上げることが必要である。
●必要な仕組みは、市町村（町村などは広域連携の単位）で、学校区と連携した地域講師マッチングシステムをつくることだと思います。これは新規に組織を作るということばかりでなく、従来の社会教育を担う公民館、観光公社、自治会などその地に有用に動いている既存の組織に、マッチング業務を加える方法ではさらに、地域社会と連動した仕組みになると考えています。そのセクションとつながる、できれば中間的な官民連携の支援組織が有効ではないかと考えています。支援策としては、そうしたマッチング団体の経営や事業に対する資金的支援事業や、学校 ESD 推進ガイドラインなどの参考資料があると良い。民間でなく行政の中にマッチングのシステムがある地域には、ESD 推進アドバイザー派遣事業などがあっても有効と思います。
●個々の学校への働きかけと同時に県や市の教委との連携が必要である。
●人材育成は必要だが、東海・北陸地区の一律の方法では仕組みができない。今ある環境学習の仕組みを利用しながら、学校の独自の ESD の視点を取り入れたプログラムも作成を行い、その地域でそれを支える人材を探す。その人材と共にブラッシュアップを行っていきたい。無理をすることは長く続かない。盛り上がる時もそうでない時も環境学習を続けていき、ESD の視点を加えた継続のできる学習を目指す。「その時」に盛り上がった学習を続けるには「継続」のための別の力が必要だと思う。
●現場の教員の方を交えた事例紹介や実状等にかかる意見交換会などを通した各学校で利用できるようなプログラムの作成。

●今回同様の仕組みで十分である。ただし、数年で終了するのではなく、今後も継続的に取り組む必要がある。
●人的資源：ESD 教師（ESD 教師の教師も）、行政の ESD 人材、NPO・市民団体の ESD 人材等
教材　　：ESD 教育モデルの拡充、ESD 教育導入マニュアル、ESD 教育実践記録の収集閲覧化、ESD 教育図書の完備、ESD 先進国の情報収集、映像教材など。
研修制度：ESD 教師の研修制度、行政の ESD 担当の研修制度など。
その他　：各校の ESD 実践を推進する部門の常設、PTA や地域の人達の ESD 理解と協力、ESD 検定制度の検討等。
●教育委員会や環境課を巻き込んだ、教員を母体とした研究組織・教育組織が必要。あくまで学校単位で行うものであり、教員は必ず必要である。教員に対する研修を、第 3 者でなく、教育委員会が行うべきである。地域における教材となる資源をうまく見いだすことが重要と思います。
●今回事業もEPO 中部がコーディネートを行うことにより、学校が外部機関とつながるきっかけを生み出しており、当面は機会を作ることが必要と感じる。
●プログラムなどは相当整備されてきたが、ESD に対する理解は、現場に浸透していない。特に、ESD の取組は、学年を超える（つなぐ）取組となることが多く、その進展には管理職の理解が必須である。管理職に向けた研修の実施が必要である。
●普段の授業（総合学習の時間等）で、チョット工夫を凝らせば ESD になると思っているが、そのチョットという部分がなかなか理解されていない。教育研究会（研究発表会）等で ESD に関する報告や公開授業を行い、他校の先生にも実践等で児童・生徒が変わっていく姿を見せるべきとあると思います。
●今後の ESD の実施には、他 NPO や行政や教育委員会および学校などと連携および協働で、丁寧に ESD 実践を進めて行くこと。

②教員（実証実施者等）を対象にしたアンケート結果

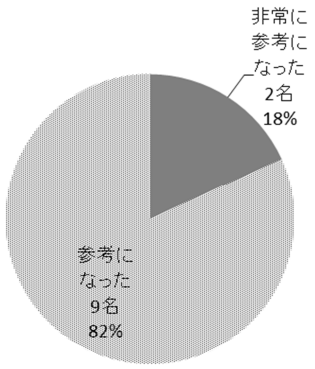
今年度の今年度の中部７県での実証校は小中学校合わせて７校であり、授業実施をした 11 名の教員からアンケートの回答を得た。教員が、ESD に対する理解や本事業に対する評価を把握するためにアンケートを実施した。全体として、モデルカリキュラムについては全員が「参考になった」と答え、ワーキンググループ及び本事業全体について１名以外は「よかった」と答えている。今回作成した授業を課題として授業について継続したい、今回の授業の継続もしていきたい、と答えた方が全員であった。他の質問項目についてもポジディブな回答が多かった。少数だが、ネガティブな意見も踏まえ、改善案を検討したい。以下、教員を対象にしたアンケートから回答のあった 11 名のコメントを一部抜粋した。(ネガティブな意見は▲で表示)

【アンケート結果】

■本事業についての印象及びご感想について

[環境省 55 モデルカリキュラムについて]

アンケート回答者の 100%が「参考になった（非常に参考になった）」と答えている。モデルカリキュラムが教員の授業づくりに何らかのヒントになっていることを把握した。一部、実施しようとしているものが掲載されていないことや、活用しにくいものもあるとの指摘があった。



●事例がわかりやすく紹介されており、どんな視点で授業をつくればよいか、よいヒントとなった。

●環境省の事業内容の中で、本校との比較や本事業の取組をしっかりと確認することができた。また、ESD の要素や能力などの中身を各取組の中でどのような視点でおかれているのかが分かりやすかった。

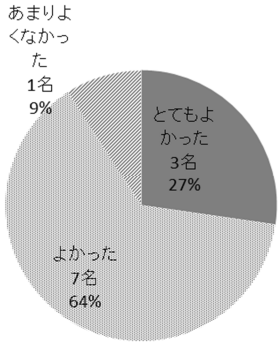
●モデルプログラムは参考になりました。詳細な内容のモデルではなく、概要が素早く分かるよう工夫されていたと思います。

▲さまざまな実践が凝縮しており、また ESD の視点で分類されているので分かりやすく、大変参考になる資料であった。ただ、そのまま自分の学校で取り組めるものばかりでなく、実態に合わせた展開が必要なのは仕方ない。

▲本校の実態に合うものと、そうではないものがあり、なかなか活用しにくい。

[事前の打合せ及びワーキンググループについて]

アンケート回答者の 91%が「よかった（とてもよかった）」と答えている。ESD に対する理解や重要性の認識が進み、教員自身の授業改善につながったようだ。特に子どもの主体的な学びをどう作り出すか等教員の意識改革につながったようだ。授業に対するありかたや方向性の説明が不足していたという指摘を受けた。



●ESD について何も分からなかったけれど、たくさんの方に教えていただいてなんとか授業ができた。ESD の観点はすごく重要だと教えていただいた。

●子どもに興味・関心をもたせるだけでなく、持続可能な実践にするためには、どんな問題提示をすればよかったか、子どもたちの主体的な学びをどう確保すればよかったかを学ぶことができた。

●打ち合わせは自身の取組の骨組みをしっかりと調整することができた。多くの参加者の方のおかげで、本事業の充

実を話し合うことができ、ESD 事業についても自分自身の考えを深めることができた。

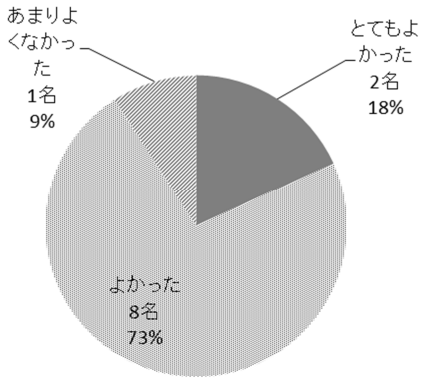
●担当教諭の意識の改革につながった。

●さまざまな方が関わっておられる ESD なので、教員以外の方からも授業に対してご意見がいただける、貴重な会議であった。教科の授業であり、制約が大きかったので委員の方の専門性が十分に発揮できなかったのが申し訳なかった。

▲事前に、もう少し公開授業の在り方や方向性についてご指導いただけるとよかった。我々にイメージがないまま事前打ち合わせが終わってしまったので、前例などを映像などで見せてほしかった。また、授業が進んでから指導を受けても、途中で変更することは現場としては難しい。

[本事業全体について]

アンケート回答者の 91%が「よかった（とてもよかった）」と答えている。ワーキンググループでの授業に対する意見だしが教員にとっては刺激となったようで、考えつかない展開や新たなものの見方、考え方を構築できたとあった。また、教育のありかたを問う場にもなり、研修としての意味があったというコメントがあった。一方で授業づくりにもっと関わってほしかったという指摘もあった。



●一授業に対し、様々な職種や立場の方がかかわることで、 新たなものの見方、考え方を構築することができた。

●やはり学習指導要領との関連も大切で本事業の取組は、学習指導と共に連携して取組をしっかりと根付かせる必要性を痛感した。多くのご意見を本校の取組にいただき、今後の流れを作るきっかけとなった。

●担任一人では、考えつかない展開や外部ティーチャーとの交流など、幅広い学習内容を考えて進められた。

●授業づくりにさまざまな方が関わってくださり、教師の研修の機会として大変ありがたい事業であったと感じる。

●「教育」の在り方を問う場となる。

▲当日の授業になって、指導を受けても改善することはできないため、当日の授業づくりにおいてもっと関わってほしかった。年度途中に依頼するのではなく、前年度中にお願いをしておくべきである。

■環境省事業として 55 のモデルプログラムを作成したが、こうしたプログラムが地域に普及していくためには、何が必要だと思うか（手段、人材資源等）。

アンケート回答者からは、「バックアップ」「協力」「研修会の開催」「自由度の高いプログラム」「人材」「余裕」「教材研究や研究授業の機会」「文科省の積極的発信」「問うこと」「人材派遣」「活用の普及」等が挙げられた。55 プログラムが役に立ったという教員だからこそ、うまく活用してより授業づくりが発展するためのコメントであった。

●10 年間ぐらいの連続的なプログラム実施とそれを続けるためのバックアップ。

●地域の方との幅広い連携による活動に協力していただける方の確保。

●モデル自体はとても有用ですが、普及にはモデルプログラムを使った研修会の開催など、もう 1 段階踏み込んだ働きかけが必要だと思います。

●各学校に合わせて実施できる自由度の高いプログラムの作成。

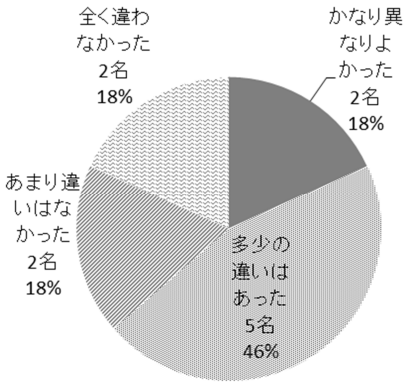
●学校現場をリードしていく人材

●取組を可能とする、教育現場の余裕。

●教材研究や研究授業等の機会。
●地域の教材開発のための資料、アドバイス。
●広がっていくためには指導要領等で今まで以上に明確にその必要性が説かれ、実践例として文部科学省から積極的に発信があれば、どの学校でも取り組まなくてはならない状況に持ち込まれる。現場からの主体的な取組が最も大切だが、何かと忙しい中、前年踏襲を続けており、何か圧力がないと動けないのも現場の実態かと思う。
●必要なのは、手段ややり方ではなく、そこに関わる人の思いやありかただと思います。
●「教育」とは？「学力」とは？「生きる」とは？と、問うことが大切かと思います。
●それらのプログラムを広めていくために中核となる人材の育成と、学校教育への人材派遣。
●これを活用した授業実践グランプリを企画したり、ESD 先進校に実証授業を依頼したりして、活用を普及させていく。

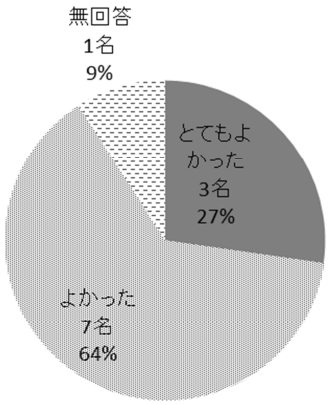
■これまでの授業づくり及び実践との「違い」はあったか。

アンケート回答者の 64%が「違いがあった(かなり異なりよかった含)」と答えている。「教師が子どもに答えを言わせる授業に変えた」「地域素材を見る」「つけたい力を明確にした」「課題に対して考える授業」「地域への発信も根付かせるきっかけ」「ESD ポイントで今までの授業を振り返り、意味づけができた」と言う点で授業手法、内容に違いがでたようだ。一方で、「ESD を行うための授業ではない」という指摘もあり、ESD が大切にしている視点から自身の授業内容や手法を見直し、違いがなかったという指摘があった。



●昨年度の実践とは、違う分野の学習を進めていたので、刺激になった。
●これまで、教師は教え込むといった授業であったが、教師が子どもに答えを言わせる授業に変えたことで、子どもの出番が増え授業が楽しいと感じる子どもの割合が増えた。
●「この地域や学校の特色とどう当てはまるか」という視点で地域素材を見ることができるという点で違いがあった。●今までは曖昧にしていたが、単元を通してつけたい力を明確にした総合的な授業ができた。また、調べるだけでなく、課題に対して考える授業ができたのも、この実証プログラムの成果だと思う。
●例年の取組をしっかりと磨いていくためにも ESD 環境教育の事業プランは子どもたちだけでなく、地域への発信も根付かせるきっかけになったのでとても良かった。子どもたちも各家庭で話をする機会が増え、保護者の方の勤め先の環境活動ともリンクして会話が充実したとも聞いた。自分だけができる取組ではなく、多くの学校で実践できるように、来年度は取組を深めていきたい。
●今までの実践を継続して取り組んだため、授業づくりとしてはあまり違いがなかったかと思う。しかし構成概念など ESD ポイントで今までの授業を振り返り、意味づけができたことは大きな収穫であったと感じる。
●ESD 教育とは何かを改めて考える良い機会となった。しかし、現実的には実施するためには、様々な機関の協力をいただかなくてはなりません。その辺りのご指導をいただきたかった。
▲ESD だから特別なことをするというのではなく、子どもたちとつくっている日常のくらしの一部を授業として見ていただいたので、違いという点では全くなかったと思います。
▲何を大切にするかという点では、取組自体に「ESD を行うため」の授業というわけではなかったように思います。

■児童・生徒の授業に対する反応はどうだったか。



アンケート回答者の 91%が「よかった（とてもよかった）」と答えている。その理由は、「子どもが充実感を感じる時間にはなっていた」「授業が楽しいと感じる子どもの割合が増えた」「変容を感じながら授業を進められた」「自分の体験したことのないことを経験した自分を振り返ることができた」「意欲や学習の内容の深まり」「学びに向かう原動力」といったコメントのキーワードから、学習者主体の授業づくりによって、子どもが学びを楽しく感じる授業が展開されていたことが把握できる。

●子どもは自分が必要と感じることに専心して動いていると思うので、子どもが充実感を感じる時間にはなっていたと思います。

●子どもの考えや意見が授業に反映され、実際に実現していくことにおもしろさを感じている。また、問題に対して「自分ごと」と捉えるようになり、授業が楽しいと感じる子どもの割合が増えた。

●調べ学習を中心に多くの子たちが関心高く取り組んでくれた。変容を感じながら授業を進められたのも興味深い所であった。

●自分の体験したことのないことを経験した自分を振り返ることができたから。

●意欲や学習の内容の深まりなどが見られた。

●子どもたちは、実際に作物の栽培を通して、自らの学校生活を改善するという取組を通し、意欲的に生物育成の技術について学んだと感じている。さらに今回の社会問題を植物の力で解決する方法を探究する活動を通して、先人の知恵の結晶である技術が、自分たちの生活に大きくかかわっていることを実感し、学びに向かう原動力になった。

▲授業は日常です。ただ、アンケートに疑問の声はありました。

■実証を通じて、感じた変化、気づき（子どもの行動の変化、教員等学校内の変化、地域でのつながりの変化など）※アンケート回答の一部抜粋を掲載する。

〈子ども〉

●交流員から学んだことも含めて、自分の生活でも生かしていこうとする姿。調べたことを相手に伝えるためのまとめ方や発表の仕方に慣れた。

●子どもたちが普段よりごみを出さないような意識になり、各家庭での取組につながった。

●中学校との合同で進めたので、実践が進むとともに、連携がスムーズになり、意見交換の内容も深まったと思います。

●地域の自然に着目したり、人とのつながりのあたたかさを感じたりして、地域に愛着と誇りをもつようになった。

〈教員・学校〉

●クリエイティブな発想が要求されるため、よい教員の研修となる。

●地域の自然に着目したり、人とのつながりのあたたかさを感じたりして、地域に愛着と誇りをもつようになった。また、教員は、授業改革には至っていないが、子どもが主体となって学ぶアクティブラーニングへの意識がもてるようになった。

●学校内でも ESD カレンダーを用いて、研修したが、始めたばかりなので今後の流れとしてはじっくりと時間を使っ

て研修を深めたいと思っている。地域のつながりとしては非常に発信の機会を増やしたことで成果を評価する声をいただき、本校の取組の大切な流れを作り上げることができた。

〈地域〉

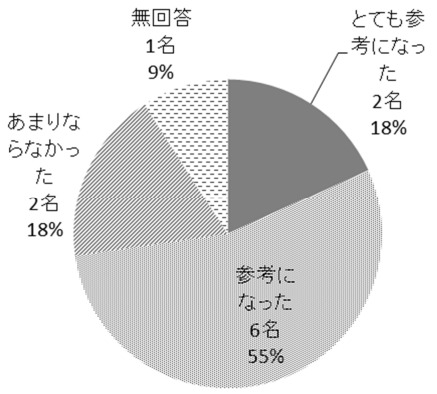
●地域の方が喜び、今回の取組について感謝していた。

●校区の平栗地区の町会長さんが、２回も子どもたちが調査に来てくれたことにすごく喜んでくれた。その思いを知った子どもたちも、「また平栗に行きたい。」と言っている。地域のつながりは人のつながりで、子どもたちにはいい経験になった。

▲直接感じた変化はないが、コーディネーターの先生方から、校区が全県に広がっている附属学校としての地域とのかかわりについてアドバイスを受け、今後の取組につなげていきたいと感じた。環境省の取組について知る機会となった。

■ESD の授業づくりの参考になったか。ESD の視点や手法をどのように授業に取り入れたか。

アンケート回答者の 73%が「参考になった（とても参考になった含）」と答えている。その理由は、「持続可能な社会づくりの担い手として子どもを育成する視点が持てたこと」授業を作る際 ESD を意識するようになった」「ESD の視点や概念から授業案を検討するようになった」「これから社会でいきるであろう学力について考えるようになった」などである。一方で、ESD の視点に当てはめてしまう授業になってしまわないか、ESD の視点や手法の事前研修が必要であった、という指摘を受けた。



●持続可能な社会づくりの担い手として子どもを育成していくという視点をもって授業づくりをするようになった。具体的には、教科学習においても、子どもの日常生活と関連させて問題提示をし、できるだけ子どもが今やっている学習は実生活と関連しているということを意識させるようにしている。

●ESD という言葉は、今までの取組で深く知る機会はなかったものの、今回の事業で大変勉強になる機会をいただきました。これは普段の授業で自分自身が ESD を意識していることにも気づくことができ、自信にもなりましたが、やはり多くの方とつながることができたことが非常にありがたいと思いました。三重大学 CST を受け、広がったつながりをこのような形で成果を出し、さらに飛躍できるようにしたいです。

●授業にそのまま取り入れることは、なかなか難しいが、授業を組み立てるための参考にした。

●国際交流員との交流が深まりの中で、どのような学習のねらいを達成できるか、ESD の視点から何度も検討を重ねました。

●「実行」とそれに伴う「実感」を重視すること。

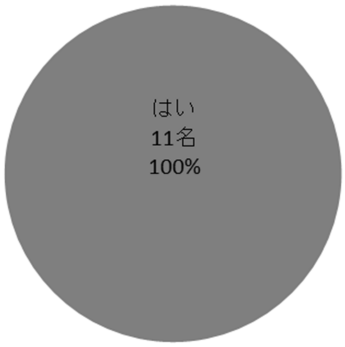
●多様性・相互性・有限性といった ESD の構成概念をもとに捉えなおしてみることで、これからの社会で生きるであろう学力について考えることができた。

▲ESD の視点に当てはめることで安心してしまうことのないよう考えさせられます。どのような子どもが育つのか、なぜそれをやるのか、学びの必然を大切にしたいと思います。

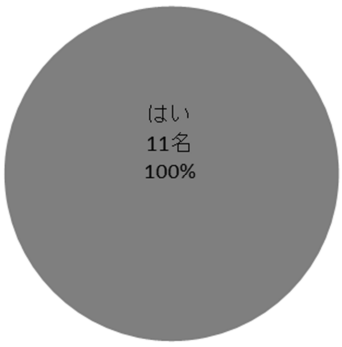
▲ESD の視点や手法について、当日の授業後にご指導いただきましたが、授業が終わってからご指導いただいても改善する機会がありません。事前の打合せの際に、ESD の視点や手法について具体的な映像等を使って、ご指

導いただけるとありがたかったです。
▲これまでの授業の延長線上にある授業なので、特に何か ESD の手法を取り入れたということはありません。

■今後今回のような地域課題をテーマにした授業づくりを進めるか。
アンケート回答者の 100%が「はい」と答えている。ESD 授業づくりの大切さ、地域課題を題材にした授業による子どもの変容に気づいたようだ。



■今後今回の授業を継続的に実施するか。
アンケート回答者の 100%が「はい」と答えている。今回実施した授業をさらにブラッシュアップしたい、改善したというコメントがあり、今回の ESD 授業づくりが教員や学校に重要な気づきをもたらしたようだ。



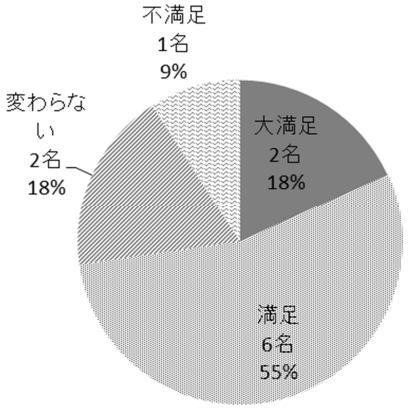
■ESD に取り組むにあたって課題について。どのようなサポート（教材、人材等）があれば役に立つか。
課題として、「教材になる人材やサポートをする人材の確保」「予算の確保」「情報提供」「コーディネーターや専門家と一緒になった学習プランづくり」「学校教育改善」「教員の増員」「実践をつなぐ働きかけ」「授業者の思想」「指導の継続」「学力向上と ESD の関連づけ」「時間の確保」「しっかりとした研修」が出された。どれも必要な項目であり、今後戦略的にどう解決するのかの検討が必要である。

●様々な視点があるので、どの部分に取り組むのか、学校として、学年として、毎年同じなのか、年ごとに変えるかなども考え、その後、教材になる人材やサポートをしてくださる方を探すといったところが大変ではないでしょうか。
●地域へ飛び出し、様々なモノ・人・ことに関わり学ぶ姿を育てたいと思っています。そのときに交通費などへの予算に関するサポートは不可欠だと考えています。助成や補助などに関する情報提供を今後もお願いしたいと思います。
●地域の素材を教材化する際は、学校と地域をつなぐ役割を担う方がいらっしゃるとより良質な教材となる可能性がある。また、各分野の専門家を交えて学習のプランを考えていくことによって、教員だけでは難しい領域にまで踏み込むことができるのではないか。

●今教育界では、目の前の学力の向上が声高に叫ばれており、その結果が目に見えるものとしてすぐ効果が表れるものを求められている。そのための取組等に学校現場が疲弊しているのが現実である。長期的な視野から、学校教育を改善していかないとなかなか ESD の考え方や児童の資質能力の育ちにはつながりにくいと考えている。
●教材は様々なアイデアを冊子や Web で公開くださり大変参考になるが、学校は日常的に職員が不足しており、ESD の授業においてサポートくださる方はもちろんだが、常に子どもと活動しながら生徒理解を通して関わってくださる教員の増員に向けて支援いただきたい。
●教材がどんなものであっても、それに取り組む人の志がどこにあるのかで、全く違うものになると思います。サポートということであれば、各地の実践家をつないでいく働きかけみたいなものがあれば、もっと ESD への取組が広がっていくと思います。
●「『ESD』から」という授業ではなく、子どもと共に学ぶこととしての授業でありたいと思います。それには、授業者である教師が、どのような思想で授業をするのか…ということを考えたいです。
●今回限りで終わってしまっては、ESD の視点や手法は広がっていかないと思います。継続的に授業づくりに関わって、継続してご指導をいただけるとありがたいです。
●ゲストティーチャーの授業へのかかわり方、外部団体との連携体制の構築、さらには教員の授業力向上等、課題はたくさんある。学力向上対策の機運が高まっているが、学力向上と ESD の取組に関連をもたせている学校が少ないのは大きな課題である。現状、多くの学校では学力向上対策とユニバーサルデザインに目が向いている。
●時間がいただきたいです。多くの事業をしっかりと学ぶ研修が欲しいと思いました。勉強できる場が地域間の方と共に学べれば、各校の取組に地域の方の意見、また、各企業の方の意見を取り入れやすくなります。多くの場で ESD の意見交換をしたいと思いました。

■本事業に参加される前とされた後の満足感とその理由

アンケート回答者の 73%が「満足（大満足含）」と答えている。その理由は「教員の意識の変容」「教員以外の助言」「児童の成長に直結」「教育を開くことの良さ」「生きた授業として考え続ける」といったコメントがあった。一方で、事前の指導の必要性や、日頃の授業をしていただけ、といった指摘があった。



●参加した教員の意識は大きく変容した。やはり、授業づくりに向けて、様々な職種や立場の方からご意見を伺うという機会は大変勉強になり、これまでの指導を見つめ直すきかっけとなった。
●教員以外の方からの助言もあり、自分の勉強になった。
●本事業に参加し、ESD の視点を生かした授業づくりを学んだことが、児童の成長に直結したと感じています。単元の中だけにとどまることなく、学んだことを今後の学習にも生かせると考えた児童の姿につながったことに満足しています。
●教育を学校外に開いていくことのよさが実感できた。
●ESD の事業自体には賛成です。ただ、いかにも「何かをした」という授業実践で終わりたくないなと。未来を創る子どもたちが、どのような場で育つのかということは、「形」や「手法」に留まらず、「生きた授業」として考え続けていき

たいです。

▲ESD の視点や手法について、当日の授業後にご指導いただきましたが、授業が終わってからご指導いただいても改善する機会がありません。事前の打合せの際に、ESD の視点や手法について具体的な映像等を使って、ご指導いただけるとありがたかったのです。

▲日頃の授業をしていただけなので、反省点はたくさんありますが、満足感と言われると難しいです。

(2)全国事務局との連携

全国事務局と連携し、本事業の情報共有及び進捗状況の確認、成果物作成の業務を実施した。全国の本事業の状況や過程、手法、成果、違いを知ることができた。連携状況の詳細は下表のとおりである。。

プログラム・作業	日時	詳　細
ESD 実証事業 第 1 回全国連絡会	平成 27 年 8 月 27 日（木） 参加者：高橋　今井	今年度事業予定共有 進捗状況の共有 グループワーク
中部地域の進捗状況提供	通年	年間を通して HP 掲載情報提供
ESD 実証事業 全国成果発表会及び交流会	平成 27 年 7 月 29 日(水) 参加者：高橋　新海	各ブロックのポスターセッションによる成果報告と共有 パネルディスカッション ズーラシア訪問
第 2 回全国連絡会	平成 28 年 1 月 29 日(金) 参加者：高橋　新海	全国事務局より事業予定とお願い事項 各ブロック成果報告など
全国事務局作成 ガイドブック原稿作成	1 月末～2 月初旬	中部 7 県の授業フォーマット及び写真選択など作業

７．業務の総括

本業務においては、今年度の地域プログラムの作成等及び地域プログラムの実証について、形成推進委員会及びワーキンググループが主体となって実施し、3 年間にわたる事業の検証（映像教材の汎用性の検証を含む。）について検証委員会が主体となって実施した。形成推進委員会、ワーキンググループ及び検証委員会の議論並びに各委員の評価から、(1)今年度業務の成果と課題、（２）3 年間事業を終えての成果と課題をひも解く。

(1)今年度事業の成果と課題

今年度の ESD 環境教育プログラムに基づく ESD 授業づくり及び実証に関して、形成推進委員会で共通目標・方針をつくることで、以下の成果があった。

①各県 7 つの実証校、8 つの ESD 環境教育プログラムづくりを通して、教員・学校の ESD 理解の促進、実践方法の習得につながった

②実証校に関わる地域のステークホルダーが実証校の授業案に対して ESD の視点と手法に基づくアドバイスをすることで、多くの地域で学校と地域の関係性を強めることができた。

③そのことによって、実証授業を受けた子ども達の自主性や学習意欲が高まり、教員が子ども達に育みたいと設定した力の育みにつながった

④ESD を授業に取り入れることによって、子ども、教員、地域の人々が地域の課題に対して当事者として関わる力と態度を育む可能性を示した

一方で、いくつかの学校及び教員から、ESD ありきの授業ではなく子どもとともにある教員の思想が大切であること、ESD に関する事前の説明が十分でなく授業に反映できなかったこと、といった指摘がされた。また、本事業の目的の 1 つである、ESD 推進のための地域の推進体制の構築については、教員からは各県で実施したワーキンググループの価値を高く評価されたが、地域側のワーキンググループメンバーからは、「会議回数が少ない」「事業スタートが遅い」「ていねいな議論ができていない」「授業づくりのプロセスへの参加が少ない」「学校や新たなネットワークの形成につながらない」といった意見があった。

これらの課題に関しては、本事業のスキーム上やむを得ない面もあるが、今後各地域での主体的・自発的な推進体制の構築に向けて、本事業の効果の可視化を進める際に考慮すべき点であると考えられる。

中部地域における ESD 推進の基盤・体制をみると、北陸地域には、すでに北陸 ESD 推進コンソーシアムがあり、北陸 3 県の ESD 推進の基盤ができている。長野県については、実証事業を行った松本市、長野市においてその基盤ができつつある。東海地域についても、大学やユネスコ協会、教育委員会、EPO 中部が牽引する推進体制ができつつある。その基盤を活用しつつ、次なる課題は各県レベルではなく、市町村レベルでの展開である。本業務での実証授業は、小学校区、中学校区を対象に行われたが、そのノウハウと成果を今後の展開に結びつけることが必要である。ESD をサポート、フォローするガバナンスと、地域密着型の市町村レベル、学校レベルでの ESD モデル校づくりを、ハイブリッド型モデルとして、本事業の成果を活用して進めることが求められている。

その際に、資金確保とコーディネート人材の発掘が必須となる。市町村の教育委員会、環境部局との連携が必須となる。本業務のプロセスを可視化し、説明ツールとしてつくりあげることも次なる課題である。いくつもの課題はあるが、本業務で関わり合った全てのステークホルダーと本音の議論を交わし、地域の持続性と子どもの豊かな成長を創りつづける ESD コミュニティの支援を行うことが求められる。

（2）３年間の本事業の成果と課題

①検証委員会における成果の検証

検証委員会では、平成 25 年度から３年間の本事業の検証を実施した。検証委員会で議論し、作成した ESD 授業づくりにおける重要ポイントの整理、実証授業を実施した教員や地域団体へのヒアリング、インデプススタディによる６つの仮説の検証、映像教材成果・効果の検証、作成した映像教材の汎用化並びに周知啓発業務の成果・効果、それらから把握した課題について、以下のとおり整理した。

ア ESD 授業づくりの重要ポイントの整理

本事業を３年間実施し作りあげた 22 の実証授業から、ESD 環境プログラムづくり（ESD 授業づくり）に必要な６つのポイントを抽出した。

１つ目は、「子ども達に育みたい力を決める」である。子どもたちに、どんな力を育みたいか、育むことが必要かをじっくり考えて明らかにすることが重要である。

本事業では、ESD 環境プログラムづくり（ESD 授業づくり）において子ども達に育みたい力として、

- ●今抱えている地域、地球の課題をつかみ、なぜ起きているのか、どうしたら解決できるのかを、多くの人とコミュニケーションを交わしながら行動する力
- ●自分のこととして課題を捉え、いろんな考えや価値観を理解し、時には批判的に見つめ、自分の意見や行動を生み出す力
- ●どんな未来にしたいのか、そのために何をしたらよいのか、どんなシナリオを描いたらいいのか、想像し、創造する力

などを挙げ、また、国立教育政策研究所教育課程研究センター「ESD の学習指導を構想し展開するための必要な枠組み」に記述されている「ESD が育みたい力と態度」を参照し、授業づくりを進めた。

ESD が育みたい力と態度	批判的に考える力（批判）
	未来を予測して計画を立てる力（未来）
	多面的、総合的に考える力（多面）
	コミュニケーションを行う力（伝達）
	他者と協力する態度（協力）
	つながりを尊重する態度（関連）
	進んで参加する態度（参加）

２つ目は、「どんな題材、教材にするかを決める(地域の課題、SD※を材にする)」である。子どもたちに育みたい力をつけるための題材、教材を決め、授業を組み立てる。その際に、子どもの暮らしに近い地域の課題、地域の SD を材にすることを重視し、子どもたちが関わりやすい授業をつくることが重要である。

本事業における 22 の ESD 授業の材は、里山、伝統食、ビオトープ、山、森林、学校のエコ、エネルギー、ギフチョウ、まちのステキ、川、地域の遺産、地産地消のお弁当、交際交流員、緑、羊とヤギ、リサイクルなどである。国立教育政策研究所教育課程研究センター「ESD の学習指導を構想し展開するための必要な枠組み」に記述されている「ESD の構成概念」を参照しながら、授業づくりを進めた。

※SD Sustainable Development(持続可能な開発)

ESD の構成概念 ESD 授業づくりで 大切にしたいこと	多様性　いろいろある
	相互性　関わりあっている
	有限性　限りがある
	公平性　だれもが幸せ　みんな大切
	連携性　みんな一緒に協力して
	責任性　責任をもつ

３つ目は、「体験をすることで自分ごとにする」である。「ほんもの」に触れる、出会うことで自分の役割や存在価値を見いだし、自分にできることを見いだした子どもは、地域の課題を「自分のこと」として捉えて、なんとかしよう、行動したいと思うようになる。子どもたちの学習に体験を組み入れ、子どもたちが「ほんもの」に触れる授業づくりを行った。

４つ目は、「参加して、対話して、協働する」である。

子どもたちが主体的に地域の現場での作業や調査活動、協働で実施する作業に参加すると、子どもの好奇心や探究力、行動の意欲が高まる。本事業では野外活動や、教室内での発問や話し合いの時間等子どもたちが意見を交わす参加の機会をつくり、子どもの思いや気持ちに寄り添う授業を展開し、子どもの心をつかみながらの授業展開となった。

対話(話し合い)の授業を重視し、子どもたちに発問し、子どもが自分の意見を言い、相手の意見を聞き、相手の意見を踏まえて、自分の意見をする場面は、子どものコミュニケーションの深まりを育むことにつながる。本事業では、「子どもをまつ」姿勢を大切にし、教員は子どもの思いや発言、疑問を引き出すファシリテーターの役割を担い、子どもたちが丁寧に思考するプロセスのある授業を実施した。

子ども同士、地域の人々、教員と一緒に取り組むことで、子ども達は、いろんな人の力を認めて、お互いが活かし合うことのよさを実感し、新たな課題の解決の方法を見つけていく。本事業では、地域の人々とのつながりを大切にし、いくつかの学校で一緒に作業する授業をつくった。

５つ目は、「私、みんなを大切にする授業をつくる」である。自己肯定感が低いと他者を大事にすることが難しいと言われている。ESD には、自己肯定感の育みは必須である。本事業では、「私には力がある」「私には役割がある」「私は必要とされているんだ」「私でいいんだ」と子どもも教員も実感する授業づくりを行った。

６つ目は、「ESD カレンダーを作る」である。子どもの発達に応じた能力にそって継続的に実施することや、学校全体、学年連携、教科連携を行い、体系化した ESD 授業の年間カリキュラム(ESD カレンダー)をつくると教員間の情報共有ができ、子どもの学びも積み重なる。本事業において、全ての学校ではないが、ESD カレンダーを作成する目的とその重要性を知り、本事業をきっかけに ESD カレンダーの作成を始めた学校がいくつかある。

イ 検証のための調査の実施

平成 25 年度、平成 26 年度に実施した ESD 環境教育プログラムに関わった子ども、教員、地域の人々を対象に調査を行った。教員５名、地域団体２団体、インデプススタディとして、①名張市立薦原小学校、②金沢市立三馬小学校、③富山市立古沢小学校、④東浦町立緒川小学校である。ヒアリング項目は、形成推進委員会が作成した 6 つの検証項目に基づき行った。

【検証結果】

●子どもの変化が見られた

仮説１　子どもたちに「育みたい力」を明確にし、「育みたい力」が育まれた。
仮説２　子どもたちの当事者意識、自己肯定感の育みにつながった。
仮説３　子どもたちの地域への関心、課題解決のための行動（力）が育まれた。

教員や地域の方のインタビューにて子どもの様子を伺ったところ、「地域に対しての根強い関心がいまだに残っている」「問題意識を持てば自然に自分から考え、調べるようになる」「視点を揺さぶられたことで意見が引き出された。前向きな学びはできている」といったコメントがあった。

薦原小学校のインデプススタディでの子どものアンケート結果からは、4 年生から 6 年生へと進級し 2 年が経っても、子どものギフチョウや薦原への思い、何かしたいと意欲はほぼ変わっていないことが見られた。その学習の効果を可視化している。

三馬小学校のインデプススタディでは 5 年生から 6 年生に進級した子どもたちの、1 年経っても肯定的な伏見川への思いは維持されていた。子どもが学習した手ごたえを感じ自己肯定感を高めるとともに、伏見川に関わる当事者意識を育むことができたようだ。課題解決のための積極的な体験活動を生み出したことで、子どもの地域への関心と課題解決の行動力を授業が促し、子どもの行動力を高めたようである。

子どもの育みたい力を明確にし、地域の課題を教材にすることで、子どもが自分ごととして課題を認識し学習に取り組む力や、課題への関心、課題解決のための行動力の育みを促した。また、教員が子どもに寄り添い、子どもの思考を揺さぶることで、主体的な学習意欲の高まりが見られた。

古沢小学校のインデプススタディの子どものアンケート結果からは、子ども達のアンケート結果からも、授業から２年経っても「呉羽山(里山)」に対する思いのある子どもが多いことがわかる。古沢小学校の授業では、映像の持つ力をフルに活かし、かつ本物に触れる、実感がもてる体験活動や地域の人々へのインタビュー、子ども同士の話し合いを重視した授業を実施した。映像を使うことによってコンパクトに情報提供を可能にし、話し合いの時間等子どもが参加、発言する時間を十分にとることができた。また、昔の里山や地域の映像、世界の里山の映像を授業に使うことで、子どもの視野を広げることができた。そういった教員の仕掛けによって、子どもの学習意欲が高まり、地域への関心、行動力が育まれたようだ。

緒川小学校のインデプススタディの子どものアンケート結果からは、子どもたちの伝える頻度が減少しているものの、自身の行動の意識が下がっていないことからエコに対する意識は継続されていることがわかる。６年生になり「国際理解」をテーマにした学習が展開されているものの、全校の３つの力を育むことが目標となっていること、また「自分ごと」にする授業が実施されていることから、地域の課題を自分の問題として捉える態度が育まれている。

全ての実証校において、子どもに育みたい力を明確にし、地域の課題を教材にすることで、子どもが自分ごととして

課題を意識し学習に取り組む力や、課題への関心、課題解決のための行動力の育みを促した。また、子どもの思考を揺さぶり、教員が子どもに寄りそうことで、新しい視点や関心の持続、主体的な行動意欲の高まりがみられた。学習を重ねることで、自分の限界を感じ葛藤が生じるなど変化をもたらしたようだ。

●教員の変化が見られた

仮説４　教員の授業力が高められ、教員の SD への関心が強くなった。
仮説５　地域の人々と ESD 授業をつくることで、教員の授業力が高まった。

教員のインタビューから「教員の授業に対する向き合い方の変化」を把握することができた。「子どもへの発問や授業の仕方によって、子どもに培われる能力が変わってくる」「授業づくりの際に、どこに向かっていけばよいのかを考えるようになった」「ESD は価値観の変革である」「教員が意図をもって授業づくりをすると生徒が変わる。やっていることの意味付けをすることが重要である」といったコメントがあった。

薦原小学校のインデプススタディでは、子どもがもっと学びたい、もっと知りたいと「学習課題を自分ごととして捉える授業づくり」に転換した。子どもの思いや意識に沿った発問や授業構成に注力し、子どもと一緒に授業を作るスタンスの大切さを実感したようである。地域、SD の課題を題材にする重要性や、授業目標の達成のための地域の外部講師の導入と役割の明確化、教科と総合的な学習との連携によるカリキュラムづくりなど学校全体で ESD に取組む重要性に気づき、実践に活かし始めている。

三馬小学校では、「地域と向き合う教材づくり」「地域の SD の課題を把握する 」ことを重視し実践がされていた。また、教員自身が「自分の体験をもとに話せるようになった」「私自身生きるということを総合的に見始めた」と話している。教員の授業力を支える、市民としての問題意識や当事者意識を育てていることが認められ、授業力の最も骨太な部分を形成している。さらに、「地域を大事にすることは大切である。どのような題材でも地域に近づいた学習はできる」「学校周辺にいろいろな良いものがあることに気づいた」「地域の外部講師が教科書にはない学び、本物を教材にした授業を実施し、子どもたちのワクワクドキドキをさらに膨らませた」など地域を教材に地域の人々と一　緒の授業をつくる価値や方法についての気づきを得たようである。

古沢小学校のインデプススタディからは、教員自身が実際の里山にでかけ、地図を広げ、材である「呉羽山」から子どもに何を学ばせるかを模索し、また積極的に地域で活動をしている地元の人々とコミュニケーションを交わし授業づくりを豊かにした。映像制作においても、映像担当者と議論を重ね、昔の映像、世界の映像、インタビュー映像等子どもの思考を揺さぶり、豊かにする内容の教材を作成した。そのことによって、今も映像教材を使い、基本的なスキームを活用しながら授業が行われている。

緒川小学校のインデプススタディは、教員相互の関わり、教員と地域の関わりや信頼、そして子どもたちの関わり、それを見守りながら支えていく大人たち、全員が子どもの目標に向けてチームとして動くことによって、関わった全ての人たちの意識や行動に変化をもたらすことを可視化した。

ESD 授業を実施することによって、教員の地域の SD の課題に対する関心が強くなり、そのことによって教員自身の授業づくりへの向き合い方が変化し、地域の人々と ESD 授業をつくることでより授業力が高まったようだ。子どもが食いつく授業へと変わり、さらに教員はやる気をもち、子ども、教員の相互の学びあいが授業を豊かにしている。

校長先生のヒアリングから、「一教師の実践に留めず教師集団の実践にすること」「子どもを見て地域を見て自分

ごととしての授業づくりを着実に進めていること」「ESD を学校運営の柱に育てていること」が話され、校長先生のリーダーシップによる ESD 授業実践、ESD がうまく実践されるための構えを把握した。教員の授業力は、子ども、地域の人々、校長先生など授業づくりに関わる人々との関係性の中で高められていくようだ。また、ESD 授業は教員自身の学習の連鎖を活性化させるようである。

●学校と地域の連携による変化

仮説６　持続可能な社会の担い手を育むためには、学校と地域の連携が必須であった。

教員や地域の人のインタビューから、「地域の人が地域のことを教えると先生とは違う視点、新しい風が入る」「実際のフィールドで活動している人が体験や思いを話すとインパクトが強く、教材になる」「外部から評価をされることで、教員や子どものモチベーションが上がる」といったコメントを得た。

薦原小学校では、「地域の人と連携して薦原ならではの授業づくりをした」「公民館もバックアップしている」と双方からのコメントがあり、地域をまるごと教材にし、地域の団体の授業づくりへの参加や、公民館という学びの拠点を活用しながら子どもの学習意欲を高める幅を広げている。三馬小学校においても、公民館との連携が重視されていることや、教育的に見た質の向上や継続性の観点からの外部講師の協力、外部評価への参画と言った点で、連携の重要性を話されている。地域側も学校と連携することによる地域力の高まりや重要性を認識し、子どもと大人が地域で共に生きる当事者としての意識を持つことを願い、実践がされていた。学校と地域が一緒になって授業づくりを担い、地域の人々の ESD 授業に対するアドバイスによって授業内容がより豊かになったようだ。また外部の人の評価を得ることで子どもや教員の自信につながった、地域の人は学校に必要とされているという実感を持つことできた。学校と地域がつながることで、子どもも教員も地域の人も、それぞれが深く豊かになる授業が実践された。

古沢小学校のインデプススタディにおいては、富山市ファミリーパークやきんたろう倶楽部との連携があったからこそ可能になった授業であること、富山大学や富山市教育委員会のバックアップがあったからこそ実施できたことが明確に記されている。継続的にこの授業が実施できるのも、地域との関係性がしっかりできていて、教員や子どもの実態に合わせての授業展開を可能にしているからである。学校と地域の連携による ESD 授業プログラムができあがり、伝統として古沢小学校では実践されているようだ。

緒川小学校のインデプススタディにおいても、個性化教育、オープンスクール、また地域との連携によって緒川小オリジナルの教育課程が作られていた。さらに ESD を導入することで、地域の教材や人材の活用方法が多様になったという。子どもの思考を揺さぶる仕掛けや、授業の工夫を地域の人々と相談しながら実践できるようになった。

学校と地域が一緒になって授業づくりを担い、地域の人々が ESD 授業に対するアドバイスをすることで、授業内容がより豊かになった。また外部の人の評価を得ることで子どもや教員の自信につながった、地域の人は学校に必要とされているという実感を持つことできた。

ウ　映像教材の成果・効果の検証及び汎用性について

平成 25 年度、平成 26 年度に行った映像教材を活用した ESD 授業づくり、実施は、教員とのやり取りなど調整にはエネルギーを費やしたが、非常に高い評価を得た。

ESD 授業においては、実感を伴う、ほんものに出会う体験が重要である。しかし、学校のカリキュラム上、時間数の制限や移動手段の確保など、実際の場所に訪れることができない、人に出会えないことが多々ある。行きたい場所に行けない時、会いたい人に会えない時の授業展開に映像は役に立った。また、発問のための補助教材として、子どもの思考に揺さぶりをかけたり、話し合いの題材にしたり、反転学習、家庭学習に活用した。同じテーマを学習している他校の子どもの映像も、子ども達には刺激と共感を生みだした。

ただし、映像ありきの ESD 授業ではいけない。子どもに育みたい力をつけるために、必要な題材や教材に触れることができない時に、映像を補助教材として使うことが前提となる。

また、3 年間で制作した 49 本の映像が多くの学校で活用できるように、制作した映像の汎用化を目的とした映像に再編集することとし、4 本の映像を作成した。（①ESD の理解を促し、取組を促進する映像/1 本、②制作した映像の特徴を踏まえ活用方法を解説する映像/3 本）。本映像は、教員や地域の教育関係等の ESD 研修に活用することを想定して作成している。作成した映像教材については、環境省動画チャンネル https://www.youtube.com/user/kankyosho にて配信している。以下、映像を活用して授業を実施した教員等のコメントの一部抜粋である。

[ESD 授業で活用した映像に対する評価]

●里山がどんな場所か、どのように地域、人との生活と関わりがあるかを事前に映像から知ることができた。地元の人のインタビューの映像から、里山の過去と現在、未来をつなげて捉え、今自分達に何ができるのかを考える授業を実施できた。必要な情報を効果的に視覚から取り入れることができ、時間短縮にもつながった。里山の大切さや、大切にして暮らしている人の思いや活動を映像から知ることによって、里山と自分の距離が近しくなり、学習の意欲が高まった。

●校区の老舗の見学やインタビューの様子等生徒の活動を映像によってふりかえることができ、また生徒が考えるための情報や素材を提供することができた。映像を生徒が家で家族と視聴し意見を聞くといった反転授業に活用することができた。

●大袋東小学校のビオトープの映像を見て、学校での取組と知り感動していた。映像は、学びの復習等必要に応じて何度も見せることができる。児童をつなぎとめ、幅を広げる効果がある。パーツとして捉えていた川の流れや、地域の自然の変遷が映像によって全部つながった。

●エネルギーをつくる様々な方法があることを知ることができた。学校にある太陽光パネルや、生徒が行ったことのある場所が映像に出てくると生徒の食いつきがよく、関心が高まる。特に、小水力発電に取り組む方の生き方で終わるストーリーが良く、生き方や選択があることを伝えることができた。

●身近な題材をクイズとして扱い、児童生徒の思考にゆさぶりをかけ、自分ごとにして考えるきっかけづくりとして映像を活用した。クイズの答えは出さず、児童が考え話し合うきっかけとして活用した。自分たちでも映像を使った授業ができる可能性も感じた。子ども達に実感させたり、興味を持たせたり、自分たちの活動を振り返る上で大変有効だ。

●児童が知っている風景や人々が映像に登場することで子どもたちの学習意欲が高まった。

●映像の児童の追究を材にしながら、自分を重ね、うなずきながら映像を見て、共感していた。映像を見た後、児童は自分の追究を振り返りながら考えを発言していた。映像に出てくる子どもに惹きつけられ、子どもの学習、探求

意欲が高まった。
●授業中になかなか見に行くことのできない川の上流、中流、下流の様子や、上流の森とのつながり、中流の人々の暮らしや昔と今の状況の比較、下流の海や魚とのつながりを映像から学び、伏見川の自然を守ることと防　災について多様な見解があることを知り、考えを深めることができた。
●映像を使うことで、以前訪れた風景等忘れていたことを思い出すことができた。
●実際水源地に訪れることが難しいため、映像でその状況を見ることでイメージすることができた。映像を活用することで、生徒の興味を向けることができた。
●映像での授業は子どもたちが生き生きする。映像の内容はいつまでも覚えていて自分達のできる省エネ活動に積極的に生かしている。
●映像を使うことで、時間・空間を越えて思考し、テーマへの関心を深めることに役に立った。
●映像による上流・中流・下流の川の様子から、それぞれの違いを知り、なぜ違いがあるのかを考え、川と川のいきもの、人間の暮らしとの共存に大切なことを学んだ。映像を活用することで、三面張りや川べりの様子など生きものが暮らす重要な場所に焦点をあてて話しあうことができた。
●児童は身近な風景を映像で見ることができて喜んだ。映像をうまく使うと、次の発問に活かすことができる。映像をそのまま使うだけでなく、切り取ったり止めたりして使うことができ、有効である。また、授業と授業の間隔が開いてしまった時などとても役に立つツールである。

エ　周知啓発業務の成果・効果の検証について
　本事業の成果効果を伝える「周知啓発ワークショップ」の開催及び冊子の作成を行った。以下ワークショップ参加者のアンケート結果からその成果・効果を分析する。回収したアンケートから、本企画の①感想、②ESD への理解の深まり、③ESD 授業づくりの参考となった点、④課題、⑤提案と要望の 5 点について以下のとおり把握した。

■第 1 回「ESD 授業のつくりかた」ワークショップ　アンケート結果
　計 102 名/回収 64 名
　（金沢開催：参加者 50 名/回収 37 名　　名古屋開催：参加者 52 名/回収 27 名）
[感想]
学びのありかたと ESD の関係性が少し理解できた/多くの事例を聞けて良かった/閉じていた思考が広がった/多様な人の話を聞くと自分の在り方を考える/新たに心が動かされた/生の声が聞けて勉強になった
[ESD への理解の深まり]
本来の学びの在り様を探っていることに共感した/教員のスキルが向上している/子どもが気づきを深めるプロセスがある/子どもの課題意識の持たせ方が参考になった/視点が増えた
[ESD 授業づくりの参考となった点]
子どもの心の動きに寄り添う/視点を明確にする/教師と子どもの相互の働きかけ、学びあい/教師が育つしくみのようなものが感じられた
[課題]
学校全体で継続して取り組む必要性/カリキュラムにどう組み入れるか/学校と地域の息の長いつながりをどうつくるか/子どもの関心を引き出す工夫/管理職のリーダーシップ/負担がなく導入する/共通理解と共通協働
[提案・要望]

ESD 推進の教員のネットワーク化/他校や世界とつながる/子どもの参加/ESD 教員の増強/「コーディネーター群を設置公表

■第 2 回「子どもの学びを学校と地域が一緒につくる」ワークショップ　アンケート結果
　計 97 名/54 名（金沢開催：参加者 45 名/回収 31 名　　名古屋開催 52 名/回収 23 名）
[感想]
どんどん熱くなり一体感ができました/地域の方の思いを知ることができた/これからの ESD を考えられてよかった/深い実践報告だった/継続性が大切/コーディネーターの存在が必要/考え方が少し深まった/社会教育分野のステークホルダーの参加/あと一歩の情報を一人ひとりから聞きたかった
[ESD への理解の深まり]
地域連携の意義/具体的な事例にヒントがあった/学校の先生の捉え方についての理解が進んだ/多様な目標と多様な手段を改めて認識/他地域での ESD 実状から考える視点を得た
[ESD 授業づくりの参考となった点]
継続性/子ども主体/気づきを持てた/地域の教育力の存在/協力の可能性が開けた
[課題]
学校が全教員を巻き込んで ESD を多面的に進めるにはどうしたらいいのか/学校と地域のつながりかた、方法/学校も地域も双方がスキルを高める/地域で話し合う場の設定/時間と費用が必要/ステークホルダーの交流と共有/対話/交渉する窓口/教育委員会の支援機能/研究指定校から全域への普及
[提案・要望]
企業を交えた企画/社会教育関係者の参加/参加者に応じた企画/1 泊 2 日/じっくり ESD を考える/次年度以降の継続

カ　まとめ

　周知啓発のためのワークショップを実施することで、ESD 授業がどのように実施されているかを伝え、また教員（学校）と地域の対話によって、双方の理解にズレがあり活かしきれていない現状の把握をすることができた。また、ESD 授業づくりや実践についての参加者が捉えている課題や提案、要望を把握することで、今後より多くの人が参加する ESD 事業展開を検討することができた。多様な人々が共通の課題について対話をすることによって、気づきあい、学びあいの空間をつくることができ、その価値を参加者と共有した。参加者から、このような企画を数回増やすことや、時間をもっとかけて実施することなど指摘を受けた。学校にも地域にも必要な事業であった。

　周知啓発の冊子の活用と併せて、周知啓発ワークショップのような多様な人々が集い、ESD 授業等について協議する場の継続実施のニーズを把握した。その際に、企業や、社会教育生涯教育関係者など新しいステークホルダーの参加を得ることや、実施地域や頻度、企画内容等の検討の必要性も把握した。

②総括

平成 25 年度から 3 年間にわたり実施した本事業は、子ども、教員、多様な地域の団体、地域の人々の参加を得て実施したものであり、映像制作という独自の取組みも行われた。平成 25 年度、26 年度に関してはメディアによる取材も行い、各県での ESD の認知度向上のための取組を実施した。

3 年間で、ESD 授業を受けた子どもが 886 名、実施した教員が 32 名、ESD 授業を実証した学校が 22 校、実証に関わった地域の団体等が 66 団体、実証した ESD 授業が 22 プログラムである。各県 3 年間で 3 校（一部地域では 4 校）での実施ではあったが、この数字を評価するのではなく、ESD 授業を実施する学校がある、ことが実証された。ESD は難しい、今の教育や総合的学習と何が違うのかと多くの教員から質問されるが、ESD という概念や手法に基づく教育プログラムを実施する学校が中部地域には 22 校もあったという事実を伝えていくことが重要である。

■本事業における定量評価

ESD 授業を実施した学校数	22 校（小学校　14 校/中学校 8 校） ※富山県で小中連携事業を実施
作成実施した ESD 授業数	22 プログラム ※長野県で 2 つの学年実施
ESD 授業を受けた子ども数	886 名（小学生 466 名/中学生 420 名）
ESD 授業に取り組んだ教員	32 名（小学校 21 名　中学校 11 名） ※ゲストティーチャー　9 名
ESD 授業づくりに参加した地域のステークホルダー	66 団体（行政、大学含む）
実施した周知啓発事業	平成 25 年度　1,604 名（各県実施） 平成 26 年度　679 名（各県実施） 平成 27 年度　102 名（北陸・東海各 1 会場で各 2 回実施） 合計　2,385 名
作成した映像教材	53 本（授業づくりに活用した映像 49 本/ESD 普及啓発及び作成した映像の活用のための映像 4 本）

また、作成し実証した ESD 授業の評価について、子どもの変化、教員の変化、学校や地域の変化が顕著に表れ、その成果効果を形成推進員会、各県ワーキンググループ、検証委員会において協議し検証することができた。

形成推進委員会においては、「授業をどう作るかによって子どもの育ちが変わること」「子どもの育ちを実感できる教員が増えたこと」「教員を応援する地域になっていくこと」「本事業が授業研究の実証として有効であったこと」「授業の質が高まったこと」「ESD を実践している人がつながったこと」「子どもたちの学びたいという気持ちが醸成されたこと」「子どもの成長に必要なサポートの感覚の実感ができたこと」「教員と地域の人々のつながり方が変わったこと」「教員の ESD 理解が深まったこと」「学校と地域を結ぶ舞台の設定の重要さに気づいたこと」「教員本来の姿を考える機会となったこと」等の本事業を通じての成果効果が挙げられた。

ワーキンググループメンバーからは、本事業における変化として、「直に触れることでの子どもの変化」「学校と地域

が一緒に授業をつくることで授業に膨らみができた」「学校と地域をつなぐバックアップや支援の重要さに気づいた」「先生の成長」が挙げられた。

検証委員会による検証作業においても、教員や地域団体、学校を対象にしたインデプススタディから、本事業が、子どもや教員、学校と地域の関係性に変化をもたらしたことを明示した。

本事業の周知啓発を目的としたワークショップ参加者のアンケートからも、実施した授業報告や、学校と地域との対話を通して、「教員の成長」「子どもの変化」「学校と連携するための地域の気づき」を表す意見が多かった。

一方で、本事業の難しかった点についても記述しておきたい。本事業は、学校と地域の参画があってこそ、生きる事業である。中部 7 県教育委員会への事業説明や、実証校の選定等時間をかけて丁寧に行い、事業目的の理解を図った。「各県の実証校 1 件を選定し了承いただくことのむずかしさ」「すでに進んでいる学校の年間カリキュラムに寄り添っての授業づくり」「実証校の市町村教育委員会の理解や参加を得ること」「実証授業を行う教員との授業案について検討する時間の確保やコミュニケーションのとりかた」等、事業工程において課題がいくつもあった。しかし、本事業は、環境省と文部科学省が連携によって展開している。だからこそ超えられた課題でもある。

実証校を何とか決め、教員に事業の説明をした際に、「ESD って何？よくわからない」と話していた教員が多かったのも事実である。しかし、会議や授業案のやりとりをする中で、教員が ESD 授業づくりの難しさにぶつかりながらも、授業づくりに夢中になっていく姿を目の当たりにした。「子どもが授業に食いつくようになったんです」と、教員が誇らしげに話すようになった。その変化を学校も地域も向き合い見ていた。本事業の醍醐味は「そこにある」と認識している。

「教員は実施した授業による子どもの変化に手応えを感じる。学校や地域は、手応えを感じている教員に手応えを感じる」。そのスパイラルを本事業は生みだした。そして実証授業を担当した教員以外の教員がその変化に感化され変わり、校長のリーダーシップにより学校全体の取組として発展した学校、地域がある。また、学校と地域の協働によるESD授業実践は、子どもや教員に影響を与えるが、と同時に学区のある地域社会の持続性にも影響力を及ぼす。

本事業は、ESD 授業づくりと実証によって、関わるステークホルダーに気づきと変化を生み出し、その実践が他校に、他地域に汎用される可能性（映像教材の活用も含めて）を明確にした。本事業を行った多くの地域では、教員や学校と地域の接点ができ、地域の材を活用した授業づくりや実証を行うことで人々のネットワーク、関係性の育みに寄与した。本事業に関わることで、ESD の重要さや今後の日本の教育実践に必要な要素を明らかにすることができた。

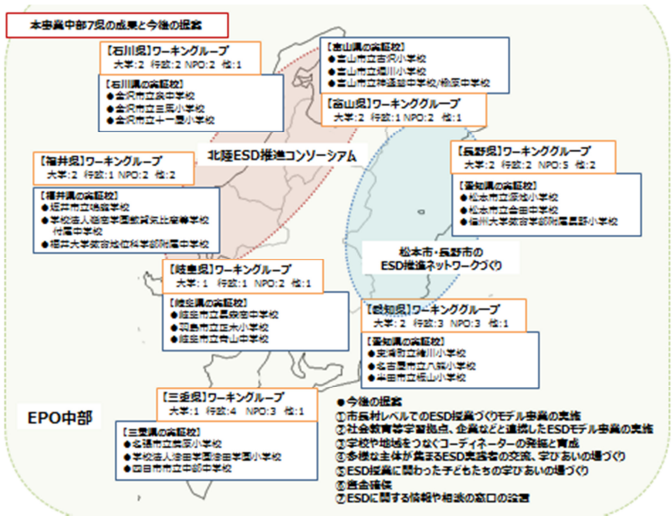
本事業で創りだした中部 7 県のポテンシャルは今後の展開に示唆を与える。北陸に関しては北陸 ESD 推進コンソーシアムがあり、長野県においては現在長野市、松本市にてネットワーク推進体制が構築されつつある状況だと報告があった。東海地域においては、大学、ユネスコ協会、中間支援組織、ワーキンググループメンバー間の連携によるネットワーク、EPO 中部がその基盤となるであろう。本事業の各県の核となったワーキンググループのネットワークを活用することも重要である。それぞれが事業における必要性に基づき、それぞれのノウハウを持ち寄り、資金を確保し、人材をつなぎ、本事業のノウハウを共有しながら、実施可能な「学校」「教育委員会」「地域」に声をかける作業をし続けることしかないと捉えている。

本事業には各地域での実証校を決めたときの特徴がある。富山県や石川県のように同じ市で実証校を選び、市という単位での展開をした地域、長野県や岐阜県のように同じ市で 2 校、違う市で 1 校で実施した地域、愛知県、三重県、福井県のように 3 年間別の市町で実施した地域があり、それぞれの成果がある。今後、各県、各市町でどのように ESD 実践校を拡大していくかの戦略を立てる時に役に立つであろう。

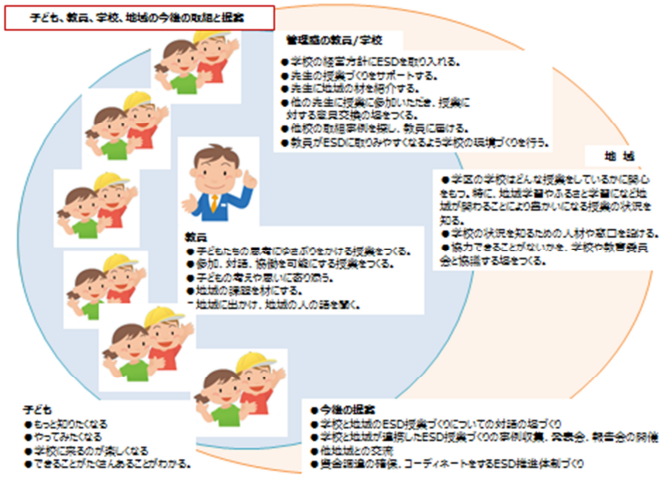
一方で、今後の展開について検討すべきことがある。多くの人から指摘されているように、主に「継続性」と「拡大」「質の改善、評価」である。成果効果を生み出した本事業を改善しつつ継続させていくか、対象となる ESD 実証校や地域を拡大していくか、実証事業を改善させ発展させるための質の改善及び評価をどう進めるか、いかに 3 年間の成果を活用した戦略を地域で組み立てていくかである。今後の展開を検討する上での共通課題は、「推進基盤」「受け皿」であり、受け皿を支える「資金」「人材」の確保である。また、本事業ではなかなか連携できなかった、企業や、社会教育（生涯教育）、動物園・水族館・博物館などの施設や、環境学習センター・地球温暖化防止活動センターなど地域の施設との参画である。

今後より多くの学校と地域で ESD 授業づくりと実践がされていくために、本事業の成果は十分に活用できる。今年度作成した冊子と映像をうまく活用して、本事業の成果効果を伝える。関係性を育んだ中部 7 県の ESD 実践者、各県内の実践者との交流、学びあいの場をつくる。本事業で培ったノウハウやつながりを活用した新たな事業を展開する。併行して、支える仕組みづくりを同時に行うことが必要である。

[本事業でつながった ESD ポテンシャル]



[各地域で ESD 取組が展開すると…]



[資料編]

資料１．周知啓発のためのワークショップ報告書

子どもが輝く授業をみんなでつくるワークショップ

…先生も地域の人も ESD･･･

資料 1-1　北信越地域開催･･･････255

資料 1-2　東海地域開催･･･････････284

資料 1-1　北信越地域　開催　目次

１．第 1 回「ESD 授業のつくりかた」ワークショップ報告 256
（1）開催概要 256
（2）プログラム内容 256
①主催者あいさつ
②趣旨説明
③「ESD 授業づくり」報告
【富山県】富山市立神通碧小学校
【石川県】金沢市立十一屋小学校
【福井県】福井大学教育地域科学部附属中学校
【長野県】松本市立会田中学校
④「ESD 授業づくり」報告を受けて
【岐阜県】岐阜市立長森南中学校
【愛知県】半田市立板山小学校
【三重県】四日市市立中部中学校
（3）「ESD 授業づくり」学びあいワークショップ 266

2．第 2 回「子どもの学びを学校と地域が一緒につくる」ワークショップ報告 270
（1）開催概要 270
（2）プログラム内容 271
①「ESD 授業づくり」報告
【岐阜県】岐阜市立長森南中学校
【愛知県】半田市立板山小学校
【三重県】四日市市立中部中学校
②フリップレポート「学校と地域が一緒につくった ESD 授業」
【富山県】環境教育ネットワークとやまエコひろば
【石川県】金沢エコライフくらぶ
【福井県】NPO 法人エコプランふくい
【長野県】NPO 法人みどりの市民
【岐阜県】岐阜大学教育学部
【愛知県】日本福祉大学
【三重県】環境教育ネクストステップ研究会
（3）「学校と地域が連携した授業づくり、学校づくり、地域づくり」ワークショップ 279
（4）総括 282

※本企画の参加者アンケート及び広報のためのチラシについては、平成 27 年度 ESD 環境教育プログラム実証等に係る ESD 環境教育プログラム作成業務報告書に掲載している。

[北信越地域開催]

１．第１回「ESD 授業のつくりかた」ワークショップ報告

（1）開催概要

日 時：平成 27 年 12 月 26 日（土）11:00~13:00（120 分）

場 所：石川県女性センター大会議室（石川県金沢市三社町）

参加者：50 名（教員 16 名 自治体職員 3 名 地域団体/NPO12 名 地方事務所 1 名 他 18 名）

［プログラムスケジュール］

時間	プログラム	内容
11:00 ～ 11:05 （5）	挨拶 趣旨説明	環境省中部地方環境事務所 環境対策課環境管理専門官 村辻裕樹氏
11:00 ～ 11:40 （40）	ESD 授業づくり報告 [富山県] 福田有児先生（富山市立神通碧小学校教頭） [石川県] 杉本倫代先生（金沢市立十一屋小学校教諭） [福井県] 奥村栄司郎先生 （福井大学教育地域科学部附属中学校教諭） [長野県]畔上一康先生 （信州大学教育学部附属長野小学校副校長）	コーディネーター：松本謙一氏（富山大学人間発達科学部教授） ①先生と ESD との出会い ②実施した授業内容 ねらい 工夫したところ ESD の視点と手法 ③実施した授業においての児童の様子 ④今回の授業を作られるとき悩んだこと、課題になったこと ⑤今回の授業を実施する上で気づかれたこと、学んだこと
11:40 ～ 12:10 （30）	ESD 授業づくり報告を受けて [愛知県] 小嶌正嗣先生（半田市立板山小学校教頭） [三重県] 森 直也先生（四日市市立中部中学校教諭） [岐阜県] 小林由紀子氏（NPO 法人 e-plus 生涯学習研究所）	コーディネーター：池端弘久氏（金沢市立教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家館長） サポート：新海洋子氏（環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー/長野・東海コーディネーター） ●北陸 3 校の授業についてのメッセージ
12:10 ～ 13:00 （50）	「ESD 授業づくり」ワークショップ	コーディネーター：鈴木克徳氏

（2）プログラム内容

①主催者あいさつ 環境省中部地方環境事務所 環境管理専門官 村辻 裕樹氏

本事業は平成 25 年度から 27 年度の３ヶ年事業である。３年間の報告が行われるので、ESD 授業づくりの

実践の成果を共有し、ESD の大切さ、伝え方、学び合いの仕方について意見交換をしていただきたい。

②趣旨説明　中部環境パートナーシップオフィス　チーフプロデューサー　新海洋子氏

今日は、３年間各地で実践してきた ESD 授業づくりの報告と共有を目的として実施する。この３年間とても色々な壁にぶつかりながら、地域と学校が一緒になって学校の授業をつくる試みをしてきた。作成した 22 の授業のうち、今日は今年度の授業を中心に７つの授業の紹介をする。みなさんと「ESD が大事だ」と確認共有をして、今後より発展的に地域での実践が進むように機運を高めていきたい。第１回は、北陸と長野の４つのESD授業の報告をしていただき、東海地域の先生からメッセージをいただく。その後、ESD 授業づくりに焦点を当てた学びあいワークショップを行う。第 2 回は、東海地域から参加している先生の ESD 授業の報告をいただき、学校と地域が一緒になって ESD 授業づくり等について考えるワークショップを行う。参加者のみなさんの活発な議論や意見交換がされる場にしたい。

③「ESD 授業づくり」報告

北陸と長野で実証授業をした教員から報告いただいた。

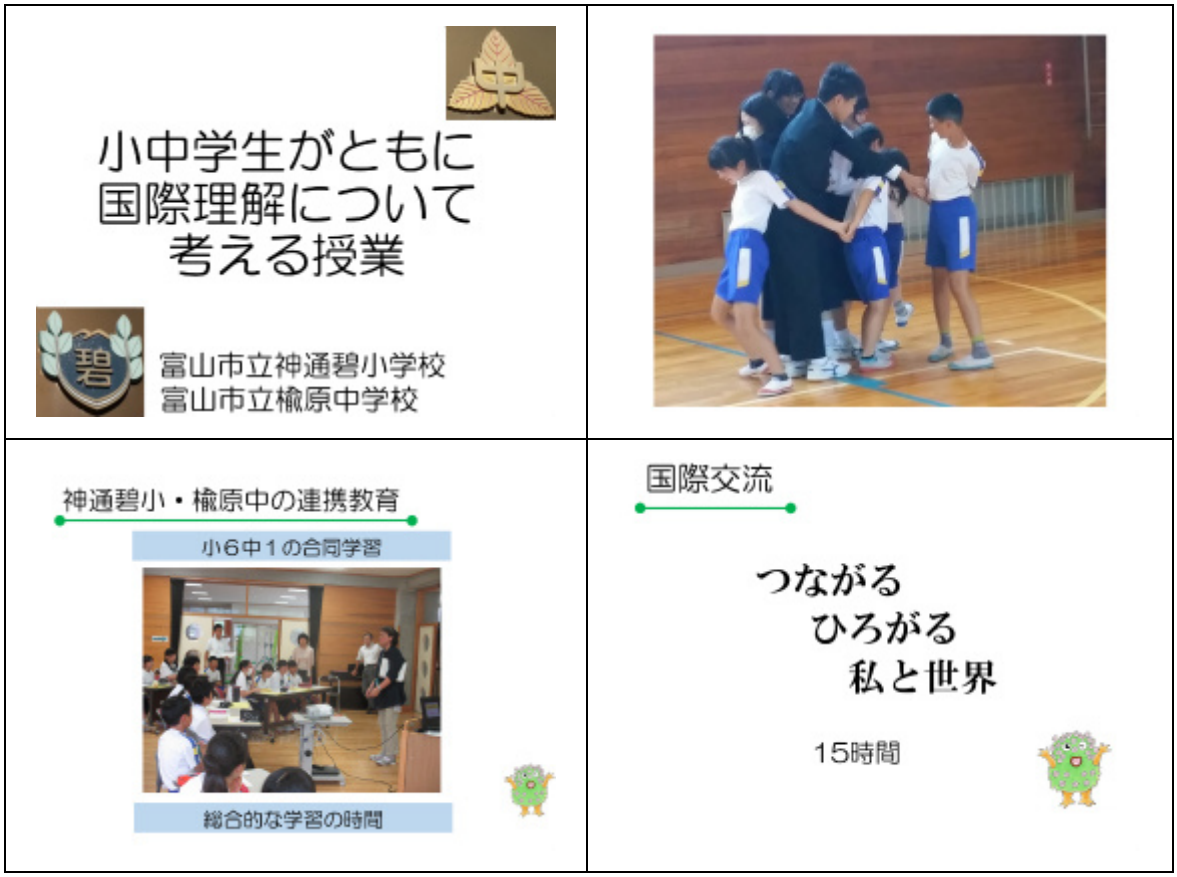
【富山県】福田　有児氏（富山市立神通碧小学校　教頭）

富山市は広く、日本海から南は岐阜県まである。本校は岐阜県の県境まで数キロというところに位置している。校名の由来だが、一級河川の神通川が側に流れていて、その色が非常に深い緑であるため、神通碧(じんづうみどり)小学校と名付けられた。全校生徒は 60 名あまりの小さな小中併設の学校である。その利点を活かして、小学校６年と中学校１年生は合同で総合的な学習の時間を実施するなど、連携教育を進めている。今年度は、国際交流の授業を全 15 時間で実施した。単元名は「つながる、広がる、わたしと世界」である。交流の対象は、富山県の国際交流員５名（アメリカ、ロシア、ブラジル、韓国、中国）に協力していただいた。彼らは、非常に高い日本語の能力をもち、言葉によるコミュニケーションが可能であること。また、両国の文化への深い理解もあること。子どもと複数回の交流を設定することが可能など、子供たちの学びにふさわしい方々と判断した。

学習の流れとして、2 回実施した交流の間にメールによるやり取りを設け、思考とそれに伴う交流が深まるように設計した。小学生は行動力が高く、中学生は頭脳が冴える。これが小中合同で学ぶメリットと考えた。1 回目の交流では、班ごとに各国の人と交流を進めた。交流員の人柄に触れながら、子どもたちは考えてきた質問を少しずつ出し始めた。実際に会うことで分かることも多く、成果のある交流となった。子どもたちは、ここで考えたことを元に各自が課題を見付けていった。例えば、小学生の A さんは、アメリカの交流員が自分の国に戻らないと言ったことに着目し、なぜ自分が生まれた国に戻ろうと思わないのか、と疑問をもった。A さんは、メールを使い、「今いるのは日本のほうが便利だからですか」と尋ねたが、帰って来たメールには、「便利なところは多くあるが、日本にはみんな同じようなことを求められるプレッシャーがある」と思わぬ下りがあった。そのプレッシャーとは、多くの人が同じことを行う文化のことを示していたのである。例えば、アメリカでは、肉や魚を食べない習慣がある人は、学校の昼食でも食べなくてもよい。みんな同じことを当たり前にする日本は社会からのプレッシャーが多いとのことであった。このメールを受けて、「なぜ暮らしにくい日本に来たいと思えるのか」と、A さんは尋ねるほどわからなくなっていく。さらには、「そういったプレッシャーがある日本とは悪い国なのだろうか」、と思い始めるのである。このような過程を経て、「私はずっと家族と居たい。どうして生まれた国から離れて暮らせるのか。しかも好んでプレッシャーのある日本に来るのか、その理由が知りたい」という強い疑問が生まれた。A さんの疑問には両国の考え方の違いが内在していること、明確な課題をもち、解き明かそうとしていることなどから、私たちは、A さんに高い教材性があると捉えた。

授業では、A さんが仲間に意見を述べた後、「やりたいことがあっても、生まれ育った国を離れる勇気はない」「外国の人の考え方には自分が理解できないことがある」「この地域をいつかは自分も離れたいという気持ちもあるので、理解できる」などの意見が出た。A さんはこの地を離れることに理解を示す仲間がいることに驚くものの、自分は地域が好き、家族から離れることは考えられないという思いを強くしていく。それに伴い、「好きな日本」と「プレッシャーのある日本」が A さんの中で、不協和音となり、何とか自分を納得させたいという思いが強くなってきた。それが 2 回目の交流に向かう思いをさらに強めていくのであった。そこで、2 回目の交流の時に思い切って質問し、丁寧に聞きとろうとする。それに対して交流員は「プレッシャーには悪いと思うプレッシャーもあるが、成長のきっかけとなるよいプレッシャーもあるのではないか」と答えた。この話に A は深く納得していく。まずプレッシャーは悪いというものの見方そのものが揺り動かされ、さらに、良いプレッシャーの存在と自分の成長の関係が、これまでの経験でも励みになってきたことを思い出した。「プレッシャーのある日本＝悪い国」という構図も崩れ、A とてもすっきりとした様子だった。このように、2 回の交流を経て、多くの子どもたちは、改めて日本の良さがわかったと感じた。「実際に交流すると多くのことが分かった」、「身近にある国際交流の大切さが分かった」などの感想があった。

成果については、2 回の交流の間にメールのやり取りを設けたことで、交流活動が充実していった。A の事例にあるように、身近な生活の中に異なる文化を学ぶ素材が媒体のように存在している。それは異なる文化の中で育ってきた者同士の交流で明確に見えてきた。子どもは鋭い目でこのようなズレを見逃さないことが分かった。さらに、それを解明したいとする過程で、自分の認識の広がりを認知することができることを確認できた。私たちはこのような子供の変化をしっかりと捉え、向き合っていく必要があることを感じた。



単元の目標

○ 他国の人々や生活に関心をもち、進んでコミュニケーションを図ろうとする。

○ 交流活動を通して、自国との違いやよさに気付く。

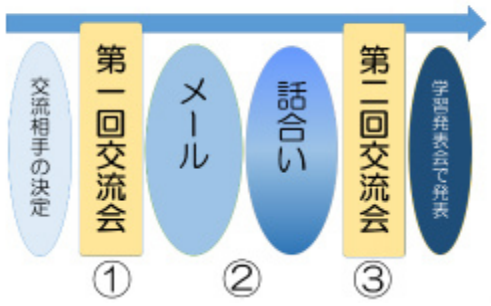
○ 感じたことや考えたことを話し合い、他国の人との関わり方を見つめ直す。

国際交流員

アメリカ、ロシア、ブラジル、
韓国、中国（計５名）

- 高い日本語能力
- 両国の文化 深い理解
- 複数回の交流

学習の流れ



合同で学び合う利点

小学生

驚き 喜び
素直に表現

臆せず
体験的に交流

よさをかかわらせていく

中学生

小学生には
思いつかない着眼点

（仕事への使命感等）

① 1回目の交流

自分が想像していた国の様子とは大きく違っていた。
やはり実際に会ってみないと分からない。

感じたこと 考えたことをもとに
各自 課題を決める

① 1回目の交流

自国に
戻ろうとは思わない。

A児
なぜ、自分が生まれた国に
戻ろうと思わないの？

②

A児
今、日本にいるのは、日本の方が便利だからですか？

交流員
便利な所はたくさんある。
でも、アメリカは、社会からのプレッシャー（同じことを当たり前のようにみんなでする）が日本より少ないです。

なぜ？
暮らしにくい日本に
来たいと思えるの？

プレッシャーがある日本って
悪い国なのかな？

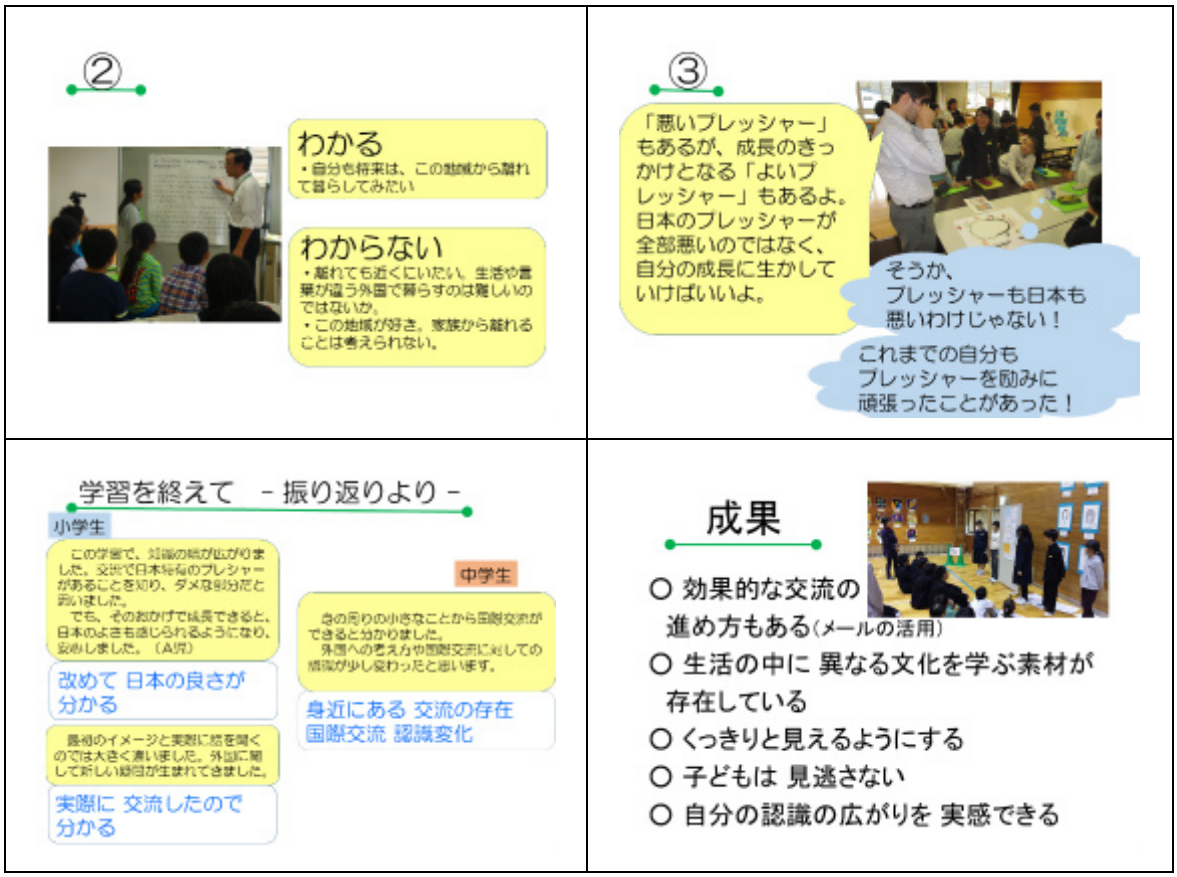
②

A児の疑問

- 私は家族とずっといたい。どうして、生まれた国から離れて暮らせるの？
- しかも、好んでプレッシャーのある日本に来ている。
- 分からない。理由が知りたい。

A児の教材性

- 両国の考え方の違いが 内在している
- 明確な課題をもち 解き明かそうとしている



【石川県】杉本　倫代氏（金沢市立十一屋小学校　教諭）

十一屋小学校の離れた校区である中山間地の平栗地区について学んだ授業を紹介する。平栗は、６キロほど学校校から離れており、春にはカタクリやギフチョウも生息する自然豊かな場所であり、金沢市の自然環境保全地域である。住民は８戸、20 人ほどでほとんどが高齢者である。30 年後には平栗学区はなくなるかもしれないと地元住民が言うような過疎高齢化の進んだ限界集落である。また、この地区には産業廃棄物処理工場もある。同じ学区でありながら、子ども達は普段通る場所ではなくので、平栗学区にについて知らない子どもが多かった。

単元計画は１年間をかけたものとした。子ども達は、まず春に調査に行き、自然の豊かな地域であるという印象を持った。１学期は調べ学習とそのまとめで終わった。２学期には、インターネット等では欲しい情報がなかなか得られないので、再度現地を調査し、平栗の未来について考えた。また、金沢市環境政策課の方、金沢市自然史センターの方、平栗地区の町内会長の方のお話を聞くことができた。２学期は、平栗の未来はどうなるだろうか、どうなってほしいかをテーマに学習を深めた。３学期は、授業参観などでその成果を発表することにしている。

本時の授業では、平栗の未来について考え、子どもたちの話し合う力、コミュニケーション能力の育成をねらいとした。まず自分の考えをグループで、次に全体で話し合いをした。「平栗の未来はどうなっているだろう」をテーマにしたが、子ども達は、調査した内容や学習したことを根拠に、「森に戻る(一次林)」と「里山のまま(二次林)」の２つの考え方について議論した。「まなボード」を使ってグループで議論を行い、クラス全体で発表をした。子ども達は自信を持って意見を言った。

この授業を通して、「コミュニケーション力を育むにはどういったグループ活動をすれば良いか」について考えた。「平栗の未来はどうなるか」と発問をするか、「どうなってほしいか」と発問をするか、子どもたちが平栗を身近に感じるためにどちらがよいのかを悩んだ。

子ども達の変化だが、最初の調査の時には、「平栗に住むのはとても大変だ」と言っていた子どもが、「これから手入れなど手伝いたい」と書くようになった。「平栗に住みたい」という子どもも出てきた。子どもたちの発言から、平栗を身近に感じられるようになったのではないかと思う。

【福井県】奥村　栄司郎氏（福井大学教育地域科学部附属中学校　教諭）

ESD は総合的な学習の時間で取り組まれている例が多いが、私は、教科としての技術科で ESD に取り組んだ授業の話をさせてもらう。私は教員になって一貫して中学校の技術に取り組んできた。技術科は、社会との接点の大きな科目であり、技術を私たちの生活にどのように役立てるかを考える教科でもある。そのような考え方は、ESD につながるものと考えている。

具体的な単元計画について説明する。植物の育成からそれが学校生活や社会にどう役立てていけるかを考えるような授業を構想した。授業の内容は大きく３つに分かれる。１つ目は植物の育成を通して技術が学校の生活をどう快適にしていけるかを考える、２つ目は実際に計画を立ててそれを実現していく、そして３つ目として、技術と社会との関係について考えることである。

まずは学校生活を快適にするという視点での作物選びである。次に、栽培計画を立てて、実際に植物を育成する。ここでは生物育成の技術を生活にどう活かすかを学ぶ。実際には失敗する子どもたちもいて、そこから学ぶこ

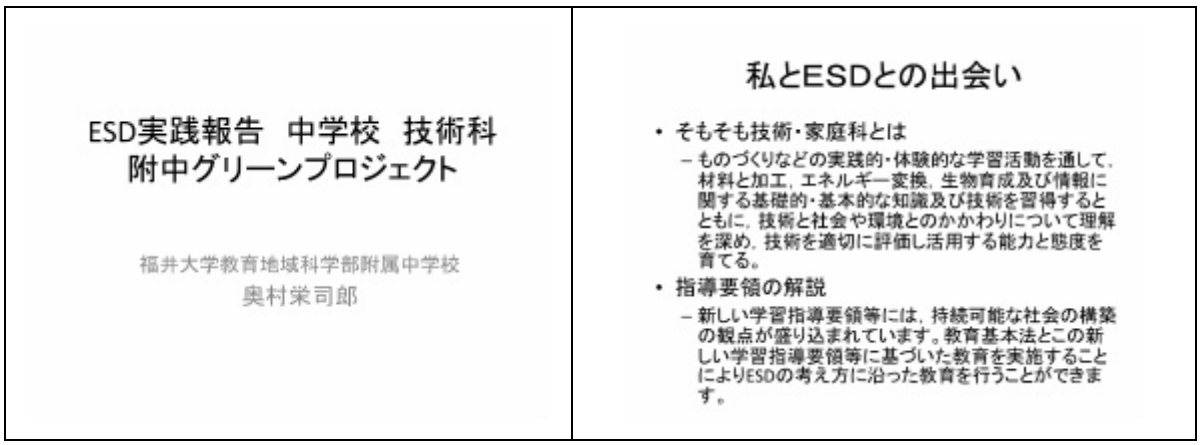
ともある。次に調べ学習を行い、社会や世界との関係まで視野を広げていくことを狙いとした。各自が調べた内容を 4 人のグループで議論し、次に全体で共有しながら議論した。まずヒートアイランドについて調べた子どもに発表してもらい、それが地球温暖化や砂漠化などにつながっているというように発展させた。技術科なのでICTを活用し、子どもたちの発言をスクリーンに映したが、板書も必要ではないかとの指摘もあった。異なる話だと思っていたが、お互いにつながりがあることがわかったとの生徒の感想が多かったことから、様々な事象の―間につながりがあることは、うまく認識させることができたと思う。ICT を活用して、お互いに同じテーマを学習した生徒とつながるようにリンクを張ったので、他の同じようなテーマを調べた人の意見を見ることができて面白かったとの意見も多かった。

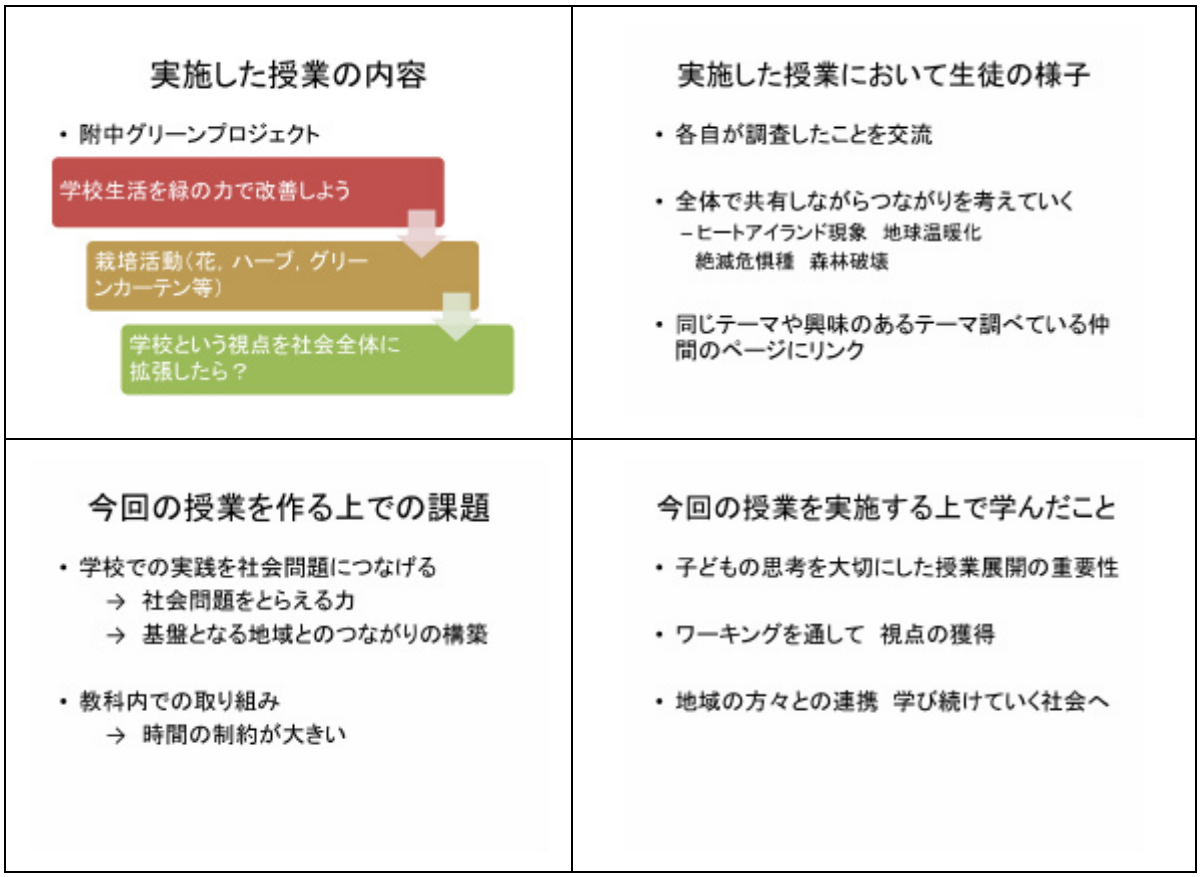
課題を調べていくとどうしても地球温暖化のような環境の課題になることが多いので、意識して違うテーマとリンクするようにしている。また、一方で、植物の栽培がベースになるとどうしても狭くなってしまう。他方、インターネットなどを活用した調査活動は、一般論的になってしまうので、その兼ね合いが難しかった。そのような中で、福井という地域とどうつなげるかを考えると、福井の特徴である「人のつながり」というキーワードが重要であると感じている。

最大の課題は、課題と向き合う時間をどう確保するかであった。教科の 87 時間の中ではどうしても時間制約が大きいので、総合的な学習の時間を含めた学校教育活動全体とつなげるような工夫が必要だと思われる。

反省点として、本時の授業を見た方から、授業の狙いと生徒の思いがずれているのではないかとの指摘を受けた。自分の調べと他の生徒の調べとを共有することにより、様々な事象につながりがあることを学んでもらいたかったが、生徒の思いとしては、調査活動を深めたいとの思いの方が強く、授業者の意図を十分にくみ取れなかったのではないかと反省した。2 点目として、ワーキンググループで様々な指摘をいただいた。特に、地域とのつながりが弱いのではないか、地元の福井や北陸という視点が重要というものや、海外の実態を知ることにより、地域のことを考えやすくなるのではないか、農林水産業のような地元と密着したものとつなげると地域のことが考えやすくなるのではないか等、いろいろな示唆をいただいたので、今後の授業に活かしていきたい。

最後に、持続可能な社会づくりといった課題には、生涯にわたって取り組む必要があるのではないかと思う。中学ではまず種をまくことが重要と考える。実際に行動できる子どもを育てること、その中で社会に目を向けて社会に参画していけるような力を身に付けさせたいと思う。





【長野県】畔上　一康氏（信州大学教育学部附属長野小学校　副校長）

ESDのこれまでの文脈に沿って行う授業についてではなく、100年近く行っている本校の授業をESDの視点で見るとどうなるかという問題意識で発表する。

レイチェル・カーソンが、その著書「センス・オブ・ワンダー」の中で「知ることは感じることの半分も重要でない」と言っているが、感性を耕すことと探究を求めることの重要性が指摘されている。本校は、総合学習の原点校ともいわれているが、動物飼育を重視している。教科の学びにとらわれない総合性と、確かな理解を重視している。1年生から3年生まですべての学年で動物を飼育している。その中で、動物の命から多くのことを学んでいく。

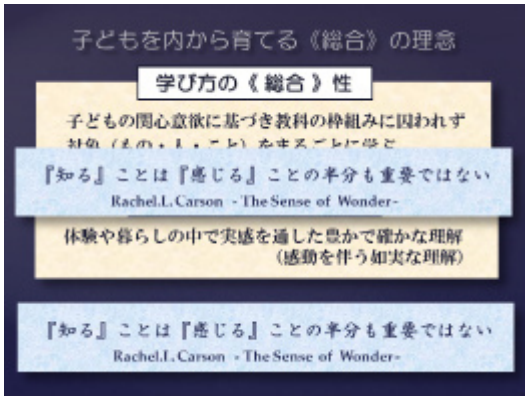
一緒に来ている宮島先生はこれまで3年間アルパカを飼っていた。奇跡の飼育と言われた。今年からヤギを飼い始めたが、4日目で子ヤギが事故でなくなってしまった。これまで飼育を続けてきた宮島教諭に、命のあり方を問いかけられたと思う。子どもたちと宮嶋教諭は4か月悩んだ後、新たな気持ちでやっとヤギを飼い始めた。

本校では毎日いろいろなドラマが生まれている。「思いをかけ、思いがけなさに出会い、思い知る」ような物語知がある。教師を含め、日々の中に毎日の学びがあるかを問われている。教師自身が共に学んでいかないと、問題と向き合い、探究していくことはできない。

総合的な学習の時間が始まった時、老人ホームを多くの学校が訪れた。しかし、ある時訪問が止まってしまい、老人ホームの方から、自分たちは手段として使われたような気がすると批判された。「あの子たちはいつ来るんだ。」と毎日聞く老人がいる。地域とつながることはそういう意味があるのだと知ってもらいたいと言われた。教師自身が本当にやりたいのかを見つめ直すことが教師に問われている。

●宮島　新先生

ヤギの死は、教師が子どもたちと本当に一緒に取り組んでいたか改めて考えさせられた。



④「ESD 授業づくり」報告を受けて

北陸、長野県での授業づくりの報告を受けて、東海地域から参加した 3 名の教員からメッセージを共有した。

【愛知県】小嶌正嗣氏（半田市立板山小学校　教頭）

●4 校の発表から様々な学びがあり、今後の授業に活かしていきたいと思った。

●富山の経験は、つながる、広がるという視野を広げる学びであること、小中が連携して途切れずに ESD を学べることが特に素晴らしいと感じた。メールでのやり取りに関し、板山小学校も、今後世界とつながっていきたいと考えているが、メールで子どもたちがどこまでつながれるかを聞きたいと思った。カリキュラムを教員が統括する必要があるとの指摘が印象的であった。

●石川については、校区の危機、未来という観点から授業を組み立てているのがとても良かった。再調査を行うこ

とにより再認識をしていくこと、魅力を発信することが良い。校区内だけでなく、世界に向けて発信できれば良いと思っている。この子どもたちが将来何かをするのではないかと期待させてくれる授業だった。
●福井については、総合的な学習の時間ではなく、技術科で行った実践が良かった。技術科の特徴である過去、現在、未来をつなぐ中で、先人の知恵を学び、現在の生活に活かし、将来を考えることがとても ESD 的である。また、各自のレポートがサイトにアップされ、他の生徒とつながっていけることが良かった。
●長野の発表から、ESD の本質について改めて考えさせられた。感じることの重要性、動物の声をしっかり聞くことの必要性を改めて認識するとともに、教員の感性を鍛え直すことが重要とのメッセージを重く受け止めたい。

【三重県】森　直也　氏（四日市市立中部中学校教諭）
●富山の発表から、国際交流員の重要性がポイントだと思った。本校には多くの日本語が話せない子どもを含めた海外の子どもたちが入学してくる。国際理解について、自分たちの授業にもいろいろと役立てられるような内容であった。身近に感じることがとても重要と痛感している。
●石川では、グループで交流することに関し、板書の仕方やまなボードの活用が参考になった。地域の人たちが入ってくることにより、子どもたちの学びが深まったことが分かった。
●福井では、技術科の授業が行われた。自分は理科でなかなか他の教科との交流が少ないが、ESD カレンダーなどを活用して、全教科の関係を見ることができるようになった。自分は、今年度は理科と社会と技術家庭科と総合的な学習の時間を使って ESD に取り組んだ。
●長野の発表からは、学ぶことが大変多かった。感性が重要であるとの指摘は印象的であった。動物飼育は素敵過ぎて、本校の環境ではできないかもしれないが、大きなインパクトを感じた。命の尊さを学ぶことの重要性を改めて認識し、動物飼育はできないかもしれないが、自分の授業でも何か工夫できないかと思った。

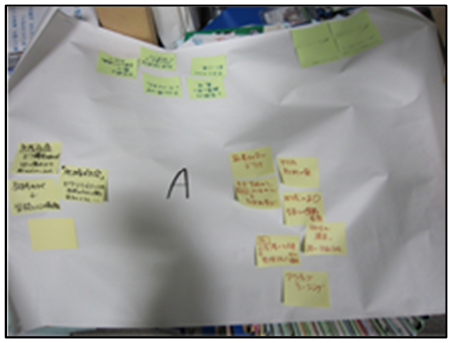
【岐阜県】小林由紀子氏（NPO 法人 e-plus 生涯学習研究所代表理事）
●富山の授業を聞いて国際交流でメールを使ったことに注目した。地域の中でも世界とのつながりを持てると感じた。
●石川では未来というキーワードが素晴らしいと感じた。子どもたちがいろいろ教えてくれた大人たちに、自分たちが考えたことなどを返せるととても良いと思う。
●自分は岐阜大学で工作教室を教えていた。その時のキーワードは、「社会と環境のつながりと技術革新」であった。福井の授業にはそれらのキーワードがたっぷり入っていた。技術の授業は、ESDの新しい可能性を開いてくれたのではないかと思う。テーマの 1 つの緑のカーテンひとつをとっても様々な学びができる。
●長野での発表に関し、自分も「センス・オブ・ワンダー」が大切であると思っている。知ることと感じることとは別であり、子どもたちが生き物の飼育をしてくれる先生と会えたことはとても素敵である。先生の感性を子どもたちと分かち合うような授業は、とてもわくわくする。

［まとめ］池端　弘久氏（金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家　館長/前校長）
●東海の先生方からのコメントで、たくさんの賞賛や課題の提起が行われた。その中で、特に注目すべきと思われたのは、教員の成長についてだろう。ESD を通じて教員が改めて授業に向きあうことにより、大きな成長が得られたように思う。
●そのようなプロセスを通じ、教員自身が地域の SD（持続可能性）にきちんと向き合うことにより、授業の大きな改善が図られる。

（3）「ESD 授業づくり」学びあいワークショップ

7 つのスモールグループで、4 つの実証授業の報告を受け、参加者と「ESD 授業づくり」のポイントやノウハウについてテーマに議論をした。スモールグループでの討議結果及び概要は以下のとおり。

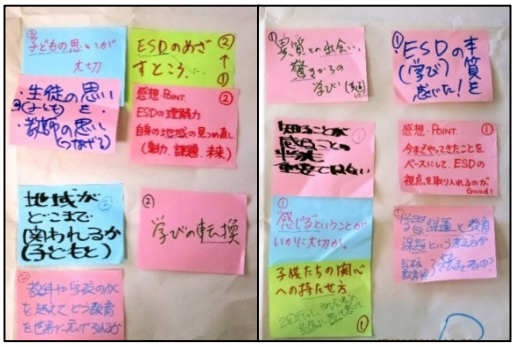
[A グループ]

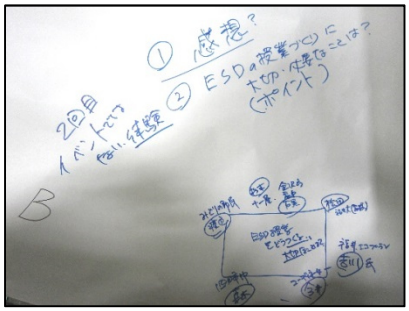


●最初学校に ESD が入ってくるときは、先生方に「趣旨」と「ユネスコとの関連」「環境省との関連」、「事業内容」等についての説明をする必要があり、校内担当者（教頭）が理解するまでにも 1 年間ほどかかる。
●実際取り組んでみると、教師の力量が向上する。
●児童もやりがいをもって学習を進める。
●始めれば、メリットが多い。
●計画化された学習に慣れている教師が、ESD のように開発型の学習を取り入れると、難しく感じる場合もある。その逆に、自分の教育の可能性を大きく伸ばすこともある。
●管理職が先頭に立って ESD を校内に導入しなければ、なかなか成功しない。
●SD の開発からまず始めることも大切。
●地域の NPO の活動を学校側も理解することが大切。
●逆に、NPO 側も学校の実情を把握することが大切。

[B グループ]

●各自がポストイットに①感想、②ESD の授業づくりに大切で・必要なこと?をそれぞれ書いて、そのポストイットをもとに各自が自分の感想・意見を発表し、その発表の都度、質問・意見を述べながら、話し合った。





●感想については、報告を聴き「感じることが、いかに大切か」「知ることが感じることの半分も重要ではない」「異質とのことの出会い・驚きからの学び」など、子どもたちが体験を通して『感じること』がポイントだとの感想が主流であった。このポイントを押さえるためには、子どもたちの興味・関心の持たせ方が大切であるとの指摘があった。さらに、「学習課題と教育課題」の違いから、今の学校現場で子ども中心に課題を設定しているか、否かが話し合われた。また、「ESD の目指すとこと」ところにも話が発展した。
●これらの話から、②の議論に入り、「今までやってきたことをベースにして、ESD の視点を取り入れるのが Good！」、そのためにも教師の「ESD についての理解力、地域の見つめ直し」が重要だと指摘された。そして、「子どもの思いが大切」だから「子どもの思いを教師の思いにつなげる」必要があると話し合われ、子どもの主体性を中心にした「学びの転換」が必要であるとの意見となった。そのために、「地域がどこまで子どもと関われるのか」、「教科や学校の枠を越えてどう教育を広げていく」がポイントであると指摘された。ESD の本質・子どもの主体的な学び」についての深い話し合いであった。

[C グループ]
〈授業〉
●環境教育から入るのがいいのか。国際的な視点も有効といえる。
●各教科と繋げることができるか。ESD カレンダーを有効活用し継続するのが有効。
●川に行く体験・地域との人と関わり・そして専門家との関わりを深めた。学習を通して子どもの地域への思いを育てたいと考えている
●これまでの授業を、ESD 視点でブラッシュアップするためには何が必要か。
●課題発見と探求する力をつけたい。経験からは子どもには発言できる力を育てるべき、コミュニケーション力、多様に考える力も大切。

●学校は年間の行事等が多く十分な時間が取れないのが現実、教師間の温度差も課題。
〈地域に向けて〉
●学校で造形教室を開いているが学校は最初第一歩が難しい。作法的な考え方が必要。
●過疎化地域の未来を考えるような授業の取組みが良い。
●ESD は定期便かミステリー列車か、導入されて自治体の協力等もあり確実に地域へ広がりつつある。

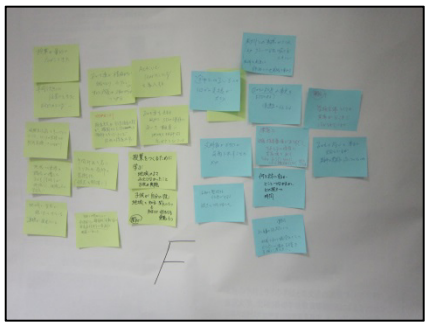
[D グループ]
●ESD の授業づくりで大切なことは、気づきと課題設定。
●小中と大学とがつながっていない。2020 年の入試改革に向けて、高校をうまく巻き込むことが重要。
●教員が異動することを踏まえ、10 年単位で実践にどう取り組むか考えることが必要。

●ESD 授業では、テーマ、素材、教材が重要。
●ぜひやりたいという ESD 授業とは、
●仕掛けに子どもが食いついてくれるような授業
●テーマを共有する取り組み　例えばアートマイル
●身近な問題であり、自分に返ってくる、熱くなれる、自分のものになるよ　うなテーマ
●普段の教科の授業で作ることが大切。

[E グループ]
●グループで話し合ったことの概要は大きく六つに分けられる。
①地域人材を学校で活用することの難しさ
・ステークホルダーの活用が効率的になされていない
・多様な外部講師が埋もれている現状
・地域の中核となる学校づくり(地域と学校の一体化)の必要性
②欠かせないカリキュラムの柔軟な活用
・時間確保の必要性(発表は息の長い取り組みがなされているが…・)
・「体験に勝るものなし」：体験中心のカリキュラムの構築の必要性
・環境がオールネィティブな教材であることの意識改革の必要性
③持続可能な地域と学校の関係づくりの必要性
・持続可能な素材としての地域に対する認識
・無い物ねだりをしない:まず、身近な素材から
④バッグラウンドとなる資金の枯渇
・環境省・文部科学省のさらなるバックアップの必要性

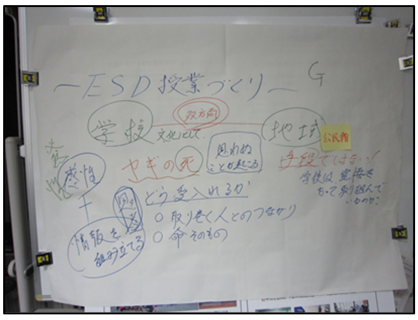
⑤多様な交流を支えるコンソーシアムの重要性
・ホームページの日常的な活用の必要性
・多様な交流を支える交流相手の紹介
⑥校長・授業者の意識改革の必要性
・全てを支える「人を育てる」という使命感
・情熱のある教師に子どもはついてくる
・子どもと共に育つ教師、子どもの成長を楽しめる教師が全て

[F グループ]



■成果
［ESD 授業］
●量的に広がってきている
●学校の年間計画に位置づいてきた（ESD カレンダー）
●校長や ESD 担当者の確固たる信念で学内に浸透しつつある
●国際交流員をキーパーソンにしてロシアの学校と手紙交換している
●授業を創るために地域の良さを知り子どもたちの実態をつかむ
［子どもたちの成長］
●積極的に調べたり、インタビューしたりするなど子どもたちの成長が見える。
●本当の意味で地域を理解することが進んできた
●子どもたちが自分の住む地域に関心を持ち知ることが、地域への愛情につながる
［教師の成長と挑戦］
●地域の SD の課題に気づき、真に地域を理解することに気づいている
●アクティブラーニングの導入
●組織的な取り組みと先生方の成長を確認
［地域との連携］
●地域との連携が進み、地域が学校に、学校が地域へと双方向になって来ている
●地域に学習が根付いてきている
［課題（問題点や難しさ）］
〈ESD 授業〉
●授業づくりの視点と体験的な活動の位置づけが大切
●教科と総合のクロスが大切
●協同学習や評価では教科の下支えがもっと必要
●学校全体での共有、共通理解が重要
●何を教材にして、どことつながり、どの視点で、どれぐらいの時間をかけて
〈子どもたちの成長〉
●授業の流れ重視から個の学びの支援へ
●子どもの成長を保護者へ伝えることが重要
●教師の意図に沿うことから子どもの内心と出会うことが大切
〈教師の成長と挑戦〉
●文部科学省が ESD を正面から取り上げ進める体制が重要
●学習指導要領の内容項目との関連等について明確なスタンスの表明
〈地域との連携〉
●地域のユネスコ協会として支援していきたい

[G グループ]



①ESD 授業づくり

奥村先生（福井）、畔上先生（長野）の二人の実践提案を中心に意見を交換した。

〔福井〕

中学校の技術・家庭科を切り口としながらも、学校生活から社会の問題として考えて取り組んでいるところが評価できる。また、授業展開として、学習内容（ヒートアイランド現象、地球温暖化・・・）のつながりを考えている点も ESD の授業づくりでは大事。

〔長野〕

子どもを内から育てる総合の理念に基づき、長年、動物飼育を通した実践からは、子どもの学びや成長をどう考えるのかを問うものであった。ESD の授業とは、何か、一つの型があるのではない。提案では、感性の重要性、教師自身の教材そのものへの見つめ直しが強調されたが、例えば、「子どもがどう命を見つめ直したのか」ということ、飼育をめぐって子どもがどのように探究し、思考を深めていたのかについて議論を深めたかった。

②学校（授業も含めて）と地域との連携

●地域から学校を見ると、「まだまだ学校のことがよく分からない」というのが本音。

●しかし、ESD の授業を通じて、少しずつ、学校のことが見えてきた。

●「ESD 推進コーディネーター」は学校の中のことをよく理解しているので、学校と地域との連携を円滑し ESD を推進してくれることを期待。

●ESDというのは、あくまでも、持続発展の社会づくりの担い手となるよう成長することを目指しているのは言うまでもない。連携する際には、そのことを忘れずに取り組まなければならない。目的を明確にしてそれを共有しながら取り組むのだから、双方向の関係を構築する必要がある。

2. 第 2 回「子どもの学びを学校と地域が一緒につくる」ワークショップ

（1）開催概要

日　時：平成 27 年 12 月 26 日(土)14:00～16:30（150 分）

場　所：石川県女性センター大会議室（石川県金沢市三社町）

参加者：45 名（教員 13 名　自治体 3 名　地域団体/NPO 等 14 名　地方事務所 1 名　他 14 名）

[プログラムスケジュール]

時間	プログラム	内容
14:00～14:30（30）	ESD 授業づくり報告 [岐阜県]小林由紀子氏 （NPO 法人 e-plus 生涯学習研究所） [愛知県]小嶌正嗣先生 （半田市立板山小学校教頭） [三重県]森直也先生 （四日市市立中部中学校教諭）	コーディネーター：加藤隆弘氏（金沢大学准教授） ①先生と ESD との出会い ②実施した授業内容　ねらい　工夫したところ　ESD の視点と手法 ③実施した授業においての児童の様子 ④今回の授業を作られるとき悩んだこと、課題になったこと ⑤今回の授業を実施する上で気づかれたこと、学んだこと
14:30~15:10（40）	フリップレポート「学校と地域が一緒につくった ESD 授業」 [富山県]本田恭子氏(環境教育ネットワークとやま環境教育コーディネーター) [石川県]青海万里子氏(金沢エコライフくらぶ代表) [福井県]吉川守秋氏 （NPO 法人エコプランふくい事務局長） [長野県]渡辺隆一氏（NPO 法人みどりの市民理事） [岐阜県]巽　徹氏 （岐阜大学教育学部英語教育講座教授） [愛知県]千頭　聡氏 （日本福祉大学国際福祉開発学部教授） [三重県]寺田卓二氏 （環境教育ネクストステップ研究会代表）	コーディネーター：今井和愛氏（北陸 ESD 推進コンソーシアム） ①自己紹介、本事業での役割 ②本事業の成果～学校と地域の連携という視点で ③学校と地域が連携するために必要なこと
15:10~16:20（70）	「学校と地域が連携した授業づくり、学校づくり、地域づくり」ワークショップ	コーディネーター：鈴木克徳氏（金沢大学教授） ①自己紹介/本事業のふりかえり（成果と課題） ②子どもが輝く授業をつくるために、教員、学校と地域は何をすべきか。
16:20~16:30（10）	まとめ 閉会	鈴木克徳氏（金沢大学教授/北陸コーディネーター） 新海洋子氏（環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー） 村辻　裕樹氏（環境省中部地方環境事務所環境対策課　環境管理専門官）

（2）プログラム内容

①「ESD 授業づくり」報告

【岐阜県】岐阜市立長森南中学校の報告

小林由紀子氏（NPO 法人 e-plus 生涯学習研究所代表理事）

今日の報告は、岐阜市立長森南中学校の長屋先生が行った実証授業に関わった私が代わって行う。長森南中学校とは 14 年間一緒に環境学習をしてきた。最初は、総合的な学習の時間をどうつくるかから始まった。どうして 14 年間続いてきたかと言うと、「無理なく楽しくやる」ことで続けられたと思う。3 月に学校に行って先生方が作った翌年の授業案を基に、プログラムを一緒に組み立てるが、最初に先生に、「先生は何がやりたいですか」という質問をしている。先生がやりたいことを中心に授業を組めば長続きする。水から始まった学習だが、ESD 授業はエネルギーをテーマにしている。長森南中学校には太陽光発電の設備があるが利用できていないので、先生から活用できないかと問われてこの授業を始めた。

水の学習は、地域が川の氾濫地帯で川灯台の史跡と火祭りがあり、水と関係が深かったことで始めた。授業は基本的に 3 部構成で、最初は水の循環などについてゲームを用いて学ぶ。次が川の体験学習で地域の先生や行政に授業をお願いしている。県の土木事務所にお願いして川をせき止めてもらい、川の中に入っていく。子どもたちはとても活発に取り組む。最後の部分は学校の自主性に任せており、学習結果を環境新聞にまとめることにしている。いろいろと学んだ水の調査結果を地域の回覧板に貼ったりする。水と同じようにエネルギーについても導入、体験、まとめを行っている。温暖化の導入授業、屋上に上って太陽光発電装置を見る、電気自動車に実際に乗る、家庭でのエネルギー調査など先生も生徒も楽しみながら取り組んでいる。まとめは地球規模で考え、「自分にできること」を提案するようにアドバイスしている。川の生き物の学習で感性が鋭くなっているので、温暖化と自然とのつながりなども考える子も多い。例えば、学校や家庭の省エネをすれば CO_2 を減らすことができ、温暖化防止にも貢献できる、調査した川の生き物の住みかも保全できるというように「環境のつながり」に気づけるようにしている。

今日の報告は、岐阜市立長森南中学校の長屋先生が行った実証授業に関わった私が代わって行う。長森南中学校とは 14 年間一緒に環境学習をしてきた。最初は、総合的な学習の時間をどうつくるかから始まった。どうして 14 年間続いてきたかと言うと、「無理なく楽しくやる」ことで続けられたと思う。3 月に学校に行って先生方が作った翌年の授業案を基に、プログラムを一緒に組み立てるが、最初に先生に、「先生は何がやりたいですか」という質問をしている。先生がやりたいことを中心に授業を組めば長続きする。水から始まった学習だが、ESD 授業はエネルギーをテーマにしている。長森南中学校には太陽光発電の設備があるが利用できていないので、先生から活用できないかと問われてこの授業を始めた。

水の学習は、地域が川の氾濫地帯で川灯台の史跡と火祭りがあり、水と関係が深かったことで始めた。授業は基本的に 3 部構成で、最初は水の循環などについてゲームを用いて学ぶ。次が川の体験学習で地域の先生や行政に授業をお願いしている。県の土木事務所にお願いして川をせき止めてもらい、川の中に入っていく。子どもたちはとても活発に取り組む。最後の部分は学校の自主性に任せており、学習結果を環境新聞にまとめることにしている。いろいろと学んだ水の調査結果を地域の回覧板に貼ったりする。水と同じようにエネルギーについても導入、体験、まとめを行っている。温暖化の導入授業、屋上に上って太陽光発電装置を見る、電気自動車に実際に乗る、家庭でのエネルギー調査など先生も生徒も楽しみながら取り組んでいる。まとめは地球規模で考え、

「自分にできること」を提案するようにアドバイスしている。川の生き物の学習で感性が鋭くなっているので、温暖化と自然とのつながりなども考える子も多い。例えば、学校や家庭の省エネをすれば CO_2 を減らすことができ、温暖化防止にも貢献できる、調査した川の生き物の住みかも保全できるというように「環境のつながり」に気づけるようにしている。

<table>
<tr>
<td>学校を中心とした
「長森南中学校のESDの取組」について

e-plus生涯学習研究所
小林由紀子</td>
<td> </td>
</tr>
<tr>
<td>水　導入→体験→まとめ
導 入→ 水の循環、地球上の水、希少性、貴重性から始める
体 験→ 遠足、社会見学を活用して生き物調査、水族館の見学、ハイキングなど
まとめ→ 座学かワークショップ→みんなに発表
地球規模で考えても最後は自分にできることを考えて実践する</td>
<td>
</td>
</tr>
<tr>
<td> </td>
<td> </td>
</tr>
</table>

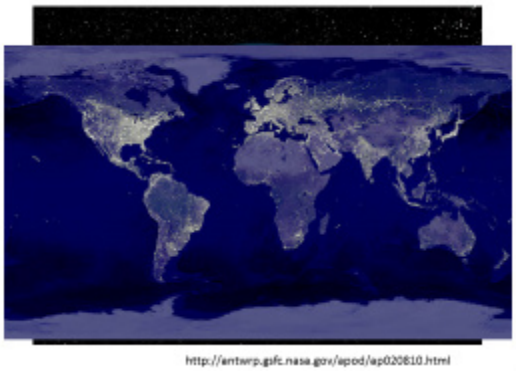
エネルギー　導入→体験→まとめ
身近な取り組み→伝える重要性

導　入→　地球の温暖化・エネルギーの枯渇について座学

体　験→　学校の太陽光発電システムの見学、電気自動車、電気の見える化

まとめ→　ワークショップ→みんなに発表

地球規模で考えても最後は
自分にできることを考えて実践する



【愛知県】小鳶正嗣氏（半田市立板山小学校教頭）

板山小学校は、山に囲まれていて、地区には田んぼや畑が多く広がっている。子どもたちはとても静かな環境で学校生活を送っている。140 年前にこの板山の地に開校して、非常に歴史が長く、地域の方の協力によって教育活動を進めている。地域との深い連携性があるという特色がある。また 1 学年 2 学級 50 人前後というコンパクトな学校規模で、柔軟に活動できることも本校の特色である。校区に特別支援学校があり、全学年が交流をしていることも特徴の一つである。

板山小学校では未だ ESD に取り組み始めたばかりだが、最近は、「これが ESD だよね」、という言葉が飛び交い始めているのは進歩だろう。私たちは、ESD で地域に学び、地域に誇りを持つ人間を育てたいと考えている。地域には、校長が変わるとやることが変わるのではないか等、学校に対する不案感がある。そこで、ESD を核に地域と学校がつながることを目指し、学校の支援協議会を整えてきた。子どもたちは、板山 ESD チャレンジャー隊を組織し、地域とつながる活動をしている。

実践では、1 年生は地域のこども園、2 年生は校区探検、3 年生は地域の達人に学ぶ、4 年生はデイサービスに出かける、5 年生は地域の美化について学ぶとともに、ビオトープの再生を、6 年生は故郷（ふるさと）再発見という学習をしている。その結果、板山が好きだと言う子どもが増えている。アンケート結果、地域に興味を持つかというと、昨年度より少し高くなっている。授業に対する悩みや課題としては、子どもの思いと教員の願い、ゲストティーチャーの願いがあっていないことが最大の課題であった。ESD は、人や教材とつながるということが学べた。教員の熱い思いが活かされること、学級経営がうまくいくことも大切にしている。来年度は、ESD を教科学習に入れたいと考えている。まず子どもがしたいことを重視して授業をつくる。子どもの体験を重視する。教員は子どもたちに答えを示さない。また、子どもが対話できる雰囲気をつくることが大切である。地域との関係では、板山 ESD が地域を支えていると言われ、大変うれしかった。また、来年度は、修学旅行に際し、京都の学校と ESD の交流をすることになった。

140年の歴史
地域との深い連携

各学年2学級（50人）
コンパクトな学校規模

①ESDとの出会い

②実施した授業内容

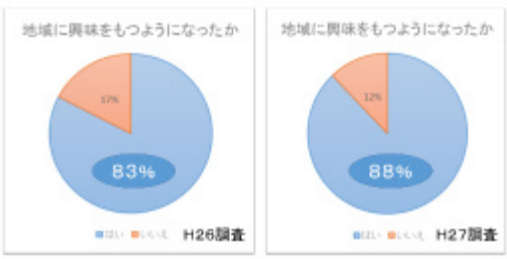
＜実践の様子＞

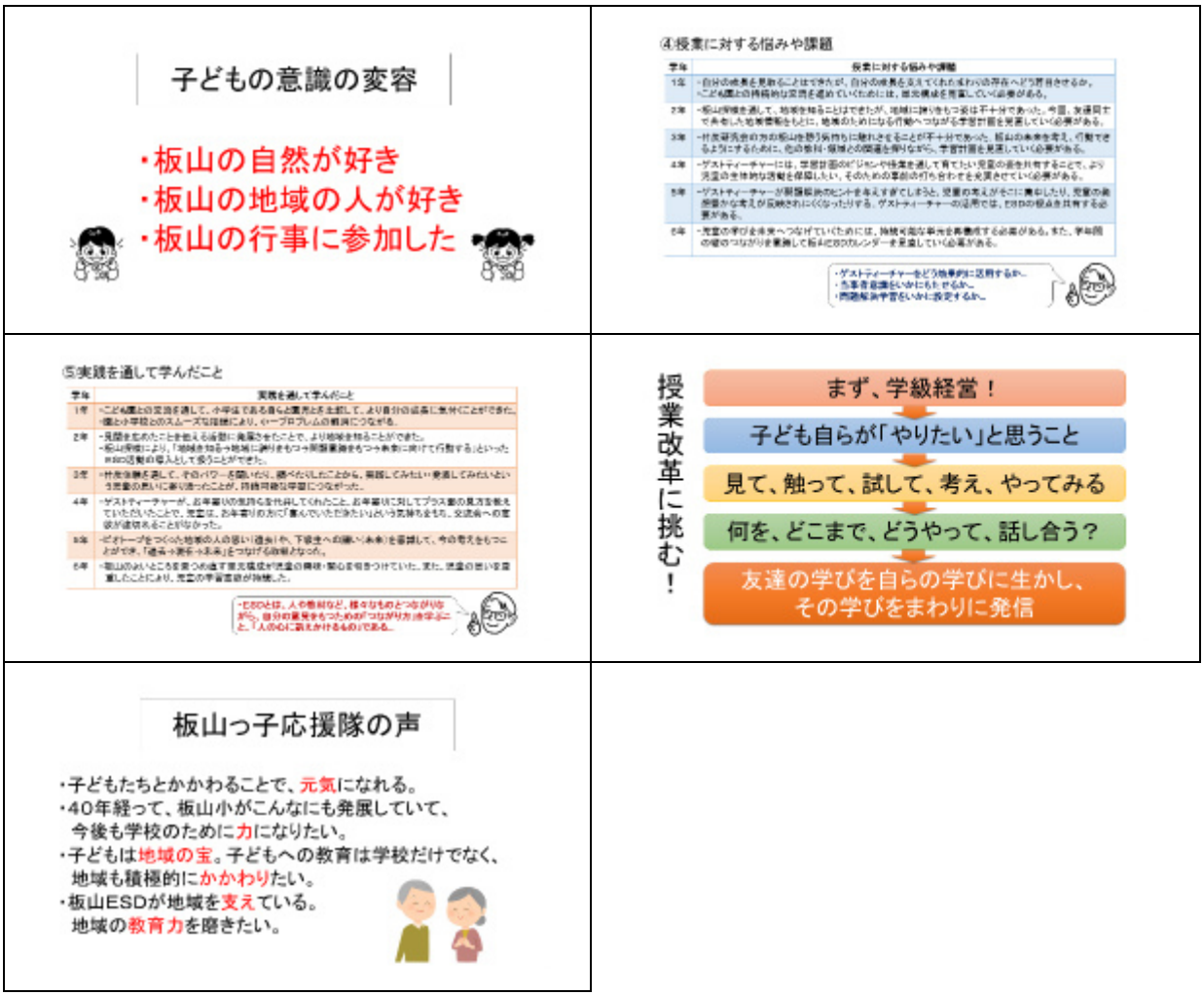
＜実践の様子＞

③児童の様子

・板山が前よりも好きになった。
・学習は自分事として考えるようになった。
・自分の思いが実現できる喜びを感じている。

・もっと人とのつながりを広げたい…
・もっと本物の体験にふれたい…
・もっと板山をよりよくしたい…





【三重県】森　直也　氏（四日市市立中部中学校教諭　）

四日市市はコンビナート群があり、反対側には鈴鹿山脈が見える愛知寄りの地域である。三重大学でコアサイエンスティーチャーとして、三重県の理科教員のスキルを高める活動している。ネクストステップ研修会にも参加し、ESD について知った。そこで ESD カレンダーをつくる作業をしている。本校の実践では、企業連携事業を行っている。本事業では四日市がこれまでやってきたことを ESD として見直し、四日市市の教員間で共有した授業づくりをしたいと思い、ESD カレンダーを協力してつくっている。生徒にも教科間のつながりを感じさせたいと思い、生徒に小・中学校で学んだ環境に関係する単元を抜き出させた。「身近な課題を見つけ、自分たちにできる行動を考える」をねらいとして、今年はリサイクルに特化して、企業との連携授業、生徒たちの調べ学習を行った。四日市の企業のリサイクルの現状を調べるだけでなく、国全体や世界のリサイクルについても調べるように仕向けた。参加型討論として、生徒たちにリサイクル賛成派と反対派に分かれて議論をさせた。「身近な課題を見つけ、自分たちにできる行動を考える」をねらいとした。

生徒たちはプラスチック循環利用協会の話を聞いた後には、100%リサイクル推進派であったが、調べ学習でいろいろ知るようになり、公開授業の時には、半々位に分かれた。事前にリハーサルを行ったので、討論がうまく進んだ。まだまだ学んでいかなければいけないことがあることが本日の報告を聞いてわかったので、今後、子どもたちと一緒にさらに見つめ直したい。また、ESD カレンダーの更なる改善に向けても取り組んでいきたい。

ESD環境教育

三重県四日市市立中部中学校
教諭　森　直也
H27. 12. 26(土)

私とESDとの出会い

三重大学CST
三重大学CST一期生
H23. 9～四年目を迎える

ネクストステップ
環境教育ＥＳＤカレンダー作成

企業連携授業
四日市コンビナート各企業と共に授業を作り上げる。

EPO中部
ＥＳＤの基礎を学び、授業をコーディネートしていただく。

ESD関係資料
ＥＳＤのホームページを参考にしながら、取り組みをデザイン！

中部中学校 環境教育の取り組み

中部中学校　ESD環境教育2015

ESDカレンダー研修
教師側の研修を深め、各教科で環境教育の視点を見つめ直す！

ESDカレンダー活用
子どもたちで教科書を使用して、ＥＳＤ環境単元さがし（全教科）

環境教育テーマ選び
子どもたちに関心の高い環境テーマを出させる。

生徒たちが学習課題を見つける

企業連携授業
四日市コンビナート企業
プラスチック循環利用協会

リサイクル　調べ学習
各企業の取り組み、四日市のリサイクル、日本・世界のリサイクル

公開授業　50分×2
リサイクルのジレンマ

生徒の様子

実施した授業内容

<リサイクルのジレンマ>参加型討論授業

- **ねらい**
  身近な課題を見つけ、自分たちにできる行動を考える！
- **工夫したところ**
  企業連携授業を通して、環境教育を充実、定着！
- **ESDの視点・手法**
  参加型討論を使用し、多様な視点を持つ！

生徒の様子

今回の授業について

★「参加型討論手法」の活用法
持続可能な社会を形成するためにリサイクルは有効か
リサイクル肯定派と否定派を決めて、参加型討論！
それぞれの立場を決めて、調べ学習を深め、討論充実のために事前学習を行う。

★文化祭の取り組みとして、学年全体として発信し、中部中学校の伝統として、また、*ESDカレンダー*を活用し、多くの教科の視点で活用充実に努める。

②フリップレポート「学校と地域が一緒につくった ESD 授業」

各県のワーキングメンバーに、本事業においての役割、学校と地域の連携という視点での本事業の成果、学校と地域が連携するために必要なこと、についてフリップを使って紹介いただいた。

■発表者

【富山県】本田　恭子氏（環境教育ネットワークとやまエコひろば　環境教育コーディネーター）
【石川県】青海　万里子氏（金沢エコライフくらぶ代表）
【福井県】吉川　守秋氏（NPO 法人エコプランふくい事務局長）
【長野県】渡辺　隆一氏(NPO 法人みどりの市民理事)
【岐阜県]】巽　徹氏（岐阜大学教授）
【愛知県】千頭　聡氏（日本福祉大学教授）
【三重県】寺田　卓二氏(環境教育ネクストステップ研究会代表)

【富山県】本田恭子氏（環境教育ネットワークとやまエコひろば　環境教育コーディネーター）
「直に」

子どもたちが「直に」コミュニケーションをとったこと。直接触れ合うこと。子どもたちと地域の人に必要なことだと思う。「直に」と言うのをなぜ強調するかと言えば、たいていは間に先生が入り、その先生の介入の仕方や、子どもたちの地域に対する事前学習による情報量によって、子どもたちの感性が引っ込んでしまい、知識で判断しようとしてしまうことがある。もう一つは、地域の交流計画や協働作業の計画など子どもが主体でプログラムを作っていく、計画を作っていくことが重要である。まさにアクティブラーニングである。

【石川県】青海　万里子氏（金沢エコライフくらぶ　代表）
「学校のドア」を開ける人

多様な人、多様な視点で授業を作り上げられたことが一番だった。先生が一所懸命考えた授業案に、私たちからのいろんな視点での助言や、地域にこんな人がいるという情報も提供でき、授業に膨らみがでた。こうした体制が学校ごとにできるととても素晴らしい。この３年間の成果を日常的継続的な取組にしていけるかがこれからの課題だと感じている。学校のドアを開ける人が欲しい。学校のドアにはノブがなくて私達が外から開けることができにくい。先生から要請をいただかないと学校には関われない。もう一つは地域のコーディネーター役である。中からも外からも手引きをする人が必要である。

【福井県】吉川　守秋氏（NPO 法人エコプランふくい　事務局長）
「学校と地域を繋バックアップ」

１年目は、小学校でビオトープの再生の授業を行い、地域の自然とビオトープというつながりをもたせ、子どもたちが地域の人のいろんな話や地域の自然を感じ取ることを通して、地域の自然環境を見直すことができた。公民館での発表会で地域の方と交流ができた。２年目は、中学校で敦賀の 100 年後の未来に残す遺産を見つけ出す、を課題に、敦賀市にある原子力発電所とラムサール条約に登録されている湿地を取り上げて議論をした。原子力発電所は、取り上げにくい内容にも関わらず、先生のすごい決断だった。生徒たちは自分の考えをもって正面から原子力発電所について感じ、考えた。衝撃的であった。本事業を通して、NPO の役割について考えた。いかに、学校と地域を繋ぐバックアップ、支援をするかである。

【長野県】渡辺　隆一氏(NPO 法人みどりの市民　理事)
「何らか」の形での連携

本事業では、地域と行政と学校と NPO が「何らかの形で連携していくことの重要性を示した。1、2 年目は、松本市の小学校と中学校で行った。松本市には学校と行政と市民による環境教育を実践するネットワークがあり、そのネットワークを活用して学校に入り、非常にうまくいった。3 年目は北信地区である長野市での実施を試みた。長野市でも環境教育ネットワークを形成したいと関係機関に依頼にいったが、難しかった。本事業では、地域と行政と学校と NPO が「何らかの形で連携していくことの重要性を示した。長野には環境に関心のある企業が 800 社くらい加入している団体があり、学校に協力したいという企業がいくつかある。社会科見学の活動を使って教育委員会と企業と NPO を巻き込んだ企業、地域、行政を結んだネットワークを作ろうと考えている。また、長野県には信州型コミュニティスクールという事業があり、コミュニティコーディネーターが配置され、学校と地域が連携した事業展開の大きな動きがある。それも活用してやっていきたい。

【岐阜県】巽　徹氏（岐阜大学　教授）
外からの力/舞台の設定

1 年目は中学校、2 年目は小学校、3 年目は中学校で ESD 授業を行った。その成果は、まず、教員の ESD への理解が深まったことである。教員は教科の指導場面では生徒に何かを教えるという立場で臨むことが多いが、ESD では、先生も子どもと一緒に課題を見つけ学ぶという姿勢で臨むことが大切であるという理解が浸透した。教員は学校のある地域に住んでいるとは限らず、地域の課題を明らかにするのにも地域の人々から学ぶことも多い。もう 1 点は、子どもたちの理解が深まったこと。子どもたちの変容としては、取り組んでいる課題が社会や世界とつながっていることが見え始めたことである。本事業を通して、学校と地域を「つなぐ人」と、学校と地域を結ぶための「舞台の設定」が重要だと思った。言い換えると外からの力が絶対に必要であり、その設定された「舞台」に子どもたちや先生、地域をのせるという発想が大切である。それらがそろわないと恐らく何も動かない。

【愛知県】千頭　聡氏（日本福祉大学　教授）
暮らしの場から学ぶ

「多様な刺激」と書いた。子どもたちと先生はお互いに刺激をしあっている。先生と学校という仕組みも刺激しあっている。教科には授業の単元で到達しなければいけない目標があり、ある意味予定調和的に終わると良い授業だったと言えるが、ESD の学びは予定調和ではない。いい意味での刺激がいろんなところで生まれていた。大事なことの一つは、発信と持ち寄りである。発信とは、学校が地域に対して何か発信をすることである。学校がいま必要としていることの情報をいかに地域に発信するか、である。逆に地域は地域が持っていることや助言したいということを学校に発信をする。お互いに発信をするとお互いに持ち寄れるものがある。二つ目は「暮らしの場」から学ぶということ。地球温暖化にしても、遠い別の所の問題として学ぶのではなくて、子どもたちが暮らしている毎日の生活の場から学ぶことを基軸に置けば学校と地域は離れるはずがない。そこに戻っていくべきである。

【三重県】寺田　卓二氏(環境教育ネクストステップ研究会　代表)
自信が持てるようになる

関わって一番思ったのが、先生の成長である。三重では 1 年目と 3 年目の先生はベテランでもともと力があったが、それでももう一歩深く入っていただいた。2 年目の先生は新任だったが、本当によく頑張った。自信になったと思う。他クラスの先生が刺激を受けて、同じような取組を次の年に進めたという成長が見られた。学校や地域にとってはどう

だったのか。実施した学校では、ESD の視点で眺めなおし、いろんな人が授業づくりに関わることで、見方ややり方に自信を持てるようになった。先生の成長と、関わった地域の人と学校が自信を持てるようになったことを非常に感じた。ESD を進めるには「学校の地域理解、地域の学校理解」が重要である。お互いにできることできないことがある。学校のどこを助けたらいいのか、一粒で２度おいしいのか３度おいしいのか、どこかにキモがある。学校は地域の人の思いを知ることが大切である。その出会いをつなぎ役が作る。しかし、いつも中心にくるのは学校である。

（3）「学校と地域が連携した授業づくり、学校づくり、地域づくり」ワークショップ

グループで本事業のふりかえり（成果と課題）、子どもが輝く授業をつくるために、教員、学校と地域は何をすべきかについて話し合い、共有した。

[A グループ]

●はじめに、「ESD が何か」「取り組むとはどういうことか」「ユネスコとはどう関係するのか」など、学校への ESD 導入の意味としくみの理解に、たっぷり１年間を要したとの意見が示され、理解には時間がかかるとの共感で一致した。そこで、いかに ESD への理解を広げていくか」をテーマに、話し合いを進めた。

●総合的な学習の時間は２コマしかなく、最初の取りかかりにしか過ぎないが、やってみれば意味　やおもしろさが分かる。実感したチームの事例を、学校を含め地域に広げていくことが大事。

●人間関係が希薄になり、児童生徒も教員も丸くなりすぎている。尖った教員のトゲを研ぎ、教室中を熱くしていくことも必要。たとえば生きもの（家畜）の飼育を通して、こどもに変化が生まれる。地域が認め、ほめてくれる。さらには学校と地域の協力体制ができる。学校教育を通して各市町村教育委員会が変わるだけでなく、地域が担う役割も大きいのではないか。

●一口に「地域」と言っても、その状況はさまざま。自然豊かな地域もあれば、都市型の地域もあり、大学の付属小学校があったり、公民館活動が活発に行われていたりする。各地域の特性に応じたスタンダードが編み出され、学校教育から社会教育へと、ESD の広がりを期待したい。

[B グループ]

●「成果と課題」、「子どもが輝くために教員、学校、地域は何をすべきか」を議論。

●「成果と課題」については、ESD が広まった、地域との共有、連携が進んだ、授業づくりに多様性が生まれた等の成果が、課題としては ESD の認知度、事業の継続性の確保、学校と地域をつなげる人（コーディネーター）の必要性等が指摘された。

●「子どもが輝くために教員、学校、地域がすべきこと」については、以下のような指摘　がなされた。

●子どもを中心とする学びの変革が必要。子ども一人一人と向き合う姿勢、子どもたちとの信頼関係づくりが特に

重要。

●学校と地域との壁を低くする勇気が必要。

●子どもが輝けるような場づくりか必要。

●地域と学校をつなぐ人（コーディネーター）の存在が大きい。

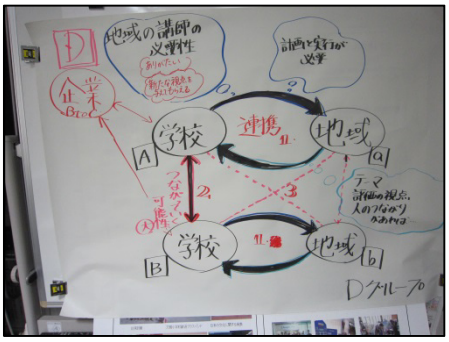
[C グループ]

●子どもたちの主体的な取り組みの促進と、人材・地域のネットワークについて議論した。

●子どもたちの主体的な取り組みの促進については、子どもたちが自分の取組を見つめて発展させていくことが重要、やったという達成感を持たせることが有効、授業だけでなく子どもたちが地域に関わっていくことが必要、子どもたちがどのように活動しているのかわかるようにしてほしい等の意見が出された。

●人材、地域のネットワークについては、人材・教材リストのような経験や知識を共有できるような仕組みが必要、ESD に関わる関係者のニーズの把握が重要、地域のひとたちに対するスキルアップ研修も必要、行政による認知や行政による人材派遣制度、教材作成プロジェクトなど゛があると良いとの指摘がなされた。

[D グループ]



●学校教育における ESD の推進と地域・企業との連携の可能性について、下記の３つの観点から討議した。

①学校側（教諭）は、地域・企業との連携を必要としているのか（地域連携のニーズ）

●教員は異動があり、着任した地域のことがわからないことが多く、地域の方と連携して ESD をすすめられることはありがたいと思っている。（小学校教諭 A）

●地域の方には、学校では思いつかない新たな視点を与えていただける。（小学校教諭 B）

→ 学校側には、地域・企業との連携に対するニーズはあることは確認できたが、連携がうまくいかないという事例もよく聞く。どこに課題があるのか。

②地域連携を進めていくうえでの課題はなにか

●学校には壁があると感じるときがあり、その壁の扉は、地域の側からはなかなか開かない。学校側から開けてもらえばうまくいくという経験を何度もしている。（ESD 実践 NPO）

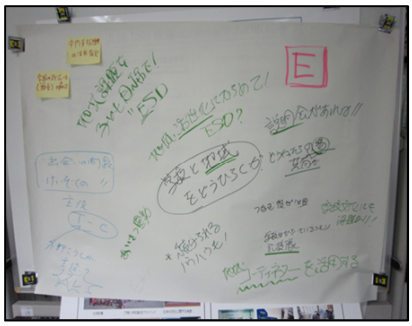
●学校側には、地域連携のニーズがあるものの、地域にどのような人がいるのかわからず、（学校が期待する）スキルが不足する人や一方的に価値観を押し付けるような人に来られても困るという不安がある。学校が期待する人と連携できるよう、地域の情報を収集する工夫が必要。その情報収集の場として、館長や主事がいる公民館は大きなリソース。石川県には、学校版環境 ISO と公民館を中心にした地域版環境 ISO という制度があるが、この両者による連携がうまくいっている地域が出てきている。（行政職員）

→成功事例の積み重ねは大事だが、それが散発事例に終わっては ESD は進まない。

③地域連携を点から面へと広げていくためにはどのようにすればよいか

●個別の成功事例を面的に広げていくためには、人のつながりがあればうまくいく。その場合の人のつながりとは、学校と地域のつながりはもちろんだが、学校同士、地域同士のつながりの中で成功事例の体験や人の情報をクロスに流通させることが重要（大学関係者）

[E グループ]



[課題は何か]

●成功例としては、愛知の応援隊や地域の反応が高かった「あいさつ運動」などがある。

●失敗例としては、単発ではOKでも継続しない、学校文化にも問題ありか、学校の過密スケジュールも問題。

●お互いに協力・協働すれば良いとは思っているが、実際にはすれ違うことが多い。

[意見交換]

●学校と地域をつなぐ中間の支援組織が必要、コミュニティスクールが奨励されているので理解あるコーディネーターなどが増えれば良い（長野市では全小中学校 80 校に平成 30 年までにコーディネーターを置くよう進めている）。

●協同のための関係者を集めた説明会などが必要(長野では 3 月に ESD の意見交換会を開催予定）。○具体的な提言など

●地域の活性化にからめてESDを地域に提案する（過疎化している地域は人口は少ないが日本中に多いのでそこから始めて具体的な成果を得ることが良いのでは）

●そのためにも地域の課題を、学校も地域も子どもの目線で再考することが必要ではないか（これまでは過疎の課題を子どもに上から投げかけるようではなかったか）。

[F グループ]

学校、大学、ユネスコ協会と地域という観点から　議論した。

●学校では、ESD　カレンダー作成等を通じて授業の見通しを明らかにするとともに、地域に対する受発信を強化する。その際、地域へのメッセージを明確にする。体験を重視する。

●大学は、地域と学校をつなぐ役割を果たせる。また、教育学部の学生の活用も考えられる。

●ユネスコ協会は、教育委員会とのつなぎ役、街の専門家の紹介、大学生会員と学校とのつなぎ役としての役割を果たしたい。

●学校はもっと地域のことを知る必要がある。地域は、学校に対する支援体制の確立を図る必要がある。学校にとっては、学区にある地域の資産を見つけることが重要。PTA や地域のコーディネーターが学校と地域をつなぐことが重要。

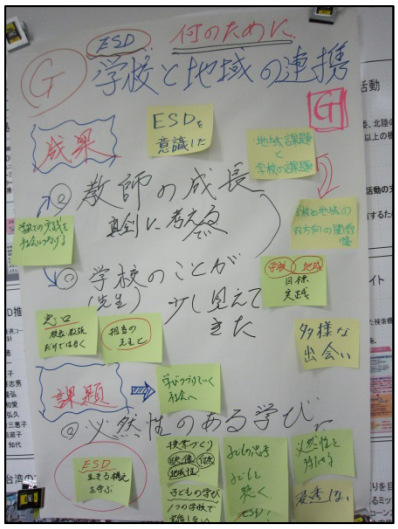
[G グループ]

「ESD とは」

●「ESD」は近寄りがたいと思う人が多いが、学び続ける社会　への手段として価値のあることを知らせたい。

●「ESD」とは生きる構えを学ぶ手段。

●「ESD」は未来への必然性のある学び。「ESD」に関われば、今までの活動の見直しができ、教師も関わった人も成長できる。



〈先生方の感想から〉

●初めて聞く「ESD」を手探りの状態でやり始めた。やってみるととても面白く教師自身が興味の持てる内容であった。

●「わからない」「やったことがない」というのは教師にとって怖いことだがやりがいもあり、新しい発見もあり教師の力を付ける学習であることが解かった。しかし、「地域とのつながり」は学校の立地によって難しいこともある。大学の付属校であったので、地域のつながりというより、学校内での共有と家庭への発信に力を注いだ。

〈地域から〉

●ESD の学習を通じて学校のことが見えてきた。学校の立場や活動の制限など少しずつ理解できた。学校の希望や決まりを一方的に話されるより、ESD の学習をすることで学校とじっくり話し合え、先生と地域ができること、地域外の人にも力を借りる方法を共に考え始めた。

〈成果〉

●多様な出会いがあり、学校と地域それぞれの成長が見える

●ESD の授業を組み立てるために多面から物を見ることで先生が成長する。

〈今後の課題〉

●地域の課題と学校の立場・課題とが違うことを認識すること。

●主体である子どもたちの話をもっと聴くことが大切。

●地域と学校と双方向での発信ができるようにする。

（4）総括

鈴木克徳氏（金沢大学環境保全センターセンター長・教授/北陸コーディネーター）

今回の議論では、様々な重要な視点が示された。情報共有・話し合う場の重要性、コーディネーターの必要性が話された。しかし、問題は誰が担うのか、である。学校の中で行う場合、外部で行う場合がある。ケースバイケースでおそらく一律の答えはない。学校は学校のルールがあって、逸脱できない。地域として、学校として考えて、地域と学校をうまく繋ぎ合わせていくことが必要である。一回行いその後忘れられたということでは、地域がつながっていかない。継続できる仕組みづくりをしていかなくてはいけない。

地域に対して子どもが視点を出していくような授業の在り方も話された。地域の将来とは、現在の子どもが 30 年、40 年後のことである。子どもが自分たちの社会をどうしていくか、と言う視点をもって地域と関わる視点があると

よい。学校と地域、それぞれの制約も理解した上で、双方向でやっていけるような議論が必要である。有益な議論、発表ができた。今後も継続して議論していきたい。

新海洋子氏（環境省中部環境パートナーシップオフィス チーフプロデューサー/長野東海コーディネーター）

このような出会いの場が大事だと思っている。刺激をしあう場である。今日知りあった人達が、つながって新たに展開が生まれるを望んでいる。「日本の教育に ESD なくして、日本の未来はない」と伝えている。ESD はそれほど大事な概念であり教育であるのに、なぜ広がっていかないのか。疑問を感じつつも、つながったみなさんとじわじわとつながり、高め合い、子どもたちがキラキラするする授業づくり、社会づくりを進めていく。

（５）閉会あいさつ

環境省中部地方環境事務所環境対策課　環境管理専門官　村辻　裕樹氏

環境省では、これから地域の社会教育施設、地域とさらに連携した ESD 事業の展開を検討している。本事業 3 年間は終了するが、今後もご協力いただき進めていきたい。

資料 1-2 東海地域 開催 目次

1．第 1 回「ESD 授業のつくりかた」ワークショップ報告.....285
（1）開催概要.....285
（2）プログラム内容.....286
①主催者あいさつ
②趣旨説明
③「ESD 授業づくり」報告ワークショップ
【長野県】松本市立会田中学校
【岐阜県】岐阜市立青山中学校
【愛知県】半田市立板山小学校
【三重県】名張市立薦原小学校
【富山県】富山市立神通碧小学校
【石川県】金沢市立十一屋小学校
【福井県】学校法人嶺南学園敦賀気比高等学校付属中学校
（3）「ESD 授業づくり」学びあいワークショップ.....303
（4）総括.....307

2．第 2 回「子どもの学びを学校と地域が一緒につくる」ワークショップ報告.....308
（1）開催概要.....308
（2）プログラム内容.....309
（3）ワークショップ「学校と地域が連携した授業づくり、学校づくり、地域づくり」.....315
①第 1 回の振り返り
②第 2 回の趣旨説明
③インタビュー「地域の課題を教材にする」
【富山県】富山市立神通碧小学校
【石川県】金沢市立十一屋小学校
【福井県】学校法人嶺南学園敦賀気比高等学校付属中学校
④プレゼンテーション「学校と地域が一緒につくった ESD 授業」
【富山県】富山ユネスコ協会
【石川県】金沢エコライフくらぶ
【福井県】NPO 法人エコプランふくい
【長野県】NPO 法人みどりの市民
【岐阜県】NPO 法人 e-plus 生涯学習研究所
【愛知県】愛知教育大学大鹿研究室
【三重県】環境教育ネクストステップ研究会
（4）総括.....319

※本企画の参加者アンケート及び広報のためのチラシについては、平成 27 年度 ESD 環境教育プログラム実証等に係る ESD 環境教育プログラム作成業務報告書に掲載している。

[東海地域開催]

1．第 1 回「ESD 授業のつくりかた」ワークショップ報告

（1）開催概要

日　時：平成 28 年 2 月 18 日（木）11:00~13:00（120 分）

場　所：愛知県産業労働センターウィンクあいち 1003 号室（愛知県名古屋市）

参加者：52 名（教員 11 名　自治体職員 12 名　地域団体/NPO14 名　地方事務所 3 名　他 12 名）

［プログラムスケジュール］

時間	プログラム	内容
11:00～ 11:05（5）	挨拶 趣旨説明	環境省中部地方環境事務所
11:05～ 12:15 （70）	ESD 授業づくり報告	コーディネーター：新海　洋子氏（環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー/長野東海コーディネーター） ①自己紹介、授業内容の紹介 ②ESD 授業づくりをした際のポイント、工夫した点、子どもたちにどのような力を育むこととしたか。ESD 授業づくりをする際に悩んだ点 ③実施して児童・生徒が変わったか。設定した力は育まれたか。 ④ESD 授業づくりを行ったことで自身が変わったことは。
	【長野県】 吉田　正人氏 （松本市立会田中学校　3 学年主任）	
	【岐阜県】 小川　佳広氏 （岐阜市立青山中学校　1 学年主任）	
	【愛知県】 岩崎　祐樹氏 （半田市立板山小学校　教諭）	
	【三重県】 松田　淑子氏 （名張市立薦原小学校　教諭）	
	【富山県】 堀　泰洋氏 （富山市立神通碧小学校　教務主任）	
	【石川県】 池端　弘久氏 （金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家　館長/前校長）	
	【福井県】 今井　尚子氏（学校法人嶺南学園 敦賀気比高等学校　教諭）	
12:15～ 12:55(40)	「ESD 授業づくり」ワークショップ	①ESD 授業づくりのポイントは？ ②ESD 授業づくり・実施がもたらす効果、変化は？
12:55～ 13:00（5）	総括 アンケート	松本　謙一氏（富山大学人間発達科学部教授）

（2）プログラム内容

①主催者あいさつ　環境省中部地方環境事務所　環境対策課長　遊佐　秀憲氏

本事業は平成 25 年度から 27 年度の 3 年間実施し、本日はその報告を行う。ESD 授業づくりを実践したことの成果を元に、ESD の大切さ、伝え方、学び合いの仕方について意見交換をしていただきたい。

②趣旨説明　中部環境パートナーシップオフィス　チーフプロデューサー　新海　洋子氏

今日は 3 年間各地で実践してきた ESD 授業づくりの報告が一番の目的である。この 3 年間いろいろな先生と出会い、ESD というキーワードを大切にして、いくつもの ESD の授業を作ってきた。冊子には私たちがつくってきた 22 の授業、エピソードとしてあるが、掲載している。その中の各県 7 つの授業を紹介いただき、参加者の中には本事業に初めて関わるという方ももちろんいらっしゃるが、ESD の大切さを共有したい。地域で ESD 授業づくりや実践の機運を高めていきたい。また、ESD 授業づくりと実践をした成果や効果を伝えていくためには、どのような方法がよいかを参加者のみなさんと話し合うプログラムも用意している。

午前の第 1 回では、7 つの ESD 授業の報告をしてもらい、午後からの第 2 回では、学校の先生と地域の方が一緒になって考えるワークショップを行う。今日は昨年の ESD ユネスコ世界会議に向けて ESD の先進都市として取組んでいらっしゃった岡山市の職員の方も来てくださっている。主役は参加者のみなさんであり、お持ちの情報、経験、知恵、アイデアを持ち寄り、溢れるように出し合う場にしたい。

③「ESD 授業づくり」報告

まず各県の先生に 8 分間の授業紹介と、授業づくりをする上での大事なポイントを話していただく。ただ聞くだけでなく、みなさんにも参加していただきたい。教員の話を聞きながら、共感して「いいね」と思ったことがあれば、机の上にあるピンクの付箋に書いてほしい。こんなこともできるといった提案や、意見、質問などはブルーの付箋に書いていただきたい。私たちは先生や学校の応援団であり、先生にメッセージを届けていく。7 つの報告それぞれに 1 人 1 枚は書いてほしい。授業紹介がすべて終わった後、各県ごとに用意したホワイトボードに、授業案を掲示するので書いた付箋を貼っていただき、各ブースのセッションに入りたい。

【長野県】吉田　正人氏（松本市立会田中学校　3 学年主任）

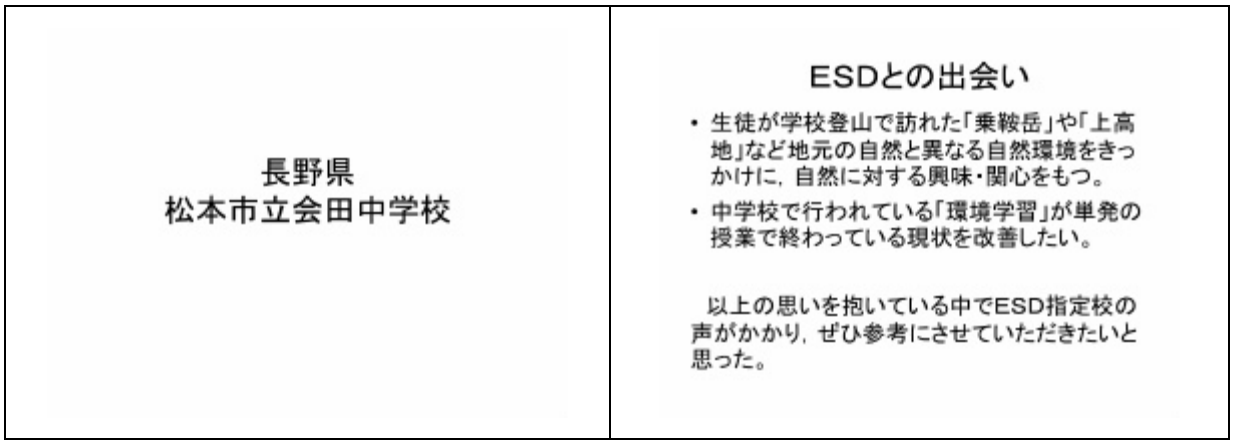
松本市は長野県の中央部だが、会田中学校はその中でも北寄りに位置する。冊子に木を燃やしている写真があるが、その場所は学校の裏山である。子どもたちは、自然が当たり前の中で暮らしている。その自然を見つめ直してほしいと考えた。長野県では各学校が学校登山を実施している。2 年生の時に同じ松本市にある乗鞍・上高地に登山先を変えた。上高地は全世界から来訪者がある有名な場所だが、私も子どもたちもほとんど行ったことがなかった。上高地の自然と、地域の自然の違いを感じて、地元の自然に興味を持ってもらいたいと考えた。これまでも環境教育には取り組んできたが、1 回限りの授業で終わってしまい継続していかなかった。自分たちの地域で自分たちが考えて取り組めることはないか、これまでの環境学習の取り組みを変えていきたい、という思いがあり ESD に参加した。

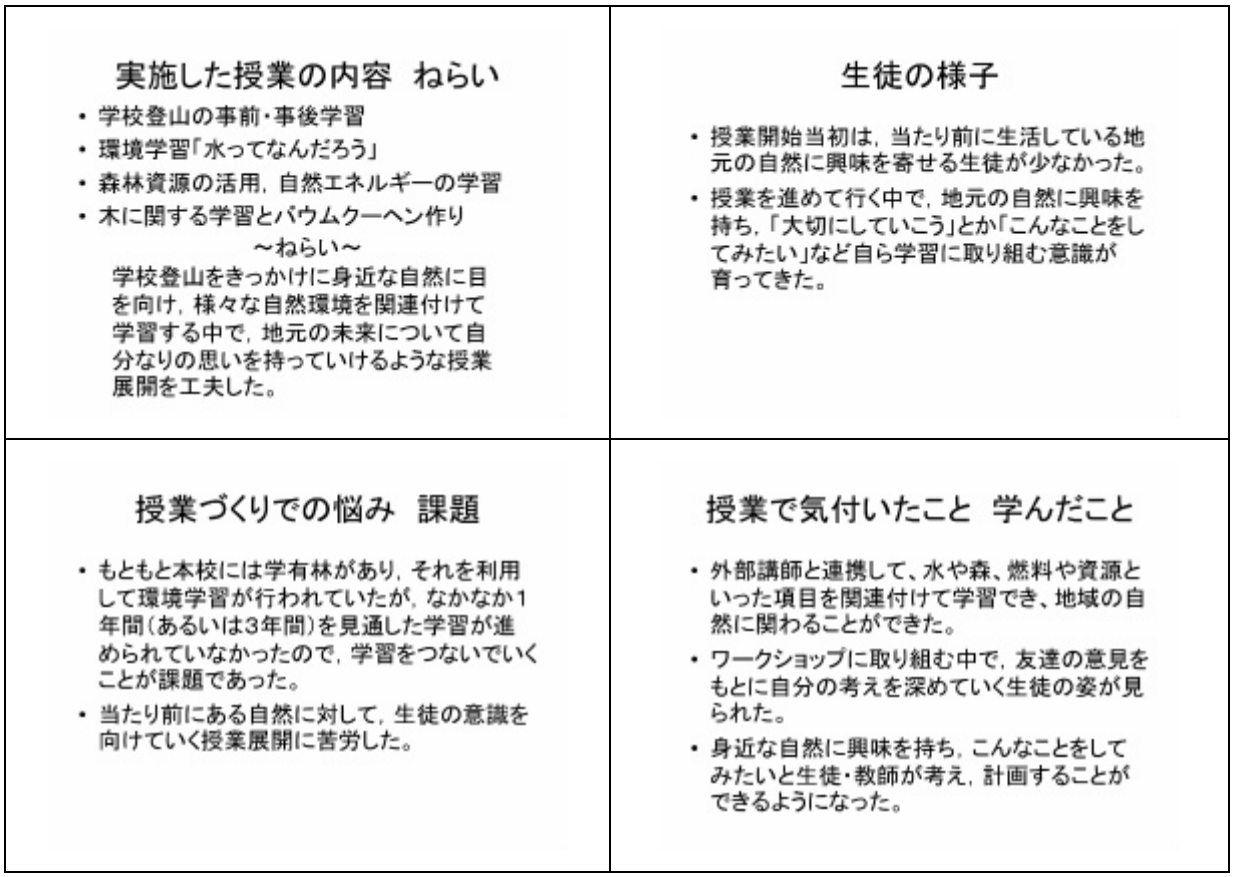
まず登山の事前事後の学習を実施した。子どもたちが上高地に行った時には「寒い」「雪があってすごかった」などと言う。山頂まで行けないほどの悪天候だったが、自然の厳しさも体験できた。その中で、上高地の水がきれいという感想が一番多かった。川の水を飲んで美味しかったと言う子どもまでいた。今までならば登山をしたところで授業は

終わり、水が美味しかったという感想が残るだけだったが、水に興味を持った子が多くいたので、ESD の視点から水に関わって勉強できないかと考えた。登山をきっかけに水の違いに興味を持ち、水の循環について学習したり、水道水を使った実験や飲み比べなどをして、身近な地域の水を勉強した。水を学ぶと、森林や山という水源に目を向けるようになってきた。そこで、学校の裏山の森林、学有林を対象に、美味しい水と森林の関係や、木に関わる生活とのつながりを学んだ。地元で活動する四賀林研の方の協力のもと、木を伐採し、炭を作ってみたり、木材を使ったエネルギー学習を行ってみたりした。せっかく作った炭を活用したいという子どもたちの単純な発想から、地域の木材と炭を使い、木の学習とバームクーヘンづくりを行った。

これまでは単発で終わっていた環境学習が学習活動としてつながりを持って取り組めたことが、ESD に参加してよかったと思えることだった。子どもたちも、身近な自然が当たり前過ぎて見向きもしなかったが、プログラムを経験する中で、「地元の自然を大切にしなくてはいけない」「自分も大きくなったら四賀から出ていくかもしれないが、今できることはないのかな」ということを自ら少しずつ考えるようになった。３年生になった今年は、さらに地元の自然から勉強しようと、１つのクラスはエネルギーについて勉強している。様々な発電方法のメリット、デメリットや省エネに関わる取り組みを調べ、自分たちの生活の中で実践できることを考えた。もう１つのクラスは、実際に畑をつくり、農産物を栽培し、調理して食べることで自然の大切さを学んだ。もともとあった学有林をやっと活かすことができた。

今回、見通しを立てて１年のスケジュールをつくることが大事だと分かってきた。今後は３年間を１つのサイクルとして、つなげて取り組みたい。子どもたちに興味がなくては、授業もうまくいかないため、地域の外部講師と学校職員が連携をしっかりと取って、子どもたちの意識につなげていく授業を工夫してつくっていくことが必要である。今回、地域の方と触れ合う機会がとても増えた。地域の方からも、また学校に呼んでほしい、という声もいただいた。その連携を大切にしていきたい。普段、教師から教えることが多い授業だが、このように実際に体験する、ワークショップなど子どもたち同士で意見を交わすことで、他の子どもの意見によって自分自身の意見も深まることを、子どもたちの姿から見ることができた。これから成長する中で、自分たちが住んでいる四賀の自然がどう変わっていくか、自分がそこでどう関わっていくか、未確定なところもある。子どもたちには中学校を卒業するまでに、地元の自然への興味を少しでも持ってもらえたらと思う。





【岐阜県】小川　佳広氏（岐阜市立青山中学校　１学年主任）

青山中学校は近くに長良川が流れ、市街地と田舎の中間に位置している。昨年度本校はユネスコスクールの認定を受けた。ESD を始めいろいろな研修を受けていたが、主任の私はやや関心が薄かった。今年度、ESD 環境教育プログラムに参加することが決まり、初めて出会うESDの視点の多さに戸惑った。ESDの視点で総合的な学習の時間のあり方を見つめようという目標を立てた。本校の総合的な学習の時間では、人との出会い、人から学ぶことを大切にしている。今年度は、多様な立場や過去、将来の世代の人とのつながりを体験できる場を用意した。１年生で環境、２年生で勤労、３年生で平和・人権について正しい知識を身につけ、自らが行動し、共に生活できる社会を形成していく能力、それを本校では生き方と呼ぶが、それを育みたいと思っている。

１年生の環境学習では、琵琶湖の水質汚染の浄化に携わる方から、活動内容や考えを聞いた。また岐阜市や環境省などで環境行政に関わる方、循環型の生活を広める活動をしている地域の NPO 団体の方から話を聞き、共に活動することで、環境を守る意味や身近にある環境の課題を見出し、環境の改善策や自分にできる活動を考えていく。今年度は、ESD の特に４つの視点で環境学習を見つめ直し、生徒に付けたい力を決め、学習を進めてきた。

１つ目は、人と自然は多くのことにつながっているという視点である。つながりを尊重する態度を育てていく。学習旅行で、琵琶湖の水質汚染の浄化に携わる方から話を聞き、琵琶湖の環境を汚したのも、環境を美しくしてきたのも人であることを学んだ。環境省の方の話では、毎週行っている地域のごみ拾い活動が世界の海を守っているのかもしれないことを気づけた。このように１つ１つの活動に、幅広い自然とのつながりを感じる態度を育ててきた。２つ目は仲間の考えを受け入れ、話し合いを進めることができるという視点である。他者と協力する態度を育てて

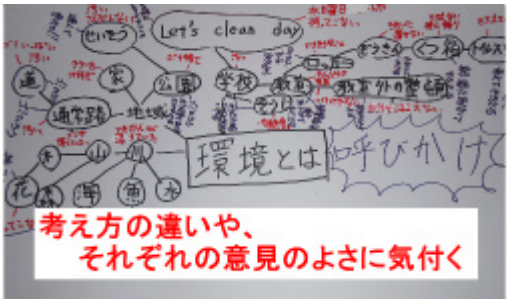
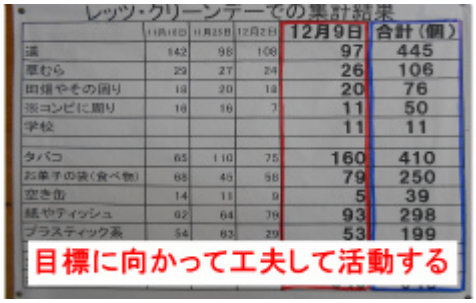
いく。学習旅行の事前事後学習において、様々な方が琵琶湖の水質浄化に関わり、意見を交流し、協力して活動をしてきたからこそ、琵琶湖が美しくなってきたことを学んだ。生徒たちが行う身近な環境を美しくする活動においても、仲間や家族、地域とのつながりを活かして、多くの人と意見を交流し、協力を得たりする態度を育てている。３つ目は、自分の見方、考え方と違う点に気づくことができるという視点である。多面的、総合的に考える力を育てていく。身近な環境問題を考える学習では、エコバッグの使用が話題となったグループがあった。エコバッグを使うことで、レジ袋の使用が減り、環境に良いという意見と、エコバッグを無駄に配るので環境によくないという意見が対立した。どうすれば環境がよくなるか、という視点で再度両者が話し合うことで、地域の行事の参加賞などで頻繁にエコバッグが配布されている現状などを踏まえて、自分に必要なエコバッグは自分で買い、余分なエコバッグは持たないことを前提に、エコバッグを使用していくという自分たちの結論を導き出した。このように両者の考え方の違い、それぞれの意見の良さに気づき、総合的に考える力を育てることができた。４つ目に、環境に配慮した生活について、自分なりに考えて、工夫しているという視点である。未来像を予測して、計画を立てる力を育てていく。毎週行っているごみ拾い活動で集まるごみの量や種類、落ちている場所を調べる中で、公園や小学校の近くにお菓子のごみが多い、交通量の多い道端に煙草の吸殻が多いという現状を把握した。小学生や車を運転する人に、ごみを捨てないことを啓発していけば、地域のごみを減らせるのではないかと予想し、小学校との交流を行い、また地域に配布される広報誌を活用するなど、啓発する方法を工夫しながら計画し、実行しようとしている。このようにごみのない地域をつくるという目標に向かって、現状を元に工夫して活動を考える力を育ててきた。

１年間の学習の中で、生徒が書いた感想や、環境への意識アンケートの結果、生徒の姿から感じた変化が３点ある。1 つ目は、つながりに関心を持つ生徒が増えた。学習を通して、自分たちが行っている活動が、自分や学校、地域のためだけでなく、川や海を美しくするため、そこに住む生物を守るため、日本や地球を守るために役立っているという広い意味での有用感を感じることにつながった。さらに、一部の生徒は地球を守ることは、最終的に自分たちのプラスになって返ってくるというように、自分と地球を一体として考えていた。２つ目は、疑問を分かるまで調べることができる生徒が増えた。岐阜市や環境省の方から話を聞いた後、講話の内容を家庭で行う自主学習ノートにまとめてくる生徒や、家庭学習として自分が興味を持った環境に関わる内容をインターネットで調べた生徒もいた。３つ目は、自分なりに考えて工夫することができる生徒が増えた。週に１回のごみ拾い活動を週２回に増やして、地域をより美しくしようと自分たちで提案して決めた。週１回のごみ拾い活動は本校の生徒会活動として、長年行われていることで、生徒にとってはやらなくてはならない活動に過ぎなかったが、１月にごみ拾い活動の中心である環境委員が自主的に集まり、週にもう１回実施するごみ拾い活動を増やすことを話し合い、学年の仲間に提案した。学年の仲間の承認を得ると、生徒会役員や教師に自分たちの意向を伝え、活動を立ち上げることができた。

最後に、今年度、ESDの視点を大切に総合的な学習の時間を見つめ直すことで、私自身が気付いたことである。私は「授業を行う＝活動を仕組む」という考えになっていたことに気付いた。様々な活動を実際に行うことで、行っている人の考えを実感したり、課題を探ったり、成果を見出したりするというよさもあると思う。しかし、教師が準備した活動に終始してしまうことで、生徒の多面的に考える機会を失ったり、自分達なりに工夫する余地を奪ったりすることにもなると思った。実証授業後のワーキンググループ会議で「結論の出ない話し合いをさせてもよいのでは？」とご指導をいただいたことが今でも心に残っている。

持続可能な社会の構築はこれからの人類、日本、生徒達の課題であり、まだ成し遂げられていない。成し遂げられてないことを、教師が決めつけて授業を行っても新たな方向は見出せないことがあると思う。ご指導いただいた

ように、時には教師も授業者でははく、話し合いの一員となり、よりよい生き方を求めて共に考えていこうとする心構えが、ESD を進めていく上で私には必要ではないかと感じた一年だった。

<table>
<tr>
<td>岐阜県
岐阜市立青山中学校</td>
<td>ユネスコスクール
↓
ESDの視点で総合的な学習の時間のあり方を見つめる
環境学習において、人、自然、体験、知識、活動のつながりを大切に学習計画を立て、学びを深めたり、学び続ける意欲を喚起する。</td>
</tr>
<tr>
<td>
</td>
<td>
</td>
</tr>
<tr>
<td> 
</td>
<td> 
</td>
</tr>
<tr>
<td>
</td>
<td></td>
</tr>
</table>

【愛知県】岩崎　祐樹氏（半田市立板山小学校　教諭）

板山小学校は山に囲まれ、学区には田んぼや畑が広がっている。140 年前に板山の地に開校して以来、地域の方の協力を得て教育活動を進めている。地域との深い連携が特色である。また 1 学年 2 学級 50 人前後というコンパクトな学校規模で、柔軟に活動できることも本校の特色である。

本校は昨年度より地域学習の研究に取り組み始め、「板山科」という独自のカリキュラムを作成している。その研究を通して、ESD の活動に出会った。そして、「板山科」を土台として、一人一人が板山の未来を考え、自分にできることを考え、行動していく「板山 ESD」に取り組み始めた。その後、板山小学校は平成 27 年 2 月 19 日にユネスコスクールに加盟して、国内や世界のユネスコスクールとつながり、活動を展開している。

本事業で実証した 5 年生の「メダカがいっぱいの板山を取り戻そう」の取組について報告する。5 年生のテーマが「環境」であるため、まず地域の環境に目を向けた。子どもたちは、「板山の自然豊かなところが自慢だ」と日頃言っていた。理科でメダカを扱う単元があり、子どもたちに「この地域にメダカがいると思うか」と聞くと、「当然、地域にメダカはいる」と答えた。そこで実際に、川に出かけて調査活動を行うと、川の水質環境が悪く、生息する生き物も外来種ばかりであった。ザリガニが多く、メダカが生息できるような環境ではなかった。そこで、子どもたちはその状況を踏まえて、生き物が生息しやすい環境はどのような環境かを考え始めた。10 年ほど前に校内につくられたビオトープを題材とすることとした。ビオトープの管理が行き届いておらず、外来種のザリガニの住処になっており、メダカなど他の生き物が暮らしにくい環境になっていることに気づいた。そこから子どもたちは生き物が暮らしやすい環境に興味を持つようになり、調べたり、生き物に詳しいゲストティーチャーを招いて、生き物と環境の話を聞いたりした。人間が生き物が暮らす環境を壊していること、生き物が暮らしやすい環境はどういうところなのか、を子どもたちは知ることができた。

その後、子どもたちは学校にビオトープができた経緯に興味を持ち始め、調べたところ、地域の人たちが、子どもたちが生き物と触れ合えるようにという思いのもと、学校内にビオトープを作ったことがわかった。子どもたちは生き物と環境との関わりについて改めて考え、地域の人の思いを引き継ぐためにビオトープを再生しようと考え始めた。ビオトープ再生にあたっては、現在のビオトープの問題点、問題点を解決するためにすべきことを話し合った。ビオトープの再生には専門的知識が必要なため、アドバイザーとしてゲストティーチャーに授業に入ってもらい、何度も話し合う中で、子どもたちなりのビオトープ再生計画ができた。その後、計画に沿って活動を進めた。

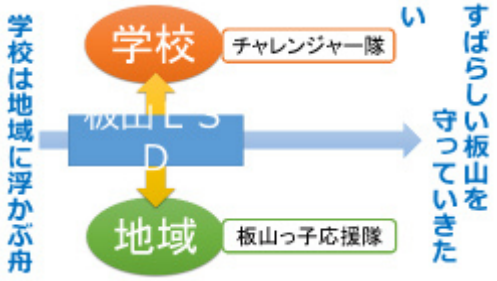
一番の問題は、ザリガニが多いことであった。ザリガニが 1 匹でもいると、メダカが食べられてしまう。泥の中にザリガニが潜んでいるため、泥をすべて掻き出すことから始めた。作業はとても大変で、なかなか思うように進まなかった。地域で竹炭をつくって川の浄化に取り組む竹炭研究会に協力していただき、一緒に作業をした。この方たちは「板山っ子応援隊」という子どもたちの活動に協力する団体に所属している。一緒に子どもたちと作業することをとても喜んでくれた。大人の力を借りたことで、その後は順調に作業が進み、以前のビオトープとは見違えるように変わったビオトープを見つめる子どもたちの姿は達成感に満ちあふれていた。そんな姿を見て、とても幸せに感じた。現在 1/3 ほどしか作業は進んでいないが、残りの作業をどうするかが 5 年生に残された課題である。

子どもたちは地域学習を通して、「板山が前よりも好きになった」「自分のこととして考えられるようになった」「自分の思いが実現できるのが嬉しい」と考えられるようになった。子どもたちの変化である。「ビオトープは板山小学校の自慢」「未来の板山小学校の児童にも、いきものがいっぱいいるビオトープを引き継いでいきたい」と 5 年生の多くの子どもが言っている。これからも取組を続けていきたい。そして、この取組をきっかけに、地域の環境の改善につなげていきたい。

半田市立板山小学校
140年の歴史
地域との深い連携
各学年2学級（50人）
コンパクトな学校規模

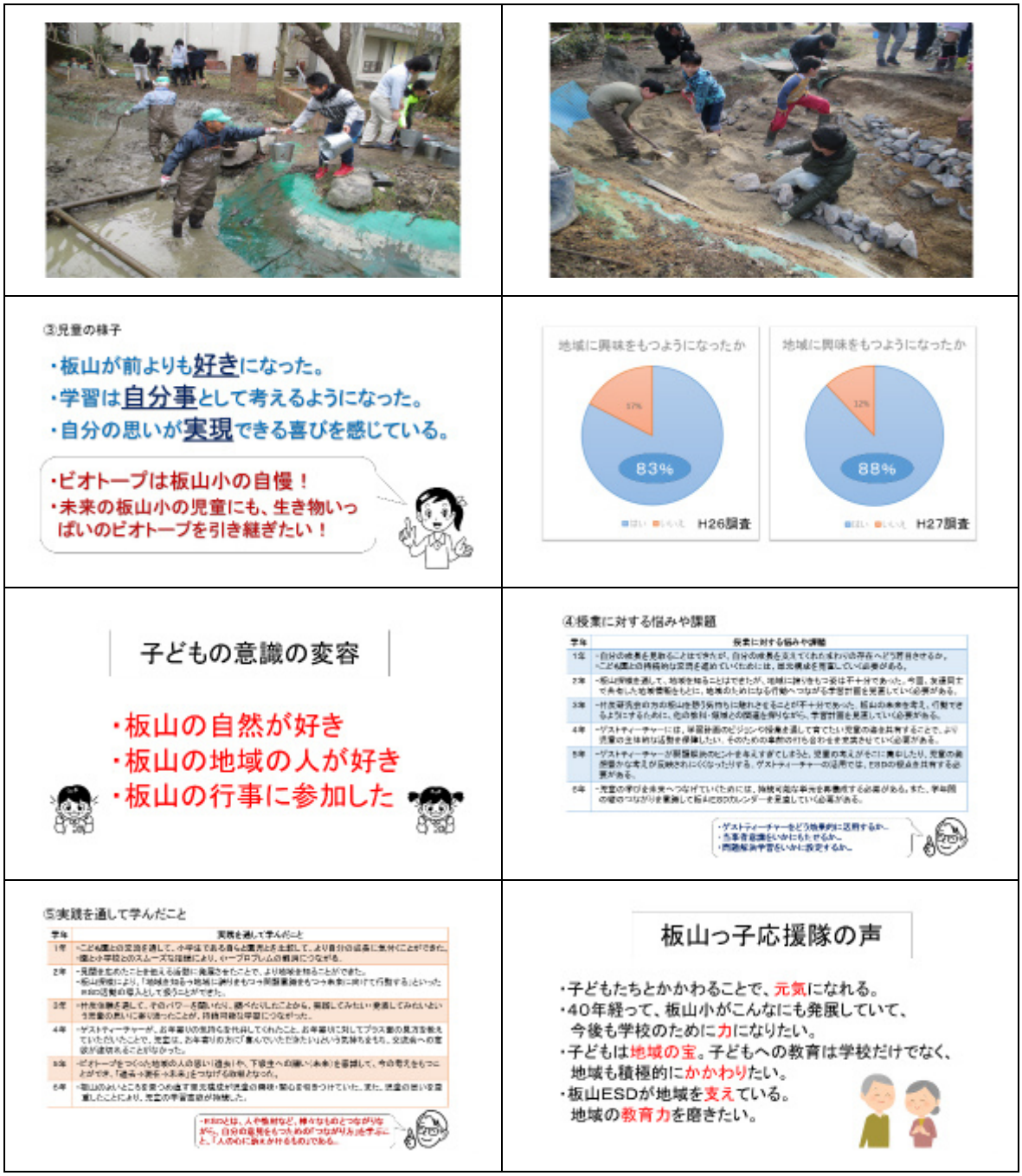
ESD
持続可能な
社会づくりの担い手
を育む教育
①ESDとの出会い

「板山ESD」
地域に学び、地域に誇りを持つ
板山っ子の育成
学ぶ＞愛着＞誇り＞問題意識＞行動


学校は地域に浮かぶ舟
学校
チャレンジャー隊
地域
板山っ子応援隊
すばらしい板山を守っていきたい

②実施した授業内容

<実践の様子>



【三重県】松田　淑子氏（名張市立薦原小学校　教諭）

名張市の薦原小学校は全校児童 113 名の小さな学校で、自然豊かなところにある。学校の特徴として、小学校横に公民館や保育所があり、地域とともに学習が深められるよい立地条件にある。

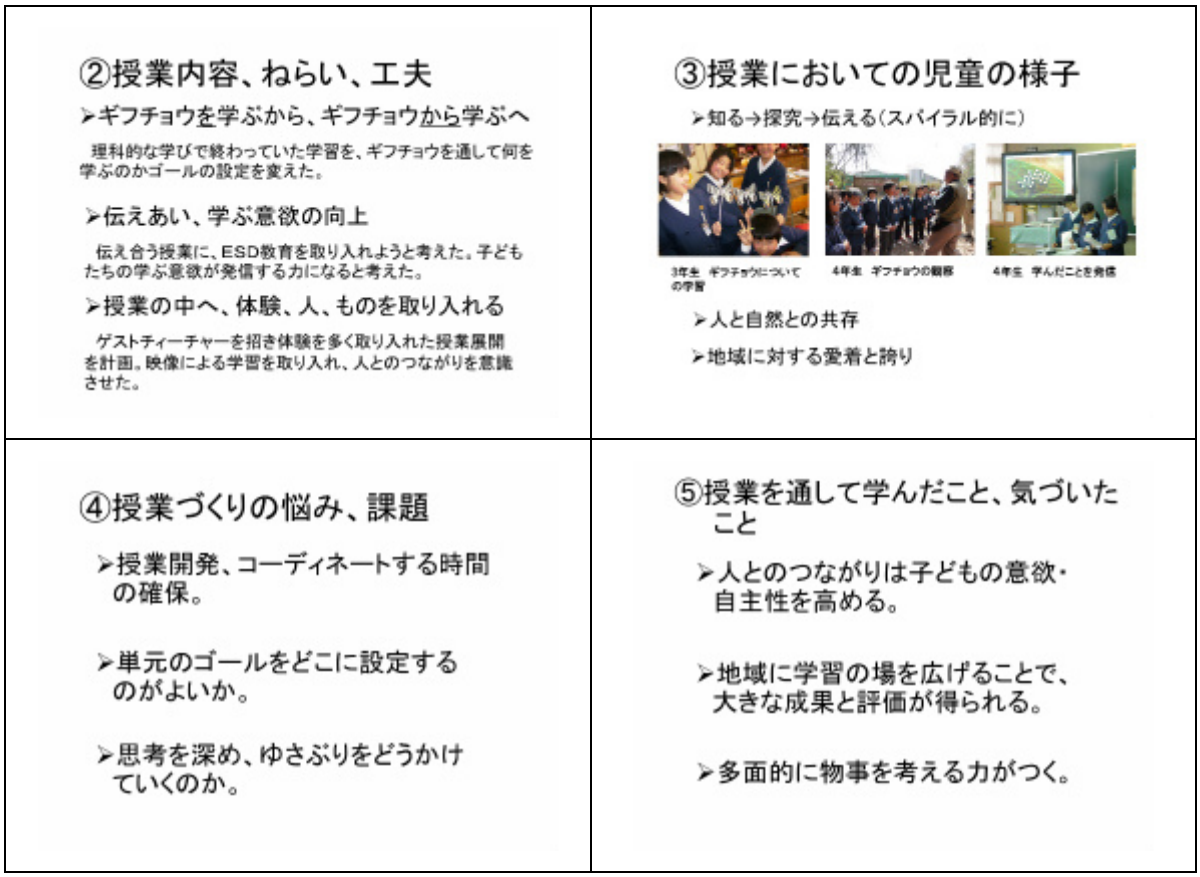
3 年前に公開授業の依頼があった時、ESD が何か分からなかった。取り組むのは大変だと思った。4 年生、5 年生では地域学習をしており、4 年生はギフチョウ（市の天然記念物）の観察を 8 年前からしている。それを教材にして ESD につながる授業ができないかと考えスタートした。今まではギフチョウの学習は、生態を学ぶといった理科の学習で終わっていた。しかし ESD の視点から、ギフチョウを学ぶのではなく、ギフチョウから何を学ぶのか、子どもたちに何を教えるのかといったゴールの設定を変え、授業を行った。学校の目標として、「伝え合って」学ぶ研究

授業を行っていたため、伝えていく力、コミュニケーション力をつけるという視点を ESD に取り入れたいと考えた。

授業の中にまず体験を取り入れ、そしてゲストティーチャーを招いた。本授業では、映像を使って実際の見学や、体験では見ることができないものを見せ、その映像は子どもたちの思考を深めるためにとても役に立った。４年生になるとすぐギフチョウの観察に行くので、3 年生の 3 月に事前学習でギフチョウについて勉強した。ギフチョウは春の女神と呼ばれていて、1 週間しか姿を現さないので、その時が勝負である。３年前の観察では、ギフチョウの卵、ニッポンハナダカバチという絶滅危惧種という２つの大発見があった。実際に子どもたちが発見したわけではないが、子どもたちは自分たちが大発見をしたと大喜びをした。発見があると、子どもたちの意欲が高まり、分かったことをまとめて、今度は誰かに発信したくなる。学習は観察をし、まとめ、そして伝えるというスパイラル的に積み重なっていく。誰かに伝えると、また新しいことを知りたい、というように子どもたちの学習はつながっていく。

当日の公開授業では、ギフチョウを守るために、ごみを捨てない、環境を守る、といった意見が出ると思ったが、私たちが生きていくためには工場が必要だという意見が出た。その意見には驚かされた。ギフチョウが生息する地域の横には工場がある。ギフチョウの生息地と生息地を開発して作られた工場という矛盾点を映像で流すことで、「ギフチョウは守らなくてはいけないが、自分たちが生活していくためには工場は必要だ」と子どもが発言したと考える。その工場には、子どもたちの両親が働いている。工場をなくせば環境とギフチョウが守られていくのかと言えばそうではなく、自分たちの生活には工場も必要であると子どもたちは気付いていった。「人と自然の共存」が子どもたちから導き出された。最終的に、子どもたちは「自分たちの地域はこんなに素晴らしい」「愛着と誇りを感じた」といったことを感じることができた。また映像に、子どもたちの祖父母の声などを入れてもらうことで、自分たちの祖父母が自然や環境を守っていたことに気付いた。そのような発見が授業の中で多くあり、ただ単に環境を守るだけという話で終わらない授業になった。

本校はギフチョウの学習から徐々に発展し、1 年生から６年生までが計画的に ESD 授業を組み立て、ESD カレンダーをつくっている。しかし、各学年でどんな地域教材を取り入れたらよいか、コーディネートする時間が担任にはないという課題がある。そこで本校では校長が地域に足を運び、地域の方の協力を得るコーディネート役になっていただいている。ESD の授業は総合的な学習や生活科ばかりではなく、各教科に結びつけて授業を膨らませていくことが大切であると考える。３年生では昔道具を調べる時に社会科を活用し各教科へ膨らませたので、負担は少なかった。ESD の授業は単元のゴールをどこに設定するかを考えることで、子どもたちの思考は深まっていくように思えた。それにより、子どもたちにものごとを一生懸命考える力、多面的にものごとを考える力が付き、学力向上にもつながったと感じている。



【富山県】堀　泰洋氏（富山市立神通碧小学校　教務主任）

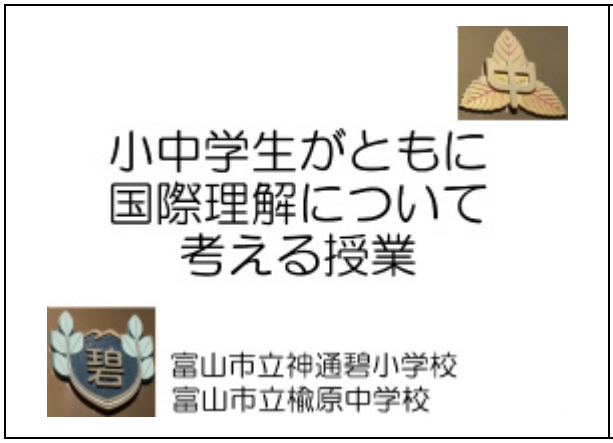
本校は富山市内ではあるが、岐阜県の県境まで数キロというところに位置している。校名の由来だが、一級河川の神通川が学校の近くに流れていて、その色が非常に深い緑である。それを象徴して神通碧小学校と名付けられたそうである。全校児童は 60 名余りの非常にのどかな学校である。小中併設の学校で、小学生と中学生が自然に触れ合っている様子が日常的である。その利点を活かして、小学校６年と中学校１年生が、総合的な学習の時間を合同で実施し、連携教育を進めている。「つながる　広がる　わたしと世界」というテーマの「国際交流」の授業を全 15 時間で実施した。富山市の観光地域振興局の５名の国際協力員（アメリカ、ロシア、ブラジル、韓国、中国）に協力していただいた。非常に高い日本語能力を持ち、言葉によるコミュニケーションが可能であり、母国と日本の文化への深い理解を持っている。子どもと複数回の交流が持てるため、交流の対象とさせていただいた。

学習の流れとしては、交流を２回、その間にメールによるやり取りをして、思考の深まりと、それに伴う交流が深まるように設計した。小学生は驚きや喜びを素直に表現し、臆せず交流を進め、中学生はキャリア教育との関連から交流相手の仕事への使命感に目が向くなど、小学生には思いつかない着眼点を示してくれるのではないかと考えた。これらが小中合同で学ぶメリットであったと考えている。１回目の交流では各国の遊びなどを取り入れ、班ごとに交流員と交流を進めた。交流員の人柄に触れながら、子どもたちは考えてきた質問を少しずつ出し始めた。実際に会うことで分かることが多く、成果のある交流となった。子どもたちは考えたことを基に、課題を見つけていった。例えば、小学生の児童 A は、アメリカの交流員の方が「自分の国に戻らない」と言ったことに着目し、なぜ自分が生まれた国に戻ろうと思わないのか、と疑問を持った。日本の生活に便利さを感じていると考えた児童 A は、メールで、「今日本にいるのは日本の方が便利だからか」と尋ねた。帰って来たメールには「便利なところは多いが、日本にはみんな同じようなことを求められるプレッシャーがある」と書いてあった。そのプレッシャーとは、多くの人が同じことを行う文化のことを示しており、例えば、アメリカでは、肉や魚を食べない習慣がある人は、学校の昼食でも食べ

なくてもよいなど、みんなが同じことを当たり前にする日本の社会はプレッシャーが多い、という事だった。このメールを受けて、児童 A は、なぜ暮らしにくい日本にいたいと思えるのか、と尋ねれば尋ねるほどわからなくなった。さらには、そういったプレッシャーのある日本は悪い国なのか、という小学生らしい不安を抱き始める。まとめると、児童 A は「私はずっと家族といたい。どうして生まれた国から離れて暮らせるのか。しかも好んでプレッシャーのある日本に来ている。その理由が知りたい」という疑問になった。私たちは、児童 A には、①両国の考え方の違いが内在していること、②明確な課題を持ち、解き明かそうとしている、という教材性があると捉えた。調べ学習が停滞している子どもや、書籍や資料で調べて安定してしまっている児童や生徒の追究を見直す契機になると感じた。
話し合いでは、児童 A が仲間に意見を述べると、「やりたいことがあっても、生まれ育った国を離れる勇気はない」「外国の人の考え方には理解できないことがある」「この地域をいつかは自分も離れたいという気持ちもあるので、理解できる」などの意見が出た。A はこの地を離れることを理解できる仲間がいることに驚くが、地域が好き、家族から離れることは考えられないという自分の思いを強くしていった。それに伴い、好きな日本とプレッシャーのある日本が児童 A の中で、不協和音となって渦巻き、何とか自分を納得させたいという思いが強くなってきた。そのことが 2 回目の交流に向かう思いをさらに強めた。

そして、児童 A は 2 回目の交流の時に、思い切って質問し、丁寧に聞きとろうした。交流員は「プレッシャーには悪いと思うプレッシャーもあるが、成長のきっかけとなるよいプレッシャーもあるのではないか」と答えた。この話に児童 A は深く納得していく。まずプレッシャーは悪いというものの見方そのものが揺り動かされ、さらにプレッシャーの存在と自分の成長の関係が、これまでの経験においても励みになっていたことを思い出した。プレッシャーのある日本＝悪い国という思いが、すっきりとした様子だった。2 回の交流を経て、子どもたちから「改めて日本の良さがわかった。」「実際に交流すると、多くのことがわかった。」「身近にある国際交流の大切さがわかった。」という感想があった。

計 15 時間の学習だったが、2 回の交流と、その間のメールのやり取りを設けたことで、交流活動が充実していった。児童 A の事例にあるように、身近な生活の中に異なる文化を学ぶ素材が媒体のように存在している。それは異なる文化の中で育ってきた者同士の交流で明確に見えてきた。子どもが鋭い目で見逃さないこと、それを解明する過程で自分の認識の広がりを認識できるようになった。教員はこの変化にしっかりと向き合っていくことが大事であると感じた。



神通碧小・楡原中の連携教育

小6中1の合同学習

総合的な学習の時間

国際交流

つながる
ひろがる
私と世界

15時間

単元の目標

○ 他国の人々や生活に関心をもち、進んでコミュニケーションを図ろうとする。

○ 交流活動を通して、自国との違いやよさに気付く。

○ 感じたことや考えたことを話し合い、他国の人との関わり方を見つめ直す。

国際交流員

アメリカ、ロシア、ブラジル、
韓国、中国（計５名）

- 高い日本語能力
- 両国の文化 深い理解
- 複数回の交流

学習の流れ

交流相手の決定 → 第一回交流会 ① → メール → 話合い ② → 第二回交流会 ③ → 学習発表会で発表

合同で学び合う利点

小学生		中学生
驚き 喜び 素直に表現 臆せず 体験的に交流	よさをかかわらせていく	小学生には 思いつかない着眼点 （仕事への使命感等）

① １回目の交流

自分が想像していた国の様子とは大きく違っていた。
やはり実際に会ってみないと分からない。

感じたこと 考えたことをもとに
各自 課題を決める

① １回目の交流

自国に
戻ろうとは思わない。

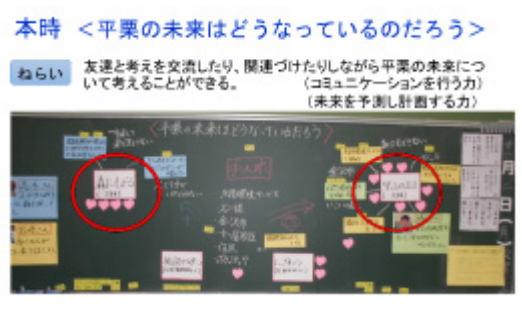
A児
なぜ、自分が生まれた国に
戻ろうと思わないの？

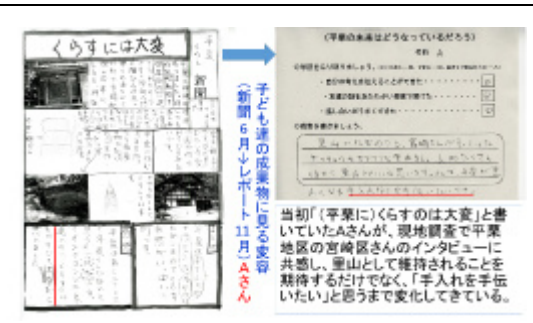
【石川県】池端　弘久氏（金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家　館長）

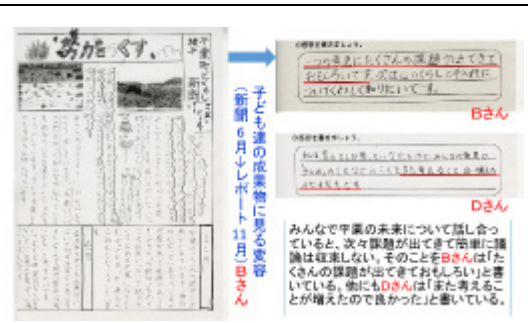
今日の報告は、金沢市立十一屋小学校の杉本先生が行った実証授業にワーキンググループの一員として関わった私が代わって行う。十一屋小学校の校区は背後の丘陵地に続く住宅街で、市営住宅や近くに自衛隊の駐屯地、附属小学校がある地域である。実は校区の中に忘れ去られた平栗という地域がある。子どもたちが通っていないので、学校の中では子どもたちが知らないという感じであった。しかし、そこはギフチョウもいるような自然豊かなところで、自然環境保全地区に指定され散策される方も多い。ただそこは、冬期だと住んでいる方が平野部に下りて無人になるような限界集落であり、非常に大きな問題を抱えた地域でもある。杉本先生は、この地域の

学習にとり組んでみないかとの松本校長先生の提案を受け、いわゆる中山間地域の課題に子どもたちと一緒に取り組もうとこの授業を始めた。
単元計画を立てる際に、いろいろなことを新たに知るだけでなく、その地域の SD の課題に子どもたちが出会い、考えることを目指した。単元計画全体を貫くのは SD である。それを串にして、子どもたちなりに体験的な学習を通して考えていく。また学年の課題として、自己肯定感が低いことがあり、その向上のために何とかコミュニケーション力を付けたい、というのが学年の願いだった。それを ESD の課題と重ね、取組んだ。ある意味、学年の SD の課題でもあった。
取組みでは平栗に 2 回調査に行った。2 回目では、1 回目の問題点をはっきりさせるため現地調査を行い、合わせて市役所環境政策課など関係者からの聞き取りを行った。
　今回の単元設計で特徴的なのは、事前事後のアンケートなどの評価計画をつくったことである。子どもたちのいろいろな成果物からも評価していった。また各学習場面に必ずあるグループワークにおけるコミュニケーションにも着目して取組んできた。
　平栗は 1 つ山を超えて、その奥に広がる中山間地域である。子どもたちは歩いて行ったので、初めはもう嫌だと言い、大変であった。しかし勉強が進み、もう 1 回行ってみないとわからなくなった。豊かな自然をもっと知りたいということとともに、その地域は自然環境保全地域だが、一方で産業廃棄物の処理施設もあり、そこに子どもたちが違和感を持ったからである。そこでもう一度調査に行った。平栗の地区長に話を聞き、また植物の専門家から森林の状況について説明を聞いた。このままウラジロガシを放置しておくと、一次林としてはうまくつながらなくなる、といった話を聞き帰って来た。
担任がコミュニケーション力をつける 1 つの考え方として、自分の意見をただ主張するのでなく、それを主張する根拠をしっかりと立てて話すことを指導した。根拠を立てて話すことで子どもたちは冷静に、あるいはしっかりとコミュニケーションできるようになるのではないかと考えた。この 2 回目の現地調査こそ子どもたちが根拠を獲得する重要な意味も持っていた。その結果、子どもたちは根拠をしっかりと調べていくことにもなった。それに基づき、グループワークをして、全体で交流する。結果、授業では 49 人の発言中、20 人はしっかりと根拠を付けて話し合われていた。これまでにない子どもたちの成長ぶりを先生も実感された。
　これは子どもたちの変容の様子である。6 月の第 1 回目の調査後の新聞と、11 月の実証授業後のレポートである。1 回目に行った際は、「暮らすのは大変なところだと思った」と書いていた。しかし、11 月には、とても大変だと思った子どもが、「これから手入れなど手伝いたい」といったことを書いていくようになる。子どもは凄いなと思ったのがこれである。レポートには、「1　つの意見に多くの課題が出て来て面白い」と書いてあった。解決していくこともあるが、課題が多く出てくることを面白がっている子も出てきた。また他の子は、「手入れのことなどまた考えることが増えたので、よかった」と書いた。このようなことを書く実態はなかったと、先生は喜んでいた。学習が始まる前の 5 月と概ね終了した 1 月の子どもたちに行った事前事後のアンケート調査において、実際の数値的な変化を見ることもした。
５月に事前アンケートを実施した。１から５の選択肢を選べ、５を選ぶと１番よく、１は自己評価が低い。この時の平均は３であるから、自己肯定感が低い学年だとわかると思う。事後のアンケート結果を見ると、有意さがあるかわからないが、すべての項目が上がっていて、担任の先生と喜んだ。今も難しい状況にありつつも、一緒に担任は頑張った。来週の月曜に、最後の授業参観があり、親たちに 1 年間の成果を発表する。これを最後の締めくくりと予定している。最終的に先生と話していて、評価が子どもに還らなくては意味が無いという話になった。ぜひ最後の発表場面では、これまでやったことをいろいろな人から褒めてもらいたい。

担任からは、ご自身も限界集落について課題を見つけることができ、面白かったと聞いている。深く考えられ、様々な視点からの話を聞き、さらに考えるのは面白くなったとおっしゃっている。先生は採用４年目で、この学校に関わって１年目にこの取組みをされた。教員として骨太に成長されたと思う。このことこそが ESD であり、SD の課題に取り組んでみることに価値がある証だと思う。







【福井県】今井　尚子氏（学校法人嶺南学園敦賀気比高等学校　教諭）

本校では７年程前から中池見湿地で活動している。これはESD的な活動かと思ったら、ESDだったというのが正直なところである。

昨年は本学中学校の教員で、そのまま持ち上がり現在は高校１年生の担任をしている。ユネスコスクールに加盟したのが2012年10月である。それ以前の2008年頃から、中池見湿地で活動していた。活動をする中で中池見湿地がラムサール条約の登録地になり、生徒たちは自分たちが活動したおかげだ、と思い込んでいる。実際はそうでないが、活動に自信ができたのは間違いない。そこでESD大賞に応募しよう、と思い、昨年応募した。

岡山大学に行くことができ、良い経験になった。

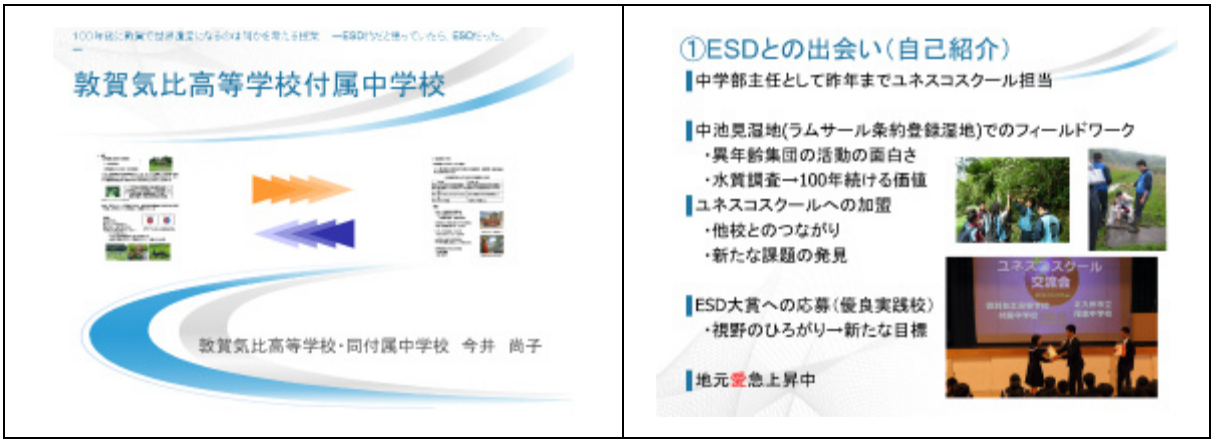
本授業では、子どもに投げかける発問を、具体的に「100 年後、敦賀はあるのか」としてみた。子どもたちと修学旅行で世界遺産を見たいと言うので、「敦賀で世界遺産になるものはあるのか」と問いかけてみたらどう答えるか面白いのではないかと考えた。そのテーマで 9 時間の授業をした。絶対に考えないことを考えることで、考えを深める作戦であった。「敦賀にあるラムサール登録湿地である中池見湿地と、もうすぐ解体される敦賀原子力発電所 1 号機のどちらが世界遺産になりそうか」という問いかけをした。

中学 1～3 年生の生徒が縦割りのグループをつくり、活動する取組を 2008 年から行っている。そこで、それぞれの班で問いかけに対して話し合いを行った。すると、「中池見湿地」と言った班が 7 つ、「原子力発電所」と言った班は 1 つであった。教員が原子力発電所のよいところを敢えて PR したこともあるが、敦賀発電所は地元にあり、両親が発電所で働いている生徒も多い。先ほどの発表にも「工場が悪いものではない」という話があったが、そういった思いが生徒の中にあった。

教員が、自然を守ることは当たり前だと言うと、生徒はみんなうなずき、ごみはごみ箱に入れるのは当たり前だと言うと、生徒はまたうなずいた。そこで、中池見湿地で自然を守る話から「生物多様性」をテーマにした授業に持っていった。ごみはごみ箱に入れるところから、核のごみを片付ける話しをした。無茶な方向から話をして、考えを深めたいと思った。そういったことを授業で行った。

「敦賀はどう発展するのか知りたい」「敦賀のよいところを知ってもらい、有名になってほしい」と言う生徒たちがいた。しかし、実際に授業をした後のワーキンググループ会議では、「子どもたちが本気でそう言ったのか、真剣に敦賀の未来について話し合っていたのかという点に疑問が残る」と先生方から指摘があった。後日談ではあるが、国語を担当しており、先日「世代間倫理としての環境倫理学」という評論を子どもたちと読んでいた。これを読んだ時に、「あ、ESD だ」とある生徒が言った。その時は本気ではなかったかもしれないが、ESD 授業を受けたことで、何かしら子どもに根付いていたのだと思った。

最後に 1 つだけ伝えたい。教員は歩きながら考えることが大事だと思う。持続するということは、一方では変わらないが、一方では変わることである。今回の授業で私はそのことを学んだ。私は中池見湿地での活動を続けてきた。またそれだけの価値ある場所であるとも思っているが、敦賀には気比の松原という有名な松原があり、縦割りのグループでその松葉を拾いに行く、と言う若い先生も出てきた。教員の中にもそのような動きが生まれてきていることが、持続発展することに繋がると考えている。

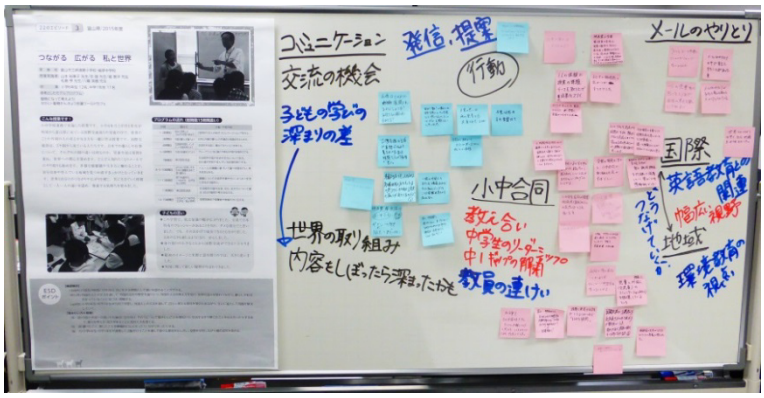


（3）「ESD 授業づくり」学びあいワークショップ

実践した ESD 授業の報告に基づき、ESD の大切さを伝えあい、ESD 授業の「つくりかた」を学びあう場をつくった。７県のテーブルに分かれ、県毎にポスターセッションを行った。参加者が書いた付箋を貼り、質疑応答、意見交換を行った。ピンクの付箋に共感、ブルーの付箋に提案、意見等を書いた。以下に、付箋を一部抜粋して内容を示す。

①富山県

[共感]



● 第 1 回目の交流で児童の疑問を鋭く見つけ出し教材として持って行った流れがすばらしいですね。いろんな考え意見があるそこから思考を深めていく ESD の取組がよくわかりました

●ESD 教育の手段として国際交流を思いついたところがすばらしい。違いを理解する事が ESD のベースにあると思う

●学校の特色を活かし、小中合同で取り組んだ点がすばらしい

●先生方のサポートを得て子どもたちが自ら既成概念を打破して成長していく姿がとても感動的でした

●国際交流と言う視点から交流員の方とのつながりが持てたという点。本だけでなく実際に話を聞いて調べられている点

[提案、意見]

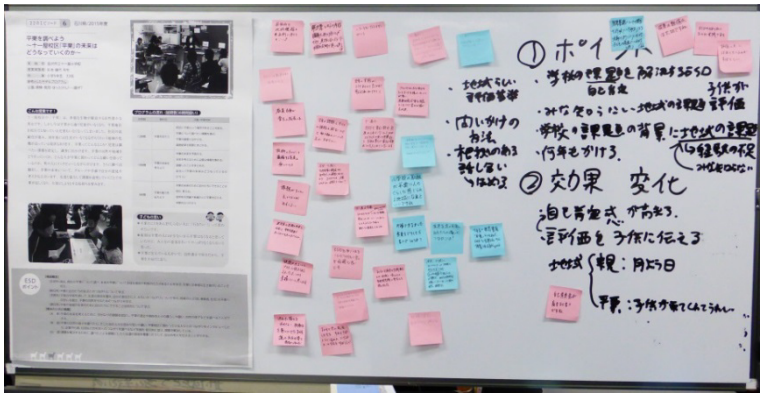
●外国の方でも人それぞれ多様な考え方を持っていると思うので、そのあたり意見の偏りがでてくるのでは？

●一般の外国人をまきこむ場面であればもっとチャレンジングなことも体験できたかもしれない

●交流をして学習発表会が ENDGOAL になるのは子どもにとって消化不良では？

②石川県

[共感]



●根拠にもとづいて議論する態度を身に付けている

●過疎地をテーマにしたのは社会的な課題に取り組みやすい。地域の SD、ESD は地元と先生の成長につながる

●コミュニケーション力を伸ばすというテーマを持っていたことがよい。過疎地域全体を対象としたことで学びの幅が広がった

●児童の意識の変容を分析して、学習内容が考えられている点がすばらしい

●学年の課題と ESD の課題を結びつけて取り組んでいった点がすばらしい

[提案、意見]

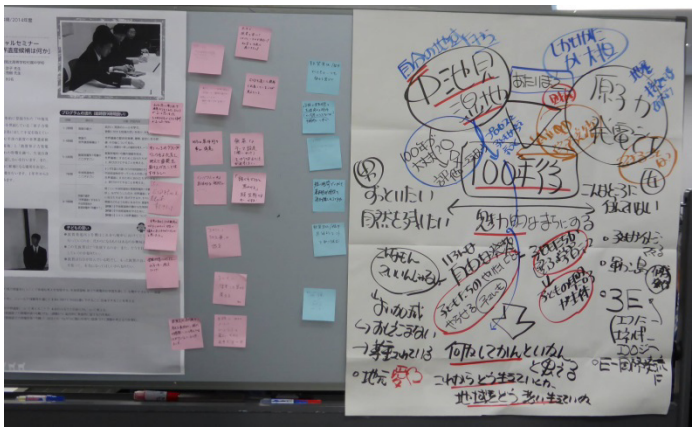
●一般教科におけるコミュニケーション能力の育成は、総合的な学習の深化につながる。評価をどのようにするか

●限界集落についての提言を行政にしてみたりする活動でまちづくりにおける子どもの参画につながると思う

●限界集落の平栗と自分たちの町とのつながりは

③福井県

[共感]



●体験して課題を見つけるのが ESD の第 1 歩

●先生が授業を楽しんでしかけているのが面白い。その姿を生徒は感じましたよ

●無茶なテーマ設定（問いかけ）をやり切るところがおもしろい

●身近な事柄から現代の課題について考えさせるしかけになっていると思いました

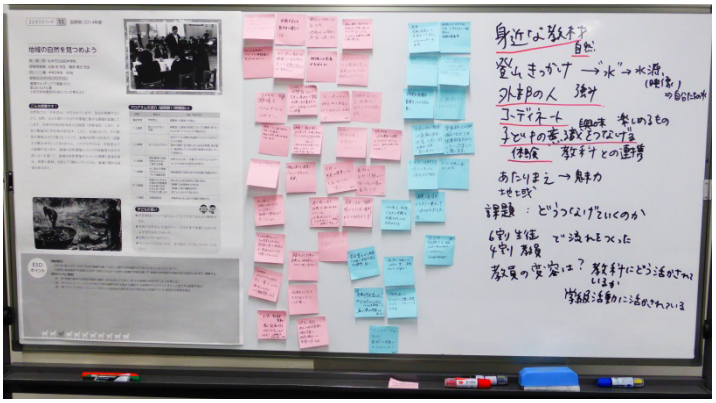
●学校の地方のメリット、デメリットを考えて、それを逆手で生かす

[提案、意見]

●短い時間でいかに基本的な情報を得るかが難しそうですね

●実践を地域や全国に広げたい
●本気にさせるのは体験、実践の話し合いのどれなのか

④長野県
[共感]



●場所によって違う自然があることに着目し、地元の自然を見つめなおすことがよかった
●地元の自然に目を向けて、子どもたちの意識に働きかけたところがよいと思った。子どもたちの主体的な姿勢を強く感じた
●学校登山をESDとして教材化したことは長野県全体のモデルとなる。「水」学習に盛んな地元に目が向いた
●単発だった行事が連続した物語になりつつある点がよい
●登山をきっかけとして、「水」を題材にしたこと。「森林」など広がりのある教材化ができている
[意見、提案]
●学年間の経験の蓄積をしていけるとよい
●学校の他の授業との連携もあればよいと思います
●活動を貫く課題などが必要か

⑤岐阜県
[共感]

●青山中の人との「つながり」を重点にしたことは重要。協力して地域に向けた活動するのも大切
●3年間のESD学習体系を決めてからスタートしている点が良い。目標がはっきりしている
●気づきから自ら行動を起こすことができたのはESDそのものと思う。
●1つ1つの学習に生徒たちの学びが地球(自然)とつながっていることがわかりました。そこが学びの意欲につながっているんでしょうね
●話し合いが活発になされ、それぞれの意見の良さに気付いていくのがすばらしい。
[提案、意見]
●世界のゴミ問題について他国のユネスコスクールとの連携での活動をしてみるともっとESDの幅がでてきそう
●ゴミから省エネ、低炭素、地球温暖化といった関連について言及してはどうか
●アクションした結果を次にどう活かすのか。PDCAサイクルとして生徒たちに考えさせられるとより主体的になると

思います

⑥愛知県

[共感]

●ある意味負の遺産が放置されたビオトープをプラスの教材に活かしていくのはいいね！

●子どもたちが身近な自然を通していろんな気づきや学びが起こったことがわかりました。学びが与えられるのではなくつかみをとった学びなんだなと感じました

●学校の資源を活用し地域の人の力を借りて学習をすすめたことが良かった

●「メダカを飼う」地域にメダカがいないところから、学びがはじまりビオトープの再生を行う。「外部講師」に専門的な部分をお願いするなど地域を巻き込んだ学びが成立している

●ESD カレンダーをつくって活動を体系化して進めていったのがすばらしい

［提案、意見］

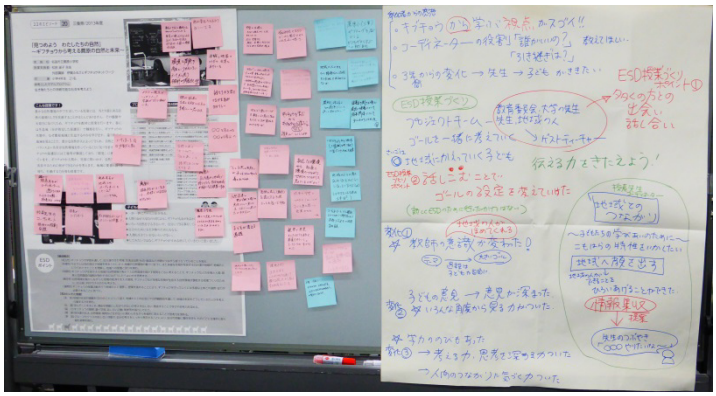
●他の生物とのバランスも一緒に考えられると良いのでは？板山の自然につながるとおもいます

●駆除される生き物はなぜ駆除されるのかの疑問は出た？

●ビオトープの再生後板山の自然への展開は？ビオトープを作るのが目的？

⑦三重県

[共感]



●学習の目標を ESD の視点から捉え直したこと。同じ学習でも視点、目標を考えることで子どもの思考が深まった

●身近な環境から社会と環境のつながり、世代の繋がりを考えているのがよい

●校長先生がコーディネート役になるのは地域連携としても理想的

●生徒が「～したい」と思えるゴールの姿、学習の流れが工夫されていてすばらしい。他の教科との関連を工夫することで、負担感の少ない取組になっている（やろうとすればするほど、教師の負担が大きくなっています）

●自然保護と親が働く工場との関係について考えた点、SD について考えた点はすばらしい

[提案、意見]

●地域の人の力をもつと、積極的に活用する余地もあるのではないか

●コーディネーターをどう確保していくのか（専門性など）外部コーディネーターの活用。学内育成

（４）総括　松本　謙一氏（富山大学人間発達科学部　教授）

もうお昼を過ぎて１時なのに、誰も「お腹が空いたから、早く終わろう」とは言わなかった。これは何を意味しているのか。今日の事業の報告、７人の先生の発表がいずれも素敵だったということである。活き活きと語られる先生の姿を見ると、どれだけ真剣に子どもたちと一緒に取組みをしてきたかが伺える。実践者は気づいていないかもしれないが、こんな地域を活かして、こんな人材を活かして、こんなことをしようとわくわく考えながら、子どもと相撲を取ってきたのであろう。そういった先生の姿は冊子を見てもわからない、今日の発表を聞いてとても多くを学べたのではないかと思う。

こんな先生が増えたらよい。後のセッションは ESD について話す。参加いただいているみなさんは、それぞれ多様な立場におられ、また様々な地域から来られている。第１回のワークショップ（北陸でのワークショップ）の形から変えて、参加者の皆さんがグループを選ぶようにした。発表の中でも、子どもが選ぶという話があったが、今日の参加者も議論するグループを選んでいただいた。話したくてしかたがない人がたくさんいらっしゃる。違った立場からの熱い意見が出ていたが、その裏側にあるものはみんな共通していると思う。学校も地域の人も、みんな同じことを願っているのを感じられたのではないか。時間が足らず、まだ言い足りないことが多くあると思う。思ったことはすべて言っていただき、当たり前を当たり前だと思わずに、今日のワークショップがもっと新しいものに踏み出していけるきっかけになるとよい。

2．第 2 回「子どもの学びを学校と地域が一緒につくる」ワークショップ

（1）開催概要

日　時：平成 28 年 2 月 18 日(木)14:00～16:30（150 分）

場　所：愛知県産業労働センターウィンクあいち 1003 号室（愛知県名古屋市）

参加者：52 名（教員 10 名　自治体職員 9 名　 地域団体/NPO18 名　地方事務所 3 名　他 12 名）

［**プログラムスケジュール**］

時間	プログラム	内容
14:00~ 14:30	ESD 授業づくり報告 「地域の課題を教材にする」 【富山県】堀　泰洋氏 （富山市立神通碧小学校　教務主任） 【石川県】池端　弘久氏 （金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課 キゴ山少年自然の家　館長/前校長） 【福井県】今井　尚子氏 （学校法人嶺南学園敦賀気比高等学校　教諭）	コーディネーター：EPO 中部 ●自己紹介、授業内容の紹介 【質問】 ●地域の課題を教材にした授業の魅力は？ ●地域を教材にすることでの子どもの変化、教員の変化、地域の変化について
14:30~ 15:05	プレゼンテーション 「学校と地域が一緒につくった ESD 授業」 【富山県】水上　庄子氏（富山ユネスコ協会　副会長） 【石川県】青海　万里子氏（金沢エコライフくらぶ　代表） 【福井県】吉川　守秋氏 （NPO 法人エコプランふくい事務局長） 【長野県】渡辺　隆一氏(NPO 法人みどりの市民理事) 【岐阜県】小林　由紀子氏 （NPO 法人 e-plus 生涯学習研究所　代表理事） 【愛知県】大鹿　聖公氏 （愛知教育大学自然科学系理科教育講座　教授） 【三重県】寺田　卓二氏 (環境教育ネクストステップ研究会　代表)	コーディネーター：新海洋子氏 （環境省中部環境パートナーシップオフィス/長野北陸コーディネーター）
15:05~ 16:20	「学校と地域が連携した授業づくり、学校づくり、地域づくり」 ワークショップ	コーディネーター/ファシリテーター ：NPO 法人ボランタリーネイバーズスタッフ、対話計画スタッフ、EPO 中部スタッフ、富山大学学生等 ●地域の課題を教材にした授業づくりのノウハウ！
16:20~ 16:30	総括 閉会	鈴木　克徳氏（金沢大学教授） 大鹿　聖公氏(愛知教育大学教授) 新海　洋子氏（環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー） 村辻　裕樹氏（環境省中部地方環境事務所　環境対策課環境管理専門官）

(2)プログラム内容

①第 1 回[ESD 授業のつくりかた]ワークショップの振り返り

第 1 回では、平成 25 年度から 3 年間実施した ESD の環境教育プログラム実証事業に関わってきた中部 7 県の先生に ESD による授業づくりを報告いただいた。その後、参加者と先生でワークショップを行い、ESD 授業づくりのポイントを議論した。

②趣旨説明

長野東海コーディネーター：環境省中部環境パートナーシップオフィス　チーフプロデューサー　新海　洋子氏

学校が取り上げる授業の題材として、地域の SD(持続可能性、持続可能な社会)課題を取り上げることが重要である。この 3 年間、地域の SD、課題、文化、豊かさを子どもたちに伝えていく ESD の授業づくりを大切にしてきた。学校と地域がコラボレーションすると、より豊かな授業ができる、ことが 3 年間で実証された。

第 2 回ワークショップでは、グループワークを通して今後学校で地域でより豊かな ESD 授業を子どもたちと作り出すためには何をどうすればよいか、そのために何が必要かについて参加者の皆さんと議論をしたい。

北陸、富山、石川、福井から来ていただいた先生方に、なぜ地域の課題を材にして授業をつくり、どのような授業を実施したのか、インタビュー形式でお話ししていただく。また学校の授業づくりに何らかの形で関わっている本事業の各県ワーキングメンバーの方から、フリップを使って学校への関わり方について報告していただく。その後に、みなさんの意見や提案を共有するワークショップをしたい。主役はみなさんである。

③インタビュー「地域の課題を教材にする」

北陸で地域の課題や資源を教材に ESD 授業づくり、実践をされ報告者に、地域を教材にすることでの子どもや教員の変化、地域を教材にすることの難しさと課題、工夫の仕方などについてインタビュー形式でヒアリングをした。

■出演者

【富山県】堀　泰洋氏（富山市立神通碧小学校　教務主任）

【石川県】池端　弘久氏（金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家　館長/前校長）

【福井県】今井　尚子氏（学校法人嶺南学園敦賀気比高等学校　教諭）

インタビュア：新海洋子氏（環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー）

［インタビュー内容］※敬称略

新海：堀先生は国際交流員と一緒に授業を作り上げたと報告を受けたが、もし国際交流員の方と出会っていなかったら、どのような授業をしていたのか。

堀　：授業のねらいは、コミュニケーションの中での子どもたちの変容であった。そこで国際交流員を選んだ。もし国際交流員がいなければ、地域にいる外国の人を活用したと思う。

新海：インターネットだけの情報でなく、実際に外国の人に会う体験を材にした。外国の人が子どもたちに接する

ことは授業の中で難しくはなかったか。

堀　：子どもの働きかけにどのように返してくださるかは事前に打合せしているが、相手が人なので、どう出るかはわからないという難しさはあった。

新海：初めての方と授業を 1 年の中でつくっていくことは難しいと思うが、工夫したことはあるのか。

堀　：国際交流員をコーディネートする国際交流課のスタッフと綿密に打合せをした。授業の目的と方向性、子どもたちに育みたい力がコミュニケーション力であることなどの話をすると相談にまでのってくれた。

新海：地域課題を扱う授業は、教員や学校のいつも以上のエネルギーが必要だと思うが、学校でのサポート体制等はあるのか。

堀　：今回国際交流で ESD の授業をするのは教員全員が初めてだった。しかし、子どもたちが大きく変容したことに非常に驚かされた。授業に取り組んでみてよかったと感じている。実践の中で紹介した子どもの例にあるように、この交流で学んだことを今後に活かすという発想を持った子どもが出てきた。

新海：3 年間実施した石川県のすべての授業で地域の教材を扱っていた（1 年目　伝統食、2 年目　三馬公民館での伏見川の授業、3 年目　平栗という里山の地域）。地域の SD を教員が取り上げる意義と価値を話していただきたい。

池端：これから一緒にしていく ESD の授業は、学校の持つ課題を解決できなければ意味が無い。まず学校の持つ課題、学級の持つ課題を話し合い、その課題を解決する上で、ESD はこのような力を持っているという話になる。学校での問題や課題は、概ねその地域が持っている課題が背景にある場合がとても多い。地域と先生が一緒に地域の課題に取り組むことで、実は学校に現れている諸課題の大元に取り組むことになる。そこに地域の課題に取り組む価値がある。

新海：学校では、既にふるさと学習などの地域学習をしている。ESD との違いを質問されることもある。出前講座や教材があっても、教育課程や年間カリキュラムに入らず、継続的にできないという課題もある。ふるさと学習、地域学習に ESD の視点を入れると、何がどう変わるのか。

池端：子どもが地域の SD の課題に遭遇して、自分なりの意見表明をしていくことになった時に初めて、子どもは当事者意識を持ち、改めて地域に生きている利害関係者の 1 人だということに気づく。これまで教員の意図に沿うように意見を述べていた子どもが、考え込んだり、簡単に意見が言えなくなったりする。その経験によって、本当の意味で子どもが地域を知るようになり、当事者意識に繋がっていく。そこに、ESD と通常のふるさと学習の大きな違いがあると考えている。

新海：今井先生の授業は、中学校での実践であった。中学生になると、地域の良い面も悪い面も鋭く見る。「こんな田舎だから、早く都会に出たい」という子どももいると聞いた。一方で、自分が育った地域にはこだわりがあるとも思う。中学校の授業で、地域を課題にしていく際に、また実施した授業は今後どのような発展の可能性があるのか。

今井：田舎の地域だが、祖父母と暮らしていない家庭が多い。中池見湿地の観察では、学芸員の方に協力いただくが、その人たちは本気になって叱ってくれる。時には厳しく、時には優しくしてもらうことで、子どもたちはここが自分の町だ、と思う気持ちが強くなる。住んでいる人との関係性が深まっていく時に、子どもたちや地域の人の喜びがある。

池端：十一屋小学校には、校区の一部であるのに、子どもがいないために忘れ去られていた「平栗」という地域がある。子どもたちがその地域を 2 回訪れて、地域の人にインタビューをし、また植物の先生から森について教えても

らう。地域の人は「私たちは忘れられていなかった」と感激していた。三馬小学校の授業では、公民館の人から昔大きな洪水に何回も見舞われたことを聞いた。単純に川をきれいにするとなりがちな環境学習だったが、地域と環境の問題に葛藤が生じた。公民館の方は次のように言っていた。地域学習を通して、子どもたちが本気で地域のことを考えてくれている。子どもたちが当事者意識を持って、地域を考えてくれること自体が嬉しい。そのような学習を続けてほしい。このような声を聞くことができた。

新海：一方で学校の実態として、子どもが地域に出かけたり、地域の人に学校に来ていただいたり、カリキュラムの中に組み込んで地域に触れる授業がなかなかできないと聞く。学校と地域は近い存在なはずだが、なぜ分断されている状況なのか。神通碧小学校のような小規模校も地域と学校の関係性はまだまだ十分ではないのか。

堀　：神通碧小学校は小規模校で、地域とのつながりは非常に強い。授業を実施して思うことは、もっと地域を活かせるということである。子どもも教員も ESD を実践して学ぶ。授業実践を通して、「このような地域との関わり方がある」「地域に関わっていくとこのようなこともできる」「声をかけてくれたら、このようなこともする」といったコミュニケーションも生まれる。多様性が見えてくる感じがする。

新海：そもそも地域と一緒に何かをするといった授業づくりはされていたのか。

堀　：教員は異動があるので、初めて赴任したときは、どこから手を付けてよいか分からないという戸惑いがあった。

新海：最初 ESD に取りかかる際の多くの教員の本音は、みなさん同じようである。誰とどうつながって、何が起きるのか見えない部分があって、どういう学習効果が生まれるか理解しにくいということである。

堀　：あると思う。いろいろな方と関わってつくり上げていくと、子どもは変わっていく。その実感が ESD を進めていく意欲になる。

今井：私たちの学校は私立なので校区がなく、本校生を地域の人が誰も自分の地域の学校の子どもとは思っていなかった。活動を続けることで、地域の人たちが子どもの活動を認め、寄ってきてくださった。活動を広げる際も、地域の方に支援していただいた。地域の方は学校とつながりたいと実感することがある。

新海：池端先生は、校長先生をされていて現場の先生の現状や学校が抱える課題をよくご存知だと思う。地域と関わることで今の学校の課題は変えられる可能性があると考えておられる。地域課題を教材にした授業づくりへのエネルギーと、学校と地域をつなげるエネルギー、双方に相当のエネルギーが必要ではないか。校長先生はどのようにリーダーシップをとって進めていたのか。

池端：そこまで難しいことではないと思う。学校と地域の連携は最終的に子どものところで実はつながっている。日本の場合、子どもを健全に育成する意味ではつながっている。ただ意識改革の部分で、その連携を急激に進めることは難しい。ESD の場合、敷居を低くして、今行っていることが ESD だと入っていくと、逆に前に進まなくなる。だからといって敷居を高くすると、多忙な先生方は受け入れにくい。そこでのコーディネートは校長の仕事であり、する意味を見せていく。取り組むことで、子どもの姿が変わっていく見通しが示せなくては、誰も本気になってくれない。その出発がたった 1 回の研究授業かもしれないが、そこから少しずつゆっくりと浸透することで、本物の浸透になっていく。三馬小学校では、最初 1 人の先生個人の取り組みだったが、翌年は学校全体の取り組みになった。段階を追って、ゆっくりと確実に学校の問題を解決していく大きなツールの 1 つとして ESD があることを、意識して語っていくことが重要ではないか。

新海：地域を材にすることで、子ども、教員、学校、地域の関係性が変わっていく。みんなが地域を知り、学ぶことで、授業づくりの空間が広がっていく。と同時に、学校と地域のつながりを創りだす活動が、子どもや教員、地域の人々を育み、SD の課題の解決に向き合うようになる。3 人の方の生の言葉からそのようなことを共有することがで

きた。

④プレゼンテーション「学校と地域が一緒につくった ESD 授業」

各県のワーキングメンバーに、本事業において ESD 授業づくり、実践をするためのワーキング会議でどのような提案、アドバイスをしたのか、また地域のステークホルダーが学校と一緒に授業づくりをすると何が変わるのか、地域に何を提供することができたのか、についてフリップを使って紹介いただいた。

■発表者

【富山県】水上　庄子氏（富山ユネスコ協会　副会長）
【石川県】青海　万里子氏（金沢エコライフくらぶ　代表）
【福井県】吉川　守秋氏（NPO 法人エコプランふくい　事務局長）
【長野県】渡辺　隆一氏(NPO 法人みどりの市民　理事)
【岐阜県】小林　由紀子氏（NPO 法人 e-plus 生涯学習研究所　代表理事）
【愛知県】大鹿　聖公氏（愛知教育大学自然科学系理科教育講座　教授）
【三重県】寺田　卓二氏(環境教育ネクストステップ研究会　代表)

【富山県】水上　庄子氏（富山ユネスコ協会　副会長）

キーワード：「フェイスアンドフェイス」「書き損じハガキ回収」「ユネスコ ESD パスポート」

必ず学校へ出かけて行き、フェイスアンドフェイスで各学校と話をすることを大事にしている。富山ユネスコ協会では、書きそんじハガキを集めて、アジアの国々に寺子屋を建てる活動をしている。パンフレットや広報などを持って、実際に担当の学校を回り、説明している。その中で、出前講座を依頼され、子どもたちに寺子屋の話をすることもある。平成 16 年度から毎年実施しているので、県内では定着している。ある子どもは書きそんじハガキ回収と一緒にしていた募金に興味を持った。より募金を集めるため、校長先生の協力を得てスーパーの前での募金活動をした。地域の人からの温かい声掛けに励まされ、最終的に４、５万円集め寄付をした。また、子どもたちが地域を回り、ハガキの回収をしてくれる。地域の方も学校の書きそんじハガキ回収に協力してくれる。毎年、100 万円以上の書きそんじハガキを集めている。また実際にカンボジアに行き、寺子屋の様子を日本の子どもたちに伝える活動もしている。学校と地域とユネスコ協会との協働の活動である。

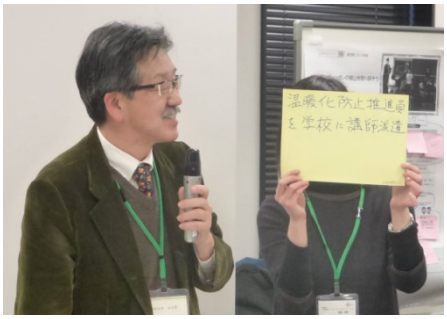
ユネスコ協会が発行している ESD パスポートは、子どもたちが学校で学んだ ESD を地域の中で体験的にさらに深めていくためのツールである。ボランティアをした子どもにボランというポイントを発行し、30 ボランが貯まると認定証を渡す。ある学校では、ESD パスポートの導入をきっかけに地域の人との関わりが深くなった。防災教育をした時も、福祉施設でボランティアした子どもは、お年寄りが無事に避難できるアイデアを考え、地域の人と防災を考える取り組みにまで発展している。地域の人たちとのつながりを大切にしていこうとする姿、地域の課題を自分のこととして考えていこうとする姿など、子どもの心身の成長を図る取り組みとして期待している。

【石川県】青海　万里子氏（金沢エコライフくらぶ　代表）
キーワード：「分野横断・可塑性のある体験的プログラム」
「先生をラクにする」

分野を横断した可塑性のある体験プログラムを考案・提供している。生涯教育として公民館、学校では PTC（先生、親、子どもたちと一緒にする授業）をする際等に声が掛かる。その都度、打合せをして、授業の中のどの場面で使うかを相談しながら授業を実施している。先生が最初から準備するのは大変なので、このプログラムによって先生がラクになったと思う。そのプログラムやツールを素材として使っていただき、授業を豊かにし、深めることができたらよい。生活協同組合や消費者支援ネットワークにも関わっており、消費者教育と防災、食の安全の分野にも徐々に活動範囲が広がっている。学校と地域がお互いを刺激し合い、いろいろなツールができてきて、場合によってそれを組み合わせて持っていくことが少しずつできている。転勤してきた先生は、その地域のことを知るには時間がかかる。地域ならではのネタは地域に住んでいるからこそわかることである。

【福井県】吉川　守秋氏（NPO 法人エコプランふくい　事務局長）
キーワード：「温暖化防止活動推進員を学校に講師派遣」

県から地球温暖化防止活動推進センターの指定を受けており、　地球温暖化防止活動推進員の講師を養成して、学校に派遣している。これまでは 1、2 単元ほどの授業しかなかったが、来年度からは、家庭とつながりを持つような温暖化学習を計画している。その中で、ESD に取り組んでいきたい。以前家庭版環境 ISO に取組んだことがあった。家庭で省エネに取り組んでもらったが、保護者からの感想には、このような取り組みを通じて、家族のコミュニケーションが深まったとあった。この取組が家族のコミュニケーションのツールの 1 つになっていける可能性があるとわかった。昨年 12 月に気候変動枠組条約第 21 回締約国会議（COP21）でパリ協定が締結されたが、日本では温暖化防止活動がマンネリ化していると言われている。来年度学校で取組を進める中で、子どもたちの家族を通じた話の中から、このマンネリ化を打破したいと思っている。



【長野】渡辺　隆一氏(NPO 法人みどりの市民　理事)
キーワード：「こどもエコクラブ」「小学生・中高生・大学生」「地域や学校の特性」「ESD へのキックオフ」

長野は環境活動団体が多くあり、環境活動は盛んだが、全国的に見ると下火である。子どもたちに関わろうといろいろなパンフレットをつくり、配布した。学校に対して環境教育の授業に活用できる人材を告知する活動もしたが、基本的に多忙な学校からは要望がなく、学校全体で取り組むことができていない。長野市のこどもエコクラブは一時期 52 団体ほどあり、活動がかなり盛んだった。しかし、小学生が中心の活動のため、中学、高校では活動に関わる機会がなくなる。そのため学校とは別に、中高大学生を混ぜた形の環境活動グループ「国際

ユース環境会議」をつくって活動している。

本事業で、3 年間学校に関わってきた。松本市の源池小学校では、総合学習の時間に全学年が取組んだことを発表している。1 年生は上級生からプレゼンテーションを学び、上手くなっていく。会田中学校は、ただ山に行くだけで終わっている学校登山を、外部の力を使って教材にして結びつけた。今年の附属小学校では動物を飼うことで、先生と子どもたちが一緒に取り組み、先生も成長する。そういった教育の根幹に関わるような授業がなされている。学校ごとに特色があるが、なぜ学校はお互いのよい実践が相互に結びついていかないのかと思っている。しかし、まだまだ ESD が持つ教育を変える力に気づいていなかったり、面倒だったりすることもある。今年は、初めて長野市の教育委員会や環境保全協会を巻き込んで、企業、行政、NPO が一緒になった ESD のキックオフの大会を行うことができた。

【岐阜】小林　由紀子氏（NPO 法人 e-plus 生涯学習研究所　代表理事）
キーワード：「環境学習でつながり」「ESD でゆさぶり」

環境教育に取り組む中で、省エネと水をテーマにした活動を中心に行っている。岐阜県には環境学習推進員というコーディネーター制度がある。学校に地域と行政と専門家が集まって学習を支えている。先生からの要望を聞き、コーディネーターが授業をサポートしていく。この制度を使って、3 年間学校に関わり ESD に取り組んできた。先生はコーディネーターが入ることにより授業に見通しがつくので、とても安心されている。

最初に学校に行く時に、1 年間のプログラムと実施できる活動の見本を示している。それを元に先生と考えた学習活動を支える行政や団体に支援をお願いすることも役割である。子どもの学習は、「知識×経験」だと考えている。インターネットの学習、学校での学習と実際の体験活動も入れる。知識を得て体験をして、自分の考えを発表する時に子どもは変わっていく。時には発表方法の提案もしている。元々学校で行っていた環境学習があるのでそれを ESD の視点で環境のつながりを考えて組み立てていく。正木小学校の授業では、EPO 中部から自分にはない感覚のアドバイスをいただき私も揺さぶられた。学校も 6 年続けていた学習が ESD の視点が入ったことで、プログラムを揺さぶられてよい変化をしたと思う。ESD は今までの学習の変化のきっかけであり、指導者の気持ちへの揺さぶりではないかと考えている。

【愛知】大鹿　聖公氏（愛知教育大学自然科学系理科教育講座　教授）
キーワード：「体験」「人」

ESD を含めて、現在の先生は体験が少ない。特に今は若い先生が多く、とにかく経験、体験が少ない。やったことがないことは絶対しない。そこで、とにかくやらせる、体験させていく。体験すれば、初めてわかることもあり、できることもある。私は博学連携に取り組んでいる。動物園や水族館で学ぶことは多い。ゼミでは福井県鯖江市に行くが、自分たちの地域との違いに気づく。その違いを見て、改めて自分の地域を知ることが大事である。愛知県の子どもは愛知県のことしか知らない傾向が強く、それが日本の全てだと思っている。違いに気づかなくては、地元の良さはわからない。その時には人とのつながりが重要である。経験をして人とつながると、興味や関心が湧く。それは子どもたちにこのような授業をしよう、このようなことを知らな

いからやってみようという探究の力になる。ある時には、自分自身に力が足りないから、人に聞き、いろいろな人と助け合うようになる。そのつながりによってよりよい授業ができ、最終的には ESD になっていくのではないかと考えている。

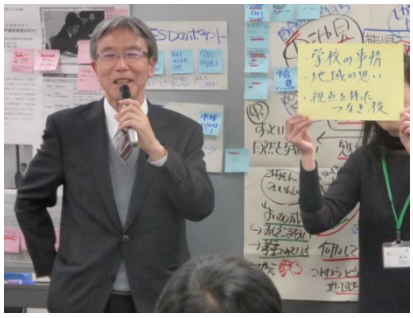
【三重】寺田　卓二氏(環境教育ネクストステップ研究会　代表)
キーワード：「学校の事情」「地域の思い」「視点を持ったつなぎ役」

私たちの会は、里山や川の活動、エネルギー環境教育などをしていた人が集まってＳＤ、ESD を推進しようと作った団体で、学校に入って子どもたちに伝えていきたいという思いがある。一方で、私は高校の教員だったので、学校の多忙な事情もわかる。ESD という視点を持って、学校と地域を効果的につなぎたいと思っている。

薦原小学校では、学校と地域の元からのつながりに ESD の視点が入ったことで、先生に、これでよいという自信が育まれ学校全体に定着した。地域の人も、自分たちの思いがしっかりと学校や子どもたちに伝わっていると感じている。

津田学園小学校では、ワーキング会議で ESD の多様な視点が示され、若い先生が途中で潰れそうになった。川の学習をしたが、魚を水槽に入れて飼育していたところ、共食いなどでほとんど死んでしまった。しかし、なぜ川では生きているのに、水槽に入れると死んでしまうのかと考え始めることで、その事件を教材にして乗り切った。今年度は違う教員が引き継いで活動しているそうである。

中部中学校では、中学 3 年生がこれまでに学んだ振り返りとして ESD カレンダーを作り、自分が受けてきた学習がどうつながっているかを考えることから始まった。生徒から最も記憶に残っている言葉として出た「リサイクル」について授業を実施した。地域の企業の方に出前講座にきていただき、講演や実験をしていただいた。その直後、ほとんどの生徒はリサイクルが必要だと考えるが、先生は本当にリサイクルが持続可能な社会づくりによいことかと問いかけ調べ学習をさせた。すると、リサイクルに課題があることを発見し反対する生徒も出てきた。最後の公開授業は、賛成派と反対派、中間派で意見を述べ合い考えの変わった生徒もいた。最終的に、多面的な見方が必要なことを学び、次につなげていくというオープンエンドで終わる授業になった。



地域の人は伝えたい思いがあり、うまく授業の中に入ってもらうと効果的であり、子どもの学びが変わる。すると、必ず学校の先生は感じ方が変わっていく。いかに先生の負担感がない形で ESD の視点を取り入れてもらえるかが、これからの普及、定着の鍵である。

（3）ワークショップ「学校と地域が連携した授業づくり、学校づくり、地域づくり」

教員、地域で活動している人、自治体職員、大学の教員によるグループを各県 7 県分 7 グループつくり、ESD 授業づくりを推進するために、学校側は、学校の仕組みやルール、学校で行われている ESD や環境教育に関する情報の提供、地域側、提供できる学習材の紹介や実施している授業内容など情報を持ち寄り、学校と地域の連携による授業づくりの可能性を探る。その際に、ESD 授業づくりや実践を阻む阻害要因、課題等についても意見を交わし、共有する。今日の成果として、各グループ３つ以上の「もちかえりポイント」を抽出し、今後の ESD を推進する際の重要ポイントと共有し、各自現場で活用することにしたい。

①各グループ発表

１グループ３分程度で、グループでの議論を報告いただく。３つの「もちかえりポイント」とさらにその根拠の説明を併せての発表にしたい。

【１グループ】

①地域と学校をつなぐコーディネーターが必要

②フェイス・トゥ・フェイスのつながり

③提携をつくる仕組み

そもそも地域はどのようなものかを考えた。町内会、校区などが地域での１つの機能である。学校の総合学習などを取り組む中で、ESD は非常に有効的である。ただ実際の現場の先生からは、負担が大きすぎると言われる。企業の方から講座の紹介があれば、学校のカリキュラムに合うものをその中から取捨選択して活用できる。それがない場合には、地域と学校をつなぐコーディネーターが必要になる。またユネスコ協会の ESD パスポートといったものも授業の中で活かせるので、連携して使っていく。福祉を学ぶ時に、地域の障がい児施設やデイサービスなどと学校の先生がつながっていれば、連携が可能である。その時に大事なのは、フェイス・トゥ・フェイスのつながりである。その提携をつくる仕組みができてくると、より ESD が進むのではないか。

【２グループ】

①立場の違いを認めて、尊重すること

②うっとうしいを乗り越えて一緒に考えること

③地域に根ざした柔軟なコーディネート

１点目は「立場の違いを認めて、尊重すること」である。学校は教育手段として、ESD や地域課題に取組みたいと思っている。一方、地域は学校に自分たちの課題解決の協力をしてほしい。その立場の違いが若干ある。また行政の支援は必ずしも ESD を進めるものでなく、別の目的のため事業をつくっている。それぞれを利用するわけだが、この時に互いに違う目的で利用していることを、互いに認識した上で、立場を尊重していくことがうまく連携するポイントではないか。２点目は「うっとうしいを乗り越えて一緒に考えること」である。外部講師に内容を一任してしまうことがあるが、子どもたちに身につく授業内容にするには、先生と講師が一緒に考えることが必要である。３点目に、「地域に根ざした柔軟なコーディネート」である。最初に考えたものと必ず沿わない内容が出てきて、課題が発生した時に、それに柔軟に対応できるような地域の支援体制が必要である。実際に活動してくださる方をつなぐような中間支援 NPO があるとよい、という意見が出た。

【３グループ】

①学校だけで解決不能な課題を解決するツールとしての ESD

②どんな子どもを育てたいか（姿）を学校・地域で共有

③学校の子どもが課題意識を持てることを保証する

学校だけで解決不能な課題を解決するツールとして、ESD が活用できる。育てたい子どもの姿に対して、地元

の知恵など学校では付けられない力がある。その時に外部の力も入れ、ESD を活用することができる。まず育てたい子どもの姿を学校と地域で共有していく。ただ小規模校だと人間関係が固定化してしまい、その関係を打ち壊してまで発言することは難しい。課題を地域の人が知らないと、地域の人も何を提案してよいかわからず、提案してもズレてしまう。その課題を共有する場があったり、コーディネートしたりすることが必要である。また地域に出る時に、学校の子どもが課題意識を持てることを保証する。ESD の活動や授業だと、オープンエンドになるもの、答えがないものが多い。実際、子どもが出ていって考えた時に、そこに課題がしっかりとあることを保証する。出かけたが、課題がなかったり、非常に薄かったりすると、なかなかそれが成果や育ちとして出づらい。地域の方と関連してプロジェクトをやっていく時には、名古屋市には環境サポーター制度などがあり、行政が環境に取り組む方を紹介してくれ、ある程度保証する仕組みがある。そのような行政の制度的なサポートも必要ではないかと考えている。

【４グループ】

①環境企業の見学

②地域のお年寄りが校長や教頭に会い、井戸端会議ができる程度に仲良くなる

③地域のお年寄りの ESD の話を聞く機会を学校につくる

議論の中で以下の意見があった。校長先生と親しくなったほうがよい。地域は授業内容を把握してないので、学校が何をしているかわからない。先生は学力がつけられることに一生懸命であるから、それは認めていく。地域の人から経験を教えてもらう。私は企業での経験は豊富で、現場経験もあり、ノウハウを持っている。そこで、環境企業を見学してはどうか。私たちは先生が持っていない新しいアイデア、プログラムなどを持っている。まずは地域のお年寄りが校長や教頭に会いに行き、井戸端会議ができる程度に仲良くなる。その中から、環境の ESD を小出しにする。先生を捕まえて、学校のカリキュラムに入れてもらう。地域のお年寄りの ESD の話を聞いてもらう機会を学校の中につくってもらう。地道にこれらをやっていくしかない。

【５グループ】

①相互理解

②人脈、コーディネートの重要性

③地域にある公民館、子ども会、青少年団体が学校との関わり

持ち帰るポイントを 3 つ挙げたい。1 つ目に相互理解である。話し合いの中で、学校の当たり前と地域の当たり前は一緒ではないのかという意見があった。地域の方以上に、先生は安全面で大変心配されていることがある。また授業の時間数が多く取れないのにも関わらず、地域の方は多くの教材を持ってくることもある。その中で、地域の方と先生がお互い理解し合ってつくっていくことが大切である。２つ目に、人脈、コーディネートの重要性がある。学校のニーズとマッチングをさせるためには、コーディネートが必要であり、そこにはいろいろな人がいたほうがよい。

地域のコーディネーター、専門家のコーディネーター、学校のコーディネーターという方がみんなでコーディネートしていくことが重要である。３つ目は、地域と学校がつながっていくには、地域にある公民館、子ども会、青少年団体が学校との関わりを持たなくてはいけない。それをどう使うかは政策に依存するが、公民館は特に大きな要素なので、そこにお金などを投入して、学校とのつながりを持っていくべきである。

【６グループ】
①相互作用
②カリキュラム
③ネットワーク

「相互作用」「カリキュラム」「ネットワーク」の ３ 点が挙げられた。相互作用は学校の先生と地域の人たちの信頼関係をどうつくっていくか、である。先生からすると、地域からのアプローチは多くあるが、その調整が難しく、そもそも地域の人が提案してくれることが年間のカリキュラムに合わないこともある。また地域の人がどのような人か分からない。地域の方からすると、子どものレベルに合わせてどのようなことを教えたらよいか分からない、学校からのアプローチがないため行きづらい、といった意見があった。教科カレンダーや学校のカリキュラムを知っていると学校に受け入れられやすい。そのためには、教科カレンダー、カリキュラムについて話を聞ける先生を探して、教えてくれるように頼むしかない。その人を探すためにはネットワークが大事である。また外部の先生を呼ぶ際は、呼んで終わりにならないように授業前後の打合せをしっかりする。最終的に、大きな規模の学校でできるようになったら、取り組みが本物になったと言えるのではないか。

【７グループ】
①学校からのアプローチの方針（地域で密着している人か、地域で活動している人か）
②コーディネーターとなる人が必要
③教員同士の温度差を解消する（授業や専門性のつながり）

学校側が地域と連携する時には、学校側がその授業でどんな人たちとつながっていきたいのか、どのような人たちに協力を仰ぎたいのか、学校側の求める地域の方々がどこに当てはまるか、といった学校からのアプローチの方針を明確にする必要がある。また専門家や地域の人と学校をつなぐ人、コーディネーターとなる人が必要である。そのコーディネーターは校長や教員自身、NPO などの団体の方である。その人たちが、学校側に地域で活動している人の情報を提供する。学校側からの思いを地域の人に伝えてくださるコーディネーターも必要である。また教員自身も今日みたいな場に赴き、専門家の人とつながり、自分たちがコーディネーターになっていく。教員同士の温度差を解消するべきという意見もある。特に中学校などでは、理科や社会が専門の先生だと、積極的にしてもらえるが、英語、数学の先生は自分の専門性とのつながりを見出しづらく、活動に消極的になってしまうのではないか。そういった先生の授業でどう活かしていけるのか、というつながり、必要性を見出していくことが大切だ、という意見が出た。

［まとめ］
新海　洋子氏（環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー/長野東海コーディネーター）

コーディネーターの必要性はずいぶん前から言われているが、十分にコーディネーターが育成、活用される仕組みがない現状がある。今後どのように打破していくか。発表にもあったが、「相互理解」といった関係性がまだまだ薄いと感じている。関係性の育みを本事業の成果を活かして丁寧にフォローしたい。また、そのフォローが本事業に関わったみなさんとできる仕組みを考えたい。議論で出てきた 21 のポイントはまとめてお伝えする。年 2 回程度、このような学び合いの場を、小さい単位で実施することも検討したい。

[全グループから出された 21 のもちかえりポイント]

①地域と学校をつなぐコーディネーターが必要
②フェイス・トゥ・フェイスのつながり
③提携をつくる仕組み
④立場の違いを認めて、尊重すること
⑤うっとうしいを乗り越えて一緒に考えること
⑥地域に根ざした柔軟なコーディネート
⑦学校だけで解決不能な課題を解決するツールとしての ESD
⑧どんな子どもを育てたいか（姿）を学校・地域で共有
⑨学校の子どもが課題意識を持てることを保証する
⑩環境企業の見学
⑪地域のお年寄りが校長や教頭に会い、井戸端会議ができる程度に仲良くなる
⑫地域のお年寄りの ESD の話を聞く機会を学校につくる
⑬相互理解
⑭人脈、コーディネートの重要性
⑮地域にある公民館、子ども会、青少年団体が学校との関わり
⑯相互作用
⑰カリキュラム
⑱ネットワーク
⑲学校からのアプローチの方針（地域で密着している人か、地域で活動している人か）
⑳コーディネーターとなる人が必要
㉑教員同士の温度差を解消する（授業や専門性のつながり）

（4）総括

■鈴木　克徳氏（金沢大学環境保全センターセンター長・教授/北陸コーディネーター）

3 年間行われた本事業全体についてコメントしたい。3 年間で北陸 3 地域の 9 校に関わってきた。7 県で実に膨大な成果物がまとまっている。しかし、そのノウハウや成果の一部を冊子にまとめたからといって、それだけで ESD に関わる皆さんに共有されるわけではない。冊子は、蓄積されたノウハウや経験のほんの一部にすぎない。この膨大な蓄積をどのような形で今後皆が利用できるようにしていくか、が大きな課題である。プロジェクトは終わった後が大切である。ぜひ EPO 中部や中部地方環境事務所に、その活用方策を考えていただきたい。個人的には、この 3 年間の事業で仲間になった人たちが集えるようなネットワークが特に大切ではないかと考えている。3 年間いろいろな形でお互いに同じような経験をしてきた人達が、プロジェクトを終わったからといって縁が切れるのは本当にもったい

ないと思う。この３年間実証事業を行ってきた 22 校の人たちが折にふれて集まり、情報交換し続けられるような仕組みを考えると良いのではないか。環境省が中心になり、そのような仕組みを考えてほしい。それを EPO で支えてくれると嬉しい。

■大鹿　聖公氏(愛知教育大学　教授/検証委員会委員)

ESD に関わるようになったのは、ある中学校から、小学校と中学校の 9 年間全教科の環境教育カリキュラムをつくるという課題を相談されたことからである。当時は先生の中にとても温度差があった。しかし、２年後の研究大会の時に、嫌々ながら関わっていた理科以外の先生が、最後には乗り気になって一番良い授業をした。特別なことでなく、どのようなところでも、どのような教科でも、ESD（当時は環境教育）はできるとお願いしてやってもらったことが、とても実になった。無茶振りをしたが、非常に良い成果になったと感じた。このようなことを他の子どもや先生にもしてほしいという思いで地道に活動をしている。

先ほどコーディネーターが機能していないという話があったが、私も同感である。コーディネーターが機能しないなら、機能するような先生を育てたいと学生に指導し、研修では先生に話している。今年度１年しか関わっていないが、今日参加されている先生方を筆頭に ESD を実践されている先生は熱い人ばかりである。しかし、一旦外に出ると氷河期のような状態である。ここにいる１人の先生が、氷河期の 100 人の先生方の中に入るだけでも、温泉状態になる。ここにいる先生方にそのようなところに入ってもらい、ESD を広めてもらうことが大事である。一方で、このような場に何も関わっていない先生が入っていないことがとても残念である。一昨日、エネルギーの授業を弥富市でした。公開授業で、他の学校の先生も参加できるようになっていたが、誰も参加できなかった。より多くの先生に ESD に触れ合える機会を広めていってほしい。

おそらく次年度中に新しい学習指導要領が出ると思われる。東京オリンピックに向けて新しいカリキュラムが動いていく。おそらく ESD の手法で学校の授業を進めていくことになり、ESD はしなくてはいけなくなる。ESD は広まるとは思うが、逆に言えば、教育現場に大混乱が起きると考えている。大混乱になって最後に可哀想なのは、子どもたちである。その子どもたちがしっかりとした学びができるように、みなさん方がよいESDを広めて、よい環境ができたらよい。これからも先生方に頑張っていただきたい。

■新海　洋子氏（環境省中部環境パートナーシップオフィス　チーフプロデューサー・長野東海コーディネーター）

私からも３つの「もちかえりポイント」を話したい。今日の成果を踏まえて、今後この地域で皆さんと協働して今後実施したいことを話す。１つ目は、お願いであるが、今日配布した ESD 関連の冊子だが、自分に関係ないと思っている人は手にもしないし、手にしても読まない。今日参加のみなさんは、先生方から生の報告を聞いて、一緒に議論をして、成果も課題も知っている。授業が掲載されている先生の授業の内容やその苦労を知っている。この冊子を使って、先生たちの ESD 授業づくりの実態の話をしていただきたい。この冊子を活用して教育委員会等に説明に行きたいとも考えている。２つ目に、今日参加いただいている先生の中には、最初 ESD の授業の話をした際に、苦痛な顔をした先生が多くいらっしゃる。でも今日参加いただけた、熱く話していただけた、という事実は「可能性」を表している。工夫してアプローチをすれば、先生と出会い、ESD 授業づくりをすることができる。3 つ目は、今日は県単位でのセッションだったが、もう少し小さい単位、市町村で ESD 取組が促進できるような仕掛けをしたい。市、県の方と市町村での ESD のモデル事業を政策提案していきたい。予算がなくては事業が実施できないので、国も含め、県や市町村等で予算を確保し、モデル事業をして継続させていくことを提案したい。みなさんもぜひアピ

ールしてほしい。この 3 年間で灯った火を消したくない。今後も北陸と東海、長野、全国と連携して頑張っていきたい。

（５）閉会あいさつ

環境省中部地方環境事務所環境対策課　環境管理専門官　村辻　裕樹氏

　環境省では、これから地域の社会教育施設、地域とさらに連携した ESD 事業の展開を検討している。本事業 3 年間は終了するが、今後もご協力いただき進めていきたい。

平成 27 年度 ESD 環境教育プログラム実証等事業に係る ESD 環境教育プログラムの作成・展開業務報告書

特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ
本事業は、株式会社対話計画と株式会社 TREE との協働により実施しました。

協力　環境省中部環境パートナーシップオフィス
北陸 ESD 推進コンソーシアム

リサイクル適正表示：印刷用の紙にリサイクルできます
この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断基準に従い、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料[Ａランク]のみを用いて作成しています。